324
487

始

神保如天著

從容錄通解

東京　無我山房藏版

帝國圖書館藏

大正
5. 2. 29
購求

原序

萬松老人評唱天童覺和尚頌古從容庵錄序

昔予在京師時禪伯甚多。唯聖安澄公和尚。神氣嚴明言辭磊落。予獨重之。故嘗訪以祖道。屢以古昔尊宿語錄中所得者叩之。澄公間有許可者。予亦自以爲得。及遭憂患以來。功名之心束之高閣。求祖道愈亟。遂再以前事訪諸聖安。聖安飜案不然所見。予甚惑焉。聖安從容謂予曰。昔公位居要地。又儒者多不諦信佛書。惟搜摘語緣以資談柄。故予不敢苦加鉗鎚耳。今揣君之心。果爲本分事以問予。予豈得猶襲前愆不爲苦口乎。予老矣。素不通儒。不能敎子。有萬松老人者。儒釋兼備。宗說精通辯才無礙。君可見之。予既謁萬松。杜絶人迹屏斥家務。雖祁寒大暑。無日不參。焚膏繼晷。廢寢忘餐者幾三年。誤被法恩。謬膺子印。以湛然居士從源曰之。其參學之際。機鋒罔測。變化無窮。巍巍然若萬仞峰莫可攀仰。滔滔然若萬頃波莫能涯際。瞻之在前忽焉在後。廻視平昔所學。皆塊礫耳。噫。登東山而小魯。登泰山而小天下者。豈虛語哉。其未入閫域者聞是語。必謂予忘本好異也。唯屏山閑閑其相照乎。爾後奉命赴行在。扈從西征。與師相隔不知其幾千里也。師平昔法語偈頌。皆法兄隆公所收。今不復得其藁。吾宗有天童者頌古百篇。號爲絶唱。予堅請萬松評唱是頌。開發後學。前後九書。間關七年方蒙見寄。予西域

伶仃數載。忽受是書。如醉而醒。如死而甦。踴躍觀呼。東望稽顙。再四披繹撫卷而歎曰。萬松來西域矣。其片言隻字咸有指歸。結款出眼高冠今古。足爲萬世之模楷。非師範人天權衡造化者。孰能與於此哉。予與行官數友。旦夕游泳於是書。如登大寶山入華藏海。互珍奇物。廣大悉備。左逢而右遇。目富而心飫。豈可次世間語言形容其萬一耶。予不敢獨擅其美。思與天下共之。京城唯法弟從祥者。與僕爲忘年交。謹致書請刊行于世以貽來者。廼序之曰。佛祖諸師埋根千丈。機緣百則見世生苗。天童不合抽枝。萬松那堪引蔓。湛然向枝蔓上更添芒索。穿過詩香遂氣者鼻孔。絆倒行去體妙底脚跟。向去若要脚跟點地鼻孔撩天。却須向這葛藤裏穿過始得。

甲申中元日　漆水移剌　楚才晉卿　敘於西城阿里馬城

評唱天童從容庵錄寄湛然居士書

吾宗有雪竇・天童。猶孔門之有游・夏。二師之頌古猶詩壇之李杜。世謂雪竇有翰林之才。蓋採我華而不摭我實。又謂不行萬里地。不讀萬卷書。毋閲工部詩。言其博贍也。擬諸天童老師頌古。片言隻字皆自佛祖淵源流出。學者罔測也。柏山大隱集出其事迹。間有疎闊不類者。至於拈提。苟簡但據款而已。萬松昔嘗評唱。兵革以來廢其祖藁。邇來。退居燕京報恩。旋築蝸舍。榜曰從容庵。圖成舊緒。適値湛然居士勸請成之。老眼昏華。多出口占。門人筆受。其間繁載機緣事迹。一則旌天童學海波瀾附會巧便。二則省學人檢討之功。三則露萬松述而不作非臆斷也。竊比佛果碧巖集。則篇篇皆有示衆爲備。竊比圓通覺海錄。則句句未嘗支離爲完。至于著語出眼筆削之際。亦臨機不讓。壬午歲抄。湛然居士書至。堅要拈出。不免家醜外揚。累吾累汝也。

癸未年上巳日　萬松野老因風附寄　不宣

序説

第一　本錄の解題及び參考書

本書は單に『從容錄』と云ふ標題で多く世に知られてあるが是れは極めて簡略した名前で、具には原序にある如く『萬松老人評ニ唱天童覺和尙頌古ー從容庵錄』と云ふべきである、或は半ば略して『宏智禪師頌古』又は『天童覺和尙頌古報恩老人著語』として世に行はれて有る本もある。前者は天童宏智禪師が自から選ばれたる公案百則に頌古を附せられ、其れに報恩老人萬松行秀禪師が示衆と評唱とを加へ、本則と頌とに著語を添へられた六卷本を云ふのである、後の三者は前錄より萬松の評唱を除去したゞけの相違であるから單に『宏智禪師頌古』と云ふも當らず、又『報恩老人著語』とするも當らない標題である。然し題號は廣く世に行はれて誰が聽いてもわかるもので有れば其れで充分である。『從容錄』と云ふ名は萬松老人が報恩寺を退いて從容庵に住せられし間に之を提唱せられ、侍者離知の錄せし者なるが故に『從容庵錄』と稱するので萬松獨占の名に成つて了つた。其れを復た日本の上州茂林寺の梵丁和尙が『從容錄筆削』なるものを編し、常陸の安祥寺太淳和尙之を校訂して單に『從容錄』と標題した、世に雲山藏版とある本が卽ち其れである。斯樣な理由で前の長い標題が遂に最簡なる『從容錄』なる名に化し、而もそれが最く廣く世に行はれる樣に成つて了つた。而して萬松の評唱を除

いたのは日本で始まつたことで世に靈瑞本と稱するのが其れで、尾州名古屋萬松寺靈瑞和尙の校閱に係るもので有る。彼の『宏智禪師頌古』、『報恩老人著語』と稱する本が卽ち其の靈瑞本である。今此に通解した本は卽ち靈瑞本で評唱は全部揭げないことにした。

序に申して置き度いのは參考書のことである、今山僧の知つて居るだけを揭げて見ると、天桂和尙の『從容錄辨解』二卷、鼎三老人の『宏智禪師頌古接觜錄』二卷、高田道見師の『從容錄講話』四卷、拙著の同じく三卷等の四部は所謂靈瑞本に據つた提唱若くは講話として既に世に出版されてあるもので ある。寫本として傳つて居るものには著者不詳の『松老錄』三卷、これは評唱までをも筌蹄してある最も珍らしいものである、又面山和尙の著らしく思はるゝ『頌古稱提聞解』といふ假名書の本が一卷ある、まだ外に著者不詳の『天童覺百則頌鈔』といふ本を二種ばかり見たことがある。尙ほ梵丁和尙の『從容錄筆削』一卷、普覺和尙の『從容錄空解』二卷、默招和尙の『天童古佛頌古百則頑解』一卷等があるけれども初學者には餘り參考になるとは思へない。尤も主として研究しやうといふ人には評唱入りの『從容庵錄』六卷は申すに及ばず、面山和尙の『頌古稱提』二卷、『同銓衡』二卷なども無論良參考書として擧げらるべきである。山僧の講話及び通解は故淺野斧山老師の提唱手記を主とし、天桂、鼎三、默招、面山等の諸老に指南を蒙むることの甚だ多きに依るは云ふ迄も無いが、自から造詣するところの分子も亦決して尠からざることを信じてゐる。

第二　天童宏智禪師の傳

禪師の傳は『五燈會元』第十四卷、『普燈錄』第九卷、宏智語錄第四卷首の伯庠が選に係る『勅諡宏智禪師行業記』等に出て居るが何れも大同小異で餘り詳しい處は解らぬ、けれども支那禪宗の歷祖としては比較的に能く知られてをる方で有らう。遷化せられたのが南宋の高宗、紹興二十七年丁丑十月八日と云ふことは何れの傳記にも書いてあるが誕辰は怎うも明かで無い。然し世壽六十七歲で有つたと云ふ事實を基として逆算すると、宋の哲宗、元祐六辛未年（皇紀一七五一）の誕生と云ふことになる。

さて禪師は姓を李氏と云ひ、隰州の產である、母趙氏、五臺の一僧來つて環を解き與へて其の右臂に環すと夢みて乃ち懷孕した、其の故に禪師の右臂に環狀の大いなる特起が有つたと傳へられてある。七歲にして數千言を誦し、十三にして五經七史に通じたと云ふ程の人であるから幼にして群童に擢ん出て居られたと云ふことも想像ができる。祖父の寂、父の宗道は久しい以前から佛陀の遜和尙に參得して居られたので、遜和尙、禪師を一見して其の父に謂つて曰く、「此の子道韻勝甚なり、塵埃中の人に非ず、苟も出家せば必ず法器と爲らん」と、此の語が讖を爲して十一歲の時淨明寺の本宗和尙に得度し、十四にして晉州慈雲寺の智瓊和尙に具足戒を受けらるゝことに成つた。此の間に當時の儒學は殆ど修め卒り、更に佛典聖敎に眼を曝すこと五年に涉り、大概其の要を得了られたと云ふことである。十八歲の時初めて遊方の志を發し、其の師に暇を乞はれた、其の時の訣別の誓言に曰く「吾れ大事

を發明せずんば誓つて歸らじ矣」と此の一言實に宏智禪師の爲人を示し、今日尙ほ不滅の身心ある所以で有る。先づ汝州の香山に到り、枯木法成禮師に謁せられた、法成は芙蓉楷祖の法嗣である、一見して非凡の器量なることを知り禪師を愛重せられた。一日僧の法華を讀誦するを何心無く聞いて居られたが法師功德品の「父母所生眼、悉見三千界」の文に到つて瞥然省悟する處が有つたので直ちに方丈に詣して其の所見を陳べられたが未だ法成の許す處と成らなかつた。二三の問答が有つて後、香山は「別に人に見えて始めて得てん」と云ひ、師も亦之に應諾し、終に此を去つて丹霞山に上られることに成つた。丹霞山の子淳禪師は芙蓉道楷の法嗣、洞山下第九世の正嫡である。宏智禪師は當時德望四海を壓し、道聲天下に鳴る處の丹霞の淳禪師を拜するに、霞乃ち試問して曰く、如何なるか是れ空刧已前の自己、師曰く、井底の蝦蟆、月を呑却す、三更借らず夜明簾、霞曰く、未在更に道へ、師擬議す、霞打つこと一拂子して曰く、又道へ不借と、師言下に釋然、遂に禮を作す。霞曰く、何ぞ一句を道取せざる、師曰く、某甲今日失錢遭罪、霞曰く、未だ儞を打得するに暇あらず、且らく去れと、時に師歲僅かに二十三であつた。淳師の唐州大乘に退去せらるゝや、これに隨從し、又大洪を領せらるゝや之に侍して牋記を掌り、宣和三年歲三十一にして首座に任せらるゝ程に至つた。此の時既に金粟の智雪竇の宗、保福の悟、鳳山の釧等、得法の者數人有つたと云ふ。其の翌年のこと、法眷の眞歇清了、長蘆山に住して衆千七百を領する處の偶傑で有るが、師の名を聞き書を齎して之を招いた、鐘を撞き鼓を鳴し、大衆衣を易へて師の至るを迎へた、然るに師の鬚眉飽まで黒く、顏骨奇古、而も衣裓破弊し履襪皆穿つと云ふ有樣であつた。眞歇、侍者を遣はして新履に易へしめんとするに、師退けて曰く「吾れ豈に鞋の爲に來らん耶」と、眞歇和尙彌尊敬し、懇請して衆の爲に第一座に居らしめた。師の年少を以てして老參舊隨悉く心服せざるは無く、恰かも子の父に就くが如き有樣で有つたと云ふことである。宣和六年甲辰歲三十四にして初めて泗州の普照に住し秋九月、淳禪師の室に投じて正に如來嫡傳第四十七代の祖位に上られたのである。此で師の法系を圖し併せて萬松行秀禪師との關係をも表示して置かう

六祖大鑑慧能——靑原行思——石頭希遷——藥山惟儼——雲巖曇晟——洞山良价——雲居道膺——同安道丕——同安觀志——梁山緣觀——大陽警玄——投子義靑——芙蓉道楷——丹霞子淳——眞歇清了
丹霞子淳——**天童宏智**
芙蓉道楷——鹿門自覺——善炤一辨——大明寶——圭山體——雪巖滿——**萬松行秀**

禪師歲三十七、建炎元年舒州の太平に住し、又江州の圓通、能仁を董し、謝して雲居に遊ぶ、時に圜悟克勤此に住山してあつた。偶、長蘆山の虛席に會ひ、大衆强請して師の入山を願ふ、圜悟と安定郡王令衿とが力勉共行して僅かに入寺することに成つた。間も無く建炎三年の秋、江を渡つて明州に至り、海に泛んで補陀の觀音を禮せんと欲し、道に天童山の景德寺を訪づれた。然るに天童山も亦主人を闕くの時で有つたから、大衆が師の來るを見るや密に郡に告げて住持せんことを求めた、師微かに聞いて遁れ

去らんとしたが衆圍繞して通夕行くを遮ぎつたので遂に我を折り懇請を入れて天童に視篆せらるることに成つた。年齒僅かに三十九の弱齢を以て天下の衆望全く師一人に歸し、四海五湖殆ど人無きが如き有樣であつた、而して諸山に歴住するや、決して倉廩の枯渇を意とせず、只管學人の接化に眉毛を惜むこと無く、尊貴に屈せず名利に趨らず、全く道の爲に身心を供養して殆ど自己あることを忘却して居られた樣である。天童山も其の當時は屋廬湫溢、衆徒二百に滿た無かつたのである。然るに師の住山せられてから四方の學者先を競うて奔湊し、百川の滄海に赴くが如くにして既に千二百を踰ゆるに至つた、尙は來者益〻多くして甑釜將に枯稿し、粥飯を辨ずることが出來無い、當役の者惶懼して計を成す所以を知らず、僧糧つくるに垂とする由を師に告ぐるに師笑つて曰く「人各〻口あり、汝が憂にあらず」と、言未だ終らざるに嘉禾の錢氏航米千斛、岸に艤し來れりと告ぐ、師聞いて呵々大笑せられたと云ふことである。宏智禪師は天童中興の開山なりと稱するも敢へて過賞では有るまいと思ふ。

紹興八戊午年九月、四十八歲、旨を被りて臨安府の靈隱寺に住せらるゝことになつた、將に天童を去らんとするや衆みな悲號し、飛禽數萬哀鳴して別を惜んだと云ふ。幸に故あり十月復び天童に還つて衆を領せられることに成つたので一同、堵に安んじて道業を成辨するに至つた。師の天童在山、前後殆ど三十年、法堂、庫院、衆寮、並に三十三間に二十八間の大僧堂が建築せられ、寺屋方に舊觀を改め、歲入前に三倍して食廩爲に豐饒し、千二百の大衆は安んじて一堂に參禪することの出來る樣に成つたのは全く師の德業の然しむる處である。紹興二十七丁丑年(皇紀一八一七)秋、九月城中に入つて郡僚、檀越と別を言ひ、十月七日山に還り溫容常の如く、八日辰巳の刻に沐浴更衣し、書を大慧宗杲禪師に致して後事を囑し、「夢幻空華、六十七年、白鳥煙沒、秋水連〻天」の一偈を打して筆を擲ち忽焉として逝せらる。龕留ること七日、顏貌生けるが如し、十四日師の全身を奉じて東谷の塔に葬る。壽六十七、臘五十三、師世を去つて五月、詔して宏智禪師と諡し、塔を妙光と名け、參政知事周公葵、塔に銘して師應世の德を頌したといふことである。侍者門人等其の遺稿を集めて『宏智禪語師錄』六卷を編す、これ卽ち宏智禪師一代の遺身舍利である。

第三　萬松行秀禪師の傳

萬松は宏智禪師滅後僅かに第十年、宋の乾道二丙戌年（皇紀一八二六）河內の解人、蔡氏が家に生れられたのである。吾が國で云へば、六條天皇の仁安元年で今（大正四年）を距る實に七百五十年の往昔である。幼にして氣骨凡ならず、超然として出塵の志あり、父母之れを制せんとすれども終に奪ふこと能はず、乃ち携へて刑州の淨土寺に送り贇公を禮して師とし落髮受具せしむるに至つた。後、意を決して參究辨道し、笈を負ひ嚢を擔うて燕京を去り潭柘を歷、慶壽に過りて勝默の光禪師に謁した、光曰く「此の道を學するは金を鍛ふるが如し、滓穢不淨なるときは卽ち精金顯れず、君が眉宇の間を觀るに大いに物の有るあり、此の物一番、寒骨に徹するに非すんば放下すること能はじ、子後に自から老僧が多言に在らざることを見ん」と、且つ長沙の景岑が自己を轉じて山河大地に歸するの話を看せ

しめられたが半歳功夫すれども所入するところが無かつた、光曰く我只儞が遲く會せんことを願ふと、一日忽ち省あり、更に玄沙未徹の語を得て尙未だ透ること能はずして遂に此を辭し、磁州の大明に雪巖滿禪師に請益した。雪巖の滿(佛祖綱目は雪巖法瑞に作る、今は續傳燈及び會元續略に依る)は洞山下十四世、芙蓉下六世に當る知識である。師、滿の會下に投じて居ること念七日、言下に忽ち悟つて曰く「恁麽に近きことを得たり」と、從前の伎倆一火に盡し、始めて勝默爲人の道理を會取せられたのである。雪巖の滿に參侍すること二年、盡く其の底蘊を叩き、滿の室に投じて親しく佛祖の衣鉢を禀受し、正しく如來正傳の祖位に列せられたので有る。是より兩河三晉、皆師の名を欽み、道譽を慕ひ、來り投ずる者堵を爲すに至つた、是に於てか法門隱然として勃興し、晩宋沈滯の敎海に一道の活波瀾を生ずる樣に成つた。

師の傳記の前半は殆ど缺いてゐるので甚だ模索するに難いのである。再び淨土寺に歸り、萬松庵を構へて自適すと云ひ、寺内の尊宿敦く請して住持せしむと云ひ、次いで中都の萬壽寺に昇住すと有るけれども怎うも年代が判然せぬ、何でも二十五歳前後の事の樣に思はれる。金の章宗皇帝明昌四癸丑年(皇紀一八五三)卽ち南宋の光宗紹熙四年、師に詔して禁庭に陞座せしめ、帝親ら迎禮して未聞の法を聞きて開悟、感慨親しく錦綺の大僧伽裂衣を奉じ、內宮の貴戚羅科、拱跪して各々珍愛を施し、普度會を建て、施利常に異り、連日祥雲、天際に連綿として鼬き此より年豊かにして謳歌路に滿つと云ふ大盛儀が記されてある。此の時が師の齡僅かに二十七で有る。それから承安二年丁巳、三十二歳にして勅を蒙りて大都の仰山棲隱禪寺に住し、開山玄冥顗の席を繼がれたのである。後、順天府の報恩洪濟寺に轉ぜられたが是れも亦其の年代が明かでない、然し宏智頌古を拈掇せられたのは佛祖綱目卷第三十九に據れば「宋の寧宗嘉定十六年、金は元光と改む、癸未、萬松行秀禪師、天童の頌古を評唱す」とあり、又師の湛然居士に寄せられたる書等を對照してみると萬松の報恩を退去して從容庵に自適せられたのは蓋し五十歳前後で有つたらうと推せられる。元の太宗紹定三年庚寅、師歳六十五、勅を奉じて復び中都の萬壽寺に住せられることに成つた。然し此の記事は傳記に依つては載せないのも有るけれども、山僧は此の事實を信じ度いのである。晩年從容庵に退去して敢へて茅舍を出られ無かつたが其の道風は自から蹊を成して芳を滿天下に布いて有つたので有る。師は天資銳敏、加ふるに百家の學淹通せずと云ふこと無く、三たび大藏を閱して首尾盡く貫熟し、數、鉅刹に歷住して洞上の宗旨を振ひ、毫端風雷を起して宏智の道聲を高からしめたる、當代逸群の禪將で有つた。淨土、仰山、洪濟、萬壽の四刹錄あり、皆世に行はる。『從容庵錄』、『請益錄』等を著はして碧巖の後塵を踵ぎ、寶鏡の重垢を開くと稱せられて居る。元の定宗元年丙午(皇紀一九〇六)後の四月五日疾を示し、七日偈を書して溘焉化を他界に遷さる、偈に曰く「八十一年、只此一話、珍重諸人、切莫錯擧」と、世壽八十一、法臘六十。適外門外に茶維し舍利無數を得、諸方の門人分つて之を塔す。得法の者實に一百二十八人であつたといふことである。

例言

一。禪は參ずべくして講ずべからずと云ふ語は千古の名言である。然しながら旣に禪書として世に行はるゝものは文字なり言語なりで解せらるべき筈のものだと思ふ。但し、どの程度まで講じ得らるるかといふことは頗る疑問に屬する、本書は此の疑問に對する一種の答案である。

二。何事も簡易にして而も手つ取りばやく要領を得んとするは人情の常である。特に禪書を讀む人には此の要求が一層嚴しいやうに感せられる、著者は此の要求に應へねばならぬ義務を痛切に感じて本書を公刊するに至つたのである。

三。『通解』は名の示すが如く、全體に通じて解るといふことを標榜したものである。然り、從容錄一百則─示衆、本則、頌古、著語─いづこを看ても成る程と合點の出來るやうに書くといふのが本著の主意である。從來の提唱と講話との中間を强く抉つて行く致し方である。

四。讀者、幸に倦むことなく、原文、讀方、字義、要解、著語の順に從ひ、則より則を逐うて讀みゆかば、必ず一度は會心の笑を禁ずることのできぬ時節が來るに相違無い、此の機會を放下せず、讀禪より更に一步を進めて參禪の域に入られんことを熱望する。

五。本書は著者が『禪學辭典』に筆を執るの傍ら、比較的に短時日を以て稿を脫したので十分字句を修正するの時間を有たなかつた、殊に頗る出版を急ぐ事情に迫られてゐたので校正にも多少の不備が

有るやうに思ふ、杜撰の罪は幾重にも大方の寛恕を乞はねばならぬ。

六。 卷末に索引を附する積りで有つたが、右の次第で終に其の運びに至ら無かつたのは甚だ遺憾である。

七。 本書の刊行に就いては道友、安藤學師と今枝禪兄との多大なる助力を受けた、今日此に完成の功を收め得たのは全く兩師の賜ものである、特に記して感謝の意を表す。

八。 大正四年三月三日、此の日、世の兒女を持つ家庭は桃の節句を祝ふ樂しい日で有る。それにひきかへ山僧は亡き母の七七日に相當し、迨夜よりの香烟は室に籠る。たわいもなく悲哀の氣に襲はれつゝ本錄一百則の稿を脫し了つた。

大正四年三月十三日校了

神保如天しるす

從容錄通解目次

從容錄通解目次畢

從容錄通解

神保如天著

第一則　世尊陞座

示衆云。閉門打睡接上上機。顧鑒頻申曲爲中下。那堪曲親木上弄鬼眼睛。有箇傍不肯底出來。也怪伊不得。

【讀方】衆に示して云く、門を閉ぢて打睡して上上の機を接し、顧鑒頻申曲げて中下の爲にす、那ぞ曲親木上に鬼眼睛を弄するに堪へん、箇の傍らに肯はざる底あらば出來れ、也た伊を怪しむことを得ず。

【字義】◎示衆とは萬松行秀禪師が當時其の門下に集つてゐた衆僧に向つて、此の本則の歸趣を捉へ如何に著眼すべきかと云ふ用意を示して其の人を求められた語である。鼎三老人は「示衆とは本則の枕詞にして公案のありさまを唱へ知らしむ」と云つてをられる。從容錄百則に悉く示衆があるから以下之に倣つて見よ。◎上上機とは次の句に中下とある語と對であつて何れも對機の別である。上上の機は普通上中下根と云ふ中の上根の機よりは一頭地を拔いた極大乘相應の機で、此では座禪

の上の本來人を云ふ。◎顧鑒頻申とは顧鑒は顧視と同じで振り回つて鑑ること。頻申は獅子が四體を展舒する狀と云つて體を伸べたり縮めたりする容子。師家が人の爲に臨機應變の模樣をして化益する方便を言ひ詮はしたのである。◎曲錄木上とは自然木の曲り拗つた椅子の上に乘つてと云ふ程の意味で高座に陞つて說法する樣である。◎鬼眼睛とは死ぬ時の顏の樣に目を見開き口を張つた醜い容子を云ふ。說法する者の表情を賤しめて言つた語である。◎伊とは本則で云へば文殊であるが廣く上上の機をさしていふ。

【要解】上上の機を接するには言說に涉るの要は無いけれども中下根の者の爲には種種の方便を設けて强ひて說法もせねばならぬ、本分の上から觀めると高座に陞つて樣々な身振りをなし口角に泡を飛ばして弄舌てをる容子は見られた醜態では無い。萬松は此の樣に思ふが若し傍人有つて萬松の道ひ分を首肯し兼ねると云ふならば速やかに出て來るがよい、決して其の人を怪しみはせぬぞ、其の人が居ぬならば本則に就いて作家の手腕を見るがよい。

擧。世尊一日陞座。文殊白槌云。諦觀法王法。法王法如是。世尊便下座（今日不著便。別日再商量。知佗是何心行。）

【讀方】擧す。世尊一日陞座。文殊白槌して云く、諦觀法王法、法王法如是。世尊便ち下座。

【字義】◎擧とは此の本則を擧示若くは擧揚する義で一則の公案をそれみよとさしあげて人に示す意である。◎世尊とは如來十號の一で此では勿論釋迦牟尼世尊である。佛は世間出世間に於て無上尊なるが故に世尊といふ。◎陞座とは說法する時に高座に陞ることである。或は上堂ともいふ。衆生敎化の一の儀式として今日でも禪家では晉山式、祝國開堂等の大典には必ず上堂を行ふ、その權輿は此の本則に據るのである。◎文殊とは菩薩の名。華嚴三聖の一、普賢菩薩と一對をなし釋尊の脇侍として左側にあり、智慧を司る。圓覺疏鈔卷の十に曰く「文殊師利は梵語の訛なり、正しくは曼殊師利(Manjuśrī)と曰ふべし、又妙吉祥と曰ふ、信解の智を表するが故に、亦妙德と曰ふ、證智を表するが故に」と。合論二十九に曰く「文殊師利此に妙德と曰ふ、妙慧を以て正邪を擇ぶこと自在なり、故に妙德と曰ふ」と、皆是れ譯名である。◎白槌とは槌をカチンと鳴らして大衆に報告することでこれ禪家の一つの儀式である。現今でも上堂の時には白槌師と云つて禪門の耆宿を請じて文殊と同一の役目を爲せる、其の濫觴も亦こゝにある。◎法王法とは法王は「法に於て自在なるを法王と爲す」ともいひ「我を法王となす、法に於て自在なればなり」ともあつて宇宙萬法を主宰し支配する所の力量を有すると云ふことで世尊の換詞である。法は諸法とも萬法とも云つて物心兩界を指す語なれども今は佛法と見て可からう。如來の說き給ふ所の佛法と云ふ意である。

【要解】本則は極めて簡單であるが、其の所詮とする所は言端語端に關らぬ如來の說法と、此の說法を聽取したる文殊との間に證契郎通した處の所謂大乘極致の法門を顯露に示された一則である。底意は萬松の示衆と天童の頌とに依つて能く味ふがよい。

【著語】口今日便りを著けず。一日といふ語を咎めた。時間は無限のものである、一日といへば二日三日に對した語である、世尊陞座の面目は小さく二十四時間と仕切つたそんな短かい一日では無い。然るに一日陞座などと云ふのは甚だ不都合な道ひ樣だ。口知んぬ他は是れ何の心行ぞ。他は文殊である。文殊は怎んな心行で法王法如是などと云つたのであらう、と表面は文殊を疑ふが如き語勢であるが其の實は吾人に向つて文殊の心緒を諸人は知つてゐるかどうだ、子細に研究して見よ、然し念想觀の測量では至れぬぞよといふ婆心の餘に出た著語である。口別日に再び商量せん。　今日は下座で既に店が退けた、明日にでも亦改めて商量することにしやう。商量とは商人が賣買する時互ひに歩み合つて價格を決定することである。問答往來して心地を究明する場合に用ゐる禪の常套語である。底意は商量しやうと思へば何日でも可能るが實は別日といふ日があるであらうか、商量することが一體あるか怎うか、自身に向つて一つ詮索して見たら可からう。

頌云。一段眞風見也麼（莫教飄入眼　特地出還難）**綿綿化母理機梭**（參差蹉了交錯）**織成古錦含春象**（大巧若拙）**無奈東君漏泄何**（陰陽無曲狗　節氣不相饒）

【讀方】頌に云く。一段の眞風見るや也た麼や。綿々として化母機梭を理む。織り成す古錦春象を含む。東君の漏泄を奈何ともすること無し。

【字義】◎頌とは支那で詩の六義と云はるゝ比、賦、興、風、雅、頌の中の一つ、印度では偈又は伽陀（Gātha）といふ所から梵漢兼ね擧げて偈頌と云つてをる。頌は德を頌する所の詩の體で有るから偈頌と云へば德を稱讃するの謂れとなる。今宏智禪師の頌古も本則の問話を讃美し併せて公案の奥祕を啓發し、參學者の爲に文學的の趣味と禪の妙味とを兼ね領せしめ樣との落草である。であるから多少繞路と云ふ傾きは免かれ無い。然し宏智禪師は空前絕後と云はるゝ程の詩聖で有つたから他の語錄にある頌と比較して如何に其の格調が高いか奈何に宗意が綿密の間に發揮されてあるかと云ふことに大なる注意を拂はねばならぬ。禪を詩化した其の妙曲は全く此の天童の頌に由つて眞に味ふことが出來る。然し其の語勢は眞風に係る語であるから格段とか別段とか云ふ程の意である。◎一段とは後の句の織成古錦に文字の上は緣語を取つて一反と云ふ積りで云つたのであらう。◎綿綿とは絕えざる貌であるから相續して不斷なる樣子である。◎化母とは造物化工の主と云ふこと、母は能生の義である。◎理機梭とは機は機具、梭は梭又はをさと云つて、左右に通はして緯を行る具、一反の織物も經と緯とで立派にチャンと出來上る。これを機梭を理むと云ふ。◎東君とは春の神のことで青帝とも東皇とも陽鳥とも云はれてある。

【要解】前二句は世尊の陞座を、後の二句は文殊の白槌を巧みに自然の妙趣に寄せて頌せられたのである。殊に此の一頌は法應二身の不離不卽なる活現成、換言すれば事理不二體用無差別の道理を雅致ある文字に由つて、本則と背觸せずして巧妙に頌せられてあるから大いに注目せねばならぬ。世尊陞座の眞風汝等諸人能く見て取つたかどうだ、見度いと思ふならば直下に見よ、手を擧げ足を

擡ぐる、ひく息吸ふ息、從刧至刧寸時も止む時とては無いのである。文殊の白槌これは法の本體を絕唱した積りであつたらうが如何せん萬象の上に其の妙用自から脫體現成して了つたから、恰かも春帝一たび至れば百花の繚爛として自から天下に錦を敷くが如くで有つて一點も昧ますことは無いのである。諸法實相の妙理を無盡に說破し了つてある。

【著語】□眼に飄入せしむること莫れ、特地に出づることは還つて難し。特地とは中々とか態々とかメツタにとか云ふ語である。天童は見るや也た麼やと云はるゝが若し見たと云ふならば夫れこそ大變である、眞風などと云ふものは元來見聞覺知の及ぶ所で無い、若しも謬つて眼の中へ其んなものを吹き込ませ樣ものならば出さうとして中々容易に出すことは出來まいぞ。要は眞風を向ふ側に計り見てはならぬ、人々是れ眞風の現成ぢや。□參差蹉了綌を交ふ。參差とは齊等ならざる樣子でたがひちがへと云ふ程の意。綌とは十縷を綌とすと云つて經のことである。頌の意に和した著語で天童の云ふ通り機梭を左右して綌に交はらして春夏秋冬も織り出せば雨竹風松も染め出すのである。誠に以て風流千萬と云つて可からう。□大巧は拙の如し。莊子の語である、大功は賞せられずの語と同じで巧みが餘りに大き過ぎて反て凡眼には能く見えぬ。其の手許が解らぬ故却つて下拙な樣に思ふ、實は巧拙を超越してゐるから餘人には所不見のだ。□陰陽曲げて狥ふ無し、節氣相饒さず。本頌に賛成した著語で、天地は決して私に狥ことは無い。四季をとりかへて夏寒く冬暖かなること能はず、春になれば桃紅李白、如何ともすることが出來ない。節氣とは春夏秋冬の四節寒暖の氣候である。德高ければ自から顯るゝのも自然の理である。

第二則　達磨廓然

示衆云。卞和三獻未免遭刑。夜光投人鮮不按劍。卒客無卒主。宜假不宜眞。羞珍異寶用不著。死猫兒頭拈出看。

【讀方】衆に示して云く、卞和三獻未だ刑に遭ふことを免かれず、夜光人に投ず劍を按せざる鮮し、卒客に卒主無し、假に宜うして眞に宜しからず、羞珍異寶、用不著、死猫兒頭拈出す看よ。

【字義】◎卞和三獻云々とは卞和なる人が荊山の崑岡谷と云ふ所で璞を得たから之を楚の靈王に獻じた。王は石で有ると云つて卞和の一足を刖つた。再び武王が位に卽かれたから之を獻じたらば復一足を刖られた。次に文王が立たれたが、兩足を刖られた卞和は璞を抱いて荊山の下に哭いてゐた。文王御幸の際これを御覽に成つて召して其の故を問はれたらば、和の曰く、足を刖らるゝことを怨みず、眞玉を以て凡石と爲し、忠事を以て慢事と爲すことを怨むと、乃で王は玉師に命じ剖石して御覽に成ると果して眞玉で有つたと云ふことが韓非子に出てをる。卞和が三度も璞を獻じたが見る目を持たぬ王の爲に反つて虛僞を申し立てゝ王を誑惑す不屆者ぢやと云つて重い刖刑に處せられたと云ふ類例。◎夜光投人云々とは「鄒陽が上書に曰く「明月の珠、夜光の璧、暗を以て人に道路

に投ずれば劍を按じて相眄ざる者莫し、何となれば因無うして前に至ればなり」とある。其の實例は隋城の斷蛇が祝元暢の爲に夜光の珠を投じて恩に報いたれども思ひ懸け無いことなれば劍を按じて疑はれたと云ふことがある。◎卒客無卒主とは卒は輕卒倉卒なりで倉卒の客有つて倉卒の主人無しと云ふ古語もある。客と主人と氣の合はぬ樣子である。◎宜假不宜眞とは假は權、眞は實である。佛敎を三乘權敎一乘實敎（略して三權一實と云ふ）と云つて三乘は方便の法門、一乘は眞實の法門であると云ふ樣に敎相家は判釋してをる。この句面では小乘權敎には適してゐるが大乘實敎には適つてをらぬと云ふ意。◎羞珍異寶とは左傳に「珍異を加へ羞む」とあるから今も珍異い寶を羞るの意である。珍異と云ふから世界に双つ無き珍奇無類の寶であらう。一本に差珍とあるは誤りである。◎用不著とは用ゐることが出來ぬ、役に立たぬ意。◎死猫兒頭とは文字の通り死んだ猫の頭骸で何等の價値無きものと云ふ句面なれども、實は「人の價を著くる無し」と曹山和尙の語にある如く無價の寶珠と云ふ意である。

【要解】同じ意味の句を幾つも重ねて用ゐられた、一言に云へば俚諺の「猫に小判」と云ふ程の意で主客相對しながら全く段が違つてゐるから話がトンチンカンでサッパリ分らない。本則に就いて云ふならば左圖の如き關係である。

本則（達磨＝卒客―卞和獻璞―夜光珠―羞珍異寶―眞
　　　武帝＝無卒主―三王刖刑―按劍人―用不著―假）死猫兒頭

そこで今眞珠とも珍寶とも價値の附けられ無い死猫兒頭を拈出して大衆に見せつける。死猫兒頭とは卽ち本則の達磨と武帝との相見であるが萬松は座下の諸人をして直下に達磨と相見せしめやうとの手段を講せられた迄のことである。

擧。梁武帝問達磨大師（淸旦起來、不曾利市）如何是聖諦第一義（且向第二頭問）磨云。廓然無聖（劈腹剜心）帝云。對朕者誰（鼻孔裏認牙）磨云。不識（腦後見腮）帝不契（方木不入圓竅）遂渡江至少林面壁九年（家無滯貨不富）

【讀方】擧す。梁の武帝達磨大師に問ふ。如何なるか是れ聖諦第一義。磨云く、廓然無聖。帝云く、朕に對する者は誰そ。磨云く、不識。帝契はず。遂に江を渡つて少林に至り、面壁九年。

【字義】◎梁武帝とは梁の天子で北魏で云へば宣武帝の景明三年四月梁で云へば天監元年（皇紀一一六二）の卽位である、在位四十八年、太淸三年（皇紀一二〇九）五月壽八十六して崩せられた。姓は蕭、名は衍、字は叔達、漢の蕭何二十五世の孫で初め梁公に封せられ、又梁王となり、遂に帝位に卽き高祖武帝と諡せらるゝに至つた。天監三年道敎を捨て佛敎に歸し、當時有名で有つた寶誌和尙だの善慧傳大士などと交はり大いに佛敎を研究し、自ら袈裟を搭けて『放光般若經』や『涅槃經』などを講せられたといふ。又帝力を以て寺を造り經を寫し僧を度したること勝て紀すべからずと云ふ程である。兎もあれ世人に佛心天子だと云はれた位であるから深く敎に依て修行せられたも

のと見える。◎達磨大師とは釋迦牟尼世尊嫡傳第二十八代の祖師で其の師の般若多羅尊者の記別に從つて支那に渡來せられたのである。傳記に依れば大師は南印度香至王の第三子で幼名を菩提多羅と云ふ、父王崩御の後、般若多羅尊者に往いて出家を求め、名を菩提達磨と改めた。師の左右に執侍すること四十年、般若多羅尊者入滅の後、化を一天に布き、名四方に擴がるやうになつた。大師心に震旦の化緣熟し、時既に至るを念うて祖塔を辭し、重溟に汎び三周の寒暑を閲し南海廣州に逢かれた、時に梁の大通元年（皇紀一一八七）丁未の歲九月二十一日と云はれてをる、是れには多くの異説がある、魏の大和十年説、梁の普通八年説、同じく七年説、及び梁の普通元年説等である。今は『佛祖統記』、『佛祖歷代通載』、『隆興佛敎編年通論』、『勅修百丈淸規』等の記載に從つて大通元年説を採つたのである。廣州の刺史蕭昂、禮を具して之を迎へ表を以て武帝に聞す、帝奏を覽て使を遣し詔を齎して迎へ請せられたから十月金陵に往かれた。達磨と武帝との相見は二度で有つた樣であるが遂に機、契はずして揚子江を渡つて魏の嵩山少林寺に面壁せらるゝこと九年、神光慧可を得て佛法を正傳し大同二年（皇紀一一九六）丙辰十月五日端然として坐化せられた。これにも勿論異説がある大同二年説、魏の太和十九年説、大通元年説、西魏の大統元年説等である、大通元年より算へて十年目にあたる大同二年説を採らねばならぬ。洛陽嵩州の熊耳峯に葬り塔を定林寺に起つと『正宗記』に書いてある。其の行壽は正確には解らないが推定して見るに少くも百三十歲を下らざるものゝ樣に思はれる。大師は尊敬の稱、師は師範、大は小に簡ぶの言、佛を三界の大導師と稱するが如く今も之を尊んでよぶ。◎聖諦第一義とは「聖諦は聖人所證の境、諦と云ふは法性勝解の二緣に由るが故に名く、愚夫は初有つて後無し、聖は二ともに具するが故に偏に聖諦と說く」と『瑜伽論』に見えてをる。又眞俗の二諦と云つて眞諦を第一義諦と名け俗諦を世諦と名くと『廣弘明集』に出てある。此れは是れ敎家極妙窮玄の處で佛敎の至極微妙にして言慮を絕した最上無上の法門と云ふ意である。◎廓然無聖とは廓然は洞豁廓然でからりとして何にも區域の無い「戶障子を明け放したる夏座敷」と云ふ樣な樣子を云ふ、無聖は聖諦無しの意で聖は凡に對し、眞は俗に對し、實は假に對する處の相對的の語である。されば凡聖眞俗權實何物も無い、全く廓然とした樣子である。

【要解】　梁の天子武帝が佛法の道理の此の上も無い有り難い極意とする所を、遠來の珍客、達磨大師に向つて質問の矢を放つた、達磨大師の眼中には的が無い、卽ち凡聖生佛の相對的見解を認めて居られ無いから腹藏なく廓然無聖と答へられた。武帝は何處までも眞俗凡聖等の對待二見の窟籠を出ることの出來ぬ人であるから一向意が解せられぬ、目前に現に朕れと對する達磨聖者是れ何物ぞと二の矢を繼いだ。達磨は平氣で不識と答へられた、武帝何とも解しかねて茫然して了つた。大師と武帝との相見終に意氣相契はずして、達磨はサッサと江を渡り魏の嵩山の麓なる少林寺に入つて面壁坐禪すること九年で有つた。この本則の要は示衆にあつた通りで階級邊に沒頭する敎者と、出格超脫なる禪家との會見なるが故に機宜相契はず、遂々猫に小判の古諺を實地に演出した、達磨不

識の處に著眼し參究せねばならぬ。

【著語】　口清旦に起き來つて曾て市に利あらず。　達磨さん朝小早くから起きて市場に出て行つたとて何にも利益は有るまいよ、可惜口に風をひかせる位の所で反つて損をするかも知れぬ。武帝到底達磨の敵で無い、來機の逕庭が餘りに甚しい。口且らく第二頭に向つて問へ。　第一義などと質問はして來たが佛法元來一をも立せず、法本無法である。若し一を立すれば二三四五六續々現はれて來る、然らば敢へて第一義のみを問ふ要は無からう、第二頭に向つて更に問端を設けては如何。武帝を冷評した語である、然し第二義と問ふのが既に業に第二頭に落在するものなることを知れりや否や。口劈腹剜心。　廓然無聖の一語は達磨が腹を劈き心臟を剜り拔いて呈露したものである。これが達磨の本面目であり達磨の生命である。　達磨の全體露現であるのに其れでも未だ見え無いので御座るか。口鼻孔裏に牙を認む。　牙は口にあるもの、鼻の孔に牙の有らう筈が無い。然るを有りと認めた武帝の僻眼こそ氣の毒千萬なるものである盡界に瀰淪る達磨を見ずに目前に立つ達磨計りを氣にしてござる。口腦後に腮を見る。　腦は腦髓、腮はアギト、腦後に腮の樣なもの丶見える人相の者は盜賊性で有ると古來云はれてある。故に古語に「腦後に腮を見ば與に往來すること莫れ」又は「腦後に腮を見ば人觸犯し難し」と云うてある。今は達磨が不識と云つた當處を評した語である。口には柔しく識らぬと云つた丈けだが實に油斷のならぬ一語で底氣味の惡い言葉尻であるぞ。並大抵の不識だと思つてはならぬ、不識の言中に無限の意味が含まれてゐる、ウツカリ看過してはいけない。本則の眼目は此所であるぞと云はぬ計りである。口方木は圓竅に入らず。方木は四角とか八角とか云ふ樣な材木、圓竅は字の如く圓き竅である。武帝は敎相に固執して毫しも角のとれてゐない方木だ、達磨は廓然無聖、不識と云つたやうな圓同大虛の佛法である。始めから終まで遂に機宜相投じない、實に惜しい事で有つたと云ふ意も自ら含まれてゐる樣である。口家に滯貨無ければ富まず。達磨は流石に豪商である、買手の無い品まで澤山仕込んで貯へてゐるものと見える、一錢の利益が無くても平氣で面壁してゐる。それで無くては大福長者とは云はれぬわい、達磨全身是れ佛法だもの無盡藏の滯貨である、さればこそ受用不盡である。

頌云。廓然無聖（一廻飲水一廻著噎）　來機逕庭（面赤不如語直）　得非犯鼻而揮斤（好手手中誇好手）
失不廻頭而墮甑（已往不告）　寥寥冷坐少林（老不歇心）　默默全提正令（獨自誑兵機）
秋清月轉霜輪（高著眼看）　河淡斗垂夜柄（誰敢承攬）　繩繩衣鉢付兒
孫（莫妄想）　從此人天成藥病（天行已過使者須知）

【讀方】　廓然無聖。來機逕庭。得は鼻を犯すに非ずして斤を揮ひ。失は頭を廻らさずして甑を墮す。寥寥として少林に冷坐し。默默として正令を全提す。秋淸うして月、霜輪を轉じ。河、淡うして斗、夜柄を垂る。繩繩として衣鉢、兒孫に付す。此れより人天、藥病と成る。

【字義】◎來機逕庭とは來機は寶鏡三昧に「來機亦赴く」とある語と同じで機は機根、來字を加へて師家に來り參ずる者の意。逕庭は隔遠の貌とあるから距離の遠いといふことである。◎非犯鼻の句は莊子の徐無鬼の篇に出てゐる故事である。莊子が惠子の墓を過ぎた時、從者を顧みて謂ふには郢人が其の鼻端に堊漫を附著てゐた、其の大きさと云つたら蠅の翼ほどのもので有る、匠石と云ふ者に之を斵とらせやうと思つて申込むと譯もなく承知し、斧を振りかぶり腕限りの力を出して其の堊を跡方もなく綺麗に、拭ひ去つたが如く斵りとつて了つた、それで鼻端には少しも傷をつけなかつた、又斵らせた郢人も恐惶ともせず、顏色すら變へず平氣で衝つ立つてゐたと云ふ、例の莊子一流の寓言で有る。此の句を解りよく書けば得處の方から云へは斤を揮つて堊を斵るに毫も鼻端を犯さずと云ふ意になる。◎不迴頭の句は後漢列傳五十八にある譚で、孟敏と云ふ男が大原と云ふ人の下に食客をしてゐた、或る日、甑と云つて土製の甑の樣な形狀で物を炊く器、こしきとも云ふ之を荷うて路を歩いてゐる途端に過つて地に墮し粉微塵に碎いて了つた。普通の者ならば破片を斷ぎ合して見たり怨めし相な顏をしてゐる所だが食客孟敏君は後を廻顧もせずにズン〳〵行かうとした、廓林宗と云ふ人が傍に之を見て居て問うには尊公はどう云ふ譯で後をも顧ずして行くのかと云へば、孟敏は平然として甑已に破れぬ、之を視るも何の益かあらんと答へたので林宗大いに感心し、大原から引き取つて學資を出して勉強をさせてやつたと云ふことである。此の句は甑を墮して破つたは大失敗だが頭を廻して視向きもせずにズン〳〵行つた態度は立派なものだと失を得に歸しての讀め方である。◎寥寥とは冷靜なる貌で、默々と對にして用ゐた。◎全提正令とは正令は佛法の正令で有つて佛祖の家風と云ふ意味である。此では坐禪のことで「初祖の命脈ただ結跏趺坐のみなり」とあるから達磨の全面目と云つて可からう。全提は全分提起と云つて有りの儘全體さらけ出すことである。◎轉霜輪とは輪は轉の字にきかせ霜は淸にきかせて月の白きを寫したのである。秋の夜に寒い程冴えた月が任運に轉じゆく樣子である。◎河淡斗云々の句、河は天の銀河、斗は北斗星、柄は斗柄のことで文字を割いて用ゐた迄のこと。斗柄は文文志に「北斗七星龍角に携なる杓斗柄なり」とあるから出たので北斗七星の光が恰かも杓の柄の如き形に竝んで見えるからのことである。句の意は天を望めば銀河が白く淡く輝き、北斗星は杓の柄の如に劍先を垂れてゐる、夜の悽愴なる景色を歌つたのである。◎繩繩とは詩經に「宜なり爾の子孫繩繩たることを」とあり、註に繩繩は絕えざる貌とある。◎衣鉢とは衣は僧伽黎衣とて袈裟のこと、鉢は鉢盂と云つて食を盛る器。これ佛衣佛鉢である。釋尊が迦葉に僧伽黎衣竝びに佛鉢を付囑し給へるにより歷代の祖師嫡傳相承し來つた。それからして師資相傳することを衣鉢を付すと云ふに至つた、子孫綿々として相續しゆく證據とし表信として之を付囑するのである。支那に至つて五祖弘忍下に盧行者と神秀との爭ひが激しかつた、爲に傳衣は六祖慧能に止めて了つた、衣は曹溪に止まるも法は沙界に遍ねしと云はれてある。現今でも受戒嗣法の際には衣鉢を相續して信據を表してをる。道元禪師の『傳衣』、『袈裟功德』の卷等を拜覽すればよくわかることである。◎藥病とは藥反つて毒となる意で藥の爲に多くの人間が病

氣を成すと云ふのである。

【要解】 初めの四句は本則を頌し後の六句は達磨を頌したものである。初め四句の中、前二句八字は達磨と武帝と師學相投合せざる樣子、次の二句十四字は達磨の接化振りに就いて假に得失を設けて論じた。後の六句の中、前二句十二字は達磨面壁の正當、次の二句十二字は達磨の淡々たる心事最後の二句十四字は達磨二祖付髓の樣子を頌じたものである。要を云へば本則を頌する四句では達磨の氣高き廓然無聖と、法執に捉へられてゐる武帝とは其逕庭や甚しく對面千里の憾みがある、達磨の接化振りは得の方から云へば匠石の斤を揮へるが如く、失から云へば孟敏が甑を墮したるに似てをる、何方から云つても綺麗小瀟洒で跡方が無い。後の六句の達磨を頌する所では少林冷坐の儘が正令で有つて其の心事を云へば月の皎潔たるが如く秋清骨に徹し星の粲たるが如く夜色の淡々たる樣子を叙べて終に二祖神光を得、衣鉢を兒孫に付囑したが是れが亦天下後生の諸人をして迷亂の基を開いたものよと結んだのである。

【著語】 □一廻水を飲んで一廻噎に著く。 噎は噎ぶことで咽喉蔽塞の病から起る。一度水を飲まうとして其一度目に直ぐに噎せて了つた。達磨の廓然無聖は其味ひ淡として水の如きもので有つたが武帝は咽喉の病氣に罹つてゐたから終に此妙味を知ることが出來んで噎せて吐き出して了つたのは氣の毒なことである。達磨が冷暖自知せしめ樣とした苦心も水の泡と成つた。天童も噎んだお仲間ではあるまいか。□面の赤きは語の直きに如かず。 赤愧をかくよりも知らざるを知らずとして正直に言ふ方がよいと云ふ意で武帝を警めた、對朕者誰などは極めて不眞面目な語である。どうも一國の帝王だと云ふことや佛心天子などと言ひ囃されたのが鼻の先にぶら下つて居たのであらう。□好手手中好手に誇る。 いかにも達磨の妙術は見上げたものである。自慢の鼻を斲るのが殊に名人らしい、然し餘りに上手上手と賞めたらば反つて達磨の鼻に堊土が著くかも知れぬよ。□已往は咎めず。 失だとて已に過ぎ去つたことは深く咎めるの要は無からう、見切りをつけて行かれた所立派なものだ、これも矢張り達磨の善巧方便である。□老いて心を歇めず。 少い時から坐禪が好きで有つたが百二十有餘の老體に成つても猶ほ歇めない、木登りは木で果るの諺どうりよ、達磨は坐禪の一枚である。それともまだ何か野心が有るので有らうか。□猶ほ自ら兵機を說く。 前句と對である、寥々も默々も油斷がならぬ、心中竊かに何か策戰するところがあるらしい。然し世俗に求むる所があるとは思へぬ、察するに衣鉢を傳へる相續者でも欲しいのであらう。□高く眼を著けて看よ。 月と云うても天を仰いで見る計りでは無く、回光返照して自己心地の明月の盈虧を見るのだ。高くは高尙の意である。□誰か敢へて承攬せん。 承攬とは手に承けてよく覽るヿで合點とか首肯とか云ふ意である、銀河と云うても雲の上の星では無い。目前に斗柄が垂れてゐるぞ、誰も承け攬り人が無い樣である、天童が如何に世話を燒いても合點する者が一人も無いのは氣の毒なものよ。□莫妄想。 妄想するヿ莫れと云ふので妄想は有念無念に渉ることである。兒孫に付すなどと云ふが一體何を付するのであらう、相傳する樣なものが有るのであるか、天童妄想せまいぞよ、餘

計な心配すると頭髪が禿る。その實は吾人へ向つての注意らしい。口天行已に過ぐ、使者須らく知るべし。天童の座下には大分病人でもある樣だが萬松の家には病氣の者などは一人もござらぬ。頑健息災の正札附である。行瘟の使者敢へて訪ふに及ばぬ、門額にはチャンと天行已過と貼つて置いた。されば素より藥の御用も無い譯である、一體藥だ病だと云ふのも一種の妄想ではあるまいか。天行已過とは天行は疫病神のことである、除夜の晩に行瘟と云ふ疫病を流行せる惡鬼神が使者を人界に降す、人界では之を恐れて黃色な紙に朱で「天行已過」の文字を書いて門頭に貼つて置く、行瘟の使者が來て見ると已に過ぐと書いてあるから此の家はモー濟んだことと思つて通過して仕舞ふ、それで辛のこと一家は無事に暮せると云ふことが『遂生錄』の上卷に出てをる。支那人の迷信であるが日本にも斯んな樣なことは幾等もある。今それを萬松が巧みに用ゐ來つて無事是れ貴人の樣子を著語したのである。

第三則　東印請祖

示レ衆云。刧前未兆之機。烏龜向レ火。敎外別傳一句。碓觜生レ花。且道還有ニ受持讀誦分一也無。

【讀方】衆に示して云く、刧前未兆の機、烏龜火に向ふ、敎外別傳の一句、碓觜に花を生ず、且く道へ還つて受持讀誦の分ありや也た無しや。

【字義】◎刧前未兆之機とは刧は梵語刧波（Kalpa）の略、長時と譯す、哲學的に云へば時間空間の中の時間（Time）の意である、刧前未兆之機は機の未だ兆さゞる刧の前と云ふ意、機は心機と云つて吾人の心意の一念動いて萬念を生ずる元機である、今は本則の出息入息の樣子を云ふ、空刧那畔の消息、朕兆以前、威音王前、父母未生以前、五百塵點刧の昔、一機未發、或は久遠刧の昔など云ふ語が澤山ある、これは皆刧前未兆の機と同じ意で、數量を超越した「時」と云ふ觀念からして吾人の心意に一見對待の思量分別、未だ微動だも發せざる狀態を言ひ詮す語である。◎烏龜向火とは烏龜は盲目の龜である。盲目で有るから外境を見ない、その盲龜が火に向ふと云ふは思量念度に涉らない、非思量なる行動である。◎敎外別傳とは不立文字と並べて禪の本領の樣に云はれてをる、黃卷赤軸音聲文字の上に顯はれたのを敎と云ふ、この敎の名相言句に拘らざる無文字無言說の經典を別傳と云ふのである、この本則に云ふ如是經が其れである。◎碓觜生花とは碓は石臼、觜は口喙、合せて石臼のふちと云ふ意で無意識の樣子、その碓觜に生き〳〵とした千紫萬紅の花が咲くと云ふのは色香の境に墮せぬ活用を云ふ。

【要解】吾人の心機未だ發せざるの時は恰も烏龜の火に向ふが如く思量念度に關せざる所であるから非思量である、文句言詮に干らぬ無字の經は情識分別を以ては讀むことは出來ぬ、起滅の心にも墮せず色香の境にも落ちぬ、心境未だ立せざるの眼を以て轉讀するに非ずんば眞に如是經を受持讀

誦するの分ありとは云はれない、天下の諸人還つて其の伎倆を有するかどうである、本則を好鑑として大いに眼を刮つて看るが可からうぞ。

擧。東印土國王。請二十七祖般若多羅齋。（往往償口債去也）**王問曰。何不看經。**（無功受祿寢食不安）**祖云。貧道入息不居陰界。出息不渉衆緣。常轉如是經百千萬億卷**（上來請讚無限勝因）

【讀方】擧す。東印土の國王、二十七祖般若多羅を請して齋す。王問うて曰く、何ぞ看經せざる。祖云く、貧道入息陰界に居せず、出息衆緣に渉らず、常に如是經を轉すること百千萬億卷。

【字義】◎東印土國王とは印土に東南中西北の五天竺ある中の東印土である、印土は普通に印度と書く、原語は（Hindu）今の（India）で有るから印土と云つても同じである。古來天竺、身毒、賢豆等の語を用ふれども原語の發音を轉訛したまでゝある、國王は堅固王と有れども譯名で有つて原名は詳かで無い。東方印度の一小國王で大して名の知れた人らしくも無さゝうであるが兎もあれ佛教信者の國王で有つたらしい　◎二十七祖般若多羅とは二十七祖は釋尊嫡傳の第二十七祖で般若多羅は其の名である。卽ち二十六祖不如密多尊者の法嗣で二十八祖達磨大師の正師である、東印度婆羅門種の出で堅固王治下の國に產れたが幼にして父母を失ひ名氏を知らず、自ら瓔珞と云つたから人稱して瓔珞童子と名んでゐた、不如密多尊者堅固王の國に至り初め王を化し、後ち此の子を得て宿昔を觀ずるに此の童子は卽ち大勢至菩薩也と曰はれたと云ふ程である。幼よりして傑出の怪童で有つたに相違ない。◎齋とは俗にお齋と云ひ清淨禪悅の心を以て段觸の二食を佛法僧の三寶に供養し思食識食の回向を享くることである、平たく云へば心持を清淨潔白にして物質的食物を佛寶なり僧寶なりに供養げ其の功德力に依つて精神的食物を得さして頂くことである、故に佛の加被力を享け、僧侶の回向を受ける爲に齋食を上げることをいふのである。◎貧道とは德寡く道貧しと云ふ意で道人が自ら謙遜して云ふ語、今は尊者の自稱代名詞である。王者が自ら稱して寡人と云ふのと同じである。◎入息出息とは呼吸のことで之を遣來遣去とも云ふ。◎陰界とは陰は色受想行識の五陰、界は六根六境六識の十八界である、陰は陰覆の義、陰又は蘊と書く、界は界別を義となす、或は蘊處界の三科と云つて五蘊、十二處（六根六境）十八界の中、尊者は首尾の二つを擧げて其の中間を攝したのだとも云はれてをる、今一一說明すると大層長くなるから其の要點だけを摘んで云へば蘊處界の三科は佛教人生論の大綱で有つて其の本は五蘊に歸する、五蘊は吾人の身心の總稱（色、受、想、行は身、識は心）で有つて此の色身には六根が具つて有るから外界の六境と初めて交涉を開き、其許に六識と云ふ精神の作用と干繫が始まる、されば色受想行識の五蘊は物心兩界の交涉關係を開く處の總府で有つて其れからして十二處ともなり十八界とも開展して人生は極めて複雜なる狀態を現出するに至るのである。本則の陰界と云ふ語は斯る敎相學的の名目には用事は無いが色心なる根本問

題を捉へて簡單なる此の二文字に總稱せられた處は感歎に堪へないのである。◎衆縁とは衆縁萬境の略で外境の萬縁と云ふと同じである、縁とは外界の事物が吾人の精神を刺激する作用を云ふ。◎常轉如是經とは經は修多羅（Sūtra）にて契經と譯し、貫攝常法の四義を具すといふ、一般に佛教では如來の說敎を結集した所の黃卷赤軸に名く、今は然らずして義を顯はす爲に此の文字を假つたのである。如是は第一則の法王法如是と同じで法爾如然の樣子である、常轉は常に法輪を轉するなどと云つて常恒不斷に轉展して止まらざる意である。

【要解】　東印度の堅固と云ふ國王が志す所有つて西天二十七祖般若多羅尊者を招待して供養を設けたが尊者は更に讀經回向をしてくれない、國王其の所以を問へば答へて云く、それがしは內色心の鬼窟に籠居せず、外萬緣の衆境に交涉せずして出息入息してゐる、これ從晝至夜に無數億卷の如是經を轉讀して斷たざる所以であると。其の底意は五蘊皆空の上の眞の功德を開示せられたのである。

【著語】　口往々に口債を償ひ去る。此の著語は兩面から見られる、王の方から云へば王は古へ尊者に口の借財があると見える、少々宛返す積りで供養するのであらう。尊者の方から見れば世間つまらぬ凡僧は御飯を食はして頂いた口返濟に習ひ覺えた經陀羅尼を讀んでゆくが般若多羅はソンナ齋主と一所と思うてはくれまいぞ、不受不施に干からぬ三輪空寂の供養である。三輪空寂とは施者と受者と施物と此の三畢竟空ぞとの意。口功無うして祿を受くれば寢食安からず。看經もせずに尊者はお齋についた儘で居ると見える、穀つぶしの罰あたり奴が、なんで寢食が安泰からう。然し尊者に小言を云つて居るのでは無い、王の胸中も亦甚だ不安心であるから這んな催促などをするのぢや。口上來の講讚、限り無き勝因。大いに萬松は贊成した、難値難遇の說法で尊者ならでは拜聽することの出來ぬ講讚である、諸人の爲には無限の勝因ぢや、耳を洗つて聞いて置くが可からう。王と尊者とは舊知の中だから大した看經をしたが王には眞の有り難味が解つたであらうか。

頌云。雲犀玩月璨含輝 暗通一線文彩已彰 木馬游春駿不羈 百花叢裏過一葉不沾身 眉底一雙寒碧眼 不曾趁蚍蜉隊 看經那到透牛皮 過也 明白心超曠劫 威音前一箭 英雄力破重圍 射透兩重關 妙圓樞口轉靈機 何曾動著 寒山忘却來時路 暫時 不在如同死人 拾得相將攜手歸 須是當鄉人

【讀方】　雲犀、月を玩んで璨として輝を含む。木馬、春に游んで駿にして羈されず。眉底一雙、碧眼寒じ、看經那ぞ牛皮を透るに到らん。明白の心、曠刧を超え、英雄の力、重圍を破る。妙圓の樞口、靈機を轉す。寒山來時の路を忘却すれば、拾得相將ゐて手を携へて歸る。

【字義】　◎雲犀玩月云々とは格物論に「犀は狀、水牛の如し、猪頭あり大腹卑脚三脚三蹄黑し、一孔に三毛あり、江海を行けば水之れが爲に開く」と有れば犀は水に棲む獸類で有らう。或は古人の

句にも「犀は月を翫ぶに因て紋、角に生ず」とあるから犀は水に棲んでゐて水中の月を捉へやうとする、其際に反つて彼れの角が水に濕れて其の表面に月影が宿つて美はしい紋形が生るものと見える、其樣子を璨舍輝と云つたのであらう。雲は靈の字だとも云はれて居るが月と緣が有り、璨、輝の字と對照してやはり雲の方が面白い、意味は靈の字に見てもよからう。尋常一樣の犀で無いから雲犀と云つたのである、其の樣子が玩月云々の五字でわかる。雲犀は黑犀の意であると云ふ人も有るが揑ちつけらしい。◎木馬游レ春云々とは木馬は涅槃經嬰兒行品に「水牛木馬木男木女」と云ふ語があるから出たので木材で造つた馬の形をしてをる體操場にある樣な跳び越える器械では無い、活動する生きた馬である。木馬は並大抵の馬で無いと云ふことを詮はす爲の文字で雲犀と對である。其の樣子を游春云々の五字に明す、春は春の野邊、駿は木馬の活動ぶり、不羈は荒草に目もくれぬと云ふ意。◎眉底一雙云々とは眉底一雙は一對の眉毛の下にある一雙の眼である。「碧眼は達磨眼に紺青の色あり、碧眼の胡僧と稱す」などと云ふ語から出た。今は衲僧が眼光の鋭さを云ひ、その樣子は寒じい、スゴイゾットすると云ふほどの意。◎那到透云々とは透牛皮は藥山禪師の語に「若し儞看ば牛皮も也須らく穿つべし」とあるから出た、牛皮表紙に書かれた御經などを讀むものかと云ふ程の意。◎明白心云々とは明白は信心銘に「若し憎愛莫ければ洞然として明白なり」と有つて對待無きの心である。超曠刧は刧前未兆の機の意。◎英雄力云々とは英雄は千人に勝るゝを英と云ひ、萬人に勝るゝを雄と云ふと古語にある、大丈夫の意である。破重圍は衆緣萬境の包圍を打破する意。

◎妙圓樞口云々とは樞口は門樞叉は樞戶でくるといふこと、くる〳〵廻轉すると云ふ緣から口と云ひ妙圓と云ふ、靈妙なる圓口と見て可からう。轉靈機は轉は圓い樞口より來たので、機は樞機、靈は妙に對する語、諄く云へば靈妙なる圓口に靈妙なる樞機が自由自在に囘轉してゐる樣子は如何にもふしぎ靈妙よと云ふ意を文字に割いて巧みに用ゐた。◎寒山拾得の二句、寒山拾得のことは傳燈錄に出てをる。豐干禪師が天台の國淸寺に居られた時、厨中に二人の苦事を行とする豎童が有つた、それが寒山、拾得と云ふ者である。或る時禪師は閭丘胤と云ふ人の問に對へて彼れは文殊普賢の化身で有ると云はれた所が丘胤驚いて庫裡に往つて禮拜したと云ふことが書いてある。『寒山詩』『拾得錄』と云ふ者が世に行はれてをる。寒山詩の中に「安心の處を得んと欲せば寒山長く保つべし、微風、幽松を吹き、近く聞けば聲愈好し、下に斑白の人あり、勞々として黃老を讀む、十年歸ることを得ず、來時の路を忘却すと歌ひ、丘胤問ひ訪うて後、拾得と相携へて松門を出でて更に寺に還らず」と記してある所から忘二却來時路一、相將携レ手歸の句を成したものである。

【要解】　初句は入息不レ居二陰界一、第二句は出息不レ涉二衆緣一、第三第四句は常轉二如是經一を頌して本則の意を明らかにして置いて、更に第五句に第一句の璨舍レ輝の樣子を、第六句に第二句の駿不レ羈の樣子を歌ひ、次の第七句は傍句と云つて一句だけ獨立して他と對せずに前六句を總攝してある。末後の二句は第七句の轉二靈機一の樣子を類例に依つて示されたものである。要は陰界に居せざることと雲犀の月を玩ぶが如く、衆緣に涉らざること木馬の春の野に遊ぶが如くにして出息入息璨

として輝を含み皴にして羂されぬ。如是經轉讀の衲僧の眼睛は天地日月をも射透す樣な寒さで牛皮裴幀の經卷は僅に眼を遮ぎるに過ぎぬ。曠刧を超ゆる所の明白心に由つて我他彼此の包圍を打破することと英雄の力にも勝つてをる。靈機を轉ずるの妙用は圓融自在、其の例證が欲しくば寒山が十年來時の路を忘却し了つて拾得が手を携へて歸去來と去つて還らぬ此の消息に見るが可い、是れ如是經の全體である。

【著語】□暗に一線を通ずれば文彩已に彰る。　出入が一息ぞと氣が付かば其の儘で分明、立派な文彩が昭々歷々と彰れて居るがどうだ、諸人には見えるかナ。□百花叢裡を過ぎて一葉身を沾さず。　木馬で有つて而も駿足だから如何に露茂き百花叢裡を過ぎやうとも一葉の沾ひも身にうけぬ、無心無爲の境界なら露にも草にも觸れない筈だ、諸人には駒の蹄が見て取れたであらうか。□曾て蚍蜉の隊を趁はず。　蚍蜉は羽蟻であつて隊をなして香氣を趁うて歩くものである、碧眼の衲僧は人の香や文字葛藤を趁うては歩かぬ、これが尊者の看經よ。□過也。　天童汝も亦牛皮を透つた仲間であらう、一念纔に起れば既に蹉過了也である。□威音前の一箭。　威音前とは威音王佛以前の意で過去莊嚴刧最初の佛名である、超曠刧と云ふ話から來た曠刧の今日のと云ふ二つはない、唯一箭で貫いてある、ドンナ人が放つた箭か、一つ其の鏃を見究めて貰ひ度いものだ。□兩重の關を射透す。　前句と對であるから之を二句一聯といふ。今は投子和尙の語を假りて用ゐたのである。重圍の根元は兩重の關である、迷悟凡聖等の二見これである。　然し回光返照して見れば兩重の關も百千重の包圍も威音前の一箭に射透して了つてあるぞ、今更珍らしくも無いことだ。□何ぞ曾て動著せん。　轉靈機と天童は云ふけれども從來曾て誰か動著した者が有るのであるか、縱し動著しても動靜は一如である、動靜の二相は了然として不生である、轉などと云つて多くの人を迷はさぬがよからう。□暫時も在らざれば死人に如同す。　來時の路を忘却したなどと云ふ、それでは丸つきり御不在も同然、死人と大差が無いではあるまいか。否、死ぬなら大死一番が可からう、絶後の蘇生で無いと大活現成は出來まい。□須らく是れ當鄕の人なるべし。　新來の客かと思つたら爾うで無い、事に由つたら當家の御主人かも知れない。

第四則　世尊指地

示衆云。一塵纔擧大地全收。匹馬單槍開疆展土便可。隨處作主。遇緣卽宗底是甚麼人。

【讀方】　衆に示して云く、一塵纔かに擧ぐれば大地全く收まる。匹馬單槍、疆を開き土を展ぶることは便ち可なり。處に隨つて主と作り、緣に遇うて宗に卽する底、是れ甚麼人ぞ。

【字義】　◎一塵纔擧大地全收とは一塵は小なるもの、大地は大なるものである。纔かに塵一本を擧れば五大洲の全土が悉く其の中に收められてあると云ふは萬法歸一、一卽萬法の思想を言ひ詮はし

た語で大小泯絶の上から云ふ。◎匹馬單槍とは馬一匹、槍一筋と云ふことである。◎開疆展土とは疆域を開拓し土地を展延する意で版圖を擴張すると云ふに同じ。◎遇緣卽宗とは善惡等の諸緣に遭遇しても其の諸緣をして吾が宗旨たる心王の配下に卽かしめ、其の指揮下に活動せしむると云ふ意。

【要解】大小廣狹等の二見對待の世界を出でて無限絶對の境界に入れば既に大小並べ見ざるが故に一微物を擧ぐればそこに盡大地は全收せられて了う。匹馬單槍にして四海八蠻も乃至は三界二十五有も吾が版圖に全領せられる、これは最と容易いことで誰にでも出來やう。然し機位を守らず至る處に主人公となり衆緣萬境を主宰して闕下に服膺せしむることは甚だ難いのである。扨て眞個其ういふ人があるであらうかどうか、且らく本則に就いて見るがよからうぞ。

擧。世尊與衆行次〔隨他脚跟轉〕以手指地云。此處宜建梵刹〔太歳頭上不令動土〕帝釋將一莖草挿於地上云。建梵刹已竟〔修造不易〕世尊微笑〔賞罰分明〕

【讀方】擧す。世尊、衆と行く次で、手を以て地を指して云く、此の處宜しく梵刹を建つべし。帝釋、一莖草を將つて地上に挿んで云く、梵刹を建つること已に竟んぬ。世尊微笑す。

【字義】◎世尊とは釋尊のこと。第一則に出づ。◎梵刹とは梵は清淨の義、刹は刹竿と云つて幡柱のことである、長阿含經に曰く「若し沙門此の寺中に於て勤苦して一法を得る者は便ち當に幡を竪て、四遠に告ぐべし」と有つて說法敎化の標榜である。今は轉じて寺院のことを淨刹若くは梵刹と云つてをる、上求菩提下化衆生の道場と云ふ意である。◎帝釋とは帝は卽ち天帝、梵語の釋は釋提桓因（Sakradēvendra）能天主と譯す、須彌山（Sumēru）頂にある忉利天（Trāyastrimśāh）主の名である。此の天帝は佛道歸依の天主だと云はれてあるが果報の異る天部の王が人界に生れて世尊に隨伴して歩いたかどうかは疑問である。然し忉利天と云ふことも架空の考へであるとすれば反つて帝釋と云ふ人が世尊の門人中に有つて此の公案の主人公に成つたのかも知れ無い、是んな穿鑿は此には用事の無いことである。◎一莖草とは一と莖の草であるから路傍に咲いてゐた名も無い一本の草であらう。

【要解】世尊が大衆を引率して行道せられた次手を以て地を指ざして此の所に梵刹を建てよと云はれたるに帝釋取りあへず路傍に在つた一本の草を地に挿込んで梵刹を建立し畢つた由を告げた、すると世尊微笑を漏し給ふたといふ。此の一則は大小廣狹の二見を破し無限絶對の境界を日常坐作進退の上に識得し活用せしめやうとの主意である。

【著語】口他の脚跟に隨つて轉ず。　獨尊と云はれる世尊も一人歩きが出來ぬと見えてゾロゾロと大衆を引きつれて行かれる、これは句抑下の意卓上と云つて句面では抑へ底意では賞める語である。絶對の獨尊決して相對の大衆を邪魔にし無い、相對界中に在て能く主中の主となる所實に世尊の活作略であると讚歎した。若し大衆の方にかけて見るなら句面の通りに見ねばならぬ、どれもどれも

世尊のあしあと計り拾つて歩いてゐる、一人として獨立獨歩のできる漢が無いと見える、人々自己の脚跟下に氣が付かぬとは可憫愍者である。口太歳頭上、土を動さしめず。太歳とは庚申と云つて地の方位を司る神である、滅多に梵刹など建て丶鬼門金神の祟りをうけ土地神の怒りに觸れまいぞ、世尊の言句に附き纏うて第二念を動ずれば神罰立ろに至らん、餘計な干渉せまいぞや。口修造易からず。梵刹を建て畢つたは結構だが維持して行くのが容易の業で無い。但能く相續するを主中の主と名くとも云つて道は相續不斷なる處に價値がある、一時的の際物ではいけない、平常心是れ道が肝要である。口賞罰分明。賞か罰か人々自己の佛に問うて見よ、自から分明する、世尊がニコニコと笑はれた處は如何にも帝釋の仕打が意に合つて滿足らしい。然し大功は賞し難しで賞罰以上の微笑がある。又功勳邊を守る帝釋でも有るまい。

頌云。百草頭上無邊春（夾山猶在り）　信手拈來用得親（入荒田不揀）　丈六金身功德聚（不審）　等閑攜手入紅塵（逢場作戲）　塵中能作主（一朝權在手）　化外自來賓（看取令行時）　觸處生涯隨分足（不從人得）　未嫌伎倆不如人（面無慚色）

【讀方】百草頭上、無邊の春。手に信せ拈じ來つて用ゐ得て親し。丈六の金身功德聚。等閑りに手を攜へて紅塵に入る。塵中能く主と作る。化外自から來賓す。觸處生涯、分に隨つて足る。未だ嫌はず伎倆の人に如かざることを。

【字義】◎丈六金身とは釋尊のことで釋尊の御身長が一丈六尺有つて紫磨金色であつたと云はれてをる、固より日本の鯨尺でも曲尺でも無い、周の尺で八尺餘りにあたるといふことである。佛と云ふ語の代名詞に丈六身とか丈六の金身とか用ゐる場合が多い、今も釋尊のみには限ら無い。◎功德聚とは佛身を尊重していふ語で相好光明莊嚴ともに聚り萬德圓滿の樣子をいふ、浴佛功德經に「淨智莊嚴功德聚」とあるから出たのであらう。◎化外とは敎化の外と云ふことである、釋尊は人界の敎主で有つて天界の敎主では無い、然るに忉利天主までが來て敎化に預つたと云ふ意である。

【要解】百草頭上の句から化外自來賓に至る七言四句五言二句は本則の意を頌し、末後七言二句は本則に對して天童が伎倆を發揮した。本則の意を頌する中初二句は一莖草の功德と帝釋の手腕とを讃歎し、次の二句で世尊の智德と悲德とを歎美し、次の五言二句で世尊の施設、帝釋の補佐を待つて公案圓成した樣子を頌じたのである。要言すれば無邊の春光に浴する所の百草千莖であるから手當り次第に何れの一本を取り上げても無邊の春光ならざるは無い、紫磨黃金の丈六身萬德圓滿の功德聚である、これ亦決して春光以外のものではあるまい、この相好光明莊嚴の世尊が沒蹤跡にして而も大衆とともに紫陌紅塵の巷に下つて敎化せらる、爾かく和光同塵すると雖も依然として至る處獨尊佛の光明蓋天蓋地である、さすれば化外なる天主帝釋も自ら天下り來つて如來の化を佐けたので先づ今日の說法も無事に終結を告げた。然し天童には帝釋の樣な沒量の大伎倆は無いけ

れども敢へて不足とは思はぬ、唯日常運足轉歩の處に眼横鼻直なることを認得して以て滿足してをる、是れ人々分上曾て缺かざる所の人々自己佛に囘光返照せしめたのである。

【著語】口夾山猶ほあり。　百草頭上の句を聞くと夾山和尚そこらにまだ居る樣な氣がする、天童人眞似ではあるまいナ。直下に老僧を薦取する底の分ありや如何、キヨロ〱餘所見をしてゐてはダメだ。口荒田に入つて揀ばず。　無邊の春光に浴する百草頭のみが拈じ來つて親しいのでは無い、萬松ならば春日の至らぬ荒れ田の中に在つても手に信せて自由に拈出して見せる、一體擇ぶには及ばぬのである、荒野も泥田も皆春の領分であるぞ。口不審。　不審とは支那の俗語で日本でならば人に逢うた際に「久潤でした、御機嫌よろしくつて？」と云ふのと同じである、今天童が丈六の金身と云つたから、其の丈六の金身殿は御無事で御座るかナ、寔に久しぶりで御目に懸つたと云ふ挨拶、これもやはり相變らず御無事かどうだ、人々自己の丈六身に面會するがよいと云はぬ計りである。口場に逢うて戲を作す。　塵界に下つて演劇をする氣と見える、幾等扮裝て舞臺に出ても世尊はやつぱり世尊である、然しこれが如來の遊戲三昧よ。口朝權手に在り。　主人公となれば一天下の權威全く掌握に歸し誰一人背く者の無いと同じことで、絶對の境界に至れば萬法皆我れに歸して一切の繫縛を離れて自由に往來が出來る。口令行の時を看取せよ。　前の句と對である、主君は法令を發するがさて其れが家臣に依つて實行されるかどうか、それを看て取ることが大切である、令行相應して政治の實は擧るのである。　世尊の宣建梵刹の命令が來賓たる帝釋に依つて建梵刹畢と勵行された、學人は此の令行一致の時節を看取するが可からう。口人に從つて得す。　手の執捉、足の運奔、人の世話には干からぬ、人々具足箇々圓成である。口面に慚る色なし。　行住坐臥の四威儀にして時處位の三を得さへすれば三世諸佛に對面しても毫も慚づることは無い。　諸佛元來何物ぞ、汝の面門より出入してゐるでは無いか、此の外何の伎倆かある。

第五則　青原米價

示衆云。闍提割肉供親。不入孝子傳。調達推山壓佛。豈怕忽雷鳴。過得荊棘林。斫倒栴檀林。直待年窮歳盡。依舊孟春猶寒。佛法身在甚麼處也。

【讀方】衆に示して云く、闍提肉を割いて親に供ずるも孝子の傳に入らず、調達山を推して佛を壓するも豈に忽雷の鳴るを怕れんや。荊棘林を過得し栴檀林を斫倒して直に年窮歳盡を待て、舊きに依つて孟春猶ほ寒し、佛の法身甚麼の處にか在る。

【字義】◎闍提割肉供親とは大報恩經に「須闍太子父母賊に纂はれて外國に逃逝し路を失ひ粮を絶つ、乃ち己が肉を割き父母に供養し前路に達せしむ」とある故事、須闍又は闍提ともいふ。世孝の至極をいふ。◎調達推山壓佛とは增阿含經第四十六卷に「提婆達多便ち惡心を生じ山を推し佛を

壓す」とある故事、調達は提婆達多のことである、金剛力士と云ふ者調達の佛に投じた石を金剛杵で以て遙かに擲つたが石片迸り來つて佛の足指を傷つて血を出した、これ佛心血を出せるものにして五逆罪の一、最も重い波羅夷罪である。◎忽雷鳴とは五逆雷を聞くと云つて五逆罪を犯す者は忽ち天雷の爲に其の身を引き裂かるゝと云ふことである。◎荊棘林とはいばらからたちの林であるから、衣を破り足を傷けて通られもせぬ困難な惡道である、佛身血を出した調達の惡業に譬ふ。◎栴檀林とは芳香馥郁たる栴檀樹の生ひ茂つた林である、栴檀林を古本には栴檀樹に作つてある、樹の方が可いやうに思ふ、己れが肉を割いて親に供養した闍提の善業を喩ふ。◎年窮歲盡、依舊孟春猶寒とは會元第十五卷に出てゐる古則がある「僧、開先の暹禪師に問ふ、年窮歲盡の時如何ん、師曰く舊きに依て孟春猶ほ寒し」と、年窮歲盡とは一年の最終日十二月大晦日である。事を借りて云うたもので極ギリギリ決著究竟の所と云ふ程の意。孟春猶ほ寒しとは大晦日の翌る日が正月の元日で初春ではあるが如何も昨日の大晦日と寒さは大して變らない、極ギリギリと云つても何にも別に變つたことは無い、昨日も北風は寒く今日も雪は冷たいぞ、名に晦日と元旦の差があるだけよと云ふ意。◎佛法身とは佛に法報應三身あり、其の中の法身とは卽ち理體である、法身の理は猶ほ大虛の如し、竪に三際を窮め橫に十方に亘り八極に彌綸し二儀を包括す、緣に隨ひ感に赴いて周徧せざること靡しと云ふ樣に說かれてある、今は斯う云ふ樣な理體の佛身でなく現在前なる活佛を云つてゐるのである。

【要解】闍提の孝行は善業には相違無いが尙ほこれ對待の善である、大乘的佛法の孝子傳には未だ載するに足らぬ、調達の暴逆は惡業には相違無いが尙ほこれ相對の惡である、忽雷鳴動も豈肯へて怕るゝに足らんやである、荊棘林の邪路をも超得し、栴檀林の芳樹をも斫り倒し、善惡邪正、迷悟是非の對待を超越して直に年窮歲盡究竟の的意に參到して見よ、究盡の所と云つて別に珍らしいことは無い、孟春と雖も猶ほ客臘の朔風と一般、其の寒さに變りは無い、ハテさて法界周徧といふ佛身は一體何處に在しますぞ。要を云へば佛法は元來名相に屈著せず直に其の實歸を學するのである、法に常相なく又常名なし、佛法と云ふのも一の閑名目である、況して善惡邪正是非迷悟これ便宜上名けた符號である、斯る對待の名相に與から無い、卽ち善惡邪正をも超越し佛法世法をも透得した眞個自己法身佛に相見せしめやうと云ふのが萬松の婆心である、例證が見たいならば青原問話の一則に就いて參究したら可からう。

擧。僧問青原。如何是佛法大意　小官多念律　原云。盧陵米作麼價　老將不論兵

【讀方】擧す。僧青原に問ふ、如何なるか是れ佛法の大意。原云く、盧陵の米作麼の價ぞ。

【字義】◎青原とは釋尊より第三十四代、支那では達磨大師より第七祖にあたる青原の行思禪師である、卽ち有名なる六祖大鑑慧能禪師の嫡嗣、彼の南嶽の懷讓禪師と同門である、六祖下に青原南嶽の二神足有つて二派の流通する所終に法眼、潙仰、曹洞、雲門、臨濟の五家を爲すに至つたので

ある。吾が曹洞宗は卽ち曹溪の正脈を嗣げる青原下で有つて臨濟、溈仰とは既に玆で分れてをる。吉州の青原山靜居寺に居られたから青原と云ふ、行思は名である。本州安城の劉氏の子、幼歳にして出家すると云ふだけで傳は詳かで無い、唐の玄宗開元二十八庚辰年（皇紀一四〇〇）十二月十三日示寂せられたとある、其れより百三十餘年を過ぎ、唐の僖宗皇帝、弘濟大師と謚號せられた。◎盧陵とは盧陵縣と云ふ地名である、今の支那地理では何處にあたるかよくは解らないが土地肥沃にして米の產する處と見える、問話の僧は此の盧陵から來たものらしい。

【要解】一人の僧が青原行思禪師に參問して佛法の大意とは何んなものか、簡單に指示して貰ひ度いと云うた、すると青原禪師は盧陵縣では米の相場はどんなものだね、尊公知つて居るかどうだと云ふ答話である。此の僧も敎者流の法相名目を數へて見たが、どうも得る所が無かつたと見えて最終最極の問題として佛敎の大意と大束に擔ぎ出したのである、然るに青原禪師は亦名相法數は言はずもがな、佛法世法の邊量をも超越し佛法禪道の臭味をも泯絕した境界に住して居られるから其の答話が全く唯其の儘である。これ活鱍々地の佛法である。些しも腹藏する所なく佛法眞の面目を脫體現成されたのである。

【著語】口小官は多く律を念ふ。　小役人は律儀一偏で箇條書きを後生大事に守つて居る者だ、此の僧も今佛法と云ふ一ヶ條を持出して、大意などと先生から講釋でも聽く氣に成つてゐる者と見える。口老將は兵を論せず。　老巧なる戰將の用兵軍略は臨機應變自由自在よ、必ずしも六韜三略をのみ是れ金科玉條なりとはせぬ、今青原禪師も爾うである、佛法の大意などと云ふ一物を豫め貯へてはをられぬ、胸中無一物にして而も機に臨み變に應じて受用不盡である。

頌云。太平治業無象（詫頭星現也未）野老家風至淳（爭如我這裏種田摶飯喫）只管村歌社飮（窮鬼子快活不徹也）那知舜德堯仁（始成忠孝）

【讀方】太平の治業に象無し。野老の家風至淳。只管に村歌社飮。那ぞ舜德堯仁を知らん。

【字義】◎太平治業云々とは太平善政治業の極を云つたので其の極に至つては全く象無しで太平と云ふ語も善政と云ふ語も不用である、太平とも善政とも知らぬ之を象無しと云ふ、通鑑綱目の牛僧孺が唐の文宗に上つた語に太平無象と云ふ文字がある。◎野老家風云云とは野人禮に嫺はずと云つた樣な田老村夫の淳朴なる風俗の意である、至淳は至極淳朴で有つて毫しも身を飾り心に僞ると云ふことの無い樣子。◎村歌社飮とは村社の御祭りに濁酒を飮んで土地で風流りの格にも調にも合はぬ俗謠を歌ふ有樣で太平の極を具體的に云つた。◎舜德堯仁とは堯舜の仁德と云ふも同じ、堯帝舜帝は支那では三皇五帝時代と云つて人間政治の最も理想的なりし時世として尊敬されてある、堯帝舜帝の仁政德化は太平の極で有つて、人民は鼓腹擊壤して帝力何ぞ我に在らんやと歌つた程で有つた。本頌の四句は太平の治、堯舜仁德の極を土臺にして作られたるものであるから今左に史譚に記

されたる帝堯治天下の一條を拔萃して置かう。

帝堯治天下五十年、不知天下治歟不治歟、億兆願戴己歟、不願戴己歟、問左右不知、問外朝不知、問在野不知、乃微服游於康衢、聞童謠曰、立我蒸民、莫匪爾極、不識不知順帝之則、有老人含哺鼓腹擊壤而歌曰、日出而作日入而息、鑿井而飲、畊田而食、帝力何有於我哉。

と、以て其の意の有る所が知れるで有らう。

【要解】本頌四句二十四字は一貫して本則の意を稱讚したものである、强ひて分ければ初句では抽象的に太平の極致を云ひ、二句では太平の人を云ひ、三句で太平の境を云つて具體的に太平の型を示し、四句に至つて太平治業と舜德堯仁と呼應し、那知と無象とを照應せしめた所に妙がある。要は太平と云ふ既に太平を缺いてをる、堯仁も舜德も知らず、只管に村歌社飲する野老田媼の至淳なる家風、それが平和と不平とを超越してゐるでは有るまいか、これ實に青原の五臟六腑を抉出した天童の巧手である、味へば味ふほど妙味のある頌である。

【著語】□旄頭星現ずるや也た未だしや。旄頭星と云ふ星は西南に在て國亂を司るといふ、彗星のことで有らう、支那の迷信である、天童が太平無象などと云ふが何だか徐々亂世の兆に向つたやうである、太平と云ふことが又一つの病を爲すぞと氣を付けたのである。□爭でか如かん我が這裏、田を種ゑ飯を摶めて喫せんには。此の語は第十二則の本則に脩山主と地藏の桂琛禪師との問答と成つて出て居る、脩山主の商量浩々地に對して地藏の云はれた語である。今は野老至淳の樣子に贊成し、兼ねて萬松の氣焰を示された、我が這裏敢へて他の點檢を要せぬ、萬松が出息入息の心田は自ら耕し自ら種ゆ、至淳と云ふも尙及ぶまいぞ。□窮鬼子快活不徹なり。窮鬼子とは貧乏人、快活とは御馳走に預つて滿腹大喜び、不徹は大いに徹するの意で反語、此の上なしと云ふも同じである。太平の餘澤で鱈腹飲んだり食つたりして貧乏人も此の上なしの滿足ぢや。然し萬松は元來長者子である。大地に飢人ありや、青原こそ却つて窮鬼子らしい、何か求むる所が有るものゝ樣である。□始めて忠孝を成す。堯舜の仁德を知らぬ民こそ眞の忠臣である、父母の恩德を忘るゝ子こそ眞の孝子である、國亂れて忠臣現はれ、家貧うして孝子出づと云ふ樣なのは眞の忠臣孝子では無いと天童に贊成の意を表した。

第六則　馬祖白黑

示衆云。開口不得時無舌人解語。擡脚不起處無足人解行。若也落他彀中死在句下豈有自由分。四山相逼時如何透脫。

【讀方】衆に示して云く、口を開き得ざる時無舌の人語ることを解す、脚を擡げ起さゞる處無足の人行くことを解す。若し也た他の彀中に落ち句下に死在せば、豈自由の分あらんや、四山相逼る時

如何んが透脱せん。

【字義】◎無舌人解語、無足人解行の二句は唇や舌を假らねば物は言へぬもの、脚を擡げねば往來は出來ぬものと云ふ吾人の舊習慣を打破して、舌頭に骨無く、脚下線絶ゆる所の自由自在なる說默去來を示した語である。◎殼中とは唐の太宗の語に「天下の英雄吾が殼中に入る」と云ふがある、註に「殼は弓を張つて引く備へなり、猶ほ圈套に落つと言はんが如し」とあるから罠に落ちたとか陷穽にはまり込んだとか云ふ意味に見てよからう、或は殼は背に負ふ所の矢行李だと云ふ人もある。何れにしても其の圈内に落ちて動きのとれぬことである。◎四山とは涅槃經に「我れ四山を說く、即ち是れ衆生の生老病死なり」とある。即ち人生の四句と云はるゝ生老病死の四つ、山は切迫逼惱の義で意を強める爲に添へた語である。◎透脱とは解脱と云ふに同じ、拘束監禁の繫縛を透り脱ける意である。

【要解】無舌人のゆゑに口を開くことが出來ぬが開口以前既に一句を道破し了つてある、無足人のゆゑに脚を擡げることは出來ぬが擡脚以前既に天下を往來し了つてある、これ衲僧家の茶飯である、若しも他人の陷穽に落ち込んで往來の自由を斷き、他の言句を死守して說默の自在を缺いてゐたでは怎うして人々分上の活計を全うすることが出來やうぞ、今にも生老病死の四山が一時に我が身邊に押し寄せ來つた時には何と此處を切り拔けたもので有らう、要は說默の相に關からず去來の相に涉らざる所の自在なる出身の活路を得せしめやうとの落草である。四山八海一時に相逼る時、人人自身に轉身の活路を開いて置かぬことには何の要にも立たぬ、馬祖の藏頭白、海頭黑の公案、正に其の機關を示すもの、就いて參究するが好い。

舉。僧問馬大師。離四句絕百非。請師直指某甲西來意。 若識這僧問頭省人多少心力 大師云。我今日勞倦。不能爲汝說。 已有紅中月 問取智藏去。 更添帆上風 僧問藏。 却受人處分 藏云。何不問和尚。 好本多同 僧云。和尚教來問。 可憐靈利 藏云。我今日頭痛。不能爲汝說。問取海兄去。 我不可作馬師弟子不得也 僧問海。 苦瓠連根苦 海云。我到這裏却不會。 甜瓜徹蒂甜 僧舉似大師。 索取草鞋錢 大師云。藏頭白、海頭黑。 更參三十年

【讀方】舉す、僧、馬大師に問ふ、四句を離れ百非を絕して請ふ師某甲に西來意を直指せよ。大師云く、我れ今日勞倦す、汝か爲に說くこと能はず、智藏に問取し去れ。僧、藏に問ふ、藏云く、何ぞ和尚に問はざる。僧云く、和尚敎へ來つて問はしむ。藏云く、今日頭痛す、汝が爲に說くこと能はず、海兄に問取し去れ。僧、海に問ふ。海云く、我れ這裏に到つて不會。僧、大師に擧示す。大師云く、藏頭白、海頭黑。

【字義】◎馬大師、智藏、海兄の法系圖を略示すれば左の如くである。

```
五祖弘忍──六祖慧能┬青原行思──石頭希遷
                  └南嶽懷讓──馬祖道一┬百丈懷海──黄檗希運──臨濟義玄
                                      ├西堂智藏
                                      ├南泉普願┬趙州從諗
                                      │        └長沙景岑
                                      └大梅法常──天龍──倶胝
```

馬大師とは即ち南嶽の嫡嗣馬祖道一禪師のことである、百丈、智藏、南泉等皆其の門下に出づ、黄檗云く馬祖八十餘員の大善知識を出すと、江西に居られた所からして江西の馬祖とも稱してをる、漢州什邡の人、姓は馬氏、容貌甚だ奇異で有つたと云ふ、幼歳の時資州の唐和尙に落髮し渝州の圓律師に受具し唐の玄宗皇帝開元年中に傳法院で專ら坐禪を修してをられた、時に讓禪師に逢ふ、同參の者九人有つたけれ共唯り馬祖のみ心印を密受し得たと云はれてある、德宗皇帝貞元四戊辰年(皇紀一四四八)二月四日示寂、元和年中に憲宗皇帝、大寂禪師と追謚せられた。智藏は西堂智藏禪師は虔州虔化の人、姓は寥氏、八歳にして佛迹巖に往いて大寂禪師に參禮し、百丈海禪師と同く入室して印記を承けられたのである、元和九甲午年(皇紀一四七四)四月八月歸寂、壽八十。憲宗謚して大宣敎禪師と云ふ。師の馬祖評して「經は藏に入る」と云はれてあるから餘程敎相の學に通じてをられたものと見える。海兄は即ち百丈懷海禪師のことである、百丈は智藏の法兄であるから智藏呼んで海兄と云つたのである。洪州の百丈山に在て接化せらる、福州長樂の人、丱歳離塵して三學該ね綜る、大寂禪師命じて化を南康に闡かしめらる、智藏と同時入室、二師角立と稱せられた。唐の元和九甲午年(皇紀一四七四)正月十七日歸寂、壽九十五。後八年を過ぎて長慶元年穆宗勅して大智禪師と諡す。師の馬祖評して「禪は海に歸すと」云ふ、第八則に百丈野狐の話があるから併せて其の禪機を看るが可い。◎離四句絕百非とは一異有無の四句。百非は四句の各々に四句を具す、之を三世に約し、已起未起の二に約し、更に根本の四を加へて一百となる、數字で表せば

$$\{(4\times4)\times3\}\times2+4=100$$

要するに四句百非は外道論爭の四つの範疇で有つて其の四句を根本として三世に涉り已起未起に及ぼし言端語端所謂場合を盡したものである。離、絕の二字は言語の及ばざる所、下語動舌を離れたる所の意である。◎西來意とは祖師西來意の略である、祖師とは達磨大師のことで西來意は西の印度から東の震旦國に遙々來られたと云ふ其の達磨大師の意趣如何と云ふ問題である。祖師西來意の問話は第四十七則趙州の柏樹子、第八十則翠微の過版、及び此の本則と都合三則出てをる、唐宋の頃盛んに流行した問題である、當時の參禪者には多く經律論の三藏に依つて立つ所の敎と、敎外別傳不立文字を標榜する禪と隔別の見を抱き、敎意は措いて問はず祖意の端的を直下に承當し度いと云ふ風が行はれたものと見えて語錄の上に斯る問話が非常に多く現はれてゐるのである。◎藏頭白、海頭黑とは智藏の頭髮は白くて懷海のそれは黑いと云ふ唯其れ丈けのことである、史實を云へば百丈懷海の方が智藏よりも十五歳も年長である、若し髮の黑白が年の老少に比例するものとせば此の

語は相反してゐる。然るに古來の提唱に智藏は年老だから頭が白い、百丈は若いから髮が黒い、別に何も珍奇ことは無いと云ふ樣に云はれてある、頭髮の黒白は兎も角として年齡と史實だけは差つてゐると云ふことを知らねばならぬ、宗意に大した關係は無いけれども誤りに史乘の事實を無視するのは善くないことと思ふ。

【要解】一僧有つて馬大師に參問して云ふには四句百非等の文字語言を總に超越離絶して某甲が爲に達磨西來の祖意を直下に指示して頂き度いとの請ひである、すると馬祖は老僧今日大いに勞倦てゐてどうも祖意を說いて聽かせる譯にいかんで弟子の智藏の所に行つて問うて見よと云はれた。此の僧智藏の許に至つて前の如く質問すると智藏は何故師匠馬祖に訊ね無いのかとの反問す、僧は馬祖の所へ行つたらば貴僧に聽けと敎はつて來たのであると答へる、智藏私も今日は頭痛がして迚も貴公に祖意を委しく說いてはをれぬで兄貴の懷海和尚に行つて問うて吳れと云ふ。僧、復、百丈に行つて聞くと百丈は私は未だ其の邊の事は一向に了會て居ないと云ふ答へで有つた。僧は仕方なしに元の馬大師に歸つて有りし始末を訴へると馬大師は智藏の頭が白くて懷海の頭が黒かつたらうにと云はれた。要は此の僧敎外別傳ときいて何でも文字語言の及ばぬ所に祖意と云ふものが轉がつてゐる樣に思つて方々尋ね回つた、何ぞ知らん馬祖智藏百丈ともに脚跟下に向つて懇切に指示してゐらるゝのである。此の僧は惜しいことに其の手許が見てとれ無かつたのである、此の公案は參學の衲侶をして四句百非中に在つて、四句百非を透脫し三界の中に在つて三界を出離するの伎倆を得せしめ、眞個に言語道斷とは卽ち言語これなりと云ふ所の祖師意を知らしめやうとするのである。

【著語】□若し這の僧の問頭を知らば人の多少の心力を省かん。　這の僧の問頭、離四句絶百非、是れ什麽ぞと返照して見るならば敢へて他の心力を借るの要は無からう、問ひ將ち來つた問頭の宗旨直に是れ西來意である、他に求めて什麽かせん、脚下を照顧ればよいのぢや。□已に缸中の月あり。

己が乘つて居る缸中に月は皎々と差し込んでをる、些しも他に求むる要は無い、四維上下盡界一枚の祖師の光明、否、自己光明の全身に御氣が付かれぬか。□更に帆上の風を添ふ。　前の語と二句一聯、月光の明々たるを乘せた儘追手の風で船は徐々として水上を往く、何とも說くことは不可能。帆上の風は馬祖の心切ぢや、西來意とて外には有るまい。□却つて人の處分を受く。　人の指圖に付いて回る鈍漢ぢや。他人樣から指揮せられてヤツと呼吸してをる樣なお目出度さである。□好本多同。　智藏は確に馬祖の法嗣だ、馬大師の手本を習つた程有つて筆法が好く似てをる、師資二面なき樣子である。□可憐靈利。　萬松の揶揄である、頗る靈利々々、敎へられた儘に參りましたと云ふ、坊やは利巧だ、扨も記憶の好い兒だよ。自分の和尙に些つとも氣が付かぬ、可愛相な者だと萬松が同情の涙である。□我れ馬師の弟子と作り得ずんばある可からず。　馬師と智公とは如何にも親嫡である、言ふ所少しも異りが無い、全く異口同音の體である。萬松も馬祖の直弟になり度い者だが頭痛や疝氣は眞平御免で御座る。□苦瓠は根に連つて苦し。　這の僧どこ迄鈍なのか分が解らぬ、苦瓠は根から葉まで苦い樣なものだ。□甜瓜は蔕に徹して甜し。　前句と對である、

甜瓜は皮でも蔕でも悉皆甜い、馬祖の勞倦も智藏の頭痛も百丈の不會も皆一等の手段である、何と云つても其れが西來意の面目其の儘ぢや。口草鞋錢を索取せよ。諸方歷遊で大分路用も要つたで有らう、旅費は馬大師に請求して出して貰つたら可からう、其の實は何を狼狽回つて歩く、自分の脚下に氣が付かぬか、ハテサテ慨然の這の僧哉と萬松の徹悃ぢや。口更に參せよ三十年。藏頭白、海頭黑の一句容易に領得し難いであらう、三五十年も一つウンと實參實究するがよい、三十年後一息截斷の時節御氣の付くことも有らう、三十年と云つたとて指折り數へて待つて居ることで無い、實參の外に三十年が有るのでは無からう、當處一念を離れて三五十年は無いので有るから暫時も修行を忽諸にしてはならぬぞよ。

頌云。藥之作病（胡人飲乳、返怪良醫）　鑒乎前聖（師多脈亂）　病之作醫（以藥下藥、以毒去毒）　必也其誰（莫是天童麼）　白頭黑頭兮克家之子（一箸燒就）　有句無句兮截流之機（更使潙山笑轉新）　堂堂坐斷舌頭路（一死不再活）　應笑毗耶老古錐（只得一橛）

【讀方】藥の病と作る、前聖に鑒む。病の醫と作る、必ずや其れ誰ぞ。白頭黑頭兮、克家の子。有句無句兮、截流の機。堂堂として坐斷す舌頭の路。應に笑ふべし毗耶の老古錐。

【字義】◎前聖とは般若波羅蜜が一種の病となつて東方に奔走した常啼菩薩や、華嚴法界の法門を病として南方五十三の善知識を歷訪した善財童子などを指したのであらう、聖は十聖三賢などと云ふ聖で、十地上の菩薩位の處を云ふ。◎克家之子とは易の蒙の九二に「蒙を包ぬるに吉なり、婦を納るゝに吉なり、子、家を克す」とあるから家を再興する程の孝子と云ふ意である。◎有句、無句とは一異有無の四句中の二句を擧げたのであるが其れには古則の因緣がある、本錄第八十七則疎山有無の公案を見れば解る、疎山が有句無句は藤の樹に倚るが如しと、忽然として樹倒るれば藤枯る、句何れの處にか歸すと云ふ問所に對して潙山呵呵大笑すとある、著語も亦此の意から出てをる。◎截流之機とは衆流を截斷するの機輪と云ふ程の意である、流は流注識と云つて微細に生滅する妄分別のことで四句百非等の種々無量の分別意識を衆流と云つたのである、截斷は其の根柢を斷ち截ること、機輪は宗師家の活機用、目にも止らぬ樣子である。◎堂堂とは容貌の盛なる貌。◎坐斷舌頭路とは天下人の舌の根を斷斬つて有とも無とも云はれぬ所に坐住せしむ、坐は其の儘の意。此の一語は無舌人の解語と云ふと同じである。◎毗耶とは印度の毗舍離國毗耶離城の略で維摩（具さには維摩詰）又は維摩羅雞利帝(Vimalakīrti)と云ふ居士の住せられた所である、今は居所の名を以て其の人を表はしたのである、維摩は毗耶に口を杜づと云つて最後文殊と入不二の法門を爭つて多辯の維摩も終に一默を守つたと云ふ故事がある。維摩經の問疾品、近くは本錄の第四十八則にも出てをるから看るがよい。◎老古錐とは錐は銳利なる尖を有してゐる者であるが古く成れば角が磨れて圓くなる、それからして圭角のとれた老熟圓滿の宗師を尊敬して此の語を用ゐる樣になつた。

【要解】 本頌六句四十八字の中初めの二句十六字は本則の要領を頌し、中の二句十八字は智藏、懷海兩人の機用を歌ひ、最後の二句十四字は馬大師の應對を頌したものである。藥が病と成つた前例は古聖にも有ることだが、病を以て醫藥としたと云ふ事は未だ聞かざる所である、誰か有るで有らうか、必ずや本則の馬祖父子を措いて外にはあるまい、智藏百丈、白頭黑頭の兩人は有言無言の衆流を一時に截斷するの活機用を具してをる、馬祖家を克す所の孝子と謂つべきである、師匠の馬大師は威風堂々悉く天下人の舌頭を坐斷して而も能く哆々和々、無言說の說法をした、それから見ると毗耶離城に口を杜ぢた維摩などは融道のきかぬ男、一默を守つたなどは笑止千萬と云はねばならぬ、要は本則を讚歎し、且つ馬祖父子三人の機用を賞揚して西來意の四句百非、有言無言に拘はざるを提示せられた。維摩の默を貶したのは馬祖を卓上んが爲に用ゐた天童の手腕で有つて維摩に咎の無いことは云ふまでも有るまい。

【著語】 口胡人乳を飮んで返つて良醫を怪しむ。　胡人は中華の人で無い、南蠻北狄の人間、百姓に良藥だと云つて牛乳を呑ませれば却つて嘔吐して終ふ、何ぞ毒でも呑ませられた樣に思つてお醫者樣を怪しむのである、名醫は自由自在で藥を變じて毒ともする、毒を以て藥ともする、全體藥とか毒とか云ふものは一定した品物では無い、用ゐ方一つである、此の句は『涅槃經』にある故事に據つてをるが今は略しておく。口師多ければ脈亂る。　脈に變りは無いけれど餘り醫師か多いと色々な分別が生じて來て、脈が亂れた樣に思ふのである、醫者計り大勢賴まずと自分で自分の脈を見よ。

口藥を以て藥を下し、毒を以て毒を去る。　藥と毒とは用ゐ次第であるが、下すと去るとが肝心である、徹底藥毒を下すに非んば健康の回復は出來ぬ、この療法を心得た馬祖父子は道がに古今卓絕の名醫である。口是れ天童なること莫らんや。　其れ誰ぞと云ふ天童宏智和尙、尊公こそ眞、其の人であらう、お次は此の萬松奴かな、決して馬祖の親子にのみ讓つておくべきことでは無い。口一窰に燒き就す。　一つ窰で燒かれた陶器だと見えて皆同じ形式である、白頭も黑頭も皆馬師の一つ窰で陶冶られたものだで一手に出來上つたのだ、諸人も馬祖の窰に入つて燒かれるがよからうぞ。口更に潙山をして笑轉た新たならしむ。　天童又疎山の樣に有句無句を持ら出して再び潙山の呵々大笑を買うまいぞ、有無の小河を截ち斷れば衆流も情波も有りはせぬ、潙山は問はず、人々自ら呵々大笑の時節を得よ。口一死再活せず。　舌を斷つて終へば死する、死んだら再活はせまいぞ、イヤ再生せぬ迄に死にきるがよい、大死人で無くては說默自在の活機輪は轉せられまいよ。口只一橛を得たり。　楔は誤り橛に作るべし、橛はくさびである、說默自在にして初めて兩橛を得たと云ふもの、維摩が一默を守つたは僅に只一橛を得たる者と云はねばならぬ、天童が笑ふのも無理は無い、宗說兩般あることを知らず只其の一般を守る、何れにしても隻具者である。萬松も天童の意を知つて維摩を貶してゐる、維摩こそ好い面の皮だ、然し維摩に用事は無い、箭尻がどうやら此方に向いてゐさうだ、餘程氣つけないと當方が危險よ。

第七則 藥山陞座

示衆云。眼耳鼻舌各有一能、眉毛在上。士農工商各歸一務、拙者常閑。本分宗師如何施設。

【讀方】 衆に示して云く、眼耳鼻舌各一能有つて眉毛は上に在り。士農工商各一務に歸して拙者常に閑なり、本分の宗師如何んが施設せん。

【字義】 ◎一能、一務の二語は一の字に力を入れて見ればよい、能は能力、功能、可能で有つて眼ならば色を見ると云ふ一つだけの能力があると云ふ意。務は職務、作務、本務などと云つて士ならば劒を執つて國を守ると云ふ一つの務めが有ると云ふ意。◎眉毛在上、拙者常閑の二語は無爲無能の如くにして初めて萬事を統一し而も常に閑日月あることを示したのである。眉は一能無くして眼耳鼻舌の上に横臥し、拙者が一務無くして士農工商の鬧市裏に在つて甚だ閑靜なる消息、全くこの通りであると云ふ例證、拙者は一人稱の代名詞にあらず、一能一務に拘はらぬ者の意である。◎本分宗師とは前にある拙者のことである、有能無能、有爲無爲に關せずして而も能く之を統一するを本分の宗師家となす。◎施設とは入理深談と相對する門庭施設であつて化他門に屬す、法を施し供養を設くる意で今日の語で云へば布敎傳道である。

【要解】 人の感官から見ても眼、耳、鼻、舌は各色、聲、香、味を識るところの一能を具へてをる、然るに眉毛計りは何の功能も無くして其の最上位を占めて擅に安臥でゐる、人の階級から見ても士、農、工、商は各忠、勞、用、利の一職務を努めてをる。然るに拙者計りは常に安閑、爲すこと無き日暮しを續けてをる。今眉毛の如く拙者の如く、行住坐臥の四威儀すら未だ分たれぬ本來面目其の儘の宗師家、その人の布敎傳道振りは果して如何なもので有らう、いざ本則に就いて拜聽するがよい。要を云へば、人多く有爲の功業を貴べども是れ一の小刀細工に過ぎぬ、無爲無作の境界、能く天地を包括し宇宙を總攬するのである。本則の藥山陞座は濕唇動舌に拘はる有爲の說法に非ずして陞座下座、歸方丈、不垂一言の現身其の儘なる無爲の說法である、これが本分宗師家の施設である、人人自己の藥山老僧に向つて拜聽したらばよからう、と云ふのが萬松示衆の的意である。

擧。藥山久不陞座。（動不如靜） 院主白云。大衆久思示誨。請和尚爲衆說法。（便重不便輕） 山令打鐘。衆方集。（聚頭作相那事悠悠） 山陞座良久便下座歸方丈。（一場話覇） 主隨後問。和尚適來許爲衆說法。云何不垂一言。（大海若知足百川應倒流） 山云。經有經師。論有論師。爭怪得老僧。（可惜龍頭蛇尾）

【讀方】 擧す。藥山久しく陞座せず。院主白して云く、大衆久しく示誨を思ふ、請ふ和尚、衆の爲

に説法し玉へ。山、鐘を打せしむ、衆方に集る。山陞座、良久、便ち下座して方丈に歸る。主、後に隨つて問ふ、和尚適來、衆の爲に説法せんことを許す、云何んぞ一言を垂れざる。山云く、經に經師あり、論に論師あり、爭でか老僧を怪み得ん。

【字義】◎藥山とは如來正傳第三十五代藥山惟儼禪師のことで有つて即ち石頭希遷大師の法嗣、青原行思禪師の孫である。絳州の人、姓は韓氏、十七歳の時潮陽の西山慧照禪師に依つて出家し、唐の大暦八癸丑年(皇紀一四三三)衡嶽の希操律師に納戒して即ち曰く、大丈夫當に法を離れて自淨なるべし、豈屑々の事を能くして布巾に細行せんやと、即ち石頭に謁して密に玄旨を領く。大和八甲寅年(皇紀一四九四)二月順世するに臨んで法堂倒る法堂倒ると叫ばる、大衆慌て丶、柱を持し之を撐へんとす、師手を擧げて、子我が意を會せずと云つて即ち寂を告ぐ、壽八十有四、弘道大師と謚せられた。◎陞座とは第一則に出づ。◎院主とは住持を補佐して寺務を監督する役僧の主席である、現今は監寺と云ふ、本山では監院と云つてをる。◎大衆とは清淨大海衆の略で四來參學の雲衲が一師家の門下に集合して和泥合水、能く心源を澄淨ならしむること恰も四河等く大海に入つて同一鹹味となるが如くであると云ふ意から尊敬して云ふ語となつた、俗に云へば多くの門下生と云ふと同じである。◎示誨とは垂示敎誨で法益のこと。◎打鐘とは陞座説法を號報する告鐘である、打は打鳴にて鳴すこと、今日でも禪門では是等の儀式中々嚴重に行はれてゐる。◎良久とは良久うすと云ふことで二三秒間沈默してゐる其の短かい時間を言ひ現す語である。◎方丈とは寺院住職の居室の名である、出所は維摩居士の病を示した室が縱橫十笏で有つたと云ふに據る、日本の茶室を四疊半に作り壁を囘らすのも、是れに緣由したものである。◎和尚とは梵音の轉訛で原語は鄔波遮迦(Upādhyā)漢には親敎師又は力生と譯してある、受戒傳法の師の意であるが中世からは高僧の尊稱に用ゐられ近頃に至つては傳法以上の僧侶の一の位階となつた。和尚の上に大和尚などと云ふのもある。今は藥山禪師の尊稱に用ゐたのである。◎適來とは韻學集成に「適來は尙ほ爾來の如し」とある、久しぶりでと云ふ程の意。◎經師、論師とは經律論の三藏學者中、經と論との二師を擧げたので律には律師ありの一語が藏れてある、總じて敎相文字の部分的智識を有する學者を云ふ。◎老僧とは老衰した僧侶の略で藥山禪師自身の代名詞であるが、此の老僧の二字は本則の字眼、藥山の立脚地であるからよく注意して看ねばならぬ。

【要解】文意は極めて簡單で讀んで字の如く明瞭である。藥山の不陞座、陞座良久、下座歸方丈と、院主の云何不垂一言と、山云く經に經師あり論に論師あり爭でか老僧を怪み得ん等の是の數語に著眼せねばならぬ。要するに藥山の陞座も不陞座も説法も不垂一言も老僧現身の活説法なるを會得すればよい、老僧の行住坐臥進止動靜盡く藥山全身の法力である、經師が經を説き論師が論を説くが如きは士農工商各々一務に歸し眼耳鼻舌各々一能あると同じく、僅かに其の一分を守るに過ぎぬ、老僧は拙者の常に閑なる如く、而も眉毛の上位に安臥するが如き境界である、それを院主も衆僧も看取去る丈けの明眼を具て居なかつたから、不垂一言の老僧を怪訝に思つたのである、眞個の老僧を識

得するのが本則の要處である。

【著語】□動は靜に如かず。　不陞座は靜である、陞座せず說法せずがよい、動ずれば窠臼を成す惧れがある、然し藥山の動靜は了然不生で有つて功罪は無い。□重に便して輕に便せず。　藥山の久しく陞座せぬは上々の機の重きに便りして中下機の輕には便りせぬ積りで御座るかと云ふ樣に藥山にかけて見るのと、今一つは院主に對して、示誨を思ふ所の大衆の重罪に荷擔して不陞座なる藥山の輕罪に反對の仕打をするからには院主も大衆も同罪であるぞと云ふ樣に見るのと二つの見方がある、何方でも見る人の自由だが山僧は後者をとり度い。□頭を聚め相を作して那事ぞ悠々たる。　拾得の語を假りた、西瓜船の著いた樣にゴロ〳〵と顱頭を聚めて殊勝相な風をしてゐるが大切な主人公は悠々隔つて丸つきりお不在では無いか、藥山言說の示誨を蒙るよりは人々の藥山に參見するがよい。□一場の話霸。　霸は刀の柄、把捉處の意、良久、下座、歸方丈は面白い說法だ、一場の話の材料に持て來いぢや、言說に上らぬ現身說法、什麼誰とか語らん。□大海若し足ること知らば百川應に倒流すべし。　大海は百川の水一時に流れ込んでも餘りはせぬ、院主や大衆も不垂一言の說法でまだ足ることを知らぬそうな、若し知り得たならば禪海に一大波瀾を起したらうに。□惜むべし龍頭蛇尾なることを。　良久下座は立派で有つたが爭怪得老僧などと愚癡を溢すは醜もないぞ、惜しい事に藥山今日龍頭蛇尾に終つたらしい。然し藥山の說法は頭正尾正、龍蛇に高下をつけまいぞ、說默自在の家風を看て取るがよい。

頌云。癡兒刻意止啼錢（堪作何用）　良駟追風顧影鞭（畢起便行）　雲掃長空巢月鶴（樹下底一場懡㦬）　寒清入骨不成眠（開眼作夢）

【讀方】癡兒、意を刻む止啼錢、良駟追風、影鞭を顧みる。雲、長空を掃ふとき月に巢くふ鶴、寒清、骨に入つて眠りを成さず。

【字義】◎癡兒刻意云云の句は涅槃經嬰兒行品の文に據る、曰く「彼の嬰兒の如き啼哭の時父母卽ち楊葉の黃なるを以て之に語げて曰く啼くこと勿れ啼くこと勿れ、汝に金を授與へんと、嬰兒は見已つて眞金の想を生じ便ち止んで啼かず、然れども此の楊葉は實に眞金に非ず」と、嬰兒は愚癡兒童である、刻意は工匠が木を刻むのに苦ろに心を用ゐる意で母親が兒を思うていろ〳〵心配することである。◎良駟追風云云の句は阿含經の四馬の喩と外道問佛の話とを併せ持ち込んだ、前者は「佛比丘に告ぐ、四馬あり一は鞭影を見て便ち驚悚す、二は毛に觸れて卽ち驚く、三は肉に觸れて始めて驚く、四は骨に徹して方に覺る」と、後者は「外道佛に問ふ、有言を問はず無言を問はず、世尊良久す、外道便ち作禮して云く、世尊大慈吾が迷雲を開いて我をして得入せしむと、外道去つて後阿難佛に問ふ、外道何の道理を見て得入と曰ふ、佛の言く世の良馬の鞭影を見て行くが如し」と、本則の良久に緣を持つて駟馬を反語に用ゐて大衆を諷したのである。追風は秦の始皇帝名馬七頭を有し其の一を追風と云うたとある。駿馬の快速なるに喩ひた語である、影鞭は鞭影に同じ、韻字の都

合で逆に置く。◎巢月鶴とは月光を浴びてゐる松が枝に、巢ごもりしてゐる鶴を云ふ。

【要解】　本頌の七言四句廿八字中、第一句は院主が衆に代つて說法を請する意を頌し、第二句は院主も大衆も鶩鈍にして無眼子なることを頌し、第三句第四句に藥山の境界の定慧圓明なるを讚歎した。要言すれば文字語言は啼く兒に與ふる黃葉である、それとも知らずに院主は苦心してそれを强請してゐる。藥山良久の現身說法に作禮する程の駿馬が一人も居なかつたのは惜しいことである、良久した藥山の境界は散亂の迷雲を拂うて一輪長空に明かに昏沈の惰眠に落ちざること孤鶴の月に巢くふに似て、定慧圓明、寒淸骨に徹する老僧の風格を偲ばしめた。この一頌は天童得意の手腕を以て文學的に敍し去つた所に妙味がある。

【著語】　□何の用をか作すに堪へん。　止啼の黃葉など貰つて何になるか、問法も必要だが言を承けては須らく宗を會すべきであるぞ。□踢起して便ち行く。　踢は足を以て物を蹋ることである、萬松などには鞭影などを顧みるの隙は無い、陞座も下座も良久も歸方丈も眞金も黃葉も鞭も影も有象無象悉皆蹴倒して行く樣、恰かも好し天馬の空に翔るが如き勢ひがある。□樹下底一場の懡㦬。懡㦬は印度の俗語で恥辱と云ふ意味だそうである、宏智は長空千尺の梢に巢くふなどと云ふが餘り高泊り過ぎはせまいか、女の木登りと同じで下から見られたら隨分大恥かきだらうよ、天童の向上向下自由自在は百も承知であるが、萬松一寸向上の死漢を誡めたのである。□眼を開いて夢を爲す。眠を成さずと云ふのも既に寢語ではあるまいか、泥醉者が未だ〳〵醉はぬと云つて威張るのと同じだ、眼を開きながら夢を見てをるらしい。覺夢一如の道理を體得し、語默一如、高下平等なる老鶴の神通を承當するがよいと云ふ萬松の提撕である。

第八則　百丈野狐

示衆云。記箇元字脚在心入地獄如箭射。一點野狐涎嚥下三十年吐不出。不是西天令嚴。只爲獃郎業重。曾有恨犯者麼。

【讀方】　衆に示して云く、箇の元字脚を記して心に在けば地獄に入ること箭を射るが如し。一點の野狐涎、嚥下すれば三十年吐不出、是れ西天の令嚴なるにあらず、只獃郎の業重きが爲なり、曾て恨犯の者有りや。

【字義】　◎記箇元字脚云々の句は趙州の語に「若し一箇の元字脚を記して心に在けば永刧野狐精と作らん」と云ふのがあり、又碧巖集第二十八則の頌の著語に「箇の元字脚を記得して心に在けば地獄に入こと箭の如し」と云ふ句がある、本則野狐の緣からして趙州の句を假り、語の調からして碧巖の句を假りて造語した者と見える。元字脚の說明に二種ある、一は元字の脚は儿で凡夫の凡の字である、凡情に墮すると云ふ意味にとる、一は元字の片方の脚は乙で有つて乙は一に通ずる、一心と云ふものに把束ると云ふ意にとる、二說の中前者は儿字と凡とは音も意も全で異う、附會極まる

說で有つて採るに足らぬ、後者は字形に於ても理に於ても然うで有らうと思はれる、碧巖の註にも「乙也心に在けば地獄に入ること箭の如し」と有り、又洞水和尚の『五位顯訣元字脚』にも註に「古今一字者乙也、是元之字脚也、故曰一字之義也」とある、之を以て見ても元字脚とは一の字なること明かである。句意は萬法歸一などと云ふことはあるが若しも心に一字を止めて之に固執する則んば弦を放れた箭の時を待たずして行くが如く、眞逆樣に地獄に墮つるぞと云ふ意である。◎地獄とは三惡道の一にして地下に在る牢獄の義、梵名を那落迦(Naraka)と云ひ、漢には無幸處と譯してある、八寒八熱百三十六地獄等の稱あれ共今は略しておく。此に云ふ地獄は苦倒迷想の意で妄情に驅られたる心的狀態を指した語である。◎一點野狐涎云々とは一滴でも野狐の涎を嚥み下すならば三十年間吐き通しに吐いてゐても其の涎は吐き出せないと云ふ句意である、これも前の句に對して本則の緣から出た造語である。本則の不落不昧に一點擬議を容れたならば五百生が間野狐身に墮して浮ぶ瀨があるまいぞよと云ふ位の語勢である、嚥下は呑み下すこと、三十年は大數に用ゐる語で更に參ぜよ三十年などと云ふに同じ。◎西天令とは西天は東土から印度を指して云ふ語、西の方天竺と云ふ意、佛陀の出生地と云ふより轉じて佛法とか佛敎とか云ふ語の代りに用ゐらる。令は律令とか法令とか云つて此では佛家の因果律と云ふ程の意。◎獃郎とは獃は癡の意で犬の幼くして未だ分別無き樣子に譬へたのである。郎は男子の通稱獃郎は癡人と云ふに同じ。◎業とは作業、業力の意、身口意の所作をすべて業と云ふ、例へば惡業と云へば煩惱が身口意の上に行爲として發動した場合を云ふのである、佛敎は無我說、無靈魂說にして而も輪廻轉生を說き、依正の二報を說くのは唯此の業感業相の相續說を主張するに出つて保持せらるゝのである、今は罪業惡業と云ふ意である。◎悞犯とは悞は誤と同じて誤り犯すこと。

【要解】　若し心に一字を記持して之に執すれば地獄に陷ること箭を射るよりも速疾である、又誤つて百丈野狐の垂涎一滴たりとも呑み下したが最期幾十年口漱ぐとも到底吐き出すことが出來ぬ、是れ佛法の律令が嚴しいからと云ふ譯では無くて癡人自身の罪業深重なるが爲である、天下の諸人にして誤つて此の罪業を犯せる者曾てこれありや奈何。要は一異の言句を記憶し之に拘泥すること勿れ、若し一字一點を記持執著せば迷情の終に盡くる時はないのである、是は佛法の過ならずして自身無智の罪である、人々に曾て犯したことがあるかどうか詮索して看るがよい、手近い所で百丈野狐の本則に就いて參究するがよからう。公案が禪の因果觀であるから垂示の語が凡て因果的關係の句調を帶びてをると云ふことに注意せねばならぬ。

擧。百丈上堂常有一老人聽法。隨衆散去（閑中取靜）一日不去（從來疑著這漢）丈乃問。立者何人（事不解交、客來須待）老人云。某甲於過去迦葉佛時。曾住此山（元是當家人）有學人問。大修行底人還落因果也無（但行好事、莫問前程）對佗

道。不落因果（一句合頭語、萬劫繫驢橛）墮野狐身五百生（儞道不落因果）今請和尚代一轉語（著甚來由）丈云。不昧因果（一坑埋却）老人於言下大悟（狐涎猶在）

【讀方】擧す。百丈上堂常に一老人あつて法を聽く、衆に隨つて散じ去る。一日去らず。丈乃ち問ふ、立つ者は何人ぞ。老人云く、某甲過去迦葉佛の時に於て曾て此の山に住す。學人有つて問ふ大修行底の人還つて因果に落つるや也た無しや。他に對へて道く、不落因果と、野狐身に墮すること五百生。今請ふ和尚一轉語を代れ。丈云く、不昧因果、老人言下に於て大悟す。

【字義】◎百丈の傳は第六則に出だす。◎上堂は陞座に同じ、萬松の評に講肆には之を陞座と謂ひ禪林には號して上堂と曰ふとあるが一概にも云はれ無い。◎過去迦葉佛時とは長阿含經に人壽三萬歲の時此の佛出世すとある、賢劫千佛の第三、過去七佛の第六、釋尊の前佛である。出世は婆羅門種で姓は迦葉、父を梵德、母を財主と云ひ波羅奈城に生れ尼拘樓陀樹下に成道すと云つてある。◎此山とは百丈山のことである。◎大修行底人とは大乘佛敎を如實に履踐する所の人と云ふ意で悟後に修行し證上に修行する飽參の客に名く、大修行人は因果修證等の法則に支配せられずして因果修證を一等に窮盡する底の出格の技倆を有して居る者である。◎不落因果とは因果に落ちずであるから撥無因果と云つて外道の見解であると云はれてをる、一應は其れでもよいが公案の上からは不落不昧に優劣を見ないのである。◎一轉語とは末路轉身の一句を道破する語である。◎不昧因果とは因果を昧さずであるから因果歷然にして私し無き容子である、因も實相果も實相の道理である、然し若し擬議分別に涉らば不落も不昧も墮野狐身となり、若し大修行底の人ならば不昧も不落も脫野狐身である、不落不昧の文字に拘泥してはならぬ。◎老人とは曾て過去迦葉佛の時此の百丈山に住したと云ふから之を先百丈と云ふ、今上堂して擧する所の大智禪師を今百丈と名ける、本則丈では極めて簡單で要領を得にくいから『天聖廣燈錄』に記してある因緣の全文を掲げることにしやう。

洪州百丈山大智禪師、諱懷海嗣馬祖、凡參次有一老人常隨衆聽法。大衆若退。老人亦退。忽一日不退。師遂問。面前立者復是何人。老人對曰某甲是非人也。於過去迦葉佛時曾住此山。因學人問大修行底人還落因果也無。某甲答他云不落因果。後五百生墮野狐身。今請和尚代一轉語。貴脫野狐身。遂問曰大修行底人還落因果也無。師云不昧因果。老人於言下大悟。作禮曰某甲已脫野狐身。住在山後。敢告和尚乞依亡僧事例。師令維那白椎告衆曰。食後送亡僧。大衆言議一衆皆安。涅槃堂又無病人。何故如是。食後只見師領衆至山後巖下以杖指出一死野狐。乃依法火葬。師至晚上堂擧前因緣。黃檗便問。古人錯祇對一轉語。墮五百生野狐身。轉々不錯令作箇什麼。師云近前來與伱道。檗遂近前與師一掌。師拍手笑云。將謂胡鬚赤更有赤鬚胡。

この因緣を事實と見るか假設と見るかは人々の識見に一任して置かう。從容錄の本則は百丈野狐の活公案として研究せねばならぬ。

【要解】百丈大智禪師上堂演法の座下に常に大衆と進退を共にして聽法する一老人が有つた、一日衆僧皆去るに老人のみ去らない、乃で百丈は其許に立つて居る者は何者ぞと問ふた、老人云く、私は過去迦葉佛の時代に此の百丈山に住持して居た者である、其節一人の學生が來て大修行底の人でも因果に落つる者なりや如何と云ふ質問をしてきたから私は因果に落ぬと對へた、此誤つた對をした爲に五百生が間野狐の毛袋を破りました、願くば今百丈大和尙吾が爲に一轉語を代られんことを、今百丈一轉語を代つて云く不昧因果、此の一言下に老人は大悟したと云ふのであるが、其の要所は不落因果と不昧因果とにある、この二語は畢竟因果一如當體脫落の眞實相なることを示してをるのである、百丈と老人とは同人なりや別人なりや、大修行底の人と墮野狐身とは一身なりや兩體なりや、是れ亦併せて參究すべき要點である。

【著語】□鬧中に靜を取る。此の老人大衆に一如して進退をしてゐるが同中自ら異辨の樣子が見える、尋常の老人ではあるまい、動靜の二相は了然として不生である。□從來這の漢を疑著す。この老人去來するかと思へば不來去、態度頗る曖昧である、注意的人物だ、大いに看視せねばならぬ、然し是れ眞個老人を知らざる者の言ふこと、三世諸佛も如去如來、歷代祖師も不去不來、何を疑著をしたものか、去來に二つはあるまいに。□事、交りを解せず、客來らば須らく待すべし。百丈は社交が拙い、御客樣はそれ相當に待遇せねばいかんよ、だが百丈と老人とは他人では無くて大分親しい中のやうでもある、それならば大した待遇もいるまい。□元是れ當家の人。果然元是れ當家の人である、朝朝ともに起き、夜夜倶に寢る所の老人、無始刧來吾が五蘊山中に住み込んで御座らしやつたのだ、不從他得、不從門入であるから去らない筈さ。□但好事を行じて前程を問ふこと莫れ。　大修行人には落だの不落だのと云ふ餘計な詮議は無用である、修する所に證は必ず現はるゝのである、因果は歷然として私なし、豫期してかゝるには及ばぬ、其の日其の日を謹愼でさへゆけば良果は期せずとも自然に來るものである。□一句合頭の語、萬刧の繫驢橛。合頭の語とは此の一句は好い語ぞと持て囃すことである、繫驢橛とは驢馬を繫ぐ橛と云ふことで繫縛せられて自由のきかぬ身を云ふ、不落因果の一語を聽いて是れは結構な語であると心得若し深く是れに固執するならば千生萬刧の繫驢橛と成つて動きがとれなくなる、語が惡いのでは無くて固執が病となるのである。□儞因果に落ちずと道ふ。　儞自ら因果に落ちずと道ひ乍ら因果に落ちてゐる、自家撞著では無いか、落不落の二見に墮した相が野狐身である、眞實大修行人なら落でも不落でも別に變りは無い筈さ、墮も脫も同一人よ。□甚の來由をか著けん。　代つて言ふべき一轉語も有るまいよ、墮も脫も八兩半斤、何の輕重があらうぞ、百丈一人演劇、面白くも無いこつた。□一坑に埋却せん。　不落だ不昧だ、先百丈だと樣々な道具立て許りするから間誤つくのである、打して一團となし、一坑に埋却したら雜作が無くてよからう。其の實不落と云つても不昧と云つても優劣は無い、是皆れ同一坑の消息さ。□狐涎猶ほ在り。　言下に大悟と云ふ、其の大悟こそ野狐の涎である、一點嚥下すれば三十年吐不出とは此の事、この事、メッタに嘗めまいぞ。迷悟一枚墮脫

一如の當體を會得させやうとての萬松が婆心である。

頌云。一尺水一丈波（幸自河清海晏）**五百生前不奈何**（早知今日事悔不慎當初）**不落不昧商量也**（頑涎不斷）**依然撞入葛藤窠**（纏腰繋脚）**阿呵呵**（堪笑堪悲）**會也麼**（按牛頭喫草）**若是儞灑灑落落**（如蟲禦木）**不妨我哆哆和和**（偶爾成文）**神歌社舞自成曲**（拍拍是令）**拍手其間唱哩囉**（細末將來）

【讀方】一尺の水、一丈の波。五百生前奈何ともせず。不落不昧、商量せり。依然として撞入す葛藤窠。阿呵呵、會すや也た麼しや、若し是れ儞、灑々落落たらば。我が哆哆和和を妨げず。神歌社舞自ら曲を成す。手を其の間に拍して哩囉を唱ふ。

【字義】◎商量とは第一則の本著に出づ。◎葛藤窠とは葛も藤も蔓の搦むもので搦んだら動きがとれ無い、禪では言句に附き纒うて動きのとれぬと云ふことを言句葛藤とか文字葛藤とか云つて賤しむのである。窠は窠臼とか窠窟とか云つて窮屈な所に落ち込んで不自由千萬の樣子。◎灑灑落落とは字典に灑は洗也、落は物無き貌とある、灑灑落落は不染汚の義で胸裡一點の念度なき樣子である。◎哆哆和和とは哆哆は行を學ぶの相、婆和は語を習ふの聲と法華釋籤に出てをる、涅槃經には嬰兒の五相を說く「云何が嬰兒行と名く、起住去來言語すること能はず、是を嬰兒行と名く、如來も亦爾りし」と、行に行相無く語に語相なき樣子を譬へた語である。◎哩囉とは呂律に合はぬ口拍子である、蠻聲を張り上げて手を拍ち乍らリリララと云ふ、其の音韻を假りた語と見える、禪家に用ゐる俗語。

【要解】初めの二句十三字で公案の大綱を述べ、次の二句十四字で學人の邪解を誡しめ、阿呵呵、會也麼の二句六字で天童出格の力量を見せ、終り四句二十八字で眞個參學の用意を提撕し佛法自然の妙曲を頌してある。文意をザット解すれば、不落因果と云ふ一尺の水が因と成つて五百生墮野狐身と云ふ一丈の波の果報を受けた、けれども唯心水一滴の起滅變異に過ぎぬ、五百生以前に立返つて見たならば墮も脫も不落も不昧も奈何ともせずで名け樣が無い、それを後學の徒が不落が惡いの不昧が善いのと口角泡を飛して商量に日も亦足らずである、憐れや言句葛藤の窠窟に墮ち込み、不落不昧の文字に縛せられてをる、吾れ天童宏智の如く五百生前不奈何と云ふ立場に居る者から見れば實に笑止千萬、呵呵大笑を禁ずること能はずである。諸人者よ、天童の笑聲が會得出來たかどうだ、會し樣を言つて聞かさうか、若し汝等にして有象無象を洗ひ去つて一點心地に思量分別の染汚を止めずんは哆哆和和有句無句、敢へて妨ぐる所で無い、恰かも農民儕が秋の日陽、村の社に寄り集うて調子の合はぬ舞ひ踊り、蠻聲張り上げ歌う所の俗謠も自然に何かの曲をなす、傍に見て居る老爺連も我れ知らず、手拍子を鳴らして囃し立てる樣なものである、不落と云はうが不昧と云はうが、墮脫因果と云はうが、元是れ灑々落々の有語無語なら、佛祖も不斷に說きづめぢや、本則の

先百丈と後百丈とは五百生前の知音であらう、五音六律をはね超えた、佛祖も知らぬ神歌社舞、斯く云ふ天童老人も何時しか手拍子打ち鳴らして哩哩囉囉哩哩囉囉と囃し度い樣である。

【著語】 □幸に自ら河清海晏。 河清とは黄河は千年に一度清むと云ふ古來の傳說がある、海晏は波風無くて靜平の樣子、天童は一尺の水一丈の波と云ふけれど萬松が見れば幸ひに自ら海晏河清で因の水清く、果の波靜かであつて天下は太平、因果だの水波だのと云ふ音沙汰は絕えて御座らぬ。□早く今日の事を知らば悔らくば當初を愼まざることを。 五百生前にソンナ樂々した所があるならば今日迄コンナ所に魔誤々々して居るでは無かつた、後悔千萬なことよ、然し五百生前とは何時のことで御座る、念々これ當初の一念ではあるまいか、されば念念刻刻愼むがよからうぞ。□頑涎斷せず。 不落不昧の商量もやはり野狐の涎さ、何國の際にも嘗め者があると見える、天童の御心配も道理だ道理だ。□腰を纏ひ脚を緻ふ。 葛藤が足腰に纏はつて自由がきかぬ、葛藤とは卽ち野狐の涎であらう、毒氣全身に浸み亙つて手も足も出ないのでは無いか。□笑ふに堪へたり悲むに堪へたり。 天童面白さうに大笑はして居るが其の笑聲裏には悲哀の涙が滿ちてゐる樣だ。□牛頭を按じて草を喫せしむ。 死んだ牛頭に草を喫へと云つたとて喫へる譯のもので無い、會すや會すやと天童は押し賣をするが誰も會する人は有るまい、佛法元來會不會に干かるべき筈の者では無いのだ。 □蟲の木を禦くが如し。□偶爾として文を成す。 この二句は一聯である、蟲喰ひの跡を見ると畫の樣な文字の樣な綺麗な彫刻模樣が現れてをる、蟲には何も了簡が有つてしたことでない。衲僧の一擧手一投足が縱し文字言句と現れても毫も分別を雜へ無い、これが本當に偶爾の文彩である。□拍拍是れ令。 滅多無性に手を拍つてゐるが自然と何かの調子に合つてをる樣だ、無調の曲だから却つて能く合するものと見える。□細末にし持ち來れ。 哩囉は語音の確と解らぬことであるが都人士には細末に音曲を分析して聞くもよからう。佛祖の發音に細末の意あり、仔細に參究するがよい、丸呑み込みでは消化しにくい、食傷せまいぞ。

第九則　南泉斬猫

示衆云。踢翻滄海大地塵飛。喝散白雲虛空粉碎。嚴行正令猶是半提。大用全彰如何施設。

【讀方】 衆に示して云く。 滄海を踢翻すれば大地塵の如くに飛び、白雲を喝散すれば虛空粉の如くに碎く。 嚴に正令を行ずるも猶ほ是れ半提、大用全く彰る。 如何んが施設せん。

【字義】 ◎踢翻滄海、喝散白雲云々とは碧巖に「大海を掀翻し須彌を踢倒し白雲を喝散し虛空を打破す」とある句勢を假る、踢翻は蹴倒し翻りかへすこと、喝散は氣を吹いて散亂せしむること、滄海は滄溟大海原、白雲は氣の磅礴として天地の間に凝れるもの、滄と白とは其の色を對にして用ゆ。◎正令は第二則の頌に出づ。◎半提とは全提に至らざるを云ふ、全提は第二則の頌に出づ。◎大用

とは大機大用と云つて衲僧家全分の活機用を云ふ。◎施設とは、第七則の垂示に出づ。

【要解】　滄海、大地、白雲、虛空の四は極めて大なることを云ひ、塵、粉の二は最も小なるものを云ふ、滄海を蹴翻せば大地も塵の如うに飛び、白雲を吹き散らせば大虛空も粉碎されて了う、これは大小相對を泯絕せる宗師家の大活現成である、本則で云へば南泉斬猫の手段である、この手際は大層嚴重に佛祖の正令を行じた樣であるが未だ以て十成とは云はれぬ、半提とでも云はうか、眞個の大機大用を全分顯彰せんには諸人の爲に何と方便施設したものであらう。暗に趙州を大用の人に擬してをる、南泉と趙州とに甲乙は無いけれども萬松爲人の手段として假に輕重を見たのである。要は大小輕重一段兩段、半提全彰の見解を双忘した所の眞實の衲僧の機用を知らしめんとするにある、其の適證を知り度くば本則に就いて看よと云ふのが萬松の庭訓である。

舉。南泉一日東西兩堂爭猫兒（人平不語、水平不流）南泉見遂提起云。道得即不斬（誰敢當鋒）衆無對（直待雨淋頭）泉斬却猫兒爲兩段（抽刀不入鞘）泉。復舉前話問趙州（再來不直半文）州便脫草鞋於頭上戴出（好與一刀兩段）泉云。子若在恰救得猫兒（心斜不覺口喎）

【讀方】　舉す。南泉一日、東西の兩堂、猫兒を爭ふ。南泉見て遂に提起して云く、道ひ得ば即ち斬らじ、衆對ふる無し。泉、猫兒を斬却して兩段と爲す、泉、復た前話を舉して趙州に問ふ、便ち草鞋を脫して頭上に戴いて出づ。泉云く、子若し在らば恰かも猫兒を救ひ得ん。

【字義】　◎南泉とは馬祖道一の法嗣、南泉山の普願禪師である、鄭州新鄭の人、姓は王氏、唐の至德二丁酉年（皇紀一四一七）に大隗山の大慧禪師に依つて業を受け、三十にして崇嶽に詣つて戒を受く、初め相部の舊章、毘尼の五篇七聚を究め講肆に出入して玄義に精通す、後、馬祖大寂禪師の室に投じ頓然として筌蹄を忘じ、遊戲三昧を得るに至つた、貞元十一乙亥年（皇紀一四五五）池陽に錫を留め自ら禪齋を構へて南泉山を下らざること、三十餘年、大和の初め陸亘大夫、弟子の禮を伸べ大いに玄綱を振ふ、此れより學徒數百に下らず、陸亘大夫、趙州の從諗、長沙の景岑等皆其の神足である、大和八甲寅年（皇紀一四九五）疾を示し十二月二十五日早晨門人に告げて曰く、星翳燈幻亦久し、吾れに去來ありと謂ふこと勿れと言ひ終つて寂す、壽八十七、臘五十八。◎東西兩堂とは禪堂の東西兩牀のことであるが實は今兩堂に坐する僧侶の事を云つてをるのである。僧堂は東に向つて建てられてあるから、前門を入つて直ぐ右に長く西北牀、左に長く東南牀がある、又後門の側には東北牀に對し右に西北牀、東南牀に對して左に西南牀がある、東西の兩堂が最も接近してゐるから這んな爭も起きたのである。◎爭猫兒とは猫兒に就いて佛性の有無を爭論したのである。◎趙州とは南泉の法嗣、趙州觀音院の從諗禪師である、曹州郝鄕の人、姓は郝氏、稚童の時本州の扈通院に剃髮し未だ納戒せざるに池陽に抵つて南泉に參ず、師の提撕に依つて契悟する處あり、崇

小野直太郎ノ藏

嶽の瑠璃壇に往いて納戒し再び南泉に還る、此れより道化大いに北地に振ふ、衆の請に應じて趙州の觀音院に住す、機鋒俊烈其の玄言天下に布き、時人趙州の門風を聞き皆悚然として信伏するに至る、唐の乾寧四丁巳年（皇紀一五五七）十一月二日右脇にして示寂、壽一百二十、後眞際大師と諡せらる。

【要解】東西の兩堂に坐つて居る僧等が一頭の猫を捉へ來つて猫兒に佛性有りや無しやを爭論し初めた、南泉和尙直に猫を引つ提げて云く、兩堂の僧何とか一句を道ひ得るならば猫兒は斬るまい、道ひ得ずば立處に斬却するぞと云はれたが誰一人對ふる者が無かつたから約束通り南泉は一刀兩段にスパリ胴斬りにして終つた、其の場は夫れで濟んだ。南泉前日の次第を物語つて趙州ならば何とか道ひ得るだらうと問うた、趙州和尙取りあへず穿いて居た草鞋を脫いて頭上に戴せてスツト出て行つた、此の樣子を見た南泉は若し彼れが前日居てくれたならば、あの猫も殺さずに濟む、噫、救かつたらうにと云はれた、話しは是れ丈けである。これが有名の公案である、東西兩堂は二見相對の表象佛性の有無は斷常二見の隔壁である、是れが僧の立場であり爭論の原因である、南泉と趙州とは平等絕對の上に立つて居る人だから此の病根を斷つ爲に利刀を取つたり草鞋を戴いたりして見せてゐるのである、南泉が唯一頭の猫を斬つて兩段となす手際は平等を拈じて直に差別として見せたのかも知れぬ、趙州が汚れた草鞋を頭上に戴いたのは淨穢の差別を拈じて直に不二の平等を示してゐるのかも知れぬ、何れ劣らぬ作家の漢である、手品輕業藝人離れをした手捌きは見てゐる丈けでも氣持ちがよい、況して禪道佛法の音沙汰さへ絕え切つた南泉趙州の兩父子の活手段は聽いた丈けでも身がゾクゾクする、之を味ふには迚も講釋のみでは得られまい、實際に工夫をして見ねば解らぬのである。

【著語】□人平にして語らず、水平にして流れず。一匹の猫を猫と見たならば爭は起らぬ筈である、不平が爭の原、水の流るゝも不平から起るのだ、兩堂の僧が心地未だ穩かならぬ點から起つた喧嘩だらう。□誰か敢へて鋒に當らん。南泉が勢ひ込んだ此の銳鋒には何人も敵對し難いことで有らう、七佛已前空刼那畔に向つての提起である、壁立萬仭唯我獨尊の提起である、兩堂も爭も猫も未だ出世せざる已前の提起である、當る者が無いのも御尤ぢや。□直に雨の頭に淋ぐを待て。保福の語に晴乾背て去らず直に雨の頭に淋ぐを待てと云ふのがある、天氣を見合はして愚圖々々してゐた揚句、漸つとの事で出掛けると驟雨が一時に襲ひ來つて頭からづぶ濡れになると云ふ事である、衆無對の樣子がそれである。無對ながらも何か云ひた氣に口をモゴ〳〵させてをる、其中には惡水を驀頭から注がれることであらうよ、一體何を云ふ積りなのだ、徹底無對なら無對でそれで善い、ナンにも竹篦口をするには及ばぬではないか。□刀を抽いて鞘に入らず。一旦抽いたからには無事に鞘へは收まらない、南泉の一と振り寸斷せねば止まぬ、兩段し寸斷しても本の一段さ、何にも變易は有りませぬ。□再來半文に直らず。又もや趙州に問ふなど一つものを幾度か見せつけられるのは閉口だ、御手際はモー解つて居るよ。□好し一刀兩段を與ふるに。萬松ならば草鞋を戴

いて去る趙州、其奴を眞二つに截斷して遣つたらうに。人人此の一刀を持ち合して居る筈だ、錆びてはゐぬか御注意が肝要。口心斜なれば口の喎むを覺えず。心とは胸である、自分の心が曲つてゐると、遂口に出る辭も自ら曲んで來る、南泉それにお氣がつかぬ。餘り師匠が弟子を譽めるのは見つともよいもので無い、南泉少し氣をつけさつしやい。趙州は趙州の獨立よ、南泉の褒貶に干かる迄も無いことである。

頌云。兩堂雲水盡紛拏（有理不在高聲）王老師能驗正邪（明鏡當臺物來斯鑑）利刀斬斷俱亾像（消得龍王多少風）千古令人愛作家（有一人不肯）此道未喪（死猫兒頭堪作何用）知音可嘉（不道無只是少）鑿山透海兮唯尊大禹（功不浪施）鍊石補天兮獨賢女媧（鬧一不可）趙州老有生涯（信手拈來無不是）草鞋頭戴較些些（且信一半）異中來也還明鑒（嗣子難讃）只箇眞金不混沙（是眞難滅）

【讀方】兩堂の雲水盡く紛拏す。王老師能く正邪を驗む。利刀斬斷して俱に像を亡す。千古人をして作家を愛せしむ。此の道未だ喪びず。知音嘉す可し。山を鑿つて海に透すことは唯り大禹を尊とす。石を鍊つて天を補ふことは獨り女媧を賢とす。趙州老、生涯有り、草鞋頭に戴いて些些に較れり。異中來や還つて明鑑。唯箇の眞金沙に混せず。

【字義】◎雲水とは參禪訪道の僧侶に名けたる異稱である。豐干禪師の偈にも「一身は雲水の如く悠々として去來に任す」と有つて身は閑雲流水の如く一處に滯ふることなく、世外に悠々として去來任運なる様子からして參學遊方の士に擬へた語である。雲衆水衆と云ひ雲衲霞袂など云ふ皆雲水僧、行脚僧を呼ぶ雅稱である。◎紛拏とは紛爭、亂れて相持搏する様子で言爭ひからして入り亂れて摑み合ひにも至らんとする騷擾を云ふ。◎王老師とは南泉のことである、普願禪師は鄭州新鄭の人、姓が王氏であつたから自ら此の稱を用ゐられたと云ふことである。◎作家とは唐宋の代、詩文の學甚だ旺盛で有つた所から禪も亦詩文の學を利用して非常に隆盛に赴いた、それで詩文の作家と禪の傑出とは其の妙處に至つて自ら相一致する者の様に思はれたと見えて禪の達人を作家の漢とか好作家とか云ふ様になつたのである、支那文學の禪に及ぼした大なる影響の一つである。◎此道未喪とは論語に孔子が「天未だ斯の文を喪さず匡人其れ予を如何せん」と云つた語を轉用したのであらう、此道は此では佛道とか祖道とか云ふ意である。◎知音とは列子湯問篇に「伯牙琴を皷す、鍾子期善く聽く」と云ふ故事から出た語で、異體ながら同心と云つた如な極めて親密の間がらを云ふ。◎鑿山透海云々の句は史記にある故事である、昔し禹王と云ふ聖人が黃河が氾濫して世人の苦しむのを憐れみ山を鑿り石を積んで河流を導いて黃海に注ぎ込む様に疏通させた。世を益した莫大の功は昔しに在ては唯一人夏の禹王あるのみである、今に於ては南泉の功それにも勝るものがあると

引例し來つたのである。◎錬石補天云々の句は同じく史記にも淮南子にも出て居る故事である、諸侯に共工氏と云ふのが有つて大層兵は强かつたけれども王となれないのを殘念がつて態と祝融氏に戰を挑んだ、ところが軍却つて利あらず終に敗れをとり不周山の岩石に頭をブツつけて死んだ、其の時に天柱が折け地維が缺けて了つた、女媧氏と云ふ人が五色の石を錬つて其の天柱を補ひ以て四極を立てたと云ふ寓意的の傳説がある。今は趙州の功に比して女媧氏のその賢をも壓するに足る者よと見立てたのである。◎生涯とは莊子に「吾が生や涯りあり」と云ふ、今は趙州には趙州獨特の活計が有ると云ふ程の意。◎些些とは少々、多少幾分などと云ふに同じ。◎異中來とは同中の異、異中の同などと云つて同は平等、異は差別である、同中に異を辨じ異中に同を辨ずるを衲僧家尋常の茶飯となす、今は異中來であるから差別界に立脚して平等を辨ずる樣子である。◎眞金不混沙とは兩堂の紛拏を沙とし趙州を眞金に比して讃歎し乍ら異中來の語に響かしたのである。

【要解】本頌は本則の内容を丁寧に而も巧みに唱ひ出されてある。初めの四句二十八字に南泉斬斷の伎倆を稱し、次の二句八字に本則が宗門に永く尊重せらるる所以を述べ、次の二句十八字に二つの故事を假り來つて前に南泉の偉功比倫なきを讃め、後に趙州沒量の大功を稱揚した、終り四句廿七字に趙州老出格の活計を歎美し公案圓成の意を以て總結とした。東西の兩堂に分れて猫兒を爭ひ掴み合はんとするを南泉一刀の下に截斷した、此の一刀下には、單に猫兒が兩段された計りで無く、萬物倶に境像を亡じて了つた、其の手際は千古萬古作家の漢として愛賞せざるは無い、此の道未だ喪びずして知音永く萬世に唱導することで有らう。昔し禹貢が山を鑿り川を穿つて海に通じたと云ふが南泉が一刀は天下人の舌頭を坐斷して別に一線を通じたその大功は前に云ふ通り、又女媧氏は石を錬つて天柱を補うたと云ふが趙州の大功には及びもつかない、趙州老の活計は天上天下唯一人の生涯である、草鞋を頭に戴いて出た樣子は多少所得のある者の如く又絕無の如くである、異中に同異を辨じ來つて脚下甚だ分明、眞金は決して有漏の沙に混ずること無く、混ずるも眞金は眞金にして照鑑私無し、趙州一人は實に眞金無垢にして兩堂紛拏の沙中に混ぜざる無礙寶珠である。要するに南泉趙州父子を歎美して、遺憾なく本則の的意を發揮して、十分なる宏智獨特の妙處を味うがよからう。

【著語】□理有れば高聲に在らず。道理が解つて居れば大聲あげて喧嘩はせぬ、東西從來無東西の道理を知ら無いから這んな始末になる。□明鏡臺に當つて物來れば斯に鑑む。南泉は明鏡の如し物來れば正邪善惡一時に照破して毫も昧すことは無い、人々お互に明鏡は具有して居れど我と云ふ障礙に覆はれて光明が鈍い、だから見苦い喧嘩口論などオツ始めるのだ。□龍王多少の風を消し得たり。消は用字に同じ。龍王が風雲を起す時は其の勢ひ猛烈、寄りつくなんど云ふことは到底出來ない、南泉が振り下した斬斷の一刀、龍王風を起すの烈勢である、其の凄い南泉の手許を能く看て取つたか怎うだ。□一人有つて肯がはず。他は任 敎、此の萬松一人は南泉の提燈持は眞平で御座る、人人個個壁立萬仭、南泉の鼻孔を假りて呼吸は仕らぬ。□死猫兒頭何の用をか作すに堪へ

ん。　此の道とは何で御座る、道若し有りと云はゞ是れ正に死猫兒頭ならん、イヤハヤ鼻持のならぬ臭氣、ソンナ物が何ぞお役に立ちますかな、道は他に向つて求むべき物では無からう、人人是れ道の全身、無爲の功德、無作の功用を成じて居るのに氣がつかれぬか。口無とは道はじ只是れ少し。古今絶無とは云はぬ、只憾むらくは其の人太だ少れである、夫れも其の筈、我れ今盧舍那獨尊佛、古今唯一人の出現で御座る。口功浪りに施さず。　疏水は大禹の功、斬斷は南泉の勳、禹貢、王老にして初めて其の功名を成し得たのである、容易からざる功績だ、疎略してゐては駄目で御座るぞ。口一を闕いて不可なり。　補ふならば十分補ふがよいぞ、千丈の堤も蟻穴から崩れる、少しでも闕け目があると其れが輪廻の根本となる、そこに拔け目の無いのが趙州の巧妙よ。口手に信せ拈じ來つて不是無し。　趙州には取捨の見が無い、貴賤尊卑を超絶した境界なれば日用も亦佛事門中不捨一法の活三昧である。口且らく一半を信ず。　半信半疑の態、聊か不足面ではあるがマア〱それで結構として置かう。口衲子は漫じ難し。　衲僧の境界は見當がつかぬ、眞俗でも無し異類でも無い、向上かと思へば向下、向下かと思へば向上、凡にも墮せず聖にも落ちぬ、これが衲僧自由の轉處で有る。口是れ眞滅し難し。　生死去來眞實人體なれば生死去來の中に在て安住不動である、生死に著せず、涅槃に任せず、猫の皮袋を被るも光滅ずるにあらず、佛身を成ずるも光增すにあらず、斬猫の入息も戴鞋の出息も正に眞實人體の呼吸である。　糞掃堆裏に在るも眞金は眞金で、決して其の光りを增減するものではない。

第十則　臺山婆子

示衆云。有收有放干木隨身。能殺能活權衡在手。塵勞魔外盡付指呼。大地山河皆成戲具。且道是甚麼境界。

【讀方】　衆に示して云く、收あり放あり干木身に隨ふ、能殺能活權衡手に在り、塵勞魔外盡く指呼に付し、大地山河皆戲具と成る、且らく道へ是れ甚麼の境界ぞ。

【字義】　◎收、放とは收は把住、放は放行である、碧巖に「把住するや眞金色を失し放行するや瓦礫光を放つ」と云ふ句がある、收放、把放、殺活、與奪等の語は皆同一の意味を現してをる、把住、收、殺、奪は平等とも空とも萬法歸一又は理とも云つて實際理致一塵を立せざる方である、放行、放、活、與等は差別とも有とも諸法歷然、又は事とも云つて佛事門中一法を捨てざる樣子である、宗師家が爲人度生するには此の二を超絶して而も自由自由に機に應じ根に隨つて此の二を利用するのである。◎干木（或は竿木に作る）とは日本には此の種の物が無いから善くは解らないが、唐土で戲伎に用ゐる三尺許りの棒だとも云ひ、又は盜賊が物を盜む時に探しあてる棒だとも云ひ、或は人形扱ひの持つて居る棒だとも云ふ、何方でもよいが山僧は人形扱ひの持つて居る操つり人形の絲を引く棒と見た方が最も意味に合つて面白い樣に思ふ。◎權衡とは權は秤錘卽ち分銅の事、衡は

はかりの目を盛つた桿である。◎塵勞とは塵は五欲六塵五蓋十纏等の煩惱を云ひ、勞は五欲六塵に勞役せらるゝ不自由の境界を云ふ、八萬四千の塵勞などと云つて煩惱の總名に用ゐられる。◎魔外とは天魔外道と云ふ意、何れも我を誘惑する處の惡魔である。◎甚麼境界とは甚麼は支那の俗語で如何樣と云ふ意、境界は境地界限の意で土地に云ふべき語なれども今は一般に人の心理的狀態、又は人格の分齊などと云ふ意に用ゐられてをる。

【要解】師家が學道の人を接するには殺活自在、與奪縱横なる手段を用ゐること、恰かも人形扱ひが千木に依て人形を自由に操釣るが如く、權衡を握る者の自在に輕重を左右し得るが如くである。其の師家の境界はと云へば塵勞魔外一時に襲ひ來るも指頭の呼吸に付隨せ、山河大地、日月星辰を戲具にして遊んでをる、甚麼な人が一體這んな境界に住して居るので有らうか、人人に其の分ありとは雖も且道本則に就いて趙州古佛の伎倆を拜見するがよい。

擧。臺山路上有一婆子（傍城庄家、夾道兎）**凡有僧問臺山路向什麼處去**（一生行脚去、處處也不知）**婆云。驀直去**（未當好心）**僧纔行**（著賊也不知）**婆云。好箇阿師又恁麼去也**（儞早侯白）**僧。擧似趙州**（人平不語）**州云。待與勘過**（水平不流）**州亦如前問**（昭虎之機）**至來日上堂云。我爲汝勘破婆子了也**（我更侯黑）

【讀方】擧す、臺山路上に一婆子あり、凡そ僧あり臺山の路什麼の處に向つて去ると問へば、婆云く、驀直去。僧、纔かに行く、婆云く、好個の阿師又恁麼にし去れり。僧、趙州に擧似す、州云く、待て與めに勘過せむ。州、亦前の如く問ふ。來日に至つて上堂に云く、我れ汝が爲に婆子を勘破し了れり。

【字義】◎臺山とは五臺山の略名、支那の太原府に在り、形に依て名をなす、古來文殊菩薩の道場と言ひ傳へてある。無著文喜禪師が五臺山に在つて典座をしてをられた時、粥鍋上に文殊が現はれたなどと云ふ故事もある。◎路上とは路のほとりと云ふこと、臺山に登る麓の路傍にと云ふ意。◎驀直去とは傍目觸らずに驀直に行けと云ふこと、字義は其れだけだが宗意は甚だ深い。◎阿師とは阿は阿翁阿家など云ふのと同じく助辭である、阿師は此のお坊さんも御多分には漏れぬと云ふ幾等か輕蔑の意を含む。◎恁麼は宋代の俗語で、このとうりと云ふ意、佛敎で如是と云ふ語に關聯して禪では恁麼と云ふ文字を其の儘に用ゐて意味深長ならしめてある。今は文字通りの輕い意味に使つてある。◎擧似とは似は示に同じ、提擧呈示の意。◎趙州は趙州の從諗禪師、略傳前に出だす。◎勘過、勘破とは勘は鑑照の意で看破ること看徹照破、透過と云ふ意で腹中の計畫を看拔くと云ふ語。

【要解】五臺山に登る路のほとりに一人の老婆が有つた、參師問法の僧來つて臺山へは何方から參りますと何の氣なしに訊ねると婆々は眞直に行きなさいと答へる、坊さん正直に眞直に歩き出すと見た所立派なお坊さんだが矢ッ張りあの通りだと嘲けるのが例であつた。一人の僧、趙州和尙の處

に行つて有りし始末をそつくり語つて不平たものと見える、趙州和尙は待てよ、其の間に老衲が行つて其の婆々の膽玉を拔いて來て遣ると諭めて置いて趙州わざ〳〵出掛けて行つて婆子にお定りの通り道を訊いた、翌日になつて上堂演法して云く、老衲は汝の爲にあの老婆子の五臟六腑を勘破いて了つて來たぞよと。僧は婆子の爲に脚下を點檢せられ婆子は趙州の爲に肺腑を勘破せられた、婆子と趙州とは同人なるか別人なるか、これ參究すべき第一の問題。又僧が五臺山に遙〻登山して文殊に相見せんとするも徒勞な骨折り、五臺山中とはこれ人人が五蘊山中、文殊菩薩はこれ箇箇本具なる般若の正智、日日相見了である、然るを反つて步みを轉じて他の塵境に遊ぶ、若し學人にして回光返照の退步を承當せば肯へて婆子の點檢を要さないのである、これ參究すべき第二の問題である。誤つて再び趙州が爲に勘過せられぬ樣に注意せねばならぬ。

【著語】口傍城庄家、道を夾む兎。傍城は城下はづれ、庄は莊に同じ、兎は於兎と云つて虎のことである、別莊などと續く字、町家を離れた寂しい場處、町はづれの一軒家、道に夾つて一疋の猛虎御座んなれ、イザ一と咬みと待ち設けてゐまい者でも無い、臺山路上の此婆子、天下の衲僧を取り噉はんずる勢ひ、猛虎のそれよりも怖ろしい、御用心御用心。口一生行脚して去處も也た知らず。三五十年間も六部雲水して步きながら臺山に登る方角すら知らぬと見える、來るに來處なく去るに去處なし、臺山とは餘所で無いぞ、人人の五蘊山中に向つて各々の文殊に相見したがよからう。口未だ好心に當らず。親切氣に驀直去と道を敎へてくれた樣だが此奴見かけによらぬ不敵な婆々だ、天下の雲水衆一杯食はされぬ樣、氣を付けたがよいぞ。口賊を著くることだも也た知らず。婆々の巾著切りが後を著けて來るのも知らずに迂濶足を步み出した、此の僧も氣の毒な者ぢや。口儞早く侯白。昔し閩の國に侯白、侯黑と云ふ二人の賊が居た、白は男で黑は女である、何れも老巧熟練の盜賊で有つたが其れでも白は黑に及ば無かつたと云ふことだ、故に後の著語に我更に侯黑とある。本錄第四十則の本則に出てあるから又其許で見るがよい。それ看よ、巾著切りどころで無い、此の僧侯白婆々の爲に五臟六腑まで拔かれて居るやうだ、是れを見てとる萬松も餘程其の方の達人らしい、御油斷召さるなよ。口人平にして語らず。前にも有つた、不平たら〳〵醜いことだ。口水平にして流れず。何時も二句對に出る、四海波平かなれば天下も自ら泰平さ。趙州風無きに波を起すやうなことはせまいぞや。口陷虎の機。虎を陷れる樣な略機を有する趙州だから婆子も知らず識らず騎せられた、危ないことだ。口我れ更に侯黑。婆子は掏摸の親方侯白然として威張つてゐたが趙州と云ふ晝鳶の樣な侯黑が現れて來て終に勘破されてしまつた、上には上のある者よ。

勘破了也を讚歎した意である。

頌云。年老成精不謬傳（切忌魔魅人家男女）趙州古佛嗣南泉（鎭州端的出大蘿蔔）枯龜喪命因圖象（靈鬼靈神返遭羅網）良駟追風累纒牽（驟風驟雨不免羈韁）勘破了老婆禪說向人前不直錢（知根不聖）幾箇男兒是丈夫

【讀方】年老いて精と成る、謬つて傳へず。趙州古佛、南泉に嗣ぐ。枯龜命を喪ふことは圖象に因る。良驪追風も纏牽に累さる。勘破了、老婆禪。人前に說向すれば錢に直らず。

【字義】◎年老成精とは支那の俗說に禽獸でも木石でも年功を經ると精魅となつて人を誑すと言ひ傳へられてある、楞嚴經にも年老成レ魔惱二亂是人一とあるから滿更ら嘘でも無からう。淨瑠璃にある三十三間堂棟木の由來は柳の精を脚色で柳のお柳としてある、斯んな類である。◎枯龜喪命云々とは莊子の外物篇に宋の元君夢みる所有つて漁者餘且なる者に依て白龜を網し得た、其の圓さ五尺、君之を活さんと欲して之を卜するに曰く、龜を殺して以て卜せば吉ならんと、乃で龜を刳く、七十二鑽して遺筴なしと云つてある、句意は年老いた龜が命を喪つたのは其の龜裂が吉凶を占ふ處の圖象に現はれてゐたからのことである、圖象は吉凶判斷の卦文のこと。◎纏牽とは纏は索で縛すること、牽は其の索で以て牽きまはすこと、束縛に同じ。◎良驪追風は第七則の頌に出て居る。

【要解】首の二句十四字は趙州老熟の作略を讚歎し、次の二句十四字は前句に問僧を抑へ、後句に婆子が勘見を貶して更に趙州の氣品を卓上した、終り二句十四字は天童自身の卓見を擧し、天下人をして眼を著くるに處なかしめんとての提撕である。年功を積めば魔魅と成つて人を誑かすと云ふことを聞いて居たが嘘では無いらしい、趙州も百有餘歲の古佛で有つて收放自由殺活自在、能く天下の學人を飜弄して把捉する處を失はしめた、其れも其の筈南泉と云ふ化物親爺の弟子だもの、臺山進前の路を問うた僧は恰かも枯龜甲上の圖象に似て結らぬ處で婆子の爲に魂を奪はれ脆く喪身失命した、其の又臺山路上の婆子は良驪追風の如く驀直去、恁麼去まさに疾風千里の勢ひを示したけれ共趙州勘破了の一大鐵索の下に纏牽せられて全く自由の分を闕いて了つた、然し天童から見れば婆子驀直去の禪機も、趙州勘破了の作略も、殆ど半文錢の價値が無い、愧かしくて御座へ出された話しで無い、天下後世の物笑の材料に過ぎまい。驀直去とか勘破了とか云へば其れを又後生大事に取り縋りたがるのが凡夫の惡癖である、されば天童慈悲の餘り悉皆奪ひ取つて終つた、與奪自在の妙は趙州計りでない、天童にも是れ此の通りと人人の手許に附け入つたのである。

【著語】口切に忌む人家の男女を魔魅することを。路上に婆々を出して人を誑惑すなどは、趙州甚だ性質が惡い、女子供などを魔魅すことだけは止して欲しい、萬松は大厭ひで御座る。口鎭州の端的大蘿蔔を出す。　鎭州と云ふ土地の名產は大根蘿蔔である、日本でなら紀州蜜柑に尾張大根と云つた樣なものぢや、南泉の法嗣に趙州がある、別に何にも異つたことは無い、瓜の蔓には瓜が生り茄子の木には茄子が生る、少しも異とするに足らぬ。趙州の從諗禪師、鎭州の大蘿蔔、皆天下を代表してをる。口靈鬼靈神返つて羅網に遭ふ。神を祈つて靈驗顯著なれば直ぐに一小社に祭り込んで仕舞つて窮屈な目に逢はせると云ふことである。人間も靈利な精神があると其の靈利の網に引つ懸つて頓だ失策をする、我れと吾が知見に礙へられて動きのとれぬのが例で御座る。口驟風驟雨も羈韁を免れず。　驟風驟雨は駿馬の形容、羈はをもがいと云つて絆のこと、韁はたづなと云つて縲のことである、風を追ひ電を逐ふ迅足の馬も其の能あるが爲に羈韁をはめられて仕舞ふのぢや、此婆

さんもやつぱり其の轍よ。口幾個の男兒か是れ丈夫。　丈夫とは眞の大丈夫、眞實一人前の男子と云ふ意、どれも此れも皆婆々談義計りである、些と大丈夫らしく横面のあたりピシヤリ一棒を食はしてやればよい、眞の男子と云へば先づこの萬松一人ぐらゐの者で御座らうて。口根、聖ならざることを知る。　根は根本、聖は正、根本が根本だからどうせ碌なものぢや無いと萬松以前に存じてゐた、婆子も趙州も皆是れ病人の爲の投藥だ、頑健無双の大丈夫には鐚錢の價値も無いのは知れたことよ。

第十一則　雲門兩病

示衆云。無身人患疾。無手人合藥。無口人服食。無受人安樂。且道膏肓之疾。如何調理。

【讀方】　衆に示して云く、無身の人疾を患ひ、無手の人藥を合す、無口の人服食し、無受の人安樂なり、且らく道へ膏肓の疾、如何が調理せん。

【字義】　◎無身人、無手人、無口人等は五蘊皆空にして能緣の心と所緣の境と對立せぬ思想を云ひ詮はす語である、色受想行識中の色に就て身手口の三を擧げたのである。◎無受人安樂とは受は五蘊中の受で能所心境を忘じ、五蘊は皆空と照見し、身心脱落の境界の安穩快樂なる樣子を云ふ。◎膏肓之疾とは左傳にある故事、晉の景侯病に罹り醫を四方に求め、李子豫と云ふ名醫を得た、其の前夜景侯夢に疾二豎子と爲つて曰ふには、彼は良醫で有るから懼らくは我を傷ふに違ひ無い、何處に逃げたものであらうと心配してゐた、其の一人がナニ肓の上膏の下に入つて居れば大丈夫だと云つて二豎子が隱れて仕舞つた、果して李子豫が來て診たけれ共疾既に膏肓に入るが故に針藥の及ぶ處にあらずと云つて辭し去つたと云ふことである、其れからして不治の病氣を膏肓必死の疾と云つて全快の見込み無きを云ふ詞となつたのである。今は五蘊皆空と云ふ空の疾、法身無相と云ふ無の疾、無病と云ふ病氣の最も根治し難き難病だと云ふ意に用ゐた。◎調理とは理は脈理、調は調劑であるから診察配劑と云ふ程の意を緣のある語を假りて用ゐたのである。

【要解】　身體の無い人が病氣をすれば手足の無い人が藥を調合する、無の疾には無の藥を與へる、口の無い人が食を服すれば受け無い人が安樂になる、空の腹には空の食を與へる、空の食が胸に痞へ無の藥が返つて毒となり、一の重患と爲つて二豎正に膏肓に入る、普通尋常の醫者では針藥の及ばざる所であるが何と治療をしたものであらうか、本則に就て良醫の配劑、雲門の診察振りを看るがよい。

擧。雲門大師云。光不透脱有兩般病。一切處不明。面前有物是一 白日見鬼、莫是眼華 透得一切法空。隱隱地似有箇物相似。亦是 還覺口乾舌縮麼

光不透脫、（早是結胷、那堪喉閉）又法身亦有兩般病、（禍不單行）得到法身、爲法執不忘、己見猶存、墮在法身邊。是一、（不唯邪祟、更有家親）直饒透得、放過卽不可、（養病喪軀）子細點檢將來、有甚麼氣息、亦是病。（醫博未離門、又早痼病發）

【讀方】擧す。雲門大師云く、光透脫せざれば兩般の病有り。一切處明ならず面前物ある是れ一つ。一切の法空を透得するも隱隱地に箇の物有るに似て相似たり。亦是れ光透脫せざるなり。又法身にも亦兩般の病あり。法身に到ることを得るも法執忘せず、己見猶ほ存するが爲に法身邊に墮在す是れ一つ。直饒透得するも放過せば卽ち不可なり。子細に點檢し將ち來れば甚麼の氣息か有らんと云ふ、亦是れ病なり。

【字義】◎雲門大師とは青原下六世雪峰義存禪師の法嗣で韶州の雲門山光奉院に住せられた文偃禪師のことである、姑蘇嘉興の人、姓は張氏、幼にして空王寺の志澄律師に就て出家し數年律部を探究して己事未だ明めず、往いて睦州の州禪師に參じ尋いで雪峰禪師の會下に投じて鉗鎚を蒙り靈樹敏禪師の法席に第一座と爲り終に雪峰を以て師となすに至つた、敏質生知、慧辯天縱にして禪機天下に鳴る、特に道を靈樹雲門に唱ふること凡そ三十載、機緣の語句備さに『廣錄』に載す。門下多數の神足を出し特に雲門宗の名をなすに至つた、乾祐二年己酉（皇紀一六〇九）四月十日示寂、後勅して匡眞大師と諡せらる。◎光不透脫とは光は暗光の意で無明のことである。無明も極細微なる元品無明又は無明住地のこと、透脫は透明脫體と云ふ意で不があるから其の反對、無明の根塵未だ透徹せずして中に朦朧たる習氣の存するを云ふ。◎兩般病とは二個の病弊と云ふに同じ。◎法空とは法は吾人の對境となるべき客觀世界の全體に名けた語、空は客觀の對象其の物は因緣所成にして性相を有せず、現在吾人の眼前に森々羅列せる萬象其の儘に空であると云ふのである、空と云つても現象其の物が空無だと云ふのでは無くて萬有の本體性相が空で有つて何か固定した原子とか種子とか云ふ樣なものがあるのでは無い。◎隱隱地とは微細とか隱密とか云ふ意で地は助詞である。◎法身とは淸淨法身と云ふ意、唯識論に「一切の法の平等實性卽ち此の自性を亦法身と名く、大功德の所依止と爲るが故に」とある、されば諸法の實性、卽ち無自性を體とするがゆゑに畢竟無自性無體無相である、故に法身無相と云ふ、無相の故に淸淨なのである。◎法執とは法に對する執著にして對象の客觀的存在を固執すること。◎己見とは自己に對する迷見にして我の主觀的存在を誤認すること。◎點檢とは點呼檢査の意で舊唐書に兵馬を點檢すること一萬三千などとある、精細に詮議調査すること。◎氣息とは莊子に「獸死音を擇ばす、氣息茀然、尅刻太だ至る」云々とある、欠氣出入の一息が喘急にして迫る處あるの意、苦痛、逼迫支障などと云ふに同じ。

【要解】本則は至極に難解から少しく此に蛇足を描いて置かう『彌勒菩薩莊嚴論』に所取と能取との二相各三光あり、又世親菩薩の釋に所取の三光とは句光、義光、身光なり、能取の三光とは意光、受光、分別光なりとある、所取とは客觀、能取とは主觀である、是れは未だ法身邊に到らざる以前

主客兩觀の上に起る處の三種の病弊である、次に法身兩種の病と云ふのは洞山悟本大師の法嗣、越州乾峰禪師の示衆に云く、法身に三種の病、三種の光あり、須らく是れ一一に透得すべし、更に須らく向上の一竅あることを知るべし、時に雲門衆を出て云く只庵內の人の如きんば甚と爲てか庵外の事を知らざる、峰呵呵大笑すと云ふ公案がある、是れが本則の源である。三種の病とは未到造作、已到住著、透脫無依の三であるが、今此に兩般の病と云ふは未到造作の一を少いてをるのである。是れは法身無相の上に起る處の兩病である、二種の光とは能取光、所取光である。以上の意で以て本則の文字を假に圖に表はしたならば次の樣に成らうと思ふ。

兩病─┬─未法身─┬─所取─不透脫─一切處不レ明面前有レ物─塵沙惑煩惱─┐
　　　│　　　　└─能取─透脫─隱々地似レ有ニ個物ー相似─微細妄分別─┴─敎說得脫
　　　└─到法身─┬─能取─不透脫─墮ニ法身邊ー────────已到住著─┐
　　　　　　　　└─所取─透脫──子細點檢──────────透脫無依─┴─禪修超脫

要するに未法身にも到法身にも能取所取の兩般の病が有つて未法身の兩病對治は大乘實敎に於ける最上の法門なれども到法身の兩病根絕は單り三昧王三昧の眞修に待たねばならぬ。此は是け丈けにして置いて、詳しい宗意は拙著『講話』の上で御覽下さることに願ひます。

【著語】口還つて口乾き舌縮まることを覺ふや。　雲門乃公自身還つて口乾き舌縮まる樣な大熱を患つてゐるでは無からうか、全く無病息災なら其んなに人の疝氣を頭痛に病むことも無からう。座下の諸人如何ぢや、ウッカリして傳染しまいぞ、と雲門にこと寄せて門下の面面に響かしたのである。口白日に鬼を見る、是れ眼花なること莫しや。　青天白日の眞晝間、而も盡界無一物の處に、靈鬼の往來するを見るからには御自身眼病に罹つてぢや、イヤ吾人も眼病を患つて居るでは無からうか、空花を認めて實有と錯つてはならぬ。口早く是れ結胷、那ぞ喉閉に堪へん。　能取光と云ふ病氣が胸まで逼つて來た、喉がゴロ〱ッと來ればモー其れつきりだ、事に依ると手遲れかも知れぬ、客觀病より主觀病の方が重い樣だ、迚も治療の見込が立たぬ。然し大死一番も也た好風流だらうよ。口禍、單に行はれず。　兩般の病ありと云ひやるが、成る程禍は單一でには起らぬものぢや、二見相對が基となつて疝氣と頭痛とが一時に發つたんだらう。口唯、邪祟のみならず、更に家親あり。　唯外の邪神でも祟つてをること、思つてゐたら極々近親、お手前が疫病神とはコレヤ驚いた。天下の衲僧、ウッカリ雲門の疫病神に祟られまいぞや。口病を養うて軀を喪す。　病を療す爲に藥を服んだら病氣よりも却つて藥に中てられて大切な軀を喪ふ樣な事に成つた、それでは結らぬ話だ、解毒劑の御持合せが御座るかナ。口醫博未だ門を離れざるに又早く癇病發す。　住著病根治の藥を投て、今醫學博士が門先を出たか出ぬ間に、又もや放過無病と云ふ顚癇病を惹き起した、主治醫の雲門和尙も嘸かし骨の折れることで御座らうよ。

頌云。森羅萬象許崢嶸（聽佗何礙汝、識得不爲究）透脫無方礙眼睛（閃棒著、榾楔）掃彼門

庭誰有力（拂迹成痕　欲隱彌露）隱人肎次自成情（心疑生暗鬼）船橫野渡涵秋碧（死水浸却）棹入蘆花照雪明（住岸却迷人）串錦老漁懷就市（著本圖利）飄飄一葉浪頭行（隨流得妙）

【讀方】森羅萬象、崢嶸に許す。透脫無方なるも眼睛を礙ふ。彼の門庭を拂つて誰か力有る。人の肎次に隱れて自から情を成す。船は野渡の秋を涵して碧なるに橫へ。棹は蘆花の雪を照して明なるに入る。串錦の老漁、市に就かんことを懷ひ。飄飄として一葉浪頭に行く。

【字義】◎森羅萬象とは天地萬物と云ふに同じ、天に在ては日月星晨、地に在ては山川草本、森々として羅列する宇宙の事象を云ふ、佛教に一切諸法の語あり、意稍や同じ。◎崢嶸とは高い貌で山の突兀として聳え立つ有樣である。此では有りの儘と云ふ程の意、許の字はまかすと訓む。◎無方とは方は方角の方の字である、四方八方十方などと東西南北四維上下を定めるには、何か其許に一つの標準となるべきものが無くては方位を立てることは出來ぬ、中心がなくては四方上下の立たぬ如く無方と云ふは一物に不依倚ありさまに名けた語である。◎門庭とは門庭の施設などと用ゆる文字で外境即ち諸法歷然の處である。古人には門は門根で吾人の六根門、庭は外庭で六根の對象となる六境、即ち門庭の二字を以て根境の二つに見る說も有るが山僧はソンナに揑ちつけんでもよいと思ふ。◎肎次とは莊子に「喜怒哀樂肎次に入らず」などと有つて胸の中と云ふ意。示衆に膏肓に入ると云ふ語が有つたから其の緣を假りて出た文字である。◎串錦とは串は竹のくしである、錦は魚を形容した文字で金鱗などとも云つて、細鱗の美はしきより出た語。◎老漁とは年老いたる漁人のことで向下底に却來したる老熟圓滿の那人をさして云ふ。◎市とは市場のこと。人の群集して物品を賣買する一定の場處。◎飄飄とは風に煽られて木の葉の輕く舞ふ貌である。◎一葉とは一葉の扁舟などと、使ふ文字で大海に漂ふ一隻の小舟が波浪の儘に弄るゝ樣が、恰かも一枚の木の葉の風に煽られて輕く舞ふに似てをる處から此の語を用ゆ。

【要解】本頌は、七絕四對八句五十六字より作つてをる、便宜の爲め本則に配當すれば左の如な圖が出來る。

森羅萬象許崢嶸	荒田不揀草	要領大綱	述本際解脫
透脫無方礙眼睛	淨地却迷人		
掃彼門庭誰有力	面前有一物	未法身	本則四病
隱人肎次自成情	隱々地似有一物		
船橫野渡涵秋碧	墮法身邊	到法身	
棹入蘆花照雪明	透得放過		
串錦老漁懷就市	入鄽垂手	天童眼目	述雲門施設
飄飄一葉浪頭行	任運却來		

必ずしも恁う一句一句分けて見ねばならぬことも無いが、山僧は斯う見た方が幾分か解し易からうと思うての婆心である。森羅萬象崢嶸に許して置けばそれが光り透脫の處であるのに其の透脫に腰を掛けるから眼の中へ塵が這入つたと同じで却つて病と爲るのである。であるから六根門を掃除に力を盡さねばならぬ、然し門庭は誰でも掃除は出來るが人の胸次は中々掃ひ難いものぢや。船を秋碧に泛べ、野渡に棹さして蘆花照明の邊に遊ぶ境界は大層結構のやうだが、此の清淨地に坐り込むも亦病である。未法身の上から云つても到法身の上からいつても、此處は清淨安樂地ぢやと、チヨツトでも坐著すれば直ぐに病弊となつて了う。此に於いてか眞に本際解脫なる衲僧家の三昧に逍遙するがよい、飄々たる扁舟に身心を任して衆生化益の爲に却來する串錦の老漁となるならば法身邊の音沙汰どころか禪道佛法の臭氣も無い、雲門今日の示衆は是れ此の通りと天童全力を捧げて頌出せられたのである。

【著語】 □聽他あれ何ぞ汝を碍げん、識得すれば寃を爲さず。 森羅萬象何ぞ汝を碍げん、見聞覺知別に覓むる無くんば色聲香味敢へて寃を爲さず、只汝が用ゆるに一任せり、人境は一枚、心法は不二、疎なるべからず、狎るべからず、唯崢嶸に任せて測度を用ゐざれ。□閃棒、榾㮭に著く。此の句意は古人も未だ其の義詳かならずと云つてある、唐宋時代の俗語で有らう、榾㮭の文字は本錄の第八十則にも第九十五則にも出てをる、或は骨朶にも作る、榾㮭は木の枯れ枝、櫃のことで有らう、閃棒とは棒扱ひが棒を迅速に振り回すと輪が出來る、譬へば暗處で線香の火のついたのを早く振り回すと旋轉にまかせて赤い閃きの輪が出來る樣なものである、それで萬松著語の意は赤い輪は旋轉の閃きに依つて出來たもので本來空のものである、其の空なる閃光に眼を礙へられて其の眞相たる骨㮭を徹見することが出來ない、透脫無方が邪魔に成つて光の我が眼睛を礙へると云ふ天童の頌意に同意した語である。□迹を拂へば痕を成し、隱さんと欲すれば彌々露はる。 古人の句に「靈龜尾を曳く、跡を拂へば痕を成し墨を吐く、海魚隱さんと欲して彌露はる」とあるが、實に其の通りである、迹を拂はうの隱さうのと分別するから却つて痕を成し彌露はれて漁父の利となる、始めから手出しをせぬのが一番じや、一體門庭を掃はうとて掃はれるものでは無い、それよりは能緣の心でも空じたがよからうよ。□心疑へば暗鬼を生ず。 妄計、執を成すに因て繩に迷うて是を蛇と爲す、「心疑へば暗鬼を生じ、眼病めば空花を見る」と智者禪師の頌にもある、心相など〻云ふ一物を隱隱地に認めるから枯尾花も幽靈に見えるのだ。□死水浸却す。 死水に魚棲まず、澄淨浪無きは尊ぶべきで無い、若し其許に止まらば死水と云ふ腐れ水に浸された土左衞門も同然だ、無病の大病人、氣の毒千萬よ。□住岸却つて人を迷はす。 船に乘つて河をゆけば住まつてゐる岸の移り行く樣に見ゆる、住岸の人を迷はすにあらず、人自ら迷ふのである、爰は多く人の惑ふ處であるが諸人には同中異辨の眼が有るか怎うじや。□本を著けて利を圖る。 乾峰雲門が大層資本を卸して仕入れた二光三病を、天童は一と串にさし貫いて市に持ち出して高價に賣り飛ばし莫大の利益を見る積りだそうな、何でも高く賣りつけて大いに儲けて貰ひ度いたいものだが買ひ手が有るか知らんて。

□流れに隨つて妙を得。　流れは動搖混雜のものであるが其の流れに隨つて自由自在の妙用を發揮する處に衲僧の手腕が知れる、無爲無作の妙用は隨處に露現して餘す處が無い。

第十二則　地藏種田

示衆云。才子筆耕。辯士舌耕。我衲僧家慵看露地白牛。不顧無根瑞草。如何度日。

【讀方】　衆に示して云く、才子は筆耕し、辯士は舌耕す、我が衲僧家、露地の白牛を看るに慵し、無根の瑞草を顧みず、如何んが日を度らん。

【字義】　◎才子筆耕、辯士舌耕とは才子は文才ある男子、辯士は諤々の士君、筆耕舌耕は古語に舌織つて衣、筆耕して食ふとあつて、筆力舌頭に依つて活計することである、謂ゆる世の末技者流と見てよからう。◎衲僧家とは衲は破綴衲衣などゝ云つて破衣を百綴りに綴り合して衣てゐる僧と云ふことで清楚淡白の樣子である、老衲などゝ云ふ時は自らを卑下して云ふ語なれ共、今衲僧家と云ふのは我が佛家ではとか又は禪家ではとか云ふ言葉の代りに用ゆ。◎露地白牛、無根瑞草とは洞山悟本大師玄中銘に「靈苗瑞草、野父芸ることを愁ふ、露地の白牛、牧人放つに懶し」とあるを轉用したので有らう、五位顯訣に「露地の白牛の如きんば是れ法身の極則なり」とあるから淸淨地佛境界を言ひ詮す語である。法華文句には「見惑除くと雖も思惟猶在らば露地と名けず」、又、止觀義例に「無漏の妙觀を以て白牛と爲す」とあるから併せ考ふるがよい。無根は不萠の枝とか無根の樹とか云うて無爲の境を云ふ、瑞草は靈苗瑞草で無根無萠なるが故に靈異と云つたのである。

【要解】　才子は文筆を耕作して衣食し、辯士は談論を耕作して生活してゆく、是れ皆己れが所能を以て日常を消してをる者である、我が衲僧家では露地の白牛を追ひ回すのも太儀、又無根の靈苗瑞草の田の草とりも嫌ひで御座る。要は有爲の功業を求め無い、然ればと云つて無爲の功業をも冀はない、一念擬議に涉れば淨地却つて染汚を受く、衲僧家の日用光中は果して如何なる消息に依るで有らうか、本則に就いて地藏の動靜を拜見するがよろしい。

舉。地藏問脩山主。甚處來。（道不知來處得麼）　脩云。南方來。（好與下載）　藏云。南方近日佛法如何。（行說好話）　脩云。商量浩浩地。（低聲）　藏云。爭如我這裏種田摶飯喫。（少賣弄）　脩云。爭奈三界何。（猶有這箇在）　藏云。儞喚甚麼作三界。（南方猶可、北方更饒）

【讀方】　舉す。地藏、脩山主に問ふ、甚れの處より來る。脩云く、南方より來る。藏云く、南方近日佛法如何ん。脩云く、商量浩浩地。藏云く、爭か如かん我が這裏、田を種へ飯を摶めて喫せん

には。脩云く、三界を爭奈何せん。藏云く、儞、甚麼を喚んでか三界と作す。

【字義】◎地藏とは地藏院の桂琛禪師と云つて玄沙の宗一大師に嗣法した人で法眼文益禪師の師匠である傳燈は青原下八世、これを圖すれば次の通りである。

青原行思―石頭希遷―天皇道悟―瀧潭崇信―德山宣鑑―雪峰義存―玄沙師備―地藏桂琛―┬龍濟紹修
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└法眼文益

常山の人、姓は李氏、冠して後親を辭し、本府の萬藏寺無相大師に事へて披削登戒、後に玄沙の宗一大師に參じて一言にして啓發し、廓爾として惑ひ無しと云ふ、淨牧王公、閩城西の石山に精舍を建て地藏院と名け師を請して錫を駐めしめた、一年後漳州の羅漢院に遷り大に玄要を開くに學徒臻湊したと云ふことである、後唐の天成三戊子年（皇紀一五八八）俄に疾を示し數日安坐して終りを告ぐ、壽六十二、臘四十、後諡して眞應禪師と云ふ。◎脩山主とは地藏桂琛禪師の法嗣で撫州龍濟山主紹脩禪師のこと、法眼と同じく地藏に參じ所得已に臻極と謂はれたが法眼と建陽に至る途中、問難に遭うて懵然、直ちに地藏に刧囘して言下に惺悟し、後龍濟山に居る、務めざるに而も學者奔り至り、化風大に振つたと云ふことである。◎浩浩地とは浩浩は水の盛なる容子、又大也とも云ふ、地は助字である。◎三界とは欲界、色界、無色界である、六欲天より四惡趣に住む有情は婬欲等多きが故に欲界と云ひ、欲界の上の四禪十八天の有情は天人淨妙の色あるが故に色界と云ひ、又其の上の四天に至れば天人唯心識のみ有つて色形なきが故に無色界と云ふ。界は限の意で此の三自から分限隔別するを以ての故に名けた語である。吾人は今此の中の欲界にあり、色界無色界は天上の世界を云ふ、有情迷界の總稱にして敎相家の名數上の語である。

【要解】地藏が甚れの處より來ると脩山主に問うたが脩は言中の響を知らずして正直に南方から來たものと見えて南方より來ると云つた、更に南方頃日の佛法はと訊けば有り體に問答商量が大層盛んで御座ると答ふ、無所從來の道理も何處有南北の道所も御存知なく頻りと南方の説明をしてゐる、之を憐んで藏云く、我れ日常、自ら田を種へ自ら飯を摶めて喫ふには及びもつかぬことであるわいと、禪道とも佛法とも云ずして日常が佛法になりきり禪道になりきつた處の樣子を示された。脩山主は佛法は三界を出離する道だと習ひ覺へて居た人であるから、田を種へ飯を摶めてゐて佛道らしい修行もせずに、それで三界出離が奈何して出來るで有らうと云ふ疑を起した、甚麼を喚んでか三界と爲す、三界の三界とすべきもの有りや、地藏が手許には三界など云ふものは御座らぬと示されたのである、佛法の音沙汰も絶え、禪道の臭氣も斷えた地藏の這裏を看取するのが本則の要處である。

【著語】口來處を知らずと道ひ得てんや。　マサカ來處を知らないとも道はれまい、マー南方來とでも云ふだらう、萬松ならば知らないと放ねつけて行つたものを、本より去來の有らう筈が無いちや無いか。口好し下載を與ふるに。　上載は東南の風、下載は西北の風のこと、今南方來と云ひや

つたが下載の風で以て東南の風を追つ拂ふが好い、序でに下載の風をも吹き拂うて本來無東西、何處有南北の境界に來つて見るがよい、南方佛法の臭氣などは眞平御免。□行說好し話するに。行と說とは一等のものである、南方の佛法とて別に異りは有るまい、行說一等これ佛法の全面目よ、茲が大切な處である、脩山主言ひ損ねまいぞ。□低聲。お聲が高い、言ふまいぞ言ふまいぞ、自慢らしう大聲を揚げて貰うまい、可惜乎口に風をひかしちや氣の毒だ、燈籠露柱且く低聲、蛙鳴雀躁、終日終夜、聲も立てずに說きづめぢや。□少賣弄。少賣は小賣商人、弄は自慢すること、地藏も小商人と見えて大分御自慢では御座るが甚だ醜いことである、御自慢はお止しなさい、とは云ふものゝ是れが地藏の實情、虛僞氣の無い佛法の丸出だから仕方が有るまい。□猶ほ這箇の在る有り。何處で習うて來たか、まだ三界なんと云ふことを記憶して在つしやる、スッカリ抛り出して忘前失後して御覽なさい、何處に左樣なものが有りますか。□南方は猶ほ可なり、北方は更に甚し。南方の佛法臭きは猶ほ恕すべし、北方地藏のお悟り臭いのは鼻持ちがならぬわい、然し句面では地藏を貶した樣である、底意は大いに卓上したものである、唯學人の空見に墮せんことを慮つた萬松の婆心である。

頌云。宗說般般盡強爲（今日不著便） 流傳耳口便支離（衆僧莫怪） 種田摶飯家常事（不可別有） 不是飽參人不知（要知作麼） 參飽明知無所求（更須請益天童一遍） 子房終不貴封侯（也是靈龜曳尾） 忘機歸去同魚鳥（隨流得妙） 濯足滄浪煙水秋（受用不盡）

【讀方】 宗說般々盡く強爲。耳口に流傳すれば便ち支離。田を種へ飯を摶む家常の事。是れ飽參の人にあらずんば知らず。參じ飽いて明かに知る所求無きことを。子房終に封侯を貴ばず。機を忘じ歸り去つて魚鳥に同じうす。足を濯ふ滄浪煙水の秋。

【字義】 ◎宗說とは清凉の語に「宗通は自ら修行し說通は未悟を示す」と云ふのがある、其本は楞伽經に出てをるので有るが其の文は今略しておく、古人の語に「說に通じて宗に通せざれば日の雲籠を被るが如く、宗に通じて說に通せざれば蛇の竹筒に入るが如く、宗に通じ說も亦通ずれば日の虛空に處するが如く、宗說倶に通せざれば犬の茅叢に吠ゆるが如し」と、宗は自己證得、宗旨に通ずること。說は化他の力量、說敎、講演に長ずることで有る、通は自由自在の意。◎般般とは饒多の意で浩々地と云ふ語の代り。◎流傳耳口とは荀子に「君子の學や耳に入つて心に著き、四體に布き動靜に形はる、端として言ひ慵として動く、一に以て法則と爲すべし、小人の學や耳に入つて口に出づ、耳口の間四寸のみ、曷んぞ七尺の軀を美とするに足らん哉」と。今は小人の學に比す、流傳は耳口四寸の間を流傳するのみと云ふ意。◎支離とは支離滅裂などゝ云つて分散と云ふに同じ。◎子房云々の句は史記留侯世家に「漢の六年功臣を封ず、或る人謂く張良未だ嘗て戰鬪功あらず、高

帝曰く籌を帷幄の中に運らし、勝を千里の外に決するは子房が功なり、自から齊三萬戸を擇ばしむ、良曰く始め臣、下邳に上と留に會せり、此れ天、臣を以て陛下に授くるなり、臣が計を用ゐて時に幸にして中れり、臣願くば留に封せらるれば足れり、敢て三萬戸に當らず」と、此の史的事實を假りて清廉潔白、自らの勳功に誇らずして封侯を退けた樣子を一句に纏め來つたのである。◎濯足滄浪の句は離騷經の漁父の歌に「滄浪の水清まば以て我が纓を濯ふ可し、滄浪の水濁らば以て我が足を濯ふべし」とあるを轉用して、淸濁自在任運無爲の樣子に擬したのである、滄浪は川の名、滄浪の二山に源を發し合して楚の地を流る。

【要解】　本頌八句五十六字の中初めの一句十四字は脩山主の佛法邊に停滯するを呵す、宗說兩通商量浩浩なりと雖も盡く强爲佛法である、其れを南方の悟りだと思つてをる、耳口四寸の間に流傳すと雖も、分別妄計に涉るが故に支離滅裂して自己の佛法とは遠して遠い。次の二句十四字は地藏が種田摶飯を頌し、次の二句十四字は喚麼甚作三界を頌出す、田を植ゑ飯を摶むることは別に珍奇なことで無い、衲僧家尋常の日用光中である、然し此家常は佛法禪道に參じ飽いた人で無くては解るまい、飽參の人には何等求むる處が無い、恰かも張子房が齊一國を領せしめ樣とされたが辭退して諸侯と成ら無かつたが如く、飽參底の人は三界に封せ樣としても辭して三界の衆生たるを冀はない、眞個飽參の客ならば三界などに踢踏する樣な小さな人間ではない。結末二句十四字は地藏桂琛の眞個の境界を頌して眞實衲僧家の家風を唱へ出す、修證功勳の機權を忘れ迷悟凡聖の差別を亡じて任運却來すれば魚鳥を伴とし風月を友として異類中に隨類行すること、恰かも彼の漁父が歌に云ふ如く、滄浪の水清まば清め、以て我が纓を洗ふ可し、濁らば濁れ、以て我が足を洗ふべし、淸むも滄浪の水、濁るも滄浪の水、敢へて水の淸濁に用事は無い、思量分別なき處淸涼々たる煙水一碧の秋なるぞ、これが本地の風光である。本頌の要領は無佛法是れ眞の佛法、無商量是れ眞の祖師意、飽參底なる我が衲僧家の日常を會得せしめんとするにある、本則の大意亦天童の腕力に依つて一段の光輝あるを見ねばならぬ。

【著語】　□今日便りを著けず。　第一則にも出た著語、宗說般々では手の著け樣が無い、一字不說の妙唱を知らぬと見える。□衆僧怪しむこと莫れ。　天童の云ふ通り、大衆怪しむこと莫れ、返照せぬと云爲が別々になるぞ。□別に有るべからず。　家常の事と云つて別に有らう筈が無い、別に有つたら家常と云はれぬ、縱し有つても衲僧が家常の外には出ぬぞ。□知らんことを要して作麼かせん。　天童は不知と云ふが知つて什麼する積りぞ、眞に飽參なら知不知と云ふも閑事業では有るまいか。□更に須らく天童に請益すること一遍すべし。　所求の念無しと云ふけれ共モ一度天童に請益して見ぬことには確と脚下が分らない、萬松の見るところではどうも知不知に涉つて居さうだ。□也た是れ靈龜、尾を曳く。　諸侯に封せられぬと云ふ。無欲の樣だけれ共それが却つて大欲である、三界に居住しないと云ひながら三界を吾が有としてゐるのだ、隱せば彌露はるゝの道理さ。□流れに隨つて妙を得。　罣礙無ければ到る處妙用神通。□受用不盡。　淸濁にも拘はらぬ、

增減にも干からぬ、滄浪一滴の水は一生受用すれども曾て盡きず、五湖の煙景誰あつてか爭はん、不足の無いも尤もじや。

第十三則　臨濟瞎驢

示衆云。一向爲人。不知有己。直須盡法。不管無民。須是拗折木枕。惡手脚。臨行之際。合作麼生。

【讀方】衆に示して云く、一向に人の爲にして己れあることを知らず、直に須らく法を盡して民無きことを管せざるべし、須らく是れ木枕を拗折する惡手脚なるべし、行に臨むの際、合に作麼生。

【字義】◎一向とは只管又は專一の意、一向專念など云ふに同じ。◎爲人とは人を仕立て、世話をすることで師家が學者を仕立てる方法手段を云ふ。◎盡法云々とは長慶上堂の語に「法を盡せば民無し、僧あり出で丶問ふ、民無きことを怕れず、請ふ師、法を盡せよ」と云ふ故事があるから出した、法は法律法令で有つて政府が存分の法令を下したならば人民安逸なるを得ず、師家が本分の爲人をしたならば學人怠慢なることを得ずである、今は民無きことを管せすだから嚴に正令を行じて大地一人の衆生あるを欲せずと云ふ意である。◎拗折木枕とは枕は枕の俗字で木枕のことである、木に限らぬけれども枕は頭を載せて休むものである處から學人が一時落付安心の場處の意に用ゐたのである、拗折は拗り折ることで木枕を取り拂ひ擢破して了ふと云ふ、師家が爲人の樣子を强く云つた語である。◎惡手脚とは惡辣な手腕と云ふ意で、人に油斷を與へぬ、嫌忌がられる樣な逆手段であるから惡と云つたのである。◎臨行之際とは臨終の間際と云ふ意。◎合作麼生とは合には當におなじ、什麼生は支那の俗語で今の如何、どうだ、と云ふ程の意である。

【要解】師家分上の人が本分を盡して一向に爲人度生する時は全身他の爲にして自己を忘却し毫も私を容れない、故に佛祖の正令を行ずること嚴にして其の下一人の安眠するを許さ無い、若し此が吾が止住處など丶高枕で居る者があるならば、其の枕を蹴脱して膝に押し當て丶拗り折つて仕舞ふ樣な逆手段を用ゐる、臨濟が一息截斷の場合に三聖が如何なる作略を現じたか、本則に就いて窺ふがよからう。要は爲人の時は全身爲人になりきつて寸毫も自己を見ず、法に對しては私なくして而も嚴密に之を行ずべきを示された萬松の婆心である。

擧。臨濟將示滅。囑三聖。（老婆臨死三同別）吾遷化後。不得滅却吾正法眼藏。（著甚死急）聖云。爭敢滅却和尚正法眼藏。（伴小心故大膽）濟云。忽有人問汝作麼生對。（虎口裏横身）聖便喝。（當機不讓父）濟云。誰知吾正法眼藏向這瞎驢邊滅却。（重賞之下必有勇夫）

【讀方】 擧す。臨濟將に滅を示さんとして、三聖に囑す、吾れ遷化の後、吾が正法眼藏を滅却することを得ざれ。聖云く、爭でか敢へて和尙の正法眼藏を滅却せん。濟云く、忽ち人有つて汝に問はば作麼生か對へん。聖、便ち喝す。濟云く、誰か知らん吾が正法眼藏這の瞎驢邊に向つて滅却することを。

【字義】 ◎臨濟とは南嶽下の四世、黃檗希運禪師の法嗣、臨濟義玄禪師と云ひ、滅後諡して慧照大師と云はる、曹州南華の人、姓は邢氏、幼にして出塵の志あり、落髮進具して深く禪宗を慕ひ、初め黃檗に在つて參侍すること多年、第一座の啓發に因り三度び佛法の大意を問うて三度び打せられ、山を下つて高安大愚の處に至りしも再び黃檗に回つて師資契會す、大機大用卓として一時に冠たりしが、後鄕に還り趙人の請に徇ひ城南の臨濟禪苑に住す、寺は鎭州城の東南隅にあつて滹沱河の側に臨む、臨濟院は地に因つて得たる名である。入滅の年月諸錄同じからざれども『景德傳燈錄』に據れば唐の咸通七丙戌年（皇紀一五二六）四月十日となす。門下に三聖慧然、興北存奬、灌谿志閑等十餘員の神足を出す、臨濟は禪宗五家の一をなし、宋代に於ては臨濟禪最も盛なりしと云ふ、現今日本に臨濟の一宗あり、曹洞黃檗と倶に禪三派の一と爲す、宗風は『人天眼目』等に載す。三玄三要四賓主四料簡等見るべきものあり、『臨濟慧照禪師錄』一卷あり、就いて看よ。◎三聖とは臨濟の嫡嗣三聖慧然禪師である、鎭州の三聖院に住するに依つて名を得、鄕貫姓氏及び出世年月等諸傳に載せず。◎遷化とは此土の緣盡きて化を他界に遷すの意である、「釋氏の死を涅槃、圓寂、歸眞、歸寂、滅度、遷化、順世と謂ふ、皆一義なり、便に隨つて之を稱す、蓋し俗に異る也」と釋氏要覽に出づ。◎正法眼藏とは『大梵天王問佛決疑經』に「佛言く我れに正法眼藏涅槃妙心あり、摩訶迦葉に分付す」と云ふ文あり、然し是は僞經だと云はれてをる、『涅槃經』に「吾が無上正法は摩訶迦葉に付屬す」の文あり、如來正傳の佛正法の意である、經中に正法眼又は正法藏の文字はあるけれども正法眼藏と云ふ熟字は見當らぬ、面授正傳にして室中の祕訣であるから經文の中に無いのが當然かも知れぬ。眼は能照の義、藏は含藏の義、されば佛の慧眼此の藏に含藏する意であるから正法眼藏の四文字中に佛正法佛慧眼盡く含藏して餘す處が無い、承陽大師が一代の聖敎を『正法眼藏』と名け給ひしも其の謂ひである。◎喝とは喝散と云つて有言無言に拘はらぬ絕言絕慮の樣子を氣合で示す處の全身心の英氣である。◎向這瞎驢邊滅却とは瞎驢は兩眼盲なる驢馬で失明の而も鈍な馬と云ふことである、這の瞎驢の脚下に蹂躙せられて滅茶滅茶になつて了つたと云ふ意である。

【要解】 臨濟入滅に垂んとして三聖の慧然に囑んで云ふ樣には、吾が死後吾が正法眼藏を滅しないで大切に相續してくれよと、三聖は弟子の事なれば何の違背致しませうぞと慰めた、若し忽ち人來つて貴僧の正法眼藏果して如何んと問ふ者あらば何と對へるか、三聖威を振つて大喝一聲、眞の獅子兒能く哮吼し得た、是を聞いて臨濟は吾が正法眼藏は瞎驢の土足に踏み躪られて滅茶苦茶にされて了つたが、誰か之を知る者があるか怎うだと云ひ了つて端然示寂せられた。要處は正法眼藏瞎驢邊滅却にある、正法眼藏は唯密傳密付とのみ心得て受授すべきもの丶如く思ふならば佛法を正傳する

ことは出來ない、人人の自己全身に正法眼藏を得體して初めて佛法は擧揚せらるゝのである、是れが師資素りならざる臨濟最後の爲人垂手である。

【著語】口老婆死に臨んで三回別る。臨濟も老耄たと見える、死に際まで繰返し繰返し七くどくどく人の脚下を穿鑿してをる、然し親切なのにも感心するよ。口甚の死急をか著けん。死にぎわに成つて頻りと三聖に囑む態は醜いぞ、正法眼藏には生滅が有るかな、生死去來猶如作夢と御存知ないのか。口小心と伴はれども故に大膽。正直に爭でか敢へて滅却せんなど、云ふ處は親孝行らしくもあり、小心の樣でもあるが、其の實釋迦も達磨も一口に呑却する底の大膽なる氣力を有してをる、三聖の舌頭に骨なきことを看ることが大切ぞ。口虎口裏に身を横ふ。流石の臨濟、一口に嚙み殺さんずる勢ひは猛まじい、三聖危險ぞや。口機に當つて父に讓らず。三聖は眞の獅子兒だ、一吼すれば百獸腦裂、猛虎の如き師父臨濟も嗣資の一喝に遭ふて倒退三千だらう、親爺の鼻孔をかりて呼吸せぬ三聖の英氣には師匠も辟易さ。口重賞の下必ず勇夫あり。賞罰分明、勇將の下に弱卒なし、此の人在つて臨濟の家風を擧揚したのである。噫、此の師にして此の子あり。此の子とは誰の事ぞ、指を咬へて三聖を羨むにも及ぶまい。

頌云。信衣半夜付盧能（賊見賊智）　攪攪黄梅七百僧（上梁不正）　臨濟一枝正法眼（半明半暗全在今朝）　瞎驢滅却得人憎（心甜口苦）　心心相印（販私鹽漢）　祖祖傳燈（堅壁偸光）　夷平海嶽（拳倒黄鶴樓踢翻鸚鵡洲）　變化鵾鵬（翻手是雲覆手是雨）　只箇名言難比擬（少猶在）　太都手段解翻騰（正法眼藏猶在）

【讀方】信衣半夜、盧能に付す、攪攪たり黄梅七百の僧。臨濟一枝の正法眼、瞎驢滅却して人の憎みを得たり。心心相印し、祖祖燈を傳ふ。海嶽を夷平し、鵾鵬を變化す。只箇の名言比擬し難し、大都そ手段、翻騰を解す。

【字義】◎信衣半夜付盧能の一句は五祖弘忍禪師と六祖慧能禪師との傳法の消息である、信衣は『六祖壇經』に五祖六祖に告げて云く「昔し達磨大師初めて此土に來る、人未だ之を信せず、故に此の衣を傳へて以て信體と爲して代代相承す、法は卽ち以心傳心、皆自悟自解せしむ」とある、衣は卽ち佛衣にして袈裟のことであつて釋尊より迦葉に付屬し次第して達磨に至り、今五祖より六祖に傳持せられた、傳法の信を表する爲の衣であるから信さへあれば衣は無てもよいのである、故に五祖は「衣は爭の端たり、汝に止めて傳ふること勿れ、若し此の衣を傳ふれば命懸絲の如けん」と云はれた、半夜は夜半のことで六祖は夜る三更、師の室に入て衣鉢を受けたからである。盧能は盧氏の慧能の略で六祖のこと、六祖は新州の百姓で家豐かならざりしが爲、柴を市に賣つて生活をしてゐられたが或る時人の讀む金剛經の文を聞いて省發し母を謝して五祖に投じ碓房に在つて一行者たること八ヶ月、大衆と共に修行が出來ないのみならず、人姓をよんで盧行者と云ふ、其の盧行者が夜半

三更に五祖の室に入つて信衣を密付せられたと云ふ句意である。◎攪攪黃梅七百僧の一句は同じ五祖下に神秀上座を筆頭として七百人も雲衲が居た、其れが一盧行者たる慧能に五祖の衣鉢を奪はれたと云つて大騷擾とやつた樣子である、攪攪は亂也擾也とあるから紛亂騷擾の意、黃梅は五祖が蘄州黃梅縣の東禪寺に住せられた處から地に依つて名けた五祖の換名である。盧行者に六祖位を奪はれたと云ふので七百の僧衆が大攪亂をやつて數百人後を逐ふて衣鉢を奪ひ返さんとした、中で慧明と云ふ奴が衆人に先んじて慧能に追及たから、六祖は衣鉢を石上に擲下して、衣は信を表す、力を以て爭ふべけんやと云つて草莽の中に隱れた、慧明は至つて之を提げんとするに重きこと山の如くで有つた、却つて六祖の爲に敎化をうけ言下に大悟したと云ふ樣なことがある、其れ等の故事を取り來つて簡潔に此の二句に纏められたものである。◎臨濟一枝とは臨濟の第一枝と云ふことで三聖をさすのであるが是には文字の緣がある、臨濟黃檗下に在ること三年、適々陳首座の啓發に因つて三度び佛法的々の大意を問うて三度び打せらる、深旨を知らずして辭し去らんとす、首座黃檗に到り問話底の後生甚だ是れ如法なり、若し來りて辭せん時は方便して佗を接せよ、向後穿鑿して一株の大樹と成さば天下人の與めに蔭涼と作り去ること在らんと云つた、是れより大樹和尙と云ひ臨濟を林際と云ふに至る、弟子は大樹の枝葉であつて其の中の第一枝は卽ち三聖の慧然であるから臨濟の一枝と文字を用ゐた、宗意からは臨濟(大樹)は師、一枝(三聖)は資で樹枝一幹、師資一面と見るのである。◎變化鵾鵬とは莊子の逍遙游に「北冥に魚あり其の名を鯤と爲す、鯤の大なる其の幾千里なることを知らず、化して鳥と爲る、其の名を鵬と爲す、鵬の背其の幾千里なることを知らず、怒つて飛ぶや其の翼、垂天の雲の如し」とあるより出た語で變化の大にして而も其の速かなるに比したのである。◎解飜騰とは飜身、騰躍などゝ云つて身輕に轉變し得る樣子である、變通自在と云ふに同じ。

【要解】五祖が三更に信衣を盧行者に付囑した、其れが爲に五祖下七百の高僧が大紛擾を釀し六祖一人を仇敵とした、昔し既に斯樣な例しがあるのに今臨濟は第一枝たる三聖に正法眼藏瞎驢邊滅却などゝ云つて印可證明を與へたから嘸かし三聖は臨濟下凡百の雲水だちから痛く憎しみを受けることであらう、誠に困つたことをしたものだ、底意は昔も今も眞の佛子は鮮少ものであると六祖の例を引いて三聖を讃歎したので此の四句二十八字は本則を裏面から頌じたのである。次に表面から見て臨濟の妙心と三聖の妙心とは月の水中に印するが如くにして、佛燈祖燈相聯なり師資二面なき一正法眼の正傳密付せられた樣子を此の二句八字に明し、其の大機大用を次の二句八字に舒ぶ、海の深きも嶽の高きも差別の儘にそつくり平夷するの大機あり、或は池中の鯤魚忽ち出身して大鵬昇天の大用あつて初めて眞に傳授するに堪へたる者である。結末二句十四字は本則に拘泥して三聖の喝を尊重し、臨濟の滅却邊に窟著するの病を破し、喝も瞎驢邊も箇の名言甚だ結構で比擬し難しではあるが其の言句下に死在してはならぬ。太都我が宗師家の手段には飜騰自在、神變不思議の妙用あることを解すべきである、然し名言を離れて別に飜騰があり變通があるのでは無い、要は各自をし

て正法眼を開かしめ、照用自在の境界を得せしめんとするにある。

【著語】 口賊兒賊智。 五祖の五臟六腑を盗み取つて六祖となつた盧行者は五祖に劣らぬ賊智の長けた奴と見える、然し盗賊同士の出合ひだ、受授すべき物とてもあるまい。口上梁正しからず。上梁は棟梁と云ふに同じ、上に位してをる親玉の神秀初めが騒々しいから七百人の小僧等までが雷同して紛亂するのだ。口半明半暗全く今朝に在り。臨濟一枚の正法眼、半明としたものか半暗としたものか、明暗何れなりや、國家の興廢此の一擧にあり、今日が分けめの戰爭じや、だが明とも暗とも軍配は上げられまいよ。口心甜く口苦し。口では滅却など〵苦々しい言を吐いてるが心では保護を頼んでゐる臨濟の甘つたれ根性が見え透ひてをる、醜いことぞ。口販私鹽の漢。販は賣買すること、私鹽とは官營の鹽を竊かに盗んで賣る奴と云ふこと、心々相印など〵云ふけれど心は一心である。それを私かに賣り下げる處を見ると公然の賣物ではあるまい、心心と云つて二つ物が有ると思つたら大間違ひよ。口壁を鑿つて光を偸む。匡衡と云ふ好學の士が有つたが貧うして燭無し、隣家に燭あれども遠くして逮ばず、乃ち壁を穿つて其の光を引き書を以て光に映じて之を讀んだと云ふことがある、祖々傳燈と云ふが他の燈を偸んだのだらう。自分の光明では有るまい、然し光明は蓋天蓋地一枚の光明なら傳ふべき燈が有るかな。口黃鶴樓を拳倒し鸚鵡洲を踢飜す。黃鶴樓は鄂州子城西北の隅、黃鶴山上に在り、張西軒とも云ふ、黃鶴樓は山を以て名を得、仙人子安、黃鶴に乘じて此の上を過ぐ、故に黃鶴山と云ふと、鸚鵡洲とは黃祖、禰衡を殺し洲の上に埋む、後人號して鸚鵡洲と曰ふ、衡嘗て鸚鵡の賦を爲るを以てなりと。白雲の端和尙臨濟三頓の棒を頌じて「一拳に拳倒す黃鶴樓、一踢に踢飜す鸚鵡洲」と曰つたことがある。黃鶴樓、鸚鵡洲ともに支那の名所で、前者は山、後者は海である所から、拳倒踢飜で夷平にきかし海嶽を夷平すると云ふ頌意に合したものと見える。海嶽を蹴とばし拳り倒すのだから何處にも尻を据えぬ樣子である、何れ凄まじい沒量底の大機用さ。口手を翻せば是れ雲、手を覆へば是れ雨。杜甫が貧交行其の儘の句だ、雲も雨も隻手の翻覆である、別に奇らしいことも有るまい、如何にも自由自在の樣子が知られる。口猶は少きを嫌ふこと在り。天童は語を盡して讚歎してゐるがまだ〳〵足るまい、到底賞めきれるものでは無い、然し讚するは謗するに似たりだから油斷が出來ないぞよ。口正法眼藏猶は在り。滅却したと云ふが猶は正法眼藏が其許に在るでは無いか、イヤ滅却正法眼藏の現成で有らう、亘古亘今不増不減ぢや。

第十四則　廓侍過茶

示衆云。探竿在手影草隨身。有時鐵裹綿團。有時錦包特石。以剛決柔則故是。逢強即弱事如何。

【讀方】 衆に示して云はく、探竿手に在り、影草身に隨ふ、有る時は鐵に綿團を裹み、有る時は錦に

特石を包む、剛を以て柔を決することは則ち故は是、强に逢ふては卽ち弱なる事如何ん。

【字義】◎探竿、影草とは佛鑑の懃禪師の語に「趙州は探竿手に在り、投子は影草身に隨ふ」と云ふのがある。探竿、影草ともに盜賊が人を誑惑す爲に用ゆる道具である。探竿は窓穴、壁穴、節穴などから細長い竿をさし込んで中の樣子を探る道具、影草は隱れ簑の如きもので之を著てしのび込めば姿が見付からないと云ふ道具、何れも日本には無いやうな器械だが泥坊には如何にも必要らしい道具である。◎鐵裹錦團、錦包特石とは圜悟の頌に「錦に特石を包み鐵に泥團を裹む」と云ふがある。其の轉用と見える、鐵は硬きもの、錦團は柔きもの、錦は貴くして又柔かきもの、特石は大石のことで硬くして又賤らぬもの、剛、柔を裹み、貴、賤を包むの意。◎以剛決柔とは易の夬卦の彖に「夬は決なり、剛、柔を決す」とあり、剛を以て柔を制することである。◎逢强卽弱とは溈潭善清禪師曰く「有る時は强に逢ふて卽ち弱、有る時は貴に遇ふて卽ち賤」と、强弱貴賤時に應じて宜しきに隨ふ樣子を喩ふ。

【要解】師家の手中には常に探竿があり、影草が身に隨ついてをるから爲人度生實に自由自在である。故に有る時は表面には鐵の如く硬く見せかけて內面には綿の如く柔かき手段をとる、又或る時は美麗い、貴い錦に見苦しい賤らぬ特石を包んだ樣な方便もとる、對機次第で自由な境界を現する、然し自らの剛を以て他の柔を制するには鐵に錦を裹み、錦に石を包むも是で有らうが、此に强敵の出て來た時には弱と受け答へる手段は怎うしたもので御座らうか、其う云ふ師家が有るかどうじや、德山和尙こそ正に其の人らしい、本則に就て參究せよ。要は兩硬相打てば必ず破るであるから剛に逢ふては柔、强に逢ふては弱と云ふ樣に來機に應じて自由自在の活手段が無くてはならぬと云ふところにある。廓侍者の悟臭英氣に對する德山無事休喝の異意を看取せば以て此の間の消息を知ることが出來やう。

擧。廓侍者問德山。從上諸聖向什麼處去也（在爾鼻孔裏）山云。作麼作麼（迅雷不及掩耳）廓云。勅點飛龍馬跛鼈出頭來（家富兒嬌）山便休去（饒人不是癡）來日山浴出。廓過茶與山。山撫廓背一下（斷送上竿頭）廓云。這老漢方始瞥地（覆車同轍）山又休去（虎頭虎尾一時收）

【譯方】擧す。廓侍者、德山に問ふ、從上の諸聖什麼の處に向つて去るや。山云く、作麼作麼。廓云く、飛龍馬を勅點すれば跛鼈出頭來、山便ち休し去る。來日、山、浴より出づ、廓、茶を過して山に與ふ。山、廓が背を撫すること一下。廓云はく、這の老漢方に始めて瞥地。山、又休し去る。

【字義】◎廓侍者とは廓は法諱の一字で有つて守廓と云ふ、其師承傳記未だ詳かで無い、侍者は堂頭和尙の昵近隨侍の役目で相當な修行と年臘とを經た者の勤むる重い役である。◎德山とは靑原下四世龍潭崇信の法嗣、德山宣鑑禪師のことである。其の門下より巖頭、雪峰等幾多の英傑を出し

た。劍南の人、姓は周氏、弱冠にして出家し律藏及び性相諸經を精究し、特に金剛經を得意とし自ら周金剛王と稱した程で有る、餅を賣る婆子の爲に啓發せられ經疏を燒いて龍潭に投じ、燭を點じて他を接し便ち吹滅するの當處に省發し、後ち德山に住して大いに宗風を開き、化門甚だ熾んで有つた。唐の咸通六乙酉年（皇紀一五二五）十二月三日安坐して寂す、壽八十六、臘六十五、勅して見性大師を謚せられた。◎從上諸聖云々の問答は會元の五、雲巖の章にも出てをる、曰く「僧問ふ從上の諸聖甚麼の處にか去る、師良久して曰く作麼作麼」と、過去出世の古聖先德、釋迦も達磨も甚處へ去つたとか云ふ問ひ、作麼作麼は何か何か、どうしたどうしたと云ふ意で擬議の語である。◎勅點飛龍馬、跛鼈出頭來とは勅點は天子の勅命を以て點呼すること、飛龍馬は馬八尺以上を龍と爲すと云ふから、駿足逸馬である、跛鼈は跛は鼈馬の名なり、其の鈍きを跛鼈の行が如しと云ふから跛足で鼈の歩く樣な恰好の鈍馬、飛龍馬とは極端と極端とである、荀子には人の才性に比して曰く「彼の才性の相懸るや、豈に跛鼈と六騎足との若くなるのみならんや」と、出頭來は出て來たと云ふこと、句意は快速の駿馬を點呼したら跛鼈の樣な鈍馬が出て來た、全然、目的の逸れた樣子である。◎過茶は過は過來と云つて持つて來て手に渡すことである。御茶を汲んで差し上げたと云ふ意。◎瞥地とは地は助字で瞥はちらりと見る樣子、ちよつと解かつたかと云ふ意。◎休去とは休喝し去ると云ふ意であるから對手にならず、取り合はずして休喝て去つたと云ふことである。

【要解】　廓侍者は坐禪をした功勳が鼻に懸つて、悟了邊の英氣當るべからず、德山は禪だの悟りだのと云ふことは忘れ果て、溫順柔軟にして鋭鋒を避けながら而も親しく接得せらるゝ樣子を窺はねばならぬ、機に應じて變に處するは爲人底の妙手で有る、平常豪邁峻烈なる德山にして此の手段あるは卽ち德山の德山たる所以であらう、德山許りでは無い、人の世に處するには當に此の自由を領得すべきである。本則の文相は解し易し、今は只その要のみを云つてをく。

【著語】　口儞が鼻孔裏に在り。　什麼の處など、問ふには及ぶまい。餘所には無いぞ、汝の鼻孔から出息入息して居るのぢや。口迅雷耳を掩ふに及ばず、霹靂一聲、電光石火、耳を掩ふ間も眼を覆ふ際も無い、作麼作麼の語の響きを云つたのである。廓侍者却て聾す、此の響が耳に入らぬのか、あゝ、憫れな者よ。口家富んで兒驕る。　成金黨の息子は贅澤だ、悟つた計りと見えて大層鼻息が荒い、德山をやりこめ樣など、云ふ處は世間見ずの坊ちやんだナ。口饒人是れ癡なるにあらず。饒人とは饒州の人と云ふこと、饒州の人はゆつたりとして一見した處ぼんやりしてゐるけれども鈍物でも癡白でも無い、鈍い樣な處が却つて油斷のならぬ處ぢや、山便ち休し去るに眼を著けよと云ふ萬松が婆心である。五雜俎の第十六卷の故事を引いて饒人を德山に比した。口斷送して竿頭に上す。　上れる丈け上せてやる積りと見える、ステッペン迄行つたら落ちて來るだらうよ。德山も仲仲人がわるい、口覆車轍を同うす。　昨日ひつくり覆つた轍路へ今日亦車を引き込んで轉覆さしてゐる、縱橫自在の轉變を知らぬ、昨日も今日も同一轍、進むを知つて退くを知らない、困つた坊さんだ。口虎頭虎尾一時に收む。　此の大蟲、又休し去る。　頭尾ともに收めて了つた、影草身に隨ふ

德山ぢや、全身を藏しても毒牙毒舌廓侍者を嚙みつぶしてゐはせまいか、座下の諸人も油斷さつしやるなよ。

頌云。覿面來時作者知（味者ハ不覺）可中石火電光遲（已過新羅）輪機謀主有深意（埋兵挿鬪）欺敵兵家無遠思（深入廬庭）發必中（慣得其便）更謾誰（併贓提擬）腦後見腮兮人難觸犯（曾經蛇咬）眉底著眼兮渠得便宜（佯打不知）

【讀方】覿面に來る時、作者知る。可の中石火電光遲し。機に輸く謀主に深意有り。敵を欺く兵家に遠思無し。發すれば必ず中る、更に誰をか謾せん。腦後に腮を見る、人觸犯し難し。眉底に眼を著く、渠れ便宜を得たり。

【字義】◎覿面とは覿は見也ともあり、又覿と面とは別なり、散文なれば面も亦覿に爲るとあるから眞正面に見て取ると云ふ意。◎作者は作家に同じ、正師家又は衲僧家と云ふ意。◎輪機とは輪は勝負を輪贏を謂ふから、輪は負の字にあたる、機は來機とか對機とか云つて相手のこと。◎欺敵とは欺くは敵を侮ること、馬鹿にしてゐるを云ふ。◎腦後見腮とは翠巖の語に「腦後に腮を見ば與に往來すること莫れ」とあるが如く、後腦に腮の樣なものゝ出て居る奴は泥坊系の人間だから與に道中するな、胡摩の灰だから危ないと云ふ意、骨相とか人相とか云ふ側から見た古來の傳說と見える。◎得便宜とは宜い便りにあり得たと云ふのであるが、此の得便宜を手離した處の落便宜と云ふのが無くてはならぬ、一分の作略のみだ未だ自由發展の氣力を缺くを云ふ、今は貶した意に用ゐられてある。

【要解】初めの二句十四字は德山勘見の眼睛を頌し、第三第四の二句十四字は兵家の軍略に比して、德山と廓侍者との深謀、淺慮を敍べ、更に次の二聯六字で德山の名手は百發百中なるに、敵の之を侮りしを褒貶し、最後の二句十八字に德山老漢の觸犯し難きと、廓侍者の具眼の士ながらも本分の作略を缺いた樣子とを本則にかけて頌じた處は天童一流の巧みなる波瀾を以て此の一則に生氣あらしめた其の手際に感歎せざるを得ない。頌意を要言すれば德山は作家であるから僅かに對機を瞥見すれば肺腑を透徹する、其のすばやきこと石火電光と雖も尙遲しと云ふ程である、敵に勝を讓る謀君の深意は計り難く、敵を輕んずる兵略は目先計りで遠慮に乏しい、德山は前者、廓は後者、それも其の筈、前者は射手は巧者、發すれば必ず中る名人、更に誰とて彼を謾るものが有らう。然るに後者は慢つて懸つた、今德山は恰かも大賊の相ある者の如くにて觸りつくことも犯すことも出來ない處の巨魁、廓侍者とて眉毛の下に兩の眼を見開いて居るからには具眼の士だ、堂々と戰を挑んで勝利を得たは結構だが惜しいことに理には勝つたが術には負けたと云ふ體裁である。

【著語】口昧者は覺えず。自己の眼睛を昧す者は他の脚跟は見えぬ、德山の明眼で無くては知れまいぞ。口已に新羅を過ぐ。「新羅は百濟の東南五十餘里に在り、其の地は、東大海に濱し南北高

麗百濟と接す、魏の時には新盧と云ひ、宋の時には新羅と云ひ、又は斯羅と云ふ」と『南史新羅國傳』に有る、雲門の語に「箭、新羅を過ぐ」と云ふのがある、支那から云へは宋代では三韓は外國で大層遠方にある處から事の既に過ぎ去つたことを箭、新羅を過ぐと云つたものらしい俗にとつくの昔にと云ふ程の意、今はスバヤイ樣子を云つたのである、德山の機變如何にも覿面看破了だ。□兵を埋んで鬪を掉む。德山はサット兵を退いたが却つて兵を伏せて戰鬪を挑む積りかも知れん、深謀甚だ畏るべし、伏兵と云つて別物では無い、平日油斷なき修行がそれぢや、實際に戰場に臨んで初めて眞の大丈夫なることが知れる。□深く虜庭に入る。進んで計り居て自ら敵陣に飛び込み、遂に虜となつて終つた、到底生きては歸れさうも無い。□其の便りを得るに慣る。練習がつんでる、慣れきつたものだ、一つも的星を外さぬ、流石は德山和尚だ。□贓を併せて捉獲す。贓は贓品と云つて泥坊の盜んだ贓品ぢや。併せてとは盜賊も贓物も一度にと云ふ意、泥坊も活捉へ贓品も收獲たと云ふは廓侍者の今日の慘狀だ、德山の一箭に身心を擧げて瞞旰せられた樣子である。□曾て蛇咬を經。古人の語に「一度び蛇齩を著くれば斷井索を見るを怕る」と云ふがある、一度蚖蛇に咬まれたことのある者は井戸索の斷れたのを見ても怕ろしがると云ふ意味で、今天童も一度は恐怖目に會つたと見えて大層怕ろしがるぢやないかと萬松の揶揄である、其の實萬松も經驗したことがあるから人の世話をやくのだらう。□佯つて知らざる打す。吳子論將篇に「其の北ぐるを追ふ時は佯つて及ばざる爲す、其の利を見る時は佯つて知らざる爲す」とある、德山は特と馬鹿顏

色をして汝に便宜を得させてやつたのぢや、好漢却つて落便宜に墮つ。

第十五則　仰山挿鍬

示衆云。未語先知謂之默論。不明自顯謂之暗機。三門前合掌兩廊下行道。有箇意度。中庭上作舞後門下搖頭。又作麼生。

【讀方】衆に示して云く、未だ語らざるに先づ知る、之を默論と謂ふ、明さゞれども自ら顯はる、之を暗機と謂ふ。三門前に合掌すれば兩廊下に行道す、箇の意度あり、中庭上に舞を作せば後門下に頭を搖かす、又作麼生。

【字義】◎默論、暗機とは『人天眼目』中卷、潙仰宗の項に圓相因起と題して、明州五峰の良和尚云く、圓相は總て六名あり、曰く圓相、曰く暗機、曰く義海、曰く字海、曰く意語、曰く默論』と、默論は默識とも默語とも云つて未語にして通ずる樣子、暗機は又投機とも云ひ、心機が暗々裡に通じて未形にして意の合する樣子である、二語ともに知音同士が肝膽相ひ照して其の間毫髮の隔礙なきを云ふ、今は作家同志が寄り合ふて佛法商量の有樣に名けたのである。◎三門とは三解脫門の略、三解脫門とは空門、無相門、無作門である、今寺院の一門に名けて三門となすは是れに由る、寺院の法堂は卽ち涅槃に喩ふ、持戒修道して涅槃に至ることを求むる人の居る處なれば此の三門に

出つて入るを至當とす。◎兩廊下とは僧堂の東西兩邊に在る廊下である。◎行道とは道を歩行ことであるが今は僧堂の廊下を約一時間も坐禪をして後、血行をよくするため脚節の運動がてら一息半歩と云ふ徐かさで歩くことである、是を經行とも云ふ、香嚴の頌に「三門前に合掌し、兩廊下に行道し、中庭上に舞ひをなし、後門外に頭を搖かす」と云ふがある、此の語から爲られたのである。

【要解】知音同士が寄り合へば彼れの未だ一語を發せざるに五臓六腑を見ぬき了る。未だ眉を顰め、口を歪めざるに彼の心事を徹見する、之を默識心通、暗機投合とも云ふのである、其の樣子を云へば三門の前で掌を合せれば東西の廊下では經行をする、然し合掌する者と行道する者と二人を認めてはならぬ、三門前と兩廊下とを遠方に見たらば大きに見當が差ふ、擧一明三、目機銖兩の活作略が無くてはならぬ、今は言語動作に關はらずして互ひに箇の意度あり。合掌行道する以上は意志識度が無いとも云へぬ、この識度は分別にあづからぬ意度である。中庭の上りで足拍子をとれば後門の下りで頭を振つて頻りと調子を合してゐる、又作麼生、何と名けたものであらう、一體意度ありとしたものか、實は同じことを云つてゐるのだが本則に引きつける爲に態と研究の餘地を與へたのである。要は三門前も兩廊下も、中庭上も後門外も一蒲團上の右轉左轉である、知音同士なら一默投機で證契即通だが諸人即今會したかどうだ、諸子幸ひに本則に就いて參究するがよからうと云ふ意である。

擧。潙山問仰山、甚處來（不是不知來處）仰云、田中來（爾爲甚落草）山云。田中多少人（只父子兩箇）仰。挿下鍬子叉手而立（放去較危）山云。南山大有人刈茆（打草驚蛇）仰。拈鍬子便行（收來太速）

【讀方】擧す。潙仰、仰山に問ふ、甚麼の處より來る。仰云く、田中より來る。山云く、田中多少の人ぞ。仰、鍬子を挿下して叉手して立つ。山云く、南山大いに人有つて茆を刈る。仰、鍬子を拈じて便ち行く。

【字義】◎潙山とは百丈懷海の法嗣、潙山の靈祐禪師である、即ち黄檗の法眷にあたる、福州長谿の人で姓は趙氏、十五にして親を辭し、建善寺の法常律師に就いて抗州の龍興寺で剃髮し、大小乘の經律を講究すること多年、二十三の年、初めて江西に遊んで百丈大智禪師に參見し直ちに許されて入室し、遂に參學の首に居るに至つた、宗乘を擧揚すること凡そ四十餘年、唐の宣宗大中七癸酉年（皇紀一五一三）正月九日盥漱敷坐怡然として寂を示さる。壽八十三、臘六十四、勅して大圓禪師と諡せらる、入室の弟子四十一人、仰山慧寂、香嚴智閑、靈雲志勤等最も其の神足と稱せらる、殊に仰山は潙山の宗旨を擧揚し其の道風を振興せしが爲め、後世潙仰宗の名を爲し、五家の一に數へられる樣に成つた、其の宗風は父慈にして子孝あり、上令すれば下從ふと云ふ具合で極めて穩密を貴んで鋒鋩を顯はさゞる一家風を爲してゐる、潙山の『警策』一卷は禪門乍入の學人必ず讀むべきの良書である。◎仰山とは潙山靈祐の法嗣仰山慧寂禪師である、韶州懷化の人、姓は葉氏、年十五

にして出家を請ふも二親許さず、二歳を經て師、手二指を斷つて敎へて父母に求めて出塵を迫る、誓ふらくは正法を得て以て父母の劬勞に答へんと、遂に南華寺の通禪寺に依つて落髮、遊方して初め耽源に謁し已に玄旨を悟り後潙山に參じ其の堂奥に達したのである、潙山に盤桓すること前後十五載、潙山の密印を受けて衆を領して王莽山に住するも化緣未だ契はず、遷つて仰山に止まる、學徒臻り萃る、仰山より觀音に遷る、接機利物、禪宗の標準と稱せらるゝ程で有つた、韶州の東平山に疾を示し、唐の大順元庚戌年（皇紀一五五〇）に化を遷す、壽七十七、膝を抱いて寂す、勅して智通大師と謚せらる。◎鍬子とは鍬は鍬也、渠を開く所以の者とある、卽ち田を耕す鋤鍬のこと、子は助字、椅子、拂子などの子と同じ。◎叉手とは叉は交叉と云つて相まじはる意、叉手は兩手相錯はることで俗に拱手を呼んで叉手と云つてをる、左手を下にし右手を上に重ねて胸に當つ、之を叉手當胸と名く、起立して兩手を胸に交錯し當つるは威儀嚴然たる容子にして禪門一齊の規則となつてをる。◎南山大有人刈茆の句は長沙景岑の語なりと云ふ、南山は天子の正位を云ふ、刈茆は尊貴の卑位に下つて百姓姿で草刈りをすると云ふ意で偏位を明した、大唐の天子茆を刈ると云ふに同じ、茆はちがや又は白茅と云つて雜草の總稱に用ゐたのである。

【要解】潙山が仰山の歸り來るを見て甚處から來たと問うた、仰山卽今の立脚地を驗さんとしたのである、仰山は農園でも耕やして來たものと見える、田中より來るとやつた、向下に居るらしい、重ねて田中には多少の人かあると急處を衝いた、向下に墮在して眞個那人の本面目を御忘れでは御座らぬかと云ふ勢ひ、すると仰山直ちに鍬子を地に挿下んで叉手して立つた、天上天下唯我獨尊の樣子、然し是は亦向上の死漢たるに非ずやと云ふ師匠の婆心、山云く南山に大に人有つて茆を刈る、これ向上の宛轉、さすがは仰山さし置かず鍬子を拈つてサッサと出て行つた、向上向下自由自在の活機輪を轉じてをる、潙仰父子は默論にして通ずるの作家、暗機にして合するの知音である、固より向下に坐著せず向上に死在せず、去來自由、或る時は寶几珍御、或る時は狸奴白牯、道に罣礙なき日用の佛法を示されたのが本則の大要。

【著語】□是れ來處を知らざるにあらず。來處を知つてゐて來處を問ふ、油斷がならぬ、來處を問ふにあらずとせば何處を問うたもので有らう、迂濶してゐてはならぬ、脚下御用愼。□爾甚として草に落つ。草に落つは落草と云つて草間に落魄することである、爾仰山甚うして其の樣に落ちぶれたぞ、田中の百姓親爺とまで成り下つたは氣の毒ぢや、イヤ向下に墮しての活機用は結構じやが泥臭く成つて貰ひ度く無いものだ。□只父子兩箇。父子兩箇ぎりだらう、多少の人などゝ白ばくれ無くてもよい、兩箇のみ有つて餘人所不見さ、潙仰兩人なりと雖も其實は父子一面よ。□放去は較危し。向下を放げ去てゝ向上に立つたはよいが向上の死漢となりはせぬかな、蓮華臺上も危險千萬な處で御座るぞ。□草を打つて蛇を驚かす。茆を刈ると云ふ語から草を打つと云ふ文字を出したものと見える、天子刈茆などゝ御門違ひの方面から仰山を驚かす積りだなナ、マサ

カ仰山だつて辻の石地藏じやあるまいし朝から晩まで突つ立つて計りも居まいよ。口收來は太だ速かなり。收去は較危しと思つたが收來は太だ速かで美事々々、仲々善い幕切れぢや。

頌云、老覺情多念子孫（婆心太切）、而今慚愧起家門（三十年不少鹽醋）、是須記取南山語（貴人多忘）、鏤骨銘肌共報恩（恨心不捨）

【讀方】老覺情多うして子孫を念ふ、而今慚愧して家門を起す。是れ須らく南山の語を記取すべし。骨に鏤め肌に銘じて共に恩を報せよ。

【字義】◎老覺とは老熟せる覺者と云ふ意、今は潙山のことを云ふ、老の字は情多うして子孫を念ふの句全體にかかつて意太だ深し。◎子孫とは弟子の仰山を指した語であるから孫の字は虛字の樣なれど其の意は遠く兒孫に係つてゐて老の字に對照して面白い。◎慚愧とは「慚は內自から羞ぢ恥づ、愧は發露して人に向ふなり」と涅槃梵行品の會疏にある、內慚外愧と云つて身心內外ともに慚愧を知る心である。◎鏤骨銘肌とは顏氏家訓に「平昔の指を追思す、肌に銘じ骨に鏤む、徒に古書の誡め目を經、耳を過ぐるのみに非ず」と、忘れんとして忘るゝ能はず除かんとして除く能はざる處の深刻なる印象を云ふ、鏤銘の文字に對して轉句に記取の語あり、看るべし。

【要解】本頌は七言の絕句、起承の二句十四字に本則を頌出し、轉結の二句に本則の意を擧して天下學道の人に示す、潙山老覺は子孫たる仰山を念ふの情深くして末の末迄案じての垂誡、子の仰山は而今に父の慈を知り自らの身心を慚愧して父祖の家業を興し門風を揚ぐる孝行人じや、天下の諸人も潙山が南山大いに人有つて茆を刈るの語を記憶取持して、骨に鏤め肌に銘じて此の老覺の切情に報答せよ、父の慈を知る者は卽ち慚愧を知る、慚愧を知る者は卽ち恩を報ず、天下の衲僧、彼仰山に讓らず須らく慚愧を知つて老覺の慈心に答ふべきである。要は向上に死守せず向下は墮せず、悟邊に滯らずして證上の修が肝心である、悟後の修行とは卽ち下化衆生心で老覺の慈心も亦度衆生心である、老覺に報答する端物は卽ち驢胎に入り馬腹に入つて衆生を化益する是れ證上の修の引轉であるぞと云ふのである。

【著語】口婆心太だ切なり。潙山の老婆心切徹骨徹髄じや。口三十年鹽醋を少かず。三十年とは一生と云ふも同じ、鹽からいものと酷いものとを少いては暮していけない、意は家門を起すと云つて別なことをするので無い、一生涯鹽醋を少くことの出來ぬと同じに吾人の一生涯一擧一動を忽諸にせぬと云ふ處にあるのだ、起居動靜の上に眞實慚愧を知らば家風期せずして自から揚る。口貴人多く忘る。喉元すぐれば熱さ忘るゝの類で貴人になると匹夫の時を忘れる、向上には止まり易い、天童の云ふ通り大唐の天子茆を刈るの語能く記取するがよい、貴人の位に誇つてゐると扶持に離れて仕舞うぞ。口恨心捨てず。怨恨の心と云ふ者は終生忘れられ無いものである、終生どころか此の恨みは死んでも忘れぬと云ふ人さへある、報恩の志も恨心の如く終生忘れず、死んでも忘れぬと云ふ樣に心懸けて貰ひ度い、日日の行持これ報恩の端的、寸時も放過せぬ處に佛祖と

相見じや。

第十六則　麻谷振錫

示衆云。指鹿爲馬握土成金。舌上起風雷眉間藏血刄。坐觀成敗立驗死生。且道是何三昧。

【讀方】衆に示して云く、鹿を指して馬と爲し。土を握つて金と成す、舌上に風雷を起し、眉間に血刄を藏す。坐ながらに成敗を觀、立どころに死生を驗む、且らく道へ是れ何の三昧ぞ。

【字義】◎指鹿爲馬とは『陸賈新語辨惑篇』にある故事、秦の二世皇帝の時、趙高と云ふ丞相が鹿に駕て行幸に從た、王曰く丞相何爲ぞ鹿に駕る、高曰く馬なり、王曰く丞誤れり、鹿を以て馬となす、高曰く陛下臣が言を以て然らずとせば願くは群臣に問へと、群臣半ばゝ鹿と言ひ半ばゝ馬と言ふ、此の時に秦王自から其の目を信ずること能ずして終に邪臣の說に從つた、馬と鹿とは形の異ること人の皆知る處である、然るに自から是非を分別すること能はずして却つて他の說に從ふが如きは闇昧も亦極れりと云はねばならぬ、愚人を稱して馬鹿と爲すは蓋し此に始まるか。故事は鹿を指して馬と爲した愚昧を示したもので有るが、今は之を善用して諸法本來無自性の上から、宗師家が臨機應變の手段を取る樣子に喩へたのである。◎握土成金とは百丈の語に「土を撮つて金と成し、金を撮つて土と成す」と云ふがある、變通自在の巧手を言ひ詮はした文字である。◎舌上、眉間の兩句は衲僧の活機用を示した語で、一言以て天下を撼かし、一睨以て三軍を慴伏せしむると云つた樣に全身隙間の無い應化の手段を云ふ。◎坐觀成敗、立驗死生とは宗師家は卽ち法戰場中の大宗將で有ると云ふ處から來機學人の心事を洞察して殺活自在、與奪縱横、爲人度生をするに巧妙なる老手を施す、成敗も死生も其の場を立たずして見てとるから坐ながらと云ひ立どころと云つたので、直下とか驀直とか云ふ程の意味である。◎三昧とは梵語のサマーデー（samādhi）にして音を轉じて三摩地、三摩提、三昧と云ふ、等持と譯す、定に七名あつて等持は其の一である、定を修すれば心を一境に住して動かざるが故に正心行處とも云ふ、今は坐禪の活用に名けた語で有る。

【要解】吾が禪門の宗師家は千變萬化の妙用を具してをる、鹿を指して馬と爲し、馬を指して鹿とすることもある、土塊を握つて黄金と爲し、黄金を以て糞土とすることもある、法に定法無し、法の本法もと無法のものなれば鹿と云ひ馬と云ふも二物あるにあらず、黄金と云ひ土塊と云ふも亦二法あるにあらず、是の如き轉身自在の佛祖の事なれば一たび舌頭を動かせば盡天地を震動せしむる處の風雷を起し、眉宇一たび搖げば天下人を殺活する處の血刄を藏してゐる、說默ともに能殺能活能縱能奪の機用を有する衲憎なればこそ坐し乍ら天下の成敗を觀察し、立ちどころに學人の死生を試驗することが出來るのである、成敗を超越し死生を超出せる衲僧にして初めて其の分あり、是れ如何なる活三昧に出づる者なるか、麻谷章敬の本則に就て參究するがよい、要は是不是を論ずる者は

即ち是不是間の人、法は是不是の論量を超出す、衲僧家は人法是非の對待を絶す、故に是と拈じ不是と拈ずるも佛祖隨宜の轉身である、親しく會取せんとする者は本則に就いて是不是を辨ずるがよいと云ふのが萬松の婆心である。

擧。麻谷持錫到章敬。遶禪牀三匝。振錫一下。卓然而立。可嗟有禪敬云。是是。且信一半谷。又到南泉。遶禪牀三匝。振錫一下。卓然而立。來朝泉云。不是不是。也且信一半谷云。章敬道是。和尚爲什麽道不是。更獄逞王看泉云。章敬即是。是汝不是。雪上加霜此是風力所轉。終成敗壞。棺木裏瞠眼殺人須見血

【讀方】擧す。麻谷錫を持して章敬に到り禪牀を遶ること三匝、錫を振ふこと一下、卓然として立つ。章敬云く、是是。谷、又南泉に到り、禪牀を遶ること三匝、錫を振ふこと一下、卓然として立つ。泉云く、不是不是、谷云く、章敬は是と道ふ。和尚什麽としてか不是と道ふ。泉云く、章敬は即ち是、是れ汝が不是。此れは是れ風力の所轉、終に敗壞を成す。

【字義】◎麻谷とは馬祖道一の法嗣、蒲州麻谷山の寶徹禪師のこと、傳記未だ詳かならずと雖も馬祖下有數の神足である、一日馬祖に隨つて行く次で問ふ、如何なるか是れ大涅槃、祖曰く急、師云く急は箇の什麽ぞ、祖云く水を看よと。◎錫とは錫杖のこと、二股六環（迦葉佛の製）又は四股十二環（釋迦佛の製）より成る、金屬製のものを錫と云ひ三尺五尺の木杖頭に冠して持つ。錫杖經に云く「佛、比丘に告げ玉はく、汝等應に錫杖を受持すべし、所以は何ぞ、過去未來現在の諸佛皆執る、故に又智杖と名け又德杖と名く、智行功德の本を彰顯する故に、聖人の表幟、賢士の明記、道法の幢」と、地藏菩薩、阿難尊者等の像は多く錫杖を持つ、禪家の上堂、行乞等にも亦之を用ゆ。◎章敬とは馬祖道一の法嗣、京兆府章敬寺懷惲禪師のこと、泉州同安の人、姓は謝氏、大寂に心印を受け初め定州の柏巖に住し、次に中條山に止る、唐の元和の初め憲宗詔して上寺に居らしむ、參禪者輻輳せりと云ふ、唐の元和十三戊戌年（紀皇一四七八）十二月二十二日示寂、勅して大覺禪師と謚す。◎遶禪牀三匝とは恭敬を表する禮儀であるが禪者の師家に相見する儀式では無い、經の結文などに遶佛三匝とか右遶三匝とか云ふ語があるが、是れは皆歡喜の樣子を現はしたものである、現今でも遶行とか遶誦とか云ふのは其の形式が傳來したもので有らう、今此では章敬が坐禪して居られた牀邊を三たびグルッと遶つたと云ふことである。◎南泉とは同じく馬祖の法嗣にして、南泉の普願禪師である、傳は既に第九則に出してある。◎風力所轉云々とは維摩經の方便品に、「是の身は無作、風力の所轉なり」とあり、又楞嚴經の第五卷に「此の世界及び衆生の身を觀ずるに皆是れ妄緣、風力の所轉なり」とある、今は是非を論量する人も法も元是れ粥飯の熱氣、風力の所轉である、相對的の現象なれば生滅敗壞に涉ること有りと抑へた語である。

【要解】麻谷の寶徹禪師が悟つた計りの時と見える、同門なる章敬の懷惲に到り錫杖を振り立つて坐禪の牀を遶ると三度、卓然として起立した、相見の禮に嫺はず卓犖不羈唯我獨尊の氣勢を示した、是を見た章敬は是是と褒めた、見上げた禪者だ立派な獨尊佛だと稱贊した樣だか迂濶ゝゝあてには ならぬ賞め方である、同じく法眷なる南泉の普願に到りて、前の如く卓然として獨立すると、南泉は不是不是と之を貶した、章敬の下で是是と賞められて大いに得意に成つて南泉に到ると南泉に不是不是と云はれたので悟熱の高い麻谷のことだから、頗る御機嫌が惡い、章敬は是と道ふ、和尚什麼としてか不是と道ふと詰つた、南泉云く、章敬は卽ち是である、否定はしない、唯是れ汝が不是なるのみ、大層鼻息の荒い尊公も、是不是の名相も畢竟するに是れ風力の轉ずる所で有つて一も自性の存する無く相狀の得べきものは無い、風力の所轉なれば終に敗壞を成す、粥飯の熱氣、夢中の寐語で有るぞと是不是も禪道も佛法も悉皆奪つて麻谷を赤裸々にして終つた槪がある、是不是を擔ぎ回つてゐる間は眞の悟りで無い、悟迹を泯絕して愚の如く魯の如くなる時初めて潛行密用、自から現はるゝのである。

【著語】口可憐だ禪あり。卓然として立つた樣子は如何にも悟りのホヤ〳〵らしい、禪機が甚だ荒い、イヤ臭ひが鼻についてならぬ。口且らく一半を信ず。是々と仰しやるが全然許した譯でも有るまい、上下の品評は暫く見合せ、先づ半信半疑として置かう。口來朝再に楚王に獻じて看よ。第二則の示衆に卞和三獻と有つた、あの故事である、安國弘瑫禪師の語に「璞を抱いて須ゐず頻りに淚を下すことを、來朝更に楚王に獻じて見よ」とあるから此語を出したものと見える、卞和が璞を楚の靈王に獻じて一足を刖られ、再び武王に獻じて又一足を刖られた、麻谷も二度卓然として立つた處は卞和が兩王に璞を獻じたに似てをる、卞和は來朝文王に依つて眞玉なることを知られたと云ふから麻谷も眞玉か怎うかモー一度來朝に獻じて見てはどうか、然し他の鑑定に依つて眞贋を分つ迄も無からう。口也た且らく一半を信ず。不是不是と云はれるが全然不是と云ふのでは有るまい、是是も一半を信ず、今又不是不是も一半を信じて置かう。口棺木裡に瞠眼す。棺桶の中に這入つていゝやな眼つきで睨んでをる、是不是の間に陷つて什麽としてか不是と道ふなどゝ云つた其の時の有樣を皮肉に著語したのである、然し麻谷は生か、否、棺木裡にあり、死か、否、瞠眼す、生死にも居らず是不是にも居らぬ境界を萬松は見拔いてをる。口雪上に霜を加ふ。是の上に不是、不是の上に是、南泉も餘計なことをする男だ、妄想の上は塗りだらう。口人を殺しては須らく血を見るべし。蛇の生殺しではいかぬ、是の不是のと云ふ其喉笛に止めを刺した南泉は實に偉い、然し南泉の御手柄を賞讃する計りではダメだ、人々も一つ是不是の根元を截ち斷るがよからうぞ。

頌云。是與不是（細腰ノ鼓子兩頭ニ打ツ）　好看捲繢（刺頭在裏、許了也）　似抑似揚（手擡手搽）　難兄
難弟（頭高頭低）　縱也彼既臨時（翻手是雲）　奪也我何特地（覆手是雨）　金錫一振

太孤標（脫塵離俗）**繩牀三遶閑游戲**（因行掉臂）**叢林擾擾是非生**（樣子看戲）**想像髑髏前見鬼**（家有白澤之圖必無如是妖怪）

【讀方】是と不是と、好し捲襀を看るに。抑するに似たり揚するに似たれども、兄たり難く弟たり難し。縱也彼れ既に時に臨む、奪也我れ何ぞ特地ならん。金錫一たび振うて太だ孤標。繩牀一たび遶つて閑りに遊戲す、叢林擾擾として是非生ず、想ひ像る髑髏前に鬼を見ることを。

【字義】◎捲襀とは捲は木を屈るの盆、襀或は續に作る、圈套と言はんがごとし、俗に罠と云ふほどの意。◎特地とは態と、殊更にの意で地は助字である。◎孤標とは孤は獨立の樣子、標は標榜又は半標の意で、謂ゆる萬象之中獨露身と云ふ氣高さを云つたのである。◎繩牀とは禪牀のことである、支那の昔しの禪牀は繩でかゝつて造られてあつたものと見える、如何にも質素に出來てゐた、日本の現今の僧堂の樣に疊を敷いたり立派な椅子などは置いて無かつたのである。◎游戲とは心に罣礙無く、任運無作にして法の自在を得たるを云ふ、悟の極致に達せる心理狀態をさす語、坐禪を游戲三昧とも云ふ。◎叢林とは和合衆の安居同學する場處に名く。大論に曰く「僧伽、秦には衆多と曰ふ、比丘一處に和合す是を僧伽と名く、譬へば大樹の叢聚せるが如し、是を名けて林と爲す、一一の樹名けて林とせず、一比丘名けて僧と爲ざるが如し、諸和合しての故に僧と名く、僧聚る處を叢林と名くることを得たり」と、名義集の三に「梵には貧陀婆那（Vindhyavana）此には叢林と云ふと、檀林と云ふ名も此の譯語である、今は僧侶の多く集まる禪林より轉じて安居の僧集を呼ぶに名く。◎擾擾とは喧喧擾擾又は紛擾、擾亂などゝ熟字し、いづれも入り亂れて適從する處を知らぬ樣子である。◎髑髏前見鬼とは九峰の語に「若し是の如くならずんば髑髏前に鬼を見ること無數ならん」と云ふより來たのである、髑髏、清淨なる白骨、鬼は鬼神卽ち幽靈のことである、髑髏には何事も無いけれ共人が恐怖の念を懷いて累々たる髑髏裡を通過すると神經からして無數の幽鬼を出し自ら見て怖れると云ふ意。

【要解】初めの二句八字に本則の大要を提起し、次の二句八字に章敬南泉の優劣無きを述べ、續いて二句十二字に是不是の手段を叙す、金錫、繩繩の二句十二字に麻谷の境界を讃し、最後の二句十四字に天下後世の疑難を一掃して以て天童の伎倆を示した。章敬南泉は是不是と云ふ一の捲襀を投じたが麻谷は好く此の捲襀を看取して是不是の間に陷らなかつたは美事で有る、南泉は不是と道つて抑へた樣であり章敬は是と道つて揚げた樣であるが兩人とも兄とも弟とも辨じ難い、同一の氣量である、是と縱也の手段に出たのも臨機應變、不是と奪也の手段に出たのも別に特地ことでは無い、章敬南泉同一の伎倆である、金錫一たび搖振して卓然として立つ樣子は如何にも獨立無伴、繩牀三たび遶つて往來無礙なる處却つてこれ游戲の活三昧であらう、後世叢林の無眼子は章敬は是、南泉は不是、麻谷は是不是に墮つなどゝ他の詮索に喧擾を極めて適從する處を知らぬ、麻谷南泉等に是不是があるのでは無い、是不是を論量する其れ自身が是非の二念を生じてゐるのである、恰かも

髑髏の在る處に多くの靈鬼を認むると一般で髑髏前に鬼あるにあらず、自己の想像が靈鬼を産み出してゐるのだ、人々回光返照して看よ、靈鬼何れの處にかある、是非何の處にか生ずと、要は最後是非撥轉の兩句に著眼するがよろしい。

【著語】 □細腰の鼓子兩頭打つ。 細腰、鼓子とは子供が玩弄品にする豆大鼓である、裏表どちらを叩いて見ても同じ音で少しも異ら無い、と云ふのは是と道ふも不是と道ふも同音調である、是不是の耳を以て聞くから是不是に聞へるのだ。 □頭を刺して裏許に在り了れり。大底の奴は此の是不是と云ふ捲䙡裡に頭を突つ込んで生涯を果して終うは笑止千萬なことである。麻谷も事に依つたら是不是の間に陷り込んでは居やせぬかの、麻谷に寄せて座下への注意である。 □手擡手捺。 一手では擡げ、一手では捺へると云ふ意、一手では抑へた樣で、一手では揚げた樣であるが、其の實は揚げたでも抑へたでもない、抑揚に片落ちせぬ樣子。 □頭高頭低。 頭の高いのと頭の低いのと居るが高いのが弟やら低いのが兄やら、どちらがどうとも云ひ難いと云ふ意、一つ頭の高低だもの何れがそれとも分ち難きも御道理ぢや。 □手を翻せば是れ雲。 ◎手を覆へば是れ雨。此の二句は一聯で、縱も奪も同一手の翻覆に過ぎぬ、雲雨元より一體にして異つたものでないと云ふ意、句は杜甫が貧交行の詩に取る、既に第十三則の頌著にも出た。 □塵を脱し俗を離る。 金錫を鳴して卓立した孤標の容貌は塵俗を離れた綺麗さつぱりの境界、對待の世界に居らない麻谷をほめた語である。 □行に因つて臂を掉ふ。 行は歩行、歩いて行けば自から臂も掉る手も振る、任運自然の樣子で閑游戲の消息よ、無心にして下化衆生する素振とも見られる。 □矮子戲を看る。 矮子は一寸法師の樣な矮小の人、戲は芝居か見世物で有らう、多勢の後に立つて矮小人には戲は見られない、見えないままに後方でいろ〳〵な下馬評をしてゐる、今も叢林擾擾の連中は小見小知にして眞實の麻谷南泉等には相見せず、唯自己の見解を以て是非を論量してをるのだ、人の尻に屈從いて歩かずと自から進んで本當の狂言を見たらよからう、而うすれば是非の評判も自から立ち消えだ。 □家に白澤の圖有れば必ず是くの如きの妖怪無し。 これは『廣博物志』第十九卷、異獸部黃帝內傳にある故事、文に曰く「帝東方に巡狩して海に至り桓山に登る、海濱に於て白澤神獸を得たり、能く言ふ、萬物の情に達す、天下鬼神の事を問ふに古より精氣物と爲り、游魂變を爲す者凡そ萬一千五百二十種ありと、白澤之を言ふ、帝之を圖寫して以て天下に示さしむ、帝乃ち辟邪の文を作つて之を祀る」云々と、白澤神獸の圖を一枚門に貼つて置けば妖怪などの決して障ることが無いと云ふ意に用ゐたのである、鬼を見るとは何處の話しぞ、萬松の這裡には其の樣なものは御座らぬと力んだ、人人が白澤神獸の樣な怜悧の漢のみならば妖怪どころか是非も迷悟も五欲も六塵もよりつくことが出來まいよ。

第十七則　法眼毫釐

示衆云。一雙孤鴈搏地高飛。一對鴛鴦池邊獨立。箭鋒相拄則

且致。鋸解秤錘時如何。

【讀方】衆に示して云く、一雙の孤鴈、地を搏つて高く飛び、一對の鴛鴦、池邊に獨立す、箭鋒相拄ふことは且らく致く、鋸解秤錘の時如何ん。

【字義】◎一雙孤鴈、一對鴛鴦の兩句は臨濟の賓主歷然の話に有る語、大潙の智云く「作麼生か是れ賓主歷然底の道理、若し會得せば一雙の孤鴈地を搏つて高く飛び、兩箇の鴛鴦池邊に獨立す」と、此の句の應用で有らう、一雙一對は二を意味し、孤鴈と云ひ獨立と云ふは一を意味して居る、相の上からは二つ、性の上では一、此の性相は非一非異、不離不卽の關係を爲す處を文字の上に示したのである。◎箭鋒相拄とは寶鏡三昧に「羿は巧力を以て射て百步に中つ、箭鋒相値ふ巧力何ぞ預らん」とある、列子陽問の篇に「紀昌既に衞が術を盡して天下の己れに敵する者を計るに一人のみ、乃ち飛衞を殺さんことを謀み、野に相遇ふて二人交に中路に射る、矢鋒相觸れて地に墜ちて而も塵揚らず」と、巧力や手練の及ばぬ妙用に比した語である。◎鋸解秤錘とは大愚の芝禪師に僧問ふ「如何なるか是れ佛、師曰く鋸解秤錘」と、秤錘は衡の分銅、鋸で分銅を解剖せんとしても齒が立たぬ、卽ち解不得の意、寸分の透間が無くて而も手だしが出來ぬと云ふ意に用ゆる語である。

【要解】一双の鴈かとすれば孤鴈、孤鴈かと思へば二羽、今や低く地を搏つて高く天に飛ぶ、一對の鴛鴦かと見れば池の水邊に獨りシヨンボリ立つ、獨立かとすれば一對の雄雌離れては居らぬ、二羽が一羽か、一羽が二羽か、一に卽せず二に離せず、二にして一、一にして二の道理を吟味して看よ、飛衞紀昌兩人の放つた矢尻が途中でカチリと出逢ふたは情識分別を離れた巧手に相違は無いが二つに分ければ解けられる、其の事はマー且らく致めて鋸解秤錘と誰人も手だしの出來ぬ處を一つ詮議して置かねばならぬ、寸分透間の無い解不得の處をも篤と研究して其の解け樣を知つて置くのが衲僧家の力量である、何と解いたもので有らう、今日の公案に就いて參得するがよい。要は理に就いて非一非異を知る計りで無く、事の上にも親しく不卽不離の行履を會得せねばならぬ、日用行履の上では至極微細の處まで究め盡して置かないと天地懸隔の差を生ずる、それには本則が好い龜鑑ぞと云ふお示しである。

擧。法眼問脩山主。毫氂有差天地懸隔。汝作麼生會（誰敢動著）脩云。毫氂有差天地懸隔（閙百草、有甚麼難）眼云。恁麼又爭得（鐵山橫在路）脩云。某甲只如此。和尚又如何（採轉鼻頭）眼云。毫氂有差天地懸隔（將謂別有）脩便禮拜（將錯就錯）

【讀方】擧す。法眼、脩山主に問ふ、毫氂も差あれば天地懸かに隔たる、汝作麼生か會す。脩云く、毫氂も差あれば天地懸かに隔たる。眼云く、恁麼ならば又爭でか得ん。脩云く、某甲只此くの如し、

和尚又如何ん。眼云く、毫釐も差あれば天地懸かに隔たる。脩、便ち禮拜す。

【字義】 ◎法眼とは第十二則の本則に出た地藏桂琛の法嗣で淸涼院の文益禪師のことである。餘杭の人、姓は魯氏、七歳にして新定智通院の全偉禪師に依つて落髮し弱齡にして越州の開元寺に受具す、玄機一たび發してより雜務倶に捐て、錫を振うて南に邁く、長慶の法會に抵る、侶を結んで湖外に之かんと欲し既に行くに天雨降り忽ち溪泉暴漲するに礙へられ、暫く城西の地藏院に寓し、因みに桂琛和尙に參じた、琛問うて曰く、上座何くにか行く。眼云く、迤邐として行脚し去る、曰く行脚の事作麼生、云く、不知最も親切、法眼豁然として開悟（第二十則參照）機緣相契ひ終に室に投じて得法す。初め撫州の崇壽に住し、次に建康の淸涼に住す、大に雪峰玄沙の道を振ふ、周の顯德五年戊午（皇紀一六一八）七月十七日疾を示す、國主親しく禮問を加ふ、閏月五日剃髮沐身、衆に告げ、訖つて跏趺して逝す、顏貌生けるが如し、壽七十有四、法臘五十四、全身を江寧縣丹陽鄕に奉じ塔を起つて大法眼禪師と謚す。門下に淸涼泰欽、天台德韶、羅漢守仁、報恩玄則等傳燈に載する者五十餘員、門流稱して法眼宗の名を爲し禪五派の一に數へらるるに至つた。法眼の宗風は箭鋒相拄へ句意機に合ふ、始めは則ち行行如たり、終りは則ち激潑して漸く人心を服し情解を削除す。又云ふ、法眼の家風は病に對して藥を施し、身に相して裁縫し、其の器に隨つて情解を掃除すと『人天眼目』に書いてある、本則を見るに自から其の家風が窺はれる。◎脩山主は同じく地藏桂琛の法嗣、龍濟山主紹脩禪師のことである、傳は既に第十二則に出してある。◎毫釐有差、天地懸隔とは三祖僧璨大師の信心銘に「至道無難、唯嫌揀擇、但だ憎愛莫ければ洞然として明白なり、毫釐も差あれば天地懸かに隔たる」と云ふ語より來る。毫釐の差とは十茫を渺と爲し、十渺を塵と爲し、十塵を微と爲し、十微を忽と爲し、十忽を絲と爲し、十絲を毫と爲し、十毫を釐と爲し、十釐を分と爲し、十分を錢と爲すと云ふ、此は極めて些細なる差を云ひ、天地懸隔は隔歷の最大なるを意味す、俗に一歩八間など云ふに似てをる、今は行履を點檢する上に就いて用ゆ。

【要解】 大法眼禪師は同門の龍濟紹脩に對つて表に三祖の語句を假つて其の所見を問ひ乍ら、暗に一線を試みられたのである。法眼は三祖が毫釐有差天地懸隔と云はれたが、脩山主は何と心得て居るか、と勘驗せられたのを知らずに、脩山主は三祖が云はれた通り毫釐有差天地懸隔と思つてをると答へた、此の語甚だ力あるが如くにして却つて千里の差を生じてゐる、故に法眼は恁麼なことでは爭して三祖の的意に合はうやと鼻頭を捻られた、すると脩山主は倍々差別の念を生じて某甲は此の通りだがそれでは法眼和尙、汝は如何と御座ると詰つて來た、法眼云く毫釐有差天地懸隔、汝が一念毫釐の差、天地萬念の懸隔を生じたぞと、此の言下に眞實毫釐の差ありしことに氣が付いて脩は便ち立つて禮拜した、脩山主は修行力進んで毫釐無差の道理を會しては居たけれ共、大法眼の眼を以てすれば毫釐無差の所に毫釐の差あることを徹見して、其の病を除かんが爲に此の提撕が有つたのである、楔を拔くに楔を用ゆる作家の手段と、同參親密の行履をして徹底親密ならしめんとする法眼の婆心とを參究するのが本則の要である。

【著語】□誰か敢へて動著せん。　汝作麽生など〻釣竿を垂れたとて萬松などは動著ともせぬ、誰れとてメッタニ動著つくものは有るまいよ。□百草を鬪はしむるも甚麽の難きことか有らん。　菫草で相撲をとる兒戲がある、草角力などは些しも六づかしいことは無いが愈々本場所で實力を爭ふことになつたら、到底物にはなるまい、脩山主の語に力なきを貶した著語である。□鐵山橫はつて路に在り。　又爭でか得んと、鐵山で路を遮ぎられたは脩山主も進退の自由を鬪いたらしい、イヤ此の鐵山の透得する底の勇氣が無さそうだ。□鼻頭を捩轉す。　脩山主が和尙又如何と云つた處は法眼の鼻頭を捩轉した樣な勢ひである。□將に別に有りと謂へり。　別に何か珍奇な語でも有るかと思つたら何のこつた、ヤツバリ豪釐有差天地懸隔か、然し何にも異つたことの無いのが無所得の得ぢや。□將錯就錯。　能禮の錯を將て所禮の錯に就く、能禮も錯、所禮も錯、卽ち錯に二面は無い、性空寂の禮拜である。將錯就錯と云ふ語は錯を將て錯に就くと云ふ意味にも用ゐられるが今は然うで無い、胡蘆、胡蘆に纏ふとか頭正尾正とか云ふ語と同じく二面なき意である。

頌云。秤頭蠅坐便欹傾（譏他一星不過）　萬世權衡照不平（斗滿秤錘住）　斤兩錙銖見端的（莫錯認）　終歸輪我定盤星（頌收鈎頭意）

【譯方】　秤頭蠅坐すれば便ち欹傾す、萬世の權衡不平を照す。斤兩錙銖、端的を見るも、終に歸して我が定盤星に輸く。

【字義】◎秤頭蠅坐とは尙書の治要圖說に「秤に三義あり、準は繫也、衡は平也、權は錘なり」と、卽ち繫、平、錘の三より成るものを秤と云ふのである、秤の那頭にか蠅が一匹坐ればと云ふ意で蠅は極輕いもので而も拂へども去り難きもの故、毫釐の差と、細微なる妄念の去り難き意とを併せて用ゐたのである、三角の智蕘禪師の語に「土を捏つて千鈞を定む、秤頭蠅を立せず」と云ふのがある、又北塔の祚、洞山麻三斤を頌じて「麻皮三斤秤を用ゐず、秤頭那ぞ肯へて蠅を坐せしめん、一念纔かに生ずれば筋骨露はる、徒らに勞す更に定盤星を覓むることを」と云ふ、是れ等の語に依つて造語したもので有らう。◎照不平とは平等ならざる差別見を照破すると云ふ意、權衡と云ふ者は萬代不易のもので一微塵の私も分別も無く公平を以て其の本領としてをる。此句は暗に三摩地の譯語、等持の意を藏してある樣に思ふ。◎斤兩錙銖とは八銖を錙と爲し三錙を兩と爲し、十六兩を斤と爲す、一銖は四分一厘六毛半也と云ふ、支那に於ける重量の名數である。◎端的とは端は正也、的は當也、毫釐も差はぬこと。◎定盤星とは秤の無駄目を云ふ、盤は卽ち銅盤で秤の皿のことである、銅盤のブラ下つてある處に斤兩の紐が著いて居る、其の紐を把つて提げると盤と錘とが平らになる、其の一番手許の點星を定盤星と名けたもので、これが卽ち無駄目である、衡上に盛られた點星は總て盤上に載せられた品物の重量に隨つて斤兩の目が動くのが當然で有るのに此の定盤星だけは盤に由つて定められた星であるから斤兩錙銖の爲に變ると云ふことの無い星目である。故にこの語は善い意味と惡い意味との兩方に用ゐられる、資壽の巖禪師の語に「鈎頭の意を領取せよ、定盤星を認む

ること莫れ」と云ふが如きは一物に固執する方で惡い意味に用ゐられてある、今は斤兩、錙銖の有差を超越せる格外無差の一點星を詮はしたのであるから善い方の意味に用ゐられたのである。

【要解】初めの二句に本則を頌し、後の二句に天童腕頭の力を振つて本則を擧拈した、殊に初め二句の中第一句には破題的に本則を全提し第二句に至つて特に法眼の伎倆を賞讚した樣に見える、秤器の那頭にか彼の身輕な蠅が一匹でも坐つて居るならば、便ち秤は欹傾て正確なることが出來ぬ。これ毫釐でも差が有れば自から天地の懸隔を生ずる本則の的意である、幸ひに法眼は萬世超絶の權衡で以て此の欹傾して平らかならざる毫釐の差を照破して寸分昧ますところ無からしめた。秤と云ふものは斤兩錙銖明らかに正直正當の目星を見はすものであるが然し是れは尚ほ未だ諸數の間に在るもので有つて、動もすれば毫釐の差を生じ易い、終歸を云へば斤兩錙銖の星目や數量に拘はらない、物外超出の定盤星には贏たれない、卽ち輸けざるを得ない、何となれば定盤星は對待を離れてゐるから毫釐毛髮の差違も生じ樣が無い。是が大切である、要を云へば有無差等の妄計があれば自から其許に差を生ずる、毫釐の無差有差の二念を離れて初めて眞實毫釐有差天地懸隔の宗意を會得することが出來る、脚下無私の行履をすることが出來るのである。

【著語】口他の一星を謾じ過さず。　星目一つでも誤魔化すことは出來ぬ、蠅一尾坐つても傾くほどぢや、星目一つ動かさうものなら引つくり反つて終はう、毫釐の差、疎忽にしてはならぬ。口斗滿ちて秤錘住す。　斗はやはり星目のこと、百匁の品物なれば百目星の處に秤錘を置けば定住して上りも下りもせぬ、不平なんぞはチツトモ無い、圓同大虛無欠無餘とでも云はうか。口錯つて認むること莫れ。　端的を見るつもりで眼を睜つたら遲了八刻、能所無き端的だもの、然し端的を錯り認めてはならぬ、毫釐の差は天地を隔つるぞ。口鈎頭の意を領取せよ。　鈎は秤のかぎのこと、此の秤には大凡どの位のものが掛るか能く領取して掛けるがよい、無闇に掛けたら秤が翻斤斗して頓だ怪我をする、と云ふのは天童の定盤星と云つた其意を能く領取して見よ、下手に天童の鈎頭に掛つたら七顚八倒、背負ひ投げを食つて腰の骨を折らうぞよ。

第十八則　趙州狗子

示衆云。水上葫蘆按著便轉。日中寶石色無定形。不可以無心得。不可以有心知。沒量大人。語脈裏轉却。還有免得底麼。

【讀方】衆に示して云く、水上の葫蘆、按著すれば便ち轉ず、日中の寶石、色に定れる形無し、無心を以ても得べからず、有心を以ても知るべからず、沒量の大人、語脈裏に轉却せらる、還つて免れ得る底有りや。

【字義】◎水上葫蘆云々の句は巖頭の示衆に「若し是れ得る底の人は只閑田地を守つて水上に葫蘆を按ずるが如くに相似たり、觸著すれば便ち轉じ按著すれば便ち動く」とある、それから轉用したも

ので有らう、葫蘆とは瓢簞のこと、按著とは指で突くことである、一所に滞らずして轉身自在の樣子を明した語。◎日中寶石云々の句は涅槃經第二十二巻に「譬へば金剛の如し、若し日中に在つては色則ち定らず、金剛三昧も亦復是くの如し、大衆に在て色亦定らず、是の故に名けて金剛三昧と爲す」と云ひ、宗鏡錄第八十二巻に「猶ほ玻璨珠の前塵に隨つて衆色に變ずるが如し、金剛寶は日中に置いて定れる形無きが如し」と云つてある、寶石は金剛石のことで今のダイアモンド（Diamond）を云ふ、透明なる寶石ゆゑに太陽の光線を分析して五色にも七色にも色は現はれるが、固より日中に於ける光線の反射作用であるから一定した形と云ふもの丶有らう筈が無い、前の句と同一の意を異つた語で言ひ詮はしたのである。◎不可以無心得云々は宗鏡錄第四十六巻に「有心を以ても知るべからず、無心を以ても知る可からず」とあるより出づ、有心とか無心とか云ふ對待の心では畢竟不可得なる旨を云ふ。◎沒量大人とは沒量は無量と云ふに同じ數量丈尺を超絶する意、大人は大小の大にあらず、沒量の大である、易に「飛龍天に在り大人を見るに利あり」など丶云ふ樣な天地間に介在してゐるソンナ大人では無い、絶對量なる人格を稱して大人と名く。◎語脈裏轉却とは言語の脈裏に辿つて自由のきかぬ意で、言句に附き纒ひ、他人の舌頭に乘せられると云ふことである。

【要解】　水上に浮んでゐる瓢簞を、指で抑へればコロリと他に轉じて抵抗もしなければ屈服もしない。日中金剛石を日にあてると種々の色が寶石中に現はれるけれども、一定した形があるのでは無い、法と云ふものは有かとすれば無、無かとすれば有、平等かとすれば差別、差別かとすれば平等、常住かとすれば無常、無常かとすれば常住、恰かも葫蘆の轉ずるが如く、寶石に定色の無い樣なものである。本則の佛性有無も亦然りである、或る時は有と云ひ、或る時は無と云ふ、有とも無とも定つて居らぬ、祖門下に於いて談ずる佛性は有無斷常を超越してゐるから、二乘の無心や外道の有心では到底窺ふことが出來無い、と云つて有心無心の數量を絶したる格外過量の大人ならば識得することが出來るかと云ふに其んな大人も同じく有無の語脈裏に轉ぜられて多くは自由がきかぬ、我が萬松座下には語脈裏にも有無の葛藤にも繋縛を免れ得て自由自在の活用を現ずる底の衲僧が有るか怎うか、試みに狗子佛性の本則を擧示しやう、水上の葫蘆、日中の寶石の如くにして、親しく此の話に參するがよい、苟も趙州の語路に轉却せられて有無の窠窟に陷つてはならぬと云ふのが萬松の婆心である。

擧。僧問趙州。狗子還有佛性也無（攔街趯塊）州云。有（也不曾添）僧云。既有爲甚麼却撞入這箇皮袋（一款便招 自領出頭）州云。爲佗知而故犯（且莫招承 不是道個）又有僧問。狗子還有佛性也無（一母所生）州云。無（也不曾減）僧云。一切衆生皆有佛性。狗子爲什麼却無（黙狗趁鵠子）州云。爲伊有業識在（右具如前 據款結案）

【讀方】　擧す。僧、趙州に問ふ、狗子に還つて佛性有りや也た無しや。州云く、有。僧云く、既に

有、甚麼と爲てか却つて這箇の皮袋に撞入するや。州云く、他の知つて故らに犯すが爲なり。又僧有り問ふ、狗子に還つて佛性有りや也た無しや。州云く、無。僧云く、一切衆生皆佛性有りと、狗子什麼としてか却つて無なる。州云く、彼に業識の有る在るが爲なり。

【字義】　◎趙州とは南泉普願の法嗣、趙州觀音院從諗禪師のこと、傳記は既に第十則に出す。◎狗子とは犬のこと。◎佛性とは如來常住の心性で眞如心とも覺心とも云ふ、敎家にては佛性に就いて種種の説をなせども今は「一切衆生悉有佛性」の經意を以て問端を起して居る、宗鏡錄八に「人に靈知の覺あり、第一義空之が與めに性と爲る、故に佛性と名く」とある。◎撞入這箇皮袋とは這箇は狗子をさす語、皮袋は毛袋を被る畜生身、撞入は衝き込む意、◎知而故犯とは大智度論第九十三卷に曰く「佛の言く、若し出家の人、欲を犯さば則ち棄なり、是れ比丘は自ら誓つて犯す、是れ一の罪なり、佛の所制を知つて故らに違犯す、是れ二の罪なり」と、即ち如來所制の戒律を受け且つ承知して居ながら故意に犯戒したから這箇な皮袋を撞入るのだと云ふ意。是れは字義に就いての一應の説明である。◎一切衆生皆有佛性の文は『梵網經』の下卷に在る、『涅槃經』第七卷には「一切衆生悉有佛性、煩惱覆故不知不見」、同じく第二十五卷には「一切衆生悉有佛性、如來常住無有變易」とある、是れは法華涅槃等の圓敎に於ける根本思想を爲すものである。◎業識とは起信論に云く「無明の薰力を以て不覺の心動ず、最初に其の業識を成ず、此の業識に因つて復た轉識を生ず」と、註に「最初の不覺を第一業相と爲す、能見所見、差別あるもの無し、心王の念法は分析すべからず、精勤隱流の義あり、故に名けて業と爲す、是くの如きの流動只不覺を申ぶるは第二の轉相なり」と云ふ、然れば業とは無明の妄業にして此死生彼定まりなき生死輪廻の本因を云ひ、識とは無明業を根本として迷界に頭出頭沒してをる妄心をさしたのである。

【要解】　文相の上から云へば、一人の僧が來て趙州和尙に向つて狗子の如きものにも還佛性が有りますかと問ひを呈した故、趙州は有ると答へられたのである、僧は既に狗子にも佛性が有るなら何故に這んな皮袋を被つた畜生で居るのかと反問して來たから趙州は佛性が有りと知りながら惡作惡業を犯すゆゑであると答へられた。又他の一僧が出て來て狗子にも還た佛性が有りますかと訊いたすると今度は趙州無しと答へた、僧の云ふにはお經に一切衆生皆佛性有りと說いてあるでは有りませんか、然れば狗子とて衆生の一分であるのに什麼ゆゑ無しと仰せらるゝぞと重ねて問ひ來つたから、趙州は狗子は業識の爲めに轉せられてゐる故だと答へられた。文字通りに云へば斯うだが宗意の上から云ふならば、先の僧は佛性無の見に墮してゐたから之を救はんとて趙州は有と答へ、後の僧は佛性有の見に執してゐたから之を破せんが爲に趙州は無と答へた迄である、一體佛性は有でも無でも無い、有無の情量を超出したる一大佛性で有る、故に有佛性も有れば無佛性もある、趙州が有と云つたのは有佛性を云ひ、無と云つたのは無佛性を云つたので、有と無とは對待の有無では無い、有も無もともに絕對の語である、趙州の手元では有と云つて增さず無と云つて減せざる大總相の法門を說いてをられるのである、知而故犯も有業識在も表には狗子に豪らしめて云つては居るが

實は狗子に何の過も無い、有の見若くは無の見に墮してをる問話の僧こそ知つて故らに犯し、業識の爲に轉せられてをる、否、有無の見それが業識と成つて皮袋に撞入してゐるのであると云ふことを示されたのである。

【著語】　口街を攔ぎり塊を趁ふ。　菩薩地經に「聖道に迷ふ者は理道の自心より生ずるを知らず、唯當に身を苦しめて以て解脫を求む、犬の塊を逐ふて本を尋ぬることを知らざるが如し」とある故事から出た語、今狗子の本文に因んで癡犬の街を遮ぎりて人の爲に土塊を抛げられ、其を趁ひ回る樣な者だと、此の僧を當て擦つて、佛性の本を忘れて有無の末に走る族は皆此の癡犬に等しいぞ、啻に此の僧ばかりで無い天下其黨甚だ多し、悲しい哉。口也た曾て添へず。　佛性由來有無の論量を超越せり、趙州が有と云つたとて一微塵許りも增すで無い、添ふでも無い。口一款に便ち招く、自領出頭。　一款は一通の書狀と云ふ意で一本の召喚狀を發するや、自から出頭して罪狀を包まず白狀した、此の僧の自から皮毛袋裏に撞入してゐる樣子を述べた著語。口且らく招承すること莫れ、是れ儞を道ふにあらず。　メッタに自分の事ぞと早吞込をしてはいかん、ナニもお前のことを云つてゐるでは無いぞ、意は其の反對で、他は敢へて問はず是れ儞を道ふなりぢや。口一母の所生。兩僧同一の問端を發す、多少見所が異つてゐても生んだ親は一人と見えて、何れも難兄難弟の無眼子ぢや。口也た曾て減せず。　有と云つても也た曾て添へずなら、無と道つても減じはすまい、不增不減の佛性である。口憨狗、鷂子を趁ふ。　憨は愚也癡也、鷂子は鷲鷹と云つて高く遠く飛び去る鳥である、おろかな犬は地上に在つて中天を翔る鷲鷹の影を趁ひ回る、此僧の語脈裏に轉却せらるゝ樣子を云ふ。口右具さに前の如し、欵に據つて案に結す。　註に「罪人の誠欵に據つて罪を官府の公案に結するを謂ふ」とあるから、犯人が罪狀を逐一自首したに依つて法律通りに處分をきめると云ふことであらう、其の意は後の僧も前の僧の通りに趙州眞實無佛性現前の說法を聞く耳が無く、却つて自分の見解を正直に白狀したに依つて趙州も其れ相當な應對をしてをられると云ふ程のことである。

頌云。狗子佛性有。狗子佛性無（打做一團鍊做一塊）　直鉤元求負命魚（這僧今日合死）
逐氣尋香雲水客（穿却鼻孔也不知）　嘈嘈雜雜作分疎（競嚼枯骨、嘔啞咿嚘）　平展演（沒蹤跡）
（歎休斷謗）大舖舒（材高語壯）　莫怪儂家不愼初（一言出口駟馬難追）　指點瑕疵還奪璧
（白拈巧偸）秦王不識藺相如（當面蹉過）

【讀方】　狗子佛性有、狗子佛性無。直鉤元命に負く魚を求む。氣を逐ひ香を尋ね雲水の客。嘈嘈雜雜として分疎を作す。平に展演し、大に舖舒す。怪しむこと莫れ儂が家初めを愼しまざることを。瑕疵を指點して還つて璧を奪ふ。秦王は識らず藺相如。

【字義】　◎直鉤の句は姜子牙の故事、子牙は磻溪の谷で水を去ること三尺、直鉤を以て魚を釣る、

周の文王之を異しみ直鈎如何んぞ魚を得んと問うに「但名に負くの魚を求む」と答へたと云ふことである、直鈎とは曲らぬ釣針、命に負く魚とは身命を惜まずして待たざるに自から直鈎に釣り上る魚の意。◎逐氣尋香とは歐陽永叔が憎蒼蠅の句に「氣を逐ひ香を尋ねて處として到らざる無し」とあるが、此では狗子に因んで香氣を逐ひ反つて其實を得ざるに比した。◎嘈嘈雜雜とは嘈嘈として急雨の如しなど云つて、非常に喧すしいこと、雜雜は混雜亂雜など云つて取亂すことである、群犬の食を爭ふが如き樣子に云ふ。◎分疎とは其の事の是否を辯白する意で、疎は疏字に同じ、情識を以て樣々に分別し辯疏すること。◎平展演、大舖舒とは大店舖では公平無私掛引なしの正札を付けて品物が陳列してあると云ふこと、此の二句互換して見るべし。◎儂家とは彼が家と云ふに同じ。◎指點、秦王の二句は『史記』にある藺相如の故事を以て作る。藺相如の傳に云く「趙の惠王楚の和氏が璧を得たり、秦の昭王十五城を以て之を易ふ、藺相如璧を奉じて秦に入る、王喜んで美人及び左右に傳示して左右皆萬歲と呼ぶ、相如、王の城を割くの意無きを視て乃ち前んで曰く璧に瑕有り、請ふ之を示さんと、王璧を授く、相如因つて持して却立し柱に倚り、髮冠を衝いて曰く、趙王齋戒すること五日、臣をして璧を奉じて書を庭に送らしむ、大國の威を嚴にし以て敬を修するなり、今王を見るに禮節甚だ倨れり、璧を得て美人に傳示し城を割くの意無きに似たり、故に臣復た璧を取れり、必ず臣を急にせんと欲せば臣が頭、璧と倶に柱に碎かん」云々、今例して之を云へば秦王は問話の兩僧、藺相如は趙州、璧は佛性、瑕疵は有若くは無、還奪は知而故犯、有業識在の語に當てはめて見るがよい、此の二句前後置きかへて見れば善く解る。

【要解】 冒頭に狗子佛性有無の十字を提げて、公案の全體を拈出し、次の句に趙州の眞意を明す、次の二句十四字に天下叢林の紛擾を慨し、更に二句六字を以て佛性有無の眞價を擧げ、次句に世の誤謬を解き、末後の二句に至つて兩問話子の敗闕一場を巧みなる比喩に依つて批評せられたのである。狗子佛性有、佛性無は有無相對の有や無で無いから直鈎と云ふ、趙州は此の直鈎を以て不釣自上の金鱗を求めたのである、然るに江西湖南の雲水どもは有無の名字、言語の香氣のみを逐ひ尋ねて是の非のと自分量見で言ひ張つて居る樣は、食を貪る癡犬の喧騷なるに似てをる、趙州は直指單傳の佛法を分釐掛引なしで賣捌く大商店の主人公ぢや、狗子なりと佛性なりと有なりと無なりと望み次第に買ふがよい、趙州老とても先に有と云ひ、後に無と云ふが如きは甚だ當初を愼まざるの語で是れが抑〻錯會の因つて起る處ぢやなど〻怪しむには及ば無い、錯會は趙州の有無に非ずして氣を逐ひ香を尋ぬる學人にあるのだ、和氏の璧は由來瑕疵の有無に拘はらざることを識らないから藺相如の爲に指點せられて秦王はウマ〱璧を奪り還されて終つた、瑕疵の有無と云ふことは璧に少しも關係がない、然るを無しと聞いて喜び取り、有りと指點せられて急ぎ捨つ、誠に取捨の心、巧伎と爲るとは此事である。

【著語】 口打して一團と做し、鍊つて一塊と做す。狗子だの佛性だの有だの無だのと云ふ奴を打して一團と做し、鍊つて一塊とせば名字言語の囑すべき無し、迷悟是非の根本を截斷するがよから

う。□這の僧今日死すべし。　趙州の直鈎に釣り上げられて此僧今日命根を斷つだらう、然し死處を得たものである、大活底の勇氣が有るかどうぢや。□鼻孔を穿却するも也た知らず。　天童の一語實に痛い語だ、鼻孔に鐵繩を穿たるゝも尚ほ未だ知らざるか、笑止さ餘つて可憐な者よ。□競ふて枯骨を齧む、啀喍嘷吠す。　前の句は正法念處經にある故事、曰く「譬へば犬の肉を離るゝの骨を齩んで涎汁和合して其體を得ることを望むが如し、是の如きの貪狗、齒間血出づ、其の味を得已つて之を骨汁と謂へり、自の血に是の如きの味を貪るを以ての故に覺らず」云々、後の句は法華經の譬喩品にある故事、曰く「群狗競ひ來つて搏撮し、飢羸慞惶、處處に食を求む、鬪諍摣掣、啀喍嘷吠す」云々、狗子に因んだ故事を二句も持つて來て天童嘈嘈の句に著語した、萬松の博學と巧手とに驚歎せざるを得無い。啀喍は唇を聚めて齒を現はす樣子、嘷吠は聲を出して大に吼ゆる事である佛性有無の枯骨を齧んで徒らに心を勞し眼を瞋らして雜々分疎する有樣は貪狗の啀喍嘷吠するに似て物凄愴い。□蹺ひ欺くこと沒し、斷ひ誅ることを休めよ。　蹺は讀字の方よし、爭ふ也、誅は言を以て相誣ゆる也とある、趙州の方には少しもせり賣りして人を賺す氣は無い、買ひ手も買ひ損なはぬ樣にするがよい。□材高く語壯なり。　材物が飛切りだから價も高い、掛け値も無い、引もしない、語に愛想が無い。□一言口より出でゝ駟思も追ひ難し。　論語に「駟も舌に及ばず」と、註に「舌より出づる則ば駟馬も追ふこと能ばず」云々、何ぞ初めを愼まざるなど、今更ら云つても追つ附かぬ、趙州の有は卽處解脫、無も當體脫落、佛性の丸出しよ。□白拈巧偸。　白拈とは白拈賊又は白撞賊　白日人家に撞入で物を見て便ち取る者に名く、晝盜人は巧者に偸盜をすると云ふ意で、藺相如が璧を奪ひ還した巧手をほめたのである。□當面に蹉過す。　秦王と藺相如と對面してゐながら千里萬里の隔たりを爲す、識らずと云ふ處に著語したのである、趙州と僧とのこと計りで無い、座下の諸人も對面千里ではあるまいかと氣をつけた語である。

第十九則　雲門須彌

示衆云。我愛韶陽新定機。一生爲人拔釘楔。爲甚有時也開門掇出膠盆。當路鑿成陷穽。試揀辨看。

【讀方】衆に示して云く、我は愛す韶陽新定の機、一生人の爲に釘楔を拔く。甚としてか有る時は也た門を開いて膠盆を掇出し、路に當つて陷穽を鑿成す、試みに揀辨して看よ。

【字義】◎我愛韶陽云々の二句は雪竇の頌に「我は愛す韶陽の機、一生人の爲に釘を抽き楔を拔く」とある成語を假り用ゆ、韶陽は韶州のことで、雲門大師は韶州の雲門山に居られたから、地名を以て人の名にしたのである、韶陽と云へば卽ち雲門大師のことである。新定は新定郡と云つて矢張り地名で睦州のことを云ふ、雲門は初め黃檗の嗣睦州陳尊宿に參じて一脚を折つた當處に大悟した人であるから、尋常人を接するに多く睦州の手段を用ゐられたと云ふ、新定の文字は睦州と云ふ語に

因んで面も舊轍を履まず、斬新の靈機を撥轉して爲人せらるゝ意味をも含んでゐて面白い、韶陽新定の機とは一言に雲門和尙の靈機と云ふことである、釘楔を拔くとは師家が學人の己見法執等といふ妄執惑業を截斷するを本務としてをる、故に斬釘截鐵などゝも云つて、容易に拔き難きを拔く處に師家の力量が認められるのである。◎揑出膠盆とは臨濟錄に「一箇の膠盆子を拈出す」と云ふ語がある、膠盆はにかはの盆のことで何とも彼とも手の著け樣の無いと云ふ意、揑出は取り出すこと。◎鑿成陷穽とは陷穽は坑坎にしておとしあな、鑿成は鑿で掘りあけること。

【要解】　雪竇其儘の語を假りるならば、萬松も我は愛す韶陽新定の機、一生人の爲に釘楔を拔くと云ひ度い、雲門特地の接化ぶりは實に感心だ、有る時は門を開いて學人を招き込んで置いて何とも彼とも手の著けられぬものを持ち出し學人をして動きの取れない樣なことをやる、又有る時は通路に當つて陷穽を鑿ち、來機をして進むに處なからしむると云ふ樣なこともやる、甚して斯んな惡辣の手段を取るので有らう、試みに之を揀擇し辨見して見よ、雲門の本則に能く眼を開いて看るがよい。

擧。僧問雲門。不起一念還有過也無。（言清行濁）門云。須彌山（險）

【讀方】　擧す。僧、雲門に問ふ、不起一念還つて過有りや也た無しや、門云く、須彌山。

【字義】　◎雲門は匡眞大師雲門文偃禪師にして靑原下六世、雪峰義存禪師の法嗣である、傳は旣に第十一則に出す。◎不起一念とは一念は念起念滅相續して止まざる念想觀の測量を云ふ、一念を起さずとは微塵ばかりも妄念を起さゞる時と云ふ意。◎須彌山とは梵音スメール（Sumēru）にして漢字に轉じて修迷樓、須彌樓、蘇迷盧、又は略して迷盧とも云ふ、妙高山と譯す。一世界の中央金輪の上に在りて七山七海環り列り、水面よりの高さ八萬由旬、日月の廻薄する所、諸天の遊舍する所六道四生廿五有界みな是によりて住す、山腰に須彌海あり、濶さ四萬由旬周圍の七山七海を合して九山八海と稱す、是れは印度古代の世界觀で有つて釋尊も亦此の須彌山說を假りて世界觀を說かれたけれども世尊創造の說では無い、又佛敎特有の敎でも無い。

【要解】　一僧有つて雲門大師に問ふらく、人一念の妄心を起さゞる場合にも還つて過咎有りとしたものでせうか、罪過なしとしたものでせうかと、雲門答へて云ふ須彌山。此の答話は全く齒が立たぬ語であるが是れが釘楔を拔く雲門常用の手段である、須彌山は天蓋ふ能はず地載する能はず、風吹けども入らず水灑げども著かず、起も不起も、一念も二念も、正念も妄念も一座の須彌山に坐斷せられて、形名ともに泯絕したる樣子である、不起一念の當體が須彌山で有るから有過の無過のと云ふ差別の二見も面出しが出來ぬ、人人一座の須彌山ぞと徹底せば僧の不起一念などゝ云ふ念慮をも粉碎し果つべきである。

【著語】　口言は淸く行ひ濁るの漢。　洞山寶公の偈に「嗟き見る世の聲訛、言ば淸うして行ひ濁る多し、若し閻老子無くんば、誰れ人か儞を奈何せん」とある、不起一念と云うた處は如何にも其の言潔白に似たれ共其の心行を察すれば有過無過の濁惡に染つた和郞ぢやげな、可惜淸淨法身のお顏

に泥を塗つた樣だ。口險。　須彌の高さは八萬由旬、嶮峻遂に攀づべからず、險なる哉、險なる哉。

頌云。不起一念須彌山（一句便了）　韶陽法施意非慳（天童也不少）　肯來兩手相分付（只恐闍黎承當不下）　擬去千尋不可攀（徒勞斫額）　滄海潤（浸天浴日無涯岸）　白雲閑（伴鶴隨風得自由）　莫將毫髮著其間（已太多生）　假鷄聲韻難謾我（眞不掩僞）　未肯模胡放過關（西天令嚴）

【讀方】　不起一念、須彌山。韶陽の法施、意慳むに非ず。肯ひ來らば兩手に相分付せん。擬し去らば千尋攀づ可からず。滄海潤く、白雲閑なり。毫髮を將つて其の間に著くること莫れ。假鷄の聲韻我れを謾じ難し。未だ肯へて模胡として關を放過せず。

【字義】　◎法施とは財法二施中其の一を擧げたので、雲門大師の爲人提撕を云ふ。◎假鷄聲韻、未肯模胡の二句は史記孟嘗君の故事、傳に曰く「孟嘗君秦に入つて相と爲る、人、王に說くあり、孟嘗君は賢なり、又齊の族なり、今、秦相たらば、必ず齊を先にして秦を後にせん、秦其れ危からんと、王、君を囚にして殺さんと欲す、君、幸姬に因つて解れんことを求む、姬の曰く、妾願くは君が狐白裘を得てん、此の時裘已に王に獻ず、下客に能く狗盜を爲る者あり、裘を取つて姬に獻す、君出づることを得て夜半に函谷關に至れり、關の法、鷄鳴いて而して客を出だす、下客馮諼、善く鷄鳴を爲す。群鷄皆鳴く。君、秦の難を脫す」云々、此の故事を逆に應用して鷄の假聲なぞには謾著されない、口先に誤魔化されてウカと關所を通過す樣なことはせぬぞと云ふ意である、模胡は糊塗、糊塗、模胡に同じ、漫なる貌にして、口先ばかりで人をたぶらかすこと、關は關所なり。

【要解】　初め二句十四字に本則を其儘に提起して雲門全力の法施を明し、次の二句十三字に須彌山の答所を首肯へばソックリ其儘分付しやう、擬議分別に涉らばよつてもつけぬ千萬丈の隔てをなすを示す、次の二句六字に須彌の廣大無邊にして而も無心、且つ不染汚にして雲外に獨露する樣子を叙し、次の句でこの須彌に對つて一點間髮を容るゝの隙あれば直に千重萬峰の關をなすぞと抑へて、最後の二句に至つて座下の學人天下參禪人に修行の用心を示された。昔しの函谷關は馮諼が鷄鳴の假聲で門を放けて通したかは知らんが、今佛祖の此第一關は言端語端や思量分別の誤魔化しものではオイソレと門を開けそうにもしない、却つて動著すれば驀頭より三十棒を喫せしむるに堪へたりと云ふ有樣で、修行の眞實ならんことを求めらるゝ天童老婆の親切が溢れて、此の結勸二句があるのである。

【著語】　口一句に便ち了ず。　不起一念の一句で盡きてをる、須彌山の一句で了じてをるぞ、問答の要は此の一句に云ひ盡してあるよ。口天童も也た少なからず。　雲門計りで無い、天童も也た大施門を開いてをる、雲門や天童ばかりでも無い、松は直く棘は曲る、柳は綠り、花は紅ゐ、毫しも慳しんではをらぬ。口只恐らくは儞が承當不下ならんことを。　築著磕著に分付してゐるけれ共誰

も承當する者が無さそうだ、眞實の學人は至つて尠い者である。口徒らに斫額に勞す。　斫額は額に手を當て丶仰ぎ望む樣子、須彌山と云へは向ふにあるとのみ分別して額に手を翳して仰望いて計り見てをるが勞して功無しぢや、人々の脚跟下に一つ返照して貰ひ度い。口天を涵し日を浴して涯岸無し。　天も日も此の滄海中に涵浴してをる、扨ても廣濶いこと、涯岸が無い。口鶴に伴ひ風に隨つて自由を得たり。　鶴も無心、風も無心にして飛行自在さ、白雲の去來も亦閑なる哉である。口已に太多生。　太多生は太だ多いと云ふことで生は助字である、天童は毫髪と云はれるが萬松が見れば有雜無雜した丶か取り込んだ樣だ、修行事には一微塵も油斷をしてはならぬと云ふ萬松の親切。口眞は僞を掩はず。　似而非證悟で佛祖單傳の正法を掩ふことは出來ぬ、妄情を以て須彌山を量ることは出來まい。口西天の令嚴なり。　西天佛祖の正令は極めて嚴重だ、僞せ顏や、口先きで誤魔化さうとしても決して開門は致さぬ、縱し開門してもお手前の方で通過が出來まいよ。

第二十則　地藏親切

示衆云。入理深談。嘲三攞四。長安大道。七縱八横。忽然開口說破。擧歩踏著。便可高掛鉢囊。拗折拄杖。且道。誰是其人。

【讀方】　衆に示して云く、入理の深談は三を嘲り四を攞く、長安の大道は七縱八横、忽然として口を開いて說破し、歩を擧げて踏著せば、便ち高く鉢囊を掛け拄杖を拗折すべし。且らく道へ誰か是れ其の人。

【字義】　◎入理深談とは門庭の施說と相對して理を窮め深遠を談ずる向上の一路である。◎嘲三攞四とは攞は裂に同じ、三を嘲りて三を三とせず、四を攞いて四を四とせず、四とも五とも云はせぬ許りで無い、二とも一とも云はせはせぬ、理を窮め詞盡きて無理無語の當處を云ふ。◎長安大道とは長安は天子の都する處、大道は長安に達する本道である、天子の都は卽ち一國の首都にして中央政府のあるところなれば、何れの方角から向ふ通路でも皆大道にして平坦なる直路である。◎七縱八達とは四通八達と云ふに同じ。◎高掛鉢囊、拗折拄杖とは鉢囊は鉢袋にして、應量器、自鉢等を入れる袋、拄杖は老瘦無力、又は病苦、嬰身の者の爲に佛の許されたものであるが、禪家では多く行脚雲水の時に持つて歩く、鉢囊も拄杖も禪僧行脚の時の道具である、高く掛けるとは平常は鉢囊を高く僧堂の單位の上に掛けておくからのことである、拗折はねぢをると云ふことで共に行脚することを止める意である。

【要解】　入理の深談は三を嘲り四を攞くは向上絕路の端的、長安の大道七縱八横は向下自由の施說この二圓融にして無礙、出入本より自在なることを示す。忽ち玆に一人の衲僧有り、口を開いて入理の深談を說破し歩を擧げて長安の大道を踏著して直に今帝に相見する底の自由あらば、敢へて鉢囊を荷ひ拄杖を擔いで六部雲水をする要はあるまい、鉢囊を高く單上に掛け、拄杖を兩段に拗折し

て正に歸家穩座するがよからう。一體其んな人が何處かに居るであらうか、本則の地藏法眼こそ、まさに其の人で有ると響かしてをる。

擧。地藏問法眼。上座何往（羅織人／作麼）**眼云。迤邐行脚**（衆草鞋／錢去也）**藏云。行脚事作麼生**（果然放／不過）**眼云。不知**（何不草／恁麼道）**藏云。不知最親切**（就身／打劫）**眼。豁然大悟**（險／盤羅）

【讀方】擧す。地藏、法眼に問ふ、上座何くにか往く。眼云く、迤邐として行脚す。藏云く、行脚の事作麼生。眼云く、不知。藏云く、不知最も親切。眼、豁然として大悟す。

【字義】◎地藏とは青原下七世玄沙師備の法嗣、卽ち雪峰の孫なる地藏院の桂琛禪師である、羅漢院に住止せられたから漢羅の桂琛とも云ふ、傳は第十二則に出づ。◎法眼とは地藏の法嗣にして法眼宗の祖、淸凉文益である、大法眼禪師は其の謚號、傳は第十七則に出づ。◎上座とは 毗尼母に云く「無夏より九夏に至る是れ下座、十夏より十九夏に至る是れ中座、二十夏より四十夏に至る是れ上座、五十夏以上は一切沙門の尊敬する所、耆宿と名く」と、夏は一回の結制安居である、修行の階級に依つて座位を定むる名稱、今は稍卑き敬稱の意に用ゆ。◎迤邐とは『集韻』に旁行連延なりとあり、『増韻』には因循也とある、彼方に因り此方に循ひブラ〱してをること。◎行脚とは脚の任歩くことで今の卽ち旅行である、參禪訪道して歩く衲僧の往來を行脚と稱するは禪家の常套語である。

【要解】地藏桂琛禪師が法眼の文益に向つて、尊公何處に往かれるぞと問ふに法眼答へて云く、何處と云ふ目的も無い彼方此方をブラ〱行脚をして歩くのみと、其の行脚の端的は如何で御座ると再問せられて、法眼知らずと對ふ、地藏さしおかず其の不知は最も親切である、行脚の事徹底不知ならば其れが最も參禪に親しい處、參學の事了畢矣と云はれた、其の言下に法眼豁然と大悟徹底したと云ふ。法眼の知らずと云つたのは知不知の不知で有つたかも知れぬが地藏は知不知に屬せぬ不知を云つたのである、尋師訪道も參禪學佛も行脚往來も畢竟不知に至つて初めて其の事に親切と云ふことが出來る、法眼の豁然大悟も眞實不知の境界に達したから言下に省悟したのである、行脚の事畢竟作麼生。不知、この不知が佛法の究竟にして又佛法に最も親切なることを得たるものである。

【著語】口人を羅織して作麼かせん。運足轉歩人々の勝手ぢや、何くに往くなど〻鳥や魚ぢや有るまいし羅綱を張つて何となさる、往く者は往くに任して置いたがよからうぞ。口草鞋錢を索め去るや。彼方此方六部雲水をして歩いたら嘸草鞋も切れることだらうに、何處かで旅費でも索めて來たかの、チト貰つて置かぬことには先で不自由をする程に。これは萬松の親切、行脚には行脚の眼を具すべきだ、無暗と山川を跋渉しても骨折り損の草臥れ儲けなることを知らねばならぬ。口果然として放不過。手放して置け得まいと思つたら果して抑へ處を抑へた、遉がは地藏だ。口何ぞ

早く恁麼に道はざる。　不知とは結構な言ひ分だが何せモット早く道はなかつた、モー遲い遲い。口就身打劫。　方語で臨機應變と云ふこと、劫と云ふのは圍碁上の秘訣の一手だと云ふ、對手方へスッカリ讓つて仕舞つて而して贏をとると云ふ奇手ぢや、地藏も對手の不知に身を就しておいて、スッペリ吾が物にして終つたのは立派な巧者よ。口險んど盤纏を費さんとす。　盤纏とは腰につけてをる小費錢で卽ち路金のこと、法眼も危うく地藏の爲に巾著をしてやられる處だつたが、ヤット(イ)の事で取り止めた、行脚の事を悟つたら歸家穩座するがよからう。

頌云。而今參飽似當時（吾猶昔人非昔人也）脫盡簾纖到不知（猶有這箇在）任短任長休剪綴（枉費工夫）隨高隨下自平治（不勞心力）家門豐儉臨時用（關顰蹙不得）田地優游信步移（要行便行）三十年前行脚事（沒可思量）分明辜負一雙眉（依舊在眼上）

【讀方】　而今參じ飽いて當時に似たり、簾纖を脫盡して不知に到る。短に任せ長に任せて剪綴することを休めよ。高きに隨ひ、下きに隨つて自から平治。家門の豐儉時に臨んで用ゆ、田地優游歩に信せて移す。三十年前行脚の事、分明に辜負す一雙の眉。

【字義】　◎簾纖とは簾は廉にして廉直など丶熟字し、眞直のこと、纖は纖維など丶云つて極めて瑣細なる岐路である、至極微細なる所知障を云ふ。◎剪綴とは剪は長きを剪り取ること、綴は短きを綴ぎ足すこと。◎豐儉とは豐饒儉約の略語にして把住放行、扶起掃蕩與奪等の手段を云ふ。◎優游とは安逸にして無心なる容子。◎辜負とは孤負に同じ、背くこと。

【要解】　本頌は全篇を通じて法眼の境界を頌す。初め二句に參飽して不知に到達せる樣子を述べ、前の一對に不知の上の面目を明し、後の一對に不知の上の活用を叙す、最後の二句に至つて起句の似當時に照應して行脚未了時の不是處を道破して、悟了時未了時同一般なるを以て結ぶ。法眼が而今豁然大悟と參飽して見れば、迤邐行脚の當時と何にも異つたことがあるでは無い、如今も眼横鼻直、當時も眼横鼻直ではあるが、如今は岐路兎徑を盡く脫落して、眞實不知最も親切と云ふ境界に到達した、不知の上の消息はと云へば、短は短に任せ長は長に任せ、長きを剪らず短きを綴がず、高きは高き儘、下きは下き儘に法身露現であつて、自から太平の治である、斯る衲僧家の門風は機に臨み宜しきに隨うて我が全身を放下して、豐饒の態度を示し、又或は彼れが身心を把住して儉約の手段をも弄する、これと云ふも自受用の心田地が優游安逸なるが故で有つて入死入生、歩に任せて自由に往來のできる境界だからである、顧みれば三十年前の當時行脚の一大事を會せず、漫りに笠簑を著け草鞋を費やして他方にのみ向つて遍參した、今から見れば明らかに我が八字一雙の眉毛に辜負し、本來自の面目を諸方の山川に尋ね覓めてゐた、今日初めて我が眉毛に相見せりと云つた樣な調子である。全頌一律能く法眼禪師の風格を稱へて不知最も親切なる面目を躍如たらしむ、天

童は實に毫端に舌を具する祖宗の英靈である。

【著語】 □吾れ猶ほ昔人の如し、昔人にあらず。　猶昔人のごとし、似當時と云ふ、猶、似の字は昔人の樣なれども昔人では無いと云ふ意、法眼の形は未悟以前も今時も異りは無いが然ればとて舊時の觀を以て見てはならぬ。□猶ほ這箇の在る有り。　スッペリ脱盡した樣だが不知に到ると云ふ處を見ると猶這の一物に止つてゐるらしい、不知と云ふ踏臺をも踢倒せねばならぬ。□抂げて工夫を費やす。　長短に任せて置けば良いものを世人多くは强ひて餘計な苦勞をしてをる樣だ、然し休めることもいらぬ、萬松ならば剪綴も剪綴に任して置く。□心力を勞せず。　三祖も虛明自照、心力を勞せずと云はれた、金剛經には是法平等無有高下とある、高下があつても別に氣骨を折るには及ばぬ。□鹽醋を闕くことを得ず。　幾等儉約しても鹽や醋が無くては居られまい、それでも觸處生涯分に隨つて足るとでも云ふのか。□行かんと要あれば卽ち行く。　長安の大道七通八達だ、任運の去來、誰の御厄介にも預からぬ。□思量すべき沒し。　今更ら後悔しても致し方が無い、心配すると頭が禿げる、法眼よりも天童の方が餘計な苦勞をして居る樣だ、三十年前行脚の事、それでよいでは無いか。□舊きに依つて眼上に在り。　古も今も變りは無い、釋迦も達磨も其の通り、眼横鼻直、眉毛は眼上に在り、然し賓頭盧尊者は兩手で眉を撥つた意旨を知れりや如何ん、眉毛の塵となることを休めよ。

第二十一則　雲巖掃地

示衆云。脱迷悟絶聖凡雖無多事。立主賓分貴賤別是一家。量材授職即不無。同氣連枝作麼生會。

【讀方】 衆に示して云く、迷悟を脱し聖凡を絶すれば多事無しと雖も、主賓を立て貴賤を分つことは別に是れ一家、材を量つて職を授くることは卽ち無きにあらず。同氣連枝、作麼生か會せん。

【字義】 ◎迷悟とは「迷ふが故に三界の城あり、悟るが故に十方空」と云つて相對差別心を迷とし絶對平等心を悟とす。◎聖凡とは六凡四聖と云つて地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六趣は凡夫有情類、聲聞、緣覺、菩薩、佛の四生を聖者の覺位となす、要は迷界の衆生を凡夫と云ひ、悟界の覺位を聖者と云ふのである。◎無多事とは多岐無しと同じで、雜作の無い事と云ふ意。◎量材授職とは董仲舒が賢良策に「材を量つて官を授け、徳を祿して位を定む」となり、又睦州は「材を量つて職に補す」とも云つてをる、適材を適處に登庸することである。◎同氣連枝とは千字文に「孔だ懷ふ兄弟あり、氣を同ふし枝を連ぬ」とあり、兄弟同士の異體同心なる交情を云ふ。

【要解】 迷悟の情量を超脱し、凡聖の妄見を泯絶して這裏全く多事無しと云ふのが第一義諦平等門の樣子であるが、第一義諦があれば必ず第二義諦があり、平等門があれば必らず差別門が無くては

ならぬ、即ち師學主賓をも立てる、貴賤貧富をも分つ、是れ我が祖宗門下別格の風調である、然ればば長は長、短は短、其の人材を拔いて要職を授くるは師家の見地によることで叢林正に其の事ありである、今師學に非ず主賓にあらず貴賤にあらず、同氣連枝なる難兄難弟の相見は作麼と會したものであらう、試みに本則の雲巖道吾に參じて見るがよろしい。

擧。雲巖掃地次（沙彌行童不得氣力）**道吾云。太區區生**（埋兵挑鬪）**巖云。須知有不區區者**（可惜許作兩橛）**吾云。恁麼則有第二月也**（豈止第二百千萬箇）**巖。提起掃箒云。這箇是第幾月**（水晶宮裏出頭來）**吾。便休去**（盡在不言中）**玄沙云。正是第二月**（一人傳虛萬人傳實）**雲門云。奴見婢殷勤**（隨邪揆箕箒）

【讀方】擧す。雲巖掃地の次で、道吾云く、太區區生。巖云く、須らく知るべし、區區たらざる者あることを。吾云く、恁麼ならば則ち第二月ありや。巖、掃箒を提起して云く、這箇は是れ第幾月ぞ。吾、便ち休し去る。玄沙云く、正に是れ第二月。雲門云く、奴は婢を見て殷勤。

【字義】◎雲巖とは青原下三世藥山惟儼の法嗣、雲巖曇晟禪師である。姓は王氏、鐘陵建昌の人、少ふして石門に出家し初め百丈に參じて未だ玄旨を悟らず、左右に侍すること二十年、百丈歸寂の後即ち藥山に謁して言下に契會す、後に潭州攸縣の雲巖山に居る、即ち雲巖の名は其の住處の山號より來る、唐の會昌元辛酉年（皇紀一五〇一）十月疾を示し二十六日沐浴、二十七日夜に及んで歸寂、壽六十、茶毗して舍利一千餘粒を得たりと、勅して無住大師と謚し、塔を淨勝と曰く、洞山良价、杏山鑒洪、神山僧密等其の門に出で英名各天下に馳す。◎道吾とは同じく藥山の法嗣にして道吾山の圓智禪師なり、豫章海昏の人、姓は張氏、幼にして槃和倘に依つて敎を受け登戒す、藥山の法會に賴つて密に心印に契ふ、唐の太和九乙卯年（皇紀一四九五）九月十一日示寂、壽六十有七、塔を石霜山の陽に建つ、勅して修一大師と謚す、塔を實相と曰ふ、石霜慶諸、漸源仲興等の神足を出す。◎太區區生とは太は甚だ、區區は猶は勤勤のごとし、又は區區は小なる意なりとある、生は助字、御精が出ます御苦勞樣と云ふ程の意。◎第二月とは圓覺經に「妄に四大を認めて自の身相と爲し、六塵の緣影を自の身相と爲す、彼の病目の空中の華と、及び第二の月とを見るに譬ふ、空實に華なし、病者の妄執なり」云々、空華や第二の月は眼病者の見る處なれ共其の實は無である、無を認めて有となす樣子に云ふ語。◎玄沙とは雪峰義存の法嗣、玄沙の宗一大師である、名は師備、福州閩縣の人、姓は謝氏、幼より釣を垂るゝことを好んで小艇を南臺江に泛べ諸々の漁者に狎る、唐咸通の初め年甫めて三十、忽ち出塵を慕ふて乃ち釣舟を棄て芙蓉山の靈訓禪師に投じて落髮し豫章の開元寺の道玄律師に往いて受具した、道玄は雪峰と本法門の昆仲にして而も親近すること師資の如くで有つた、雪峰、玄沙の苦行するを見て備頭陀と稱した、玄沙、雪峰の室に投じて咨訣し晨昏を替ふること罔し、達磨不來東土、二祖不往西天、又は盡十方世界是一顆明珠等の語玄沙道として宗

門に喧傳せらる、梁の開平二戊辰年（皇紀一五六八）十一月廿七日歸寂、壽七十有四、臘四十四。閩の帥之が爲に塔を樹つ、羅漢桂琛、白龍道希、國淸師靜等十有餘人の神足を出だす。◎雲門とは雲門の文偃禪師にして雪峰義存の法嗣、傳は前に屢々出づ。◎奴見婢般勤とは奴は下僕、婢は下婢、般勤は丁寧に寒喧の仁義を述べること、召使と召使との挨拶であつて主人公から見たら賤劣極る話しで迚も立派な御座敷に出せぬと云ふ程の意。

【要解】雲巖和尙が箒を持つて後園でも掃いて居られたので有らう、其所へ法兄の道吾がやつて來て、大層御精が出る樣ぢや、嘸御苦勞で御座らうと云つた、これを聞いた雲巖は苦勞して居る樣だが其の實少しも區區ならざる者が有るのを御存じか怎うぢやと高飛車に出た、道吾は區區と不區區との二つを雲巖が並べたから隙さず然らば師兄は夢幻空華の第二月を認めて御座るのか、イヤハヤ氣の毒千萬眼病に罹らしやつたナと一矢を報いた、雲巖直ちに携へた竹箒を提起て這箇は第幾月で御座る、第一月か第二月か、區々か不區々か、掃地と辨道と唯此の箒一本に歸して了つた樣子だが箒一本と云へば尙ほ數量に墮す、故に云ふ這箇第幾月と、道吾も第幾月には詞窮つて便ち休し去つた、第一月も第二月も悉皆掃ひ去つて不立一塵のところ、有とも無とも云へぬ、休し去るより外に致し方があるまい、玄沙之を聞いて云ふ正に是れ第二月、掃箒を提起する雲巖の手元、それが正しく第二月なりと勘破した、雲門又聞いて云ふ、區區の不區區の、ヤレ第二月の第幾月のと、下女と下男との睦言ぢや、お恥かしくて公席へ出された話しで無い、結句平等の差別のと云ふ議論は抜きにして、實際日用光中が佛祖の行履となりさへすればよい、其れには六根門頭を掃地して一塵も立せず亦竹箒をも抛げ棄てることが肝要である、四師の云ふ所、各其の落處を詮議し合つてゐるのである。

【著語】□沙彌行童氣力を得ず。　沙彌は七衆の一にして沙彌尼の對、梵音シユラムネーラ（Sramnera）息慈、勤息男と譯す、惡を息めて慈悲行を修し十戒を受けたる出家の男子にして未だ修行熟せず二百五十戒等を受けざるが故に比丘（Bhiksu）と稱し難し、故に沙彌と云ふ、行童は又童行とも稱し出家を志して寺院に入りながら、まだ僧とならざる幼童にして、行說を事とする者、此では沙彌行童ともに豆小僧連と云ふ程の意、雲巖老僧が其の樣にせツせと働かれると下々の小僧連息を拔く暇もあるまい。イヤ掃地をするなら圓くせずにどうか隅々まで綿密にして貰ひ度いものだ。□兵を埋んで闘を挑む。唯の御苦勞樣とは聞きとれぬ、何か目論見があるらしい、一と戰せずば收まるまい。□惜しむべし話、兩橛となる。不區々者など丶云つては語が兩段となりはせぬか、可惜乎可惜乎ぢや、然し二つに見る人が二つにするのである、あへて雲巖の過では有るまい。□豈止に第二のみならんや、百千萬箇。　第二月どころでは無い、數量の上から云へば百千萬箇と云ふも猶は及ばすである。千江水あり千江の月、今は月の世界を云つてをる。□水晶宮裏より出頭し來る。雲巖向上の境界を云ふ、水晶宮は卽ち月宮で有つて光明の世界である、雲巖は月宮の主、光明の王である、區々も不區々も一も二も盡く光明裏の者ぞ、出頭し來るも別處では無い、行住坐臥王三昧上の

日用光中。口盡く不言の中に在り。　便ち休し去つたは何となく奥床しい、言はぬは言ふに勝る、諸人聽えたかナ。口一人虛を傳ふれば萬犬實を傳ふ。　三たび市虎を傳へて人皆信ずで、一人虛言を云ひ出すと段々本物と成つて世間に傳はる、玄沙餘計なことを云ふで無い、世間の眼病者はお前の尻馬に乘つて雲巖道を第二月など、認めるかも知れぬ、一をも立せず何の二邊にか墮ちやう。口邪に隨つて簸箕を撲つ。　惡戲に暗夜に簸箕を叩いて人の睡りを驚き覺すと云ふことがあるが、雲門も丁度それぢや、玄沙の惡口を眞似てつまらぬ惡戲をしたもんだ、餘計なことは爲まい、饒舌を叩くまいぞ。

頌云。借來聊爾了門頭（當處發生）　得用隨宜卽便休（隨處滅盡）　象骨巖前弄蛇手（欲道他人）　兒時做處老知羞（先治自己）

【讀方】　借り來つて聊爾として門頭を了ず、用ゆることを得て宜きに隨つて卽便休す。　象骨巖前、蛇を弄するの手。兒の時の做處老いて羞を知るや。

【字義】　◎聊爾とは苟且にてかりそめ、一寸としたことと云ふこと。◎門頭とは六根門頭にして眼耳鼻舌身意である。◎象骨巖前とは雪峰山下に象骨巖有りと云ふ、象骨は卽ち雪峰の別山である、形似を以て稱すと云ふ、今は雪峰義存の前でと云ふ意に用ゆ。◎弄蛇手とは本錄第廿四則に「雪峰看蛇の話」と云ふがある、「雪峰の示衆に云く、南山に一條の鼈鼻蛇あり、汝等諸人切に須らく好看すべし、長慶云く、今日堂中大いに人有つて喪身失命す、僧、玄沙に擧似す、沙云く須らく是れ我が稜兄にして始めて得べし、然も如是なりと雖も我れは卽ち不恁麼、僧云く和尙作麼生、沙云く南山を用ゐて作麼かせん、雲門拄杖を以て峰の面前に擲向して怕るゝ勢ひを作す」とある、師匠雪峰の投げ出した一條の鼈鼻蛇を玄沙雲門の兩人が樣々な狂言をして之を玩弄にしたから其の故實を捉へ來つて此の一句を作す。◎做處とは作處に同じで作爲と云ふ意。

【要解】　前二句に雲巖と道吾とを頌し、後の二句に玄沙雲門の評語を判じたのである。掃地と云ふ一寸した事柄を借り來つて僅かの間に門裏門外悉く掃除して了つた、雲巖の其の掃帚の用ゐ方が如何にも宜しきに合つてゐたので道吾は何とも云はずに默つてスツト休し去つた、サテ其れに就いて玄沙と雲門とが一點語を下してゐるが、此の兩人は曾て師匠雪峰が投げ出した一條の鼈鼻蛇を玩弄した手合ひだ、當時は修行も未熟、人間も幼穉で有つたから、其の行り口は如何にも疎暴で、子供の惡戲弄の樣で有つた、今雲巖道吾の親密なる此の商量を批評する尊公等は大分老僧に成つた、血氣に逸つた當時を思ひ出しては羞恥の念禁じ難く、自から面の赤きを覺ゆるで有らう、若し羞恥を知らずとせば批評などをする資格は無い、宜しく洞上綿密の宗風に參ずるがよいと、玄沙雲門にこと寄せて雲巖道吾の親參實究を讃歎せられた、何時もながら天童の妙手に感服せずにはをられない。

【著語】　口當處に發生し。　雲巖は内外の塵を掃除せんとの意識を生じたらしい、然し前滅後生、後生前滅である。口隨處に滅盡す。　前のと二句一聯、内外掃除の念慮が滅盡して、發生すべき處

に發生し滅盡すべき時に滅盡してをる、當處發生、隨處滅盡、如何にも兩者の親密にして自由自在なる境界を讃歎したのである。◎他人を道はんと欲せば。　他人の好惡を云はうと思ふならば。□先づ自己を治めよ。　先づ御自身に一つ禿げ顱を撫でて大いに羞を知るがよい。此の二句は一聯である。玄沙や雲門も雲巖道吾を批評するなら先づ自分の脚下から詮索が大切ぢや、是れは玄沙雲門計りで無い、天童にも面當てを云つてをる、イヤ天下の諸人お互ひ樣にも耳の痛い語である。

第二十二則　巖頭拜喝

示衆云。人將語探。水將杖探。撥草瞻風尋常用底。忽然跳出箇焦尾大蟲。又作麼生。

【讀方】　衆に示して云く、人は語を將つて探り、水は杖を將つて探る。撥草瞻風は尋常用ゆる底なり。忽然として箇の焦尾の大蟲を跳出せば又作麼生。

【字義】　◎撥草瞻風とは洞山錄に「若し能く撥草瞻風せば必らず子が所重を爲さん」と、無明の荒草を撥躙して佛祖の家風を瞻望する意で有つて、煩惱を斷じて菩提を求むると云ふに同じ。◎焦尾大蟲とは大蟲は虎のこと、焦尾は卽ち燒尾で有る、故事白眉の第八巻に曰く「開見錄に士人初めて登第して必ず觀宴を展ぶ、之を燒尾の宴と謂ふ」と、註に曰く「一說に虎化して人と爲る、唯尾のみ化せず、須らく焚除して乃ち人と成ることを得べし」とある、今は虎かとすれば人、人かとすれば虎、變化自在の樣子に譬ふ。

【要解】　人の智愚賢不肖を探らうと思ふならば僅に一語を吐かして見れば直ぐ知れる、水の深淺を量るには杖竿を差し込んで見れば能くわかる、是れは學者を接する人師が常に用ゆる手段である、又參禪學道者は無明煩惱の雜草を撥ひのけて、本地一段の風光を徹見しやうとするが是れは亦平々凡々尋常一樣の作業である、今此へ忽然焦尾の大蟲の樣な變化自在、神通妙用底の漢が跳り出して來たならば作麼とするか、語を以ても探られぬ、杖を以ても量られぬ、撥草瞻風なども無用の閑家具、サテ作麼としたもので有らう、其の處分が見たくば本則に就いて巖頭德山の相見に參じたがよからう。

擧。巖頭到德山。跨門便問。是凡是聖。（這賊）山。便喝。（裂破　髑髏）頭。禮拜。（未當）洞山聞云。（好心）若不是豁公大難承當。（厚帑　甘言）頭云。洞山老漢不識好惡。（却又著忙）我當時一手擡一手搦。（我豈不知）

【讀方】　擧す。巖頭、德山に到り門に跨つて便ち問ふ、是れ凡か是れ聖か。山、便ち喝す。頭、禮拜す。洞山聞いて云く、若し是れ豁公にあらずんば大いに承當し難からん。頭云く、洞山老漢、好

惡を識らず、我れ當時一手擡一手捺。

【字義】◎巖頭とは鄂州の巖頭全豁禪師なり、全豁又は全奯に作る、泉州の人、姓は柯氏、少ふして青原の誼公を禮して落髪し、長定の寶壽寺に往いて稟戒習學、後ち禪苑に優游し雪峰の義存、欽山の文邃と友たり、初め臨濟に至つて歸寂に屬し又仰山に謁す、機緣未だ契はず、後、德山宣鑑に投じて嗣法す、洞庭の臥龍山に庵するに徒侶臻り萃る、巖頭常に衆に謂つて曰く、老漢去らん時大に吼ゆること一聲し了つて去ると、唐の光啓の頃、中原に盜起り衆皆地を避く、師は端居して晏如、一日賊大いに責むるに至つて供の饋ること無きを以てす、遂に刃を俥るに神色自若、大いに叫ぶこと一聲して終ふ、其の聲數十里に聞ふといふ、ときに光啓三丁未年（皇紀一五四七）四月八日、壽六十、僖宗謚して清嚴大師といふ、瑞巖師彥、羅山道閑等の多士皆其の門を出づ。◎德山とは龍潭崇信の資、德山宣鑑禪師である、既に第十四則に出だせり。◎喝とは威を振つて腹のドン底から出づる聲で有つて語では無い、喝散と云つて二見對待の迷雲を吹き散らす意にとる、第十三則にも出づ、合せ見るべし。◎洞山とは青原下第四世雲巖曇晟の法嗣洞山良价禪師である、會稽の人、姓は兪氏、幼歲師に從て般若心經を念じ無眼耳鼻舌身意の處に至つて、忽ち手を以て面を捫で師に問うて曰く某甲眼耳鼻舌等あり何が故に經に無と言ふやと、諷誦師駭然として之を異とし、即ち指して馬祖の嗣五洩山の靈默禪師を禮せしむ、南泉に謁し潙山に參じて後、雲巖に詣し水を過ぎて渠乃ち正に是れ我れ、我れ今是れ渠にあらずの所悟あり、正偏、功勳五位、三路三滲漏、『寶鏡三昧』、『玄中銘』等の發明ありて洞門の宗風此に起る、唐の大中の末に至つて新豐山に於て學徒を誘化し、厥の後、化を豫章の洞山に盛んにす、故に又『新豐吟』あり、唐の懿宗咸通十己丑年（皇紀一五二九）三月朔旦、命じて髮を剃り身を澡ひ鐘を聲して衆を辭し儼然として坐化、大衆慟哭して止まず、師忽ち眼を開き懇々の說示をなし、愚癡齋を設け八日に至つて端然として長往す、壽六十三、臘四十二、勅して悟本大師と謚し塔を慧覺といふ、門下に曹山本寂、雲居道膺、龍牙居遁、青林師虔、疎山匡仁等十有餘員の尊宿を出だす、『洞山錄』あり、これに依つて其の宗風を看るべし。◎豁公とは全豁公の略で巖頭を云ふ、公は敬稱。◎承當とは類書纂要の九に「承當は下、上を載するの謂なり、當は抵、猶ほ抵當して其の事を承任するが如し」とある、首肯ひ合點すると云ふ程の意。◎一手擡一手捺とは擡は持上げること、捺は搦に同じく抑ゆること、片手では擡げ片手では捺へる、第十六則の頌著に手擡手捺とあり、看よ。

【要解】巖頭は本師德山に到り、門閫を跨つたまんまで問うて云ふ、是れ凡か是れ聖か、凡聖の語を以て師を驗み樣とした、師の德山便ち一喝す、凡とも聖とも云はず斯かる二見を吹き飛ばして了つた、巖頭即座に禮拜をした、胸に一物あつての禮儀らしい、洞山大師後に之を聞いて、若し巖頭豁公でなかつたならば、德山一喝の下に禮拜して、師の意を肯ふことは出來無かつたらう、豁公ならばこそと大いに賞讚した、此の甘言に釣られて巖頭は、洞山和尚などは人の心の好惡も能う知らんで沒分曉ことを云ふ老耄だ、我れ當時半ばは肯ひ半ばは肯はず、德山老僧に全分承當したのでは

無い、一手擡一手捺の手段を取つたので御座ると本音を吹いて了つた、佛法擧揚の上には師學も父子も無いから些しも私を容れてはならぬ、驗主もよし探拔もよい、然し一點でも己見に跨り機執を構ふるならば當に墮獄の分あるべし、巖頭若しそれ焦尾の大蟲ならんには一擡一捺却つて彼れが神通妙用で有らう。

【著語】□這の賊。　閾を跨ぎかけた巖頭、此奴眼つきが怪しいぞ、萬松は油斷のならぬ大賊と看破したが怎うぢや。□髑髏を裂破す。　徳山の此の一喝には凡聖迷悟の兩頭を碎破するのみならず情識盡き果てた髑髏をも裂破した、イヤ大地虛空も粉微塵よ。□未だ好心に當らず。　頭は地について居る樣ぢやが面付が承知せぬ、油斷のならぬ禮拜と見たぞ。□幣を厚ふし言を甘にす。　史記に此の語あり又左傳に「幣重ふして言は甘し」とある、進物をウンと持つて叮嚀な口上を述べ立てた、洞山和尙何か爲にする處あつてのことかな、したゝか握らして置いて實を吐かせる積りだらう。□却つて又著忙す。　洞山に釣られて愈々脚下の未穩在を暴露した、一々分疎するに多忙しい、御苦勞々々。□我れ豈に知らざらんや。　巖頭その樣に云はずとも萬松はチヤント知つて居る、洞山も夫れを言はせやうと思つて釣つたのだ、皆まで言ふな、諄い〳〵。

頌云。挫來機（風行草偃）　**總權柄**（符到奉行）　**事有必行之威**（佛手遮不得）　**國有不犯之令**（誰敢當頭）　**賓尙奉而主驕**（以下剋上）　**君忌諫而臣佞**（以上化下）　**底意巖頭問徳山**（雖然父子與師）　**一擡一捺看心行**（未免干戈相待）

【讀方】來機を挫しぎ、權柄を總ぶ。事に必行の威あり、國に不犯の令あり。賓、奉を尙んで主驕り。君、諫を忌んで臣佞す。底の意ぞ巖頭、徳山に問ふ。一擡一捺、必行を看よ。

【字義】◎來機とは師家に向つて參學し來る機根のことにして學人を云ふ。◎權柄とは權は秤の錘、柄は柯にして秤の竿のこと。◎必行とは心やりと云ふ意で、底意と云ふに同じ。

【要解】學人を接する程の師家ならば、來機を挫しぐの力量あり、又權柄を總ぶるの手腕がある、この初二句六字は徳山巖頭洞山の三人にかゝる。事業を爲すには必行といふ威力がいる、徳山の一喝は其の威を振つたのである、國家には不犯といふ法令がある、巖頭の禮拜は其の令に服したのである、此の二句十二字は徳山巖頭にかゝる。賓客の洞山が過重の奉公をしたので主人の巖頭は驕慢に流れ、徳山の君主が直諫を容れぬから巖頭の家臣は姦佞に陷つた、此の二句十二字は賓主君臣を分つて本則の全體を評唱したのである。末後の二句十二字に天童が針線の工夫を見る、巖頭が徳山に凡か聖かを問取し來つたは什麽底の意ぞ、一擡一捺と洞山に云つた其の必行果して奈何ん、等閑に看過してはならぬ、參究のしどころは此であるとギウと力を入れた天童の腕ぶしを見るがよい。

【著語】□風行けば草偃す。　論語の顏淵篇に「君子の德は風なり小人の德は草なり、草に風を上るときは必ず偃す」とある、來機を挫しぐ處の威風には靡かぬ草木は無い、草木どころか佛祖も頭

が上らぬ。□符到れば奉行す。　符とは御上の御布令で今の御勅諭の如きもの、御勅諭が一たび煥發せられたならば萬民等しく之を奉行する、違背する者は一人も無い、秤の量とても其の通りよ。□佛手も遮ぎることを得ず。　必行の威には佛でも菩薩でも手出しは出來ぬ、況して私心などは容れられぬ。□誰か敢へて當頭せん。　佛國に入らば佛國の令に從ふ、誰れ一人違背した者が無いではないか。□下は以て上を風刺し。　卜子夏が毛詩の序に「詩に六義あり、一に曰く風、二に曰く賦、三に曰く比、四に曰く興、五に曰く雅、六に曰く頌、上は以て下を風化し下は以て上を風刺す」とある、次の著語も亦此に出づ、下たる者は風の身に添ふ如く諷して上を諫めるがよいぞ、下は洞山で上は巖頭である、風刺とは上を諫むるに膝詰談判を以てせず、風の吹く樣に軟かく而も何處かに刺のある樣に詩歌文章などに事寄せて諫むる仕方である。□上は以て下を風化す。　上たる者は德風を以て自から下を感化することが大切ぞ、餘り嚴重な御布令では下々が難儀をする、イヤ臣民が姦佞になる樣な惡風化を止めて貰ひ度い、上は德山、下は巖頭をさす。□然も父子、師を興すと雖も。　吳子の治兵の篇に「天下當ること莫し、名けて父子の兵と曰ふ」と、德山巖頭は父子、師は出師で戰爭を起すこと、親子の戰では凡とも聖とも外から手が出せない、何でも好いから結局のつくまで鬪つたらよからう、だが。□未だ干戈相待つことを免かれず。　前のと二句一聯、父子で兵戈を動かしては居るが雙方睥み合ひの姿ぢや、一擡一捺では何とも形が附くまいぞ、太平の姦賊共が餘計なことをオッ初めたものだ。

第二十三則　魯祖面壁

示衆云。達磨九年呼爲壁觀。神光三拜漏泄天機。如何得掃蹤滅跡去。

【讀方】　衆に示して云く、達磨九年呼んで壁觀と爲す。神光三拜、天機を漏泄す。如何んが蹤を掃ひ跡を滅し去ることを得ん。

【字義】　◎壁觀とは傳燈に云く「嵩山の少林寺に寓止して面壁して坐す、終日默然たり、人之を測ること莫し、之を壁觀婆羅門と謂へり」と、壁觀婆羅門は默つて壁の方に面つて觀行してをる僧侶と云ふ意で、婆羅門は梵音ブラフマナ(Brahmana)卽ち淨行　淨裔と譯す、印度最高位に位する種族で僧侶の階級にあたる、達磨が印度より來て少林山に九年も面壁をしてをられたから時人呼んで壁觀婆羅門と謂つたのである。◎神光三拜とは神光は達磨の正嗣にして東土の二祖慧可大師である、神光は曠達の士にして久しく伊洛に居り、博く群書を覽、善く玄理を談じた人であるが每に歎じて曰ふ、「孔老の敎は禮術の風規、莊易の書は未だ妙理を盡さず」と、達磨大士の少林に止住するを聞き往いて參承するも大士は端坐面壁して立たず、時に十二月九日の夜、天大いに雪を降らし終に腰を埋むるに至る、然も神光敢へて辭せず、天明達磨立つて其の所求を問はるゝに、光、悲淚して慈悲

甘露門を打開せんことを願ふ、大士の誨勵を聞いて、光、潛に利刀を取つて自から左臂を斷ち師の前に置き以て求道の眞實を表す、依つて室に入ることを許され、心を覓るに了に不可得の下に安心を得、越えて九年師天竺に返へらんと欲し、門人をして其の所得を言はしむ、道副、尼總持、道育各各所解を呈して印可を蒙る、最後に慧可禮拜して後、位に依つて而して立つ、師云く汝は吾が髓を得たりと、乃ち慧可を顧みて之に告げて曰く、昔如來、正法眼を以て迦葉大士に付す、展轉囑累して我れに至れり、我れ今汝に付す、汝常に護持すべしと、此の禮拜して位に依つて立たのを今此に神光三拜と云つたのである。◎漏泄天機とは丹霞普月禪師の語に「良に口を毘耶に杜づるに由るも已に是れ天機漏泄す、任使、室を摩竭に掩ふも終に須らく縫罅離披すべし」とある、形而下にチヨツトでも現はれゝば已に天地の機微を漏泄せしめた者であると云ふ意。◎掃蹤滅跡とは已に漏泄したなら、蹤迹が殘つてゐるだらう、其の蹤迹を拂ひ、其の痕跡を滅して了ふと云ふこと。

【要解】達磨大士は少林に在つて默然端坐、面壁すること九年、その爲に人之を稱して壁觀婆羅門と曰ふ、神光慧可も禮拜して何とも言はずに位に依つて立つた、それが端し無くも天機を漏泄したのである、サテ既に面壁に依つて名相を爲し、禮拜に依つて形相を爲したが卽今形名の蹤跡を掃滅し去るには如何なる手段を用ゐたもので有らうか、本則に就いて看よ。要は古佛說かず、千聖傳へざる宇宙瀰淪の佛法を示して、苟も佛法の相に墮せざる沒蹤跡斷消息の眞風を體得せよといふにある。

擧。魯祖凡見僧來便面壁（相見了也）南泉聞云。我尋常向他道空劫以前承當（不考自招）佛未出世時會取（和尚會也未）尚不得一箇半箇（只爲漏栓桊）他恁麼驢年去（忙者不會）

【讀方】擧す。魯祖凡そ僧の來るを見れば便ち面壁す。南泉聞いて云く、我れ尋常他に向つて、空劫以前に承當せよ、佛未だ出世せざる時に會取せよと道ふすら、尚ほ一箇半箇を得ず、他恁麼ならば驢年にし去らん。

【字義】◎魯祖とは馬祖道一の法嗣にして、魯祖山の寶雲禪師である、傳燈を按ずるに姓貫生死の事を記せず、唯二三機緣の語を錄するのみ、語中洞山との商量、及び本則の南泉道あるを見るの外諸師の名なし、以て唯其の時代を推するに足るのみである。◎南泉は馬祖の嗣、南泉の普願禪師、傳は第九則に出づ。◎空劫以前とは成住壞空の四劫と云ふがある。空劫は其の一つで空劫より成劫より住劫、住劫より壞劫、壞劫より空劫と云ふ具合に回轉する、各の劫は二十小劫を以て其の期間とする、成劫は卽ち世界の成る期間で二十小劫、其の以前に空劫の二十小劫がある、其の空劫より以前と云へば空劫とも未だ云はれ無い時間で、劫前未兆と云ふに同じ、この語第三則にも出づ就いて看よ。◎一箇半箇とは箇は人の名數である、現今では一人を抽象して個人と云ふ、英語のIn-

dividual の譯語、一人半人と云ふ語は秦の符堅が「吾れ十萬の師を以て襄陽を取る、一人半を得たるのみ、左右問うて云く誰ぞや、賢曰く安公一人、習鑿齒半人なり」と云つてある、今の一箇半箇は少數を極々强めて云つたのである。◎驢年とは驢馬の干支にあたる年と云ふこと、十干十二支の中に驢の年と云ふのは無い、俗に太陽が西から出る時とか、鴨綠紅の水が逆流する時とか云ふのと同じで其んな年は無いけれ共縱し其の樣な時が有らうともと云ふ意に用ゆ。

【要解】魯祖寶雲禪師は參學の雲水が來るのを見ると、いつでもクルリと壁の方を面いて坐禪をして了つて對手にならぬ、南泉の普願が之を聞いて云く、我は尋常學人に對して乾坤未分の空刧以前に向つて承當せよ、迷悟未判の佛出世已前に向つて會取せよと道つて聞かしてゐてさへ一人も半分も此の事を明らめた者が無い、然るに魯祖は僧さへ來れば面壁してゐる、恁麼なことでは驢の年、猫の年が來ても一箇半箇を打出することは出來まい。と云へば南泉が魯祖を貶した樣に聞えるが實は反對で、却つて南泉は魯祖面壁の當體それが空刧以前の承當、未出世以前の會取なることを讚歎されたのである。

【著語】口相見了也。面壁されたでは打角來た坊さん達も魯祖に相見が出來まい。然し萬松はチヤンと相見して了つたよ。諸人は怎うぢや、人々自己の魯祖に相見するがよい。口考へざるに自ら招く。拷問しないのに自から白狀するといふことで、承當すべき何物も無いと云ふことを南泉自身に云つて居るでは無いか、空刧以前だの以後だの、承當だの不承當だのと云ふ二相は何處に立つのぢや　口和尙會すや也た未だしや。南泉貴公は會取したか怎うぢや、未出世の處に會不會が有るか怎うぢや、眞實不會佛法なら結構ぞ。口只栓索を漏すが爲なり。栓は木の釘、索は繩である栓索が緩くては水を漏して了う恐れがある。接得の仕樣が手緩いから一箇半箇も得られぬのさ、何故一毫も佛法無しと云ふ手嚴しい敎化をせぬか、人物の出來ぬも無理は無い。口忙者は不會。氣の忙しい連中には迚も合點はいくまいよ、元より承當する物も會取する者も無いところを合點するのである、うろたへては佛法は得られぬぞ、寂靜に入つて箇の不思量底を思量するがよからう。

頌云。淡中有味（誰敢添鹽著醋）　妙超情謂（別日再商量）　綿綿若存兮象先（已落第二）
兀兀如愚兮道貴（無人著價）　玉雕文以喪淳（和尙手高）　珠在淵而自媚（少賣弄）
十分爽氣兮淸磨暑秋（體露金風）　一片閑雲兮遠分天水（好事多寛）

【讀方】淡中に味有り、妙に情謂を超ふ。綿綿、存するが若くにして兮、象の先なり。兀兀、愚の如くにして兮、道貴し。玉、文を雕つて以て淳を喪し。珠、淵に在つて自から媚ぶ。十分の爽氣兮、淸く暑秋を磨し、一片の閑雲兮、遠く天水を分つ。

【字義】◎淡中有味とは騏馬と云ふ人が、磁州の大明を過ぎ堂に入つて僧の面壁して坐するを見て一箇の好談漢と云つた、すると大明の詮禪師、淡中に味有りと答へられた、其の故事があるから出

されたものと見える、淡は五味七味に拘はらぬ、所謂淡白なること水の如くにして無味と云ふも同じ無味中に無量の味ありと云ふ意。◎情謂とは情慮言謂にして、分別や言詞と云ふこと。◎綿綿若存兮象先とは老子に「玄牝の門是を天地の根と爲す、綿々として存するが若し、又吾れ誰れが子なるを知らず、帝の先に象たり」とある、綿々は相續の貌、象は兆なり、朕兆以前の意。◎兀兀とは字彙に不動の貌とある。山の巍然として聳え立つ有樣、又無知の貌にして愚魯のすがたに云ふ。◎玉雕文、珠在淵の二句は文選の第十七卷、陸機が文の賦に曰く「石、玉を蘊んで以て山輝あり、水、珠を懷いて川媚ぶ」とあるより來るか、淳は清也樸也、澆からざるを淳と曰ふと。◎爽氣とは清快なり。心持ちのすが〳〵しきこと。

【要解】　初めの二句八字に面壁の功德を稱し、次の二句十四字に魯祖面壁の境界を歎せらる、次の二句十二字には南泉の評語を抑揚し、最後の二句十八字に本則を全提し、靈默にして而も照用なる妙處を道破したものである。意を略解せば、面壁の當體は淡水中の妙味にして分別情量を超えてをる。魯祖其の人の境界は綿々として相續不斷なれ共今時に墮せず、今時が即ち天地未開以前の消息である。愚の如く魯の如くにして兀坐不動なる其所に佛祖も測度し難き道の尊貴が現成してある魯祖面壁、璞玉に南泉が餘計な文彩、雕琢して玉の眞淳を喪つた、のみならず珠は九淵に在つて自から放光動地で有つたものを餘計な栓索をしたから其の所在を見失つたではないか、語に南泉を抑へて意に之を卓上した、魯祖南泉の境界を見るならば十分の爽氣颯と吹いて一點の熱氣も無く誠に清凉の秋ぢや、其許へ一片の閑雲が無心にして去來し、天水隔て無き處に遠く天水を分つ、其の景色に又一入の眺めを添へた、魯祖清凉の秋に南泉が一片の閑雲を添付たので此の公案は云ふに云はれぬ妙趣を見せて來たと天童が腕に縒をかけての頌出である。

【著語】　口誰か儞をして鹽を添へ醋を著けしむ。　正傳の三昧は由來淡白無味である、味噌や酢をかきませた者が誰かあるかな、混せ樣とて交ざるまい。口別日に再び商量せん。　口も心も及ばぬと云ふなら何れ又後日ゆつくり商量することにしませう、イヤ何か商量すべきことがあるのか。口已に第二に落つ。　空刧と今時と前後が有りそうだ、前後を立てると第二頭に落つるぞ、空刧に前後の有らう筈が無い、口人の價を著くる無し。　默念端坐の處に相場はつけられまいよ。無價とでも云はうか、口和尙手高し。　手高しは上手と云ふこと、南泉和尙は仲々彫刻が上手い、虛空に雕琢をしたのだらう、鑿痕がついてゐない、其の玉を鑑定して淳を喪すと云つた天童の眼光も鋭い。口少賣弄。　第十二則にも出てゐた、玉の安賣をしたいと見える。魯祖の玉で無い、天童自身の玉を賣り付ける積りだらう。口體露金風。　僧雲門に問ふ「樹凋み葉落つる時如何ん、門云く體露金風」この古則からして暑秋を磨しの句に著語した、金風は秋風である、體露は丸出しと云ふこと、天地一枚の秋、魯祖の眞面目をさらけ出した。口好事魔多し。　月に村雲、花には嵐、兎角浮世はまゝならぬ。然し好事許りぢや好事にならぬ。魔があるから好事は一層引立つのである、して見ると好事も魔も皆是れ此の世の壯觀よ、と云つて魔を好むで無い、やはり油斷をしてはならぬ。

第二十四則　雪峰看蛇

示衆云。東海鯉魚。南山鼈鼻。普化驢鳴。子湖犬吠。不堕常塗不行異類。且道是什麼人行履處。

【讀方】衆に示して云く、東海の鯉魚、南山の鼈鼻、普化の驢鳴、子湖の犬吠、常塗に堕せず異類に行かず、且らく道へ是れ什麼人の行履の處ぞ。

【字義】◎東海鯉魚とは本錄第六十一則の本則に雲門の語あり「門云く、扇子䟦跳して三十三天に上り、帝釋の鼻孔に築著す、東海の鯉魚、打つこと一棒すれば雨、盆の傾くに似たり、會すや會すや」と、今は語を對にする爲に東海の鯉魚と云ふ文字が必要であるから出したので雲門の變通自在なる妙用と云ふ程の意である。◎南山鼈鼻とは本則の「南山に一條の鼈鼻蛇あり」と云ふ語の略である、南山は假説の語で方位や地理上に關係は無いけれ共南は自から主位を示し、山に動ぎ無き處の樣子合がある、鼈鼻蛇は赤小豆の如き斑點のある蛇である、蛇は毒氣毒熱を吐く者で觸るゝことも背くこともならぬ恐ろしい樣子を云ふ。雪峰の變通を此の一語に現はしたのである。◎普化驢鳴とは普化は盤山寶積の法嗣で鎭州の普化和尙、即ち馬祖の孫で普化宗の祖と仰がるゝ人である、城市或は塚間に一鐸を振り「明頭來や明頭打、暗頭來や暗頭打、四方八面來や旋風打、虛空來や連架打」と歌つて北地を行化せられたと云ふ、嘗て夕暮に臨濟院に入つて生菜を喫ふ、臨濟が之を見て還の漢大いに一頭の驢に似たりと云ふ、すると普化が便ち驢の鳴聲を作たと傳に記してある。◎子湖犬吠とは子湖はやはり馬祖の孫で南泉普願禪師の法嗣、子湖巖の利蹤禪師のこと、初め衢州の馬蹄山に茅を結んで宴居してゐたが唐の開成二年（皇紀一四九七）に邑人の翁遷貴が山下の子湖を寄附したので、此に院を創建した、門下に牌を立てゝ曰く「子湖に一隻の狗あり、上、人の頭を取り、中、人の心を取り、下、人の足を取る、擬議すれば即ち喪身失命す」と、犬吠は驢鳴と云ふ語に對を取つた迄で即ち此の一隻の狗を云ふのである。◎不堕常塗とは常塗は尋常の通塗で有るから、普通一般の途轍を履まぬと云ふこと、前二句の雲門雪峰を云ふのである。◎不行異類とは異類は人類で無い、即ち驢とか犬とか云ふのが異類である、驢鳴を作し犬吠を爲しても畜生と作つたのでは無いから異類に行かずと云ふ、異類中行と云ふ時と少しく意味が違つてゐるのであるから注意して見ねばならぬ。

【要解】雲門が東海の鯉魚を打する、雪峰が南山の鼈鼻蛇を翫弄する、普化が生菜を喫して驢鳴する、子湖が牌を立つて一隻狗を出す、何れも皆佛祖向上の活三昧である、迷悟凡聖の常塗にも堕せず、六趣四生の異類にも行かず、格外沒量の變現自在である、是れは一體如何なる人の實行履踐する處であるか、知つてゐるなら道つて看よ、知ら無いなら本則に就いて篤と雪峰の手腕を見るがよい。

舉。雪峰示衆云。南山有一條鼈鼻蛇。汝等諸人切須好看。（提起坐具云遣箇不是倩來底）長慶云。今日堂中大有人喪身失命。（聞風便颺）僧。舉似玄沙。（疊不過三）沙云。須是我稜兄始得。（狐朋狗黨）然雖如是我即不恁麼。（別有一條長便請拈出）僧云。和尙作麼生。（毒蟲頭上揩痒）沙云。用南山作麼。（只者鼈鼻猶爲分外）雲門以拄杖攛向峰面前作怕勢。（何得自傷己命）

【讀方】　擧す。雪峰、衆に示して云く、南山に一條の鼈鼻蛇あり、汝等諸人切に須らく好看すべし。長慶云く、今日堂中大に人有つて喪身失命す。僧、玄沙に擧似す。沙云く、須らく是れ我が稜兄にして始めて得べし。然も是くの如くなりと雖も我れは卽ち不恁麼。僧云く、和尙作麼生。沙云く、南山を用ゐて作麼かせん。雲門、拄杖を以て峰の面前に攛向して怕るゝ勢を作す。

【字義】　◎雪峰とは靑原下第五世德山宣鑑の法嗣雪峰山の義存禪師で巖頭全豁と同門である、泉州南安の人、姓は曾氏、家は世々佛を奉ず、年十二にして父と蒲田の玉澗寺に遊んで慶玄律師を拜して我が師なりとて遂に留つて侍す、十七にして落髮し芙蓉山の常照大師に謁す、後に幽州の寶刹寺に往いて具足戒を受け久しく禪會を歷るうち緣德山に契ふに至る、唐の咸通年中に幽州に廻つて象骨山雪峰に登つて院を創すれば徒侶翕然として蝟集す、懿宗特に眞覺大師の號を賜ひ、又紫衣を賜ふ、三たび投子に到り九たび洞山に至りしことは修行事に親切なる例證として普ねく世の知る處である、洞山に飯頭として盆を覆却した奇行などは前旣に云つたことである、閩川に住すること四十餘年、學者冬夏千五百人を減じ無かつたと云ふ、宜なり雲門、玄沙、長慶、保福、鏡淸、翠巖等大凡五十餘人の神足を產み、子に雲門、曾孫に法眼の兩宗を出だす、以て化門の如何に盛んで有つたかゞ知られる、梁の開平二戊辰年（皇紀一五六八）三月疾を示す、閩の帥、醫に命じて診視せしむるに吾れ疾に非ずと曰つて竟に藥を服せず、偈を遺し法を付して夏五月二日朝、藍田に遊んで暮に歸つて澡身し中夜に入滅す、壽八十七、臘五十九。◎長慶とは雪峰義存の法嗣福州長慶の慧稜禪師である、杭州鹽官の人、姓は孫氏、幼にして性淳澹、年十三に及んで蘇州の通玄寺に於いて出家登戒、禪肆に歷參すること多年、唐の乾符五年閩州に入つて西院に謁し靈雲を訪へども尙ほ疑滯あり、後に雪峰に投じて疑情氷釋、悟解の頌あり曰く「萬象之中獨露身、唯人自肯乃方親、昔時謬向二途中一覔、今日看如二火裏氷一」と、雪峰に來往すること二十九載、天祐三年に至つて泉州の刺史王延彬の請を受けて招慶に住す、後に閩の帥、請して長樂府の西院に居せしめ額を奏して長慶と曰ひ超覺大士と號す、兩處に開法して徒衆一千五百に及び、化を閩越に行ること二十七載、後唐の長興三壬辰年（皇紀一五九二）五月十七日歸寂、壽七十有九、臘六十、王氏塔を建つ、開先紹宗報慈慧朗、報恩寶資等二十七人の法嗣がある。◎喪身失命とは身命を喪失すると云ふことで拋身捨命と云ふに同じ、身心も命根も悉皆脫落盡すると云ふ意。◎擧似とは似は示なり、擧げて示すといふこと、丸出

しに話をしたと云ふ意である。◎玄沙とは雪峰の嗣玄沙の師備禪師、傳は第二十一則に出づ、◎稜兄とは稜は長慶慧稜の稜の字で、法兄の慧稜和尚と云ふこと。◎不恁麼とは恁麼は如是であるから不如是と云ふも同じである、然うはしないといふ意。◎用南山とは雪峰示衆の語を略して、單に南山を用ゐてと云ふ。◎雲門とは雲門文偃禪師にして傳は第十一則に出づ。◎擲向とは擲は擲也とあるから向ふへ擲げ出すことである。

【要解】　雪峰義存禪師衆に示して曰ふ南の山に一條の鼈鼻蛇が居る、汝等諸人適切に好く之を看取するがよいぞと、事を借りて門下に示された、蛇は毒氣を吐く者、亦能く睡る者である、自己心中の主人公を云ふ、長慶は今日僧堂裡に無數の人が有つて蛇に呑却せられて了ひ、身命を喪失して了つたと云つた、これは蛇と人とを二つに見ず蛇呑盡の樣子を述べた。此の事を或る僧が法兄の玄沙に持つて行つて話した、すると玄沙は我が法兄慧稜にして始めて其の樣な伎倆を現はし得たのである、ではあるが我れ玄沙ならば其樣なことをせまいにと云つた、僧は然らば和尚は作麼となさると問うた、玄沙のいふには南山の鼈鼻蛇などを擔ぎ出して作麼にするか、南山だの鼈鼻蛇だのといふ者が那處にあるか、是れは玄沙が蛇を呑却した手段である。雲門は雪峰の面前に拄杖を擲げ出して怖しうて叶はぬと云ふ樣な勢をした、これは蛇を活した作略である。親爺の雪峰が一條の蛇を持ち出すと三人の子供が之を翫ぶ、長慶は蛇に呑まれて見せ、玄沙は蛇を殺して見せ、雲門は蛇を活して見せた、各特色のある弄し方で三人とも蛇使の名人である、親子揃つての興行であるからする事に無駄が無い。

【著語】　□坐具を提起して云く、這箇是れ借り來る底にあらず。　雪峰は鼈鼻蛇を擔ぎ出して諸人好看すべしなどとは廻り遠い行り方だ、萬松ならば直ぐに持ち合せの坐具を提起して諸人好看すべしと云はん、這箇の坐具是れ他より借り來つたもので無い、人々本具である、展べては坐し疊んでは袖裡にかく、鐘鳴れば佛殿、鼓響けば齋堂、行住坐臥受用不盡底の坐具である、これは萬松が鼈鼻蛇を看破して手近く坐具となして自由に拈弄した巧手である。坐具は尼師壇と稱し僧具の六物の一、坐する時に用ゆる敷物である。□風を聞いて便ち颺る。　風に順いて颺る木の葉の樣では見識があるまい、順風計りで無く逆風に堪へる氣慨も有つて欲しい、然し長慶には長慶の手段がある、句中自から出身の路あるを見るがよい。□壘すること三に過ぎず。　壘は累にしてわづらひである二度も三度も累はしく背負ひ廻るは御苦勞千萬、大抵にしたらよからう、持ち廻るより自分で拈弄するが肝腎ぞ。□狐朋狗黨。　第十九則の頌に出てゐた孟嘗君の故事に狗盜をなす者狐白裘を盜んで王の幸姫に獻じ鷄鳴を爲して函谷關を出でたと云ふ、所謂鷄鳴狗盜の輩と云ふ事だが今は狐仲間狗盜組だと云ふ文字の緣を假りた迄である、玄沙が稜兄を大層はめるけれ共何れも同じ穴の狐でウツカリ宛にはならない、同穴の野狐同腹の稜師備師だ、皆さん眉に唾を忘れまいぞ。□別に一條の長あらば便ち請ふ拈出せよ。　玄沙が不恁麼と云ふからには特別長慶に一條長が有るのだらう、御手際一つ拜見したい者だ、請ふ拈出せよ。□毒蟲頭上に痒を搔く。　毒蟲は卽ち蛇、和尙作麼生な

と、訊くのは蛇の頭上に在つて痒を措いてやる樣なものだ、此の僧危險千萬なことをやりよる。□只者の鼈鼻、猶ほ分外と爲す。南山を用ゐて什麼かせんなど、云つて分外の樣に思つてゐるかも知れんが些しも分外の事は無い、自分だけの特長で分外では無いぞ、萬松ならば鼈鼻をも用ゐはせぬ。實は何と云つても變りの無い樣子を言つたものである。□何ぞ自から己命を傷ることを得たる。潙山曾て仰山に向つて寂子何ぞ自から己命を傷ることを得たると曰つたことがある、雲門和尚自分の拄杖を投げ出して置いて怕る勢をしたは氣でも狂つたのか、拄杖は拄杖だ、强ひて蛇と思ふから恐ろしいのだ、蛇と拄杖と二つに見て居る樣ではまだ〳〵蛇に呑まれる仲間ぢや。雲門に言ふやうな風をして吾人に響かして居る。

頌云。玄沙大剛（當機不讓父）　長慶少勇（見義不爲）　南山鼈鼻死無用（擴條斷貫索）　風雲際會頭角生（時來蚯蚓作蛟龍）　果見韶陽下手弄（忍俊不禁）　下手弄（弄不出郎休兩週三度）　激電光中看變動（眨眼喪身失命）　在我也能遣能呼（少實弄）　於彼也有擒有縱（七寸在手）　底事如今付阿誰（萬松老漢）　冷口傷人不知痛（阿耶阿耶）

【讀方】　玄沙は大剛、長慶は勇少し。南山の鼈鼻死して用なし、風雲際會、頭角生ず。果して見る韶陽手を下して弄することを、手を下して弄す。激電光中變動を看よ。我れに在つてや能く遣り能く呼ぶ。彼れに於てや擒あり縱あり。底事ぞ如今阿誰にか付す。冷口人を傷れども痛みを知らず。

【字義】　◎大剛とは論語の子路篇に「剛毅木訥仁に近し」とあり、楊氏の註に「剛毅は卽ち物欲に屈せず」とある意。◎少勇とは論語の爲政篇に、「義を見て爲ざるは勇無きなり」とある、註に「知つて爲さず、是れ勇無きなり」と云ふ。◎風雲際會とは吳質が魏の太子に答ふる牋に曰く「臣幸に下愚の才を得て風雲の會に値ふ」と、註に云く「易に曰ふ、雲は龍に從ひ風は虎に從ふ、聖人起つて萬物覩ると、己と太子と幸に此の際會を同ふするを言ふ」云々。龍虎も風雲を得ざれば其の機變を現はし難し、時を得れば神通妙用極まり無しと云ふ意。◎激電光中とは擊石火、閃電光などと云つて極々素早い時間を云ふ。◎能遣能呼とは能く放行し、能く把住すると云ふことで、自由自在の意。◎有擒有縱とは擒は生捕へ、縱はゆるすこと、與奪とか殺活とか云ふに同じ。◎底事とは底は當にして當事は卽ちこの事若くは底の事と云ふ意。◎冷口傷人とは冷氣が人を凍傷せしむる樣に人の心を抉る程の語と云ふこと。

【要解】　玄沙は剛直に過ぎ、長慶は餘りに勇氣を少く、雪峰が南山の鼈鼻蛇を兩人で死して何の用も無い樣にして了つた、死んだ樣だけれ共鼈鼻蛇にして一度び風雲に際會すれば頭角を生じ昇天の勢ひを示す、果して韶陽の雲門が手を下して活し用ゐた、雲門の下した蚖蛇の妙手は電光石火の轉變で眼に止らぬ早業である、活した鼈鼻蛇の用ゐ方は怎んな樣子かと云へば我が手許にある時は能く風を遣り能く雲を呼ぶ、彼方にある時は擒住し又縱放する、這裏に在るも那邊に放つも自由

自在に活用する手腕がある、以上で本則を頌し了つた。以下は天童が座下に示す、この事如今阿誰に附屬したもので、誰の手許に其の鼈鼻蛇が居るか能く氣を付けて看よ、其の大蛇が刺ある冷口を張つて吾人を呑みつゝあるのに一行痛痒をも覺えない樣子である、まさか死物では有るまいに、諸人お互に鼈鼻蛇を持ち合はしてゐるから呑盡されずと大いに活用せよと示された。首めに玄沙長慶の兩人を出して甎蛇の手並を批評し次に雲門下手の妙巧を稱贊し、更に把放自在の活用を明し末後に本則を擧拈して座下に示す、頌出の妙處を味ふべきである。

【著語】□機に當つて父に讓らず。　南院嘗て云ふ「棒下の無生忍、機に臨んで師に讓らず」と、師に一歩も讓らない、一騎當千の名將ぢや。□義を見て爲ず。　如何にも臆病だ、恐れて手出しをしない處を見ると全く勇氣が無さそうだ、然し勇を出しては却つて不義と見たかも知れん、退いた處にも勇氣を認めねばならぬ。□條の斷貫索を擔ふ。　興化云く「爾看よ這箇の僧一條の斷貫索を擔ひ、南方に向つて去る」と、條は一筋、斷貫索はちぎれ繩で何にも益に立たぬ物のこと、死して無用と云はるゝ通り一本の腐れ繩では成る程御用に立つまい、だが使ひ人に依つては大いに活きて働くかも知れぬ。□時來れば蚯蚓も蛟龍と作る。　蚯蚓はみゝず、蛟龍は天龍と云ふ、時節が到來すれば蚯蚓も龍と作つて昇天する、孑孔も蚊と作つて人を螫す、死蛇も活龍となつて風雷を起す時節も有るだらう。□忍俊不禁。　堪忍し切れぬと見えて遂に雲門手を下したよな、飢に臨んでは食の俺細を論じて居れぬ、手を下した方がよからう。□弄不出ならば卽ち休せよ、兩廻三度。　天童か下

手弄を二度も言つたから萬松が皮肉を言ふ、雲門の弄手に見とれて何處でも同じことを繰り返してゐる、天童お前に弄出する丈の力が無いのだらう、無かつたに休めるがよい、醜態だから繰言は御免だ、座下の人々に蛇を弄するの弄手ありや否やと氣を付けさした樣な語尾である、□眼を眨すれば喪身失命す。　眼を眨するとは瞬目すること、看よと言はれてウッカリ眼瞬などをしてドレ何處になどと云つて居やう者ならば雲門の活拄杖に呑まれて身命を喪失するぞ、能見所見に渉らない激電光中だ。□少賣弄。　小商人は兎角手前味噌が多くていけない、天童の賞め方は少々過ぎますよ。□七寸手に在り。　楞伽經に「凡そ蛇は頭より七寸頸に至つて七寸、是至命の處なり」とある、人若し蛇を打たんとせば七寸の上を打たねばならぬ、他處を打つては死なぬ、卽ち七寸は蛇の急處である、急處を抑へて居れば生かすも殺すも自由自在だ、それでこそ蛇使ひの名人と云はれる。□萬松老漢。　阿誰にか付すなどと言ひやるな、萬松老漢此に在り、日用光中能く遣り能く呼び擒縱自在、雲門などの顰には傚はぬ萬松ぢや、然し萬松一人に氣炎を吐かして置いては濟むまいが怎うじや。□阿耶阿耶。　俗のオヤオヤと云ふに同じ、驚きの感歎詞である、仲邑仰山の出會の時、仲邑に此の語あり、今天童は痛みを知らずと云ふが萬松は痛うて痛うて叶はぬ、己れもコレヤ嚙まれたらしいぞ。

第二十五則　鹽官犀扇

示衆云。刹海無涯不離當處。塵劫前事盡在而今。試教伊覿面相呈。便不解當風拈出。且道過在什麼處。

【讀方】衆に示して云く、刹海涯り無きも當處を離れず、塵劫前の事盡く而今に在り。試みに彼をして覿面に相呈せしむれば便ち風に當つて拈出することを解せず。且らく道へ過什麼れの處にか在る。

【字義】◎刹海とは刹は梵語のクシエートラ（Kṣetra）にして田、土、國と譯す、國土のこと、梵漢兼擧して刹土、刹境など云ふ、今は刹土大海の意で海陸全體を云ふ空間の無際無涯なるを言ひ詮はす語。◎塵劫とは塵點劫の略、極めて永き時間をいふ、法華經壽量品に「五百千萬億那由他阿僧祇の三千世界を抹して微塵となし、その微塵を持して五百千萬億那由他阿僧祇の國土を過ぎて一微塵を下し、是くして微塵の盡きたる時、今迄經過せしすべての國土を碎きて微塵となし其の一塵を一刧として數へたる總數よりも我れ釋迦の成佛して已來の年數遙かに此れに過ぐ」と說いてある、是れを五百塵點刧と云ふ、三十塵點刧と稱するもあり、或は塵點久遠刧とも云ふ、算數計較の及ばざる時間の永遠を現はす語、塵は無數を意味し刧は時間のこと、刧は前に屢出だせり。◎當風とは其の人の家風に當觸ること。◎過は過失である、過り失ふこと。

【要解】刹海と云へば廣く、當處と云へば狹い、塵刧の前と云へば遠く、而今と云へば近い樣に思ふのが凡情の習慣である、若し廣狹遠近、大小古今の名相を取り拂つて見るならば刹海涯し無きも當處を離れて別に有るで無い、遠き塵刧の前も手近き卽今の上に在ることを知るで有らう、これも理屈で無い講釋で無い、實際學人が其の境界に到り了せてゐるか怎うかを試めさんには伊をして覿面に一言相呈して見れば直ぐに看破することが出來る、其の師家の家風に觸當つて自由に拈出するだけの伎倆が無いならば師學の間に見當の過り失つた處があるに相違ない、サー什麼の處で過り失つてゐるか、諸人まあ道つて見ては如何である、道へ無いなら本則に就いて參じたらよかう。

擧。鹽官一日喚侍者。與我過犀牛扇子來。（要且少。他不得）者云。扇子破也。（未擧時。却完全）官云。扇子既破。還我犀牛兒來。（不見道破也。何不領話）者。無對。（扇子猶在。雖有如無）資福。畫一圓相。於中書一牛字。（出巧新行。能做會賣）

【讀方】擧す。鹽官一日侍者を喚ぶ、我が與めに犀牛の扇子を過し來れ。者云く、扇子破れぬ。官云く、扇子既に破れなば我れに犀牛兒を還し來れ。者、對ふる無し。資福、一圓相を畫いて中に於いて一の牛の字を書す。

【字義】◎鹽官とは馬祖道一の法嗣、杭州鹽官の鎭國護聖院の齊安禪師である、海門郡の人にして姓は李氏、生るゝ時神光室を照すと云ふ、本郡の雲琮禪師に依つて落髮受具し後ち馬祖大寂禪師の化を龔公山に行ずと聞いて乃ち錫を振つて焉に造る、馬祖其の奇相を一見して深く之を器とし乃ち

命じて入室せしめ密に正法を付す。僧あり問ふ、如何なるか是れ本身盧舍那佛、師云く我が與めに那箇の銅缾を持ち來れ、僧卽ち淨缾を取り來る、師云く却つて本處に送つて安置せよ、其の僧缾を本處に送り了つて却り來つて再び前語を徵す、師云く古佛也た過ぎ去つて久しと、叢林此の問話を稱す。師後に疾あらずして宴坐して滅を示す、年月詳かならず、勅して悟空禪師と諡す。◎侍者とは長者の傍に伺候して其の指揮をうけ萬事を掌る僧の役名。勅修淸規に「禮貌恭からず尊卑序を失するは侍者の衆に命ずる所以にあらず」とある、佛家の侍者は世尊常隨の阿難尊者に始まる、住持には必ず侍者ありて之を補佐す。◎犀牛扇子とは犀牛は根物論に犀は、狀ち水牛の如く猪頭大腹卑脚三蹄黑うして一孔に三毛あり、江海を行けは水之が爲め開く、二角あり一は額上にあるを兕犀と爲し一は鼻上に在つて若小なるを胡帽犀と爲すとあり、此の犀角を骨とした扇子であらう、扇子の子は助字で扇のこと風を扇ぐ調度である、阿含經には阿難と羅云と皆扇を執つて佛に侍すとあるから侍者は扇子を以て師に仕へたものと見える。扇子の狀は日本の末廣形に非ずして支那では圓形のものを用ゆ。◎犀牛兒とは扇子の紙破れ散つて後に殘つた犀牛の骨許りを云ふ、兒は扇子の兒骨である。◎資福とは仰山慧寂の孫、仰山第二世西塔光穆の法嗣吉州の資福如寶禪師である、傳燈には應機の語句を載する外、更に史傳の事實を記さず、報慈德韶、吉州福壽、潭州鹿苑、資福貞邃等其の門に出づ。◎一圓相とは一の環圓なる相狀である、圓は信心銘に「圓なること大虛に同じ、欠くること無く餘ること無し」とある如く、無欠無餘を標したものである、法界一圓と云ひ大圓鏡智など云ふ圓である、一圓相も牛の字も筆墨を假らず但腕を擧して虛空に畫せられたものらしい。

【要解】　鹽官齊安禪師一日侍者の僧を喚んで我に犀牛の骨の扇子を過來てくれよと云はれた、すると侍者は扇子は破れて用ゐられませぬと答へた、師は再び、では扇子が破れて了つて何にもならぬなら仕方が無い、扇子の骨の犀牛兒があるだらう、其れを我の處へ還來てくれよと云はれた、侍者は何にも返辭をしなかつた、資福は見兼ねたそうで虛空に一圓相を劃し、其の中へ牛と云ふ字を書いて其れと云つて出して見せられた。鹽官は手近かな扇子を持ち出して侍者を試みられたのである、侍者は犀牛の扇子と云ふ名相にのみ屈著して品物を見付け出す氣でゐる、扇子破れぬと云つた語には少し得力がある樣だが再勘でスッカリ凹んで仕舞つた、資福は早速に虛空一圓なる犀牛の扇子を手元で造つて相呈した、名相にも言句にも滯ほらざる資福の活機輪を見ねばならぬ、名相を解脫せずんば那人と相見は出來ない、親しく此の活公案に參すべきである。

【著語】　□要且つ他を少くことを得ず。　夏計り要り樣な扇子で無い、一生受用不盡なる一本の扇子である、本來具有して一日も少くことのならぬ扇子ぢや、とりやりはなるまい。□未だ擧せざる時却つて完全。　過來いなどと云ふから破れたのである、本來無瑕の扇子を持ち出さうとするから可惜扇子を破つて了つた、未だ擧せざる以前に氣をつけるがよからう。□道ふことを見ずや破ると何ぞ話を領せざる。　扇子破れぬと言つてゐるではないか、鹽官も話のわからぬ男だ、扇子を除いて犀牛があるものか、破れた時には悉く皆破れたのである、一物も殘りはせぬぞ。□扇子猶ほ在

り、有と雖も無きが如し。　扇子は其の儘猶ほ現在前すれども取り出して受用することが出來ねば有れども無きに等しぢや、侍者は氣の毒な奴だ、無對の樣子では扇子の使ひ方を全で知らぬらしい。　古今だの破不破だのと云ふ菱角の無い一圓相に牛文字を形はして斬新の扇子を製造して欲しがる鹽官に賣り付けたは流石に商賣上手の資福だ、口巧を出し行を新にして能く傚して賣ることを會す。當意卽妙能く拈出し得たり、甚だ賞賛に價するぞ。

頌云。扇子破索犀牛 一不做二不休 棬欒中字有來由 強知説道理 誰知桂轂千年魄 埋根千丈 妙作通明一點秋 現世生苗

【讀方】　扇子破れば犀牛を索む、棬欒中の字に來由あり。誰か知らん桂轂千年の魄。妙に通明一點の秋と作らんとは。

【字義】　◎棬欒とは棬は圈なり、木を屈つて作れる丸盆なり、孟子に「猶ほ杞柳を以て桮棬を爲るが如し」とある、欒は手足の曲なりと云ふ、或は叉一説に棬欒は大魚を釣る轆轤なりと云ふ、何れにしても團扇の形狀を爲すものである。今は一圓相に比す。◎中字とは圓相中の文字と云ふ意で牛の字のこと。◎來由とは卽ち由來にして據り處があると云ふ意。◎桂轂とは桂輪と云ふに同じ、轂は輻の湊る所にして卽ち車の輪棒である、輪は圓にして月の相狀、桂は月桂樹などと云つて古傳説に月中に桂樹ありと云ふ所から桂は月の異名となる、故に月輪と云つてもよい、桂轂の二字で圓かなる月と云ふ意。◎千年魄とは魄は尙書歩成の正義に「月の輪廓の光り無き處を魄と名く」とある。卽ち輪廓光り無ければ黑月である、是を死魄と云ふ、月の朔のことである。其れに對して望月を白月とも生魄とも云ふ、今は死魄のことで黑月を云ふのである、千年は大數にして無量刼と云つてもよい。◎通明一點秋とは東坡上元に、飮に樓上に侍する詩に「侍臣鵠立す通明殿、一朶の紅雲玉皇に捧ぐ」と、註に「通明は玉帝の殿の名なり、常に紅雲有つて之を擁す」と云ふ、今、玉帝殿と云ふ語の縁から月宮の光明無邊界なるを云ふ、叉犀牛に通明犀叉は通天犀と云ふのがあるから月と犀との兩方から縁語を持ち込む、一點の秋は光明一枚の秋と云ふに同じ、秋は月に由る語である、月は秋に最も澄むと云はれてをる、此の一句は仲秋の明月一點の曇り無く光明普く全世界を照す景色を叙したものである。

【要解】　初めの一句に鹽官の親切を舒べ、第二句に資福の活機を賛し、第三第四句に侍者の死魄が資福の爲に通明一點の秋と成つたと云つて公案の圓成を頌し、併せて座下の諸人に響かしてをる。此の一頌は詩客の妙手を發揮したもので一字一句も忽諸にせず、而も字意の上に於て亦間然する處が無い、錄中稀に見る傑作である。意を略解すれば鹽官が扇子破れなば犀牛兒を還し來れと再勘を下したのは侍者をして徹底せしめんとする爲人の親切である、資福は見兼ねて捲續を畫いて中に牛の字を書いた、其の牛の字には大いに由來のあることである。誰か斯う云ふことを知つてをるか、桂轂には千萬年も光明の屆かぬ死魄がある、然るに妙なことには光明天地を通貫する月宮界と化し

てしまつた、千年の死魄も今は白月圓明にして隈なく照り初めた、諸人はナント此の通明一點の秋を承知して居るか怎うぢや、恐らくは知るまい。黑月は侍者の胸中を云ひ、白月は資福の心相を云ふか。知らずんば侍者のみならず吾人も亦死魄のみ、又鹽官と資福とは心心相照す通明一點の秋清にも比すべし、知る者其の妙を會し其の來由を悟る、と云ふのである。

口一倣さゝれば二休せず。一度命じて其用を做ざる故に又二度目に申し付けた、暫時もさし措かぬは鹽官が親切な處だ。口强ひて道理を說くが如し。來由ありなど、道理らしい牽强附會は眞平御免だ、捲攣だの來由だのと云ふのも皆分別である、天童人を惑はすこと勿れ。口根を千丈に埋む。桂と云ふ文字からして此の語をなす、黑月の桂根は千丈萬丈のイヤ空刧の深きに埋もれてゐて容易に白月の穿が出さうにもせぬ、無對の樣子を見ると侍者は餘程の鈍根らしい、發明する時節もほど遠い樣だ。口現世に苗を生ず。雲居禪師の語に「動ずる則ば身を千丈に埋め、動ぜざる則ば當處に苗を生ず」と云ふがある。此の二つの著語は此れに緣を引いたものらしい、久遠甚深の桂根が卽今現世に立派な苗芽が生えて來た、死魄が其の儘生魄となり黑月が卽白月ぢや。一念萬年の樣子であるが誰か其の苗を見たものがあるか怎うぢや。高聲に叫んで言く、看よ看よ。

第二十六則　仰山指雪

示衆云。冰霜一色雪月交光。凍煞法身淸損漁父。還堪賞玩也無。

【讀方】衆に示して云く、冰霜色を一つにし雪月光を交ふ、法身を凍煞し漁父を淸損す。還つて賞玩に堪へんや也た無や。

【字義】◎凍煞とは煞は『廣韻』に殺の俗字とある。凍煞は一點の暖氣なく嚴冬寒冷の爲に凍死すること。◎法身とは佛に法身報身應身の三身あり、法身は淸淨無碍にして向上一邊の理體を云ふ。◎淸損漁父とは本錄第十二則の頌に「足を濯ふ滄浪煙水の秋」とあつた故事と同じである、卽ち漁父に向つて屈原の謂ひらく「世を擧げて皆濁り我獨り淸めり、衆人皆醉へり、我獨り醒めたり、是を以て放たる」と、終に汨羅江に投じて沒し了つた。淸損は淸廉潔白なる爲に可惜身命を失つたと云ふこと、淸損したのは屈原であるが其れを諫めた漁父が枻を鼓して「滄浪の水淸まば以て吾が纓を濯ふ可し、滄浪の水濁らば以て吾が足を濯ふ可し」と歌つたから、今は漁父に代へて用ゐたのである、屈原の淸廉を法身とすれば漁父が淸濁時に從ふ心意氣は應身の立場である、應身の立場にても若し執せば淸損なりと云ふ意。法身に對する爲め特に屈原をとらずして漁父を取つたのである、殊に漁父と云ふ語が佛法とか禪宗とか云ふ方面と全く懸け隔つてゐるから面白いのである。

【要解】冰も霜も倶に白いから一つ色である、雪と月とも亦白いもので光りを交へる時には何れを其れとも分ち難い、冰霜雪月はともに白くて淸淨で冷かなものである。此の淸涼潔白は平等、純

理、絕對、向上の方面を表す語である。此くの如く清凉潔白では法身淸淨の處にも凍え殺し、漁父無佛の處にも淸損することであらう、是れを已到住著の病とも正位一色の空見とも云ふが、還つて之を賞讚し之を愛玩することが出來るか怎うか。必ずや平等差別、向上向下、正偏圓融の活計が無くてはなるまいと思ふが諸人は怎うぢや、其許迄云はずに直ぐ本則に就いて大いに參究して看よと引付けた語意である。

舉。仰山指雪師子云。還有過得此色者麼（仰山不覺平地喫交）**雲門云。當時便與推倒**（不奈紅何打破屏斗）**雪竇云。只解推倒不解扶起**（路見不平拔劍相助）

【讀方】舉す。仰山、雪師子を指して云く、還つて此の色を過ぎ得る者有りや。雲門云く、當時便ち與めに推倒せん。雪竇云く、只推倒を解して扶起を解せず。

【字義】◎仰山とは潙山靈祐の法嗣、仰山慧寂禪師である。傳は第十五則等に出づ。◎雪師子とは子は助字、雪師は俗に云ふ雪達磨である。◎雲門とは雪峰義存の法嗣雲門の文偃禪師である。傳は第十一則等に出づ。◎雪竇とは靑原下第九世、雲門三世の孫なる智門光祚の法嗣雪竇重顯禪師である。遂寧府の李氏の子で普安院の仁銑上人に依つて出家受具の後、南に遊ぶ、首めに智門に造つて卽ち問ふ、不起一念云何んが過ある、門、師を召して近前せしむ、師纔に近前す、門拂子を以て驀口に打つ、師口を開かんと擬す、門又打つ、師豁然として開悟、初め翠峰に住し後明州の雪竇山に遷つて宗風大に振ふ、天下の龍蟠鳳逸の衲子爭うて座下に集る、雲門の中興と稱せらる。師に百則の頌古集あり、宋朝の高僧、南嶽下第十四世五祖法演禪師の法嗣佛果圜悟禪師（寂、皇紀一七九五）が政和年間（皇紀一七七一—皇紀一七七七）澧州夾山靈泉禪院に住する時、雪竇の百則頌古に垂示、評唱、著語を附し方丈の額に因んで『碧巖錄』と名く、今の碧巖集は卽ちそれである。其の門より出づる者に天衣義懷、承天傳宗南明日愼、寶相蘊觀等十餘員の神足あり。『五燈會元』、『續傳燈』等は圓寂の年月を載せぬ、傳末に曰く「師一日遊山四顧周覽して侍者に謂つて曰く、何れの日か復此に來らん、侍者哀しんで遺偈を乞ふ、師曰く平生唯語の多きこと患ふ、翌日杖屨衣盂を出して散じて徒衆に及ぼす、乃ち曰く七月七日復相見せんのみ」と、期至りて盥沐して衣を攝め北首して逝す、全身を寺の西塢に塔す、明覺大師と賜ふ」とあるのみ、然るに『僧寶傳』を見るに「雪竇名は重顯、字は隱之、遂州の人なり、太平興國五年（庚辰、皇紀一六四〇）四月八日李子に生る、乃至皇祐四年（壬辰、皇紀一七一二）六月十日沐罷衣を整ひ側臥して化す、世を閱すること七十三、坐夏五十云々」と、『祖英集』も亦此の說を揭ぐ、信じて可ならんか。◎解推倒不解扶起とは推倒は推し倒す、扶起は扶け起すであるから、前者を消極的手段、後者を積極的方法とでも云はうか、把住放行向上向下、殺活與奪など云ふ語と同じである、推倒門扶起門、建立門掃蕩門など〻常に對して用ゐらる〻禪門の術語。解不解は一方を解會して他方を解了せずと云ふ意。

【要解】仰山和尙庭に下り立つて雪を圍めた雪師子の形を見つけられ、之を指して此の雪師子の白

色に上過す色の者が有るか怎うぢやと云はれた、清淨潔白の一位に腰を下させまいとの手段らしい雲門後に之を聞いて云はく我れ當時其處に在たならば雪師子を蹴倒して粉微塵にし雪白の色などは何處に御在ると云つて與り度かつたと。是を聞いた雪竇亦默つてゐず、雲門は推倒することを心得てゐても未だ之を扶起ることを了會してゐない、一方向きの擔板漢ぢやと嗤笑つた。雲門が推倒は一塵不立の掃蕩門、雪竇が扶起は不捨一法の建化門で有つて何れも與奪自在の妙手が寄り合つての施設である。

【著語】仰山覺えず平地に喫交す。不覺は俗にフトしてと云ふ意。喫交は喫ひ突くと云ふこと。仰山は平坦の大地を歩きながらヒヨツト雪達磨に食ひついたらしい。◎舡を奈何ともせず、戽斗を打破す。戽斗とは舟中水を抒む器也と、舡を不奈何に垢汲み杓を打ち破すと云ふのは一言に云へば見當違ひだと云ふこと、雲門は仰山を搆はずに置いて雪師子のみを推倒するが、其れよりも餘計なことをする仰山を寧のこと打殺して了つてはどうか、雪達磨に分別は無いぞ、とは云ふもの丶仰山とて分別有つてのことでは無い。◎路に不平を見れば劍を拔いて相扶く。雪竇は俠氣のある和尚で途中に喧嘩を見懸けると默つては通れぬ、必ず劒を拔いて弱きを助け強きを摧く、これが止むに止まれぬ師家氣質かも知れぬ。亂暴者の雲門が罪も無い雪師子を推倒したから雪竇直ちに劍を拔いて雪師子を扶け起し雲門を退けたは豪氣なものよと、萬松の賞贊である。然し起きても倒んでも雪達磨に負傷はあるまい、ツマラヌ處へ手出しをせまいぞと注意されたやうでもある。

頌云。一倒一起雪庭師子（恰似箇活底）慎於犯而懷仁（識法者恐）勇於爲而見義（路見不平）清光照眼似迷家（東西不辨）明白轉身還墮位（更上一層樓）衲僧家了無寄（且過一生）同死同生何此何彼（刀斧斫不開）暖信破梅兮春到寒枝（收得返魂香）涼飈脫葉兮秋澄潦水（來掇塗毒鼓）

【讀方】一倒一起雪庭の師子。犯すことを愼んで仁を懷き。爲すに勇んで義を見る。清光眼を照すも家に迷ふに似たり、明白、身を轉ずるも還つて位に墮す。衲僧家了に寄ること無し。同死同生何れをか此れとし何れかを彼れとせん。暖信梅を破つて、春、寒枝に到り、涼飈葉を脫して、秋、潦水を澄ましむ。

【字義】◎愼於犯而懷仁とは仁を懷いて他の犯さんを愼ましむと云ふ意。仁は慈悲にして內心に屬す。◎勇於爲而見義とは義が見はれて敢爲の勇氣となると云ふ意。義は勇猛にして外面に屬す。此の句は論語の「義を見て爲ざるは勇無きなり」の句意を轉じたものらしい。俗典から仁義の二字を假りて巧みに之を轉用したのである。◎清光、明白とは清白、光明の割り文字で清淨の一色邊を云ふ、趙州に「老僧不在明白裏」の句あり、語の緣を借る。◎似迷家とは家は本家鄉を云ふ、自家の立場に迷ふに似てをると云ふのだから、其許が歸處で無いと云ふこと。◎轉身還墮位とは清淨法身を

一轉しても還たその轉身の一位に墮在することになると云ふ意。◎了無寄とは黃檗に「十二時中不依倚一物」の語なり、珠の盤上を走り天馬の空を翔るが如き樣子を云ふ。◎同死同生とは本錄第三十四則に雪竇云く「還つて同死同生底の衲僧有りや」と、生死一如、生死透脫と云ふ程の意。◎何此何彼とは彼此一體にして何れを彼此と定め難きを云ふ。◎暖信破梅兮とは歲時記に曰く「初春より初夏に至る二十四番の風あり、梅花に始つて楝花に終ふ、之を華信風と謂ふ」と、一陽來復して枯木同然の南枝に自から梅花を綻ばす時期を云ふ。◎涼飈とは寒風と云ふに同じ、飈は扶搖風、暴風などとあり、あらきかせ、おほかせと云ふ意。◎潦水とは潦は字典に「路上の流水也」とある、詩の小雅に「彼の行潦を酌む」の語あり、潦水は路上の凹處に溜つてをる汚水である、たまりみづのこと。

【要解】　第一句の八字に本則の大綱を擧拈し、自から三師の手段を頌出してある。仁義の二句一對に三師の慈悲落草一等の樣子を舒ぶ、清光明白の二句に一色空位の住著すべき處に非ざるを述べて次の二句に衲僧眞箇の家常を明し、最後の二句に自然を假り來つて正偏回互宛轉の境界を示し、冐頭の第一句に應じたのである。仰山雪庭の師子、雲門の一倒、雪竇の一起、互ひに一隻手を出して此の法を擧揚せられた、三師の手段其の一を缺いてはならぬ。人の明白裏に坐在せんことを恐れて雪師子を指し、此の色を過得する有りやと云ふは仰山の仁と義となり、又之を恐れて推倒する是れ雲門の仁と義となり、人の只推倒を解せんことを恐れて能く扶起するは是れ雪竇の仁と義となり、清光に眼を照すも却つて眩惑す、未だ歸家底の人にあらず、明白裏より一步轉身するも還つて大功の一位に墮つ、眞箇の衲僧は生死一如の故に生死に居らず、彼此圓融の故に能く彼此を辨じて了に一物に依倚すること無し、中的にして犯さゝる境界である。其の樣子を云つて見るならば二十四番の春風一たび南枝を吹けば寒嚴の枯木自から一輪綻ぶ、大死忽ち大活する扶起門の樣子、又涼飈颯颯として金風一たび梧葉を吹けば秋晴野に充ちて潦水自から澄む、生動の中亦寂靜の氣を帶ぶ、推倒門の樣子。然しながら推倒扶起、死生動靜、彼此本より天地自然の活計にして分別に涉ること無し、而も回互宛轉し圓融無礙なる正に衲僧の家風、其れ是くの如くなる無からんやと本則の三師に見立て親く吾人の日常に響したのである。

【著語】　口恰かも箇の活底に似たり。　雪庭の師子是れ死物にあらず、寢たり起きたり倒んだり、三人の活手段を得て自由にはたらく。口法を識る者は恐る。　天童の語に「法を識る者は懼る、敵を欺く者は亡ぶ」と云ふがある、萬松一寸拜借した。三師はよく西天の正令を承知して居るから容易に人をして犯さしめぬ仁心がある。口路に不平を見る。　碧巖第百則の評に「古へに俠客あり路に不平にして强を以て弱を凌ぐを見れば、卽ち劍を飛ばして强者の頭を取る」と云ふ語がある。本則の著語にも此の意味の語が有つた、義に勇む男子なら助太刀せずには居られまい。口東西辨せず。　清光一面の雪景色で東西も分るまい、餘り光りの度が過ぎて眼が盲れた。口更に一層樓に上る。　王之渙が鸛鵲樓に登る詩に「白日山に依つて盡き、黃河海に入つて流る、千里の目を窮めん

と欲して更に一層樓に上る」と云ふがある、明白轉身も結構だがモー一層上つたらよからう、百尺竿頭進一歩すれば景色がスッカリ變つて來るよ。□且らく一生を過す。且らく茅舍を移して深居に入ると云はうか、觸處生涯分に隨つて足ると云はうか、一生處定めぬ雲水の境界、それこそ眞の衲僧家ぢや。□刀斧斫れども開けず。□刀斧斫れども開けず。僧曹山に問ふ、如何なるか是れ父子の恩、山云く刀斤斫れども開けずと、生と死、此と彼、針を刺すほどの隙間が無い。何うして刀斧などの入る筈が有らう、生生死死の一枚だ。□返魂香を收得す。死中に活を得るは返魂香に限る、枯木花開いて天地の春を示す、是れ正に返魂香の功能であらう、大活現成の春、天地は立派に飾られてある。□來つて塗毒鼓を撾つ。天童上堂に「十成に收得す返魂香、一等に來り撾つ塗毒鼓」と云ふ語がある、萬松は假り來つて二句一聯の著語にした、塗毒鼓とは涅槃經第九如來性品にある故事、曰く「譬へば人有つて雜毒草を以て用て大鼓に塗り衆人の中に於いて之を打つて聲を發せん、聞かんと欲する心無しと雖も聞く者皆死するが如し、乃至大涅槃も亦復是くの如し、聲を聞くこと有らん者、貪慾瞋恚愚癡悉く皆滅盡す」と、今は生還す返魂香の反對の意に用ゐたので、誰か來て塗毒鼓を撾つたと見えて萬木千草一時に枯れ盡き、悉皆機緣が絕え果てた、大死一番の秋景色を示したのである。

第二十七則　法眼指簾

示衆云。師多脈亂。法出姦生。無病醫病。雖以傷慈。有條攀條。何妨擧話。

【讀方】衆に示して云く、師多ければ脈亂れ、法出でゝ姦生ず。無病に病を醫するは以て傷慈なりと雖も、條有れば條を攀づ、何ぞ擧話を妨げん。

【字義】◎師多脈亂とは第六則の頌著に出づ。師は醫師である、二人も三人も診察すると醫師ごとに脈のひき方が異ひ、隨つて病氣の診察も違つて來る、病人の脈が亂れるのでは無くて診る醫師の分別心が脈を亂すのである。◎法出姦生とは前漢董仲舒が傳、賢良の策に曰く「法出でゝ姦生じ、令下つて詐り起る、湯を以て沸を止め薪を抱いて火を救ふが如し、愈甚だしくして益無き也」と、法は法令にして姦は姦譎者である、制令繁くして姦詐倍多く綱目細に渉つて法綱を潜る者愈夥し、これは古今同一轍である。◎傷慈とは慈悲心を傷ふと云ふ意で慈悲をかけ過ぐる老婆心切と云ふことである。◎條とは條綱にして高きに攀ぢ昇る手助けをなすもの、今は條例の意で本則の公案を指す。

【要解】一人の患者を三人の醫師に診察させると病名が各異つて來る、亂脈に成つて本當の病氣が分らない、脈の亂るゝにあらずして其の人の意見に隔別あるが爲である。又法度の綱目が增せば增すほど姦佞譎詐の者世に蔓衍る、薪を抱いて火を救ふが如く制令を以て法綱を潜る者が增殖るのである。醫師あるが爲に脈亂れ法出づるが爲に姦生ず、醫無く法無きには如かず、無病健全なれば

醫を請はず、天下平治なれば法を要せぬ、今無病健全の禪和子に向つて病氣を醫せんことを求むるは餘りに慈を傷ふ樣ではあるけれども無病と云ふも亦病の人である。古則公案の條例を擧ぢて諸君子の前に勸むるも敢へて無用の擧話ではあるまい。切に忌む分別を以て見、情量を以つて計ることを、請ふ本則を擧せん。

擧。法眼以手指簾（莫道不知 莫道不見）時有二僧。同去捲簾（同行不同歩）眼云。一得一失（剣下分身）

【讀方】擧す。法眼、手を以て簾を指す。時に二僧あり、同じく去つて簾を捲く。眼云く、一得一失。

【字義】◎法眼とは地藏桂琛の法嗣法眼大師清凉文益禪師のことである、傳は既に第十七則に出して置いた。◎簾とは竹で編んだ簾のことであるが必ずしも竹製とは限らない、俗に暖簾など丶云ふものを見るに多くは布帛織物である。僧堂の前後門には簾を垂れてある、やはり布製のものである今の簾字は何れを指すか明かで無いが或は僧堂に揭げられた布織の簾かも知れない。

【要解】有る時法眼禪師が何とも云はず只手を以て簾を指された、スルと其處に居た二人の僧が同時に立ち上つて簾を捲き上げた。法眼之を見て一は得いが一は失いと評語せられた、此の一得一失が本則の要處、簾を捲いた兩僧の手際に得失が有るのでは無い、法眼の宗旨は一指にある、且らく前境に托して得失を示した迄である、一指に得失の名言は無い、されば是非得失の得失では無く得失に拘はらぬ法の現成を假に名けて一得一失といつたのである、本則を看驗するには同中に異辨の眼が必要である。

【著語】口知らずと道ふこと莫れ、見ずと道ふこと莫れ。法眼明らかに手を以て簾を指した、知らぬとも道はれまい、見ないとも道はれまい、分明の道理よ、何にも六つかしいことは無い、ダガ何と見た、何と知つた、指頭に計り著いてまはるまいぞ。口行を同うして歩を同うせず。二人同じくヌット立つて行つた處は同じであるが歩調は同一で無い、行歩の同不同は分別に渉つてのことぢや、何處が同で何處が不同か、親しく實地を行歩して見るがよい。口劍下に身を分つ。一劍の下に分身した、一得一失と分身はしたが元は一劍だ、一劍天に倚つて寒し、一も亦存せぬのぢや、得失の無い處に得失と分つたが一も亦存せぬ法眼の得失ぢやから面白い、劍下に身を分つ手際がいかにも奇麗である。

頌云。松直棘曲、鶴長鳧短（不得動著）羲皇世人、倶忘治亂（葫蘆提 鑿得肥）其安也潜龍在淵（佛眼覷不見）其逸也翔鳥脫絆（斫頭望不及）無何祖禰西來（上梁不正）舡截流而到岸（順水）裡許得失相半（下柱參差）蓬隨風而轉空（業識茫茫 無本可據）張帆難逢快便（罵街醉漢 誰敢承當）箇中靈利衲僧（我這裏也有 是罕遇其人）看取清凉手段

【讀方】松は直く棘は曲り、鶴は長く鳧は短し。羲皇世の人、倶に治亂を忘る。其の安や潜龍淵に在り、其の逸や翔鳥絆を脱す。何んともすること無し、祖禰西來す。裏許得失相ひ半ばす。蓬は風に隨つて空に轉じ、舡は流を截つて岸に到る。箇の中靈利の衲僧、清涼の手段を看取せよ。

【字義】◎松直棘曲、鶴長鳧短とは楞嚴經の第五卷に「松は直く棘は曲り、鶴は白く烏は玄し」とあるに出づ、本分の事を其の儘に言ひ詮した語である、莊子の駢拇篇に「長者は餘り有りと爲ず、短者は足らずと爲ず、是の故に鳧の脛は短しと雖も之を續ぐときは則ち憂ふ、鶴の脛は長しと雖も之を斷つときは則ち悲しむ」と云つてある、取捨分別を要せざる自然の當相を此の八字に言ひ盡してある。◎羲皇世人とは羲皇は伏羲皇帝の略、周禮によれば支那古代に三皇あり、則ち伏羲氏、神農氏、軒轅氏（黄帝のこと）にして次に五帝を數ふるのである。支那は慕古主義の國であるから政治の理想鄕を上古にとる、堯舜禹湯文武周公等よりも有史以前に溯つて理想の王國を求むれば伏羲氏皇帝の世の人民に過ぎたるは無い、卽ち最古平和の民を出したものである。朕兆以前とか一機未發已前とか云つてもよい處であるが、語の緣を借りるため特に支那に關係した文字を持ち出したのである。◎忘治亂とは列子の仲尼篇に「孔子曰く西方の人聖者あり、治めざれども亂れず、言はざれども自から信あり、化せざれども自から行はる、蕩々乎として民能く名くる無し」と、治亂は猶ほ得失と言はんが如し、治不治を忘じたる樣子をいふ。◎潜龍在淵とは周易の乾卦に「初九は潜龍なり用ゆること勿れ、九四は或は躍つて淵に在り」とあるを約めて語を爲つたのである、天地に風雷を起す龍も潜んで九淵に在るときは其の眠り穩かにして有無得失の二念は無い、極めて安靜なる狀態を云ふ。◎翔鳥脫絆とは秦臺記に「王次仲と云へる者、年弱冠にして蒼頡が古文を變じて隷書と爲す、秦の始皇之を徵せども起たず、上怒つて檻車を以て之を囚へて國に赴かしむ、路に化して作つて羈絆を脫し飛んで西山に至つて二翮を落す、今嬀川縣に大翮鍋あり、卽ち其の處なり」とある、翔は卽ち翺にして飛び上ることである、絆は足を繫ぐ累縛のこと、得失是非の繫縛を脫け出で、高く天外に翱翔する自由の境界を云ふ。◎祖禰西來とは祖は始、禰は親廟なりとあるから祖師と云ふ語の換へ詞である。西來は西の方印度より東方支那に來たと云ふこと、達磨此の土に來つてよりと云ふも同じである。◎裏許とは此處と云ふこと、今は假りに震旦國を指す。◎蓬隨風とは李白が詩に「此の地一たび別を爲せば孤蓬萬里に征く」とある、詳解には蓬草の根無うして風に隨つて飄轉する者とあるから蓬は風のまに〳〵東へも西へも轉ぶ。僧は得失の爲に轉せらるゝが法本得失を離るゝことを示す。◎舡截流とは舡が上流にも溯らず下流にも順はず、直ぐに流れを押し截つて彼岸に到くと云ふ意で一得一失の流れに沿はず、驀直に得失の彼方に超出するを云ふ。◎靈利とは伶利に同じ、人の快性を怜悧と曰ふと字彙にある、快速敏捷の性質を云ふのである。◎清涼手段とは清涼は法眼文益のことで手段は伎倆とか腕前とか云ふことである、固有名詞を用ゐながらも清涼の文字に言ひ知れぬ味を含ませてある。

【要解】初めの四句十六字に法爾本然として治亂得喪を忘絕したる脫體現成の當相を示し、次の二

句十四字に法々自然の安逸を詳述してある。中の前二句十二字には無事を事を生じた有樣を云ひ、後の二句十二字には事は生じても本來無根なることを明す、末後の二句十二字に到つて本則を總結して法眼の手段を讃歎し併せて之を座下の人に提撕し以て一得一失の根源を究辨せしめんとするの頌意である。　略解すれば松は直く棘は曲れる、鶴は脛の長く鳧の脚の短かき、諸法の本然本性の當體で得失是非に拘はらぬ處である、羲皇治下の人民が治亂と云ふ語も忘れ果てゝ居た如く今は得失と云ふ名字も及ばぬ處である、是非治亂の名字だに無き安逸の樣子を云はうならば龍が九淵に潛んで眠り穩かなるが如く羈絆を脫したる鳥の天空に翔るが如く全く無念にして且つ無想で有る、此の太平無極の地へ達磨などと云ふ祖師が西來して箇處に有無得失、是非長短の分別が生じて來たは何とも仕方が無いことである。　法眼も今日は一得一失などと唱へ出して天下の衲僧を惑はす樣であるが其の得失を究め來れば蓬草の風に轉じて空になびくが如く、本より得失の根莖あること無く、又得失ありとも得失の流れに沿ふこと無く、直接簡明其の道處に徹底すべきである。平凡の衆僧は兎にも角、我が祖門下に於ける靈利の衲僧は高く眼を著けて清淨が手段を看取するがよい、舌頭や語路に迷ふこと無く能く得失の根源を極め法眼が五臟六腑を抉出するがよからうぞ。

【著語】□動著することを得ず。ソックリ其の儘でよい、些しも之乎者也を容れてはならぬ、此に至つて法眼の指頭も自から截斷ぢや。□胡蘆提壑肥たるを得たり。　此の著語は一寸解り惡いので色々の說があるが今は山僧の考ふる處を云つて置かう。葫蘆は俗にゆうがほと云ふ瓜の類で撫で見たところでは頭とも尾ともわかりかねるものである、提は手に支へ持つこと、壑は暫でチョットと云ふこと、葫蘆を手に把り提げて看るとチョットの間に這樣に肥つたかと思ふほど丸々と大きくなつてぶら下つてをると云ふ程の語である。意は得失治亂を忘じた世の中は葫蘆までが肥え太つて美はしい、肥つた葫蘆のぶら下つてをる夕瓜棚の下蔭に立つ其の暢氣さ加減、如何にも太平の極を寓意してをる。□佛眼覷れども見えず。　潛龍の境界は何とも窺ひがつかぬ、恐らくは佛祖の眼睛を以てするも覷不見であらう、況んや凡眼をや、潛龍の境界は潛龍にして始めて知る。若し知ることを得ば當に是れ其の人。□斫頭して望めども及ばず。　諸本斫頭とすれども斫額の誤りであらう、斫額は手を額にあてゝ遠く望み見る樣子である、羈絆を脫して高く天空を翔る飛鳥をば地上に立つて手を額に翳して如何に之を望むとも到底其の自由が伺ひ知られる者で無い、三賢十聖等の菩薩と雖も望むべきにあらず、當に見るべし格外の衲僧、茶裡飯裏別所に向はざることを。□上梁正しからざれば。　□下柱參差す。　此の二つの著語は二句一聯で佛鑑志懃の語である。本頌の字表に就いて此の語を出す、上の梁が眞直で無いと下の柱までが參差ものである、參差は入り込むことで上り下りのあるを云ふ、上達磨からして不正であるから下法眼までが得失なんどと搶ぎ廻つて人に迷惑を懸ける、是れは語の表。實は法眼も達磨に讓らぬ嫡傳の宗師である、得失を語りながら得失の跡方も無い、見上げた者よ。□業識茫々として本の據るべき無し。　仰山の語である、今此に業識茫々とあるは單純な意味でいろ〳〵な仕方と云ふ程の事である、蓬が風に任せて西にも東

にも勝手次第に吹き轉ばされるが其の本はと云へば何にも根據とすべき者が無いからである、本據無き蓬の業識茫々だ、分別無き風の右轉左轉だ、少しも氣使ひはせまいぞ。口順水に帆を張る。快便に逢ひ難し。

上下の流に沿はぬ順水に帆を張り上げて、直に彼の岸に達せしめんとする、其んな快速は便船があるならば早く乘り込むがよい、復と其んな好便はある者で無い、うかと乘りはずすまいぞ、恁麼の事を得んと欲せば急に恁麼の事を務めよ、今日一日を等閑に過してはならぬ。口街に罵る醉漢、誰れか敢へて承當せん。天童が靈利の衲僧と呼びかけたが、往來を醉ぱらつて管を卷いて歩く連中ばかりだ、聲に應じてハイと對ふる衲僧は一人もあるまい。迷郷の醉漢ばかりで眞實其の人は得難い者である。口我が這裏も也た有り、是れ其の人に遇ふこと罕れなり。

法眼にばかり其の手段が有るでは無い、萬松にも正に萬松の手段がある、然し惜しいことには看取する底の人を得ること甚だ罕れである、何れでも眞箇の求道者は尠いと見える、何處も同じ秋の夕暮である。人人一つ大いに奮發して其の人となり靈利の衲僧となつて法眼や天童や萬松の眼睛を抉出してやらうでは無いか、それには坐禪が第一ぢや。

第二十八則　護國三懡

示衆云。不挂寸絲底人。正是裸形外道。不嚼粒米底漢。斷歸焦面鬼王。直饒聖處受生。未免竿頭險墮。還有掩羞處麼。

【讀方】衆に示して云く、寸絲を挂けざる底の人、正に是れ裸形外道。粒米を嚼まざる底の漢、斷めて焦面の鬼王に歸す。直饒、聖處に生を受くるも未だ竿頭の嶮墮を免れず、還つて羞を掩ふ處有り麼。

【字義】◎不挂寸絲。不嚼米粒とは雲門文偃の語に「著衣喫飯して未だ嘗て一粒の米に觸れ、一縷の絲を挂けず」と云ふのがある、其の意を布衍したらしい。寸絲を挂けずは空界無物の樣子を云ひ、粒米を嚼まずは向上の一位に止まるを云ふ。◎裸形外道とは大智度論第六十八卷に「或は外道あり、苦行の故に裸形にして恥無し」とある、又同第八卷には「灰を以て身に塗り裸形にして恥無し」ともある。外道は印度に於いて佛道以外の敎を總稱した語である。裸體で以て苦行をする一種の外敎徒と云ふ意。身に寸絲を挂けざる具體的の代表者を出して貶黜する具に用ゐたのである。◎焦面鬼王とは文字の如く焦面赭顏の餓鬼の王である。素より餓鬼道に在るが故に飢渴に迫つても一粒の飯一滴の水すら飮食することの出來ない、哀れなる境遇である、餓鬼と云ふ語を代表して此の名を用ゆ。大藏經の中では『佛說救面然餓鬼陀羅尼神呪經』と云ふのがあり、又施餓鬼集の鈔中には『瑜伽集要救阿難陀羅尼燄口儀軌經』と云ふを引いて焦面鬼王の事が記してある。現今でも施餓鬼會に五如來の幡と幷べて焦面大鬼王と云ふを揭つてをる、謂ゆる餓鬼大將にして餓鬼道の代表者と見てよからう。◎聖處受生とは聖處は五十二位中十地以上の境界で殆ど佛地に等しい、向上に昇り詰めた尊貴の位地に生れ出ると云ふこと。◎竿頭嶮墮とは竿頭は百尺竿頭にして向上の極地、嶮墮は墜

墮と云ふ危險があると云ふ意。昇り詰めた丈けで降ることを知らねば墮ちると云ふ危險がある。◎掩羞とは羞は羞慚、掩は掩覆、羞を掩ふとは羞恥を知つて公明に云爲すること。

【要解】身に一と筋の絲きれも著けてゐない人ならば昔し印度に居た裸形外道に等しい、口に一と粒の米も食はぬと云ふならば餓鬼道の大將焦面鬼王と同格だ、諸法本來空寂は斷無の見、衆生本來成佛は無修の見、ともに佛家の取らざるところ、直饒よしや五十二位の階級を飛び超えて十地等覺の聖處に生を受け得ても尙ほ六趣に墜墮するの危險がある。向上の正位に昇り詰め百尺竿頭に縋りついて身動きがつかぬ樣では大いに醜態である。我が門下に此の羞を掩うて偏位に下り、此の嶮墮を知つて自由に向去し得る底の漢ありや。知らずんば先づ本則に就いて護國に三懡㦬あることを參究するがよからう。要は向上の死漢となり空位一色に滯ふるを破して、十方界に全身を現ずる底の向去の自由を悟らしめんとするにある。

擧。僧問護國。鶴立枯松時如何（步步登高易）國云。地下底一場懡㦬（心心放下難）僧云。滴水滴凍時如何（法身無被不禁寒）國云。日出後一場懡㦬（雪消露出死人來）僧云。會昌沙汰時。護法善神。向甚麼處去也（點卽不到）國云。三門頭兩箇一場懡㦬（到卽不點）

【讀方】擧す。僧護國に問ふ、鶴枯松に立つ時如何ん。國云く、地下底一場の懡㦬。僧云く、滴水滴凍の時如何ん。國云く、日出でて一場の懡㦬。僧云く、會昌沙汰の時、護法善神甚麼の處に向つて去るや。國云く、三門頭の兩箇、一場の懡㦬。

【字義】◎護國とは隨州隨城山護國院の守澄淨果大師である。大師は疎山光仁（或は匡仁に作る）に嗣ぎ光仁は洞山悟本大師に嗣ぐ。傳は景德傳燈錄第二十卷に載すと雖も二三機緣の語を錄するのみで閱歷は更に知れない。類聚の悟道門に「護國の澄禪師演化大師と同じく湖南の報慈に在り（中略）、後に化亦師に繼いで護國に住す」と、演化大師は諱は知遠、護國、第二世で澄禪師に嗣いだ人である。◎懡㦬とは祖庭事苑の第六卷に「上は母果の切、下は郎可の切、懡㦬は慚也」とある、懡㦬は慚の梵語なりと云ふ。俗にいはぢさらし、よひわらひぐさと云ふほどの意。◎會昌沙汰とは佛祖統記第四十三卷に「唐の武宗仙を好み僧尼二十六萬五百人を沙汰して會昌五年八月下旬に勸して俗に還らしむ」とある、これが卽ち世に三武一宗の法厄と云ふもの丶一である、會昌は年號で其の五年は乙丑で日本仁明天皇承和十二年（皇紀一五〇五）にあたる。詳くは『佛祖統紀』、『舊唐書』第十八卷、『大宋僧史略』第三卷等を看るべし。沙汰とは之を選擇して棄斥する所有る者を謂ふと云つて、淘汰又は吟味して斥けらる丶もの丶ことを曰ふ。會昌の法難は全くの排佛棄釋で無いと云ふことは此の二字に依つても知らる丶のである。◎護法善神とは千手觀音經に「龍天善神恒常に擁護す」とあり。護法龍天善神と稱し佛法守護の神の名である。◎三門頭兩箇とは三門は空無相無作の三門を形つて寺

院に門を建てる、俗に山門ともいふ。兩箇とは二王のことで二王は金剛密跡力士と云ふ、一王の分身である、執金剛神とも云ふ、應現自在の神であるから二王とでも三王とでも勝手に現身する、釋尊の遺法を護持せんが爲めに三門の兩脇に力瘤を固めて立つて居られる、現今寺院に三門あるは必ず此の二王を見る、是れ支那以來の遺風である。

【要解】一人の僧が護國守澄禪師に問ふやうには、鶴が枝葉の凋落した枯木同然の高い高い松の梢に止つてゐる場合は如何なものであらうか。護國答へて曰ふ平穩地に安坐してゐる者から見たら、高く止つて居る鶴などは大恥さらしさ。又僧問ふ、一滴の水が其の儘凍つて一滴も餘さぬと云ふ境界は如何ん。國曰く、太陽の熱に出合つたら盡く消え失せてアラが皆んな見はれて是れ亦大恥さらしだらうぜ。又僧問ふ、唐の武宗會昌年間の佛法の大厄があつたが如來の遺囑をうけた護法善神等は甚麼處に去つてゐたのだらう。國曰く、左樣さ、三門の兩脇に大きな圖體をして眼球ばかり光つかしてゐる二王殿も、此いつは大いにはぢさらしで有つたわい。此の三問の第一は向上に立つ獨立無絆の境界を問ふ、故に向下底を以て破す。第二は思量分別を絕したる理地一片の時節を問ふ、故に慧日消除の大光明あることを示す。第三はヘボ理窟を以て捏ねて來たから、護國は是に應同したやうに見せかけて、其の實、佛法に滅不滅、護不護ありや、三門頭の兩箇よりは汝自身の護法善神が御不在なのであらうと巧みに僧の胸中を剔抉られたのである。護國の三懡㦬は卽ち諸佛の轉大法輪である。

【著語】□步々登ることは易く。一步一步爪先上りに登つて行くのは大して困難なことでは無い。□心々放下することは難し。好い境界に上りつめて其許を守らずにサッサと下つて下るのは仲々容易なことでは無い。此の二句は一聯、前句は向上することは難儀さうで實は易い、後句は放下するは易いやうで却つて難い、僧は向上の易に就き、護國はさすがに向下の難に居る、大いに段が違ふワイと、難易を以て一を貶し一を擧げた。□法身被無うして寒に禁へず。堅氷の樣な法身、裸法身とも素法身とも云ふ、慈悲の暖氣も、智慧の光明も無い、裸形外道以上の凍えやうだ。□雪消して死人を露出し來る。太陽がテカ〳〵照り出したら死人の法身が丸出しになつた。それでこそ大活現成が出來るのぢや、眞實理智圓滿の法身の功用も現はれたと云ふものよ。□點すれば卽ち到らず。會元第十一卷興化の章に「師有る時僧を喚ぶ、僧應諾す、師曰く點すれば卽ち到らず、又一僧を喚ぶ、僧應諾す、師曰く到れば卽ち點せず」とある。此の二語を對に借り用ゐた。支那では廻文が來ると行く人は點をかけぬ、不參の者は點をかける習慣になつてをる、我國とは反對である、護法善神が不參だと見えて點がかけてあるわい、點は萬松自身にかけたのだらう。□到れば卽ち點せず。到來のだと見えて點がかゝつてゐない、これも萬松が點をかけないのだ。點不點は萬松の諧謔、護法善神に到不到は無い筈だ。他に向つて護法善神の到不到、去來在否を問はんよりは、人々自己の護法善神に訊いて見たらよからう。是れも萬松の老婆心切さ、語路に轉せられてはならぬ。

頌云。壯士稜稜鬢未秋（恨天不到）　男兒不憤不封侯（貪程太速）　翻思清白傳家客（巳太多生）　洗耳溪頭不飲牛（末後太過）

【讀方】　壯士稜々として鬢未だ秋ならず、男兒憤せずんば侯に封せられず。翻つて思ふ清白傳家の客、耳を洗ふ溪頭牛に飲はず。

【字義】　◎壯士稜稜云々とは壯は禮記曲禮に「人三十を壯と曰ふ」とあり、彊也盛也又健也とあるから壯士は血氣壯んな年輩の男子と云ふこと。稜稜は威稜などと熟字し、男士の勇氣勃々たる形容。鬢未秋は鬢髮未だ秋稍雪白に至らぬ、髮黑々たる壯年盛りを云ふ。◎不憤不封侯とは論語に「憤せずんば啓せず」とあり、註に憤は「心通せんことを求めて未だ得ざるの意」とある。封侯は一國一城の主となり諸侯の待遇をうけ一定の領域封土を有つこと。◎清白傳家客とは後漢書楊震の傳に楊震は五十の時始めて州郡の役人となつたが非凡の人であつたから、段々出世して涿郡の太守となつた、或る時王密と云ふ人が大金を遺うと云つたが是をも辭退た、故舊の人が產業を開かしめやうとしたが是をも辭退て云ふやうには「後世、稱して清白吏の子孫たらしめよ、之を以て之に遺さば亦厚からずや」と曰つたと云ふ故事を引いたのである。清廉潔白を以て世に傳はつた家がらの客だと云ふ意。◎洗耳、不飲牛とは史記にある故事。許由字は武仲といふ賢人が陽箕山に隱遁して居るのを、堯帝が聞き出して、爾う云ふ人があるなら、吾が帝位を其の人に讓り度いものぢやと云つて是を迎へた、許由之を聞いて甚だ驚き、耳が汚れたと云つて潁水の濱に往いて耳を洗つてゐた、其許へ巢父といふ者が牛を牽いて來て水を飲ませやうとすると、許由が耳を洗うてゐる、不審でならぬから其の所由を訊くと、實は堯帝が我を召して九州の長たらしめんとした、それをきいて耳を汚したから今耳を洗つてゐるところであると答へた、すると巢父が之を辯駁して、豫章の木は高山に生えるから人が之を伐らない、君も世を避けんとせば何故高山深谷に藏れないのだ、深山に處して人に知られねば誰も君を見る者はない、今この人里に遊んで人目に觸れるのは名譽を求めやうとする欲心があるからではないか。其んな穢はしい人が耳を洗うた水を牛に飲したならば牛の口が汚れると云つて更に牛を上流に牽いて往つて水を飲ませたといふことである。洗耳は許由で甚だ潔癖の人だが、更に巢父は不飲牛と云ふ一層の廉潔家であつた。

【要解】　初め二句は問僧　後の二句は護國を頌した。第一句は問僧の勇氣勃々を讃歎して第二句に修行成熟して大尊貴の位に到りしを賞した、三四の句は三人の故事を舉げて僧が向上の功位を一轉して護國が向下優游の境界を頌贊した。問僧は未だ壯年にして覇氣滿々、男兒宜しく此の時機に發憤せずんば一國一城の主人公とはなれぬものぞ、放身捨命の修行をせねば眞實尊貴位中には達せられまい。それはさうだが護國和尙は楊震の如く金帛の富も王侯の位も振り棄てゝ土芥の如き清白傳家の客であるから僧の珍重する修證功勳などは振り向いても見ぬ、巢父が許由の潔白を辱かしめ

たよりは尙一段の高潔振りである。前には僧に寄せて向上の絕點を賞めて置いて、後には護國に寄せて却つて向下の神通洒々落々の境界のよきには如かざることを示されたのである。

【著語】口天の到らざることを恨む。　口壯士の英氣抑ゆることが出來ぬ、我に翼あり、雲に梯あらば天にも上り度い心地がするだらう。惜しい事に天の橋立は支那には無いからネ。口程を貪ること太だ速なり。　大層成功を急いで御座るが乞食から諸侯、沙彌から和尙には成れまいよ。イヤ諸侯や和尙になつて怎うする氣かナ。それよりは少し足下に氣を注けたら如何だネ。口已に太多生。生は助字、淸白事なかれで濟まさうとしても次から次へ事件が發生して煩しいことぢや。淸白にしやうとする念が已にハヤ太多生ぢや。口末後は太だ過ぐ。　それでは餘りに引込み思案すぎはせぬか、過ぎたるは猶は及ばざるが如し。洒々落々になれば耳を洗ふにも及ぶまい、極端に過ぎると却つて滴水滴凍になつて爲人の分が缺けますぞや。

第二十九則　風穴鐵牛

示衆云。遲棊鈍行。爛却斧柯。眼轉頭迷。奪將杓柄。若也打在鬼窟裏。把定死蛇頭。還有變豹分也無。

【讀方】衆に示して云く、遲棊鈍行、斧柯を爛却す。眼轉じ頭迷ひ、杓柄を奪ひ將ゆ。若し也た鬼窟裏に打在し、死蛇頭を把定せば還つて變豹の分あらんや也た無しや。

【字義】◎遲棊鈍行爛却斧柯とは神仙傳にある王質の故事。遲棊鈍行とは下拙な碁打と云ふこと。爛却斧柯は、斧の柄が腐蝕して仕舞つたと云ふことである。晉の隆安縣に王質と云ふ人があつて薪を採りに山に入つたところが石室の中に四人の童子が黑白を爭つてゐた、王質に棗の實のやうなものをくれたから其を食べて見てゐた。漸く一番すんだから歸らうとしたら腰に挿してゐた斧の柯が爛却て衣服の袂がきれてゐた。家に還つて見たら旣に數十年經つてゐたと云ふ御伽噺のやうな話である。◎眼轉頭迷とは眼轉は眼がチラツイテ物を凝視するに堪へぬさま、頭迷は演若多が自分の頭が無いと云つて騷いだやうに、狼狽て事の處置を忘るゝこと。◎杓柄とは肝腎要めの處、圍碁の上の先手、きゝ石を云ふ。◎打在鬼窟裡とは碁が鬬になつて自由の利かぬこと。◎把定死蛇頭とは死蛇頭は碁の上の死石で目を持たぬ石である、把定はそれを弄り囘はすこと。◎變豹とは易の革の卦に「大人は虎變、其の文炳たり、君子は豹變、其の文蔚たり」とあり、又楊子法言吾子の篇に「狸變するときは卽ち豹なり、豹變するときは卽ち虎なり」とある。猶且碁の手で、スツカリ死に切つてゐた盤面を、一目ピシリと打つた爲に全局を復活させる手練、卽ち豹を變じて虎となすの手段と云ふ意。

【要解】萬松は碁の上の事柄に寄せて本則の風穴と盧陂長老とが師學應對の機略に應用せられた。遲鈍な棊行が活き死にの見解も無くダラ〳〵と行つてゐるのを傍で觀て居やうものなら斧の柯の朽

爛るほどの手間が取れる、其の樣な下拙に限つて活きる石も殺し、目のある處もつぶして仕舞ひ、狼狽へさつて先手は敵手に奪取れて一向埒が明かぬ、片隅に首を突つ込み、死蛇石ばかりいぢり回はして全局を遂う〳〵駄目にして了らんとしてをる、誰れか名手が出て來て一石ピシリと打ち込んで全面を一時に挽回し、勝を一手に制するほどの手腕の者は無いか、無ければ本則に就いて風穴の巧手を看よ、と云ふ底意で、遲碁鈍行は卽ち盧陂長老、變豹の分あるは言ふ迄も無く風穴和尙を指したのである。

擧。風穴在郢州衙內。上堂云。祖師心印。狀似鐵牛之機。（針劄不入）去卽印住。（拽廻鼻孔）住卽印破。（截斷脚跟）只如不去不住。印卽是不印卽是。（泥裏洗土塊）時有盧陂長老出問云。某甲有鐵牛之機。請師不搭印。（宛有）穴云。慣釣鯨鯢澄巨浸。却嗟蛙步驟泥沙。（逆水之波）陂佇思。（引魂幡子）穴喝云。長老何不進語。（已過鬼門關）陂擬議。（許多時節甚處去來）穴打一拂子。（已臨崖岸更與一推）穴云。還記得話頭麼。試擧看。（爲人爲徹殺人見血）陂擬開口。（猶自不伏燒埋）穴又打一拂子。（仍少三十棒）牧主云。佛法與王法一般。（不會做官看傍州例）穴云。見箇什麼。（却好與一拂子）牧云。當斷不斷。返招其亂。（自罵自招）穴便下座。（得意濃時正好休）

【讀方】擧す。風穴郢州の衙內に在つて上堂に云く、祖師の心印狀鐵牛の機に似たり、去れば卽ち印住し、住すれば卽ち印破す。只去らず住せざるが如きは印するが卽ち是か印せざるが卽ち是か。時に盧陂長老あり、出でゝ問うて云く、某甲鐵牛の機あり、請ふ師、印を搭せざれ。穴云く、鯨鯢の巨浸に澄ましむるに慣れて却つて嗟す蛙步の泥沙に驟することを。陂佇止す。穴喝して云く、長老何ぞ進語せざる。陂擬議す。穴打つこと一拂子して云く、還つて話頭を記得すや試みに擧せよ看ん。陂口を開かんと擬す。穴又打つこと一拂子す。牧主云く、佛法と王法と一般なり。穴云く什麼をか見る。牧云く、當に斷ずべきに斷せざれば返つて其の亂を招く。穴便ち下座。

【字義】◎風穴とは風穴延沼禪師のこと、其の法系を示せば左の如し。

臨濟義玄―興化存奬―寶應慧顒―風穴延沼―首山省念

延沼は餘杭の人、初め越州鏡淸の順德大師に發迹し尋いで襄州華嚴院に詣り汝州南院（寶應のこと、南院第一世の故に曰ふ）の侍者守廓上座に遇うて南院の宗旨を探り初めて往いて相見した、問答數番、後師資の禮を叙べ爾後潙仰の懸記に應じて出世し徒を聚む、南院の法道是れに由つて大いに諸方に振ふに至つた。大宋開寶六年癸酉（皇紀一六三三）八月旦日昇座說偈、十五日に至り跏趺して化す、前一日手書して檀越に別を告ぐ、世壽八十七、法臘五十九。◎郢州衙內とは郢州は楚の都する所、今

の江陵府江陵縣とす。子郢を、都に遷す、楚の考烈王、陳より壽春に徙る、亦命じて郢と曰ふ、名同じと雖も地は則ち異ると『六書故』に出てをる、恐らくは前者であらう。衙內は唐の制では天子の居所を衙と曰ひ行宮を駕と曰ふ、今の官府をも亦衙と曰ふと。此では郢州と云ふ處の大名の城內官邸と云ふほどの語。◎祖師心印とは佛心印とも佛印とも佛祖の心印とも曰ふ、佛陀並びに祖師の認得せられた心印である、宗鏡錄に「佛法の法中は皆心を以て印となして萬法を楷定す」とある、達磨は「諸師の法印」と曰はれた、故に心印を法印と曰つてもよい、心法不二、心法一如と云ふやうに佛祖の實印を以てピタリと印定して寸毫私なきを曰ふ。◎鐵牛之機とは「陝州城外に鐵牛の廟あり、牛頭は河南に在り牛尾は河北に在り、禹は鑄て以て河患を鎭す」と韻瑞四十四卷に見ゆ。河水の氾濫を防ぐ廣大なる鐵牛を鑄て据ゑ付けてある、動かざること死牛の如く、河を守ること活牛に似たり、此れを鐵牛の靈機と曰ふ。◎印住、印破とは心印から出た縁語で把住放行と曰ふに同じ。◎盧陂長老とは傳不詳ざれども、風穴に隨身の僧で本日衙內の說法にも伴僧して行つたものらしい。長老は『阿含經』に三種の長老が說いてある、一は耆年長臘、年老多き者、二は法長老、法性に了達し內智德ある者、三は作長老、假に號して名くる者、盧陂長老の如きは其の第三種であらう。◎搭とは音答、附也、印を以て之に押すことである。◎慣釣鯨鯢澄巨浸とは鯨鯢はくぢらと云ふ海魚で雄を鯨と曰ひ雌を鯢と曰ふ、大なるは長け千里、小なるも數十丈、眼 明 月珠の如しと曰はれてをる。巨浸は『字典』に澤の總名也とあり、『碧巖新鈔』には巨浸は大海也とある、澄字は沈の意に見てよし。此の句は鯨鯢の巨浸に沈むを釣るに慣ふてと訓ずる方解し易し。◎却嗟蛙步驟泥沙とは前句の極端なる反對を云ふ、驟は馬の土中に轉臥する樣子。蛙步は蛙のやうなあるきざま、泥沙は泥田の中、泥濘の狀である。却つて蛙步の泥沙に驟することを嗟くといふ意。◎打一拂子とは拂子は「諸の苾蒭の蚊子を拂ふ物を蓄ふるを聽す」と毘奈耶雜事に佛の許されたものである。今は法具の一となり導師たるものゝみ之を用ゆ、此の拂子で一度ピシャリ打つたと云ふこと。◎牧主とは郢州衙內の城主若くは長官と云つたやうな人である、此の人が風穴禪師を請して說法を求めたのである。牧主は名では無い、牧は司也察也と曰ひ、又は州の長也と曰ふ、『周禮』の註に州牧を置くの語あり、今の縣知事の如きものである。◎當斷不斷とは史記に「召平が曰く、嗟乎、道家の言に當㆑斷不㆑斷反受㆓其亂㆒と乃ち是れなり」とあり、又黃石公に此の語あり。截斷すべき時に截斷して置かぬと却つて後の祟りを來すと云ふほどの意。

【要解】　汝州風穴山廣慧禪院延沼禪師が楚の郢州と云ふところの、城主の請に應じて其の衙內で上堂說法せられた、其の垂語に曰ふ、如來單傳祖師心印の相狀は恰も陝州の河中に水を守る鐵牛の靈機にさも似たりぢや、去かとすれば印住卽ち來、住かとすれば印波卽ち去である、鐵牛に去來は無いが假りに去住を分てば去卽印住、住卽印破、色卽是空、空卽是色の道理である、然し去住を超越して不去不住の時節には印するが是か印せざるが不是か、去住を撥轉して祖師の心印如何んが受用すべき、斯う云ふ說法で有つた。隨伴して行つた盧陂長老之を聽いて憤然として立ち、某甲はチャ

ンと鐵牛の機用を有してゐる、祖師の心印を搭して貰ふ必要は御座らぬ、餘計な御干渉は御免蒙ると大層鼻息荒く出掛けた。風穴禪師倘ほ一段上に出て、例日の通り今日も大海に巨鯨を釣る積りで鈎を投じたのに、何のこつた、泥田にはまつてゐるドンビキ蛙がひつ掛つて仕舞つた、慨嘆々々と千尋崖から叩き落した、長老躊躇チヨト佇思た、穴大喝して長老何とか進語ないか、陂何ぞ言ひたげに口をもぐ〳〵さした。穴、持ち合せの拂子でブン擲つて置いて、貴樣先程老僧に向つて言つた語を記憶してゐるか、モー一遍言うて見よ、恐らくは其の語も忘れてゐるのだらう。盧陂いよ〳〵口を開いて正直に又某甲に鐵牛の機あり云々を復說さうとしたので、風穴さしをかず眞向からピシヤリと行つた、其の繰言を聞いて何になるか、莫迦坊主奴と云つたやうな權幕である。見るに見兼ねて横合から牧主が、如何にも賞罰分明、佛法の上でも、國法の上でも行令の軌轍は同一で御座ると。穴は云ふ牧主は什麽を見て左樣なことを仰せられるかナ、牧云く世間でも出世間でも同樣に、きめどころをチヤンときめて置かぬと、後に亂を起します。風穴何とも言はず、其の儘座を下つて了はれた。風穴は俗人對手に多くの言を費されぬ。◎本則の要と言へば、佛祖の心印、即ち吾人の心印で遠い話で無い、吾人の心印は或は印住し或は印破すれども其の根柢は安住不動、其の靈妙なること鐵牛の機の如く、不去不住のまゝに去來し、去來のまゝに印住印破だが、且らく機關を設けて釣を垂れた。其許へ盧陂長老が引つ懸つて來たはよかつたが二進も三進も動きがとれぬ、何かして物にしやうと再三激勵せられたが遂に蛙步の泥に驅するを免かれ無かつた。牧主は尻馬に乘つて來ただけでホンの附錄である。

【著語】□針劄不入。針ぼとも思慮分別を入れる隙間が御座らぬ、穿鑿すべき穴は無い、鐵牛を賞賛した。□鼻孔を拽廻す。鼻づらを以て拽きもどせ、去らんとすれども去處は有るまい。□脚跟を截斷す。突つ立つて居るなら脚跟を截斷て仕舞へ、住せんとすれども住する處はあるまい、無所住の處に住著してはならぬぞ。□泥裏に土塊を洗ふ。印の不印のと妄想の上塗り、何だか薩張りとせぬ道ひ分だナ。□宛も逆水の波あり。大層な鐵牛が現はれた、如何なる洪水も此の鐵牛にブツ突つたら逆流するだらう。大きに威勢のよい長老だ。宛はさながらで、アンマリ宛にはならない、少し宛こすつたやうな氣味がある。□引魂幡子、搐氣袋。風穴和尙は死骸となつた盧陂長老を起死回生らせんために、大きな聲で呼んでゐるが、所詮無駄骨折りだらうよ。搐氣袋とは死骸、引魂幡とは招魂の幡と云ふことで、『釋氏要覽』や、『正法念處經』に出てゐる。風穴の心切がアリ〳〵と見える。□已に鬼門關を過ぐ。諺に若し鬼門關を度れば七人去つて九人還らずと云ふ、十の八九は生きて還らぬ、仔思の樣子を見やれ、生きてゐる面では無さそうだ。□已に崖岸に臨んで更に一推を與ふ。千仭崖に臨んで進退維れ谷つた場合にウンと推倒された、生きるか死ぬるか、千番に一番の懸命ぢや。□許多の時節甚れの處にか去來す。鐵牛の機を何故活動させぬのだ、何時用ゆるつもりだナ、何處ぞへ去來してゐるのだらう。□人の爲にするは爲に徹す、人を殺しては血を見る。風穴の接衆は放身捨命の爲人ぢや、活頭を記得すやと一息截斷の處まで見屆けやうとの心

切ぢや。口猶ほ自から燒埋に伏せず。　金魚の死に損ねのやうにパカ〱と口を開く處を見ると、死に切つたでも無さそうだ、マサカ息のある間は燒きも埋みもならぬ、くたばり損ないの長老にも困つたものサ。寧そのこと大死一番、絕後に甦つて欲しいのぢや。▣口仍ほ三十棒を少く。　一拂子位では足らぬ、三十棒でもまだ不足ぢや、手緩いぞ〱。口官と做ることを會せずんば傍州の例を看よ。　萬法全書に「衣を著ることを會せずんば傍人の例を看よ、官と做ることを會せずんば傍州の例を看よ」とある、例は例式である、佛法の例式を以て牧主は行政官の例式と做されたのは結構ぢや、爾うしたら天下は太平に治るだらう。だが牧主御自身には何の節目も御座らぬのかな。口却つて好し一拂子を與ふるに。　風穴は手軟かすぎる、萬松なら一拂子ピシヤリと行く處ぢや、惜しいことをしたものさ。口自ら罵り自ら招く。　亂を招くと云つて何にも他人の業では無い、笑ふも嗔るも皆んな他所から來るで無い、御自身の獨り狂言ぢや。口意を得たること濃なる時正に好し休するに。　十分の得意とは參るまいが、そこらが下座のし時であらう、サンザン棒喝を行じたから風穴今日の說法は一幕物としては好い幕切れぢやらう。

頌云。鐵牛之機（哮吼也未）　印住印破（鉤錐在手）　透出毘盧頂顊行（將上不足）　却來化佛舌頭坐（四下有餘）　風穴當衡（世情看冷暖）　盧陵負墮（人面逐高低）　棒頭喝下（豈容分說）（和聲便打）　雷光石火（不待消停）　歷歷分明珠在盤（不撥自轉）　眨起眉毛還蹉過

【讀方】　鐵牛の機、印住印破。毘盧頂顊を透出して行き、化佛舌頭に却來して坐す。風穴衡に當つて、盧陵負墮す。棒頭喝下、電光石火。歷々分明珠盤に在り、眉毛を眨起すれば還つて蹉過す。

【字義】　◎毘盧頂顊とは毘盧は毘盧遮那佛の略稱、梵音ヴーイローチヤナ（Vairocana）、遍一切處又は光明遍照と譯す。法身佛のこと、頂顊は頭顱額上である、忠國師の語に「毘盧頂上を踏んで行け」とあるに同じ。◎化佛舌頭とは前句に對しての語、化佛は應化佛、應身佛の略。衆生の機緣に應同して此土に示現し說法したまふ佛である、舌頭は橫說竪說の舌の根と云ふこと。◎當衡とは衡は權衡ではかりだま、當は當事者又は當路者などと云ふ當の字、權衡を確と握つて自から秤定し他の干涉をうけぬ樣子。◎負墮とは西天の外道長爪梵士歎じて云く「我義兩處に負墮す」と、萬松の評に「六義不成之を負墮と謂ふ」とある、角力の勝負で云へば奇麗に土俵外へ拋げ出されて物言をつけ度くもつけることの出來ぬづぶまけを云ふ。◎珠在盤とは明珠が玉盤を走る、宛轉して宛轉の痕無く而も歷々として味さゞる自由のはたらきを曰ふ。◎眨起眉毛とは眨は音さふ、起と熟字してさつきと讀む。眨は目動ぐこと。眉毛を眨起するは物を見やうとして眉を動かし、眼を瞪ること。第二念に涉る意。

【要解】 此の頌初めの二句は本則の體面、第三句は去、第四句は住を頌す。中の四句十六字に風穴の大用を叙べ、最後の二句十四字に擬議量を絶する本則の功用を賛頌した。鐵牛の機だから去れば印住し住すれば印破する、去の時は毗盧法身の頂顊を透過して行く、住の時は現身化佛に一言の差出口をさせずにドッカと坐する、鐵牛の機の去住は實に凡眼を以て窺ふことが出來ない、風穴は權衡手に在り能殺能活自由自在の衲僧ぢやから盧陂長老などはグーの音も立てず脆く一敗地に塗れて仕舞つた。風穴の打つこと一拂子、或は一喝を行ずる、其の敏捷さ擊石火閃電光、目にとまらず分別の隙間も無い。本則の上に風穴の轉ずる鐵牛の機輪は歷々分明毫しも罣礙せず私照なし、恰も珠の盤に走り、盤の珠に轉ずるが如くで、回互宛轉自由自在、去住不去不住の蹤跡は御座らぬ。若し此の一段に向つて一念纔に動ずれば千念萬念一時に競起して祖佛の心印とは蹉つて過つた鬼窟裡に向つて死蛇額を弄するの漢と成り了らうぞ。

【著語】 口哮吼すや也た未しや。　活牛ならばモー〳〵と哮吼る筈ぢや、活きてゐるかナ、死牛では何の役にも立つまいぞ。口鈎錐手に在り。　鈎も錐も名々の手の中にある、把住放行勝手次第少しも差支はごさらぬ、一處に滯累つては何にも用をも爲さぬ。口將上足らず。　毗盧頂顊を透過すと云へば此の上も無い高い處のやうに天童は思つてゐるが、萬松が見ればまだ〳〵言ふに足らぬ。萬松は高大無邊の鐵牛に比べての道ひ分だ。口匹下餘りあり。　化佛の舌頭に却來すと云へば向下の至極だと思ふぢやらうが、なか〳〵どうして、谷深うして底を見ず、深遠の程度が知れない。不足と云ひ有餘と云ふは上攀仰無く、下己躬を絶する樣子である。口世情冷暖を看る。　世の中の人情でも冷暖憂喜は顏付でわかる、風穴のやうに衡などを用ゐずともだ。口人面高低を逐ふ。　氣質に高低は有つても面付で大底其の是非は知れるものぢや、負けさうな風態だもの。口豈に分説すべけんや。　いかな言句も入れる透間が有らばこそ、佛祖出で來るも一點語を下すに由なし。口消停を待たず。　寸時も停めて置けぬ、ピカリと光るのと消えるのと同時ぢやからね、第二念に涉る暇は無いサ。口撥せざるに自から轉ず。　毫も知見解會の手を觸れずして智慧の明珠の宛轉して無礙である、盤珠を轉じ珠盤に轉ずるの妙用、ソレ諸人見たかナ。口聲に和して便ち打つ。　天童の聲に和して萬松はピシヤリ一棒を喰はす、何の動目眨眼する處かある、ソレ其許にコロリ現成ぢや。

第三十則　大隨刼火

示衆云。絶諸對待。坐斷兩頭。打破疑團。那消一句。長安不離寸步。太山只重三斤。且道據甚麼令。敢恁麼道。

【讀方】 衆に示して云く、諸の對待を絶し兩頭を坐斷す。疑團を打破するに那ぞ一句を消ゐん。長安寸步を離れず。太山只重さ三斤。且らく道へ甚麼の令に據つてか敢へて恁麼に道ふや。

【字義】 ◎坐斷兩頭とは迷悟凡聖等の相對二見を泯滅するをいふ。◎長安不離寸步、太山只重三斤

とは長安は漢の高祖咸陽に都して之を長安と改稱す。太山は五岳の一で岱山ともいふ。長安も太山も共に眞如法性の換語で、眞如といひ法性といへば大層遠く、又重く聞えるが實は吾人の擧手投足の上を離れては無いといふこと。

【要解】　壞とか不壞とか、自とか他とか何でも二法が對待するから有念に渉り無念に渉るのである、此れ等すべての對待を超絶すれば自から兩頭を坐斷することが出來る。兩頭に渉るから疑團といふものも發つて來るが其の疑團を打破するに有とか無とか答へたならば疑團はこれからそれへと増長して再び對待の巷にさ迷ふことになる。一句を消ゐざるところにチャンと佛法は現成してをるのちや。對待、兩頭、疑團を超絶した有樣をいへば遠い長安の都も寸歩を移さずコロリ現成、五岳の一たる太山も掌に載せて玩具にすることが出來るぞ、遠近の情量も、輕重の分別もガラリ抛げ棄てて觀れば極樂淨土も脚跟下よ。太山の高嶺を玩弄にするくらゐのことは尋常茶飯である。一體ソンナ手品をするのには甚麼な仕掛けが要るのか、怎うして开んなことをいふことが出來るか、未だ其の邊の合點がいかぬといふならば大隨劫火の本則を篤と參究してみたらよからうと、本則に引きつけたのである。

擧。僧問大隨。劫火洞然大千倶壞。未審這箇壞不壞。（愁人莫向愁人說）隨云。壞。（早是。何堪）僧云。恁麼則隨他去也。（目前可驗）隨云。隨他去。（下坡不走。更與一推）僧問龍濟。劫火洞然大千倶壞。未審這箇壞不壞。（同病相憂）濟云。不壞。（打破契頭。振轉鼻孔）僧云。爲甚不壞。（又恁麼來）濟云。爲同大千。（生鐵鑄成）

【讀方】　擧す。僧大隨に問ふ、劫火洞然として大千倶に壞す、未審這箇壞か不壞か。隨云く、壞。僧云く、恁麼ならば則ち他に隨ひ去るや。隨云く、他に隨ひ去る。僧、龍濟に問ふ、劫火洞然として大千倶に壞す、未審這箇壞か不壞か。濟云く、不壞。僧云く、甚と爲てか不壞なる。濟云く、大千に同じきが爲なり。

【字義】　◎大隨とは益州大隨の法眞禪師にして長慶大安禪師の法嗣、百丈大智禪師の法孫で六十餘員の尊宿に參見したと傳へらるゝ高德である。◎劫火とは仁王經護國品の偈に「劫火洞然として大千倶に壞す、須彌巨海滅して餘なし云々」とあるより出た語で三災壞劫の時には此三千大千世界が大火災の爲に燒け盡すといふ。◎洞然は火の盛に燃える貌。◎這箇とは本有の那一物とも見るべく、遍界不藏の法身とも見ることが出來る。◎隨他去とは三千大千世界が燃燒すると共に這箇も滅却するをいふ。◎龍濟は紹脩山主、羅漢の桂琛禪師の法嗣で前に屢脩山主と出てゐた。

【要解】　大隨の法眞禪師の下へ一人の僧が來て問ふには成劫住劫が過ぎていよ〳〵壞劫といふ時節が來ると、劫火の爲に燒かれて大千世界が一度に壞滅するといふことだが山僧の最も不審に思ふの

は這箇は壞するものでせうか、それとも壞せぬものでせうかと、此の這箇とは什麼であらう。何か一物を認めて壞不壞を疑ふものらしい。依つて大隨はワケも無く壞と答へた。スルと其の壞に拘泥して來た、然らば這箇も亦大千と倶に壞すると仰せらるゝか、甚だ怪しからぬと云ふやうな權幕だ。大隨平氣で他に隨ひ去る、お前のいふ通りだと刎ねつけた。僧は倍迷ひが深くなつたから其の足で直ぐ龍濟の處へ出掛けて行つて刼火洞然として大千倶に壞す、未審這箇壞か不壞かと問うた、濟云く不壞。意地惡く大隨とは全で反對だ。甚としてか不壞なると再問せざるを得ぬ。濟云く大千と同じきが爲なり、這箇と大千と別物のやうに心得てゐるから大層壞不壞を憂慮するが、元來頬べたべた類で二物對待のものでは無い、大千が不壞なら這箇も不壞さ、何にも未審はあるまい。サー大隨は壞といひ、龍濟は不壞といふ、前には隨他去といひ、後に大千に同じきが爲めなりといふ。何だか話頭が兩斷されてゐるやうだが、是れほど分明な公案は無い。火にも燒けず水にも溶けぬ這箇などゝいふ一疑團をシッカと抱持いてゐるから大千は壞刼になると滅するが這箇は成住壞滅に干係らぬものだと固執してゐるのである。故に一は壞不壞の對待を超越した壞の絕待を示し、一は壞不壞の兩頭を坐斷した不壞の一法を擧せられた。此の壞不壞を超越すれば常に不安に堪へ無かつた大千世界は直に常寂光土と現成する、大層珍重してゐた這箇も掌上の玩具に過ぎ無い。要するに此の本則は對待の兩頭を絕し或る時は大千と倶に他に隨ひ去るの自由を得、或る時は大千と倶に無礙の三昧に入るの自在を會得するにある。

【著語】 □愁人、愁人に向つて說くこと莫れ。問ふ汝も刼火を免かれぬ、大隨も御同樣ぢや、お互ひに淚の種であるから壞不壞の話は止めたらどうだ。□早く是れ那ぞ堪へん。這箇は不壞だらうと安心してゐたら、一言に壞と云つて退けた、恰も注文がはづれて一堪りも無く土俵を割つた態だ。□目前に驗むべし。他に隨ひ去るかどうか位のことは目前の境に就いて驗たらよからう、他の舌頭に計り頼るのが能でもあるまい。□下坡に走らず、更に一推を與ふ。坡は坂で堤の下り口のこと、船に乘る場處をいふ。早く乘らぬと此の乘合船に乘り遲れるぞとポンと背後から突き飛ばした。何時までも動かんで善い處ぢやと波止場に寢て居たでは遂に向ふ河岸に行けぬ、大隨は心切に隨他去と突き飛ばして吳れたのぢや。□同病相憂ふ。文選に同病相憐むとあると同意、心配そうな人間が又二人寄り合つた。□契頭を打破し、鼻孔を捩轉す。大隨の處で壞と云はれたから後生大事に壞で御座ると思ひ込んで龍濟に行つたら不壞とイキナリ鼻のさきを捩轉して案外の方へ向けられた。□又恁麼にし來る。先には壞に執して恁麼ならば他に隨ひ去るやといひ、今又不壞に著して其と爲てか不壞なるといふ、どちらへでも能く拘泥る男だ。□生鐵鑄成す。法雲秀禪師の語に「純鋼打就し生鐵鑄成す」とある。雜りものゝ無い生鐵ぢやに依つて水に入れても火に入れても一向かはらぬ。不變といつても隨緣といつても眞如の上の現成である。氷と成つても流と作つても水の濕性はどこまでも不壞ぢや。

頌、云壞不壞、（佛手モ揀不出）隨他去也大千界（沒量ノ大人語脈裏ニ轉却セラル）句裏了無鈎鎖機（粘シ牙ニ帶ブ齒ニ亦不少カラ）脚頭多被葛藤礙（誰カ敎ヘテ爾ヲシテ生ゼ枝ヲ引カシム蔓ヲ）會不會（心忙手急）分明底事丁寧聯（是レ盲者ノ過ナリ非ス日月ノ咎ニハ）知心拈出勿商量（牙人見ニ販子ヲ）輸我當行相買賣（堂屋裏ニ販ク揚州ヲ）

【讀方】壞と不壞と、他に隨ひ去るや大千界、句裏了に鈎鎖の機なし、脚頭多く葛藤に礙へらる。會か不會か、分明底の事丁寧聯し。知心は拈出して商量すること勿れ、我當行に相賣買するに輸く。

【字義】◎句裏了無鈎鎖機の鈎鎖機とは引掛ける機用をいふ、龍濟大隨共に其の言句には他を引つかけて困らせやう等といふ料簡があるのではないと云ふ意。◎知心とは韻瑞に李陵が書の文を引く、曰く「人の相知る、貴むらくは心を知るにあり」と、又古語に「腹心相照す是れ知心」と、卽ち肝膽相照すをいふ。◎當行とは本店、當店で我がこの店といふこと。

【要解】初めの三字句と七言句との二句で本則に於ける二師の答話を叙し、次の二句は師家の心意と學人の徹底し難き所以とを述べた、更に前の句例に倣つて三字句と七言三句とを以て前二句に本則を提示し、後二句に天童の作略を發揮して學人の參究に資せられてある。大隨の壞と脩山主の不壞と、大隨の隨他去と龍濟の同大千界と語句は全然異つて居るやうだが、其の句中には人を引つ懸けやうの束縛しやうのといふ量簡は毫も無い、有りのまま脫體現成の言語である、然るに學人は自己の脚頭が五色の絲で拘束れてをるものだから、言句葛藤の枝蔓に礙へられて自由がきかぬ。壞にも出身の處あり、不壞にも出身の活路があることに氣がつかぬ。諸人會したか、夫れともまだ不會か、會といはゞ天地隔懸、不會といはば白雲萬里だ、分別に涉つてはならぬ、アレ程丁寧に示された分明事ぢや、見る通り聞く通り、見聞一一他に隨ひ去る、人々に付囑せられた明々白々事である。心と心と知り合つた知音同士ならば最早やアーのコーのと賣り聲、掛け聲はいらぬこと、天童の我が本店では皆樣の賣るなり買うなりに一任して置く、壞と買ふもよからう、不壞と賣るもよからう、各自勝手に定價をするがよろしい。畢竟するに他に向つて論量することは止めて諸人直下に自知し自得するが肝要ぞよとの提示である。

【著語】口佛手も揀不出。佛祖が出て來ても壞とも不壞とも揀擇することは不可能だらう。口沒量の大人、語脈裏に轉却せらる。並はづれの大男でも語路には轉ぜられ易い、況んや此の小僧をやだ。口牙に粘し齒に帶ぶること亦少からず。猫に燒餅を食はしたやうに牙に粘りつき齒にくつゝいて喉咽に透らぬ、一口に呑盡する器量が無いから此の始末よ。口誰か儞をして枝を生じ蔓を引かしめん。自分が葛藤に纏はるので枝蔓の方から來て捲き付くのでは無い、二師の言句に過はあるまい。口心忙しく手急し。捨てゝ置けば好いに會か不會かなどゝ催促するから氣忙しくて手の置きどころも忘れてしまう、天童はチト世話を燒き過ぎるぞ。口是れ盲者の過なり、日月の咎には非

す。日月は晝夜を照しぬいて分明ぢやが、見えぬは盲者の情無さ、ドーダ少しは日の目が拜めたかナ。是れは『維摩經佛國品』の語。口牙人販子を見る。牙人は交易を業とする仲買人のこと、販子は商賣人を云ふ。眼の勘いた仲買人と商賣人とならば正札も懸値も有つたもので無い、一言半句を出さずとも目機銖鎦だ、兩人相自知するにある。口堂屋裏に楊州を販ぐ。佛燈の語に「大に屋裏に楊州を販ぐに似たり」とある。天童は此方の店に坐り込んで居て千里も向ふの楊州の品物を自由に賣買して御座る。大店の旦那は大したものぢや。

第三十一則　雲門露柱

示衆云。向上一機鶴冲霄漢。當陽一路鷂過新羅。直饒眼似流星。未免口如匾檐。且道是何宗旨。

【讀方】衆に示して云く、向上の一機、鶴霄漢に沖る。當陽の一路、鷂新羅を過ぐ。直饒、眼流星に似たるも未だ口匾檐の如くなることを免かれず。且らく道へ是れ何の宗旨ぞ。

【字義】◎鶴沖霄漢とは石霜誕生王子の頌に「誕生王子の父を知らんと欲せば、鶴霄漢に沖つて銀籠を出づ」とあるより來る。霄漢はおほぞら、沖は跡方の見えぬこと。こゝでは向上の氣高くして沒蹤跡なることをいふ。◎當陽とは南面で君位のこと、此では目前分明の意で、向上の一路をいふ。◎鷂は鷙鳥といひ、青質五采の最も敏捷ところの鳥である。◎匾檐とは碧巖鈔に「檐子肩にある時、兩頭臭つて凹なり、其の貌不言の唇の如しと、匾は圓ならざる貌。俗にいふ竹篦口、への字口である。

【要解】向上の一機をいうて見やうならば鶴が霄漢に沖るが如くで毫も朕迹を留めない、當陽分明の一路をいつて見るならば鷂が今玆に居つたかと思つたら早や遠く新羅を過ぎ去つて蹤跡を認め難しぢや。一機とは何か、一路とは是れ什麼ぞと參究するがよい。直饒、眼は流星のやうに速疾でも一機の朕迹を認めることは出來ぬ、口に懸河の辯があらうとも一路の消息を語ることは不可能、徒らに眼をきよろつかせて口をへの字にして呆然てゐるのみである。サー此の所を一つ道つて看よ、是れ何の宗旨ぞ、法界平等の極則に非ずんば卽ち雲門新條の活宗旨で御座らう。沒蹤跡、斷消息の所を一つ本則に就いて確と究めて欲しいものぢや。

擧。雲門垂語云。古佛與露柱相交。是第幾機（落七落八了也）衆無語（却與露柱同参）自代云。南山起雲。北山下雨（張翁喫酒李翁醉）

【讀方】擧す。雲門垂語して云く、古佛と露柱と相交る、是第幾機ぞ。衆無語。自ら代て云く、南山に雲を起し、北山に雨を下す。

【字義】◎露柱とは四方八面ひつかゝりの無い獨露した柱、俗に大黑柱といふ。目前に在つて見當つたところの一物を拈じていふ語で、其の實は圓柱でも角柱でも一向かまはぬ。◎南山起雲云々は唐の宋璟羯鼓歌を善くすといはれて居る、其の中の語である。

【要解】雲門大師が垂語して云はるゝには古佛と露柱と交はる是れ第幾機ぞと、古佛は尊いもの露柱は賤しいものといふ考へを起したら薩張り會得らない、古佛は須彌壇上の佛とのみ思うてはならぬ、全自己と云つてもよし、汝とでも渠とでも名は何でもよろしい、露柱は徧界不藏、拄杖でも拂子でも物に拘はつたことでは無い。自己の光明で照す時は古佛が露柱に入り、露柱が古佛に入る、卽ち古佛は古佛を脫落し、露柱は露柱を脫落しての交際である。正偏回互の全機現成である。然るを雲門は是れ第幾機ぞと鈎頭に餌をつけて大衆面前に投げつけた。雲巖が曾て掃帚を提起して這箇は是れ第幾月ぞと曰うたと同じ語調だ。此の鈎頭に上るほどの命に負く魚すら無かつたと見えて大衆一語無し、依つて雲門自から代語して南山に雲を起し北山に雨を下すと云つた、是れは正偏回互其の儘の語である、南山北山の交り方は如何にも親しい、雲起れば雨が下り、雨の降るときには必ず雲が起つてをる、此に至つては第幾機ぞなぞと思慮分別の隙間が無い、第一機でも第二機でも無い、上機でも中機でも下機でも無い、若し强ひて云はゞ第幾機の現成とでもいふより外に致し方はあるまい。

【著語】口七に落ち八に落ち了れり。　古佛と露柱と相交のまゝでよろしい、第幾機ぞなどゝいへばモ一七八に落ちて了つた。然し七八に落ちて始めて相交の光明が現はれた。口却つて露柱と同參無語それが結構ぢや、露柱には憂喜苦樂は無い、衆と露柱とは同參らしい。句裏に少しく冷笑したやうな操りが見える。口張翁酒を喫して李翁醉ふ。雲門の語に和した。張翁と李翁との相交は南山と北山との相交と同じさ、一とも云へず二とも云へず、酒を喫むと醉ふ、醉ふたからには酒を喫んだのだらう。二人かと見たらいつの間にやら一人の交參で有つた。

頌云。一道神光（上拄天下拄地）初不覆藏（淨裸裸赤灑灑）超見緣也是而無是（烈火焰中休眨眼）出情量也當而無當（劍輪鋒外莫廻頭）巖華之粉兮蜂房成蜜（神通廣大）野草之滋兮麝臍作香（變化無方）隨類三尺一丈六（主山高案山低拄杖長拂子短）明明觸處露堂堂（拶破面門無處廻避）

【讀方】一道の神光、初より覆藏せず。見緣を超ゆるや是にして是なし、情量を出づるや當つて當ることとなし。巖華の粉たるや蜂房蜜を成し、野草の滋たるや麝臍香を作す。隨類三尺一丈六、明々として觸處露堂々。

【字義】◎見緣とは見と見緣とをいふ、卽ち能見の知と所見の境とである。◎情量とは情識思量

卽ち吾人の分別妄念をいふ。◎麝臍とは麝獸といふ獸は路傍の草花を喰つて臍下に香を藏すといふ。◎隨類三尺とは涅槃經第二十卷に「如來瞿師長者が爲に三尺の身を示す、是故に非短に非ず」とあつて、丈六の佛身機類に隨つて時に三尺の身をも現ずるといふこと。

【要解】一道の神光は蓋天蓋地なる自己の光明である、此の光明で照せば盡法界當初より脫體現成で有つて毫も覆藏するところは無い。覆藏せざる盡界とは如何なものぞなど丶少しでも分別の眼を睜れば大地黑漫々よ、若し此の見緣を超越するならば一切諸法皆是れ是であるがサテ其の是の是とすべき相は何處にも無い、情量分別の窟宅を一つ拔け出して見ると古佛に當り露柱に當つて覿面分明ぢやが、是れ亦是れが露柱か是れが古佛かといつて捉へることは出來ぬ、當體全眞であるから一物を指して是ぢやとか當ぢやとか云ふことは出來ぬが、諸法何を指しても是といひ當といふことの出來るのが古佛と露柱と相交の親密さである。以上の四句で明確に本則を頌じ上げた。其の相交の狀態をモー一層詳く事實を擧げて次の二句で示す。蜂が花粉を採つて少しも餘香を損せずに蜜をつくる、麝香猫は草の滋味をなめて其の臍から麝香の香を放つ、それで毫も野草の滋味を傷けない、といふものは花粉は素から蜜では無い、滋味は元來麝香では無い、用ゐやう一つで蜜ともなれば香ともなる、本來具有して居らぬやうでもある、從來含有して居るやうでもある、是れで萬法の無自性であるといふ道理が能く知られる。次の二句で佛の應緣不昧なる樣子を頌じて此の則を結ぶのである。佛は從來三尺でも無ければ一丈六尺でも無い、物に隨つて現前するが故に或は丈六、或は三尺、或は古佛、或は露柱、南山とでも北山とでも、自由自在に現身せられる、といふものは畢竟自性が無いからである。自性が無いから露堂堂として觸處明白、盡法界に脫體せらる丶のである。此の道理を能く會得するがよい。

【著語】□上天を拄へ、下地を拄ふ。盡十方世界一道の光明に照されて昧す處は無い。□淨裸々赤灑々。人間が母の胎内から飛び出した時のやうに何も彼もさらけだして藏すところが無い。□烈火焰中貶眼することを休めよ。大火焰中の三昧ぢや、見るの見ぬの、是ぢやの不是ぢやのと餘計な分別らしい眼を睜るまいぞ。□劍輪鋒外頭を廻すこと莫れ。水車の樣に振り廻す劍刄下に立つて情識の頭を擡げることは止めて貰ひませう。□神通廣大。蜂の蜜を作るも神通だらうが、吾人の日常運足轉步も亦廣大の神通である、萬物各功あり、蜂計り賞めまいぞよ。□變化無方。苦と思へば甘い、雲かとすれば雨、千變萬化、實に圖り難い不思議さぢや。□主山は高く案山は低く、拄杖は長く拂子は短し。法の現前する其の儘をいふ。前山は高いから高い、後山は低いから低い、大底は大、小底は小、長者は長法身、短者は短法身、毫しも切り盛りはいらぬ。□面門を摋破して廻避するに處無し。眼の前へさしつけてある、避けるの逃げるのといふ餘地は無い。無廻避の處が眞箇面門の現成よ。

第三十二則　仰山心境

示衆云。海爲龍世界。隱顯優游。天是鶴家鄕。飛鳴自在。爲甚困魚止濼。鈍鳥棲蘆。還有計利害處麼。

【讀方】衆に示して云く、海は龍の世界たり、隱顯優游。天は是れ鶴の家鄕、飛鳴自在。甚と爲てか困魚は濼に止り、鈍鳥は蘆に棲む。還つて利害を計る處ありや。

【字義】◎困魚、鈍鳥とは寶藏論に云く「夫れ進脩の田中に萬途あり、困魚は濼に止まり、病鳥は蘆に棲む」と、遊戲自在なる法性海中にありながら迷妄の世界に彷徨ふこと。

【要解】龍は大海を自己の世界として優游し出沒してゐる、鶴は天空を己が家鄕として自由自在に飛鳴してゐる、何等の束縛も罣礙も無い、實に快活縱橫ぢや。然るに小魚は濼水に止り、鈍鳥は蘆邊に棲んでをる、何故モツト自由の寬海天地に出て縱橫に雄飛しないのであらうか。一刹那に三世を通觀し、一念裡に十方に往還する位のことは衲僧家尋常の茶飯である、人々此の分を虧くものは無い筈である、徒らに窠臼に墮し妄想執著してゐるは氣の毒なものよ。それとも何か其れには利害得失でも有るといふのか、有るといふなら承はらうぢやが、利害の活計を抛げ棄てゝ仰山の本則に參じ、試みに大海に優游し、天空に翺翔して見るがよからうよ。

擧。仰山問僧。甚處人。（閉門刷會）僧云。幽州人（公驗明白）山云。汝思彼中麼。（恰待忘了）僧云。常思（熟處難忘）山云。能思是心。所思是境（元來更立能所）彼中山河大地樓臺殿閣人畜等物。反思思底心。還有許多般麼（仁者自生分別）僧云。某甲到這裏。總不見有（猶有這箇）山云。信位卽是。人位未是（庭前殘雪日輪消　室內紅塵遣誰掃）僧云。和尚莫別有指示否（便恁麼來）山云。別有別無卽不中（射透兩重關）據汝見處只得一玄（已得紅中月）得坐披衣向後自看（更添帆子風）

【讀方】擧す。仰山、僧に問ふ、其れの處の人ぞ。僧云く、幽州人。山云く、汝彼の中を思ふや。僧云く、常に思ふ。山云く、能思は是心、所思は是境、彼の中には山河大地樓臺殿閣人畜等の物あり、思底の心を反思せよ、還つて許多般ありや。僧云く、某甲這裏に到つて總に有る事を見ず。山云く、信位は卽ち是、人位は未だ是ならず。僧云く、和尚別に指示あること莫しや否や。山云く、別に有り別に無しといふは卽ち中らず、汝が見處に據らば只一玄を得たり、得坐披衣向後自ら看よ。

【字義】◎仰山の傳第二十六則に出づ。◎幽州は燕の地方をいふ。◎信位人位とは異說があるが天桂禪師の辨解によれば「信位は入頭悟解是を初發心地といひ、信心具足といふ、人位は悟り了れば

未悟に同じの漢にして未悟の行履を云ふ」とある。一應は信位は正位、人位は偏位と見て置くがよからう。◎一玄とは本來無一物の向上の的旨をいふ。◎得坐披衣とは本錄萬松老人の評に「空處を坐となし萬行を衣となす」といひ、或は「坐は安禪靜慮、衣は衲被蒙頭」ともいふ、行住坐臥悉く那人の運作といふ意。

【要解】本則は大分長いが一言に云へば能思の心と所思の境と相對して如何なるか是れ心、如何なるか是れ境と究め來れば心は不可得、境は無自性である、畢竟無自性不可得のところに回光返照せしめんとするのが仰山爲人の目的である。お前は甚麼の者だ、僧は幽州の產です、故鄉の事を思ふか、ハイ思ひます、是までは僧には通常の問答であるが、仰山にはチヤンと計畫が有つての試問である。其の能思のはお前の心で、所思のは幽州といふ境である、其の境の中には山河もあらう、大地もあらう、樓臺もあらう殿閣もあらう、人間も居らう畜生も居やう、其の思ふといふ心を反省して見よ、其の能思の心裏には許多般があるか、某甲這裏に到つては總じて一物の有るを認ませぬ。デハ和尚其の見解は信位では是といふことが出來るが、人位ではまだ〳〵是と許すことは出來ぬ。別に何か御指示下さることが有りまするか、有るとも有るとも、無いと云はゝ卽ち中らず、無くて叶はぬことぢや。汝の見處は重玄といふところにはまだ到つて居らぬ、ホンの一重の玄關に入り込んだ計りである、ドツカと端坐して箇の非思量の端的を功夫するが好い、爾うしたらば自から兩重の關を透得して初めて絕後再甦の活計を得ることが出來る。萬松の謂ゆる困魚忽ち龍と變じて大海に優游し、鈍鳥頓に鶴と化して天空に飛鳴するの自由を得るで有らう。

【著語】□門を閉ぢて刷會す。刷會は尋究の義、來客があれば門を開けて請じ入れ、本日は甚麼處からと尋ねるのが仁義道中である。□公驗明白。幽州の人だから幽州人といふ、正直なものだ僞る氣が無い。□恰も忘了を待つ。來處を忘れて了うのを待ち設けて居るやうだが、故鄉は忘じ難し、仲々忘れられるもので無い。□熟處忘じ難し。自分の持ち前、生生世世の生れ故鄉、思ふのも無理は無い。□元來更に能所を立つ。元來能所の無い處を態々能思の心、所思の境を立てゝ此の僧を接するつもりと見える。□仁者自ら分別を生ず。仰山御自身に分別に涉つて居る。□猶ほ這箇あり。總に有ると見ずといふ、其許に一物を認めて居るでは無いか。□庭前の殘雪は日輪に消すべし、室內の紅塵は誰をしてか掃はしめん。外庭の掃除は他人にも出來るが、內心の拂拭は自分でするより仕方があるまい、自己の胸中を清淨にすれば外境も亦自から潔白になる道理がある。□便ち恁麼にし來る。左う來るだらうと思つて居たら案の狀やつて來たナ。□兩重の關を射透す。別有別無と云はれるが其の兩重關は遠うの昔しに射得し了れりぢや。語の底意は仰山の此の一語で僧の有無兩關を貫通したといふ意を含む。□已に舡中の月を得。一玄を得たるは已に舡中に月を載せ得た風情は有るが。□更に帆上の風を添ふ。月を載せた丈けでは船は行かぬ、向後自ら看る底の風を帆上に添へて始めて自由の航海が出來る、此の二句は一聯で第六則にも出て居た。自己の光明は本より圓にして、風流ならざる處また風流ではあるが、串錦の老漁市に就かんこと

を懐ひ、飄々として一葉浪頭に行くも亦妙ではあるまいかといふ意に續けて見る方が面白い。

頌云。無外而容（大無不包）無礙而冲（細無不入）門牆岸岸（莫探頭好）關鎖重重（不消彈指）酒常酣而臥客（喚醒來打）飯雖飽而積農（一坑埋卻）突出虚空兮風搏妙翅（穿開碧落天）踏翻滄海兮雷送游龍（驚蟄二月節）

【讀方】外るゝこと無うして容れ、礙ること無うして冲る。門牆岸々、關鎖重重。酒常に酣にして客を臥せしめ、飯飽くと雖も農を積す。虚空に突出して風、妙翅を搏たしめ、滄海を踏翻して雷游龍を送る。

【字義】◎岸々は高く屹ゆる貌。◎重重は堅牢なる貌。◎酒常酣而臥客とは法華五百弟子授記品に「譬へば人あり親友の家に行きて酒に醉ひて臥す、此時親友官事ありて行くに當りて無價の寶珠を以て其の衣裏に繫く、其の人醉ひ臥して覺知せざるが如し」とあるより出づ、人々本具の寶珠其衣裏にあるを覺知せぬに喩ふ。◎飯雖飽而積農とは已に一玄の飯に食ひ飽きながら便々たる向上の腹鼓をうつのみで何等卻來の活動をなす事を知らぬ痴漢をいふ。◎妙翅とは金翅鳥の翅、金翅鳥は兩翅を開けば三百三十六萬里、頸に如意味があつて、生龍を以つて食とするといふ。其の驚天動地なる大活動は、本分を證驗した那人の活作略に比すべきである。

【要解】初の三句は能思の心、次の二句は所思の境、中の二句は信位、末の二句は人位を明す。心の廣大なることをいへば容るゝに外るゝこと無く、冲るに礙ゆること無しで山河大地樓臺殿閣は愚かなこと、大には方所を絕し細には無間に入る、地獄から佛界まで皆能思の心中に漏るゝものは無い、境の上からいへば門牆岸々寄り附くことも出來ぬ、關鎖重々手もつけられ無い、けれども門牆岸々のまゝ容れて外れず、關鎖重々のまゝ冲でゝ礙りが無い、能所一致心境雙忘で從來二つものが並んで居るのでは無いのぢや。然るを若し信位に住著するならば酒酣にして客睡り、飯に飽いて農は積ると云ふが如き慘狀に陷つて仕舞ふ、悟の上の死漢となつて最早や精進するといふことが無くなる、故に更に進んで人位に到るがよい。人位は能所心境ともに大自在を得ること恰も妙翅鳥王が虚空に突出して風に搏つが如く、游龍が滄海を踏飜して雲雷を送るが如き大活動を現成することが出來るのである。上は毘盧頂を驀過するの見識もあれば、下は三途六道に輪廻して衆生を敎化するの力量が必要である。謂ゆる一玄を得たる境界も結構だが此に死在せず得坐披衣向後自から看る底の大伎倆を獲得せよと天童の全力を擧しての頌出である。

【著語】口大として包ねざること無し。能思の人は宇宙を丸呑みにしても咽喉に支へぬ。口細として入らざること無し。微細を嫌はぬ。口探頭なること無くんば好し。探頭は頭を突つ込むこと。門牆岸々の處へ頭を突つ込んだら容易に拔けまいぞ、要心さつしやれ。口彈指を消せず。消せずは用ゐずに同じである。彈指して門を開いたといふ故事があるが、此の門は遠に開いてをる、

今更ら彈指するのはチト遲からうせ。□喚び醒し來れ打たん。酒に醉つぱらつて晝日中睡臥つて居るとは不屆き奴だ、喚んで來い、山僧胴骨を打ち折つてやらう。□一坑に埋却せん。死人同樣の土百姓なら地下千尺に埋めてやれ。□碧落の天を穿開す。大した勢ひぢや、碧天を突き破つて仕舞ふかも知れぬ、目の鞘はづして能く見よや。□驚蟄二月の節。二月の雷鳴を聞いて蟄居してゐる蟲が驚いて戸を啓いて出て來る。故に啓蟄の節といふ。此の雷聲には大千世界一時に驚起するだらうよ。

第三十三則　三聖金鱗

示衆云。逢強即弱。遇柔即剛。兩硬相擊必有一傷。且道如何廻互去。

【讀方】衆に示して云く、強に逢うては即ち弱、柔に遇うては即ち剛。兩硬相擊てば必ず一傷あり。且らく道へ如何が廻互し去らん。

【字義】逢強即弱云々の句はもと六韜三略から出た語で戰略上の秘訣である。泐潭善清禪の語に「或る時は強に逢うて即ち弱、或る時は貴に逢うて即ち賤」とあるから造語したもので有らう。◎廻互とはわきわたることで、兩方へうまくそりを合はせて衝突を來たさぬをいふ。

【要解】強者に逢うて柔弱に、柔軟に遇うて剛勇に出るといふことは敵一倍の力が無くては出來ぬことである、強弱剛柔ともに施すべきところがある。其の敵手を看破するのが宗師家たる者の本分で柔を以て剛を制し強を以て柔を制するを大機大用と稱するのぢや。茶碗と茶碗と打つければ必ず破れる、其れでは茶碗の用を爲さぬ、師資の道契ひ、機緣相熟するは強弱相和し、剛柔宜しきを得るからのことである。其所を人境相應して廻互し宛轉してゆくといふことが參禪學道の上に最も大切なことであるが、サー座下の諸人何と其の轉機が有るか怎うぢや。無くんば眼を据ゑて三聖と雪峰との會見を拜するがよからう。

擧。三聖問雪峰。透網金鱗未審以何爲食（不待垂綸自上鈎）峰云。待汝出網來向汝道（逢人且說三分話）聖云。一千五百人善知識話頭也不識（靈山授記也不似今日）峰云。老僧住持事繁（腦後見腮）

【讀方】擧す。三聖雪峰に問ふ、網を透る金鱗未審何を以てか食となす。峰云く、汝が網を出で來るを待つて汝に向て道はん。聖云く、一千五百人の善知識、話頭だも識らず。峰云く、老僧住持事繁し。

【字義】◎三聖の傳は第十三則に出づ。◎雪峰の傳は第二十四則に詳し。◎金鱗は金光燦たる鱗を

持つた大魚、潑剌たる法身の現成をいふ。◎善知識とは華首經に「四法あるはこれ善知識、一は能く人をして善法中に入らしむ、二は能く諸の不善法を障礙す、三は能く人をして正法に住せしむ、四は常に能く隨順して敎化す」とあるが豈啻に四法のみならんや、眞箇の善知識は一切萬法一として具せざるはない。◎住持とは事苑に「人に籍つて其の法を持し、之をして住して泯びざるを求めしむ」とある。一山の主をいふ。

【要解】三聖は臨濟で悟つたばかりの極めて鼻息の荒い語氣で雪峰に一問を撈著した。汾陽の十八問中でいへば呈解問である。經師論師のいふ大小半滿の網も目も、禪師作家のいふ迷悟凡聖の羅網も疾くに拔け出で、佛海禪河の波濤も昔しに躍り超えて格外越格の金鱗巨鰲が此に現れた、言句名字の邪命食は勿論のこと、寂滅無爲の正命食すら振り向いて見やうともせぬ、それぢやと云つて一向飲み食ひせずにも居られまい、未審何を以てか食とせん、何を食つたものか、雪峰御存じだらう、何とか御挨拶が願ひ度いものだ。雪峰は平氣で今の中から食物の心配は御無用だ、汝が其の一機一境の網を出て來たら其の時言つて聞かせませう、柔しい詞でグット恢々たる網を頭から引つ被せた。三聖此に於て雪峰は一千五百人の衆を領する大善知識で居ながら祖師門下の話頭法も御存じ無いのか、サテ〳〵氣の毒な者よと、再び被せられた網をグットはね退けて刧外に超出したは流石に臨濟仕込みの三聖である。雪峰云く住持事繁し、多數の衆僧を世話する住持職のことぢやで老僧は繁忙でツヒ佛祖門下の話頭は忘れて仕舞つた、マー禿頭に對して免さつしやれ、ノーお若い僧といふ調子である。萬松の言ふ通り強に逢うて弱、柔に遇うて剛、三聖と雪峰とは思ひ切り其の極端を發揮して而も圓滿なる解決を告げた、是れ一に雪峰老漢の三聖を化するに妙を得たるが故である。

【著語】口綸を垂るゝことを待たずして自ら鈎に上る。　絲綸を水中に垂れぬうちに自分で上つて來てるぢや無いが、自分の言句それが鈎で何か好餌が臭うてゐるやうだ。口人に逢うて且らく三分の話を說く。　十分の處を三分計り言つて置けば間違ひは有るまい、餘りいふと臟腑までも見拔かれる。口靈山の授記も也た今日に似かず。　靈山會上での如來の授記も今日ほど丁寧では無かつたらう、三聖仲々立派な記別を與へて居るワイ。揚げたやうな抑へたやうな語だ。口腦後に腮を見る。爪牙を露さぬ獅子のやうで仲々油斷のならぬ語だ。柔弱そうなことを口では言つてるが、どうやら眼睛が底光りしてゐる。雪峰を讚歎しての著語らしい。

頌云。浪級初昇雲雷相送（恨天不到）　騰躍稜稜看大用（遙禮三拜）　燒尾分明度禹門（急著眼看）　華鱗未肯淹蟄甕（更有係黑）　老成人不驚衆（妥妥帖帖 穩穩當當）　慣臨大敵初無恐（受辱如榮 視死如生）　泛泛端如五兩輕（遠觀不審）　堆堆何啻千鈞重（近觀分明）　高名四海復誰同（天上揀月）　介立八風吹不動（恰似不會）

【讀方】浪級初めて昇る時雲雷相送る、騰躍稜々として大用を見る。尾を燒いて分明に禹門を渡る、

華鱗未だ背へて齏甕に淹せられず、老成人衆を驚かさず。大敵に臨むに慣れて初より恐るゝことなし。泛々として端に五兩の輕きが如く、堆々として何ぞ啻千鈞の重きのみならんや。高名四海復た誰か同じうせん、介り立つて八風吹けども動せず。

【字義】◎浪級とは支那絳州龍門山に禹門といふのがある、民が洪水に苦しむのを憐れんで禹王が開鑿して海に通じた所、浪が三級になつて居て鯉が之を超えて龍門に達すれば龍となることを得る、然らざれば又頭を點じて廻ると傳へらる、浪級とは其の水の三級になつた所をいふ。◎稜々は催從嚴偉の貌とあつて威く勇しい樣子。◎燒尾とは鯉が浪級を躍り超えて龍門に登り化して龍となる時、雷爲に其の尾を燒くとある。◎淹齏甕とは「洛浦臨濟を辭す、濟云く、臨濟門下に箇の赤稍の鯉魚あり、頭を搖かし尾を擺て南方に向つて去れり、誰が家の齏甕に向つてか淹殺されん」と、齏甕は漬物桶のことである。三聖は雪峰によつて齏甕に押込めらるゝことを免かれたといふ意。◎五兩の兩は支那の重量のことで前に出た。

【要解】初句より第四句に至るまでは三聖の機鋒を頌し、第五句以下は雪峰を讚歎す、其の中、末の二句は特に其の老成絕倫なることを賞めたのである。鯉が禹門の三級を登る時雷が扶けるやうに網を透る金鱗、波濤を蹴つて頭角を現すと、雪峰が網を出で來らんことを待つてと雲雷に一層の威勢を添へた、其許で更に勇氣を鼓して話頭も也た識らずと怒濤を騰躍した三聖の大用は見上げたものである。モー一つ言つて見れば雷火に尾を燒いて仕舞つたから誰が見ても立派な龍だ、以前の樣に奇麗な緋鯉ぢやなどゝいつて硝子壜に入れて置かれるやうな窮窟を見ずともよい。佛にも祖にも御世話をかけぬ三聖の機輪を賞めた。此の元氣ある三聖の若武者に比べて雪峰は實に法中の老將軍である、老成の人である。衆に對して驚かず騷がず、百萬の大敵一時に攻め寄するも平氣の平左でイザといふ時まで煙草を燻らしてゐて、ソレツといふと一時に小奇麗に片附けて仕舞ふ、實に慣れたものである。其の手輕さを言つて見ると鷄の羽のヒラ〱したのを二三枚片付けるが如くであるが、御本人はと云ふと千鈞の弩のやうで推せども曳けども動かばこそ、恰も堆々たる太山のそれに似て不動著、根が地のドン底から生えてゐるやうだ、動かぬも道理ぢや、高德名望、四海五湖の間に誰れ知らぬ者無く又齊肩の人とても無い、それほど功名利欲の風が八方から吹き搖さんとしても、安住して動かざること須彌山の如くにして毫も動搖しない、仰げば彌高く鑽れば彌堅きは實に雪峰住持事繁しの高風であると、天童は語を極めて贊頌した。

【著語】□天の到らざるを恨む。英氣に任せて天をも衝かんとする、程加減を知らぬと鼻を挫くぞ。□速禮三拜。どうもお偉いことぢや、萬松も其のまゝ三拜かな。□急に眼を著けて看よ。尾がスツカリ燒け落ちてゐるか知ら、食はせ物では無いか、天童よく氣をつけて御覽よ。□更に侯黑あり。三聖は齏甕に淹されぬと譽めるが、其れを酢につけやうとする人が一層上は手では無いか、上には上の人が必要だ。□妥々帖々、穩々當々。妥々は安逸、帖々は落ちつく、穩々當々はおだやかで別に變つたことも無いといふ意。老成人だから無事安穩、大した怪我もあるまい。□辱

を受くること榮の如く、死を視ること生の如し。少しも恐れぬ有業、榮辱死生なんどいふことは毫も念頭に無い。□遠く觀れば不審。近視眼のやうに遠くでは薄ぼんやりでハッキリせぬ。□近く觀れば分明。成る程近くへ寄つて見れば何でも分明に觀へる。遠は語、近は理をいふ。□天上に月を揀ぶ。揀ぶにも揀びやうが無い、天上には一月しか無いのだもの。□恰も曾てせざるに似たり。丁度風の吹かぬ前と同じだ、風が吹いても吹かんでも同じだから曾初のまゝ天に聳えて居る、實に氣高いものだ。

第三十四則　風穴一塵

示衆云。赤手空拳千變萬化。雖是將無作有。奈何弄假像眞。且道還有基本也無。

【讀方】衆に示して云く、赤手空拳にして千變萬化す、これ無を將て有と爲すと雖も、奈何せん假を弄して眞に像ることを。且らく道へ還つて基本ありや也た無しや。

【字義】◎赤手の赤とは「空盡にして物無きを謂ふ」とありて空手の事をいふ。空拳も又同じ。

【要解】師家が學人を接するには赤手空拳で小兒を誘ふと同じことである。身心脫落した人だから無手にして執捉もしやう、無足にして往來もしやう、千變萬化毫も妨げない。もと空拳赤手の無から出た有ではあるけれども、それでチャンと假の方便を戲弄しながら眞實を顯はしてゐる、そこが卽ち眞空妙有で眞實の空で無くては妙有と現成はしないのである。師家の手許に何か妙有と現成させるだけの基本があるので有らうか。實際に赤手空拳の接化を蒙り度くば風穴一塵の公案に參ずるが宜しい。

擧。風穴垂語云。若立一塵家國興盛（本有得之）不立一塵家國喪亡（本無失之）雪竇拈拄杖云（不立是立）還有同死同生底衲僧麼（不道無只是少）

【讀方】擧す。風穴垂語して云く、若し一塵を立すれば家國興盛す、一塵を立せざれば家國喪亡す。雪竇拄杖を拈じて云く、還つて同死同生底の衲僧ありや。

【字義】◎風穴の傳は第二十九則に出づ。◎立一塵、不立一塵とは一塵は一心、一法、一物をいふ、立を建立門とすれば不立は掃蕩門である、前者は偏位、後者は正位と見ても宜しい。◎雲竇の傳は第二十六則に出てゐる、◎同死同生とは死生を同うする大機用をいふ。◎拄杖とは毗奈耶に「佛拄杖を蓄ふるを聽すは二つの因緣あり、一には老瘦力なき爲に、二には病苦にして身弱きが爲に」とあるが後世師家の之を用ゆるは必しも其の爲ばかりではない。今は法具の一として用ゐられてをる。

【要解】風穴垂語の的意を言つて見ると先づ一塵を立するとは山は突兀、海は漫々、拄杖は長く拂子を短しと法法位に住して世間相常住、少しも其の間に是非を容れ無い、春になれば花が咲く、秋

になれば果を結び、家國興盛で自然法爾として繁茂し榮えてゆく。一塵を立し無い上から云へば諸法皆空で佛とは何ぞ衆生とは何ぞ、生死も迷悟も、煩惱も菩提もスッカリ取り擧げて仕舞ふ、此の時は家國喪亡と云はねばなるまい、有らば與へん無くば奪はんの道理で有の上からは錦簇々花簇々世界は博覽會のやうに殷賑だが、無の上から云へは塵一本、芥子粒一つ見當らない、實に破家散宅喪亡すべき國家も無い訣である。一塵とは何であらう、何か手品の種のやうだが是れを研究して見ねばならぬ。雪竇が此へつけ込んで持ち合せの拄杖を拈出した、立と不立と、正と偏と、興と亡と、どちらへか傾きたがるのが凡夫の常だから、雪竇は之を憐んで唯一本の上に風穴の兩頭に渉る垂語を拈じ上げて仕舞つた、正にも墮せず偏にも墮ちず、而も正偏自在、或る時は立と現じ或る時は不立と現じ、興亡盛衰、有無與奪、自由自在に活動するの大機大用ある拄杖ぢや、此の拄杖と死生を同うする底の活衲僧が有るか怎うだ、雪竇と同生同死するほどの漢ならば風穴の一塵ぐらゐは自由に捌きがつくで有らう。

【著語】　口之を得れば本有。口之を失すれば本無。　立て、眼に玄黃の色を見ず、耳に絲竹の聲を聞かず、其の儘ソックリ無よ。口是れ立か不立か。　滿更ら無も仆しても拄杖は一本よ、妙に拈弄すともよからう。口無しとは道はじ、只是れ少し。　滿更ら無いとは言はぬがマー少いね、千人に一人か萬人に一人だらうよ。サテ其の一人は誰だらう。

頌云。皤然渭水起垂綸　老不歇心　何似首陽清餓人　少不努力　只在一塵分變態　拈起柱杖云看　高名勳業兩難泯　放下拄杖云雪竇猶在

【讀方】　皤然として渭水に垂綸より起つ、首陽清餓の人に何似ぞ、只一塵に在つて變遷を分つ、高名勳業兩つながら泯じ難し。

【字義】　◎皤然とは白髮の形容、然は助字である、畢竟老人を言ひ表はす語である。班固の語に「皤々たる國老云々」とある。◎渭水とは史記齊太公世記によれば西伯卽ち文公が賢人を得て國を治めんとし、之を野に求め渭水の陽で漁人呂尙に會し、其非凡なのを見て卿こそ我先君太公が望んで居られた賢人であるといつて强ひて釣漁を捨てさせ、太公望と稱して重用したとある、垂綸より起つとは呂尙の方から云つたのである。◎首陽清餓人とはこれも史記評林六十一伯夷傳に詳しい。「伯夷叔齊は孤竹國君の二子なり、國を讓つて倶に亡ぐ、武王紂を伐つや馬を叩いて諫めて云く父死して葬らず、爰に干戈に及ぶ、孝といふべけんや、臣を以て君を弑す仁といふべけんや、左右之を兵さんと欲す。太公が曰く、此れ義人なりと、扶けて之を去らしむ。武王殷を平げ天下周を宗とす、夷齊恥て周の粟を喰はず、薇を採つて首陽に餓死す」と、伯夷叔齊は實に清餓の人である。太公望を立一塵と見れば此の二人は不立一塵と見らるゝから此に引例たのである。

【要解】　第一句に呂望が周を佐けて國を興したといふ例を擧げて興盛、第二句に夷齊が周に背いて

餓死したといふ例を擧げて喪亡を頌し、第三句第四句には一塵の變態が能く會得出來れば彼もよし此もよし、餓死の高名と興國の勳業と兩つながら泯滅するには及ばぬ、不離不卽なる自由の境界を得ることが最も肝要ぢやと結んだのである。

【著語】口老いて心を歇めず。　太公望の爺さん年は老つても浮氣は止まぬ、其の浮氣といふのは自利々他の道樂だらう。　口少うして努力せず。　伯夷叔齊は若い身柄で首陽山で青い糞をたれて餓死するなんぞは意氣地が無い、勉强が足らぬ、修養が不足ぢや。　口拄杖を拈起して云く看よ。　萬松も太い長い黑い拄杖を擔ひ出した、名々も持ち合せだ、それ看よと一つ出して見せては奈何だナ。　口拄杖を放下して云く雪竇猶ほ在り。　拈起した拄杖をスポリと抛げ出した。　雪竇猶ほ在り、獨坐大雄峰といつたやうな氣合だ、拈起するも放下するも拄杖は一本よ、持ち合せの拄杖を放下することは易いが、持ち合せの無い拄杖を放下することは難い、ソコを一つ放下せねば眞に拄杖を拈弄するとはいへぬ。國家を興すも亡すも此の拄杖を拈放する其の手裡にあるのぢや。

第三十五則　洛浦伏膺

示衆云。迅機捷辯。折衝外道天魔。逸格超宗曲爲上根利智。忽遇箇一棒打不廻頭底漢時如何。

【讀方】衆に示して云く、迅機捷辯、外道天魔を折衝し、逸格超宗、曲げて上根利智の爲にす。忽ち箇の一棒に打てども頭を廻さゞる底の漢に遇う時如何ん。

【字義】◎迅機捷辯とは迅速なる機略、敏捷なる辯舌をいふ。◎折衝とは高誘の呂氏春秋の註に「折とは前敵を折挫す、衝とは鋒鋭を衝突す」とあつて突き挫くことである。◎天魔は蘊魔、煩惱魔、死魔、天魔等、四魔と稱せらるゝものゝ一、◎逸格超宗とは格式格量を逸出し、佛邊祖邊を超越したこと、畢竟自由無礙の活作略あるをいふ。

【要解】師家の機略の迅速なること疾風の如く、辯舌の敏捷なること電光の如くで有つて、此の迅機と捷辯には外道でも天魔でも一棒一喝で降參して仕舞ふ、此の逸格超宗、拔群の宗師家も强ひて上根利智の爲めには種々の善巧を用ゐて接化もせねばならぬ、然しながら此の熱棒を頭上に加ふるもピクとも爲ない底の漢が有つたならば何と接得したもので有らうか、佛祖も禮拜せず、閻羅獄卒をも恐怖ぬといふ人物を接するには如何なる方便を用ゐたならばよろしからう。其の實例が見たくば夾山の洛浦を度する手振りを拜見するがよい。

擧。洛浦參夾山。不禮拜當面而立（相逢不下馬、各自有前程）山云。鷄棲鳳巢。非其同類。出去（一手推、一手拽）浦云。自遠趨風。乞師一接（探竿在手）山云。目前無闍黎。此間無老僧（影草隨身）浦。便喝（盡筋力）山云。住住。且莫草草怱怱（會者ハ）

（不忙忙者不會）雲月是同、溪山各異。（斜街暗巷、生客頭迷）截斷天下人舌頭、即不無。（只見）

（錐頭利）爭教無舌人解語。（不見盤頭方）浦。無語。（長蛇陣前、弓梢撲地）山。便打。（不意夾山卻作臨濟）浦。

從此伏膺。（藝歷當行）

【讀方】擧す。洛浦、夾山に參ず、禮拜せずして面に向つて立つ、山云く、鷄鳳巢に棲む其の同類に非ず、出で去れ。浦云く、遠きより風に趁る、乞ふ師一接。山云く、目前に闍黎なく此間に老僧なし。浦、便ち喝す。山云く、住ね住ね且らく草草怱怱なること莫れ、雲月是れ同く溪山各異なり。天下人の舌頭を截斷することは即ち無きに非ず、爭でか無舌人をして解語せしめん。浦、無語。山便ち打つ。浦此れより伏膺す。

【字義】◎洛浦は澧州洛浦山元安禪師のことで又樂普ともいふ、夾山善會禪師の法嗣である、景德傳燈錄卷十六に、洛浦は鳳翔麟遊の人、姓は淡氏、二十歲にして出家し、道を翠微臨濟に問ひ、後夾山に參ず、澧陽樂普山に之いて宴處を卜す、後朗州蘇溪に遷止し、唐の光化元年（皇紀一五五八）十二月二日示寂、壽六十五」とある。◎夾山は澧州夾山善會禪師のことで景德傳燈錄卷十五に「廣州峴亭の人、姓は廖氏、九歲出家し同年戒を受け經論を聽習し三學を該練る、後偶ま道吾の敎によりて淛中華亭縣に至り船子和尙に參じ、師資道契す、唐の中和元年（皇紀一五四一）十一月主事を召して曰く、吾今幻質時に盡き、即ち去る、汝等善く保護してわが在りし日の如くし、世人に雷同して惆悵を生ずるを得ること勿れと言ひ訖つて夜に至つて奄然として逝く、壽七十七、勅謚して傳明大師といふ」と。◎乞師一接とは一度接得が願ひたいといふ意。◎闍黎とは寄歸傳に「梵語阿遮梨耶唐に軌範といふ。今闍黎といふは蓋し梵語の訛傳なり」とあり、又菩提資糧論に「阿遮梨耶とは隋には正行といふ。能く弟子の行を糾正する故に」とある、僧に對する敬語で此處ではお前といふ程の意。◎雲月是同云々とは雲や月は同じでも見る所の位置即ち山上で見ると溪谷で見るとは自から趣を異にするといふ文意。◎伏膺とは中庸に脊々服膺と熟字し註に「服は著くる、膺は胸なり、奉持して之を心胸の間に著く、言能く守る也」とありて常に身に體して忘れぬこと。

【要解】洛浦は臨濟門下の一隻箭といはれた人である、其の人が今夾山の處に行つて相見の拜もせずに當面にニユーツと寄つ立つた。傍若無人の振る舞ひだ、まだ我慢骨が折れて居ないらしい、ソコを見て取つた夾山は鳳巢へ鷄が舞ひ込んだ、鳳凰と群鷄と同棲が出來るものか、サツサと出て行つて貰ひませう、可也輕蔑した語だが、眞實鳳凰か群鷄か、鳴聲を聞いて見やうといふ手段である。今度は洛浦も下位に、イヤ遙々遠方から貴僧の高德を慕つて參つた者で御座る、何とか一つ御示しに預り度いと猫撫聲を出した、仲々油斷のならぬ男ぢや。其許に御公も居らぬ、此處に老僧も居らぬ、第二人無き當處に於いて一接とは何をいふのか、度せんと欲するに衆生無しで、接する者と接せらるゝ者と對待を認めて御座るかの。こゝで洛浦は大喝一聲した、其の一聲は鳳凰の聲らしくは

無かつた、軍鷄の茶をわかすやうな啼き音である。夾山誡めて云く其んなうか〳〵としたことでは眞實修行が出來るものでは無い、お止め、お止め、聳公と老僧とは雲月相同じく對話をして居るやうでも其の立場は山の絕頂と溪邊ほど異つてゐるぞ、其の見識で威張つて步けば天下人の平凡者流には一言を吐かしめぬぐらゐのことは出來やうが、眞箇に舌根を截斷して大解脫人の境界には遠うして遠うしだ、モウ少し眞面目に說默自在底の人と成つて欲しい、サーどうだ、此に於て一言道ひ得るかナ。洛浦無語、意氣頓に銷沈、以前のカラ元氣は何處へやら、確かに膝に手をつき、頭を挽首れて二三滴の時雨さへ見える樣な氣色だ。此の儘で置いては姑息に落ちる、便ち迅機さしおかず一棒を見舞つた、臨濟の棒と是れ同か是れ異か、自他一枚、有無一色の棒頭である。洛浦此れより服膺、夾山の婆心肝に銘じ、遂に我慢骨が折れた、胸中の障礙がカラリと晴れた。

【著語】口相逢うて馬より下らざるは各自に前程あればなり。互ひに相下らないのは名々に見識といふ前途があるからのことよ、見識に礙へられてゐるらしい。口一手は推し一手は拽く。片手で推し出し、片手で引つ張り込む、是れも慈悲の餘りさ。口探竿手に在り。猫撫で聲の裏では頻りに爪牙を砥いでゐる。チヨツと探りを入れたのだらう。口影草身に隨ふ。夾山も亦藁人形を使つて對者の五臟六腑を引き拔かうとしてゐる。口筋を盡し力を截る。力限り精一杯の奧の手を出した。口會者は不忙、忙者は不會。會得た人は忙てない。騷ぐところを見ると會得てゐないナ。口斜街暗巷、生客頭迷ふ。土地のことに眞暗な人は路頭に迷ふといふことで、飛彈の山の中の人が始めて東京の須田町か小川町に來たやうで、狼狽ること夥しい。平等の理に達せぬから對待の街路に間誤つくのだ。口只錐頭の利を見る。錐の尖の銳利なることは知つてゐても。口鑿頭の方を見ず。鑿の尖の角なることを知らねば十方通暢で無い、一方むきの擔板漢だ。

次の著語と二句一聯。此の二句は長髭禪師の語である、口長蛇陣前、弓梢撲地。撲は盡きること、地は助字、戰線を長く張つて交戰中に弓箭が盡きて仕舞つた。今は言句の弓折れて、敵に一矢を報ゆるの元氣無しだ。口意はざりき夾山、却つて臨濟と作らんとは。便ち打つ手際は臨濟そつくりだ、臨濟が夾山に乘り遷つたのかナ、臨濟と夾山と第二人無き手段を賞めた語。口藝は當行を壓す。洛浦は普通の藝人だ。夾山は妙に達してゐる、だから服從するのが當然で早く其許へ氣付けばよかつたに少し遲かつた。當行は、當興行といふこと。

頌云。搖頭擺尾赤梢鱗（口食香餌身掛網羅）　徹底無依解轉身（今日拽在網底）　截斷舌頭饒有術（君方掃雪尋松子）　拽廻鼻孔妙通神（我已開榛得茯苓）　夜明簾外兮風月如晝（不借三光勢）　枯木巖前兮花卉常春（潛爲消色功）　無舌人無舌人（鼻孔裏正應諾）　正令全提一句親（暗裏抽橫骨）　獨步寰中明了了（眞光不耀）　任從天下樂欣欣（紜紜自彼於我何爲）

【讀方】頭を搖かし尾を擺ふ赤梢の鱗、徹底無依轉身を解す、舌頭を截斷して饒ひ術あるも、鼻孔を拽廻して妙に神に通せしむ。夜明簾外風月晝の如し、枯木巖前花卉常に春なり。無舌人無舌人、正令全提一句親し。寰中に獨歩して明了了、任従天下樂んで欣欣たることを。

【字義】◎赤梢鱗とは尾の赤い鯉をいふ。梢とは「船の梶尾なり」とある。◎拽廻鼻孔とは鼻をねぢ廻すること。◎正令全提とは佛法の正令を全體提露すること。解前に詳し。◎寰中とは天子直轄の地、畿内をいふ。

【要解】初め二句に洛浦を頌し、第三句に假に洛浦の一喝を縱し、直に第四句に無舌の解語を擒にした。第五第六の二句で本地の風光を歌ひ、無舌人の層語以下は本分の衲僧が優游する無爲の王三昧を絶唱したのである。臨濟下の赤梢鱗と稱せられた洛浦は頭尾を搖擺して夾山に來た。悟りも仲仲徹底してゐて依止るところ無く、佛界魔界を超出する底の轉身の活路がある。其の一喝は天下人の舌頭を截斷するの術計が有るやうではあるが、夾山の爲に鼻孔を拽き廻されて回光返照、妙用神通の自由を得た、次の句に返照の當體を明して、夜明簾外は眞晝の如くに明るい、枯木巖前は花卉春の如くに咲き競うてをる。夜かとすれば晝、晝かとすれば夜、枯木かとすれば花が咲いてをる、花が咲いてゐるかと思へば枯木巖だ、これを刧外の春色といつて凡夫の妄想分別では測度の出來ぬ風月であり花卉である、本則の夾山の語を二度も丁寧に呼ひ出して無舌人無舌人、ドンナ廣長舌でも説けぬ無舌人の解語、其の一句こそ全提正令で、佛法全面の呈露である。天子の一天下に優游獨歩、天下第一人、これほど明了々のことは無い、一天四海好き放題に欣々として和樂に活動が出來る、誰も何とも故障をいふものが無いから遠慮も辭義も要つたもので無い、自由勝手に手を展べ足を伸ばすことが出來る。此の境界に安住すれば人々唯我獨尊で外に齊肩の者とては一人も無い、眞に目前に闍黎無く此間に老僧無しの天地が現成するのである。

【著語】□香餌を貪り身網羅に掛る。天童大いに賞めるけれども此の赤梢鱗はまだ〳〵食を貪る氣でヌラ〳〵出て來た、イヤまだ全身網を出てゐぬらしいぞ。餌を貪るから網が透れぬ。□今日網底に拽在す。徹底無依といふが現に此れ網の中に居るでは無いか、□君方に雪を掃うて松子を尋ぬ。次の著語と共に東坡が杜輿才の松を植うる法を學ぶに贈つた詩の語である。洛浦は雪を除いてまだ何か尋ねるものが有ると見える。舌頭を取り除いて無舌の語が有ると思つてゐるのか。□我已に榛を開いて茯苓を得。榛を開いて茯苓を得ても其れを得た跡方は殘つて居ない。□三光の勢を借らず。日月星の三光を借らぬ、自己の光明蓋天蓋地である。□潛に一色の功を消す。春秋の代謝にあづからぬ。開花落葉の榮枯に渉らぬ枯木花開の春色である。□鼻孔裏に應諾せよ。眞箇無舌人なる六根互融で、眼所に聲を聞き耳所に色を見ることも出來やう。□暗裏に横骨を抽づ。虎の口中には骨が一本横つてゐるさうだが、ソイツを暗かに抽いてやると嚥や奥歯にかゝるものが無くて清々する。□眞光は輝かず、明暗を超越した光明だ、明暗の眼では見えぬ。□紛紜は彼よりす、我に於いて何をか爲さん。大悟も公案も物好きな人に任して置く、我に於いて佛祖も

言教も何か爲ん。

第三十六則　馬師不安

示衆云。離心意識參有這箇在。出凡聖路學已太高生。紅爐迸出鐵蒺蔾。舌劒脣槍難下口。不犯鋒鋩試請擧看。

【讀方】衆に示して云く、心意識を離れて參ずるも這箇の在るあり、凡聖の路を出でゝ學するも已に太高生。紅爐迸出す鐵蒺蔾、舌劒脣槍口を下し難し。鋒鋩を犯さず試に請ふ擧す看よ。

【字義】◎心意識とは止觀輔行二に曰く「境に對して覺知し木石に異るを名けて心とす、心の籌量を名けて意となす、了了別知するを識となす」と、心作用の單純と複雜とによつて三樣に分つたのである。◎太高生とは太だ高尚で却つて危險多きをいふ、生は助字である、百尺竿頭に鬼眼睛を弄する底をいふ。◎鐵蒺蔾とは爾雅に「蒺蔾は地に布いて蔓生す、細葉にして子に三角ありて人を刺す、軍旅鐵蒺蔾を作つて敵路に布く」とある、俗にひし若くははまびしといつて沼池等に生へる、危くて寄り付けぬ草である、況して燒け爛れた爐から出た鐵蒺蔾といふのであるから危險極りない。超凡越聖の玄機は舌劒脣頭を以てしても說示することの出來ぬに喩ふ。

【要解】集起の心、思量の意、了別の識を離れたといへば大層偉さうだが其の離れたといふ這箇の一物が殘つてをる。六凡四聖の邊際を超出したといふのも同じことで太だ氣高すぎて空見に墮する。鐵蒺蔾を大火爐で燃燒て眞紅にして持ち出したならば誰れか手を著け得るものが有るか、劒の如き舌、槍の如き脣を有する天下の衲僧でも此に至ると口壁上、有とも無とも語を下すことは出來まい。言舌の鋒鋩を犯すやうな無調法な遣り口で無しに此の紅爐の鐵蒺蔾を自由に活用するに非んば佛祖門下の英靈漢とは許されない。其の離れ伎倆が見たくば本則について請ふ高く眼を著けて看よ。

擧。馬大師不安（未必似維摩。莫是轉筋霍亂麽）院主問。和尚近日尊位如何（常住事忙少得問候）大師云。日面佛月面佛

【讀方】擧す、馬大師不安、院主問ふ、和尚尊位如何。大師云く、日面佛月面佛。

【字義】◎馬大師の傳、第六則の條に出づ。◎不安とは不快といふ程の義、所謂四大不調をいふ。◎院主は今頃叢林でいふ副寺和尚である。◎日面佛月面佛とはいづれも『佛名經』の賢刧千佛の中に見える佛の名である。今は佛名に關係は無い、唯語の緣からして馬祖の口を銜いてヒヨツト出たまでゞある。日と月とが字眼で不變異のところに變異を示す意である。

【要解】馬祖道一大師が今日は四大不調で、方丈に休んで居られる、院主差し措かず御見舞に出掛

けた、此の頃は御氣分は如何ですか、大師の答ふらく日面佛、月面佛と、問答は是れだけだが、馬大師の病氣は凡人の疝氣や腦病で惱んで居るのでは無い、維摩の病氣と同じで只の不安では無さそうだ、馬祖計りで無く人人も一つ此の病氣に苦しんで見るがよい。院主の問候も亦權兵衞や太郎兵衞の御見舞とは異つて大いに馬大師の病原をみて取つての尊位如何んである。萬松の鋒鋩を犯さずといふのは此の處ぢや。日面佛月面佛は鐵蒺藜を紅爐に迸出したる有樣、分別でも思量でも及ばぬところである、日面月面は本來面目の換語、日月は晝夜でも風雨でも、頓と觸著せぬ、縱令四大に不安が有らうとも馬祖の光明は朝々東に昇り夜々西に沈む、毫も變異は無い、馬大師の兩眼晃々として兩面鏡を懸けたるが如し、觸るゝことも背くことも出來ぬ。そこに馬祖の大人格大境界が窺はれ無くてはならぬ。

【著語】口未だ必ずしも維摩に似ず。維摩の病氣が傳染したのだと思ふなよ、人の疝氣を頭痛に病むやうな馬大師では無い。大いに擬所を拂つた。口常住事忙うして問候を書き得たり。寺務の忙しいに紛れて御無沙汰がちで御座る。世間の仁義を述べて本分に響かしたのである。院主の常住法身が今日馬祖の光明佛を訪問したのだ。口是れ轉筋、霍亂なること莫しや。轉筋はこむらがへり、霍亂ははらくだり。マサカ其んな病氣でも有るまい。人人に其の病根を能く研究して見るがよからう。

頌云。日面月面（觀著スレハ即瞎ス）　星流電卷（已ニ過ク新羅ニ）　鏡對像而無私（一點モ難シ謾シ）　珠在盤而自轉（拏捉スレ不住マラ）　君不見鉆鎚前百鍊之金（瓶盃釵釧券盂盤）　刀尺下一機之絹（灸被衣冠襟領袖）

【讀方】日面月面、星流れ電卷く。鏡は像に對して私なし、珠盤に在りて自ら轉す。君見ずや鉆鎚の前百錬の金、刀尺の下一機の絹。

【字義】◎鏡對像無私云々とは胡來れば胡を現じ漢來れば漢を現じて毫末も昧ます處なき公平の作用をいふ。◎刀尺とは刀は鋏、尺は物指のこと、刀尺あれば一機の絹を左右するに昧ます處なし。

【要解】最初の二句は本則の體面を伸べ、次に鏡と珠とに譬へて照用を明す。君不見の傍句を以て大衆に啓告し、最後の二句に眞身常住の體と應身隨緣の相とを說いて日面月面の佛光明を頌してある。馬祖の日面佛月面佛は擬議を容れる餘地が無い、若しも分別に涉つて彼れの此れのと云へば流星の如く閃電光の如くスッと過去つて千萬里、驢年にも馬年にも其の佛光明に浴することは出來ぬ。日面月面其の儘に光明遍照よ、餘計な苦勞はせまいものぞよ。鏡ほど私無く像を照すものは無い、漢來漢現、胡來胡現、些しも昧すといふことが無い、珠の盤上に在つて轉ずる亦自然にして毫も彼を厭ひ此を求むる念とては無い、實に無罣礙にして轉ずる。これ卽ち日面月面の照用で佛祖の催促

でも神明の干涉でも無い、自然法爾の運轉自在である。座下の諸君、何と御覽じろや、鉆鎚鍛冶するも百鍊の金、常住眞身にして安住不動、刀尺寸斷するも一機の絹、隨緣應化するも元來一機佛の光明よ。馬大師一佛の不變隨緣で、或る時は不安と現じ或る時は日面月面と現じ、時に應じ緣に隨つて百鍊の金ともなり、一機の絹ともなつて照用自在の光明を放つて見せられた。此を諸人眼を放つて見ずやと天童に特に注意を促されたのである。

【著語】□覰著すれば卽ち瞎す。　見やうと眼を張れば目が瞎れて仕舞ふ、分別の眼では見えぬぞ。□已に新羅を過ぐ。　遲了八刻、ドーンと音がした時分にはモー煙火は消え失せた後よ。□一點も謾じ難し。少しも誤間化すわけにはゆかぬ、鼻毛の伸びたのまで映るのが鏡の德だ。□拏捉すれども住まらず。押へやうとて捉へられぬ。前念後念暫くも停住するといふことは無い。□瓶盆釵釧劵盂盤。　品形は異れど本源を討ぬれば同一心性といふ意、瓶は水瓶、盆は皿鉢、釵は簪、釧は指輪、劵は割府、盂は盃、盤は盥、金屬製の道具を並べた。□衾被衣冠襟領袖。慈悲の一心から千變萬化と隨緣する樣。夜着布團冠襟、頸襟兩袖、語默動靜執捉運奔の活動をいふ。

第三十七則　潙山業識

示衆云。驅耕夫之牛拽廻鼻孔。奪饑人之食把定咽喉。還有下得毒手者麼。

【讀方】衆に示して云く、耕夫の牛を驅つて鼻孔を拽廻し、饑人の食を奪つて咽喉を把定す。還て毒手を下し得る者ありや。

【字義】◎耕夫は農夫のこと。◎把定は締め付けること。この二句は後生大事に珍重してゐる一物を奪ひとつて眞個無一物ならしめる意である。

【要解】農夫は牛を以て生命とし、飢人は食を以て命根としてゐる、今其の牛を驅り出して鼻づらをねぢふせ、其の食を奪ひ取つて咽喉を締めつける。不動智を以て煩惱の妄分別を拽廻し、對待差別の二見を把定める是れ人情を以てするにあらず、眞實佛祖の命脈を相續させるには是れ位の接得をしなくてはダメだ。身心を放捨せねば眞の安心や生命は得られるもので無い。毫も人情に拘はらず眞實祖門下の衲僧を養成するの氣慨を以て其の腕力を振ふ宗師家が有るかどうぢや、其の毒手を被り度くは速かに潙仰父子の本則に參ずるがよからう。

擧。潙山問仰山。忽有人問一切衆生但有業識茫茫無本可據。子作麼生驗。（馬是官馬、不須印）仰云。若有僧來即召云。某甲（腦後一椎、不知來處）僧廻首（頂門上去却三魂）乃云。是甚麼（趁爐竈熱、更與一下）待伊擬議（脚板底鑽了七魄）向道。非唯業識茫茫。亦乃無本可據（生擒活捉）潙云。善哉（苦口出親言）

【讀方】 擧す。潙山、潙山に問ふ、忽ち人有りて一切衆生但業識茫々として本の據るべき無きありやと問はゞ作麽生か驗ん。仰云く、若し僧の來ることあらば卽ち召して云はん、某甲と、僧首を廻らさば乃ち云はん、是れ甚麽ぞと。彼が擬議せんを待つて向つて云はん、唯業識茫々たるのみに非ず亦乃ち本の據るべきなしと。潙云く、善いかな。

【字義】 ◎潙山仰山の傳は第十四則等に出づ。◎業識とは無明住地の煩惱をいふ、これあるが爲に本分の田地を徹見することが出來ないで茫々たる五里霧中に彷徨するのである。

【要解】 師匠の潙山が、弟子の仰山の接化振りを驗ん爲に此の問端を開いた、ヒョックリ人が來て一切衆生但だ業識茫々として本の據るべき有りやと問うたらば貴子は作麽生返答をするか。仰山云く若し其のやうな僧が來らばチョイとおいでと呼び寄せて置いて某甲といつてやる、僧がチョット振り向いたら乃で直ぐ甚麽ぞといつてやる、伊が擬議するすきを見込んで唯業識茫々たるばかりでは無い、亦本の據るべきところも無いぞよと道つてやりませう。潙山善い哉、上出來々々と賞めそやした。一切衆生といへば諸佛とは大層階級が異つてゐるやうだが生佛元來不二である、業識といへば煩惱妄想のかたまりのやうだが是れ亦煩惱卽菩提、無明の實性卽佛性である、して見ると何にも是れが本ぢやと言つて據るべきものが無いでは無いか、若し過つて佛に縋り衆生を撥ひ、煩惱を厭ひ涅槃を求むるならば、忽ち茫々たる三界六道の苦海に沈淪せねばならぬ。仰山は佛性も乾屎橛、業識茫々も諸佛の光明といふ大安心の下に僧を接化するのであるから師匠の潙山も北叟笑む道理である。故に某甲といつたり、甚麽ぞといつたりして自由に業識を活用して見せたのである、首を廻らす何者ぞ、擬議する是れ何者ぞ、何にも本の據るべきは有るまい、召したから頭を廻らす、是れ某甲の活作略よ。吾人の日常は業識茫々の活現成である、本の據るべき無しの運足轉歩である、自由自在任運優游の境界である。脚下五色の線絶えて百自由なる安樂を得て居るのである。

【著語】 □馬は是れ官馬、印を須ゐず。 既に極印づきの仰山だ、今更ら驗して見るにも及ぶまい。□腦後の一椎、來處を知らず。 不意に背後から喚ばれたので周章狼狽、來た場處も知るまい。□頂門上に三魂を去却す。三魂七魄といふことが『蠡海集』といふ書物に出て居るが此は只魄といふこと。喚ばれて氣が付かずば仰山に魂を奪はれて仕舞つた死人同樣ぢや。□爐竈の熱を趁ふて更に一下を與ふ。 喚べば首を廻らす、熱氣のまださめぬ、死にきつてをらぬ、こゝで一棒ピシャリ打ち殺してやるがよい。これは昔貧乏人が有つて隣舍の竈を借りて粥を煮さして貰つてゐた、或る朝のこと隣人の云ふには今焚た計りで爐がまだ煖い、疾く之を使へば薪がたんと要らんでよいといつた、貧乏人大いに怒つて熱消の消ゆるのを待つて飯を蒸したといふ故事から出たのである。□脚板底に七魄を鑚了す。 脚の下から七魄を拔かれて知らぬところを見ると全く死人も同然だ。□生擒活捉。捕へて見れば吾子なりで、業識も智慧も別物では無い、平生受用底の外には無いのだ。□苦口は親言より出づ。 親切極つた言葉は親切の口から漏れる。

頌云。一喚廻頭識我不（眞白拈賊、有甚難見）　依俙蘿月又成鉤（藏身露影）　千金之子纔流落（屛風雖破、骨格猶存）　漠漠窮途有許愁（小器不大量）

【讀方】一たび喚べば頭を廻らす我を識るや否や、依俙として蘿月又鉤となる。千金の子纔かに流落して、漠々たる窮途に許の愁あり。

【字義】◎依俙とは類書纂要に「依俙は髣髴なり、有るが如き、無きが如き貌」とあるから畢竟ハツキリせぬ樣子である。◎蘿月とは滿月のこと。◎成鉤とは片破月のことで、依俙は成鉤即ち片破月の形容詞である。◎千金子とは大福長者の子のこと。『法華信解品』にある長者窮子の譬喩から來た語である。

【要解】第一句は某甲、第二句は擬議のところを伸べ、第三句第四句に長者窮子の譬喩を擧げて回光返照、歸り來つて父に就くの意を頌じたものである。某甲と喚ばれた時にクルリと頭を廻したならば是れ什麽ぞといはれたが自ら其れを知つたか怎うぢや、識不識が著眼のしどころである。其の人であらば知でもよし不識でもよろしい、首を廻らすだけで擬議に渉ら無ければ其れが那人の消息だが、どうも擬議を免かれまい。チラホラ分別の雲がかゝつて來て折角の滿月が三日月となりかけた、ア、惜しいところで有つた、然し其の雲も本の據るべき無しだから、月の表に微かに叢雲のあるのも亦風情のあるものである。除けやうとせねば邪魔になるもので無い、取捨の念が邪魔になるのだ、以上の二句で本則は頌じ訖つた。一切衆生といふと賤しいやうだが本來根を洗つて見れば佛家の長者子で千金にも換へ難い總領息子である、それがフラ〳〵と宛處も無く漠々とさ迷ひ出したものだから流落窮乏見る影も無い狀態に成り下つて、食ふや食はずの愁を忍ばねばならぬことになつた。千金の子と零落の窮子との差別の生じたのは僅に分別擬議の一念に存して居る、如來の智慧德相を具有しながら缺け椀を持つて門に立つてゐたとは愧かしい話だ。回光返照れば直下に毘盧の頂𩕄を驀過することが出來る、本家鄕に立ち還れば誰れ憚らぬ長者の一人息子ぢやが、尙ほ此に一念分別の根基が截れぬと千刧萬刧三界に流落せねばなるまいぞ。業識に縛られず、業識を活捉て自由に運轉するの境界を得るのが肝要である。

【著語】□眞の白拈賊、甚の見難きことか有らん。天童は晝鳶だ識るや否やなど、仰山と棒組になつて泥つくをやる氣だナ。萬松其の手はくはぬ。□身を藏して影を顯はす。□藏るゝも露はるゝも一圓月ぢやらう、分別が蘿月となり鉤となるのだ。□屛風破と雖も骨格猶は存す。身なり姿は變れども千金の子の人品骨格は同じことを、生佛不二の道理をいふ。□小器は大量ならず。小器が大量を望むには一升桝に一斗は入らぬ、一升は一升、一斗は一斗、それが法爾自然である。及ばぬことよ。

第三十八則　臨濟眞人

示衆云。以賊爲子。認奴作郎。破木杓豈是先祖髑髏。驢鞍橋亦非阿爺下頷。裂土分茅時如何辨主。

【讀方】衆に示して云く、賊を以て子となし、奴を認めて郎と作す。破木杓は豈是れ先祖の髑髏ならんや。驢鞍橋は又阿爺の下頷に非ず。土を裂き茅を分つ時如何が主を辨ぜん。

【字義】◎以賊爲子とは楞嚴經第一卷に「佛阿難に告げたまはく、此は是れ前塵虛妄の相想、汝が眞性を惑はす、汝眞始より今生に到るまで賊を認めて子と爲るに由つて汝が元常を失ふ、故に輪轉を受く」とある、賊とは自家本具の家寶を奪うものをいふ、卽ち妄心を指す、妄心を認めて眞心と誤るをいふたのである。◎認奴作郎とは奴は奴僕、郎は主人、旦那。妄を認めて眞を誤る具體的例證。◎破木杓とは破損れた柄杓。◎驢鞍橋とは會元十一に谷隱蘊聰禪師の云く「驢鞍橋を認めて阿爺の下頷となすこと莫れ」とある、驢の乘鞍は幾干か老人の下頷に似て居ると見える、阿爺は、おやぢのこと。◎裂土分茅とは類書纂要十二に「茅土を分つとは、王者五色の土を封じて社となす、諸侯を建つるときは各々其方の色の土を割いて之に與へて社を立てしめ、燾ふに黃土を以てし苴くに白茅を以てす、茅は其の潔に取り、黃は王者の四方を覆うに取る」とあつて封土を分つて一方の宗主となることをいふ。

【要解】佛法の慧命を奪ふ賊を以て眞實相續の嫡子と爲し、心意識の奴隷と認めて衲僧家の男郎と作す、皆是れ妄を認めて眞と作し、錯を以て實と爲す迷本である。破木杓を以て先祖の髑髏と爲し、驢安鞍を以て阿爺の下顎骨だなぞといつても誰れか是れを眞實とする人があるか、此の二つの例は前の錯認を適切に示してをる、妄分別も甚しい、吾人が認めて眞と爲し悟となし實と爲すところのものは盡く妄であり迷であり錯である。今其の迷悟眞妄の根本を截斷して如何んが化を分たんといふ意で、萬松は土を割き茅を分つ時如何んと要を本則に歸したのである。"四大分離の時サーどこに主と爲り賓と爲り、奴と爲り郎と爲る底のものが有るか。

擧。臨濟示衆云。有一無位眞人（安基定脚了也）常向汝等面門出入（背後）。（底聾）初心未證據者看看（還具眼麼）時有僧問。如何是無位眞人（還解語麼）濟下禪牀擒住（儞更諱）這僧擬議（鈍滯他眞人）濟托開云。無位眞人是甚乾屎橛（大似持鉢不得）

【讀方】擧す。臨濟、衆に示して云く、一無位の眞人あり、常に汝等が面門に向つて出入す、初心

未證據の者は看よ看よ。時に僧ありて問ふ、如何なるか是れ無位の眞人。濟、禪牀を下つて擒住す、這の僧擬議す。濟、托開して云く、無位の眞人是れ甚の乾屎橛ぞ。

【字義】◎眞人とは文子云く「天地の道を得る、故に眞人といふ」と、本際を解脱した自性淸淨身をいふのである。◎面門とは華嚴經六の三十二に「面門とは卽ち口なり」とある。◎未證據とは未だ證驗せぬものといふこと。◎擒住とは引つ捕へて締め付けること、卽ち把住のモツト強い作略である。◎擬議は躊躇すること。まご〳〵、うろたへる意。◎托開は突き放すこと、卽ち放行の機用である。◎乾屎橛の屎橛とは尻をこそげる木の橛で其の乾いたものといふから隨分無價値な不潔極つたものである。

【要解】一無位の眞人は有爲無爲を超出し住行向地や等妙の覺位にも居らぬ、凡聖の階級邊に墮せず、有無の一物に依倚せざる底の眞人である。此の眞人が從晝至夜二六時中汝等の六根門から出入しづめである、眞人の住處は何處か頓とわからぬが、兎に角、見れば見るもの、聞けば聞くもの、齅ぐ味ふ一一の上に出入して毫も昧まさない。まだ修行未熟にして其の眞人を見屆けざるものは茶裡にも飯裏にも照顧して看よ、運足にも轉步にも返照して看よ、脚下照顧囘光返照のところ一無位の眞人は現前分明ぢやといふ臨濟の示衆である。此の示衆を一般の垂語の如く心得て一僧が其の眞人とは如何なもので御座ると他人扱ひをして來たから、臨濟自身に一無位の眞人と爲りて眞人の活作用を直下に示される、坐牀より下りて僧の襟頸を取つちめてサーどうだモー一遍云つて見イといふ具合、僧の擬議するのを見るやドンと突放して置いて無位の眞人是れ甚の乾屎橛ぞ、眞人にして眞人の光明を放たぬときは糞かき橛の乾いたやつにも劣つて居るぞ、乾屎橛には又乾屎橛の用があるが、其の方の無位眞人は死人も同樣だ、口、口の用と爲さず、眼、眼の用を爲さず、耳、耳の用を爲さゞる時は盲聾瘖啞と何の差別があるか擬議分別がいつも無位眞人の活用と妨げて居るのだ、可惜乎此の僧、乾屎橛のまゝで了つたは氣の毒なものよ。要は見聞覺知を解脫して囘光返照ところに無位の眞人は現成して、日々の見聞覺知を處理してゆく境界を得させんが爲に臨濟今日の活說法が有つたのである。

【著語】□基を安じ脚を定め了れり。　無位といはれるが其の無位が一つの坐處となりはせぬかノ、其處に脚を留めたらばモハヤ無位の眞人では有るまいぞ。□背後底聻。　聻はそれそこにと指し示す語。面前計りで無い背後にも、通身にも突き立つてゐる、看過せまいぞや。□還つて眼を具するや。　看るなら看ると見破せよ、看ぬなら看ぬと勘破すればよい。□還つて語を解するや。　臨濟の言つてゐる語からして呑み込めぬらしい。□儞更に諱む。　臨濟御自身も眞人の活作用を諱んで居るのぢや無いか、ヘンな狂言は止して貰ひませう。□他の眞人を鈍滯す。　餘り眞人に屈托して無爲の境界を有爲の鈍人に停滯さしてしまつた。□大いに鉢を持ち得ざるに似たり。　日に三度受用して生命を續ぐのが應量器の德だ、其れを剝がして雪隱の隅へ抛り込んで置くやうでは鉢の功用も無ければ此の慧命も相續は出來まい。折角一無爲の眞人で有りながら乾屎橛となり了れるこそ哀

しけれ。臨濟も無駄骨折り、お氣の毒なことで御座つた。

頌云。迷悟相返（不隔絲毫）妙傳而簡（已犯風煙）春坼百花兮一吹（放去較危）力廻九牛兮一挽（收來太遲）無奈泥沙撥不開（我眼本正）分明塞斷甘泉眼（因師故邪）忽然突出肆橫流（掀倒禪牀怪不得）師復云。險（擲下拄杖云放過一著）

【讀方】迷悟相返し、妙に傳へて簡なり。春百花を坼かしめて一吹し、力九牛を廻らして一挽す。奈ともするなし泥沙撥へども開けざることを、分明に塞斷す甘泉の眼、忽然として突出せば肆に橫流せん。師復た云く險。

【字義】◎春は春風と見れば解し易い。◎力廻九牛とは『列子仲尼篇』にある故事、周宣王が力を以て聞えた公儀伯に對して云はれた語の中に「吾力能く犀兕の革を裂き九牛の尾を曳く」とあるに基く。◎泥沙とは無位の眞人といふ一物を固執するに喩ふ。◎甘泉眼とは會元第十卷に「法眼因に井を開く、沙に泉眼を塞却せらる、乃ち僧に問ふ、泉眼通ぜざれば沙に塞がる、道眼通ぜざれば甚麼物にか礙えらる、僧無對、師自ら代つて云く眼に礙へらる」とある、僧が一物の爲に心眼を塞斷れたといふ引例。

【要解】一二の句は證未證の語、三四の句は擒住托開のところ、第五句に僧の擬議處を惜み、末の二句に臨濟托開の當處に發明せば其の機關是くの如くで有つたらうと云つて置いて末後に其の實境を一字で示されたのである。迷と悟とは相反背で元來二物があるでは無い、迷を究むれば迷相無し、悟を究むれば悟相は無い、有爲の無爲の、證據の未證據のと二つ並ぶのでは無いから、一念分別の識閾を脫しさへすれば一無位の眞人ぢや、臨濟は其許を西天四七東土二三と妙に單傳して迷悟凡聖を超絕した一無位の當處に返照させやうとして多岐に涉らず簡要のところを看よ看よと示されたのである。二十四番の春風が一吹き吹けば桃紅李白と咲き競ふのであるが、春は何處ぞと尋ね廻つたらばモー春は見えぬ、無爲眞人の春もさうだ、臨濟折角の托開も擬議の故に春風をさへぎつた。又大喜大捨最哀愍の九牛力を以て迷の鼻づらをねぢむけやうとしたが、其の擒住も無駄骨折りで有つた心華開發、回光返照の時期は未だ至ら無かつたのは惜いことぢやが、臨濟は惜まず其の力量を盡された親切さは大いに感謝せねばならぬ。撥へども撥へども分別擬議の泥沙塵埃に礙へられて正眼を開くに至ら無かつたは止むを得ないことである、法眼の云つた通り「泉眼の通ぜざるは沙塞げばなり」で此の僧の泉眼は全く泥沙の爲に塞斷せられてゐたのだ、若しヒヨツとして時節因緣が到來して迷悟凡聖、有爲無爲の泥沙が一時に突出したならば其れこそ濟水迸出して九夷八蠻頭出頭沒の大波瀾を現出するで有らう、其の時には此の天童も波浪に攫はれて立場が有るまい、イヤ喪身失命を免かれぬ、危險危險。天童どころでは無い、三世諸佛も、歷代祖師も喪身失命よ、何故といふまでも無からう一無位眞人の盡天盡地盡法界で一物として顏出しの出來るものは無いからのことサ。

【著語】□絲毫を隔てず。　相返するといふが元來一絲一毫の隔は無いよ、分別が隔てゐるのだ。□已に風煙を犯す。　風煙四時に犯し霜雨朝夜に沐すで、簡潔なら簡潔で其れでよい。□放去は較危し。　放行の手段は少々手荒い方だヨ。□收來は甚だ速かなり。　把住の手段は極手速い、眼にもとまらぬ巧手だ。□我眼本正し。　本來の正眼だ、撥ふの撥はぬのと餘計な御世話だ。□師に因る、故に邪なり。　自分の脚下を照顧せずに師匠計り賴つてゐるから幾時までたつてもだめダ。□禪牀を掀倒して怪むことを得ず。　横流し出したら禪牀を掀倒する位のことは怪むに足らぬ。蓮華臺牀の佛をも推し流して仕舞ふ。□拄杖を擲下して云く一著を放過す。　萬松は拄杖を放下して、天童に言ひ分がある、だが一手をゆるめて今は言ふまい、坐下の諸人阿呆づらをしてゐずと、天童が險といつた言下に喪身失命せずとも出身の活路を開いては怎うだ。萬松は學者に一則の公案を遺したのである。

第三十九則　趙州洗鉢

示衆云。飯來張口睡來合眼。洗面處拾得鼻孔。挽鞋時摸著脚跟。那時蹉却話頭。把火夜深別覓。如何得相應去。

【讀方】衆に示して云く、飯來れば口を張り、睡來れば眼を合す。面を洗ふ處に鼻孔を拾得し、鞋を挽る時脚跟に摸著す。那時話頭を蹉却せば火を把て夜深けて別に覓めよ。如何が相應し去ることを得ん。

【字義】◎那時蹉却話頭の那時とはその時といふ程の意、卽ち觸處々々の行履が公案にすり蹉ふをいふ。◎相應去とは飯來と口張、睡來と合眼といふやうに任運に相應つてゆくをいふ。

【要解】御飯を持つて來れば口を開ける、睡くなれば眼が合ふ、誰の指圖もうけぬ。佛の口をかりて食ひ祖の眼を借りて睡るでは無い、人々自然の妙用である。洗面の時には鼻が手にさわる、鞋を著ける時は脚が二本チャンと其れへ載つかる、鼻がさはれば自己玆に在りと知れやう、脚跟に鞋を著ければ行かんと欲する處に行く、決して他人の尻馬に乘つて歩く要は無い。此の境界に達した人は結構だが若し那れの時にか平日の往來と古人の說話とが蹉り違つた場合には足下が眞黑闇で一寸先に進むことは出來ない、其の際には師家の明火をかりて自己の脚跟が方角違ひの方を向いてゐないかどうか能く點檢して見るがよい。相應底の行履を知らんとせば先づ本則に參じて看よ。

擧。僧問趙州。學人乍入叢林。（渾金璞玉）乞師指示。（叢林於爾亦不惡）州云。喫粥了也未。（久慣衲僧不如上座）僧云。喫了。州云。洗鉢盂去。（不得左猜）

【讀方】擧す。僧趙州に問ふ、學人乍入叢林、乞ふ師指示せよ。州云く、喫粥了や也た未しや。

僧云く、喫し了る。州云く、鉢盂を洗ひ去れ。

【字義】◎趙州は趙州從諗禪師のこと、傳前に出づ。◎乍入叢林とは初めて叢林に入つた所謂新米の青小僧のこと。◎鉢盂とは食事をする器具で、雲衲の常に所持する十八物の一。

【要解】學人乍入叢林は此の僧の正直なところ、指示を求むる所以である。喫粥了や未だしや、佛法のことも禪道のことも問はぬ、日常の行履に就いて試みた。喫し了る、先に未熟者だといつて來たが仲々爾うで無い、既に是れ飽參の客らしい、修行事が滿足して我慢の骨も折れてをる。鉢盂を洗ひ去れの一語は三世諸佛も未だ説かざる語ぢや。法味に飽滿するまでは容易に達せらるゝが何時までも法味に舌鼓を打つてゐるやうでは法縛を蒙つて居て眞の自在人では無い、お粥を喫しても鉢盂にねばりが著いてゐるやうでは猫の椀と同じで何の用にも立たぬ、喫し了つて未だ喫せざる以前と同樣に、奇麗に洗ひ去つて初つて喫粥の功が現はれる。此を永嘉大師は經も亦禪、坐も亦禪、語默動靜體安然といはれたのである。行住坐臥が佛法になり、語默動靜が禪になればモハヤ佛法の名目も禪の名字も全く不用ぢや。

【著語】叢林儞に於いて亦惡からず。叢林には我見の角突き合ひが多くて困るが儞のやうな僧許りなら惡弊は生じまいに。□渾金璞玉。無垢の金、あらたま。未だ切瑳琢磨せざる以前のそのまゝの金であり玉である。□久慣の衲僧も上座に如かず。三四十年の久參も及ばぬほどの修行ぢや、脫體現成の喫粥了が大分氣に入つたと見える。□左猜することを得ず。左をまげて猜疑をかけずに正直に鉢盂を洗つて吳れゝばよいが、イヤ此の僧だから大丈夫だらう。

頌云。粥罷令教洗鉢盂（快便難逢）　豁然心地自相符（非但今日）　而今參飽叢林客（依舊喫粥了洗鉢盂去）　且道其間有悟無（一人傳虛萬人傳實）

【讀方】粥罷は敎へて鉢盂を洗はしむ、豁然として心地自から相ひ符す。而今參飽す叢林の客、且らく道へ其の間に悟有りや無しや。

【字義】◎心地自相符とは心中の妄念が豁然と晴れて割符を合した樣に生佛一如、凡聖一體となること。◎而今參飽とは而今は卽今と同じ、參飽は十分に參學して不足無き意。

【要解】起承の二句に本則の體面を頌じ、轉結の二句に座下の龍象に一鞭を加へて天童の機用を示してある。趙州は喫粥了のところ、更に鉢盂を洗ひ去れと指示されたは古今佛祖を超出した說法である。會元には僧此に於て省ありとあるから、出た語かも知れんが、豁然として師家の心地と學人と心地と符節を合するが如くピタリと證契卽通した、實に立派な本則であると趙州と僧とを一時に賞讃して置いて、卽今天下の叢林には飽參の客、四海五湖に滿ちて居る、サー道つて看よ其の間に悟らしいものが有るかどうだ。參じ飽いたらば鉢盂を洗ひ去れ、悟つたらば悟迹を泯せよ。萬松の示衆に飯來れば口を張り睡來れば眼を合すと云つたのは此である、此の間悟ありや、禪ありや、佛

ありや。面山和尚一語を點じて曰く「手を撒し家に到れば人識らず、更に一物の尊堂に獻ずる無し」と。

【著語】□快便逢ひ難し。　此の機逸すべからず、乘り遲れまいぞ、好因緣は容易に來らぬものである。□但今日のみにあらず。　喫粥の時計り心地契合で無い、行住坐臥一一心地に符合せざる時とては無い、氣付かぬまでよ。□舊に依つて粥を喫し了らば鉢盂を洗ひ去れ。　趙州と學人との昔譚で無い、今日御名々も御飯が濟んだら茶碗ぐらゐ洗ふだらうネ。□一人虛を傳ふれば一人實を傳ふ。　三傳市虎人皆信、一拂衣蜂父又疑で一人悟ありなど〻いふと天下騷然として悟臭に蠅がたかる。唐以後の禪にはドーも其の弊風が有つて困る、苟且にも悟ありなど〻いふまいぞ。

第四十則　雲門白黑

示衆云。機輪轉處智眼猶迷。寶鑑開時纖塵不度。開拳不落地。應物善知時。兩刄相逢時如何廻互。

【讀方】衆に示して云く、機輪轉ずる處智眼猶迷ふ、寶鑑開く時纖塵渡らず、拳を開いて地に落ちず、物に應じて善く時を知る、兩刄相逢ふ時如何が廻互せん。

【字義】◎開拳云々とは福嚴禪師に或僧が如何なるか是れ衣中の寶と問うた時「拳を開いて一物なきも應用未だ嘗て虧かず」と答へられた語から出たらしい。

【要解】師家が機輪を轉じて學人を接する巧手は向上向下回互宛轉にして智光眼力を以てするも確と手裏を見極めることが出來ない、心鏡寶鑑を以て宇宙を照すときは纖塵の動處も遁る〻とが出來ぬ。明々照々毫も私を許さぬ、一物といへども握つてゐないから拳を開いても地に落つるものが無い、裸人形物落さずの喩の通りである。物に應じて之を接するには善く時節因緣を知ることが必要である。是れは師家の方で曇りの無い智眼寶鑑を以て照すから能く知れる筈ぢや、今此に作家と作家が白刄を振り翳して立ち向つた時には何と處分をしたもので有らうか、廻互は兩刄の鋒鋩を犯さず無事に鞘に收めさせる手段のことで其許は拔目のない雲門と乾峰との出會に就いて看よと本則に引きつけたのである。

擧。雲門問乾峰。請師答話。（空頭沒項顙）峰云。到老僧也未。（早箇答了汝）門云。恁麼則某甲在遲也。（讓則有餘）峰云。恁麼那恁麼那。（切忌恁麼會）門云。將謂侯白。更有侯黑。（好手手中無好手）

【讀方】擧す。雲門乾峰に問ふ。師の答話を請ふ。峰云く老僧に到るや也未しや。門云く恁麼ならば則ち某甲遲きに在り。峰云く、恁麼那恁麼那。門云く、將に謂へり侯白と、更に侯黑あり。

【字義】◎乾峰は筠州洞山良价禪師の法嗣で越州乾峰和尚といひ又瑞峰和尚ともいふ。◎老僧とは乾峰自らをいふ。◎恁麼那とは然うか然うかの意。◎侯黑侯白とは秦の少游の著淮海州の二十五卷に二侯の說が述べてある「曰く、閩に侯白なるものあり、善く陰に人に中るに數を以てす（數々夜陰に人に突き當つて財物を奪うをいふ）鄕里甚だ憎んで交るなし、一日女の侯黑に路に遇ふ、井邊に據つて失う處有るが若し、白怪しんで問ふ、黑曰く不幸にして珥を井に墮す價百金なり、能く之を取るものあらば半を分つて以て謝すべし、夫子獨り意無けんや。白良久しく計つて謂らく、彼の女子珥を失ふ、珥を得ば固に詒つて與ふること勿るべけんやと、因て之を許し、衣を井の傍に脫いで縋りて下る、黑、白が已に水に至るを度つて盡く其の衣を取りて亟かに去つて塗る所を知ること無からしむ、故に閩人相賣るものを呼んで我已に侯黑彼更に侯白といふ」と、此の語の表面からいへば卽ち雲門が縱橫の機略能く敵するものなしと自負して居たのに乾峰が更により以上高邁な見識を有して居るのを歎じた語である。

【要解】雲門は乾峰の隨身にして極めて親密の間柄、今日は師の答話を請ふと探竿を下した。本分の上からは問ふべきことも答ふべきことも無い筈である、問答ありとせば二見に涉る、無い答を何とするか、其處を見込んで請ふ師答話と出し掛けた。老僧の處に來てゐるのか、未だ行き到いては居ないやうだ、拙僧と老僧と兩人無し、何の到不到か有らんである。スルト雲門はデハ某甲が一步遲れた、ドコを遲れたのだ、請ふ師答話と出し掛けただけ遲れたのかも知れぬ、恁麼那恁麼那は油斷のならぬ語である、雲門は云ふ將に自分は侯白を氣取つてゐたら乾峯といふ一枚上の役者更に侯黑の在るとは氣付かなんだ、上には上があるものでウッカリ出來ぬワイと、此の兩作家は互ひに劍刄を携へて涉り合ひながら、又巧みに回互して鋒鋩を犯さゞるところに作家の作家たる妙處が存してゐる。謂ゆる知人と知人との相見で點檢しあつたり、啓發し合つたりして本分の事を究明して居られる、此のところに著眼せねばならぬ。

【著語】口空頭頂顙を沒す。頭を沒してゐるから頂顙がどこにあるか分らない。イキナリ答話を請ふの一語、無舌人の解語よ。口早く箇れ汝に答話し了れり。久遠劫の以前に答話はすんでをる、今更ら珍らしくも無い、久遠と今時と一枚よ。口讓るときは餘りあり。謙遜して競爭せぬところに雲門の光明が現はれた。口切に忌む恁麼に會することを。ウッカリ口先には乘れない、動ともすれば三十棒に見舞はれやうぞ。口好手手中好手無し。上手と上手と出逢つたが、別に可も無し不可も無しだ。優劣の見えぬところに兩人の好手を認むるがよい。

頌云。弦筈相啣（高低普應）　網珠相對（左右逢源）　發百中而箭箭不虛（對揚有準）

攝衆景而光光無礙（獨耀無私）　得言句之總持（出語成章）　住游戲之三昧

妙其間也宛轉偏圓（如珠走盤）　必如是也縱橫自在（看取令行時）（擧動合拍）

【讀方】 弦筈相啣み、網珠相對す。百中を發して箭々虚しからず、衆景を攝して光々礙ゆる無し。言句の總持を得、游戲の三昧に住す。

【字義】 ◎弦筈相啣とは筈は箭の末で弦につがへる處、弦と筈とが相會うて居るをいふ。◎網珠とは帝釋天に網羅堂といふがあつて數多の珠を貫いた網がある、『華嚴玄談』第六卷に其相映ずる樣を次の如く述べてある「一の明珠內に萬珠の像倶に現じ珠々皆爾り。此の珠明徹にして互相影を現じ、影復影を現じて窮盡することなし」と。◎攝衆景云々とは衆の網珠の互に映ずる樣子をいふ。景は影字に同じ。◎總持とは溫陵法華陀羅尼品解に「陀羅尼此に總持といふ。卽ち妙力を念ずる諸佛の密語、一字多字無字の異あり、能く一字を以て無量の法を持し無量の義を具し、邪を摧き惡を殄ちて善を生む皆能く總て之を持するの謂也」とある。◎三昧は梵音サマードヒ（Samādhi）「正受」と譯す心體寂靜にして邪亂を離る」と、淨影大乘義章に出づ、遊戲三昧は遊戲になり切つて居ることと、◎偏圓とは「理圓なれば言偏なり、言生ずれば理喪す」とあつて偏を現象と見れば圓は實在、偏を偏位と見れば圓は正位である。

【要解】 初め四言二句、八言二句で本則問答の妙處を隔句對を以て頌し、中の六言二句で兩尊宿の一挨一拶を叙べて前四句に應じ、最後の二句に兩老の宛轉自在を讃して學人の行履を示したのである。雲門は弦上に箭筈を當てがつて今にも發せんとしてゐるが、もとより上手のことで有るから發すれば百發百中で一本も無駄箭の有らう譯は無い、乾峰は帝釋の網羅堂のやうに珠網相對してゐるから萬象を一時に攝して一枚の光明と化して仕舞つた。乾峰雲門の一言一句は一一無量の妙義を含んでゐて恰も總持の大陀羅尼である、其の境界たるや三昧に游戲して昏沈に落つること無く散亂に涉ること無し、實に佛祖門中の消息である。弦筈相啣み、網珠相對する雲門乾峰の其の間に於ける妙處や言句は總持を得、境界は游戲三昧に住するが故に明暗事理の二邊にも滯ほらず、迷悟凡聖にも礙へられず、或時は偏と差別に下り、或時は圓と平等に遊び、向上向下宛轉自由の生涯である、必ずや是の如くなれば過現未の三際、上下四維の涯畔をも透出して自在の天地に逍遙するはいふまでも無いことである。座下の諸人此の境界は獨り乾峰雲門の天地では無い、人々も亦其の妙に達し、是の如きの道理を得れば自から宛轉偏圓、縱横自在なること必定であるから、參禪辨道決して油斷をしてはならぬ。

【著語】 □高低普く應ず。　對手次第で向上にでも向下にでも自由自在だ。□左右原に逢ふ。ドチラ向いても珠ばかりだ。擧手投足一々眞理の原に逢つてゐる。□對揚準有り。　應對擧揚には一標準がある。濟生利民の爲に發する箭だ。□獨り耀いて私無し。　光々無私、毫も分別に涉らぬ□語を出せば章を爲す。無言舌の言語、語に語相が無いから一々立派な佛祖の文章を爲す。□擧動拍に合す。　拍は拍子、無心の擧足下足、云爲動作が皆道に合して佛祖と能く拍子が合ふ。□珠の盤に走るが如し。　智慧の珠が禪定の盤の上を走る、定慧圓明の開單展鉢。□令行の時を看取せよ。　佛祖の法令を行ずるとき行住坐臥が偏圓宛轉、縱横自在で其の外に看取すべきことがあるか、

其許を能く看取したらよからう。

第四十一則　洛浦臨終

示衆云。有時忠誠扣己苦屈難申。有時殃及向人承當不下。臨行賤折倒。末後最慇懃。泪出痛腸更難隱諱。還有冷眼者麼。

【讀方】衆に示して云く、有時は忠誠己を扣いて苦屈申べ難く、有時は殃及んで人に向つて承當不下なり、行に臨みて賤しく折倒し、末後最も慇懃。泪は痛腸より出づ、更に隱諱し難し、還て冷眼の者ありや。

【字義】◎扣己云々とは我身を苦め心を責め、苦心慘憺して安んずることなきをいふ。◎殃及云々とは學人を接得する爲に師家は時に辛辣な手腕を用ゆる。これ學人に殃が及ぶ所以である。而かも尚承當うことの出來ぬをいふ。◎臨行賤折倒とは平生高邁な見識を持して居た師家も其の般涅槃に當つては平生の見識を折倒して向下落草の手段を取るをいふ。◎隱諱は隱し制すること。

【要解】師家が學人を接する時には忠臣が君の爲に誠忠を盡して己れの身を捨てゝ而も其の苦辛艱難のところは人に語らないといふ場合もある。有時は又慈悲の落草が過ぎて其の殃ひ學者に及び却つて人物の出來ぬといふ場合もある。人も死にぎわになると兎角氣が弱くなつて平常の智見も何も打ち捨てとう〳〵お末終には法器其の人に非ずとも馬鹿丁寧に法を說き、熱い泪をポロ〳〵こぼして老婆心切のほどを隱さうとしても隱しきれぬやうになるのが常で有る、本則の洛浦も初めの間は忠誠己を扣き苦屈申べ難しといふ位の人物で有つたが今臨終末後に至つては老婆心溢れて大層泪もろく成つた。此の際臨終の場を冷眼に看過し耳を掩ふて去る底の人物が有るかどうぢや、洛浦も實は其の人を求めてをるらしい。

擧。洛浦臨終示衆云。今有一事問儞諸人（猶自說兵機）這箇若是即頭上安頭（怎麼也不得）若不是即斬頭覓活（不怎麼也不得）時首座云。青山常擧足。白日不挑燈（語得分明出轉難）浦云。是甚麼時節。作這箇說話（失錢遭罪）有彥從上座出云。去此二途。請師不問（易開終始口難保歲寒心）浦云。未在更道（詩到重吟始見功）從云。某甲道不盡（不敢人見轉風流）浦云。我不管儞道盡道不盡（放底來不得不休）從云。某甲無侍者祇對和尚（影草隨身）至晚喚從上座。儞今日（沒）祇對甚有來由（只管習粘頭）合體得先師道。目前無法。意在目前（斫却月中桂光應更多清）他不是目前法。非耳目之所到（月落來相見）那句是賓。那句是

主（切忌話作兩橛）若揀得出分付鉢袋子（把棒喚狗）從云。不會（正合分付）浦云。汝合會（將成九仞之山）從云。實不會（不進一步之士）浦喝云。苦哉苦哉（賺殺一船人）僧問。和尚尊意如何（失火處拾廣炭）浦云。慈舟不棹清波上。劍峽徒勞放木鵝（弄巧成拙）

【讀方】擧す。洛浦臨終衆に示して云く、今一事あり爾諸人に問ふ、這箇若し是といはゞ即ち頭上頭を安ず、若し不是ならば即ち頭を斬て活を覓む。時に首座云く、青山常に足を擧げ白日燈を挑げず。浦云く、是れ甚麼の時節ぞ、這箇の說話を爲す。彥從上座あり出て云く、此の二途を去つて請ふ師問はざれ。浦云く、未在更に道へ。從云く、某甲道ひ盡さず。浦云く、我儞が道ひ盡すと道ひ盡さざるとを管せず。從云く、某甲侍者の和尚に祇對する無し。晩に到つて從上座を喚ぶ、儞今日祇對甚だ來由あり、合に先師の道を體得すべし、目前に法なく意目前にあり、他はこれ目前の法にあらず、耳目の到る所に非ず、那句かこれ賓、那句かこれ主、若し揀得出せば鉢袋子を分付せん。從云く不會。浦云く、汝會すべし。從云く、實に不會。浦喝して云く、苦なる哉苦なる哉。僧問う、和尚の尊意如何。浦云く、慈舟清波の上に棹さず、劒峽徒に木鵝を放つに勞す。

【字義】◎洛浦の傳第三十五則に出づ。◎頭上安頭とは餘計なこと、所謂蛇足といふほどの意、◎白日不挑燈とは白晝には燈を借らずして萬像歷然たる樣子をいふ。◎先師とは遷化せられた夾山和尚を指す。◎揀得出とは賓主の區別を見分けること。◎慈舟不棹とは生死の此岸から涅槃の彼岸に渡る慈悲弘誓の舟は六度行や三學等によつて衆生を濟度するのであるから所謂清波に棹すのであるが今洛浦の手許は其の樣な手ぬるい事ではない。◎劒峽とは「劒は嶮なり」で波浪の峻嶮なる早瀨若くは海峽をいふ。◎木鵝とは「劒水嶮隘なる迅流如し二舡相觸るれば必ず碎く、故に先づ木を斫て浮べ下す、之を木鵝といふ」と五雲禪師の坐禪箴に見ゆ。

【要解】此の則は第十三則臨濟滅却の話と類則であるから大分長いが其の積りで見るがよい、洛浦が臨終に及んでの示衆である、一事と二見の對待を離れた絕對の一であるが實は其の一といふものも無い、更に語を換へて這箇といつた、諱を犯さぬ語である。今一事あり爾等諸人、這箇を認めて是だとすれば頭上安頭で餘計なことだ、不是だとすれば頭を斬つて頭を覓むる道理で出來ない相談だ、是不是の無いところを今假りに是不是を立てゝ釣つたのである、スルト一人の首座が飛び出して青山は不動にして而も常に足を擧げて運步してをる、眞晝間提燈などを持ち出して貰ひますまいと云つた。立派の語だが親口から出た親言で無い、請賣りの語である。故に洛浦は甚麼時節這箇說話を習ひ覺えて來たか、今暗記力の試驗をしてゐるのでは無いぞときめつけた。今度は彥從上座が此の是とか不是とかいふ二途にかけて御問ひになることは止めて頂き度い、本より二途は無い筈だ何の答話をか要せんである。未在更に道へモー何も道い分は無いか。某甲道ひ盡さず、父母所生の身では此れ以上申し上げ兼ねます。イヤ汝の其の口で道ひ盡すの盡さぬとには關しないが、まだ其のや

うな二途に引つ掛つてゐるとは可愛想なものよ、從來某甲に口無し、侍者が居たら和尙に御對をさせやうと思ふが生憎今日は侍者は居らぬ、手を打ち拂つた景色だ。其の晩に洛浦が彥從上座を特に喚び出して今日の儞の祇對は仲々修行の力が見えて居る、もう一度儞の脚下を能く試して見たい、先師夾山の道所を體得してくれ、目前は客觀境で法の存するところで有るが其許に法は存し無いで主觀たるべき心意が目前に現れてをる、して見ると意を以て客觀の法とすることも出來ねば主觀なる耳目見聞の及ぶところでも無いと、禪師夾山が示されたが、どの句を客觀とし、いづれの句を主觀としたもので有らうか、サーそれを道つて見よ、儞若し此の機關を透得して一句を言ひ得ば老僧の衣鉢を儞に分付しやう、彥從上度不會の一語で刎ね付けた。其の樣な說法は下町の路傍でなりとおやりになつたがよからう、某甲には關せぬ餘計な說法ぢや。イヤ汝さういはずと能く會得してくれよ、實際全く徹底不會、洛浦一喝して苦なる哉苦なる哉といふ、臨濟が瞎驢邊に滅却すといつたと同意で證明の語ではあるが、どこかにまだ肯ひ兼ぬる點も見える。又他の一僧が出て來て和尙の尊意は如何で御座る、慈悲の佛も迷はぬ衆生に說法はせぬ、迷ひの衆生があるから種々の善巧方便を設けて濟度の標準を立つるといふのが慈舟清波に棹さず、劍峽徒らに木鵝を放つに勞すの二句である、佛の眞意は方便の無功に歸し、佛法禪道を打ち忘れる底の人を求められた。洛浦も我が臨終に方つて冷眼に看過し、老婆心切に耳を掩うて走る底の衲僧を求むること切であると懇懃に答へられたのである。萬松の示衆の語が能く本則の內容を說明してゐるから對照して見ると能く合點せられやうと思ふ。

【著語】□猶ほ自ら兵機と說く、老將は斷末魔のきわまで陣中の手柄話をしたがる、まだ何かたくらんでゐるらしい。□恁麽も也た得ず。是もよろしからず、□不恁麽も也た得ず。不是もよろしくない。□語り得て分明なれば出づること轉た難し。うまい言を云へばいふほど請賣りと知れて價値が下る。□失錢遭罪。お錢を失くしたり、叱られたり、割に合はぬ話だ。□開き易きは終始の口、保ち難きは歲寒の心。福昌重善禪師の語。口では可也終始の合ふことも言へやうが、サテまさかといふ場合にビクともせぬ修養は仲々六づかしいものだ、彥從と口先き計りで無いかと危うんだ。□詩は重吟に至つて始めて功を見る。詩も二三首作らねば本當の伎倆があらはれぬ。未在更に道へ、モ一言いはして見ぬと本音が知れまいぞ。□人をして見せしめざるも轉た風流。月も叢雲に隱れて全分見えぬところに言ふにいはれぬ風流味がある。道ひ盡さずの語に無限の味がある。□沒底を放ち來つて得ざれば休せず。底の底まで穿鑿せぬことには氣がすまぬ。□影草身に隨ふ。自己を藏して置いて侍者に言せる氣でをる。彥從も油斷のならぬ男ぢや。□只管に頭に粘くに習ふ。洛浦は少ししつこ過ぎるやうぞ、又本へ戾つたやうだ。□月中の桂を斫却せば淸光應に更に多かるべし。杜詩集註の語。月の中に曇の有るのは桂樹があるからだといふが、其の桂を斫り取つたら月の光も嘸や一段增すだらう、目前の法も意も無いといふ其の無いといふ無も叩き落したらよからう。□月落ち來れ相見せん。桂どころか月をも落してしまへ、其時初めて光

明遍界だ。口切に忌む話兩橛と作ることを。賓だの主だのと又二途に渉るまいぞよ。口棒を把つて狗を喚ぶ。來い來いと云はれてもウツカリ寄りつけぬ、右の手が後に廻つてゐるやうだ、向ふずね、鼻柱用心。口正に分付すべし。不會なら結構、飯袋子を分付してもよからう。然し胡麻化しものでは無いか、吟味して見るがよい。口將に九切の山を成さんとす。一人前の人間にしてやらうとの御慈悲だ、口一簣の土を進めず。實に不會ならば一簣の土も無用だ。既に九切の山を築き上げたぞ。口一舡の人を賺殺す。乘合船の一同をスツカリ賺殺て了つた。隨分ひどいやり方だ。口失火の處に膚炭を拾ふ。火事場へ來て消炭を拾つて歩く僧だ。何の益も無い仕事だ。口巧を弄して拙と成す。今迄の苦勞が皆無駄骨折りと成れば其れで私が所願滿足ぢや、木鶏を放つことの徒勞に屬するを以て洛浦も先づ瞑目が出來やう。

頌云。餌レ雲鈎レ月釣二清津一（不レ入二驚レ人浪一、難レ逢二稱レ意魚一）年老心孤未レ得レ鱗（氣急作麽）一曲離騒歸去後（在二甚麽處一）汨羅江上獨醒人（洛浦猶在り）

【讀方】雲を餌とし月を鈎として清津に釣る、年老い心孤にして未だ鱗を得ず。一曲の離騒歸り去つて後、汨羅江上獨醒の人。

【字義】◎離騒は詳には離騒經、屈原の作、文選二十二卷に見ゆ。◎汨羅云々とは屈原の故事より出づ、曰く「屈原字は平、楚懷王に仕ふ、三閭の太夫たり、斬向に讒せられて長沙に貶せらる、江畔に獨行し、漁夫に謂つて曰く、世を擧げて醉へり我獨り醒む。世を擧げて濁れり我獨り清めりとて、汨羅江に沈んで卒す」とある。

【要解】初めの二句は洛浦第二義門の施設を逑べ、後の二句は洛浦向上の獨醒を讃し、首尾一貫して本則の體面を頌出したのである。元來第一義天の上には方便も善巧も要らないが、今時門頭に下つては人を求め法を傳ふることが大切であるから、無中に有を拈じて種々の伎倆を弄するのである。雲の定相無くして其の味淡々たる餌をつけ智慧の圓月を鈎とし、法性の理水湛ふる清津に釣りを垂れた、是れ宗師家の悲願なれば年老いて臨終間際にも猶ほ愍兒の心竭まず、法界の鱗龍を釣らうと苦心してござる。其の心情甚だ孤にして外に何の野心も欲望も無い、單に命に背くの金鱗を求むるのである。恰も屈原が一曲の離騒經を殘して世皆濁れり我れ獨り清めりといつて官を掛けて歸り去つたやうに、天下の人を對手にせず、スツト去つて汨羅江上獨醒の人と爲つて仕舞つた。向下に在つても未だ鱗を得ずが洛浦の眞の所望であり、汨羅江上第一人を以て向上の獨尊佛と現成とした樣子が四句一貫して窺ふことが出來るのである。

【著語】口人を驚かす浪に入らざれば意に稱ふ魚に逢ひ難し。怒濤の中に不惜身命の念を以て飛び込まねば眞の鱗龍は得られぬ。口氣急にして什麽かせん。死にぎわにアワテ、もだめだ。其の儘にして置けば好いのぢや。口甚麽の處にか在る。歸り去つて何處へ行つたのだ、去來する處が在るか。口洛浦猶ほ在り。汨羅江に身を投じ土左衞門に成つたかと思つたらナンダ目前に活動し

てゐるよ、幽靈では有るまい、諸人相見してみよ。

第四十二則　南陽淨瓶

示衆云。洗鉢添瓶。盡是法門佛事。般柴運水。無非妙用神通。爲甚麼不解放光動地。

【讀方】衆に示して云く、鉢を洗ひ瓶に添ふ盡く是れ法門佛事、柴を般ひ水を運ぶ妙用神通に非ざることなし、甚麼と爲てか放光動地を解せざる。

【字義】◎洗鉢は第三十九則の本則を例とした。◎添瓶とは瓶の水を使へば後に必ず水を汲み添へて置くをいふ。虚堂錄に「石霜道吾に問ふ如何なるか是れ觸目菩提、吾沙彌を喚ぶ、彌應諾す、吾云く淨瓶の水を添へよといふ故事から出た。◎放光動地とは本行集經に「菩薩初じめ道場に坐すや即ち眉間の一光を放つて降魔と名く」といふ、觀佛三昧經に「彈王佛に問ふ汝の德誰か證明をなす、佛無畏の手を垂れて地を指せば一切大地六種に震動す」とあるに出づ、要は佛菩薩の妙用をいふ。

【要解】趙州は鉢盂を洗を去れといひ、道吾は淨瓶の水を添へよと云つたが、洗鉢の當處、添瓶の卽處が法門であり佛事で有つて此の外に佛作も佛行も無い、龐居士は神通並に妙用、運水及び搬柴というたが、是れほど尊い神通妙用は有るまい、上諸聖に向つて求むるところも無く、下衆生の度すべきも無い境界に至らば日々の行持是れ諸佛の行持にして又我れ等が行持と道環して盡十方世界に光明を放ち大地震動すべきである。手の執捉、足の運奔が淸淨法身の光明莊嚴で有らねばならぬ。諸人悉く放光動地を解會し得たかどうだ、若し未だ解了せずんば吾れ甚麼としてか放光動地を解せざると功夫して見るがよい、第二念に渉つたならば無作の妙用を罣礙するであらうよ。サー甚麼したものであらうか、試みに擧す看よ。

擧。僧問南陽忠國師。如何是本身盧舍那（汝豈是替名）國師云。與我過淨瓶來（莫忘了話頭）僧。將淨瓶到（莫錯認得）國師云。却安舊處著（重宣此義、離此不違）僧復問。如何是本身盧舍那（甚處去來）國師云。古佛過去久矣。

【讀方】擧す。僧、南陽の忠國師に問ふ、如何なるか是れ本身の盧舍那。國師云く、我が與に淨瓶を過し來れ。僧、淨瓶を將て到る。國師云く、却て舊處に安ぜよ。僧、復た問ふ如何なるか、是本身の盧舍那。國師云く、古佛過去する事久し。

【字義】忠國師は震旦六祖大鑑慧能禪師の法嗣慧忠國師の事で景德傳燈錄第四卷に「慧忠國師は潤州淨元の人、姓は王氏、年二十三、業を莊嚴寺に受く、其の後威禪師の出世を聞き往いて之に謁す、威

オかに見て云く山主來るや、「師微旨を感悟す、遂に左右に給侍す、後莊嚴臼寺に居す、學徒雲集す、座下得法の者三十八、各一方に住して多衆を轉化す、唐、大暦四年(皇紀一四二九)六月十五日衆を集め布薩し訖つて髮を淨め身を浴し夜に到つて、瑞雲其の精舍を覆ひ空中天樂の聲を聞く、詰旦怡然として坐化す、壽八十七」とある。◎本身盧舍那とは盧舍那詳しくは毗盧舍那、梵音ヴーイローチヤナ(Vairocana)、光明遍照と譯す、佛の名稱で、佛の身光智光が遍ねく事理無礙の法界を照して圓明なる義である、報身應身に對してこれを本然の法身であるから本身といふ。◎古佛過去とは盧舍那は古佛で業に已に涅槃に入り玉うたといふ意、但し入涅槃は只の入涅槃でないことは勿論である。

【要解】 盧舍那は遍一切處で盡天盡地光明ならざるところは無い、然るに此の僧は本身の盧舍那を他人のことのやうに問ひ將ち來つた、故に慧忠國師は我に淨瓶を取つてくれよと云はれた、スルト僧は淨瓶を持つて來た、盧舍那は此の通り現成してをる。舊處に安いてくれ、ハイと持ち去つた、些しも不足は無い、其の通り活動してゐる、これでもまだ氣がつかぬ。如何なるか是れ本身の盧舍那と再問して來た、自分の鼻で呼吸をしてゐながら人の鼻の孔ばかり探して歩いてゐる國師云く古佛過去すること久し、たつた今淨瓶を持つて行つたり來たりして御在つたがモー過去莊嚴劫一千佛の數に入られたよ、一念擬議すれば過去すること久し、念々無心にして執捉運奔するところに古佛は現成する、喫茶喫飯が佛事法門、坐臥進退が神通妙用、其の外何の放光動地が有らう、唯退歩承當、回光返照のところに盧舍那の本身は脫體露現するのである。

【著語】 口汝豈に是れ名を替へんや。汝の名は盧舍那では無かつたかナ。いつ改名したのだ。口話頭を忘了すること莫れ。南陽國師僧の問話し來つたことを忘れたのか、他の用事など言ひ付けてサ。實は南陽は盧舍那などいふ佛は忘れて御在るのぢや。口錯つて認ること得ること莫れ。淨瓶を盧舍那だたゞ錯り認むるなよ、持ち到る其の脚下は誰の脚跟だ。口重ねて此の義を宣ぶ。同じやうな說法を何度もするのは止めて貰ひ度い。老婆心切が過ぎると却つて人物は出來ぬものぞ。口甚麽の處にか去來す。さつきから行つたり來たり何をしてゐたのだ、まだ盧舍那々々々と云つてゐるよ。口此を離るゝこと遠からず。過去すること久しと云つても遠くは行くまい、擧手投足のところ以外に往來すべき路は有るまい。餘程見ばかりしてゐまいぞよ。

頌云。鳥之行空(築著磕著)　魚之在水(左使右使)　江湖相忘(這邊那邊)　雲天得志
擬心一絲(只在此山中)　對面千里(雲深不知處)　知恩報恩(念茲在茲)　人間幾幾

無可不可
一子親得

【讀方】 鳥の空を行く、魚の水に在る、江湖相忘れ、雲天に志を得たり。擬心一絲、對面千里。恩を知り恩を報ず、人間幾幾ぞ。

【字義】 ◎鳥之行空とは通慧珪禪師曰く「譬へば空中の飛鳥空は是家鄉なるを知らず、水底の游魚

水に性命することを忘却するが如し」と、卽ち魚鳥は水や空を離れざるを知らず、世人は廬舍那法身と一體なるを知らぬをいふ。◎擬心一絲とは疑心些か起れば對面已に千里の距がある、毫釐も差あれば天地懸かに隔たるの意である。◎對面千里とは面と面と相對ながら其の心意が千里萬里隔つて少しも通じない。これ唐書に「事を謀る千里を隔つと雖も面に對して語るが如し、」とあるを丁度反對に用ゐたのである。◎知恩報恩とは華嚴十地品に「知恩知報恩」の語がある、眞に恩を知る者は必ず恩を報ずることを知る。卽ち言行一致の報恩をいふのである。

【要解】　初めの四句は魚鳥に喩へて本則の全體を頌し、次の二句は擬議分別の爲に會し難きを述べ最後の二句に天童の氣炎を揚げて眞個の人を求めたのである。同じ宏智天童の坐禪箴に「水淸うして底に徹す、魚行いて遲々、空濶うして涯り無し、鳥飛んで杳々」とあるのと殆ど異曲同調である。鳥の空に行くや雲天に志を得、魚の水に在るや江湖相忘るで、空濶ふして際涯無きに志を得て眞に自由の翺翔が出來、江湖に在るを忘れて魚は樂しく水に游ぶことが出來る、而も鳥は空を離れず、魚は水を出でずして空を忘れ水を忘れて毫も觸著しない、忠國師の淨瓶過來、舊處に安けよの說法は眞に僧をして廬舍那の神通光明たらしめんが爲の說法で實に尊い接化で有つた。僧の心底には猶一絲毫計りの擬議分別が蟠つてゐたから古佛過去すること久しで、對面して頰と頰と接觸して居ながら千里萬里の隔りを爲してゐる。折角廬舍那を抱きながら逃がして仕舞つたは惜しことで有つた。知恩報恩は佛法の根本義だが君臣無二、父子一體の忠孝で無ければ眞に恩を知つたといふもので無い、サテ天下の人間に佛祖に報恩底の眞の大丈夫は幾人あるで有らうか、先づ天童一人ぐらゐの者で有らう、見渡したところ四海五湖の雲衆水衆、皆是れ佛祖の高恩に孤負するの漢計りらしく認たが恐くは天童の僻目では有るまい。有るなら有ると速かに名乘つて出るがよい、實は其の人を待つてゐるのぢや。

【著語】　□築著磕著。行くところ虛空ならざるは無い、廬舍那の盡界に鼻づき合ひだ。□左使右使。臥ても坐んでも水の外へは出られぬ、毘盧海の生活よ。□這邊那邊。こゝもかしこも、水と水で互ひに水を知らぬ。□可不可無し。可不可、是不是の二念は無い、罣礙すべきところが無い。□只此の山中に在り、毛筋ほどでも擬心が起ればモー見えぬ、ダガ此の五蘊山中の外へ逃げたでは有るまい。□雲深ふして處を知らず。念想觀の雲に隔られて對面しながら相見が出來ない。□茲を念ふこと茲に在り。茲が肝腎のところだ。□一子親み得たり。萬松一人が其の人だらうせ。天童も唯我獨尊ならば、萬松も唯我獨尊だ、人々鼻孔遼天、誰れか是れ其の人。

第四十三則　羅山起滅

示衆云。還丹一粒。點鐵成金。至理一言。轉凡成聖。若知金鐵無二凡聖本同。果然也二點用不著。且道是那一點。

【讀方】衆に示して云く、還丹の一粒鐵に點じて金と成し、至理の一言凡を轉じて聖となす。若し金鐵二なく凡聖本同きことを知らば、果然として一點も用不著。且らく道へ是れ那の一點ぞ。

【字義】◎還丹一粒とは隱丹經に「九轉大還丹は言は九遍循環なり」とあつて神仙秘密の靈藥のことである、これを一粒鐵の上に點けば鐵忽ち眞金となると傳へらる。◎一點とは還丹の一粒鐵に點するといふ語を其の儘もちゐて一たらし、一滴の意と、至理の一言といふ謂ゆる一點語といふ意と兩方にきかした巧みな文字である。

【要解】還丹の一粒は鐵に點けると眞金と成る、理盡き詞窮る底の一言は學人をして凡を轉じて聖と爲す、師家の人を接するには此の機用がある。ではあるが金と鐵と二種なく、凡と聖と根本同一といふことに成つたらば還丹の一粒も至理の一言もサツパリ何の御用にも立たぬ。迷悟凡聖の二見に渉らぬ大機根を接するにはサーどんな一點を用ゐたらよからう、誰か道ひ得る者があるか、無くば、例に依つて本則に參到するがよい。

擧。羅山問巖頭。起滅不停時如何（金剛與泥人揩背）**頭。咄云是誰起滅**（星落雲散）（識得不為寃）

【讀方】擧す。羅山、巖頭に問ふ、起滅不停の時如何ん。頭、咄して云く、是れ誰か起滅す。

【字義】◎羅山と巖頭の法嗣で福州羅山道閑禪師といふ、長谿の人、姓は陳氏、龜山に出家し年滿ちて受具、諸方を徧歷し、始め石霜に謁し、後巖頭に參じた、頭の言下に服膺し、尋いで清涼山に遊ぶ、閩師其の法味を飲み請して羅山に居らしめ、法寶大師と號したと傳に見えてをる。◎巖頭は巖頭全豁禪師で傳は前に幾度も出た。

【要解】羅山は師匠の巖頭に向つて念起念滅が停止ぬ時は何と仕たもので有りませうと問うて來た、起滅が餘程心配になると見える。ソコで巖頭は一咄して馬鹿をいふな、是れ誰れか起滅す、起滅といふ汝の二念が不停のだらう、誰れか起滅する者が有るか、確と一蒲團上に坐してみよ、念々起滅すとも其は是れ誰れの起滅である、誰とは卽ち誰だ、其の誰を究むるに遂に不可得である。起滅を惡しいこととのみ心得るから不停の時は如何したものだらうなどゝいふ苦勞の種が出來る、念起念滅其のまゝでよいのぢや、起滅是れ正念正續である。坐禪は無念無想や恍惚たる無心になることでは無い、念々是れ正念、出息入息衆緣に涉らず陰界に居せざるところに眞の王三昧は得られるのである。

【著語】□金剛と泥人と背を揩る。金剛堅固に對する者は有るまい、泥人は一度に溶ける、觸著すれば則爛懷すで起滅の二つは並ぶまいよ。□星落ち雲散ず。其の咄破では天井が拔けそうだ。□識得すれば寃を爲さず。起滅を厄介者視するから寃を爲すのだが、自己心地一枚の光明と識得すれば無量刧の親友である。

頌云。斫斷老葛藤（轉生枝蔓）　打破狐窠窟（更吐頑涎）　豹披霧而變文（脫却皮毛）
龍乘雷而換骨（別改軀殼）　咄（一喝萬機罷　三朝兩耳聾）　起滅紛紛是何物（好客無疎伴）

【讀方】老葛藤を斫斷し、狐窠窟を打破す。豹は霧を披しに文を變じ、龍は雷に乘じて骨を換ふ。咄。起滅紛々是れ何物ぞ。

【字義】◎老葛藤、狐窠窟とは葛や藤が纒る時は其の木は枯死し、狐の窠窟に入る人は容易に出られぬ、迷妄の葛藤、偏邪の窩窟を根本的に解脫せねば本分の田地に安住することは出來ぬといふ意。◎豹披霧而變文とは易の革の卦に「君子は豹變す、其の文蔚たり」とあつて豹は霧に隱れて其の斑文を變ずと稱せらる、漢劉向の列女傳第二卷陶答子が妻の傳に「陶答子、陶を治むること三年、名譽興らず家富むこと三陪す、其の妻兒を抱いて泣く、姑以爲らく不祥なりと、妻曰く妾聞く南山に玄豹あり、霧に隱れて七日喰はず、其の衣毛を澤して文章を成さんと欲するなり、犬豕に到つては食を擇ばず、故に肥ゆ、肥ゆるを以て禍を取ると、朞年にして果して誅せらる」とある。◎龍來雷而換骨とは任昉の述異記の下記に「漢の惠帝七年の夏雷南山に震う、材木燃えて地燋黃す、暴雨の後過る人其の間に就いて龍骨一具を得たり」とある、蓋し支那では龍が雷雨に乘じて其骨を換ふると云ひ傳へて居るのは之に基くのであらう。

【要解】初めの二句は巖頭の咄と是誰起滅を伸べ、三四の句は羅山轉身の活路を頌し、更に作者一を下して最後の一句に天童の全威を振はれたのである。巖頭の一咄、是れ誰か起滅すの一句で起滅不停の老葛藤は根柢から斫ち斷られ、千年狐狸の窠窟も土臺骨から打ち破されて仕舞つた。豹は深山に霧を披て文彩を變ずるやうに羅山は多年擬議窟宅の中に霧に罩められてゐたがフト巖頭の一咄に會ひ誰れか是れ起滅と霧も亦邪魔物で無いことが知れた、恰も亦龍が忽雷に乘じて骨を換へて昇天するが如く巖頭潤澤の水を得て天下に施くの自由を得た。咄、龍といひ豹といはゞハヤ羅山の話だと云つて片付けやうとするが、さうはさせぬ、起滅紛々是何物ぞ、他人事で無い、人々是れ卽今の問題ぢや、是れ何物の起滅紛々とかなす。天童は羅山起滅を卽今吾人の起滅に歸した。然し巖頭の是れ誰か起滅すと、是れ同か別か、能く點檢して看よ。

【著語】□轉た枝蔓を生ず。　葛藤を邪魔にするに及ぶまい、邪魔する其れがハヤ枝蔓を生ぜしめたぞ。□更に頑涎を吐く。　打破すると云ふ其れが野狐涎だらう、ウツカリ口を開くとトンデモ無いものを吞ませられやう。□皮毛を脫却す。　念々起滅の皮毛は是非一度脫がねばならぬ。□別に軀殼を改む。　幻化の空身卽法身と改めた、全身を放捨して全身と改めたのぢや。□一喝萬機罷み三朝兩耳聾す。　百丈和尚が馬大師に一喝せられて三日耳聾を得たといふが天童の一咄も大したものだ、起滅の萬機も罷み、葛藤も窠窟も底拔けしたやうだ。□好客に疎伴無し。　上品なお客ならば其の交る友も亦上品だ。取捨すべきもの、無き意で、起滅に憎愛はいらぬ、念起念滅其のまゝ脫體現成である。

第四十四則　興陽妙翅

示衆云。師子擊象。妙翅搏龍。飛走尙別君臣。衲僧合存賓主。且如冒犯天威底人。如何裁斷。

【讀方】衆に示して云く、師子象を擊ち、妙翅龍を搏つ。飛走すら尙ほ君臣を分つ、衲僧合に賓主を存すべし。且らく天威を冒犯する底の人の如きは如何が裁斷せん。

【字義】◎妙翅とは金翅鳥又は妙翅鳥ともいひ梵名を蘇鉢剌尼(Suparṇi)といふ。鳥類の王で生龍を食としてゐると傳へらる。◎冒犯天威とは天子の威權を犯すことで、君位、主位を冒瀆すること。

【要解】大力量の象も百獸の王たる獅子には擊たれる、龍は通力があるけれども妙翅鳥王には搏たれる、天飛ぶ鳥や地を走る獸にすら君臣上下の隔が有つて決して主賓相犯さぬ、是れ天眞自然にして唯是の如くである。してみれば祖門下の衲僧たるものが賓主尊卑の禮を存するぐらゐのことは無くてならぬ筈ぢや。若し此に一人あつて天然の威權を冒犯して主位を紊さんとする出格の機用を現はし來つたならば何と裁斷をつけたもので有らうか。今日且らく興陽剖和尙の手段に就いて篤と拜見するがよろしい。

舉。僧問興陽剖和尙。娑竭出海乾坤靜。覿面相呈事若何。（拔鱗曲餂帶角）

（泥餡）師云。妙翅鳥王當宇宙。箇中誰是出頭人。（展翅扇騰六合雲　搏風鼓蕩四溟水）僧云。忽遇出頭時又作麼生。（許爾破膽）陽云。似鶻捉鳩。君不覺御樓前驗。始知眞。（好勦不聽）僧云。恁麼則叉手當胸退身三步。（更待第二鎚）陽云。須彌座下烏龜子。莫待重教點額痕。（再犯不容）

【讀方】舉す。僧、興陽剖和尙に問ふ、娑竭海を出でゝ乾坤靜かなり、覿面相呈すること若何。師云く、妙翅鳥王宇宙に當る、箇の中誰か是れ出頭の人。僧云く、忽ち出頭に遇ふ時又作麼生。陽云く鶻の鳩を取るに似たり、君覺らずんば御樓前に驗して始めて眞を知れ。僧云く、恁麼ならば叉手當胸退身三步せん。陽云く、須彌座下の烏龜子、重ねて額を點して痕せしむることを待つこと莫れ。

【字義】◎興陽剖和尙は郢州興陽山清剖禪師のことで、太陽明安禪師の法嗣である。續傳燈錄卷六に略傳が載せてある。◎娑竭とは華嚴大疏五卷に「娑竭羅は梵語、此に鹹海といふ」とある。茲では居處を以て名とした大龍王の事で娑竭羅龍王のことである、これが海中に居る時は乾坤に風雨を起して騷がしいが一旦海を躍り出づれば乾坤忽ち靜まるといふ傳說がある。◎覿面相呈云々とは目の前に現はれた時は甚麼とせらるゝぞといふ意。◎御樓前云々とは史記七十六卷に「平原君趙勝は趙惠文王と孝成王に相たり、家に重樓を起てゝ民家を臨む、躄へるものあり、美人之を笑ふ、躄者

美人の首を請ふ、君諾して行はず、賓客去ること半なり、君四人を斬つて人に代ふ、賓固に至らず、遂に美人の首を刎ねて御樓前に懸けて其の眞を驗す、周歳にして賓集る」とある文あら出た語で、鶻の事に關して此の語を用ゐたのは昔貴人樓前に於いて鷹合を行つたから、其の事を巧に取合せた文字上の技巧である。◎須彌下云々とは抱朴子内篇對俗卷に曰く「南方閑居の人、龜を用ゐて牀足を支うること已に二十年、老至つて其の人死す、家人牀を移すに其の龜猶生く」と、今須彌の下の烏龜といふから何千年動かずに居たか分らぬ、それが偶出て彷徨き廻つても畢竟額を打つて瘢を作るに過ぎぬから寧ろ思量を止めて本文に安せよと示されたのである。

【要解】 先づ本則の要を云へば龍は智見で有つて心の用、妙翅鳥王は大禪定で有つて心の體である、此の體と用と融合して事々無礙の三昧に住せしめんとするにあるのである。婆竭羅龍王が鹹海を出て天地乾坤を靜定し、全威を震ふは僧の悟に豐にして瞥地の智通を得たる境界である。生龍を食とする妙翅鳥王が宇宙に當つて羽翼を張つたならば龍の居り場があるまい、イヤ取り食はれて仕舞つて喪身失命を免かれまい、是れ興陽が大禪定の境界にして絕對の第一人である。上には上が有つて悟りや智見の面出しする餘地が無い。それでも無理やりにヒヨツコリ出頭をしたら何とする。其の時は鶻が鳩を捉へて一攫みに握りつぶすやうなものだ、それでも尙は臍落ちせぬとならば後日眼前に非を知る時節が來やうから其の時始めて眞實を知つて今日を悔ゆるで有らう。左樣で御座るか、ソレは甚だ恐縮と節を屈して退身三步したやうだが油斷のならぬ風態だ。尊公は氣の毒な者よ、佛座の須彌壇を支へてゐる床足の烏龜子も同樣である、ドーかコーか這ひ出しても、彼所でも額を打ち、此方でも眉間に瘤をつくるぐらゐが儲けものだらうからマー二度と出て來ぬ方がよからう。再び悟邊の熱氣を以て天威を冒犯すこと無く、眞個大丈夫となつて出頭して來いと興陽の老婆心切の語である。

【著語】 口鱗を披する曲鱔、角を帶ぶる泥鰌。鱗はあるが曲鱔だ、角は有るが泥鰌だ、勢ひはすさまじいが婆竭龍王とはうけとれぬ、似て非なる者よ。口翅を展べて崩騰す六合の雲、風に搏つて鼓蕩す四溟の水。一たび翅を展べたら六合の雲も四海の水もはねくりかへして仕舞ふ、宇宙のすがたも殘さぬ。口儞に破膽を任す。破れかぶれ、無茶苦茶に出頭せやうとはチト太とすぎるよ。口好く勸れども聽かず。道理を諄々と說いて聽かしても解らぬ男だ、寧ろ憐愍の情に堪へぬ。口更に第二槌を待て。本當に角が折れて退身三步したで無い、第二の鐵槌を下してどこ迄も我慢骨を叩き折つてやるがよい。口再犯容さず。一度位は恕しも仕樣が二度とは決して容さぬ。イヤ萬松は其の一度も容しはせぬぞ。

頌云。綍綸降（聽ニ聖旨ヲ）　號令分（有レ違ハ者斬）　寰中天子（君ニ臨ミ萬國ニ）　塞外將軍（獨リ鎭ス一方ヲ）

不レ待ニ雷驚出ヲ蟄（五更侵レ早起）　那知風過ニ行雲（已ニ有ニ夜行人）　機底聯綿兮自有レ金

第四十四則　興陽妙翅

針玉線（具眼、難讃）印前恢廓兮元無鳥篆蟲文（字義炳然）

【讀方】絲綸降り、號令分る。寰中は天子、塞外は將軍、雷驚いて蟄を出すことを待たず、那ぞ知らん風行雲を遏ることを。機底聯綿として自から金針玉線あり、印前恢廓として元鳥篆蟲文なし。

【字義】◎絲綸とは禮記に「王言は絲の如く、其の出ること綸の如し」とある、王の勅命をいふ。◎寰中天子云々とは憑唐云く「上古王者の將を遣すや、跪いて轂を推して曰く閫内は寡人之を制せん、閫外は將君之を制せよ」と、閫は王領(畿)の内外を分つ郭門の閫である、其の内を寰内といひ其の外を塞外といふ。◎雷驚出蟄とは夏暦二月の半を驚蟄といひ此の頃に初めて雷が鳴つて地中に蟄居して居た蟲が驚いて這ひ出すといふ。◎風遏行雲とは列子湯問篇に「薛譚謳を秦青に學ぶ未だ青が技窮めずして自ら盡すと謂へり、辭して歸る、青留めずして郊衢に餞し、節を撫して悲歌す、聲林木に振ひ、響行雲を遏む」とあるより出づ。淸剖和尙の見處の高邁にして無心なる樣子をいふ。◎鳥篆蟲文には太平廣記二百六卷に「按ずるに古文は黃帝の史、蒼頡が造る所、頡首に四目あり神明に通ず、仰いで奎星圜曲の勢を觀、俯して龜文鳥跡の象を察し、博く衆美を采り合して字となす、之を古文といふ」とある、卽ち鳥の飛ぶ迹、蟲の行く跟に象つて造つた創造時代の文字をいふ。

【要解】初めの四句は隔句對にして太平の乾坤をいふ。五畿内は天子の直轄で綸言降下し、閫外は將軍の治下だから號令が行き屆いて、寰中も塞外も體用合一に平穩無事である。次の二句は風雷ともに龍にかゝる、此の太平の時に蟄を驚かすの雷鳴をも待たず、行雲を遏るやうな伎倆も知らずに飛び出すことは要らぬ。風無きに浪を起し、平地に骨堆を生ずるやうな僧の悟氣を抑へて前四句の興陽が平和の手段を賞讚した。本則の面は是れで了つて次に法の上から體用不二、賓主無別の大道を頌したのである。機を織るには經緯があつて聯綿少しも其の間に斷れ間といふものが無い、金針と玉線、玉線と金針とが正偏回互し相交錯して立派な一機の絹が織り出される、印前は空劫以前、恢廓は十方虛空で一物不生のところ。元來鳥篆蟲文などといふ文彩は空劫以前の消息では無い、不思量のところ言語道斷、非思量のところ心行所滅である。此が靜平なる天子の寰內、將軍勅を受けて塞外に號令し、毫も昧ます無き境界である。

【著語】口聖旨を聽く。臣民は宜しく天子至尊の綸旨を奉ずべきで決して違背してはならぬ。口違ふこと有る者は斬る。將軍の號令に違ふ者は斬り捨てゝ仕舞ふがよい、背する底の自己の迷根を斬却するのだ。口君は萬國に臨み。天子は宇宙に君臨して平等靜謐。口獨り一方を鎭す。將軍は一境を守つて能く鎭撫する差別智見。口五更早を侵して起き。穴の中の蛆蟲が雷をきいて龍のつもりで朝早く飛び出したは好かつたが。口已に夜行の人有り。チャント夜前に來て御座つた。龍が威張つて出たら妙翅鳥王に一呑にされた態である。口具眼を謾じ難し。宗眼正ふして一點非難のうちやうが無い。口字義炳然。無文字のところ字義炳然、無言舌のところ句意明白、見聞覺知に渉らぬ不思量底の大文字よ。

第四十五則　覺經四節

示衆云。現成公案只據現今。本分家風不圖分外。若也强生節目枉費工夫。盡是與混沌畫眉鉢盂安柄。如何得平穩去。

【讀方】衆に示して云く、現成公案只現今に據る、本分の家風分外を圖らず。若し也强ひて節目を生じ枉げて工夫を費さば、盡く是れ混沌の爲に眉を畫き、鉢盂に柄を安ずるなり、如何が平穩を得去らん。

【字義】◎現成公案の公案とは公府の案牘とて爲政者が公事を國民に告ぐる揭示案文のこと、今現成公案といふのは雨竹風松、溪聲山色等宇宙間の萬象が佛法の現成といふこと。◎不圖分外とは本分以外に向つて計度思量せぬこと。◎混沌とは目も鼻もないノッペラボウのこと、莊子應帝王篇に「儵と忽と渾沌の德に報いんと謀つて曰く、人皆七竅ありて以て視聽息食す、此れ獨りある無し、試みに之を鑿たんと、日に一竅を鑿り七日にして混沌死す」とある、混沌は竅がないのが普通であるを要らぬ事を仕た爲に混沌を殺したのである。◎鉢盂安柄も柄ないのが常であるのに柄を安けると鉢盂の用を爲さなくなる。

【要解】計較卜度の分別心を去れば一切一實悉く公案の現成で有つて即今目前底毫も昧すところは無い。絕學無爲ある衲僧の活計は喫茶喫飯が本分の家風で人々分上豐に具つてゐて一人として分外た者は無いのである。然るを若し强ひて迷悟に節目を立て、有無の工夫を費すが如きは恰も本來純眞なる混沌に眉を畫いたり、受用不盡なる鉢盂に柄を著けたりする樣なもので、本分に瑕瑾をつけ、無用の物として仕舞ふ。現成公案の太平、本分家風の靜穩を書るには如何に向上すべきで有らうか、將た向下すべきで有らうか、眞箇其の消息が知り度くば圓覺經四節の法門に參ずるがよい。

擧。圓覺經云。居一切時不起妄念。於諸妄心亦不息滅。住妄想境不加了知。於無了知不辨眞實。

【讀方】擧す。圓覺經に云く、一切時に居して妄念を起さず、諸の妄心に於いて亦息滅せず、妄念の境に住して了知を加へず、了知無きに於いて眞實を辨せず。

【字義】◎圓覺經云とは圓覺經清淨慧菩薩章の文である。◎不息滅とは妄心又は眞心と別物ではない、妄心以外に息滅すべき何物があらうぞ。◎於無了知とは了知無き處直に眞實の丸出しであるから別に辨不辨を要せぬのである。

【要解】諸法皆空の智眼を以て目前の萬境を照すときは心と境との間の障壁が取り除かれて三界唯心、諸法實相の大安樂を得ることが出來る、衲僧家は此の大安樂を非思量と稱する。此の本則は諸法皆空の上に眞實の大安樂即ち非思量を思量するの生涯を得せしめんが爲に特に圓覺經の四節を拈

出せられたのである。一切時行住坐臥にも見聞覺知にも喫茶喫飯にも妄念を起さず、不思善不思惡是非に管せず、諸緣を放捨したる日用洒落の境界。諸の妄心が念起念滅しても、息めやうとも滅しやうともせず、念念起滅に一任して毫も關しない。生滅の見が即ち妄念で有つて無心にして念念相續して行けば其れが正念であり非思量の境界である。妄想は有想無想の念に馳らるゝところに生ずる、有想を惡んで虛妄と見るは了知で、了知を以て悟とするも亦妄想である。見聞一一他に隨ひ去るで少しも其の間に之乎者也を容れぬ。聞處觸處其の儘が不思量であり、非思量である。了知を加へぬといふことになれば、虛假眞實が辨白出來ぬやうであるが了知なきところには眞僞も虛實も是非も正邪も無い。是れは善い是れは惡いと云ふ觀念が無ければ辨することも要らぬ筈である。諸法皆空の智眼で照して觀れば一切時一切處、聲色見聞悉く大圓覺の活伽藍で一として非思量の上の大光明ならざるは無い。

【著語】 口不。起しても好からう。起滅紛々是れ何物ぞぢや。口不。息滅するがよい、大圓覺中の息滅なら毫も差し間へは有るまい。口不。了知するがよいでは無いか。加へて增さず、加へざるも減せずである。口不。大いに眞實は辨ずべしだ。不思量底を思量するは眞實を辨ずるに在り。

頌云。巍巍堂堂 更窮須道鄙投字 磊磊落落 撩天鼻孔 閙處刺頭 牀窄先臥 穩處下脚 粥稀後坐 脚下線斷我自由 信歩過滄洲 鼻端泥盡君休斲 彼此著便 莫動著 已是蹉手亂下 千年故紙中合藥 大有神効

【讀方】 巍々堂々、磊々落々。閙處に頭を刺し、穩處に脚を下す。脚下線斷へて我自由、鼻端泥盡く君斲ることを休めよ。動著すること莫れ、千年故紙中の合藥。

【字義】 ◎閙處刺頭とは賑かな混雜な處に頭を突き込むこと、所謂拕泥滯水の手段をいふ。穩處下脚は之に反す。◎脚下線とは列仙傳八に「葛由能く木羊を刻み、羊に騎つて綏山に上る、後浮丘翁に遇つて謂く、若し脚下線斷るにあらずんば儞也自由を得ず」とあるより出づ。◎鼻端泥盡云々の故事は第二則に詳しく述べてある。◎千年故紙云々とは千年も經つた古い紙即ち反故の中にある調合藥で何の役にも立たぬことをもいふが、此では立派な功能のある藥であるから大切にせよといふ意に見る方が穩當であると思ふ。

【要解】 初め二句八字に王三昧に住する大丈夫の漢を形容し、次の二句八字に念起息滅の轉側を述べ、次の二句十四字は根境の不染汚を明し、三字に要機を指示して最後の句に圓覺經を讚歎したのである。王三昧に端坐する相は巍々堂々として安住不動、其の心事や磊々落々として非思量底、此の處既に起不起だの息滅だの、了知だの眞實だのといふ名相を泯絕した境界である。念起の閙處に是れ什麽ぞと廻光するのが刺頭で、息滅の穩處に退步承當して返照するのが下脚である。念起息滅

が其のまゝ廻光返照で有るから進止動靜盡く光明神通と現成する。妄念だの妄想だのといふ、分別計較の絲線が十一に脚下から斷絕えてゐるから歩に任せて自由に天下を往來することが出來る眞實とか了知とかいふ己見法見の泥埾も既に鼻端から斷盡れてゐるから匠石の斧に依つて斲つて貰ふ御手數も要らぬ。鬧處にも穩處にも脚下線斷へ、人見法見の埾漫も盡きたるが故に天下に獨歩して餘人の干渉を待たない。眞に不思量底を思量する大伎倆である。動著すること莫れは巍々堂々、磊々落々のところで左に側ち右に傾き前に躬まり後に仰がざる正身端坐の兀々地である。三千年前の故紙圓覺經中に此の大妙藥の處方箋あり、人々合藥して大いに服するがよい。此の一字を服すれば千年の妄執直下に解脫して無礙自在の大安樂を得られる、眞の丈夫兒は是非此の一服を召し上れと天童婆心の餘りに出た勸告ぢや。

【著語】□更に窮めて須らく鄒搜の字を道ふべし。　鄒は孟子の故鄉、搜は陬で孔子の出生地である。孔子孟子の諱を犯さぬやう陬とか鄒とか云つて其の人を呼ぶこと。天童の語を其の儘無暗に返辭ばかりしてゐずと、自分に一つ巍々堂々の人なるや如何んを窮めて眞實其の人ならば諱を犯さぬやう大いに尊敬するがよい。□撩天鼻孔。　天狗鼻が天まで屆きそうだ。天童計りに威張らせまいぞ。□牀窄ければ先づ臥す。心の欲するまゝにして則を踰えぬ。□粥稀ければ後に坐す。　前句と對で歸宗道詮禪師の語である。無心にして道に合する樣子。□歩に信せて滄洲を過ぐ。　滄洲は仙人の居處、此は佛境界の意である。佛地にも止まらぬ、佛見法見の線が斷えてあるからのことよ。□彼此便と著く。　彼此好箇の時節、又と得難い因緣ぢや。□已に是れ蹺手亂下。　手忙脚亂、手足の置きどころが無いでは御座らぬか。石地藏のやうにしてゐることでも有るまい。□大いに神効有り。　萬松珍らしく贊意を表した。不思議な効能があるから諸君折角用ゐたまへ、効驗が無かつたら、代金は頂きませぬ。眞實無病の人で有るなら服まずとものことよ。

第四十六則　德山學畢

示衆云。萬里無寸草淨地迷人、八方無片雲晴空賺汝、雖是以楔去楔。不妨拈空拄空。腦後一槌別看方便。

【讀方】　衆に示して云く、萬里寸草なきも淨地人を迷はす、八方片雲なきも晴空汝を賺す。是れ楔を以て楔を去ると雖も空を拈じて空を拄ゆる事を妨げず。腦後の一槌別に方便を見よ。

【字義】　◎萬里無寸草とは洞山良价禪師の語で本錄の第八十九則に出てをる公案、空界無物の樣子をいふ。◎以楔去楔とは其の物を以て其の物を奪ふ意、例へば無の見を拔くに無を以てする手段をいふ。楞伽經に「楔を逆へて楔を出すが如し」といふ語がある。

【要解】　洞山の無寸草は卽ち本來無一物の淨地で却つて人を迷はす。四方四維一點の片雲無きときは一念不生の晴空に賺されて却つて明白裏に坐するに至る。是れ楔を拔くに楔を以てする手段ではあるが空を以て空を柱ふるも亦敢へて妨ぐるところでは無い。有らば與へん無くんば奪はんで有る

から、有執を拔くに有を以てし、空見を拂ふに空見を以てするは師家が機に應ずるの作略で一定の規矩といふものは無い。今思ひがけも無く背後から斬りつけられた場合には如何な方便を以て劍刄上を渉るべきぞ、試みに德山圓明大師の方便を一つ好く看取するがよい。

擧。德山圓明大師示衆云。及盡去也（有道箇在）直得三世諸佛。口掛壁上（留取喫飯）猶有一人呵呵大笑（且道是誰）若識此人（是何面目）參學事畢（與椀茶喫）

【讀方】擧す。德山圓明大師衆に示して云く、及盡し去るや、直に得たり三世諸佛口壁上に掛くることを、猶ほ一人有つて呵々大笑す、若し此の人を識らば參學の事畢んぬ。

【字義】◎德山圓明大師とは德山緣密禪師で圓明大師は其の謚號である。德山の第九世で雲門文偃禪師の法嗣中最も子孫の榮えた人である。例の雲門の三句も此の人に依つて作られたと傳へられてをる。◎及盡去也とは理盡き詞窮まる、所謂言詮不及意路不到のところをいふ、玆に到れば三世諸佛の說話も全く用不著であるから口壁上に掛るといふのである。

【要解】理盡き詞窮つて三世諸佛口壁上に掛くるは言語道斷のところ、一人有つて呵々大笑するは言語道斷とは一切の言語これなりといふところである。消極の極致は默のところに存するが積極のところに至つては語默動靜體安然で有らねばならぬ。默が雷の如くに響いて來ねば默に默の價値が無い。說不得底を行取し、行不得底を說取する是れ衲僧家の茶飯で無くてはならぬ。サテ其の人は是れ誰ぞ、斯う一つ參究し來つて眞に其の人に相見せば參禪學道の事全く畢る。本來の面目現前の時節ぢや、若し第二念に渉らば却つて三世諸佛の爲に呵々大笑せられるかも知れぬ、及盡し去る底のところ乞ふ一句を道取し來れといふ勢ぞ。

【著語】口這箇の在る有り。　及盡し去るやといふところを見ると、まだ何か一つ殘つてゐそうだ大いに吟味してみよ。口留取して飯を喫せよ。　口を棚へ上げずと飯でも食はしたらどうだ。ソー口を疎末にせまいぞ。口且らく道へ是れ誰ぞ。　呵々大笑底の一人とは誰だらう、マー萬松ぐらゐの者かナ。口是れ何の面目ぞ。　眼横鼻直の人だらう。イヤ坐布團上の那人かも知れぬ。口椀茶を與へて喫せしめん。　參學了畢の人ならば大切に待遇するがよい。爾ういふ人は容易に得られぬ、其の人は誰そと參究せよ。

頌云。收（向甚處著）把斷襟喉（正好轉身吐氣也）風磨雲拭（纖塵必去）水冷天秋（打成一片）錦鱗莫謂無滋味（腥羶不少）釣盡滄浪月一鈎（不犯清波意自殊）

【讀方】收。襟喉を把斷す。風磨し雲拭ふ、水冷に天秋なり、錦鱗謂うこと莫れ滋味無しと、釣

り盡す滄浪月一鈎。

【字義】 ◎把斷襟喉とは襟首を引締めること。◎滄浪とは離騒漁夫篇に「滄浪の水清まば以て我が纓を濯うべし」とある。今は大海原の意に用ゐた。

【要解】 收の一字は本則の綱領、次の四字は語路絕の端的、次の二句八字は那人の笑處、末の二句十四字は德山の爲人を述べて天童勸結の語と爲す。收の一字は卽ち及盡し去るの當處で、說も默も諸佛も那人も、大笑も參學も一拳に打著し了つた、ドカリと七尺單前に兀坐した境界である。收の一字で三世諸佛の咽喉を把住めて舌根を坐斷た、淸風磨洗し白雲拂拭し、澄水冷淡として一天秋老ゆ、如何にも天空海濶、一點の纖埃を止めぬ、この純淸絕塵のところに風そよぎ雲たなびき、天は高く水は長くして呵々大笑と現成してゐる。月の鈎を滄浪に垂れて錦鱗を釣り盡した。其の鈎頭の餌に滋味が無いなどと謂ふな、皆んなが其の無滋味の好餌に釣り上げられたのだ。卽ち今迄滄浪の間に浮沈して水を出づることの出來なかつた赤梢の錦鱗が參學事了畢と釣り上つて來たでは無いか。サー釣り上げられた金鱗とは誰かナ、本際解脫から再び飛び出して識不識の月影を辿つて歩いたならば此前の濁流に沈淪して永劫浮ぶ瀨が有るまいぞ、言句葛藤の好餌を離れて請ふ試みに一句道へといふ天童抑揚の爲人ぢや。

【著語】 □甚の處に向つてか著けん。 何も彼も皆さらへ込んで甚麼する氣ぞ、取捨の無い虛空の容れ物でも有るのかナ。□正に好し身を轉じ氣を吐くに、 襟喉を緊められてグーの音も出ぬやうなことではダメだ、此の際大いに轉身の活路を開き大氣炎を吐くべしだ。□纖塵も必ず去る。 鵜の毛一本も無い。キレーサツパリしたものだ。□打成一片。 晴れてよし曇りてもよし富士の山、晴曇を打して一片と成すといふ景氣。□腥羶少からず。無味どころか鼻向けのならぬほど惡臭紛々だ、下手に口を開いたら一大事ぞ。□淸波を犯さず、意自から殊なり。「伊勢の海千尋の底の一つ石、袖も沾さず取るよしもがな」といふところ。月、水に觸れず、水、月を沾さず、鈎三寸を離れて一句道へといふ一種特別な釣り方だから充分氣をつけて見ねばならぬ。

第四十七則　趙州柏樹

示衆云。庭前柏樹。竿上風幡。如一華說無邊春。如一滴說大海水。間生古佛迥出常流。不落言思若爲話會。

【讀方】 衆に示して云く、庭前の柏樹竿上の風幡、一華無邊の春を說くが如く。一滴大海の水を說くが如し。間生の古佛迥かに常流を出づ、言思に落ちず若爲んが話會せん。

【字義】 ◎庭前柏樹とは本則を直ちに前提したのである。◎竿上風幡とは「六祖廣州法性寺に至り印宗法師涅槃經を講ずるに値ふ、時に風幡を吹いて動かすことあり、一僧曰く風動なり、一僧曰く幡動なりと、議論已まず、慧能進んで曰く、是れ風の動くにあらず、是れ幡の動くにあらず、仁者の

心動なりと、一衆駭然たり」と六祖壇經に見えて居る。此の時は已に六祖が五祖の下で大法を相續してからのことである。◎聞生古佛とは五百年間に必ず一人の高僧が出るといふ傳説がある、稀代の人といふ意。今趙州を以て聞生の古佛と賞揚したのである。

【要解】　本則の趙州庭前の柏樹子は從來の公案とは大分趣きが異つてをる。六祖の風幡心動の話一華開いて世界の春を知るといふが如き、又一滴水を以て大海の鹹味を說くと云ふやうな何ぞ便りを得るところが有つた。然るに趙州は五百年間に一度生れるといふ程の老古佛だからズット世間並をはづれて言語思慮に落ち無い說法をせられた、思慮分別では到底齒の立たぬ代物ぢやが、折角聞生の古佛に遭遇しながら此の說法を聽きもらすも殘念だから、どうかして此の話頭を會得したいものである、ナント皆さん一つ褌を緊めてかゝらうでは御座らぬか。

擧。僧問趙州。如何是祖師西來意（多羅閑管）州云。庭前柏樹子（焦甎打著連底凍）

【讀方】　擧す。僧趙州に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。州云く、庭前の柏樹子。

【字義】　◎趙州とは趙州觀音院の從諗禪師のことで前に屢出た名である。◎祖師西來意とは祖師は達磨大師、西來は西の方印度から來たといふことで達磨が遙印度から震旦に傳へた佛法の大意といふことである。祖意、祖師意、西來意などゝ約めていふこともあるが一般に佛法の大意といふ概念的の名詞にも用ゐる◎庭前柏樹子とは目前の外庭にあつた柏樹を指してヒヨット出た語で文字には何等の意味も無い、宗意の上から拈ずれば無盡藏の味がある。

【要解】　達磨殿が遙西天から澁い面をして東土に來て、九年間も少林に冷坐して御在つたげなが、アレは一體何といふ佛法でござる。此が不審の打ちどころで當時流行つた疫病の一つである。柏樹子には西天も東土も無い、佛心も祖師意も無い、傳法救迷情ともいはず、一華開五葉ともいはぬ、唯庭前の柏樹子といつたまでである。庭前とあるから境のやうで有るが敢へて境を以て示したでも無い、趙州は人にして人を脫落してをる、故に取り扱ふ境も亦境にして境を脫落してゐる、達磨と趙州とは知音だから西來意と柏樹子とも亦親い、人境を脫落したところに佛法はいつも現前して築著磕著である。

【著語】　□多羅閑管。　多羅は修多羅（Sūtra）の略で經のこと、閑管は閑家具、不用品、有つて厄介、無くて調法といつたやうな道具ぢや。祖師西來意を會得すれば大藏經五千餘卷の經文は全く無用の長物で、そこのところを確と趙州から聽き取つて會得するがよい。これは萬松が椽の下の力持ちサ。□焦甎打著す連底凍。　甎を焦いて打ちつけると底まで張り詰めてゐた凍も一時に熔けて仕舞ふといふことで請益錄にある語ぢや。趙州柏樹子の焦甎で凍り切つてゐた祖師西來意がドン底まで熔けて溶々として宇內に漲つて來た。祖師意が人々の左右に缺かず流れてゐるから其の春水に浴するがよいぞ。

頌云。岸眉横雪（喫鹽多如喫米）河目含秋（一點難謾）海口鼓浪（有句非宗旨）航舌駕流（無言絶聖凡）撥亂之手（也是柏樹）太平之籌（也是柏樹）老趙州老趙州（偽甚不應）攪攪叢林卒未休（天童第二）徒費工夫也造車合轍（將來使用恰好）本無伎倆也塞壑塡溝（買盡風流不著錢）

【讀方】岸眉雪を横へ、河目秋を含む。海口浪を鼓し、航舌流に駕す。撥亂の手、太平の籌。老趙州老趙州、叢林を攪攪して卒に未だ休せず。徒らに工夫を費して車を造つて轍に合す、本伎倆無うして壑に塞り溝に塡つ。

【字義】◎岸眉横雪とは雙の眉の眞白なこと河の兩岸の雪の樣なるに喩ふ。◎河目含秋とは家語困誓篇に「河目とは上下匡平にして長し」とあり、又孔叢子の嘉言篇に「萇弘が云く孔仲尼を見るに聖人の表あり、河目隆顙は黄帝の形貌なり」とある、要するに眥が長くて澄んで居るをいふ。◎撥亂之手とはかき亂す手腕、玆では打開放行の手段を讚へたのである。◎造車合轍とは文選に「門を閉ぢて車を造るも戸を出づれば轍に合す」とあるより出た語である。

【要解】初め六句は趙州の面目を形容し、後の四句の最初に其の名を特に喚び出して大法を扶起するの功を讚歎したのである。趙州は六十一歳にして出家し、南泉に參すること三十年、趙州觀音院に住すること亦三十年といはれてをる。故にすべて其の面目を譬ふるに老僧の平常を以て形容したのである。尨眉は恰も兩岸に白雪を横ふるが如く秋霜の氣は烱々として其の眼光に輝いてをる。口には佛祖を呑吐するの波瀾を起し、舌には順逆の二流を截斷して彼の岸に渡さずんば止まぬ、手に撥亂反正の伎倆あり、籌には太平靜謐の妙術あり、其の平常實に是の如くにして間生の老趙州と云はるゝのである。趙州古佛、老僧が庭前の柏樹子と一たび道破してより天下の叢林は攪々擾々として容易に休む景色も無いやうだが皆之れ思量分別の致すところであつて眞に趙州の堂奥に參到せぬからのことよ。老僧は三十年來閑工夫を費して車を造つたが期せずして今轍に合するに至つた、是れ實に閑工夫で計較分別を離れた擧手投足だから一々キチンと佛祖の軌轍に合して微塵のくるひが無い、本來これといふ定つた伎倆といふものが無い、其の無伎倆が壑に塞がり溝に塡ちて法界に充滿してゐる、卽ち明々たる百草頭、明々たる祖師意で毫髮も伎倆ざるところに全工夫全伎倆が現はれる。庭前の柏樹子と輕く出た一語が法界を印定し、祖師意を證明してゐるでは無いかと讚歎したのである。

【著語】口鹽を喫する多きこと米を喫するが如し。趙州百二十歳の老翁だから、鹽も米と同樣に隨分喫つたものだらう。口一點も謾じ難じ。眼光がキラ〳〵してゐるので塵手一本胡魔化すことか出來ぬ、擇法眼の高きをいふ。口有句は宗旨にあらず。兩片皮を動する言句に著いてまわつたではトテモ眞意は伺はれぬ。口無言聖凡を絶す。無言舌の言句は無礙自在で凡聖迷悟に墮せぬよ

い說法ぢや。口也た是れ柏樹。乾坤を動亂するも柏樹子。口也た是れ柏樹。平和の籌も亦是れ此の柏樹、大そうな柏樹子ぢや。口甚としてか應ぜざる。天童がアノ位喚んでゐるのに聞えぬのか。通身無影像の趙州だから呼喚すれども首を廻さぬと見える。口天童は第二。叢林を擾亂させる者は趙州老計りでは有るまい、天童和尙尊公が先づ第二位かナ。萬松などはソンナ治亂の沙汰には與からぬ。口將ち來つて使ひ、用ゐて恰好。閑工夫だからどこへでもはまる、分別したらどこへもはまるまいぞ、口風流を買ひ盡して錢を著けず。眞の風流は金錢では買へぬ。無伎倆にして買ひ得た柏樹子の景色は三世諸佛も唯啞然として傍觀するのみよ。

第四十八則　摩經不二

示衆云。妙用無方有下手不得處。辯才無礙有開口不得時。龍牙如無手人行拳。夾山敎無舌人解語。半路抽身底是甚麼人。

【讀方】衆に示して云く、妙用無方なるも手を下し得ざる處あり、辯才無礙なるも口を開き得ざる時あり。龍牙は無手の人の拳を行ふが如く、夾山は無舌人をして解語せしむ。半路に身を抽んずる底是れ甚麼人ぞ。

【字義】龍牙云々とは會元卷十三に「僧龍牙に問ふ、十二時中如何が力を著けん、師曰く無手の人の拳を行うが如くにして始めて得ん」とある、木人歌ひ石女舞ふの類で、思量を絕した妙用をいふ。

【要解】神通妙用方絕無しといふやうな境界に成つても、劍刃上を涉り來れといはば手も足も出せ無くなる、辯舌縱橫無礙の者でも空刧以前に向つて一句道へといはばグーの音も出無くなる、是れ皆分別に涉り第二念に涉るからのことである。龍牙は無手の人の拳を行ずるが如くにして始めて得てんといひ、夾山の無舌人をして解語せしむといはれたが無手の拳・無舌の語これ佛祖の行持であり說法である。且らく有無の中路を絕して大いに出身の機略を施す底の甚麼人かが有るであらうか。文殊と維摩との相見に語默の二相を離れて刮目するがよからうぞ。

舉。維摩詰問文殊師利。何等是菩薩入不二法門（問處第幾）文殊師利曰。如我意者（醞造將來）於一切法（更嫌少）無言無說（把火照看）無示無識（好與劈口　有也未也）離諸問答（面皮厚多少）是爲入不二法門（如何是二）於是文殊師利。問維摩詰。我等各自說已（能說快說）仁者當說。何等是菩薩入不二法門（一遞一刮　不賭惡發）維摩默然（甚麼處去也）

【讀方】舉す。維摩詰文珠師利に問ふ、何等か是れ菩薩入不二の法門。文珠師利曰く、我が意の如

きは一切法に於いて無言無説、無示無識にして諸の問答を離る、是れを入不二の法門となす。是に於いて文殊師利維摩詰に問うて言く、我等各自に説き已る、仁者當に説くべし、何等か是れ菩薩入不二の法門。維摩默然。

【字義】◎維摩詰は又維摩羅詰といひ梵音キマラキールテ(Vimalakirtti)、淨名、無垢稱と譯せり、印度毘舍離國の長者で、釋尊と同時の人、在家にして菩薩行を修したから維摩居士といふ。此の本則に出た因縁は有名な維摩病牀の問答、維摩經不二法門品に詳しく見えて居る、維摩が無住の本より一切法を建立し、その森羅萬象を擧げて悉く不二の一法中に攝歸する法門を説示した時、文殊菩薩がすかさず不二法門とは如何と問ひ掛けたので端なく一場の法戰が開かれのである。◎文殊師利とは本錄の第一則に出てゐた。

【要解】不二の法門とは不一不二の法門で一とも二とも定らぬ中道實相の法門を云つてゐるのである、本則は説默の不二を以て之を示してあるから其の積りで見ねばならぬ。維摩不二法門品の長文ぢやが今は最も其の眼目だけを出して參學の衲僧に活機輪を得させやうといふのが天童の主意らしい。三十二人も御見舞ひ申した最後に出た文殊の入不二法門は無言無説、無示無識である、諸の問答を離れたところに言説し識示してゐる、松は直く棘は曲れりと各自に説き已つた、柳は緑花は紅と各自に説き已つた、是れは説の上の默である。維摩默然は默の上の説である。説默にかゝはらぬが故に説と現じ默と現ずることが出來る。永嘉の謂ゆる默の時説、説の時默で、説いて説いて説きぬいて而も默の道理がある、三年默を守つて曾て唇吻を濕さゞるも説いて縱横なる道理もある、佛祖の言句は皆是の通りである、是れを菩薩入不二の法門といふのだ、説默相並べて分別して居たらば驢年に至つても此の本則は透得することが出來まいよ。

【著語】□問處は第幾ぞ。　不二法門をも超絶した第幾を問うて來た。□好し劈口に塾を與ふるに。　文殊が何か言はんとする其の口をイキナリ塞いでやれ、言つたらばモー第二第三に落つるぞ。塾は塞に同じ。□醞造し將ち來れり。　文殊が何か手前味噌を擔ぎ出した、鼻持ちのならぬことぢやワイ。□更に少きを嫌ふ。　まだ不足とでも思つてゐるのか、一切の法に漏れるものは無からうぜ。□火を把つて照看。　ソー矢鱈に無々といふが能く燈火を點じて看たなら何か少しは有りそうなものだ。□有りや也た未だしや。　モー其の上に言ふことは有るまい、まだ何か言ひ殘したことが有るかナ。□面皮厚きこと多少ぞ。　隨分鐵面皮な男だ、ソンナに問答してゐて諸の問答を離るなどとは圖々しい言ひ分ぢや。□如何なるか是れ二。　不二の二が承り度い。□能説快説。　燈籠露柱且らく低聲、ソー無暗と朝から晩まで説きづめぢや實全く困つたナ。□一遞一刮惡發を賭にせず。　文殊と維摩は取遣り勝負はしても互ひに智音ぢやから惡聲惡罵に墮ちるやうなことは無い。□甚麼の處に去るや。　維摩は甚處に行つた、御不在では無いか、人々の維摩に返照してみよ。

頌云。曼殊問疾老毘耶　仁義道中　**不二門開看作家**　衲僧分上　**珉表粹中**

誰賞鑒（大辯若訥）忘前失後莫咨嗟（大智若愚）區區投璞兮楚庭臏士
璨璨報珠兮隋城斷蛇（夜光投人鮮不按劍）休點破（幸自完全）絕玼瑕（一任指點）俗
氣渾無却較些（相上觀人失之多矣）

【讀方】曼殊疾を問ふ老毗耶、不二門開いて作家を見る、珉表粹中誰か賞鑒せん、忘前失後咨嗟するこど莫れ、區區として璞を投ず楚庭の臏士、璨々として珠を報ず隋城の斷蛇。點破することを休めよ、玼瑕を絕す、俗氣渾べて無うして却つて些に當れり。

【字義】◎曼殊とは梵音曼殊室利（Manjusrī）の略で文殊師利に同じ。◎毘耶は毘舍離の略、維摩は毘舍離（Vaisālī）城中に生れ、其所に住んで居たから呼んで老毗耶といふ。◎珉表粹中とは「燕珉は玉に次ぐ、亦奪玉石と名く」とあり、又玉を包む石ともいふ。事文類聚後集十八に「珉中にして玉表」とあるが今茲では表に珉のみが表れて中に包まれた玉は格外の力量あるものでなければ容易に賞鑒の出來ぬといふ意。◎咨嗟はなげくこと。◎楚庭臏士とは韓非子の四卷和氏篇に「卞和荊山混岡の谷に於いて璞を得、楚の厲王に獻ず、王曰く石也と一足を刖らしむ、武王の卽位に及んで又之を獻ず、又一足を刖る、文王の立つに及んで璞を抱いて荊山の下に哭す、王召して問ふ、和曰く足を刖らるゝを怨みず眞玉以つて凡石となし、忠事以て慢事となすを怨むと、王石を剖かしむれば眞玉なり」とあるより出づ、臏士は刖刑に處せられた人の意。◎隋城斷蛇とは太平廣記四百二卷に「隋侯行いて大蛇の傷を被るを見、遂に神藥を傅けて去る、後に珠を啣んで以つて報ず、其の珠徑り寸にして純白なり、夜光明あり月の照すが如し」とある。◎點破、玼瑕とは前に珠玉のことが出たから其の緣で藺相如が瑕玼ありと指點して秦から卞和の璧をマンマと取りかへした故事にきかしたのである。

【要解】初めの二句に本則の由來を頌し、以下の句に珠に託して默と說、最後に說默不二の作家相見を頌して其の正宗を示す。文殊が毗耶離の老維摩の病氣を見舞つた、其の場で入不二法門を開いて作家と作家と相見といふ千載一遇の好機會が得られた。珠が石に包まれて表に現れぬのが默で、其の中に精粹の玉のあるのは照である、此の默と照とが橫に十方に亙りて內外不二であるから誰も賞鑒のしては有るまい、竪に三際に亙つて古今不二なる道理を知らば敢へて咨嗟するほどのことも無からう。卞和が珠を懷いて二度も刖刑に遭つて峴岡谷に哭してゐたといふが楚王が璞の珉表だけを見て粹中に暗いからのことよ、誰れか賞鑒せんの語をうけた。隋侯が斷蛇に報せられた夜光の珠は璨々と光を放つて忘前失後を照した、是れは咨嗟する莫れの句をうけて古今不二內外玲瓏の珠の光明を現した。是の如く內外玲瓏、默にして照、照にして默なる不二法門の明珠はモハヤ點破するの要は無い、內外ともに一點の瑕玼は無い筈ぢや、何故ならば眞とも俗とも、說とも默とも名けやうの無いほど俗氣が拔けてゐて毫も染汚するところが無い。却つて些に較れりはソコがマア幾等か

價値の有るところだらうといふほどの意、實は無價の寶珠で凡とも聖とも眞とも俗とも價値の出來ぬをいつたのである。

【著語】 □仁義道中。 文殊も同病相憐むで一返の挨拶ぐらゐせねばならぬと思つて出掛けたそうナ。□衲僧分上。 説默の二邊に墮せぬは衲僧として當然のことだ。□大辯は訥の若し。 説のとき默、默が眞の大辯舌よ。□大智は愚の若し。 小才士は底が知れてゐる、愚の若くにして眞の大智ぞ、默の有樣は愚ぢや。□直を獻じて曲を得たり。 珠を獻じて石と見られて足を刖られた、見る目が無いと直を曲と錯る。□夜光人に投ずれば劍を按せざること鮮し。 第二則の示衆其のまゝぢや。□幸に自ら完全。 默のとき默、説のとき説、いふまでも無いこと。□指點するに一任す。 人が何と云つても無瑕は無瑕よ。□相上に人を見れば之を失すること多し。 人相だけで人を判ずるとトンだ失敗をする者だ。説や默の語にばかりクツついてゐると説默に縛られるぞよ。

第四十九則　洞山供眞

示衆云。描不成畫不就。普化便翻斤斗。龍牙只露半身。畢竟那人是何體段。

【讀方】 衆に示して云く、描不成畫不就、普化は便ち斤斗を翻へし、龍牙は只半身を露はす。畢竟那人、是れ何の體段ぞ。

【字義】 ◎描不成とは五祖演禪師曰く「描や描不成、畫や畫不就」と、那一物の眞相は實に描くことも寫すことも出來ぬをいふ。◎翻斤斗とは會元第三卷盤山の章に「師將に順世せんとして衆に示して云く、人我が眞を邈し得るありや否や、衆寫す所の眞を將つて示す、師意に契はず、普化出て曰く某甲邈し得たり、師曰く何ぞ老僧に呈似せざる、化乃ち筋斗を打して出づ、師曰く這の漢後に掣風狂し去ることあらんと、乃ち奄化す」とある、斤は木を斫る道具で頭が重くて柯が輕いから能く蜻蜓かへりをする、今普化は翻斤斗して自己の所解を呈露したのである。◎普化は傳燈錄第十卷に「鎭州普化和尚は何許の人なるを知らず、幽州盤山寶積禪師に師事して秘かに眞訣を受け、佯狂して言を出す度なし、盤山順世に及んで北地に行化し或は城市或は塚間、一鐸を振ひて云く、「明頭來也明頭打云々」と、其の他種々の奇行が擧げてあるが今は其繁を避けて僧傳排韻七十九の所述を示すに留めやう、「嘗て臨濟を見、之に對するに驢鳴を以てす、後鐸を振つて棺に入つて逝く、郡人棺を掲げて之を親るに已に親えず、惟空中鐸聲の漸く遠きを聞くのみ、其由を測る莫し」」と。◎龍牙只露半身とは報慈が龍牙の半身の像に贊した故事をいふ、其の贊に曰く「日出でゝ山に連り、月圓にして戸に當る、是れ身無きにあらず、全露を欲せざるなり」と、林間錄に見えてをる。龍牙は龍牙山の居遁禪師で洞山大師の法嗣である。

【要解】 山水花鳥を描いても水の流るゝ音や花の香は畫くことは成就無い、師匠の寫眞を供養して

も其の法身に供ずるところが無くては何の要にも立たぬ。ソコで普化和尚は筋斗を打つて師の眞を邈得た、報慈は龍牙の半身に日出で丶山に連り、月圓にして戸に當ると賛したが、果して描いて眞を成したで有らうか。供じて法身に報い得たので有らうか。サー其の畢竟はどの樣な體段に描寫し圖畫したもので有らう、那人を供養する一事に至つては洞山供眞の一則を篤と參究するがよからうぞ。

擧。洞山供養雲巖眞次（誰道是假）遂擧前邈眞話（一廻拈出一廻新）。有僧問。雲巖道祇這是意旨如何（且喜不錯認）。山云。我當時幾錯會先師意（以己方人）。僧云。未審雲巖還知有也無（折草量天）。山云。若不知有爭解恁麼道（日出連山）。若知有爭肯恁麼道（月圓當戸）。

【讀方】擧す。洞山、雲巖の眞を供養する次で、遂に前の眞を邈するの話を擧す。僧あり問ふ、雲巖祇這れ是れといふ意旨如何。山云く、我當時幾ぞ過つて先師の意を會す。僧云く、未審し雲巖還つて有ることを知るや也た無しや。山云く、若し有ることを知らずんば爭でか恁麼に道ふことを解せん、若し知ることあらば爭でか背て恁麼に道はん。

【字義】◎擧前邈眞話とは洞山錄に云く「師行く（洞山が雲巖先師の下を辭するとき）に臨んで雲巖に問ふ、和尚百年の後忽ち人有りて師の眞を邈得するや否やと問はゞ如何が祇對せん、巖曰く、但伊に向て道へ、只這れ是れと」。眞を邈すとは眞相をあらはすといふ程の意である、眞を供養すとは眞法身を供養すること。

【要解】洞山和尚が先師雲巖曇晟禪師の眞像を供養する際に前に和尚百年後還りて眞を邈得すや否やの問話を持ち出された、スルト一人の僧が雲巖禪師曩に祇だ這れ是れと道はれた、アノ意旨は如何なものでごさると訊ねて來た。洞山は其の當時は幾ど先師雲巖の意旨を錯會てゐたよ。ハテ未審な、先師雲巖の還つて有ることを知つてお在かナ。ソコデ洞山は若し有ることを知らざればどうして祇這是と道ふことを知つてゐやう、若し有ることを知つて居らばどうしてアノやうに道ひませうぞと答へられた。文言だけではサッパリ解らない。是れは知不知の牆壁をガラリと取り除してかゝらぬとダメである、雲巖をば火葬場の灰となつた先師計りに取りついてゐては話がトンチンカンになつて仕舞ふ、知は是れ妄覺、不知は是れ無記で有つて知不知の邊際ではトテモ雲巖の眞を供養することは出來ぬ。惜いことに僧はまだ此の邊にうろついてゐる。一體無記は昏沈、妄覺は散亂、此の昏散を先づ撲落してかゝらねば未來の面目は現前てこない、此の本來の面目を今は雲巖といつたり祇這是といつたりしてゐるのだ、人々の雲巖である、人々の雲巖が日用光中無爲無作にして運足轉歩する祇這是である、毫も昧さない、一點の私が無い、是れが恁麼の活計である、そこを篤と會得せねば此の本則は死んで仕舞ふ。

【著語】 口誰か道ふ是れ假と。雲巖の法身が宇宙に遍滿してゐる。眞など丶別にいはずとも誰も假だといふ者は無いぞ。口一廻拈出すれば一回新なり。昔噺では無い、卽今自己の問題ぢや。口且喜すらくは錯つて認ざることを。自分免許で無く有り體に申し出たところは喜ばしいぞ。口己を以て人に方ふ。自己の錯會で人の會をくらべまいぞ。口草を折つて天を量る。草を以て雲巖の旻天を量らんとしても及ばぬことぢや。口日出で丶山に連る。次の著語と共に此の二句は龍牙半身を贊する頌である。知音同志だから半面だけいへば兩方で合點々々をする。天曉不露の道理よ。口月圓にして戸に當る。圓月でも戸に隱れて半分は見えぬ、といつて半月ともいへぬ、凡聖を脫體しての半滿月だ。學者の方へかけていへば半面の觀察ではいけぬ、全分を會得せよといふやうにも聞える。

頌云。爭解恁麽道（暗裏抽横骨）五更雞唱家林曉（金烏東上）爭肯恁麽道（明中）千年鶴與雲松老（玉兎西沈）寶鑑澄明驗正偏（事窮的要）玉機轉側看兼到（交互明中暗）門風大振兮規步綿綿（西天令嚴）父子變通兮聲光浩（坐舌頭）（見過於師方堪傳授）

【讀方】 爭でか恁麽に道ふことを解せん、五更雞唱ふ家林の曉。爭か肯て恁麽に道はん、千年の鶴は雲松と與に老ふ。寶鑑澄明にして正偏を驗す、玉機轉側して兼到を看よ。門風大いに振つて規步綿綿たり、父子變通して聲光浩々たり。

【字義】 ◎正偏とは正は平等絕對、偏は差別對待で、體用といふに同じ。◎玉機轉側とは王を載せる器、それが左右に轉じ動く處に正偏回互の消息が窺がはれる。◎兼到とは兼中到の略で正偏五位の最後の位、正偏體用を超絕して而も回して更に相涉るといふところである。◎規步とは規行矩步と熟字して洞山の規矩、行步の如く綿々として絕えることなきをいふ。◎聲光は聲色光貎にて聲や面影のこと。

【要解】 洞山大師の本則であるから正偏を以て頌出したので初めの四句に不知の正位と知の偏位とを明し、次の二句に正偏回互兼中到のところまで拈じ擧げて置いて、最後の二句に血脈不斷の門風と讚歎したのである。本則の爭か恁麽に道ふを解せんは偏位で家の軒端に鷄鳴告げ渡る五更の時節で知の方ぢや、爭が肯へて恁麽に道はんは正位で千年の老鶴が雲に聳ゆる松が枝に巢ふ時節で不知の方ぢや。洞山大師の寶鑑は一點汙れ無きが故に正偏明かに照して毫しも私せぬ、而も正にも偏にも有にも無にも、知にも不知にも明にも暗にも更に滯らずして機輪を轉ずること玉の盤に走るよりも宛轉自在である。正偏回互卽ち兼到の一位にも足を停めぬ。是の如きの門風は綿々として規矩に違はず大いに進步し振興してゆく、雲巖の父と洞山の子と、或は青山の父と白雲の子と向上向下に變通を現じて其の名聲德光が廣く天下に流布し尊信せられてゆくことは誠に感歎に堪へざ

る次第である。

【著語】□暗裏に横骨を抽んず。明中に暗を抽き、暗中に明を抽く、抽いてみると物は無い。□金烏東に上る。太陽が東天に昇りかけた、萬象歴然ぢや。□明中舌頭に坐す。明中に暗あり、暗中に明あり、言語では及ばぬ。□玉兎西に沈む。お月樣までが西に沈んだ、天地一物無し。以上の著語は隔句に對してをる。明の偏位、暗の正位、明中暗、暗中明の道理を道つたものである。□事窮つて的要なり。正は正のなり、偏は偏のなり、的切鏡にうつりて分明ぢや、少しも間違は無いぞ。□交互す明中の暗。明かとすれば暗、暗かとすれば明、明暗は交互すれども分明にして昧さぬ。□西天令嚴なり。佛法の正令は嚴重にして一歩も規矩に外るゝことを許さぬ、洞山綿密の宗風は左もあらん。□見、師に過ぎて方に傳授するに堪へたり。洞山の眼、雲巖に超越して始めて父子變通の自由がきくのぢや、源深うして流れ長ず、青は藍より出でて藍よりも青しである。

第五十則　雪峰甚麼

示衆云。末後一句始到牢關。巖頭自負上不肯於親師。下不讓於法弟。爲復是强生節目。爲復別有機關。

【讀方】衆に示して云く、末後の一句始めて牢關に到る。巖頭自負して上親師を肯はず、下法弟に讓らず。爲復是れ强ひて節目を生ずるや。爲復別に機關ありや。

【字義】◎末後一句とは最後窮極の言句である。洛浦上堂して曰く「末後の一句始めて牢關に到る、要津を鎖斷して凡聖を通せず」と、此の堅牢なる關門は凡聖等の二見對待の容るゝを免さぬ。◎上不肯親師云々とは巖頭の師匠德山を肯がはぬといふこと、實例は第五十五則を參看するが宜しい。◎下不讓法弟とは巖頭の法弟にあたる雪峰に一歩も讓らぬといふこと。本則が其の實例である。

【要解】理盡き詞窮るところの末後の一句で以て始めて生死の牢關を打破することが出來る。只此の一句は文字言語に干らぬ一句である。巖頭は自負獨立、天上天下唯我獨尊の境界に立つた時には師匠の德山にも法弟の雪峰にも一歩も讓らず一寸の猶豫もしない。人々誰しも此の境界ではあるがサー其れだけの自覺と自信とを得て居るかナ、卽ち末後の一句が道ひ得るかどうぢやといふのだ。お互に他の德山や雪峰の御伴僧はやめて巖頭の如く人々鼻孔遼天の氣勢を示しては如何なものぞ。是れは節目無きところへ强ひて節句を生ずるといふもので有らうか。或は又何か別に機關が有つてのことか、先づ本則に參じてのことに仕樣では無いか。

擧。雪峰住庵時。有兩僧來禮拜（尋香逐氣）峰。見來以手托庵門。放身出云。是甚麼（此猶是拋身勢隱身勢作麼生）僧亦云。是甚麼（果然不識）峰。低頭歸庵（莫道無語好）僧。後到巖頭（傳消寄息）頭問。甚麼處來（不鑚不穴）僧云。嶺南（這裏是嶺北）頭云。曾

到雪峰庵 熟處難忘 僧云。曾到 更謂不得 頭云。有何言句、不酬不休 僧擧前話、一字入公門 九牛拽不出 頭云。他道甚麼 却好低頭便出 僧云。他無語低頭歸庵 怎麼則不曾到雪峰 頭云。噫當時不向他道末後句 而今道了未 若向伊道天下人不奈雪老何 何不道我 便是雪老 僧至夏末再擧前話請益 好酒醒 人遲 頭云。何不早問 食瞌 睡 僧云。未敢容易 可憐慣 叢林 頭云。雪峰雖與我同條生不與我同條死、索另者 先窮 要知末後句只這是 旋蒸 熱賣

【讀方】 擧す。雪峰住庵の時、兩僧あり來つて禮拜す。峰、來るを見て手を以つて庵門を托して放身して出でて云く、是れ甚麼ぞ。僧亦云く、是れ甚麼ぞ。峰、低頭して庵に歸る。僧、後に巖頭に到る。頭問ふ甚麼の處より來るや。僧云く、嶺南。頭云く、曾て雪峰に到るや。僧云く、曾て到る。頭云く、何の言句かありし。僧、前話を擧す。頭云く、他は甚麼とか道ひし。僧云く、他、語無うして低頭して庵に歸る。頭云く、噫當時他に向つて末後の句を道はざりき、若し伊に向つて能はゞ天下人雪老を奈何ともせじ。僧、夏末に到つて再び前話を擧して請益す。頭云く、何ぞ早く問はざる。僧云く未だ敢て容易にせず。頭云く、雪峰我と同條に生ずと雖も我と同條に死せず、末後の句を知らんと要せば只這れ是れ。

【字義】 ◎以手托庵門放身出とは手づから庵門を開いて飛び出たこと。◎當時不向他道末後句とは巖頭と雪峰とは法眷であるから、彼れ雪峰が鰲山嶺で成道をした時、末後の句丈は說示して聞かせなかつたとの意。◎請益とは學人が古則公案に就いて師家に審問して垂誡を受けることをいふ。◎天下人奈雪老何とは天下の人は雪峰に對して指もさすことは出來ぬであらうといふ意。

【要解】 前の第四十九則と殆ど同じで祇這是を末後の句と語を代へたまでゝある。祇這是では早呑込しやすいから末後の句としたので、此の句は平等、絶對の換語である。宇宙絶對の上からいへば上諸佛の禮すべきも無く、下己靈の重んずべきも無い。此の境界に達するを末後の一句といつたのだが、古人は其の地に至らしめんが爲に抑揚褒貶して種々の方便を設けられる。本則も其の積りで見ないと、語に惑はさるゝ懼れがあるから充分其の心して參ずるがよい。雪峰會昌沙汰の後、庵を結んで住せられた。其の時に二人の僧が來て禮拜をした。スルト雪峰は庵門を托開いて飛び出しイキナリ是れ甚麼ぞとやつた。是れが既に末後の一句、脫體の爲人ぢや。僧の是れ甚麼ぞは鸚鵡がへしぢやが、雪峰は老功を經た作家で急に手を替へて恐れ入つた風をして庵に歸つた。然し惜しいことに兩僧には光焔が無かつた。此の僧後に巖頭全豁のところへ行つた。甚麼處から來た嶺南から、來た。雪峰に拜登したか、まゐりました。何か面白い話でも有つたか、ハイ前話のことが御座りました。ソレデ雪峰は甚麼した、一言も吐かずに默つて頭を低れて庵に歸りました。是れまでの問答は

一挨一拶で通常一樣ぢやが、是れからが巖頭自負の末後の句である。ア、當時雪峰に末後の句を敎へて置けば好かつた、若しも雪峰に一句を知らして置いたことならば天下の人が總出で雪峰老漢をいひ込めやうとしてもビクともするでは無かつたのぢやに、兩僧等にマンマとしてやられたは氣の毒のことで有つた、巖頭は僧の乘つてゐる船に追手を吳れてゐるのぢやがサッパリ乘り出して來ぬ、徒らに重荷に小付となつて仕舞つた。それで何事も無しに其の場はすんだ。九旬一夏の末、自恣の日あたりになつて再び例の問題を擔ぎ出して請益を願つた、ナゼモット早く問はぬ、必死に工夫してゐたがどうも未だに埒が明きませぬ。フームソーカ、雪峰と巖頭とは德山の同じ三條椽下に生れたが、雪峰は雪峰巖頭は巖頭で決して同條下に死にはせぬぞ、といつたが雪峰と巖頭が、兩人あるでも無い。生が生で無く死が死で無い。同條生不同條死と翻身し來れば敢へて末後の句を知る要も無からう。それとも強ひて聞き度いとならば只這是ぞ。只這是は末後の一句でモハヤ言語文字の盡きたところぢや、雪峰は是れ甚麼ぞといひ、巖頭は只這是といふ、何にも異つたことは無い。其のまゝそれである。絕對相對の節目も立し無いところである。

【著語】□香を尋ね氣を逐ふ。人に聞いて解るもので無い。自己に向つて工夫せよ。□此れ猶ほ是れ拋身の勢、隱身の勢作麼生。先づ拋身の術をやつて見せた。その中に、屹度隱身の術に早化りするよ、萬松見拔いてゐる。□果然として知らず。果せる哉、其の雪峰にお氣がつかぬ、つまらぬ男ぢや。□語無しと道ふこと莫くんば好し。無語と計り見るなよ、默には雷の響きがあるぞ。□消を傳へ息を寄す。郵便脚夫か電話交換手のやうな僧だ。一生を虛しく過す輩である。□鑽せず穴せず。障子紙のところに蜂が來てブンブンいはしてゐても一とりでは出てゆけぬ、穴をあけて出してやらねばならぬ。□這裏は是れ嶺北。這裏は嶺北ぢやぞよ、去來變異無き脚下に氣をつけよ。□熟處忘じ難し。昔し骨折つたところは忘れられぬと見える。□更に諱むことを得ず。無遠慮な奴だ。然し正直といへば正直さ。□醋せざれば休せず。口が醋くなるまで問ひ詰めねば氣が濟まぬのが巖頭の落草さ。□一字公門に入れば八牛挽けども出でず。一度名刺を公門に通じたが最後、八頭の牛車を以ても取り戻せぬ、ウッカリ一言を吐くまいぞ。□却つて好し低頭して便ち出づるに。萬松ならばサッサと低頭して歸庵するところだ。此の僧愚圖々々といつまでも問ひ詰められてゐる。□恁麼ならば則ち曾て雪峰に到らず。雪峰の影法師だも見て來なかつたのだ。□而今道ひ了るや未だしや。まだ道つて了はぬのか。末後の句に道不道の前後のといふことは有るまいぞと痛處に針を與へた。□何ぞ我れ便ち是れ雪老と道はざる。其の雪老は我ぢやと道へばよいに、人々の雪老を忘却してゐるでは無いかノ。□好酒人を醒すこと遲し。末後の句に醉つてゐる、まだ醉語を並べてゐる。□瞌睡を貪る。九旬間居睡りで過したのだらう。□可噉叢林に慣る。叢林ずれがして來た、口だけは洒落たことをいふ。□另を索むる者は先づ窮す。另は分也分家でもするのか家財道具を折半なぞしてサ、ソンナことをすると兩家共潰れぢや。生死一枚の家常を二つに分けるにも及ぶまい。□旋蒸熱して賣る。只這是は雲巖の古物ぢや。巖頭又しても燒

き直して押し賣りする氣か、チト臭味が付いてゐるやうだよ。

頌云。切磋琢磨（不因一事）變態殽訛（不長一智）葛陵化龍之杖（已闘過溶穿雲）陶家居蟄之梭（猶見倚牆貼壁）同條生兮有數（性相近也）同條死兮無多（習相遠也）末後句只這是（且信一半）風舟載月浮秋水（切忌逐跟）

【讀方】 切磋し琢磨し、變態し殽訛す。葛陵化龍の杖、陶家居蟄の梭。同條に生ずるは數あり、同條に死するは多無し。末後の一句只這是、風舟月を載せて秋水に浮ぶ。

【字義】 ◎切磋琢磨とは「骨を治むるを切といひ、象を磋といひ、玉を琢といひ、石を磨といふ」とある。骨象玉石はいづれも堅硬い物、みがいて眞色をあらはすこと。◎葛陵化龍之杖とは「費長房は汝南の人、嘗て市の椽となる、老翁あり、薬を賣る、一壺を肆頭に掛け、市罷めば輙ち跳つて壺中に入る、人之を見ることなし。唯長房樓上より之を見て異とす、因て往て再拜して酒脯を奉ず。翁乃與に倶に壺中に入るに惟り玉殿嚴麗を見る、後に長房辭して歸る、靑竹杖を與へて曰く「此に騎て之く所に任せば自から到らんと、既に到らば葛陵に投ずべしと、房杖に乘じて須臾にして歸る、竹杖を以て葛陵に投じ、顧視すれば龍と化して去る」と後漢書列傳七十二にある。◎陶家居蟄之梭とは「晉陶侃少き時雷澤に漁す、一梭を得たり、持ち歸つて壁に掛く、後に雷電を聞く梭龍と化して去る」と古書にある。蟄は藏るゝの意。

【要解】 一二の句は雪峰巖頭の兄弟が此の僧を鍛錬する慈悲を伸べ、次の二句は兩老が變通の手段を露出したのである。此の僧の瓦礫を琢磨して鏡とし頑石を切磋して玉と爲して盡十方に大光明を放たしめんとて雪峰巖頭の兄弟で低頭歸庵の變態をして見せたり、末後の句を道はぬなど〻殽訛を使つたりして御座る。變態殽訛もする筈よ、杖を葛陵に投ずれば龍と化したといふ變通、陶侃の家壁に掛けて置いた機梭が龍と化し去つたといふやうな變通を有する兩老で有るから、丸つきり其の境界が窺はれぬ。此の僧の鈍眼を以てどうして此の變幻通力が會得出來やうぞ、然し人々の有する杖も梭も切磋し琢磨さへすれば自から龍と化するの通力あることを忘れてはならぬ。同條に生ずるは數あり多無し、同條に死するは多無し數ありで有つて、別々なるが如くで何にも異つたことは無い。雪峰と巖頭とは同條に生じたやうで同條に死せぬ變通もある。同條に死したやうで同條に生せぬ道理もある。此の兩老の如きは智音と智音、作家と作家、其の人と其の人との相見だから難兄難弟、すきな眞似をして見せる。末後の句、只這是の六字が胸痞へぬやうにせよ。順風に帆を張りて秋晴れの明月の夜、澄み切つた大海を浪のまに〳〵飄々として棹さす其の風流を誰れか味ふ者があるか、巖頭雪峰の境界は實に此にある、イヤ是れは天童の境界ぢや、此に至つてはモハヤ差別平等の浪も立たぬ是非分別の風も無い。サー早く天下の衲僧、此の合同船に乘じて人々自由の櫓櫂を

かけてはどうだ。

【著語】一事に因らざれば。□一智に長ぜず。此れは二句一連で雲門の語で有る。切磋琢磨とか變態殺訛とかゴテ〳〵手數なことをせずとも、一言にスパリとやつた方が好い。事多ければ却つて迷のたねぢや。□已に聞く海を過ぎて雲を穿つことを。龍と化したことは知つてゐやうが、其の龍が萬松の手中に在ることは恐らくは知らぬだらう。□猶ほ見る牆に倚り壁に貼くことを。牆壁瓦礫が其のまゝ龍だ、別に化して天に昇らずとものことよ。今は龍の天地をいつてをる。□性相近し。□習相遠し。『論語』の語をソックリ借用。生のまゝが好い。死のまゝがよい、いろ〳〵の計度分別が天地の懸隔を爲して生死を二つに見るのだ。生死去來眞實人體ぞ。□且らく一半を信ず。早呑込みをしてはいかぬ。舌頭に轉ぜられるな。□切に梁踉することを忌む。梁踉はぐらかす、怠け者のこと、普請の際ぐらかし雲水があるが萬松は大嫌ひぢや。愚圖々々してゐると乘り遲れるぞ、分別面をせずと乘り込んで仕舞へ。

第五十一則　法眼舡陸

示衆云。世法裏悟却多少人。佛法裏迷却多少人。忽然打成一片。還著得迷悟也無。

【讀方】衆に示して云く、世法裏に多少の人を悟却し、佛法裏に多少の人を迷却す。忽然として打成一片ならば、還つて迷悟を著得せんや也た無しや。

【字義】◎世法裏とは經卷に依り知識に乘じて本分事を了得することを佛法裏といふに對して日常運作轉倒の上、若くは雨竹風松によつて解脱の法門を悟了するを世法裏と見て宜しからう。育王懷連禪師上堂の語に依つて造語したものらしい。◎打成一片とは打して一片と成すの意で對待の二片を見ざる打坐の正當をいふ。

【要解】三世を實の如く見るときは治生產業更に實相と違背せぬから世間相常住で世法が其のまゝ佛法となる、佛法と雖も法執忘せず己見尙ほ存する時んば却つて魔說に同じく、多少の人をして迷見を生ぜしむるのである。世法佛法迷悟等の對待を打して一片と成したのが卽ち坐禪である、忽然として一念囘機のところには迷悟も面出しの仕樣が有るまい、其所を確と見極めて置くことが大切である、先づ本則に就いて大いに參究するがよからう。

舉。法眼問覺上座。舡來陸來（大似有兩般）覺云。舡來（深談實相善說法要）眼云。舡在甚麼處（恐怕不實）覺云。舡在河裏（果然有下落）覺退後。眼却問傍僧云。儞道適來這僧具眼不具眼（可惜許）

【讀方】擧す。法眼、覺上座に問ふ、舡來か陸來か。覺云く、舡來。眼云く、舡甚麼の處にか在る。覺云く、舡は河裏にあり。覺退いて後、眼却つて傍僧に問うて云く、儞道へ適來の這の僧眼を具するや眼を具せざるや。

【字義】◎法眼とは支那七宗の一なる法眼宗の祖文益禪師のこと。◎覺上座は汾陽昭禪師の法嗣、瑯琊慧覺禪師のことであらう。◎舡來とは舡は船也、船に乘つて來たといふ意。◎陸來とは陸上を徒歩いて來たと云ふ意。◎適來とは支那の俗語、先刻先程といふ意。◎傍僧とは傍に居た坊さんのこと。

【要解】本則は宛かも自力他力の問答のやうで有るが佛法の眞の有り難味は自力他力を超越したところにある、超越は卽ち融合で世法と佛法、眞諦と俗體その二見の角の取れた樣子である、其の立場、坐りを法眼禪師は驗してゐらるゝのである。陸路を步いて來たか舡に乘つて海路を來たか、親切な問ひである、覺上座は正直に舡で來ましたといふ、それならば舡は甚麼處に在るか、舡は河裏に在いてある、少しも滯りは無いやうであるが順逆の波浪に動搖はせぬか、世法佛法の船醉ひはしてゐぬか、迷とか悟とかいふ船暈はしてゐぬか、眞實舡を乘り捨てゝ大盤若の境界を得て居るか法眼は此を確むる爲に傍僧に向つて適來の這僧、具眼か不具眼か儞道つて見よと的面の答話を釣つたが惜しいことに生憎挨拶のしてが無かつたらしい、天下の諸人に向つて今尙ほ其の穿鑿が嚴しいのぢや、誰か自由に口を開き得る者が有るかナ。

【著語】口大いに兩般あるに似たり。舡來と陸來と二た路ありそうぢやが佛法は元來一路涅槃門なることを知らぬのか。口深く實相を談じ善く法要を說く。二念に涉らず舡來と言ひ切つたところは大丈夫の相がある、實相無相の法門毫も染汚せぬ自由を得て居るらしい。口恐らくは不實を怕る。假り物では有るまいかと親切にも再び衒いてみた。口果然として不落あり。萬松が思つた通り果して落付が有つたよナ。口可惜許。法眼は餘計な世話を燒いたものだ。傍僧は痛くも無い腹をさぐられて氣の毒なことよ。

頌云。水不洗水（絕點澄清）　金不博金（鍊做一塊）　味毛色而得馬（不以相取）　靡絲絃而樂琴（非可以聲求）　結繩畫卦有這事（法出姦生）　喪盡眞淳盤古心（弄巧成拙）

【讀方】水、水を洗はず、金、金に博へず。毛色に昧うして馬を得、絲絃靡うして琴を樂しむ。繩を結び卦を畫いて這の事あり、喪盡す眞淳盤古の心。

【字義】◎昧毛色の句は淮南子道應の訓に曰ふ「秦の穆公伯樂をして九方堙を擧げて馬を求めしむ、三月にして返る、曰く馬を得て沙丘にあり、牡にして黃なり、馬の至るに及んでは則ち牝にして驪なり、公伯樂にいふ、子が求むる所の馬は毛色牝牡をだも知らず、敗しぬ。伯樂大息して曰く、以て玆に至れるか、堙が觀る所のものは天機なり、其の精を得て其の麤を忘れ、其の內を見て其の外

を忘るゝなりと、果して千里の馬なりき」の意を依用せるもの、名馬伯樂になれば毛色の如何によらずして馬の良否が明かに曉るをいふ。◎靡絲絃の句は晋書隱逸傳にある「晋の陶潜字は元亮、大司馬侃が曾孫なり、性音を解せず、素琴一張を畜ふ、絃徽具らず、朋酒に會ふ毎に、撫して之を和して曰く、但琴中の趣を識らば何ぞ絃上の聲を勞せんと」の意を轉用せしもの。◎結繩畫卦云々とは支那では上古には繩を結んで文字に代へて約束した、包犧氏に到つて天象地法を觀察して遂に八卦を劃する樣になつたといふ何れも文字の成立せぬ以前のこと。◎盤古心とは事物紀原の一に「天地渾沌として鷄子の如し、盤古其の中に生ず」とあつて支那開闢の祖を盤古といふ、開闢時代といふこと。◎眞淳とは盤古時代の至つて純朴質直なる狀態を示す語。有無迷悟に渉らざる當處の形容。

【要解】　初めの二句は法眼と覺上座との道力相等しくして一異の量を滅することを敍ぶ、三四の句は見聞の上から聲色に墮せぬ眞淳盤古の境界を頌し、最後の二句に其の反對をいつて朕兆以前の消息を明らかにした。水と水とならば洗ふ要も無い、金と金とは博へるに及ばぬ、賓主一枚師資一面の樣子である。方塤が馬を鑑識するに毛色に眼を著けずして千里の伯樂を見わけ、陶潜は絲絃沒き琴に依つて眞の奏樂を聞きわけた、得るところ樂しむところ物色に跡せず、音韻に墮せざる見色聞聲である。眞淳盤古の消息は是の如く太平無事で有つたのに繩を結び卦を畫してつまらぬことを仕始めたものだから空王以前の景色はスッカラ喪しなはれて、迷悟や凡聖や自力の他力の對待世界となつたは惜しいことをした。干戈を動せずして太平を致すで坐禪の正當はいつも眞淳盤古、無事太平にして而も能く沒絃琴を樂しみ、絕毛色の俊馬を識得するにある、今本則に引きあて、法眼の落草を歎美したのである。

【著語】　□絕點澄清　法眼の心水も覺上座の心水も澄みきつて一點の濁りが無い。□錬つて一塊と做す。生佛も迷悟も錬つて一塊の眞金とした、此の那一寶何と名けたものぞ。□相をもつて取ることを得ず。□聲をもつて求むべからず。此の二つの著語は頌意に其のまゝ贊成。□法出でて姦生ず。法律を立てると網をくゞる罪人が出來る。好事も無きに如かずだ。□巧を弄して拙と成す。角を矯めて牛を殺すの類。玉、文を雕つて以て淳を喪すの憾みあり。

第五十二則　曹山法身

示衆云。諸有智者以譬喩得解。若到比不得類難齊處。如何說向他。

【讀方】　衆に示して云く、諸の有智のものは譬喩を以て解することを得、比することを得ず、類して齊うし難き處に到らば如何ぞ他に說向せん。

【字義】　◎諸有智者の九字は法華譬喩品の文。◎類難齊とは甚だよく似て居ても而かも之を相齊しいといふ事は出來ぬをいふ。寶鏡三昧の「銀盌に雪を盛り明月に鷺を藏す、類して齊しからず」の

語から出たのである。

【要解】　世間出世間諸有の法に於いて深淺輕重千差萬別にして難解難入なれども智慧ある者は種々の譬喩を以て巧みに解了せしめるが、若しも銀盌に雪を盛り明月に鷺を藏すといつたやうに譬喩にも權方便にも及ばざるところの謂ゆる類して齊しきもの丶無い場合が生じたら、何と他に向つて說法したもので有らうか。言語道斷にして一切の方便を離れた接化の仕方が拜見し度くば曹山法身の話に就いて參究するが宜しい。

舉。曹山問德尙座。佛眞法身猶若虛空。（官不容針）應物現形如水中月。（私通車馬）作麽生說箇應底道理。（又手近前云喏）德云。如驢覰井。（落花有意隨流水）山云。道卽太煞道。只道得八成。（欲窮千里目更上一層樓）德云。和尙又如何。山云。如井覰驢。（流水無心送落花）

【讀方】　舉す。曹山、德尙座に問ふ、佛の眞法身は猶ほ虛空の若し、物に應じて形を現ずることは水中の月の如し、作麽生か箇の應ずる底の道理を說かん。德云く、驢の井を覰るが如し。山云く、道うことは卽ち大煞だ道ふ、只八成を道ひ得たり。德云く、和尙又如何。山云く、井の驢を覰るが如し。

【字義】　◎佛眞法身以下十六字は北涼曇無讖譯の金光明經四天王品中にあるところの四天王讃佛の偈三十四句ある中の四句。◎曹山は洞山良价禪師の法嗣。撫州曹山本寂禪師のこと。傳燈に「泉州蒲田の人、姓は黃氏、少にして儒學を慕ひ、年十九にして出家し、後洞山に參じて言下に旨に契ひ、洞山深く之を器とす、此れより入室して密かに所解を印す、後請を受けて撫州曹山に止る、後荷玉山に居す、二處の法席學者雲集す、天復辛酉六月十六日示寂す、壽六十二、元證大師と諡す」とある、洞山の宗風は此の人に到つて一層隆んとなつた、曹洞の稱は玆から出て居ると云はれて居るくらゐである。◎德尙座の尙は上と同じである、曹山禪師の傳に彊德上座といふのがある、或は其の人かも知れぬ。◎太煞とは支那の俗語、はなはだ、甚に同じ。◎道得とは言得に同じ、いひえたり。◎八成とは十成に二成だけ不足といふ意味でまだ〳〵十分とは道へぬといふこと。

【要解】　理體の法身と現形の應身とが一體となつて日用光中の上に活現成せしめやうとするのが本則の主眼である。曹山の德尙座に問うところは金光明經其の儘の引文ちやが箇の應ずる底の道理を說かんの一語に佛身を活かして來た、人々の眞法身は如何に應現してゐるか、サー眼前に應物現形してみよといふ勢ひである。驢の井を覰る、無心にして無心に映ず、對して對するの相無し、是れ德尙座の應身なれども曹山未だ許さず、大分うまいところを道つてゐるがまだどうも痒いところに手の屆かぬ態だ、井の驢を覰るに何の情識分別があらう、能所の相も無ければ彼我の二見も無い、盡天盡地の眞法身で猶若虛空と現成した、此の時には法身が應物現形したなど丶いふ隙間が無

い、其の名相を絕してゐる、是れが吾人日常の運足轉歩で無くてはならぬ。

【著語】 口官には針を容れず。虛空に隙間といふものは無い、針劄不入ぢや。口私には車馬を通ず。一月天に在つて影萬水に涵す、自由自在に去來する。口叉手近前して云く喏。萬松の應身佛である、鐘はヂャンと響き太鼓はドンと鳴る、應底の道理實に神通無方では無いか。口落花意あつて流水に隨ふ。詩人が觀ると落花にも意あり、流水にも情ありといふ、本來驢も井も無心なれど德尙座の見處に無念の念が殘つてゐる。口千里の目を窮めんと欲すれば。口更に一層樓に上れ。二句一聯。大分結構な境界ぢやが百尺竿頭更に進一歩が肝腎よ。口流水は心無くして落花を送る。前に應じた語よ。無心の落花が無心の流水に送られる、無心の一枚である。虛空と法身、落花と流水、是れ應か不應か、能く返照して看るがよい。

頌云。驢覰井（五更侵早起）　井覰驢（更有夜行人）　智容無外（天下衲僧跳不出）　淨涵有餘　肘後誰分印（天眼龍睛不可窺）　家中不蓄書（眞文不醋）　機絲不掛梭頭（萬象莫能逃影質）事　文彩縱橫意自殊（花又不損　蜜又得成）

【讀方】 驢井を覰、井驢を覰る。智容れて外るゝ無く、淨涵して餘あり。肘後誰か印を分たん。家中書を蓄へず。機絲掛けず梭頭の事。文彩縱橫意自ら殊なり。

【字義】 ◎肘後誰分印とは史記趙の世家に「簡子諸子に告げて曰く、吾が寶符を常山の上に藏す、先に得るものは賞せんと、諸子走せて常山の上に行き、求むれども得る所なし、毋卹還て曰く、已に符を得たり、簡子曰く之を奏めよ、毋卹云く、常山の上より代を望めば代取るべしと、簡子是に於いて毋卹が果して賢なるを知る、即ち太子伯を廢して毋卹を以つて太子とす」とある處から出た語で、肘の後の寶符の中に藏してある心印に就いていふ。◎家中不蓄書とは嘗て洞山が雲巖の試問に對して「他の屋裏多少の書籍かある」と答へた事がある、今それを轉用ゐたのである。◎機絲不掛梭頭とは梭は織物を作る具、絲を機に掛けて梭を以ては織出さぬの意。◎文彩とはあや模樣のこと。◎縱橫とは自由自在の意。◎殊なりとは異つて居ること。

【要解】 初めの二句に本則を擧標し、三四の句に月と水とに喩へて智境一如を頌し、五六の句に佛祖不傳の妙を明し、末の二句に虛にして應ずる現形の不染汙を敍ぶ。德尙座は驢覰井といひ、曹山和尙は井覰驢といつた、此の語決して分別を以て見まいぞや、井も驢も無心にして毫釐も情識は無いぞ。眞法身は如水中月で、智の月は虛空に光明を放つて智光の外に漏るゝものとては無い、淸淨の心性水は天地乾坤を涵して餘すところは無い、千江水あり千江の月、法身と應身とは無二無別にして形を現じ物に應ずる妙不思議の當體をいつたのである。これは衆生と懸け隔れた遠い佛身の話では無い、人々も亦此の三身を具足してゐるので有つて佛の心印を借りたでも無ければ一代藏經の口眞似をするでも無い、一念發心歸源の當處に於いて箇々自受用三昧に住し、茶裏飯裏別處に

向はすといふ大安樂の境界で有る。自然の妙趣を看よ、機具を建て梭をかけて五色の絲を遣り繰りして織り出した者は無いけれども、春來れば百花爛漫、秋至れば千山紅葉、文彩縱橫にして春風秋月意のまゝに觀照することが出來るでは無いか、何も小刀細工の分別は要らぬ、飯來れば口を張り、睡り至れば眼を合する、是れ實に無心にして道に合する天眞の發現で、此の外に眞法身も應物現形も無いのである、卽處々々に如水中月なるを無作の妙用といひ、文彩縱橫といひ、不現而現といふのである。

【著語】□五更早を侵して起く。　五更の一點に德倘座は飛び起きた積りだつたが。□更に夜行の人あり。　曹山はモット以前、夜行列車でトックに到著してゐた、上には上のあるものぢや。□天下の衲僧跳不出。　天下の衲僧といはれる人も虛空の外へは出れまいよ。□萬象能く影質を逃るゝ莫し。　萬象には質と影とが逃避することの出來ぬやうに、法性水に漏るゝ一滴は無いぞ。□天眼龍睛も窺ふべからず。　勝れて能く見ゆるを天眼とも龍睛ともいふが、此の分印のところは窺ひがつくまい。□眞文は酢ならず。　味無うして辛酸ならざるを眞文といふ、無味の書で文字言句では解らない書だ。□花又損せず。　花を採るの蜂は餘香を損せずで無心にして色香を損じない。□蜜又成すことを得。　それで立派な蜜を作るとは無作にして應ずるの妙である。

第五十三則　黃檗噇糟

示衆云。臨機不見佛。大悟不存師。定乾坤劍沒人情。擒虎兕機忘聖解。且道是甚麼人作略。

【讀方】衆に示して云く、機に臨んで佛を見ず、大悟師を存せず。乾坤を定むる劍、人情沒し、虎兕を擒ふる機、聖解を忘ず。且く道へ是れ甚麼人の作略ぞ。

【字義】◎臨機不見佛は南院の語。◎大悟不存師は青林師虔禪師の語。共に師家越格の手段をいふ。◎定乾坤とは鎭境澄禪師の句に據る、師家が一言句のもとに學人をして立地に成佛せしむる底の作略を劍に譬へていふ。◎臨機とは時に應じて自由に學人を接得する機用。◎沒人情とは向上の法倘斬り去つて何等人情を交へぬをいふ。◎擒虎兕機とは虎はとら、兕は野牛、何れも獸類中の勇猛なるもの、今は怜悧の衲子に譬ふ、擒虎兕機は衲僧越格の手段をいふ。◎聖解とは佛といふ觀念のこと、凡見の對語、但し自から凡聖二見の意を含む。

【要解】吾が衲僧家では大機大用の現前するときは毗盧の頂顙を驀過して佛を見ない、又大悟大徹の參究には化佛の舌頭を坐斷して師を存しない、上に向つて攀仰を求めざるが故に下に向つても亦毫も假借するといふことは無い、宇宙乾坤を平定するの劍には微塵ばかりも人情を加へぬ、虎兕を

擒縦するの機には更に分別を用ゐぬ、唯我獨尊の活機用で是れに盾つく人は一人も有るまい、サーどんな作略を有する作家が其のやうな爲人をするか、黃檗の本則に就いて親しく參じて看たらよからう。

擧。黃檗示衆云。汝等諸人盡是噇酒糟漢（黃檗門下）與麼行脚何處有今日（今既不如昔、後當不如今）還知大唐國裏無禪師麼（眼高四海）時有僧出云。只如諸方匡徒領衆又作麼生（黃檗身在）檗云。不道無禪。只是無師（且教得一牛）

【讀方】擧す。黃檗衆に示して云く、汝等諸人盡くこれ噇酒糟の漢、與麼に行脚せば何の處にか今日有らんや、還つて大唐國裏に禪師無きことを知るや。僧有り出て云く、只諸方の徒を匡し衆を領ずるが如きは又作麼生。檗云く、禪無しとは道はず只是れ師無し。

【字義】◎黃檗は百丈懷海禪師の法嗣で、傳に「諱を希運といふ、閩州の人、幼にして本州黃檗山に於いて出家受具、天臺に遊び後百丈に參ず。得悟の後、母を省するに互に相識らず、識るに及んで母師を罵して死す、後洪州大安寺に住す、衆徒輻湊す。時に相國裴休宛陵を鎭す、大禪苑を開いて師を請し、師の舊山を愛するを以て黃檗山と名く、唐の宣宗皇帝大中四年（皇紀一五一〇）示寂す、語錄八卷、宛陵錄、傳心法要等の著あり、勅して斷際禪師と謚す」とある。◎噇酒糟漢とは酒糟はかす、噇は喫、漢は人を貶したる稱、野郎に同じ、糟喫ひ野郎といふ意。自己活底の見處なく徒に古人の糟粕たる文字言句に纏縛せらるゝ徒輩を罵りたる語である。◎與麼とは支那の俗語、左樣な風にといふ意。◎行脚とは尋師訪道のために諸方を偏參すること。◎大唐國とは支那四百餘州の意、唐は黃檗時代の王朝の稱。

【要解】佛四十九年の說法は自己天眞佛を發揮し、日用光中運作顚倒の上に活現せしめんが爲である、然るに其の本懷を忘れて徒らに文に依つて義を解し、語に執して惑を起す、是れを黃檗は噇酒糟の漢といはれたのである、佛法純一精粹の酒は飲み得ずして言句葛藤の糟粕を噇ふ、釋迦や達磨の嘔吐を嘗めて佛法とし禪味としたならば今日行脚の事何の所詮かあらん、眞の佛法は大唐國裏に禪師無し、宇宙空じ來れば唯我れ一人のみ存するといふ大境界を得るにあるのぢや、門より入るものは家珍にあらず、サー人々自己の寶藏を打開して受用如意なるべしと黃檗は大轉法輪をされた。僧は方角を取り違へて大唐國裏の文字に釣られ、諸方徒を匡し衆を領ずるが如きは又作麼生と問うて來た、是れが噇酒糟の親玉である。黃檗は取り合ふも大人氣無しと手輕く禪無しとはいはぬ、只眞箇の師家が無くて困るよと夫れ相當の挨拶をせられた。

【著語】□黃檗門下。噇酒糟の漢は黃檗門下に澤山あると見えるネ、萬松門下には一人もソンナ奴は居らぬよ。□今既に昔に如かず、後當に今に如かざるべし。以前に比べると今はダメだ將來

が案じられてならぬ。油斷をしてはならぬワイ。口眼四海に高し。其の位、見識が無くては禪師とはいへぬ。口黃檗身を兼ねて在り。黃檗も徒を匡し衆を領ずるお仲間だらう。口且らく一半を救ひ得たり。前には禪師無しと云つたが今度は禪無しとは道はずと半分だけ拾ひ上げた、其の實は眼中禪師も無ければ諸佛も無いのだ。

頌云。岐分絲染太勞勞（知事少時煩惱少）　葉綴花聯敗祖曹（識人多處是非多）　妙握
司南造化柄（一朝權在手）　水雲器具在甄陶（看取令行時）　屏割繁碎（大象不遊兎徑）　剪除
氂毛（大悟不拘小節）　星衡藻鑑（纖毫不昧）　玉尺金刀（度量深明）　黃檗老察秋毫（護他一星不得）
坐斷春風不放高（預備不虞）

【讀方】岐分れ絲染んで太だ勞勞、黃綴り花聯つて祖曹を敗す。妙に司南造化の柄を握つて、水雲の器具甄陶に在り。繁碎を屏割し氂毛を剪除す。星衡藻鑑、玉尺金刀。黃檗老秋毫を察す。春風を坐斷して高きことを放さず。

【字義】◎岐分とは列子說符篇に「楊子が隣人羊を亡がす、既に其の黨を牽ゐて又楊子が豎子を請ふて之を追ふ、楊子が曰く一羊何ぞ追ふ者の衆きや、隣人の曰く岐路多し、既に返るに羊を獲るやを問ふ、曰く岐路の中又岐路あり」とあるを轉用したもの。文字解會に縛られ色々に分岐れること。◎絲染とは事苑五に「墨子は梁惠王の時の有道の人なり、出でて行く、素絲染て餘色に從ふを見て之を悲んで曰く、人湛然として聖體に同じ、惡俗に居るが故に之れに染みて累を成す」とあるより出づ。◎勞勞は繁鎖の貌、わづらはしきこと。◎祖曹とは前來出世の祖師方を指す。◎司南とは事苑の三古今註に曰く「黃帝蚩尤と涿鹿に戰う、蚩尤大霧を作し四方を迷はす、帝車に在つて指を以つて南を指して示す、士卒蚩尤を擒へ之を斬る遂に指南車と號す」とあるより出づといひ、又說文註に「南方は化育を主る」とあるより司化造化の語が出たともいふ。今は黃檗の單提獨弄の作略を指して司南造化の柄を握るといふ。◎甄陶とは後漢郅惲傳に「元を含み一を包み品類を甄陶す」とある。甄は陶器を造るに用ゆる旋轉す輪のことで天地が萬物を作るは陶人が種々の器を作るに等しいといふ處から、黃檗が雲兄水弟衆を接得する妙手腕を形容したる語。◎繁碎は煩碎とも書く、石屑糸屑等をいふ、妄想分別のこと。◎氂毛は鳥獸の輭毛のこと。已見法執等に譬ふ。◎星衡藻鑑とは詩に「北斗喉舌を司り、東方搢紳を領す、衡を持し藻鑑に留る、履の星辰に上るを聞く」とあるより出づ。衡の目の正確なること。◎玉尺金刀とは玉尺も金刀も共に物の長短を量る器、寸分の誤見なき意を示す。前句と共に黃檗の識見の高邁なることを表はす。◎秋毫とは「黃帝の時の人に百步に能く秋毫の末を見る」と事苑に出づ。秋になると兎の毛は細くなるから、秋毫といふ。

【要解】最初の二句は諸方の徒を匡し衆を領ずるも眞箇禪師無きを慨し、以下の句は黃檗の正法眼

を頌す、其の中先づ二句は黃檗の革新、後の四言四句の革弊の手段、最末二句に黃檗の立脚地を明した、佛の本懷は一字不說にあるを忘れて三乘十二分敎に執し、達磨の西來意は不識に存することを失して徒らに大小偏圓、南頓北漸等に分岐し、惡弊に染んでアーのコーのと氣を揉んで餘計な苦勞をしてゐる、五家七宗の門戶を張つて毒棒熱喝、玄と說き妙と說いて自から少林の兒孫と稱しながら祖曹の純密を敗辱してゐる、大唐四百餘州滔々皆然りである、實に嘆ずべきことぢや。黃檗は造化の柄を握り指南の車に乘つて大唐國裏無禪師と喝破して天下の雲水を一時に驅り聚めて悉く黃檗一竅の中に其の器量を燒き改めたは派石に造化の柄を握つた丈けあつて實に妙手である。思慮分別の繁碎を奇麗薩張りと屛け割て、微細なる己見法執の氄毛をもスッカリ剪り除いて、全く無禪師の境界にまで至らしめた、其の境界をいへば、恰も衡の星の一點昧さず、鏡面の纖塵を私せざる如く、玉尺の寸分差はず、金刀の亂痲を截つに似て心田心地全く不染汚不思量の獨尊佛である、黃檗老が秋毫を察するの明あるは春風の落花狼藉を坐斷して高く繚亂として吹くを許さゞるところに在る、花綴り花聯るの詮議を抛擲して正しく大唐國裏無禪師の大宇宙を建設した大伎倆は實に見上げたものであると天童は語を極めて讚歎した。

【著語】□事を知ること少き時煩惱少し。　道は簡易を尊ぶ、物識りには煩惱が多い。□人を識ること多き處是非多し。　交際が廣くなると煩累も多くなる。分別心が是非となるのだ。□一朝權手に在り。　宇宙の製造權を持つてゐる。　□令行の時を看取せよ。　黃檗の手裡を能く看取するがよい。□大象は兎徑に遊ばず。　棒喝や頓漸の兎徑に遊ばず黃檗無禪師の大象に乘つて普賢を氣取るべしだ。□大悟小節に拘はらず。　噇酒糟の小節に拘はらず今日の事如何んと大悟せよ。□纖毫も昧さず。　□度量深明。　然うとも然うとも、天童の言はれる通りだ。□他を讚ずること一星も得ず。　秋毫を察するほどの眼力では此奴仲々胡摩化せぬ男ぢや。□豫め不虞に備ふ。　春駒の勇を慮つて手早く絆を引き締めたナ。散亂心の意馬をシカと繫いだは黃檗の用意周到のところよ。

第五十四則　雲巖大悲

示レ衆云。八面櫺櫳十方通暢。一切處放光動地。一切時妙用神通。且道如何發現。

【讀方】衆に示して云く、八面櫺櫳十方通暢、一切處放光動地、一切時妙用神通、且く道へ如何が發現せん。

【字義】◎櫺櫳とは玲瓏に同じ、透き徹つて明に見ゆる貌。◎通暢とは普く通じて障礙なき樣子。◎一切時とは何時でもといふ意。◎放光動地とは解釋前に出づ。◎一切處とは何處でもといふ意。◎妙用神通とは衲僧機に臨んでの自由なる機輪。◎發現とは發揚現前とつゞく、實地に現すこと。

【要解】四方八面玲瓏として玉の內外無きが如く、十方全圓通暢として虛空の表裏無きが如くで

有つたならば空間の上にも一切處放光動地、時間の上にも一切時妙用神通、毫も罣礙といふ者が無い。如來の智慧光明は法界に周遍して時と處とに現せずといふこと無しである。人々亦如來の智慧德相を具有して不增不減ぢや、サー何と發現したもので有らうか。

擧。雲巖問道吾。大悲菩薩用許多手眼作麼（儞恁麼問圖箇甚麼）吾云。如人夜間背手摸枕子（一上神通不同小小）巖云。我會也（且莫詐明頭）吾云。汝作麼生會（果然放不過）巖云。徧身是手眼（無空缺處）吾云。道卽太煞道。卽得八成（某甲舌頭短）巖云。師兄作麼生（理長卽就）吾云。通身是手眼（無隔礙處）

【讀方】擧す。雲巖道吾に問ふ、大悲菩薩許多の手眼を用ゐて作麼かせん。吾云く、人の夜間に背手して枕手を摸するが如し。巖云く、我會せり。吾云く、汝作麼生か會す。巖云く、偏身是れ手眼。吾云く、道ふことは卽ち太煞道ふ卽はち八成を得たり。巖云く、師兄作麼生。吾云く、通身是れ手眼。

【字義】◎雲巖道吾の傳は第二十一則に出づ。◎大悲菩薩は千手千眼觀世音菩薩の別稱、千手は觀音慈悲の德の廣大なる意を示し、千眼は其の智慧の光の普遍なることを示す。◎夜間背手摸枕子とは夜間の黑暗に、手探りで枕をさがすこと。◎會とは會得、了會など〻續く字で曉つたといふ意。◎八成とは十成を完全とする故、不充分といふ意なれども、今は八成の言中自ら十成の意ありと知るべし。◎師兄とは法兄のこと。◎偏身、通身とは文字は異なれども別の意にあらず、只兩人の言句各其の家風を別の語で表したまでのこと。

【要解】第五十二則の曹山法身の話と類則である。藥山下の兄弟雲巖道吾の二人が觀音樣を持ち出して自由自在に千手千眼の活用を示した。觀音は悲智圓滿、定慧圓明の故に千手千眼を有す、然れども此は借事門、雲巖や道吾は自から觀音と現成しての說法であつて他の觀音の噂をしてゐるのでは無い。許多の手眼を用ゐるは三身融卽の上の作略であるから夜間背手に枕子を摸するも千手に千眼ありて手眼別物では無い、否全身心を手眼といふのだ。偏身手眼是れ足らざるにあらず、通身手眼是れ餘れるにあらざれども、且らく快馬に一鞭を與へて卽ち八成を道ひ得たりとしたのである、雲巖と道吾とに毫も優劣は無いけれども假に同中異辨の相を現じたまでぢや。

【著語】口儞恁麼に問ふ、箇の甚麼をか圖る。觀音に用事が無い、何か外に目論見が有るのだらう。口一上の神通、小々に同からず。一寸した此の神通でもどうして小乘聲聞のそれの及ぶところで無い。口且らく詐明頭なること勿れ。會得した樣な面をしてゐるが此奴すこし怪しいぞ。詐明頭は詐つて知つたふりをしてゐること。支那の俗語。口果然として放不過。打つちやつては置くまいと思つたら果して作麼生かと出しかけたワイ。口空缺の處無し。少しも缺目が無い。口某甲舌頭短し。某甲はこれより道へない、語は十成を忌む、八成で結構だ。口理長ずれば卽ち就

く。長じてゐたら贊成しやう。口隔礙の處無し。何にも異つたことは無い。大悲大悲觀世音菩薩よ。

頌云。一竅虛通（堅究三際）八面玲瓏（横徧十方）無象無私春入律（應時納祐）不留不礙月行空（任運落前溪）淸淨寶目功德臂（顧前盼後拈東掇西）徧身何似通身是（分疎不下）現前手眼顯全機（賊已露贓）大用縱横何忌諱（無可不可）

【讀方】一竅虛通、八面玲瓏。象無く私無く春律に入り、留せず礙せず月空に行く。淸淨の寶目功德臂。徧身は通身の是に何似ぞ。現前の手眼全機を顯はす、大用縱横何ぞ忌諱せん。

【字義】◎竅はあな。◎無象無私とは禪月集春に題する詩に「自ら來り、自から去つて洪鑪を動かし、象無く私なく處として無きはなし」とある、象なきものであるから此處に存して彼處に無いといふ樣な私はない。◎不留不礙は月の物に礙へられぬこと。◎淸淨寶目功德臂とは楞嚴經第六卷に「八萬四千の淸淨寶目、八萬四千の姥陁羅臂、八萬四千の爍迦羅首」とある。◎觀音千手千眼の語に應じて用ゆ　◎何似とは二物對比して優劣の立たぬ意を示す場合の接續詞。どつちがどつちとも云へぬ。◎全機とは全分のはたらき。◎大用とは大なるはたらき。◎何忌諱とは忌み嫌ふところ無しといふ意、行くとして可ならざるは無きこと。

【要解】此の頌初めの二句は理智不二表裏通徹を頌し、次に春と月とを以て大慈大悲の妙用を形容す、次の二句に二尊宿の手眼道得を辨別し、最後の二句に手眼の機用を敍べて以て結ぶ。眼といへば顏面上の一つの竅だが觀音の眼は能見所見を離れた虛空大の眼睛であるから虛通にして八面玲瓏內外も無く表裏も無い。春に象無し故に花咲き鳥笑ふ。春に私なし故に草は萠え霞はたなびく、春は無象無私を以て律に入る、月は留らず故に夜に西に沈む、月は礙えず故に千江の水に映る、月は不留不礙を以て空を行く、觀音の大慈は春の律に入るが如く、薩埵の大悲は月の空に行くが如し。淸淨の寶目は千眼、功德臂は千手で雲巖の寶目と道吾の功德臂と悲智圓滿して徧身手眼と現はれ通身手眼と現はれたが、サーどちらがどつちであらう、別と云ひ難く同と稱し難し。其の手の機用は大用全機で縱横自在に毫も忌諱する處無く現前露堂々である。遠い昔普陀洛山の觀音の話で無い、昔噺の雲巖道吾の觀音で無い、卽今人々現前底の活用其の儘ソックリ其れぢや、忌諱さへし無ければ其れが立派な全機大用である。一竅虛通の眼を具し、母陀羅臂を振つて一切時一切處に出入するの機用を得るのが衲僧眞の面目ぞよ。

【著語】口竪に三際を究め。口横に十方に徧し。二句一聯。三世十方に遍滿した宇宙一枚の觀音樣ぢや。口時に應じて祐を納る。祐は幸也。春になれば目出度いと皆祝ふ、千里同風ぢや。口任運に前溪に落つ。月の出沒りは自然で有つて曇つても晴れても私情といふものが無い。口前を顧み後を眄、東を拈じ西を啜る。前後も東西も漏る丶處は無い、觀音の慈悲の手眼に餘つたもの

は有るまい。□分疎不下。　是不是の分別を容るゝ餘地は無い。□賊贓已に露はる。　天童がとうとう尻尾を出して仕舞つた、虚通の櫳櫳のと言つた冒頭の語がチャンと占め括りがついた。贓は賊の盜んだ品物。□可不可無し。　大用現前の上には可不可は無い。有つても私情分別から出たので無い。

第五十五則　雪峰飯頭

示衆云。冰寒於水。青出於藍。見過於師。方堪傳授。養子不及父。家門一世衰。且道奪父之機者。是甚麼人。

【讀方】　衆に示して云く、冰は水よりも寒く、青は藍より出づ。見、師に過ぎて方に傳授するに堪へたり。子を養うて父に及ばざれば家門一世に衰ふ。且らく道へ父の機を奪ふ者は是れ甚麼人ぞ。

【字義】　◎冰寒於水とは人物の優秀れたることを示す語。もと荀子勸學篇に「君子曰く、學は以て已むべからず。青は藍より出でて藍より青し、冰は水之を爲して水よりも寒し」とあるよりも出づ。◎見過於師とは見識が師匠より卓越て始めて師匠の法を相續することが出來るといふ意。語はもと百丈の「見師と齊しき時は師の半德を減ず、見師に過ぎて方に傳授するに堪へたり」と云へるに據る◎一世とは「三十年を以て一世となす」とあれど必ずしも數に限りあるに非ず。一代といふ程の意に見よ。◎奪父之機とは父は師匠のこと師匠の膽玉をも奪ふほどの禪機、大法を傳授するに堪ゆる底の人物を指す。

【要解】　冰は水から出て水よりも寒冷い。青は藍から出て藍よりも青い。宗門では斯ういふ人物を要求してゐる。見識師に過ぎざれば相續者とする見込が無い。折角子を養育ても老父に及ばぬ不肖兒で有つたらば其奴一代に身代を潰して仕舞ふ。釋迦、達磨是れ何人ぞといふ大人物が出ないことには佛法は全滅ぢや。老父の禿顱に惡水を注ぐやうな大機大用の宗師家は天下に在るかどうだ。若し有りとせば甚麼人か、早く承り度いもので御座るワイ。

舉。雪峰在德山作飯頭（少不努力）一日飯遲。德山托鉢至法堂（老不歇心）峰云。這老漢。鐘未鳴鼓未響。托鉢向甚麼處去（教得孩兒會罵孃）山。便歸方丈（盡在不言中）峰。舉似巖頭（家返宅亂）頭云。大小德山不會末後句（父爲子隱直在其中）山。聞令侍者喚巖頭問。汝不肯老僧那（潑油救火）巖。遂啓其意（人間私語天聞如雷）山乃休去（果然不會）至明日陞堂。果與尋常不同（隨風倒柂）巖。撫掌笑云。且喜老漢會末後句（家醜外揚）他後天下人不奈伊何（鼻孔爲甚在我手裏）

【讀方】擧す。雪峰德山に在りて飯頭となる。一日飯遲し、德山鉢を托げて法堂に至る。峰云く、這の老漢鐘未だ鳴らず鼓未だ響かざるに鉢を托げて甚麼の處に向て去るや。山便ち方丈に歸る。峰巖頭に擧示す。頭云く、大小の德山末後の句を會せず。山聞いて、侍者をして巖頭を喚ばしめて問ふ、汝老僧を肯はざるか。巖遂に其の意を啓す。山乃ち休し去る。明日に至つて陞堂、果して尋常と同じからず。巖掌を撫して笑つて云く、且喜すらくは老漢末後の句を會せり、他後、天下人伊を奈何ともせず。

【字義】◎雪峰は第二十四則に出づ。◎德山は第十四則に出づ。◎巖頭は第二十二則に出づ。◎飯頭とは叢林に於ける役の名、大衆の食事を司るもの、典座の下に屬す。◎鉢は應量器、雲水の食器である。◎大小とは流石のといふ意。◎末後句とは子孫に傳授すべき最後の活句。◎啓は告也。申上げること。◎且喜は先づ先づよかつたといふ程の意。◎他後は他時後日の略。後に至つてといふ意。

【要解】第五十則と殆ど類似してゐる、併せ看るがよろしい。雪峰をして眞箇の衲僧たらしめんが爲に師匠の德山と師兄の巖頭とが一場の方便を設けたのである。飯遲きを以て德山鉢を托げて法堂に至る。師弟の間に我見といふ隔意が有るから其れを調和せんが爲に出掛けたので空腹で御飯を急ぐでは無い、雪峰未だ他に德山を認めて師資一枚とはなれぬ。自己の德山とは氣づかずして再び師兄の巖頭に申し出た、大小の德山も末後の句が會得てゐない、雪峰に負墮るのも無理は無い。スルト德山が巖頭を喚びよせて內意を聽いて見ると實は斯く是くだといふ、フーンさうかで德山は去つた。明日陞座してみると尋常とは餘程樣子が異つてゐる、巖頭掌を撫つて大笑していふにはマーよかつた。老漢漸つとのことで末後の句が會得たそうな、是れからは天下の人に押しも推されもせまいよと。本則の主題は雪峰で有るが舞臺では巖頭が一番活躍つてゐる、巖頭が見師に過ぎ、父の機を奪ふ作略をして見せたが雪峰は未だ其の見處に達してゐない。佛を呵し祖を罵る底の修行が足りないからである。己見我慢に囚はれて佛祖に親しく相見しないから出藍の譽を荷ふことが出來ぬ。末後の句に會不會の兩端無きことを知らば親しく德山の堂奧に參じて徹骨徹髓の消息を通ずべきである。當時の雪峰にはまだ其の大器量が無かつた。

【著語】□少うして努力せず。雪峰若いに似合はず勉強が足りないよ。□老いて心を歇めず。德山は老い年をして態々釣りに出かけた。悲心歇まず親切な者ぢや。□孩兒をして孃を罵ることを會することを得せしむ。孩兒は小悴で雪峰、孃は母で德山をいふ。子供が三四歲になつて父母をぢいばゝと惡口をいふ。其れを親がきいて口がきける樣に成つたと喜んでゐる。德山も其の轍ぢや。□家返き宅亂る。默つて歸方丈したところに千萬無量の言語があるぞ。□盡く不言の中に在り。父子だけで濟して置けばよいに雪峰は兄貴のところまで此の口情を持ち込んだ。家庭が齊らぬらしい。□父は子の爲に隱す、直きこと其の中に在り。子は父の爲に隱すといふが這は父が子の爲に隱すのぢや、どちらにしても是れが眞實を盡してゐる。□油を潑いで火を救ふ。唯さへ鼻息の荒い巖頭に、さう德山がけしかけたのでは收拾がつくまいよ。□人間の私語、天聞くこと雷の如し。

德山の耳側で巖頭がくしや〳〵と何か啓し上げたが萬松にはチヤンと聞えてゐる。口果然として不會。巖頭の云つた通り德山末後の句を會してゐないナ、德山の不會は徹底不會で會不會の不會で無い。口風に隨つて柂を倒す。風の方向に隨つて德山は柂を取つてゐるのだ、雪峰の柂は舷に刻みつけてあるらしい。口家醜外に揚ぐ。家內の醜をそう大きな聲で吹聽せぬがよからう。巖頭の見處を賞めた語だ。口鼻孔甚としてか我が手裏に在る。オツトどつこい、萬松はチヤント急所を握つてゐるぞ、德山巖頭の命根は吾が手裏に在り。

頌云。末後句會也無（這裏不得會不會打折腰）**德山父子太含胡**（外明不知裏暗）**座中亦有江南客**（勿謂秦無人）**莫向人前唱鷓鴣**（休得也）

【讀方】末後の句會すや也無しや。德山父子太だ含胡す。座中亦江南の客あり、人前に向つて鷓鴣を唱ふること莫れ。

【字義】◎含胡とは支那の俗語、明瞭と言はぬ貌。◎座中亦有の句は鄭谷が席上歌者に與ふる詩に「花月樓臺九衢に近し、淸歌一曲金壺を倒す、座中にも亦江南の客あり、人前に向つて鷓鴣を唱ふる莫れ」とある、これ等より出て居る。◎鷓鴣は南越に住む鳥の名。此の鳥の聲に擬へて作つた歌曲が鷓鴣の曲である。聞くものをしていたく望鄕の情に堪へざらしむる曲だといふ。今は鷓鴣曲を指す。唱鷓鴣は佛法擧揚の事に譬ふ。◎江南客は怜悧の衲子を意味して暗に雪峰を指す。

【要解】此の頌は初めに末後の句を擧して德山父子の不說破を頌し、後の二句に用到を貴んで說到を貴ばざることを述ぶ。天下の諸人末後の句を會したかどうぢや、末後の句は一體會不會に干るべきもので無い、であるから德山巖頭の父子は言つたやうな言はぬやうな甚だ曖昧模糊の間に有耶無耶にして仕舞つた。言語道斷の末後の句だから太だ含胡のところに德山父子の器量は潑溂としてゐる。一座中何處に亦江南の人が居まいものでも無いから人の前で餘り無遠慮に鷓鴣の曲を吹唱することは止めて欲しいものぢや、江南の人は鷓鴣の曲を聞くと斷腸の思ひがするといふ。江南の雪峰が座中にゐると末後の句といふ鷓胡の曲を聞いたら江南の本家鄕に歸り度いと歸心を催すで有らうから氣の毒ぢや。人間到る處青山ありで故鄕の他國のといふ二見を立せず、直心是れ道場、脚下黃金の地で本家鄕ならぬ處は無いと雪峰をして落著を得せしめんとする德山巖頭の胸中を天童が見拔いての頌出である。

【著語】口這裏會することを得ず、會せずんば腰を打折せん。會不會は超越した。其の道理をも會せぬ奴が有らば腰骨を叩き折つてやるがよい。口外明にして裏暗を知らず。雪峰の爲ばかりにしてゐて御自身の手許は眞暗だ。含胡をいつたのである。口謂ふこと勿れ秦に人無しと。現在此に萬松が居る。口休得せんや。謂ふなと云つても雨竹風松、春蘭秋菊、皆んなで末後の句を唱へ通しで休む時は無い。

第五十六則　密師白兎

示衆云。寧可永劫沈淪、不求諸聖解脫。提婆達多無間獄中受三禪樂。鬱頭藍弗有頂天上墮飛狸身。且道利害在甚麼處。

【讀方】衆に示して云く、寧ろ永劫に沈淪すべくとも諸聖の解脫を求めず、提婆達多は無間獄中に三禪の樂を受け、鬱頭藍弗は有頂天上に飛狸の身に墮す。且らく道へ利害甚麼の處に在るや。

【字義】◎永劫とは無數量の時間、永い間のこと。◎沈淪しづみ落つること。◎提婆達多は又調達ともいふ。梵音デーヴアダツタ（Devadatta）、天授、天熱等と譯す、斛飯王の子で釋尊の從兄弟に當る。一度佛弟子となつたが後反逆し、佛を謗つた罪で生ながら無間地獄（阿鼻獄）に墮ちた、佛之を憐んで阿難をして其の安否を問はしめられると提婆は「我地獄に在りと雖も三禪天の樂あり」と答へたといふ。◎三禪天は色界の第三天のこと。◎鬱頭藍弗は又鬱陀羅伽ともいふ、仙人である。五通力を得て常に王宮へ行て食つて居たが或時王の夫人の手に觸れた爲に五通を失ひ、再び之を得んとして林中或は水邊にあつて修道した結果、漸く定を得て、非有想非無想處天に生じたが、壽盡きて又下界に生れて飛狸となり、諸の魚鳥を殺した爲に又三惡道に墮したといふ。◎有頂天は無色界の第四天なる非有想非無想處のこと、三界最上の天なる故にいふ。

【要解】地獄を苦とせず、淨土を樂とせざる宗門一蒲團上の大人は永劫に沈淪するも游戲三昧で諸聖の解脫を求めぬ。本則の洞山密師伯の兩老は實に此の境界に住する本分人ぢや。化法の利害から云へば、提婆は無間獄に三禪の樂をうけ、鬱頭藍弗は有頂天に上つても飛狸の身を脫し無かつた、煩惱菩提畢竟是れ何物で有らう。眞箇に正眼を開き來れば輪廻も解脫も、受苦も得樂も一蒲團上の左右で有る。サー何處に其の樣な利害得失が有るか、眼を開いてみよ。

擧。密師伯與洞山行次見白兎子面前走過。密云。俊哉（爭奈草裏走）山云。作麼生（怪爾遲也）密云。如白衣拜相（自地昇空易）山云。老老大大作這箇語話（幾乎放過）密云。儞又作麼生（人無害虎心、虎無傷人意）山云。積代簪纓暫時落薄（從空放下難）

【讀方】擧す。密師伯、洞山と行く次で、白兎子の面前に走過するを見て、密云く、俊なる哉。山云く、作麼生。密云く、白衣の相に拜せらるゝが如し。山云く、老々大々として這箇の語話をなす。密云く、儞又作麼生。山云く、積代の簪纓暫時落薄す。

【字義】◎洞山とは雲巖禪師の資なる洞山良价禪師のこと。曹洞宗の祖と稱せらる、知見穩密の宗風を以て爲人度生せられた方である。◎密師伯は神山僧密禪師で、洞山禪師とは法眷の間柄である。

常に洞山禪師と同道して諸方を偏參せられた、其の途中での問答が澤山ある。今も其の一つである。◎白衣拜相とは支那では進士の科を及第した人でなければ位人身を極めた縉紳には推重せられぬ。進士の試驗さへ及第すれば所謂白衣、無官の士でも卿相の資あるものと認められる、即ち白衣にして直に相となるのを兎の敏捷なのに喩へたのである。◎老老大大云々とは他を貶下する語、宜い歳をしながらまだ這箇ことを言つて居るぞといふほどの意。◎簪纓は首笄と冠の紐をいふ、高貴の意。白衣の反對。◎落薄は落魄に同じ、志行衰惡の貌、落ぶれたこと。

【要解】　洞山と密師伯とは雲巖下の兩尊宿で、其の見處に至つては優劣は無い。師伯の白衣拜相と洞山の積代の簪纓暫時落薄とは互ひに同じことを言ひ合つて居るので、前者は賤が貴、後者は貴が賤、向去却來の商量で毫しも其の間に輕重は無い。無冠の白衣が宰相の高官に上つた。代々貴紳の家に生れた子が今は菰を著て門に立つ、自由な作略である。眼中に貴賤無く貧富なく榮辱無く苦樂無し。機に臨み時に應じて滯らず貴に上り卑に下る、類に化し變に處して向上し却來す。盡く是れ一蒲團上の大作略である。

【著語】　□爭奈せん荒草裏に走ることを。　俊なる哉と賞めるけれども、惜しいことに草裏は出不得ぞ。□爾が遲きことを怪しむ。　口を開かざる以前に走過して仕舞つた。作麼生はチト遲かりしュナ。□地より空に昇ることは易し。　百尺竿頭に上りつめることは割合に容易だ。□殆ど放過せんとす。　放過つて置くまいと思つたら果して洞山痛い處を衝いた。□人、虎を害する心無し、虎人を傷ふの意無し。　虎、無心なれば人も無心、兩者相犯さぬ、若し分別を生ずれば虎人を嚙まんとし、人、虎を屠らんとするに至る。□空より放下することは難し。　百尺竿頭進一步が仲々六づかしい。千仭の高峰から手足を放下し、喪身失命してかゝらぬと此の藝當は出來ぬ。

頌云。抗力霜雪（貧則獨善一身）平步雲霄（達則兼濟天下）下惠出國（苦瓠連根苦）相如過橋（甜瓜徹蔕甜）
蕭曹謀略能成漢（葵花向日）巢許身心欲避堯（柳絮隨風）寵辱若驚
深自信（悟須實悟、參須實參）眞情參跡混漁樵（未免靈龜曳尾）

【讀方】　力を霜雪に抗べ、步を雲霄に平ふす。下惠は國を出で、相如は橋を過ぐ。蕭曹が謀略能く漢を成す、巢許が身心堯を避けんと欲す。寵辱には若かも驚く深く自ら信ぜよ、眞情跡を參えて漁樵に混ず。

【字義】　◎下惠出國とは論語に「柳下惠士師となり三度黜けらる、人の曰く、子未だ以て去るべからざるか、曰く、道を直うして人に事へば安に往くとして三度黜けられざらん、道を枉げて人に事へば何ぞ必ずしも父母の國を去らん」とあるを依用ゐしもの。◎相如過橋とは蒙求相如題柱の註に「蜀城の北七里に昇仙橋あり、相如其の柱に題して曰く、大丈夫駟馬の車に乘らずんば、復この橋を過ぎず云々」とある意より來る。◎相如、字は長卿、蜀郡成都の人で、藺相如の志氣を慕つて自

ら相如と稱したといふ。◎蕭曹は蕭何曹參の二人で、漢の王業を輔弼けたる漢高祖の重臣である。◎巢許のことは第二十八則の條に出づ。◎寵辱若驚は老子經十三章に「寵辱には若かも驚き、之を得るも驚き之を失ふも驚く」とあるより出た語で寵は心に合ふこと、辱は心に合はぬ狀態、苦樂、迷悟などいふに同じ、二見對待の意を示す。

【要解】　最初の二句に却來と向去とを頌す、次の四句に例を以て再び向去と去來とを敍べ、結末二句に至つて向去却來の消息をも絕したる無爲の生涯を讚歎したのである。力を霜雪に抗べるは暫時落薄の有樣で瘦せ我慢も貧から、步を雲霄に平ふするは、宰相を拜して衣冠束帶雲の上人、此の二句が全頌の枕詞である。柳下惠は三たび黜けられて骨骼尙存する洞山の節操、司馬相如は發憤して昇仙橋に題して駟馬に鞭つ師伯の榮達、蕭何と曾參とは漢の宰相として四百年の帝業を興した、巢父と許由とは堯の天下を讓らんとするを避けて富貴を弊履の如く放擲つた。白衣にして相を拜するも時に隨つて功を建つ、毫も高位に慢せず、簪纓にして落薄するも機に處して敢へて下級を蔑せず、貧富榮辱更に念頭に無い兩老の眞情をみよ。寵愛と屈辱とは猶ほ夢の如く全く蹤迹を泯じたもので有る。然るを若し榮達と喜び侮辱と憂ふる驚起の心を生せば、未だ佛祖位中の大禪定に坐してゐないからのことよ。迷悟凡聖の跡を交參して漁人樵夫の間に影を沒する時初めて眞情を流露し自信を確立することが出來るのぢや、本則にいふ白兎子の養育法を能く心得るのが佛祖門下の作家爲人である。兩老有時の眼目に徹照するが肝要ぞ。

【著語】　口貧なるときは則ち一身を善くす。　自分が貧乏して人の世話など出來るものか、是れも爲人の一法ぞ。口達なるときは則ち兼て天下を濟ふ。　宰相になれば天下は我が物ぢや、公私の二心は無い。口苦瓠は根に連つて苦し。　却來は徹底却來だ。口甜瓜は蔕に徹して甜し。　向去は全身向去よ。口葵花日に向ふ。口宰相は興國に熱心で餘念は無い。　葵花は日の方より外は向はぬ。口柳絮風に隨ふ。　落薄の時には憎愛取捨は微塵も無い、「氣に食はぬ風もあらうに柳哉」さ。口悟は須らく實悟なるべし、參は須らく實參なるべし。　實參實悟が大切ぞ、自信と云つても外から來ぬ、實悟底實參底聻。口未だ靈龜尾を曳くことを免れず。　漁樵に跡を參へても混じた迹方が殘つてはダメだ、貴賤尊卑のあくがスッカリ除れて眞情の一枚と成つたならば、釋迦老子も閻魔大王も呆然として手を拱くのみぞ。

第五十七則　嚴陽一物

示衆云。弄影勞形。不識形爲影本。揚聲止響。不知聲是響根。若非騎牛覓牛。便是以楔去楔。如何免得此過。

【讀方】　衆に示して云く、影を弄して形を勞す、識らず形は影の本たることを。知らず聲を揚げて響を止む、聲は是れ響の根なるを。若し牛に騎つて牛を覓るに非んば便ち是れ楔を以て楔を去るな

らん。如何が此の過を免れ得ん。

【字義】◎弄影、揚聲の句共に末に執して本を忘れ、枝を弄して根を知らざるの喩。◎以楔去楔とは先方の持つて來た楔を以つて楔を除るといふ意、楔は迷のこと。師家の機に臨みて自由なる接化振を示す語。◎騎牛覓牛とは悟中に在りて悟を求め迷を以て迷と知らざるの喩。語は福州長慶大安禪師百丈に造り禮して曰く「學人佛を識ることを求めんと欲す、何者か卽ち是なる」丈云く大に牛に騎つて牛を覓むるが如し」とあるより出づ。

【要解】人は水中の影を捉へんとして自から身形を勞はしてゐる、影の本性は吾が身であるといふことを知らぬ。聲を揚げて響を止むるも其の通りで聲は是れ響の根である、本を忘れて末を逐ふ故に苦勞は斷へぬ、影の本、響の根を端身正坐せしむれば勞することも止むることも不要。若し牛に騎つて牛を覓むる者あらば楔を以て楔を拔くの流儀で療治をせねばならぬ、其の治療法を知り度くば例に依つて趙州老漢の手裡に就いて親しく拜見するがよい。

擧。嚴陽尊者問趙州。一物不將來時如何（猶是分外）州云。放下著（貼體衣衫會須脱却）嚴云。一物不將來。放下箇甚麼（人不知己過牛不知力大）州云。恁麼則擔取去（喚不回頭爭奈何）

【讀方】擧す。嚴陽尊者趙州に問ふ、一物不將來の時如何。州云く、放下著。嚴云く、一物不將來箇の甚麼をか放下せん。州云く、恁麼ならば擔取し去れ。

【字義】◎嚴陽尊者とは趙州和尚の嗣法の人で、諱は善信といひ、得法の後武寧縣の嚴陽山に住庵して宗風を擧揚せられた、依つて嚴陽尊者といふ。◎一物不將來とは將來は持來の意、何ものも持つて來ぬといふこと。◎放下著とは捨てゝ了へといふこと、著は語を強める助字。◎箇は此といふ字に同じ、事物を直指す代名詞。◎擔取去とは擔いで往かつしやいといふ意。

【要解】一物不將來は手を打ち拂つた境界で佛地にも等しい、放下著は一物不將來をも打ち拂ひ、佛地にも住せぬ手段ぢや、裸人形物落さずば一物不將來なれども裸人形といふ一物が尙ほ存してゐる。其の裸木偶も空じ來つて初めて宇宙第一人の安心が得られるのである。嚴陽は口に一物不將來といひながら不將來といふ大きな一物を擔つて來た。故に趙州が放下著と一言の下に捨てさせやうとしたが箇の甚麼をか放下せんと己見に執して放下し得なんだ。趙州止むことを得ず、それほど惜しいなら擔いで戻れと最後の判決を下した、嚴陽尊者の負擔は一層重くなつたが、此で脫落せぬことには未來永劫三界二十五有界を擔ぎまはることであらう。賊を抱いて屈と叫ぶ。諸君まだ放下が出來ぬかナ。

【著語】□猶ほ是れ分外。大きな厄介荷物を脊負ひ込んで一物不將來とは聞て呆れる。□貼體の衣衫、會ず須らく脫却すべし。身に著けて居る衣類も懷中物も腰帶までもスッカリ脫いでゆけ、

皮膚脫盡し去れ、趙州は手强い追ひ剝ぢや。□人は己が過を知らず、牛は力の大を知らず。自分の癖は自分に知れぬ、牛も力のあるを知らぬから重い車を牽かせられるのだ、持つたが業でネ。□喚べども頭を回さず、爭奈何せん。手の著けやうが無い、ヒタ走りに逃げる奴には趙州の聲も屆かぬワイ。

頌云。不防細行輸先手（黑白未分前、猶是正中偏）自覺心麤媿撞頭（虎口裏下子）局破腰間斧柯爛（且道如今甚麼時節）洗淸凡骨共仙游（頭輕眼明）

【讀方】細行を防がず先手に輸く、自ら覺ふ心麤にして媿らくは撞頭することを。局破れて腰間斧柯爛る、凡骨を洗淸して仙と共に游ぶ。

【字義】◎細行は細密なる石の置き方、奥の手のこと。◎撞頭とはぶつかつて失敗すること。◎局破云々の句は王氏の神仙傳に、晋の隆安の時信安縣の王質、斧を採つて眩室坂に至る、石室に四童ありて奕棊するを見る、質に物を與ふ、棗の子の如し、之を含めば飢ゑず、棊終れば斧の柯腰に爛れて衣袂風に隨ふ、暮に抵つて家に歸れば已に數十年なりしとあるより採る、今は趙州と嚴陽との一局の勝負終りて、黑白、迷悟の斧柯も爛却したとの意を含ます。

【要解】此の頌は全篇圍碁の上の機略を以て本則を頌じてある。先づ起承の二句は嚴陽の一物不將來が甚だ不用意で細心の注意が行き屆かなかつたが爲に趙州の放下著といふ先手をピシャリと打ち込まれて脆くも輸けて仕舞つた。是に於いて嚴陽は如何にも自分の修行が麤にして死頂の手に懸つたは慚愧千萬なことよと自覺したであらう、轉句に至つて王質が昔し一局の碁を見てゐてモー濟んだかと思つて腰の斧を見たら柯が爛却してゐたといふことだが、今日の尊者と趙州との一局に於いて戰破れ既に黑白の跡も沒し身心を抽解したからして、結句に於いて眞箇趙州と手を把り合つて仙境に遊ぶことが出來た、何故なれば斧柯爛却し凡骨を洗淸したからのことよ。本則では嚴陽尊者が凡骨を洗淸したかどうかは解らぬが天童は且らく尊者を活かして趙州と同道唱和し得たものと見做して此の頌を作つた、是れ爲人の方便で座下に其の人を求むる作家の手段である。

【著語】□黑白未だ分れざる前猶ほ是れ正中の偏。盤面に黑白を並べぬ以前に勝敗が見え透いてゐる、麤心の致すところで仕方が無い。□虎口裏に子を下す。あぶない處へ一子を下してとうとう死頂にしてしまつた、モー活きる見込は立たぬ。□且らく道へ如今甚麼の時節ぞ。昔語で無い、卽今甚麼の時節と參究すべきぞ。□頭輕く眼明かなり。人の碁を見てゐて肩が張つた、幸ひ一局すんで氣が淸々した、イヤ仙と遊ぶには頭輕く眼明らかならねばなるまい。

第五十八則　剛經輕賤

示衆云。依經解義三世佛寃。離經一字返同魔說。因不收果不

入底人。還受業報也無。

【讀方】衆に示して云く、經に依て義を解するは三世佛の寃。經の一字を離るれば返て魔說に同じ。因に收めず果に入れざる底の人還て業報を受くるや也無しや。

【字義】◎依經解義云々は經文に依つて佛道の義理を知らんとする者は佛の寃である。さりとて經卷を離れて法を談ずるものは佛說とはいへぬといふ意也。もと僧が同安和尙に問うた語。◎不收因不入因底人とは因果に落ちぬといふ程の大人物。脫落底の人を指す。

【要解】經文に依り字義に依つて佛の眞相とし本懷とするならば三世諸佛の寃敵となる、然れども若し經の一字を離れて佛敎を說かば邪魔外道の說で有つて是れ亦三世諸佛の寃敵ぞ、此の寃家は因果の理法に收むることも入るゝこともならぬ人ぢや、斯ういふ人でも還亦業障業報を受けるかどうであらう、佛心や經說は觸るゝことも背くこともならぬ。眞實背觸倶非の人ならば因果をも超越し業報にも縛せられぬ筈ぢや、金剛經の眞意を讀誦してみよ。

擧。金剛經云。若爲人輕賤(我作糞中蟲)是人先世罪業應墮惡道(老僧最先入)以今世人輕賤故(叢林驢騾蹴踏龍象)先世罪業則爲消滅(甚麼處去也)

【讀方】擧す。金剛經に云く、若し人の爲に輕賤せられんに、是の人先世の罪業ありて應に惡道に墮すべきに、今世の人に輕賤せらるゝが故に、先世の罪業則ち爲に消滅す。

【字義】◎金剛經は玄奘譯の大般若經六百卷中第五百三十四卷金剛能斷分の一品を羅什三藏が別譯して一卷としたもの、古來六祖、德山等金剛經に關する機緣の話が澤山ある、今は、同經の文其のまゝを本則にしたのである。玆に引いた文は其の第十六能淨業障分の中に在る。◎先世とは生れない先の世。◎惡道とは惡業を作つた人達の趣く苦しい境界。◎今世とは此の世のこと。

【要解】本則は金剛經の文其の儘で、是を邪解すると外道の見に陷り撥無因果の迷に捉はれるから注意して參じ無くてはならぬ。金剛三昧の上から見た罪業消滅で坐禪もせずに此の經を口實に用ゐてはならぬ。本則に此の經を拈じた所以は經の文字に執せずして經の文字を自己修養の上に活用させんが爲に擧せられるのであるから何處までも經と不離不卽、背せず觸せず實地の上から之を實參し實悟することが大切である。惡業も輕賤も墮獄も消滅も金剛三昧の上の一光明であるから、先世と今世と古今一如である、すべて我見人見衆生見を離れて見れば輕賤も罪業も無い筈で有つて因も縛せず果も縛せず、宇宙第一人の自由が得られるのである、因果に縛せられずして因果を使得する人とならねばならぬ。經に拘著せずして經を活躍させる人とならねばならぬ。

【著語】□我を糞中の蟲と作す。輕賤の至極ぢや。萬松は其れでも宇宙に大光明を放つてゐるぞ。□老僧最先に入らん。惡道が有るなら老僧を一番最初に入れて欲しいものだ。□叢林の驢騾龍象を蹴踏す。叢林に驢騾の類が澤山居て龍象尊宿を蹴踏し踏み潰して步く、其れでも何處を風

が吹くといふ面付ぢや。□甚麼の處に[illegible]去るや。　罪業消滅してどうした。佛に作つたか猫に作つたか、本是れ眞壁の平四郎サ。

頌云。綴綴功過、（唯除頓覺人）膠膠因果。（井法不隨順）鏡外狂奔演若多、（脚下煙生）
杖頭擊著破竈墮、（百雜碎）竈墮破、（靈從何生、聖從何至）來相賀、（伏惟[illegible]）却道從前辜負我。（何不早道）

【讀方】綴々たり功と過と、膠々たり因と果と。鏡外狂奔す演若多、杖頭擊著す破竈墮。竈墮破す、來て相賀す。却つて道ふ從前我に辜負すと。

【字義】◎綴々は物の聯る貌。◎膠々は物の和する貌。◎鏡外狂奔云々とは楞嚴經に「豈聞かずや、室羅城中の演若達多、忽ち晨朝に於て鏡を以て面を照し鏡中の頭眉見るべきを愛す、己が頭に面目を見ざることを嗔責して以て魑魅なりと爲し狀無くして狂奔す云々」とある故事を引いたもの◎杖頭擊著云々とは會元第二卷に、嵩嶽の破竈墮和尙、山塢に廟あり、殿に一竈を安ず烹宰參祀して輟まず、墮侍者を領じて廟に入り、杖を以て竈を敲く事三下し咄して云く、此の竈泥瓦合成す、聖何れよりか來り、靈何れより起りて恁麼に物命を烹宰するやと、又打つ事三下す竈乃ち傾いて破落す、安國師號して破竈墮と爲す、須臾にして一人あり、靑衣峩冠、拜を設けて云く、我素廟の神なり、久しく業報を受く。今日和尙の無生法を說くことを蒙り此の生を脫し生れて天中に在り、特に來つて致謝すと、師云く是れ汝が本有なり、吾れ强ひて言ふに非ず、神再拜して沒す」とある故事を引用せるもの。◎從前とは今日までの意。◎辜負とは辜はツミと訓む字で負は背く意に用ゆ孤負と書くを正とす、祖錄等には此の字を用ゐて居る。卽ち孤き負くの意。

【要解】最初の二句八字にて本則の大意を頌し。次の二句に演若多、破竈墮を以て過と功とを敍し、三字二句と末の一句とにて最初二句をうけて因果雙亡を拈じ畢る。功とは般若の功德、過とは輕賤の罪業、此の二は繼目も分ち難きほど綴々として一葉となり、先世の因と今世の果とは膠々と密著して一團となつた、功過一如、因果一枚の本則の大綱は此の二句で意が盡きてをる。演若多は狂奔して鏡外に自己を求めたは回光返照を缺いた過よ、破竈墮和尙は一棒の下に聖何れより來る靈何れより來ると從來の泥團の竈を打破して仕舞つた。從來の分別計度の窟宅として居た竈を叩き破つて仕舞へば竈神來つて賀する、去來無き所に去來して罪業も輕賤も皆光明となつて宇宙乾坤ともに來賀するは目出度いことよ。さて斯うなつて見れば從來の云爲行動は悉く我に辜負すで我見人見の土塊でつくねて居たのだと氣付かねばならぬ。却つて我れに辜負すと回光返照したときが卽ち破竈墮、竈墮破の時節で金剛三昧の一蒲團上に坐した境界である。

【著語】□唯頓覺の人を除く。無明の實性卽佛性といふ境界に達した人は別に功と果とを綴ち合すにも及ぶまい。□並に法に隨順せず。因にも果にも縛られぬ、膠で喰つつけて動きのとれぬ

やうなことをせまいぞ。口脚下煙生ず。　頭が無いばかりで無い脚も有るまい、胡亂の奴だ。口百雜醉。　我見人見を粉微塵に碎いた、罪業も功德も塵埃となつた。口靈何れより生ずるや、聖何れより生ずるや。　功過も因果も我見も人見も飛んで散亂したあとに聖だの靈だのといふものが何處にあるか。口伏して惟みれば墮儸。　墮儸は墮落懶儸で零落して羞恥かしいといふこと。破家散宅のところへ竈神が來賀せられては甚だ恐縮だ。口何ぞ早く道はざる。　今時分辜負などといふのは遲了八刻よ。それとも誰か辜負してゐる者が有るのかナ。

第五十九則　青林死蛇

示衆云。去即留住。住即遣去。不去不住渠無國土。何處逢渠。在在處處。且道是甚麼物得恁麼奇特。

【讀方】衆に示して云く、去れば即ち留住し。住すれば即ち遣去す。不去不住渠に國土なし、何れの處にか渠に逢はん。在々處々、且らく道へ是れ甚麼物か恁麼に奇特なることを得るや。

【字義】◎去即留住とは去來して居るかとすれば不去來の意、風穴の語に「去れば即ち印住し、住すれば即ち印破す」とあるに據る、第二十九則を參照せられよ。◎渠は彼に同じ、第三人稱の代名詞今は本來面目をいふ。◎奇特とは奇妙特別の箇語、珍らしく不思議といふ意。

【要解】風穴鐵牛の機の垂語と其の意殆ど同じである。立つて行かうとすれば引き留める、坐れば突つ放す、立つところも坐る處も與へぬのが師家の學人を接する手段である、不去不住にして國土無き時何處で渠に逢つたもので有らう、渠に逢著するところは別に國土無しと雖も、在々處々に渠に逢ひづめぢや。恁麼奇特の作略をするは一體全體甚麼物だ、其の甚麼物なるかを速に道へ看よ。

擧。僧問青林。學人徑往時如何（學歩即迂廻）。林云。死蛇當大路。勸子莫當頭（慣曾著毒）。僧云。當頭時如何（許爾大膽）。林云。喪子命根（果然）。僧云。不當頭時如何（怎只由爾）。林云。亦無迴避處（築著磕着）。僧云。正恁麼時如何（且莫著忙）。林云。却失也（雖是死蛇解弄也活）。僧云。未審向甚麼處去也（不信搜懷）。林云。草深無覓處（頭上漫漫脚下漫漫）。僧云。和尚也須隄防始得（迴來）。林拊掌云。一等是箇毒氣（將謂侯白更有侯黑）。

【讀方】擧す。僧、青林に問ふ、學人徑に往く時如何。林云く、死蛇大路に當る、子に勸む當頭することを莫れ。僧云く、當頭する時如何。林云く、子が命根を喪す。僧云く、當頭せざる時如何。林云く、亦迴避するに處なし。僧云く、正恁麼の時如何。林云く、却て失せり。僧云く、未審し甚麼の

處に向つて去るや。林云く、草深うして覓るに處なし。僧云く、和尙も也た須く隄防して始めて得べし。林掌を拊して云く、一等に是れ箇の毒氣と。

【字義】◎青林は筠州洞山の第三青林の師虔禪師のこと。卽ち洞山悟本大師の法嗣である、初め夾山に參じ尋で洞山に來り謁し、得法の後南府の青山に住し轉じて隨州に至り、衆の請によつて土門の小青林に住して盛に宗風を擧揚せられた人である。◎學人とは佛道修行の衲子のこと。今は僧の自稱、拙者の意に採る。◎當頭とは當面に觸れること、ぶつつかること。◎廻避とはにげのがれること。◎正恁麽時とはサア此の樣な場合といふ意。◎未審とはいぶかし、疑を人に質す時に用ゐる發端の語。◎隄防とはさゝへふせぐこと「夫萬民の利に從うは水の下きに付くが如し、敎化を以て之を隄防せざれば止むること能はず」と漢書にある。◎毒氣とは死蛇より來る緣語、互に言句に執すれば毒氣にかゝるぞと相戒める爲に此の語を用ゐたのである。

【要解】靈利の衲僧は徑往を以て青林和尙を驗めしに來た、青林は死蛇を以て彼を迺つた、共に是れ作家で間髮を容れざる氣合が面白い、徑往は去で無く住で無く、印住印破の手に乘らぬ境界である。青林は路の眞中へ毒氣に中たれば必ず死すといふ死蛇を投げ出して其の脚下を睥んでゐる、正路に入るか邪路に入るか下手すると向脛に嚙り付く積りが見えてゐる、僧もソレ者で岐路を作らぬ、當頭かつたらどうする、命根を喪ふ、當頭からねばどうする、廻避やうとて逃げ場が有るまい當頭不當頭を超越して正恁麽だつたらばどうだ、ア死蛇の姿を見失つた、甚麽處に去つた、草深く這入り込んだと見えて見當ら無い、和尙其の草深いところ御用心めされよ、青林掌を拊つて儞も我も一等に箇の毒氣に中てられてゐるのぢやと。此の兩和尙毫も岐路に涉らない、背觸しない、それでゐて一歩も無駄足を履まぬ、一擧一動盡く渠に逢うて渠を知らぬ有樣ぢや、歩々踏著の進歩で青林も一等に毒氣を讚歎したぞ。

【著語】□歩を擧ぐれば卽ち迂廻。一歩でも足を擡げたらモー迂廻ぞ。□曾て毒を著くるに慣ふ。青林御自身に此の毒蛇に觸れた經驗があるから此の僧に施すのだナ。□儞に大膽を許す。豪膽驚くべしだ。□果然。果して其の通りやつた。□怎ぞ只儞に由らん。誰でも倒退三千するのが當然だよ。□築著磕著。面前背後渠に逢ひづめ。□且らく著忙なること莫れ。ソーマー忙てずに少し氣を落ち付けて見たらよからう。□是れ死蛇と雖も弄することを解すれば也た活す。死だやうな蛇だが使いてに依つては大いに活きるよ、青林の妙手でスッカリ毒氣を吹きかへした。□信せずんば懷を搜れ。何處へも行く筈が無い、懷中に手を入れて御覽。□頭上漫々脚下漫々。頭上も脚下も皆草の漫々地。變化自在の蛇に油斷せまいぞ。□廻り來れり。モー居まいと思つたら鎌首をチョンと擧げた。□將に謂へり候白と更に侯黑あり。どちらもどつちと云へぬ腕前だ、二人共毒氣に當られて仕舞つた。

頌云。三老暗轉柂（夜壑藏舟）　孤舟夜廻頭（澄源著棹）　蘆花兩岸雪（自他互契）　煙

水一江秋（上下冥通）風力扶帆行不棹（隨流得妙）笛聲喚月下滄洲（任運落前溪）

【讀方】三老暗に柁を轉じ、孤舟夜頭を廻す。蘆花兩岸の雪、煙水一江の秋。風力帆を扶けて行いて棹さず。笛聲月を喚んで滄洲に下る。

【字義】◎三老とは書言故事に「峽中舟師を以て長年と爲し、柁工を三老と爲す」とある、蓋し舟の柁夫のこと、今は青林を指す。◎滄洲とは瑯琊代醉卷三十の杜陽雜篇に「滄洲とは隋の大業九年元の藏幾過海の使判官となる、風に飄ふて洲島の間に至る、舟人曰く此れ滄洲なり、中國を去ること數萬里と、其の洲方千里、花木常に二三月の如し、人多くは死せず、居所或は金闕銀臺玉樓紫閣なり云々」とある、蓬萊島のこと。◎蘆花兩岸雪は兩岸の蘆花は雪の如く白きをいふ。◎煙水一江秋とは秋の江村の水天一色の風光をいふ。

【要解】此の頌は全篇船に譬へて本則を頌す。初め二句に青林を柁取りの名人に比して暗夜に孤舟を行る有樣を歌ひ、次の二句に柁を轉ずる邊境を叙べ、末二句に帆に任せて下る船の無礙縱横を明す。三老は航工で青林のことだ、誰も知らぬ暗夜に孤舟に乘じて柁をとつて出掛けた。頭を廻らすが字眼で三老柁を轉ずる毎に渠は頭を廻らす、渠が頭を廻らす毎に三老は柁を轉ずる、斯く柁を轉じ頭を廻らして互に兩岸の蘆花を照しながら一江の煙水に滯礙せられず、即ち當頭不當頭、喪身無廻避等の岸邊に觸れずスーと船は下つて行く。追手の風に帆を充分に孕まして竿も櫓櫂も投げ出し風のまに〳〵行く手定めず、仙境といはるゝ滄洲にも碇を下さず、誰が曲かは知らぬが玉笛金聲に月も徐に喚び戻されて無心にして篷を照して夜は沈々と深け渡る。風力は即ち二人の道力で作家互換の機鋒は蘆花雪月、光明笛聲相和して何とも彼ともいへぬ船頭の放樂よ。

【著語】口夜壑に舟を藏す。眞夜中に崖下を漕ぐ柁手の巧みを知る人は有るまい。口澄源に棹を著く。澄み切つて底まで見透いてゐる、濁り氣は更に無い。口自他玄契。自力とも他力ともいへぬ、互換の機鋒に隙間が無い。口上下冥通。水天一枚、師學の界畔がない。口流に隨つて妙を得。順波逆浪自由に使ひ得るところに妙がある。口任運に前溪に落つ。「さして行く先はいづくか知らねども、霞に落つる宇治の柴舟」朝から晩まで一切吾が事に干からぬ任運をいふ。

第六十則　鐵磨牸牛

示衆云。鼻孔昂藏各具丈夫相。脚跟牢實肯學老婆禪。透得無巴鼻機關。始見正作家手段。且道誰是其人。

【讀方】衆に示して云く、鼻孔昂藏、各丈夫の相を具す。脚跟牢實、肯て老婆禪を學ばんや。無巴鼻の機關を透得せば、始めて正作家の手段を見ん。且らく道へ誰か是れ其人。

【字義】◎鼻孔とは鼻のこと。◎昂藏とは尊大の貌ともあるが茲では高く秀でゝ立派なことをいふ

◎丈夫とは一人一匹の男子といふこと。◎脚跟牢實とは足元かしつかりして居ること。◎老婆禪とは禪に老婆禪といふ特別な種類があるではないが、本則劉鐵磨を呼び起す前程として用ゐたる文字、聊か貶下した意味がある、婆さんの世話やき禪といふ位の意に見よ。◎巴鼻とは巴は把で、馬の轡をいふ、鼻は牛の鼻繩のこと、畢竟攫へ所のことで無巴鼻は攫所なきこと。◎機關の機は機要と續く、物の肝腎のところ、關は關門にして透得することの出來難いところ。即ち一字で向上の那邊を指す。◎透得とは透徹見得と熟字して、確乎と認得すること。◎正作家は正師家の意で、大力量を有する衲僧のこと、作家とは文人騷客のことを作者の家、即ち作家と呼んだのが轉じて禪門の得悟底の人の意に用ゐらるゝに至つた。◎手段とは學人誘引の方便をいふ。

【要解】何人の顏を見ても眞中にムックリ高い鼻がある、自分の鼻孔で呼吸をすれば人々大丈夫の漢で決して他の背後に落ちぬ、脚跟が二本ニユット地上に立つてゐる、佛祖の脚足で步行で無いからコセ〳〵と老婆禪は御免蒙る。如何にも無巴鼻い機關を透得ねば眞箇作家の手段が知れるもので無い。サー道つて見よ、一體誰れが其の人なのだ。本則が溈山と劉鐵磨だから大丈夫、老婆禪等の語を用ゐた、佛法の上に男女の相を認めぬ樣子を表はしたのである。

擧。劉鐵磨到溈山。（相見已了）**山云。老牸牛汝來也**（撩蜂剔蝎）**磨云。來日臺山大會齋。和尚還去麼**（氣毒如烟火然）**山。放身臥**（牛路抽身）**磨便出去**（一撥便轉）

【讀方】擧す。劉鐵磨、溈山に到る。山云く、老牸牛汝來や。磨云く、來日、臺山に大會齋あり、和尙還て去らんや。山、身を放つて臥す。磨、便ち出で去る。

【字義】◎劉鐵磨は碧巖錄幻住鈔に「劉は姓なり、磨は石磑なり、鐵磨は鐵を以て做す底の磨なり、劉尼、法を溈山に得て機鋒峻峭にして人號して劉鐵磨といふ、溈山を去ること十里庵を結んで住む」とある、頑固な而かも餘程見識の優れた婆尼さんであつたらしい。◎老牸牛は老ぼけた牝牛といふこと、劉鐵磨を指す。◎臺山は山西太原府の五臺山のこと。支那五臺縣の東北、百四十里にあり、環り五百餘里、五峰高く雲表に秀づ、頂皆石土、因つて此の稱がある。文珠菩薩出現の靈地と傳へられる、又は淸涼山とも稱はれて居る。◎大會齋は盛んな供養會のこと。

【要解】劉鐵磨は宗門の女丈夫で溈山とは師弟の間から、十里も隔つたところから態々問候に出掛けた。鐵磨と綽名を取つたほど有つて大丈夫も及ばぬ英氣を有し、去來自由にして毫も他の勘驗を蒙らぬ、眞箇佛祖會中の英雄とも稱すべき比丘尼である。溈山が老牸牛、汝來たかと罠を張つた、溈山、自身は水牯牛だから劉鐵磨を老牸牛と見みたのである。鐵磨は來也の罠を見て取つて、和尙還つて去らんやと反對に網を被せた、臺山の大會齋には別に用事は無い、師匠の溈山が得々臺山まで御齋を漁りに赴くほど飢渴めには會つてゐない、ゴロリ横に臥てしまつた、去の網にも來の罠にもかゝら無い、師匠が師匠なら弟子も弟子で劉鐵磨何とも言はずに出て去んだ、出處進退如何にも自由である、兩者とも點檢すべき間隙が無い。靑山元動せず白雲自から去來といふ風趣である。

【著語】 口相見已に了る。到つて相見するのは少し手遲れだ、到潙山以前常に相見だぞ。口蜂を撩り蝎を剔ぐ。蜂を手捕りにし、蝎の生皮剝ぎは少し危險だよ、潙山だから好いやうなもの〻。口氣毒煙火は燃るがごとし。夫れ御覽、烟火のやうに毒氣を吐くでは無いか、寄りつけた訣のもので無い。口半路を身を抽んづ。去と來との中間へ全身を抛り出した、此の行履何と見たナ。口一撥すれば便ち轉ず。水上の葫蘆按著すれば便ち轉ずで、チヨツト押へたらころり身を轉じて仕舞つた。自由なものだ。

頌云。百戰功成老太平（安家樂業）　優柔誰肯苦爭衡（饒人不是癡）　玉鞭金馬閑終日（雖有如無）　明月清風富一生（受用不盡）

【讀方】 百戰功成つて太平に老ふ、優柔誰か肯て苦に衡を爭はん。玉鞭馬金、閑に日を終ふ、明月清風一生を富む。

【字義】 ◎太平とは心中平穩にして去來の干戈もいらぬ時節のこと。◎優柔とは左傳丘明の序に「優にして之を柔かにす」とある、潙山鐵磨共に機鋒を包んで示さず、物柔かに商量する樣を形容したのである。◎爭衡とは佛道論衡卷三に「佛を號して法王となす、豈衰周の李耳と德を比し衡を爭はんや」とある、衡は車の轅の端にある橫木のこと、長短を比較論量すること。◎玉鞭金馬とは何れも戰亂の時に用ゆるもの。◎閑終日とは刀はさやに、弓は袋に收めて閑寂に日を送ること。◎明月清風とは大安樂底の人の胸懷を示し表す形容。

【要解】 初句は潙山と劉鐵磨の參熟、第二句は潙山の優と鐵磨の柔と爭ふ無き所、三四の句は初句の流暢にして太平の閑富を以て結ぶ。老潙山と劉鐵磨と一挨一拶雙放雙收、百戰功成つて太平に老ゆる閑道人の會見であるから、權謀術數も用無く連衡合縱の沙汰も無い、優と柔との面接で勝敗得失の懸引などは頓と忘れたやうだ。將は老い世は安泰となつて見れば、兵亂の時に貴重で有つた立派な鞭も金覆輪の鞍おいた馬も今は閑日月を送つて勇ましい嘶も聞えぬ、夜は明月を語り晝は清風を友として一生受用不盡の富貴に衲僧の生涯を過すで有らう。潙山放身臥すと磨便ち出で去るところの境界とを明月清風に比して之を流暢に結末の一句に擧し起句の百戰功成つて太平に老ゆる有樣を明らかにしたのである。要するに老將は兵を論せず、一生豐饒受用不盡の明月清風を友として遊戲三昧する太平の境界を歌つたのぢや。

【要語】 口家を安んじ業を樂しむ。世が太平なれば士農工商其の業に安んじて家庭も和樂だ。口饒人是れ癡なるにあらず。「饒人は饒州の人で豐饒の民ぢや、富貴の人の子はどうも悠長のところがあるが鈍物では無いぞ、夫れ夫れ英氣はあるよ。口有りと雖も無きが如し。佛經祖錄も古則公案も有つて無きが如し、まるで其の物に成りきつてゐるからのことよ。口受用不盡。眼に見、耳に聞く、盡しても盡しても不足が無い、如何にも無盡藏ぢや。潙山鐵磨の日用が其れだ。諸人の日常はどうかナ。

第六十一則　乾峰一畫

示衆云。曲說易會。一手分付。直說難會。十字打開。勸君不用分明語。語得分明出轉難。不信試擧看。

【讀方】衆に示して云く、曲說は會し易し一手に分付す。直說は會し難し十字に打開す。君に勸む分明に語ることを用ゐざれ。語り得て分明なれば出づること轉た難し。信せずんば試に擧す看よ。

【字義】◎曲說は委曲の說法、委曲く間接に說法するをいふ。◎直說は方便を假らず驀直に說示すること。◎一手分付は兩手に分付せぬのであるから不充分なことをいふ。◎打開十字とは全提の商量、即ち都てを露出しての說法をいふ。◎分明とは分は辨別、明は明瞭で、事物の明かに知悉せらるゝこと。◎出轉難は餘り丁寧に說明すると却て妄執の窠窟に墮するをいふ。

【要解】三根に分つて三乘の爲めに委曲に說くは會し易いやうだが、一手に物を貰つたと同じで全分我が物とはならぬ、宗門にいふ一超直入如來地の法門は會し難いが縱橫自在十字に打開して兩手に分付ることができる。諸君分明に語言を以つて佛法を聞かんことを求めさつしやるな、語の上で會得しやうと思うと本分の事の出身はできぬ。若し其れでも確信ができぬとあらば本分に參じてみるがよい、語言の分別では會得できまいぞ。

擧。僧問乾峰。十方薄伽梵一路涅槃門。未審路頭在甚麼處。（快馬不如鈍坑）峰以拄杖一畫云。在這裏。（且信一半）僧擧問雲門。（疑則別參）門云。扇子𨁝跳上三十三天。築著帝釋鼻孔。（乞漢語）東海鯉魚打一棒。雨似盆傾。會麼會麼（怎麼解說更難理會）

【讀方】擧す。僧乾峰に問ふ、十方薄伽梵一路涅槃門、未審路頭甚麼の處に在るや。峰拄杖を以て一畫して云く、這裏に在り。僧擧して雲門に問ふ。門云く、扇子𨁝跳して三十三天に上り、帝釋の鼻孔に築著す。東海の鯉魚打つこと一棒すれば、雨盆の傾くに似たり。會すや會すや。

【字義】◎乾峰は洞山良价禪師の法嗣。◎十方とは東西南北四維上下をいふ。◎薄伽梵は又婆伽婆ともいふ、梵音バーガワット(Bhagavat)、世尊と譯す、楞嚴に「薄伽梵六義を具足す、謂ゆる自在、熾盛、端嚴、名稱、吉祥、尊重なり」とある。◎涅槃門とは楞嚴長水註に云く「十方の諸佛菩提涅槃の妙果を取證す。唯此一路通じて彼に到る。故に門といふ」と。◎路頭とは路のこと、頭は助字一路をうけていふ。◎拄杖は衲僧行脚の時に携ふる杖、上堂の時にも用ゆ。◎這裏とは此處といふこと。◎𨁝跳は跳り上ること。◎三十三天とは忉利天のことで、須彌山の頂に四峰あつて各八天がある。即ち三十二天で之に帝釋天の居る處を加へて三十三天となる。◎築著はぶつかること。

【要解】一人の僧が罷り出て世尊が楞嚴會上で十方薄伽梵一路涅槃門と說かれたげなが路らしいものも門らしいものもツイぞ御目にかゝつたことが無い、一體何處に其の樣な路頭が御座るか承り度いものぢや、乾峰有り合せの拄杖で虛空を一畫して這裏に在るといつた。其のまゝ僧は雲門和尙の許へ行つて再び此の事を問うた、スルト雲門は扇子が跨跳つて三十三天の絕頂に至り帝釋天の鼻孔に築著た、其れのみかビシャリ一棒を打ち込んだら東海の鯉魚が雨を降らすと盆水を傾けるやうな驟雨を催して來た、どうだ會つたか、會つたかナ。雲門の語言は直說法で甚だ會し難い。其の代り眞個に會したらば十字に打開するぞ。雲門は乾峰の拄杖を活かし、化して龍と作した、十方薄伽梵の風雨である、一路涅槃門の活作略である。上は三十三天に帝釋ありて思ふ存分風を起す、下は東海に鯉魚乾坤を涵すの雨を注ぐ。此の大活動に對して誰か干涉するものが有るか、這裏これ一路なり涅槃門なり、故に一路ならざる處無く、涅槃門ならざる處は無い、尙ほ擬議して路頭甚麼の處に在るなど丶世迷ひ言をいつてゐると拄杖の爲めに呑却せられて仕舞ふかも知れぬ。

【著語】□快馬鈍坑に如かず。坑は坑の誤り、河間王琛の碑に「朝雲坑を吹けば叛軍淚を流して歸降す。秦の民語げて曰く快馬健兒も老嫗の坑を吹くに如かず」といつた故事から出た。意は諸佛の光明神通を現ずるよりは困じ來れば眠り飢え來れば飯を喫すの方がましだ。□且らく一半を信ず。全分肯ふことは出來ぬが這裏に在り、マーよからう。□疑はゞ則ち別に參せよ。決心がつかぬなら能く參究したらよからう。□乞ふ漢語せよ。其れは何國の語だかサッパリ解らない、どうか漢語に譯して欲しいものだ。□恁麼に解說すれども更に理會し難し。是のやうに懇ろに說明して貰つてもどうも能く呑み込めぬ。下拙に理會せぬがよいのぢや。

頌云。入手還將死馬醫（下霹靂手用猨虎藥）返魂香欲起君危（揭棺救死別有神方）一期搊出通身汗（藥不瞑眩厥疾弗瘳）方信儂家不惜眉（和頂顱沒却）

【讀方】手に入つて還つて死馬を將て醫す。返魂香君が危きを起さんと欲す。一期通身の汗を搊出せば、方に信せん儂が家眉を惜まざることを。

【字義】◎死馬醫とは搜神記に、趙周が良馬死す、璞云く吾能く馬を活すと、一物猴に似たるを得此の物死馬を見て其の鼻を噓吸す、頃あつて馬起つ、又前の物を見ず」とある故事を引いたのである。◎返魂香とは述異記の上卷に「聚窟州に返魂樹あり、其の根心を伐つて玉釜の中に於て煮、汁を取りて又之を煑て丸からしむ、名けて驚精香といひ、或は神靈丸、卻死香等といふ、死尸地に在て氣を聞けば卽ち活すと本草に見ゆ」とある。◎一期は一往の意。期は約なり、限なり。◎不惜眉とは夾山の語に「若し人の道ふなくんば老僧兩莖の眉毛を惜まずして道ひ去らん」とある、落草の閑手段を弄すれば眉鬚墮落すといふが、それも敢て惜まぬといふ意。

【要語】第一句第二句に乾峰雲門兩老が起死回生の妙術を贊し、第三句第四句に僧が病根全癒の功果著はれて兩老の親切徹悃なることを感謝すべきであると結んだ。たとへ一度死んだ馬でも乾峰の

手に入れば蘇生さしてピン〳〵活動させるところの妙術がある。雲門の手裡にも亦絶氣息の者をして回生せしむるところの返魂香を有して君が危殆を手も無く取りとめた。此の兩名醫の投藥に依つて參得の僧全身に冷汗をしぼつて粉骨碎身、一期に脫出して病根を絕つならば始めて兩名手の徹骨徹髓なる親切が膽に銘じて其の有難さを思ふことで有らう。

【著語】□霹靂の手を下し、狼虎の藥を用ゆ。霹靂の手は敏才あることをいひ、狼虎の藥は劇劑をいふ。乾峰は殺すことも活かすことも自由自在の名醫である。□棺を揭げて死を救ふ、別に神方あり。棺の中から引きずり出して死人を活かすのが雲門の神術だ。□藥瞑眩せざれば厥の疾瘳へず。瞑眩するほどの熱さましを服んで瀧のやうに汗を絞らぬと病氣は全治しない。毒手に遇うて一度打殺されるとよいのぢや。□頂顙に和して沒却す。眉毛を惜まぬ位で無い、頂顙まで沒却してもかまはぬといふほどの慈悲ぞ。

第六十二則　米胡悟不

示衆云、達磨第一義諦。梁武頭迷。淨名不二法門。文殊口過。還有入作分也無。

【讀方】衆に示して云く、達磨の第一義諦梁武頭迷ふ。淨名の不二法門文殊口過る。還つて入作の分有りや也無しや。

【字義】◎達磨梁武の公案は第二則、淨名（維摩）文殊の公案は第四十八則にある。◎頭迷も口過も共に行詰つて手足の出ぬことを意味していふ。◎入作分とは入得作佛の略、不二法門に入り作佛する分上の意。

【要讀】第一則の達磨廓然の話と、第四十八則の摩經不二の話とを持ち込んで示衆の語としたのである。達磨の第一義諦廓然無聖に梁の武帝が迷を生じて一語も發し得なかつた。維摩の不二法門に文殊が是れを入不二の法門と爲すなどとウツカリ口を滑らした、頭迷ふと口過るとは道得不道得の二を以て見れば二に落ち三に落つ。還つて直下に入得し作用し得る底の分あらば梁武や文殊の二の舞ひをせずにすむのぢや。誰れか其の人が有るかナ。

擧。米胡令僧問仰山。今時人還假悟否。（還曾迷麼）山云。悟即不無。爭奈落第二頭何。（如何免得）僧廻擧似米胡。（是第幾）胡深肯之。（肯即不無、爭免第二）

【讀方】擧す。米胡、僧をして仰山に問はしむ。今時の人還つて悟を假るや否や。山云く、悟は即ち無きに非ず、第二頭に落ることを爭奈何ん。僧廻つて米胡に擧似す。胡深く之を肯ふ。

【字義】◎米胡は會元の九に「京兆府の米和尙又米七師といふ、俗舍の第七なるを謂ふ、又米胡といふ髯美しきが故なり」とある、雪峰に嗣ぐともいふが仰山と同參なる點から見て潙山に嗣ぐとい

ふ說もある。◎仰山の傳は第十五則に出づ。◎落第二頭とは迷を離れて悟を得るといふ調子に迷悟を二途に見るをいふ。◎肯とは他の意見に對して然諾すること、贊成する、承知する、同意すること。又はゆるすことなどの意あり。

【要解】本則は六祖と南嶽との話と全く同じである。米胡が僧をして仰山に問はしめた一語は六祖の還つて修證を假るや否やの拶著に同じく、仰山の答は南嶽の修證は無きにあらず染汚は卽ち得ずと同じく、胡深く之を肯ふは六祖の吾亦如是汝亦如是と同じである。舊時の人も今時の人も必ず悟は假りる、悟は無きにあらざれどもどうも第二頭に落在して仕樣が無い、落在しても大悟人ならば應に住する所無うして其の心を生ずべしで落在の其の儘が大悟である。實は大悟の相も認めない、何となれば本來迷悟の御世話にならぬ人ぢや。

【著語】口還つて曾て迷ふや。誰れか迷つた人が有るのか、迷はぬ人に悟はいらぬ筈だ。口如何んぞ免かれ得ん。第二頭を免かれ得る工夫が有るか。仰山和尙、君はどうだ。口是れ第幾ぞ。傳令使御苦勞なことだ。第二頭どころで無い、七八九十に落ちたらしい。口肯ふことは卽ち無きにあらず、爭でか第二を免れん。肯ふたら其れが第二頭ぞ。

頌云。第二頭分悟破迷（普州人送賊）快須撒手捨筌罤（放下著）功兮未盡（纔著即不堪）成駢拇（終是分外）智也難知覺噬臍（禹力不到處河聲流向西）兎老冰盤秋露泣

烏寒玉樹曉風凄（坐著即不可）持來大仰辨眞假（一點難謾）痕玷全無貴白珪（切忌觸破）

【讀方】第二頭、悟を分つて迷を破る、快に手を撒して筌罤を捨つ。功未だ盡きず駢拇となる、智や知り難し噬臍を覺ゆ。兎老いて氷盤秋露泣く、烏寒うして玉樹曉風凄たり。持し來つて大仰眞假を辨ず、痕玷全く無うして白珪を貴ぶ。

【字義】◎第二頭云々とは第二義門に下つて迷悟の兩頭を分つて迷執を破るをいふ。◎撒手は手を打ち拂うといふこと。◎筌罤とは罤は兎を捕るわな、筌は魚を漁る網。共に魚兎を得る爲の方便にして、得了れば卽ち捨つべきものなることを言ひ表はす語。◎駢拇は莊子駢拇篇に「足に駢あるものは無用の肉を連ね、手に枝あるものは無用の指を樹つ云々」とある。駢拇は足の大指が第二指に連るをいひ、枝指は指が六本あるをいふ。◎噬臍は後悔すること、左傳卷三に「三甥の曰く鄧の國を亡ぼすものは必ず此の人ならん、若し早く圖らずんば後に君臍を噬まん」とある。◎兎老氷盤云々は月の中の兎が老いたといふのであるから滿月のことをいふ。氷盤は月の異名。◎玉樹とは大荒經に「崑崙丘の上に琅玕玉樹あり、子を結ぶこと玉の如し」とある、茲では霜雪を帶んだ樹を形容した語。◎痕玷白珪の玷は玉のきず、白珪は立派な寶玉の名。詩經抑篇に「白珪の玷たるは尙は磨すべし」とあるより引用した語。

【要解】此の一頌は迷悟の二を以て全篇を貫き、終に迷悟を超絶したる一の白珪に歸す。且らく鈍漢の爲めに悟を分ち迷を破るは直に第二頭である、故に仰山の指南に委して迷悟の兩手を打ち拂ひ、言句葛藤の筌蹄をも捨てゝ仕舞ふがよい。何故なれば悟の功位に滯ると駢拇の六つ指で過ぎたる畸形ぢや、迷悟を打拂ふた智慧は奥深くして底が知れぬ、見聞覺知の屆かぬことは臍を噬むも及ばぬと同然よ、さて智不到のところを云つて見るならば月は深けて寒光を放げ草木露を含んで秋氣に涙を催ほさせ、鳥は玉樹に巣くふて曉風に凄寒する如き有樣である。大層立派な境界のやうなれども大功一色の死漢で三冬暖氣なし、枯木死灰に陷つて仕舞ふ。米胡は深く此の宗に達した人であるから僧に一語を呈せしめて仰山の迷悟の邊に滯礙してゐはせぬかと、驗して見た。然るに仰山は不琢不磨一點の瑕疵無き無價の白珪で有つたので米胡の滿足此の上も無いことである。

【著語】□普州の人賊を送る。普州は泥棒の産地をいふ。其の普州の人が賊を護送する、米胡と仰山とはよい泥棒の道伴れぢや。□放下著。奇麗に放下して仕舞ふがよい。□終に是れ分外。□禹力不到の處、河聲流れて西に向ふ。大禹疏水のことは第九則の頌に出てをる。禹の力も及ばぬ、恐らくは佛祖の力でも及ぶまいよ。□戀著すれば即ち堪えず。其許に惚れ込んだら泣いても足らぬ。□坐著すれば即ち不可なり。どのやうに好いところでも其處に腰を据ゑたら其れが病の原ぢや。□一點も謾じ難し。仰山の境界は佛祖も瞞肝は出來ぬ。□切に忌む觸破することを。白珪には背觸せまいぞ、一寸でも觸著すると痕玷を生ずるから第二念に渉つてはならぬ。

第六十三則　趙州問死

示衆云。三聖雪峰春蘭秋菊。趙州投子卞壁燕金。無星秤上兩頭平。沒底缸中一處渡。二人相見時如何。

【讀方】衆に示して云く、三聖と雪峰とは春蘭秋菊なり。趙州と投子とは卞壁燕金なり。無星秤上兩頭平なり。沒底缸中一處に渡る。二人相見の時如何。

【字義】◎三聖の傳は第十三則に出づ。◎雪峰の傳は第二十四則に出づ。◎春蘭秋菊とは兩者何れも特種の面目があつて其の風趣には優劣がつかぬこと。◎趙州の傳は第九則に出づ。◎投子は舒州投子山大同禪師のこと、翠微無學禪師の法嗣である、禪師は州の懷寧の人で、姓は劉氏、幼歳にして出家し、初めて安般觀を習ひ、後に翠微山の法席に謁して、頓に宗旨を悟り、後投子山に住して盛に宗風を擧揚し、乾化四年甲戌(皇紀一五七四)四月六日壽九十六を以て示寂せられた人である。◎卞壁燕金とは趙氏連城の璧と燕の國に産する金とは共に類なき貴重なものである。何れも尊くて兩者の間に優劣が無いといふ意を示す。◎無星秤は目盛のない秤のこと。◎沒底缸は底無しの船をいふ。

【要解】三聖慧然と雪峰義存とは春蘭秋菊で時と姿は異れども其の香氣の高いことには優劣が無い

本則の趙州と投子とも亦卞和の璧と燕國の金とで優り劣りは見付からぬ、秤上に星が有ればこそ世俗でも輕重を知ることができるが無星秤上に掛けて見たのでは鈞錙錙銖を超越してゐるから兩頭平らかぢや、底ぬけの舡に乘つて一處に日用を渡ると浮沈の心配もいらぬ。此の樣な人だちが出會つたら如何な話をするだらう、本則に就いて耳を傾けて聽け。

擧。趙州問投子。大死底人却活時如何（探竿在手）　**子云。不許夜行投明須到**（影草隨身）

【讀方】擧す。趙州、投子に問ふ、大死底の人却つて活する時如何。子曰く、夜行を許さず明に投じて須らく到るべし。

【字義】◎大死底人とは一切の妄情を死却して、一點煩惱の熱氣なき人、向上へ進み切つた人のこと。◎不許夜行云々とは夜中の訪問は眞平御免だ用事があつたら日中に來て下れといふ意、宗意は要解をみよ。

【要解】趙州が投子の脚下を探りに來たので兩人とも師家分上の相見である、名人と名人との會見だから凡眼を以ては一寸窺ひがつかぬ。死活といふ兩天秤を持つて趙州は投子の前へスポリ放げ出した。大死底の人活する時如何ん、大死人は大死人で盡してゐる、活する時は活する時で盡してゐる、死と活と並ぶもので無い。今且らく大死人と活人と分けて投子を驗みるのである。投子は頭からテンデ死活などいふことに耳を假さない、夜行を許さず明に投じて須らく到るべし、今は夜も更けて足許も暗いことぢやから夜が明けたら來て頂きませう、大死だの活時だのと其の樣な古めかしい話は止めてマー脚下に照顧たらよからう、夜行などをして大死人に觸著つて額でも疵つけまいぞ。投子の一語は夜半正明天曉不露、趙州の問著は死中得活枯木花開、互ひに正位を犯さぬ這の事の究明である。

【著語】□探竿手に在り。　趙州又例の泥棒氣を起した、死活にあづからぬ死活を探竿として試みた。□影草身に隨ふ。　投子も亦大泥棒、直に明暗の隱れ簑を被て趙州の膽魂を拔きに行つた。どちらも優り劣りの無い好作家ぢやと萬松も隨喜した。

頌云。芥城刧石妙窮初（及盡今時始得成立）　**活眼環中照廓虛**（絕後重甦欺君不得）　**不許夜行投曉到**（已涉程途）　**家音未肯付鴻魚**（已是妄傳消息）

【讀方】芥城刧石妙に初を極む、活眼環中廓虛を照す。夜行を許さず曉に投じて到る、家音未だ肯て鴻魚に付せず。

【字義】◎芥城刧石とは樓炭經にある「二事を以て刧を論ず、一に云く、一大城あり、東西千里、南北四千里、中に芥子を滿たす、百歲に諸天來下して一を取る、芥子盡きて刧尙は盡きず、二に云く、一大石あり方四十里、百歲に諸天來下して羅縠衣を取りて拂ふ、石盡きて刧尙窮らず」といふ故事

から來た語で、何れも無數量の長時間のこと。◎環中照廓虛の環中は莊子に「樞は其の環中を得て以て應ずること窮なし」とあるより來た語で、廓虛は廓然虛白、環中を形容した語である。◎家音とは故鄕へ送る音信のこと。◎鴻魚は「大を鴻といひ小を鴈といふ」と詩傳にある、前漢書蘇武傳に「西漢の使、單于に謂て曰く、天子上林に於て射て鴈を得たり、鴈の足に蘇武が繫る所の書あり云々」とある、卽ち鴻に書を繫けて送るを鴻書といふのである、家音の緣語。

【要解】　初二句に趙州の境界、第三句は投子の答處、第四句は兩老が本地の風光を究明する端的を頌す。趙州の活眼は時刧の上から云へば芥城刧石久遠の最初を窮め、空間から云へば廓落たる大虛空を照すところの大眼力を有してゐる、投子は敏捷この趙州の境界を見拔いて夜行を許さず明に投じて須らく到るべしと趙州の眼睛を瞎却したは大小に偉いものよ、此の兩老には本家鄕へ音信するに鴻魚の便宜を借りる要はチットモいらぬ、兩老は實に同死同生底の知音だから最早や文字言句の音信を借りるまでも無く心々相印の間柄であると讚歎したのである。

【著語】　□今時を及盡して始めて成立することを得。　空刧以前と今時とを穿鑿して見れば別物では無い。□絕後に重ねて甦らば君を欺くことを得ず。　大死一番、絕後に甦つて來た投子だ、欺きおほせない。□已に程途に涉る。　半分路モー出掛けた、明暗の半途にして更に犯さぬ。□已に是れ妄りに消息を傳ふ。　文字言句を借りて消息せぬといふが、取り違りに涉らぬ消息ならば幾等してもよい、日炙り風吹く十二時で毫も間斷の無い音信ぞ。

第六十四則　子昭承嗣

示衆云。韶陽親見睦州拈香於雪老。投子面承圓鑒嗣法於大陽。珊瑚枝上玉華開。薝蔔林中金果熟。且道如何造化來。

【讀方】　衆に示して云く、韶陽親しく睦州に見えて香を雪老に拈ず、投子面り圓鑒に承けて法を大陽に嗣ぐ、珊瑚枝上に玉花開き、薝蔔林中に金果熟す。且らく道へ如何が造化し來らん。

【字義】　◎韶陽親見云々とは景德傳燈錄卷十九に「韶州雲門山文偃禪師初め睦州陳尊宿に參じ大旨を發明す、後雪峰に至つて玄要を益資す」とあるを引用ゆ。◎雪老は雪峰義存禪師のこと。◎投子承圓鑒とは投子は前則にあつた投子義靑禪師で、此の人初め洛に入つて華嚴を聞いて居たが偶ま悟る處あつて諸の宗師家を訪ひ其の頃會聖岩に居つた圓鑒禪師の許に行つて甚だ重んぜられた、居ること三年にして圓鑑が洞下の宗旨を示すに皆妙契した、此に於いて大陽から所傳の頂相皮履直綴等を付屬して、「吾に代つて其の宗風を續げ」といつたといふ故事を引用ゐたもの。◎珊瑚枝上は丹霞子淳禪師の投子宗風頌に「珊瑚枝上玉花開き、風淸香を傳へて九垓に遍し」とあるに據る。◎薝蔔林中とは維摩觀衆生品に「人薝蔔林に入つて唯々薝蔔を嗅いで風香を香がざるが如し」とある、薝蔔は梵語譯して香花といふ。頗る香氣の高い植物だと謂ふ。

【要解】韶陽の雲門は睦州の下に親しく見性したが嗣法は雪峰にした、投子は面り浮山の圓鑑に承當したが大陽警玄に嗣囑した、宗門に於ける付法傳衣の正當は凡情を盡し聖解を脱せざれば議すべきで無い。玉花開き金果熟するは一蒲團上の投機證契で雲門は睦州に花開き雪峰に果を結び、投子は浮山に落花し大陽に果熟した、花も果も人々の執捉運奔の上に因圓果滿で有つて決して二面が有るのでは無い。是の如き一華開五葉結果自然成の造花の妙手は如何して現成するか、サー本則の法眼承嗣の答處に參ずるがよい。

擧。子昭首座問法眼。和尚開堂承嗣何人（早知今日、成閑管。悔不當時用好心）眼云。地藏（恩歸有地）昭云。太辜負長慶先師（肘膊不向外曲）眼云。某甲不會長慶一轉語（佯打不知）昭云。何不問（引得狼來屋裏厮）眼云。萬象之中獨露身。意作麼生（覿面相呈）昭乃竪起拂子（兩重公案）眼云。此是長慶處學得底。首座分上作麼生（劈箭奪窠）昭無語（只跳得一跳）眼云。只如萬象之中獨露身、是撥萬象、不撥萬象（却被葫蘆倒藤）昭云。不撥（話作兩橛）眼云。兩箇（明眼難謾）參隨左右皆云撥（轉見不堪）眼云。萬象之中獨露身。聻（兩彩一賽）

【讀方】擧す。子昭首座、法眼に問ふ。和尚開堂何人に承嗣するや。眼云く、地藏。昭云く、甚だ長慶先師に辜負す。眼云く、某甲長慶の一轉語を會せず。昭云く、何ぞ問はざる。眼云く、萬象之中獨露身、意作麼生。昭乃ち拂子を竪起す。眼云く、此は是れ長慶の處に學得する底なり、首座分上作麼生。昭無語。眼云く、只萬象之中獨露身といふが如きは是れ萬象を撥ふか萬象を撥はざるか。昭云く、撥はず。眼云く兩箇。參隨の左右皆撥ふと云ふ。眼云く、萬象之中獨露身、聻。

【字義】◎子昭首座とは法眼と同じく長慶の慧稜禪師に參じたが、法眼は長慶を辭して地藏院の桂琛禪師に依て大事を了畢した、其の後撫州臨川縣の崇壽院で開堂演法した時、昭首座は法眼が長慶の爲に拈香せぬと憤つて大に之を責めんとして茲に一場の法戰を開いたのである、併し法眼が大事了畢して嗣法したのは長慶を辭して地藏の下に來てからであるので昭首座の問責は聊か的が外づれて居る。◎法眼の傳は第十三則に出づ。◎地藏の傳は第六則に出づ。◎先師とは示寂後に於ける嗣承師に對する稱。◎萬象とは森森羅列する宇宙間の差別相を概括していふ語。

【要解】子昭と法眼ともと同參で長慶の會下にあつた、然るに法眼禪師は地藏桂琛に嗣承し長慶會下の衆を領じ來つて撫州の崇壽院に開堂せられた、其許で子昭首座は中心穩かならずして此の問話を呈して來たのである。法眼和尚は何人に法を承嗣だのだ。眼は地藏の桂琛禪師に嗣いだ。其れでは和尚甚だ先師長慶慧稜に對して辜負ぬといふものぢや無からうか。某甲は長慶の會に參じて居つたがどうも老僧の一轉語を會得しなかつた、是からが公案である。子昭は以前の法眼だと思つてゐ

るから何故問はぬのだなどとソロ〱圖に乘つて來た、法眼は子昭を直に長慶として長慶投機の偈を以て問を發し、15,2萬象之中獨露身とは其の意作麽生。昭卽ち拂子を竪起た。其れは長慶で學得つた眞似ぢや、首座の萬象之中獨露身は作麽生である。昭遂に語無し、行詰つて仕舞つた。法眼は落草のあまり子昭を人物にしてやらうと萬象之中獨露身といふが其の萬象を撥ひのけるのか撥ひのけずともよいか。撥はずともよろしい。其れでは萬象と獨露身と兩箇になつたやうだ。其の座下に居た參學の隨徒は皆撥ふと横から口を出した。法眼此に於いて萬象之中獨露身聻、其れ其許だ、撥も不撥もいらぬ、山は山で聻、河は河で聻、頭々物々萬象のまゝで獨露身、一は一で獨露身、二は二で獨露身、一は二を妨げず、二は一を礙へない、『諸法は皆眞である、觸れず背かず、思量分別の二念にさへ渉らねば人々是れ獨露身であり眞實人體である。本則の要は單に形式上の師承のところに有るのでは無い、寧ろ承嗣などのことは子昭ごとき人情己見を有する輩の論ずべきことで無い、法眼は地藏に嗣法して長慶に辜負するが如く見るのは甚だしき凡眼である、眞に長慶の法を體得して居る者は法眼であつて子昭では無い、萬象之中獨露身の道は法眼の見處却つて長慶先師を驀過するの力量がある、其れでこそ眞實先師の恩に報ゐ得るのである、子昭は法眼を詰りに來て却つて法眼のために長慶の法道で以てやり込められた態である。撥不撥の二見を究めて萬象之中獨露身聻の境界に達するのが先師の恩に辜負せざる所以、是れ却つて智恩報恩の端的である、人々自己に立ち返つて今日二六時中辜負底か知恩底かと參究するのが此の公案の要處である。

【著語】 □早く今日閑管に成ることを知らば悔らくは當時好心を用ゐざることを。 今日閑管になると知つてゐたら當時好心に世話するでは無かつたのに惜しいことをした、萬松は子昭の胸中を見拔いての著語だ。□恩歸するに地有り。 報恩には報恩の端的がある。□肘膊外に向つて曲らず。肘は手の肘、膊は足の膝。辜負するといふのは無理だ、地藏の內側に向いたものを强ひて長慶の外側へ曲げやうとて曲るもので無い。□佯つて知らざる打す。 口では不會といふが其の實は長慶の五臟六腑までも御承知だらう。□狼を引得し來つて屋裏に屙せしむ。 いらぬことに、法眼狼を連れ込んで來て家裏に糞を屙れさた、跡じまつも君がするのだよ。□覿面に相呈す。 眼の前へスツト衝き出された、遁げも隱れも出來ぬ。□兩重の公案。 獨露身でよいのに又拂子などを竪起て問題を二つにもして却つて複雜にした。□筈を劈け窠を奪ふ。 陣地も兵器も皆差押へられて仕舞つてをる。□只跳得一跳せよ。 拂子を竪てたはよいがモー一度其許を跳び出る活機が無くてはダメよ。□却つて葫蘆に倒に藤を纏はる。 葫蘆に藤の纏くのが當然だのに却つて葫蘆が藤に纒うたとは可怪しい、小言をいひに來た子昭首座が却つて法眼に問ひ詰められてグーの音も出ぬとは可愛想だ。□話兩橛と作る。 兩橛になつて拔きさしが出來まいよ。□明眼は謾じ難し。 法眼の烱眼には驚いた、チョツトモ誤魔化すことが出來ぬ。□轉た堪へざるを見る。 默て見ては居られない。□兩彩一賽。 賽は簺に通ず、簺は一三五の奇數、二四六の偶數の文彩がある。奇偶の文彩二であるが六の中を離れぬ。撥と不撥と共に同一獨露身の聻に歸したといふ意。

頌云。離念見佛破塵出經（草枯鷹眼疾　雪盡馬蹄輕）現成家法誰立門庭（不少不剩）
月逐舟行江練淨（一多無礙　去住自由）春隨草上燒痕青（頭上鷰取爽山際　從這裏流出）撥不撥（轉必兩頭走）
聽叮嚀（事不厭細）三徑就荒歸便得（下坡不走　快便難逢）舊時松菊尚芳馨

【讀方】念を離れて佛を見、塵を破つて經を出す。現成の家法、誰か門庭を立つ。月は舟を逐うて江練の淨きに行き、春は草に隨つて燒痕の青きに上る。撥と不撥と、聽くこと叮嚀にせよ。三徑荒に就て歸ること便ち得たり、舊時の松菊尚芳馨。

【字義】◎門庭は門庭の家風、卽ち第二義門の方便假設をいふ。◎江練淨とは文選二十七卷謝玄暉が詩に「餘霞散じて綺を成し澄江淨うして練の如し」とあるより出づ。江水澄んで淨明なるをいふ。◎燒痕青とは僧惠崇が詩に「河は岡勢を分つて斷え、春は燒痕に入て青し」とあるに據る。燒痕は枯草を燒いた跡をいふ。◎三徑就荒とは陶淵明歸去來の賦に「三徑荒に就いて松菊猶存す」とあるに據る、三徑とは松徑と菊徑と柳徑とである。

【要解】有念無念を離るれば是れが卽ち見佛である、微塵を破つて大經卷を出すといふも大小の根塵を打破すれば宇宙が盡く經卷と成る、見佛の世界、經卷の宇宙となれば現成の其の儘が祖師の家風法則であつて別に門庭を張つて橫說竪說する要は有るまい。以上の四句で萬象の體を明した月の獨露身は萬象の舟を逐うて澄水の萬波を輝し、月も沾れず波も碎けぬ、獨露の春は萬象の草に隨つて野邊に萠え出で、桃紅李白の一春色と現成する。此の二句は現成家法の當體で萬象と獨露と不二にして礙ゆる無き樣子。撥と不撥と、叮嚀に聽取して二分に渉るで無い、不染汚の工夫が肝腎ぞ。此の二句で本則を擧し呈示して勸誡の語とせられた。最後の二句は天童の爲人で回光返照の地を示されたのである。陶淵明の歸去來の賦を其のまゝに、三徑の居を捨てゝ且らく官途の塵境に去來してゐた間にスッカリ荒れはてゝゐるが、便ち歸り來つて見れば流石に吾が本家鄕ほど有つて舊時の景色は變らずに松は翠を滴し菊は芳馨に匂ふてゐる、誰しも一度は此の故鄕に歸るがよい人々脚下を返照すれば松も菊も萬象之中獨露身で現成公案ならざるは無い、子昭は今尚は三徑の荒に歸らぬから徒らに門風の黨與に懸念して眞箇此の道場に遊ぶことが出來ぬのぢや、座下の諸人何と此の景色を觀照し得たかどうだナ。

【著語】□草枯れて鷹眼疾かなり。□雪盡きて馬蹄輕し。　草の枯れ果てる秋の頃には鷹の眼は疾くなり、春雪が消え盡す時分には馬の蹄も輕々しく駆ける、無念の時見佛の眼あり、分別法執の塵埃を除けば日常の往來に罣礙は無い。□少るにあらず、剩るにあらず。　佛に在つても增さず、衆生にあつても減せず、無欠無餘の家法ぢや、□盡く這裏より流出す。　元より門風などを爭ふには及ばぬ、無門の大道ぞ。□一多無礙、去住自由。　月は冲天に在つて大艦小船を照して一杯、西へ

でも東へでも跡を逐うて自由に往來する。□頭上に夾山を薦取せよ。百草頭上に老僧を薦取すと夾山の垂語にあるから出た語、百草は萬象だが其のまゝそつくり薦取てしまへば獨露身覃で少しも礙へぬ。□轉すれば必ず兩頭に走る。分別が起きると有となり無となり撥となり不撥となる、其許で獨露身の活機が失せるのぢや。□事は細を厭はず。微細に研究してみよ、石橋を叩いて渡る位で無くては履み間違うぞ。□下坡に走らずんば。□快便逢ひ難し。屢出る著語だ、急がぬと乘り遲れるぞ、今歸家穩坐せねば何れの時を待たんやである。

第六十五則　首山新婦

示衆云。吒吒沙沙。剝剝落落。刁刁蹶蹶。漫漫汗汗。沒可咬嚼。難爲近傍。且道是甚麼話。

【讀方】衆に示して云く、吒吒沙々。剝々落々。刁刁蹶蹶。漫々汗汗。咬嚼す可きこと沒く、近傍を爲し難し。且く道へ是れ甚麼の話ぞ。

【字義】◎吒吒とは責むる時に發する聲、又は怒る時に發する聲である。◎沙沙とは嘶く樣な聲の形容。◎剝剝とは裂なり、落なりとある、物を擊ち碎く音。◎刁刁とは風の止まんとして微かに動く貌。◎蹶蹶とは物事に對し敏やく動くこと。◎漫漫汗汗は顢々頇々に同じ、人を莫迦にした風貌をいふ、大面のこと。◎咬嚼はかみくだいて味ふこと。◎近傍とは傍に寄り付くといふ意で、難爲近傍とあれば寄つても付けぬといふこと。

【要解】吒吒沙沙、剝剝落落、刁刁蹶蹶、漫漫汗汗、字書を引いて講釋の出來ぬ文字ぢや、是の如き言音は無義味の語であつて知見の齒が立たぬ、咬嚼く餘地が無い、解會を以ては近傍ることも出來ぬ。是れ甚麼の話か、サー何とか道ひ得る者があるか、會せずんば例に依つて本則に參到せよ。

擧。僧問首山。如何是佛（可憐新鮮）山云。新婦騎驢阿家牽（是何道理）

【讀方】擧す。僧首山に問ふ、如何なるか是佛。山云く、新婦驢に騎れば阿家牽く。

【字義】◎首山とは汝州首山寶應省念禪師のこと。風穴延昭禪師の法嗣、常に法華經を讀誦して居たので念法華と呼ばれた。萊州の人で、姓は狄氏、本部南禪院で受業し、初めて首山に住して第一世となられた、淳化三年（皇紀一六五二）六十八歲で入寂せらると傳ふ。◎新婦、阿家とは新婦は花嫁、阿家は姑のこと。萬松老人の語に「俗諺に云へることあり、顚倒倒顚、新婦驢に騎れば阿家牽く」とある。

【要解】僧の問話は月次の如何なるか是れ佛であるが、實は平常初夜にも後夜にも差し措くことの出來ぬ究竟の問題である。花嫁が驢馬に騎れば阿家が牽く、是れが首山の如何なるか是れ佛である、此の當處には貴賤貧富も取捨憎愛も面出しすることが出來ぬ、況して煩惱や菩提、衆生や佛の影法師も見えぬ、新婦憍らず阿姑貢らず、而も驢は無心にして往生す、三身卽一の相好光明といふも

尚ほ當らずである。萬松の謂ゆる咬嚼すべき沒く、近傍爲し難しとは此のことで、咬嚼し近傍するを須ゐぬのである。

【著語】口可瞧だ新鮮。語は古いが問は新しい、誰しも一度は問ふべきである、而して究めて置くべきことぢや。口是れ何の道理ぞ。脚下を看よといふのだらう。化粧せぬ嫁御寮、權も角も取れた阿家、皆是れ本來人の御相好よ。

頌云。新婦騎驢阿家牽（草本不勞拈出）體段風流得自然（描不成畫不就）堪笑效顰鄰舍女（弄巧成拙）向人添醜不成妍（取笑傍觀）

【讀方】新婦驢に騎れば阿家牽く。體段の風流自然を得たり。笑ふに堪へたり顰に效ふ隣舍の女、人に向つて醜を添えて妍を成さず。

【字義】◎體段とは風姿の意。◎效顰隣舍の句は書言六に「强ひて人に學うを顰に效うといふ」とあり、又莊子天運の篇に「西施心痛む、心を捧けて顰すれば更に美を益す、隣家の醜女顰に效つて更に其の醜を增す」とある、柄にない人眞似をして却つて其の醜を增すを諷したのである。◎醜は風貌の見惡きこと。◎妍は見目よきこと、美貌をいふ。

【要解】第一句に首山の答話、第二句に自然の風流、第三第四句に醜女が西施の顰に效うて一層の醜婦になつたといふ例を擧げて前の自然を强く讚し相似の之に及ばざることを示したのである。新婦驢に騎れば阿家牽くといふ其の新婦の體段を見れば田舍丸出しで白粉も用ゐず口紅もさゝず、姑に阿る風も無ければ憎むといふ氣色も無い、有りのまゝを呈露して其れで自然の態度品格が言ふに云はれぬ風流だ。阿家も亦其の通り自然であつて取捨憎愛の二念が無いから嫁が姑やら姑が嫁やら區別し兼ねるほど仲睦じい、生佛一如の有樣である。此の花嫁を見た眼で西施の泣顏の顰に效つた隣舍の醜女をみると可笑て堪らない、人から美婦だと賞められやうといふ分別心よりして醜女が泣面を眞似たから一段と醜くい魔女のやうな面態になつた、醜は醜ながらに平常の容貌の方が自然で却つて嬋妍の美がある。從來身心脫落の境界であるのに心と說き性と說き迷と說き悟と說いて遂に本來人の面目を失し、本地の風光を忘るゝに至るは如何にも氣の毒なものぢや、人々須らく體段風流自然を得るのが參學の肝要なるぞ。

【著語】口草本拈出することを勞せず。草本は下書の畫圖、輪廓だけ出來たやうだが下畫だから人の前に持つて出て鑑賞に與からうなどといふ心配はいらぬ。口描不成、畫不就。嫁も姑も本來本法性天然自性身の姿たちや、繪にも畫にもならぬところに全身が現成してゐる。口巧を弄して拙と成す。本のまゝで置けば好いのに色々な之乎者也を容れるから却つて醜の上塗だ。口笑を傍觀に取る。傍から觀て笑ふばかりで無い、自から省みて大いに忸怩たらざるを得ぬ、回光返照して出身の退步を學するがよい。

第六十六則　九峰頭尾

示衆云。神通妙用底放脚不下。忘緣絶慮底擡脚不起。可謂有時走殺有時坐殺。如何得恰好去。

【讀方】衆に示して云く、神通妙用底も脚を放ち下さず、忘緣絶慮底も脚を擡げ起さず。謂つべし有時は走殺し有時は坐殺すと。如何が恰好し去ることを得ん。

【字義】◎神通妙用とは日常の行履の上に佛法を自由に活用すること。◎放脚とは脚を放げ出して踏み込むこと。◎擡脚とは脚を上げる、踏み著けること。◎走殺は徹底走ること、神通妙用を指す。◎坐殺は徹底坐るの意で忘緣絶慮の當體を指す。◎恰好とは都合よくすること、背觸に渉らぬ樣子を示す語。

【要解】運水搬柴の神通妙用ある漢も此の本則には一歩も脚を下すことが出來ぬ、諸緣を忘じ萬慮を絶する底の漢も此の公案には足を擡げて踏著ることが出來ぬ。走殺と飛び走つて家舍の活計を忘れ、坐殺と居づくまつて途中の受用を知らぬと有つては擔板漢たるを免れぬといふもの、如何やうにしたらば恰好に走殺にも坐殺にも墮ちぬ衲僧の日常が出來やうか、サー其れを能く見究めて置くことが大切ぞや。

舉。僧問九峰、如何是頭。〔高超威音之前〕峰云。開眼不覺曉。〔明不越戸〕僧云。如何是尾。〔獨歩劫空之後〕峰云。不坐萬年牀。〔穴不棲巢〕僧云。有頭無尾時如何。〔先行不到〕峰云。終是不貴。〔奴見婢殷勤〕僧云。有尾無頭時如何。〔末後太過〕峰云。雖飽無力。〔有甚麼用處〕僧云。直得頭尾相稱時如何。〔君臣道合上下和同〕峰云。兒孫得力室内不知。〔各安其分〕

【讀方】舉す。僧九峰に問ふ、如何なるか是れ頭。峰云く、眼を開いて曉を覺えず。僧云く、如何なるか是れ尾。峰云く、萬年の牀に坐せず。僧云く、頭有てつ尾無き時如何。峰云く、終に是れ貴からず。僧云く、尾有て頭無き時如何。峰云く、飽と雖も力なし。僧云く、直に頭尾相稱ふことを得る時如何。峰云く、兒孫力を得て室内知らず。

【字義】◎九峰は筠州九峰の道虔大覺禪師のことで、石霜慶諸禪師の法嗣である。福州侯官の人で姓は劉氏、初九峰に住し、後洪州泐潭に住した人である。◎頭とは初めの意で入得の最初をいふ。◎尾とは終りの意で、末後の牢關をいふ。

【要解】本則は頭尾を究むるにある、頭は入得の最初で尾は末後の牢關、言ひ換へれば初心の辨道と究竟の涅槃とである。初心と究竟とは本一體のもので有つて初心の一念に究竟があり究竟の全體

が初心の辨道であるから頭尾は離るべきもので無い、離るべきものでは無いが初心の辨道は初心の辨道、究竟の涅槃は究竟の涅槃であるから決して之を以て惡平等に陷つてはならぬ、そこを九峰親密に說示せらるゝのであるから好く眼を開いて看ねばならぬ。頭の答に眼を開いて曉を覺えず、眼は覺めてゐるがまだ夜曉けに程遠い、明中の暗ぢや。尾の答に萬年の牀に坐せず、大事を明らめて見れば其許にいつまでも坐り込んでは居らぬ、入鄽垂手と向下門に下つた、頭有つて尾無きは終に是れ貴からず、尾有つて頭無き時は參飽すと雖も化他の力を缺く、頭尾相稱ふことを得る時は兒孫力を得て力を忘れ、室內傳授して室內知らず、頭尾相應じ、修行涅槃成熟して向上には大尊貴生、向下には驢胎馬腹、而も其の消息を絕し縱跡沒し、此の境界を得て初めて衲僧の本分事を全うしたといふものである、人々皆此の三昧に遊んで倶に太平を歌ふべきである。

【著語】□高く威音の前に超ふ。　威音王佛以前を究むれば即ち如今である。□明、戸を越えず。　夜は明け放れて居るのだが雨戸を締め切つて燈を點じてゐるからのことよ。己見猶ほ未だ歇まぬからのことである。□獨り刧空の後に步す。　空刧の卽今に獨步すれば其れが威音王前の消息である。□穴、巢に棲まず。　穴居は躍んでも跳ねても穴の外へは出ぬ、やはり元の牀の上だ。□先行は到らず。　お先に立つて行つたが未だ到かない。向去も奉重も手が屆かぬのぢや。□奴は婢を見て殷勤。　下男と下女との相見だ、終に貴からずで成熟のところでは無い。□末後は太だ過ぐ。　先行は到らずと二句一連で洞山玄中銘の語である、後から發つた奴が通り過ぎた、過不及の無いところ、先後の無きところを云つたのである。□甚麼の用處有らんや。　大飯食つても活動が出來ぬやうな奴は穀つぶしだ、使ひ方が無い。□君臣道合し上下和同す。　君は臣を憐み臣は上を輔く、上下一體君臣道合して其許で上下君臣の閾がとれる、正偏兼帶の妙用ぞ。□各其の分に安んず。　士農工商各其の分に安んじてだるみの無いところが世法佛法一體の安心起行ぢや、得力不知が大切である。

頌云。規圓矩方（椀兒圓欒　盤兒四角）　用行舍藏（升兒裏廻　斗兒裏轉）　鈍躓棲蘆之鳥（豈解高飛遠揚）
進退觸藩之羊（不能獨步大方）　喫人家飯（快須吐却）　臥自家牀（切忌生根）　雲騰致雨（春生夏長）
露結爲霜（秋收冬藏）　玉線相投透針鼻（翻覆通同）　錦絲不斷吐梭腸（聯綿無間）
石女機停兮夜色向午（文彩縱橫　意自殊）　木人路轉兮月影移央（不觸今時路　解行）

【讀方】規は圓に矩は方なり、用ゆれば行ひ舍つれば藏る。鈍躓蘆に棲むの鳥、進退藩に觸るの羊。人家の飯を喫して自家の牀に臥す。雲騰つて雨を致し、露結んで霜を爲す。玉線相投じて針鼻を透る、錦絲斷えず梭腸より吐く。石女機停んで夜色午に向ふ、木人路轉じて月影央を移す。

【字義】◎規は圓を劃く具、ブンマワシのこと。矩は方を劃く定木、サシガネのこと。◎用行舍藏

とは論語に、孔子顔淵に謂て曰く「之を用ゆる時は行ひ、之を含く時は藏る、唯我と爾と是あるか」とあるに據る。用ゆる時は自在に働らき、用ゐざる時は相も見えぬといふ意。◎鈍躓云々とは古語に「困魚は濼に止り病鳥は蘆に棲む、其れ一のもの大海を知らず叢林を知らず、人の小道に趣く其の義又然り」とあるを引用す。◎觸藩云々とは周易大壯の卦にいはく「上六は羝羊藩に觸る、退く能はず進む能はず利する攸なし、難む時は吉なり」とあるより出づ。自由のきかぬ樣子を示す例語。◎雲騰露結の二句は千字文にある語で意味は明瞭である。◎玉線錦絲とは絲のこと。◎針鼻は針の穴といふ。◎梭腸は梭の口をいふ。◎夜色向午とは眞夜中が日中になつたといふ意で、正中偏の理を示す。◎月影移央は眞夜中から漸次曉に近づくといふ意で、偏中正の理を示す。◎石女木人は能く對に用ゆる名詞で、任運に作用を表はして行く主體を示す例語である。

【要解】　最初の二句に九峰が頭尾相稱の擧拈、次の二句に有頭無尾、有尾無頭、次の二句は一聯で頭尾の活用、次の二句は頭尾相稱の現成、後の四句に金針玉線、石女木人を以て頭尾の正偏回互兼到の意を頌したのである。函蓋相應じ左右原に逢ふの道理で九峰は圓には規、方には矩と對手次第に應じて毫も違背せぬ、故に用ゆれば行はれ舍つれば藏る、法爾如然の轉處で有つて頭には頭、尾には尾、而も頭を用ゐて尾を舍て、尾行はれて頭藏る、頭尾相稱の自由を得てゐるから此の活機輪が轉せらるゝのである、鈍躓の鳥は尾を蘆花の中に藏して頭だけを出してゐるから虛空に飛翔するの自由がきかぬ、藩に角を掛くるの羊は尾だけ出して頭が動かぬから進退維れ谷つて大叢林に優游するの自在を缺く。頭有るが故に他人の飯を飽くほど食ひ、尾が有るから自家の坐牀に横臥倒眠することが出來るのだ。頭の雲が高く騰れば尾の雨が盡地を潤す、得力の露が結んで何時しか不知の霜と爲る、用ゆれば行はれ舍れば藏るのが頭尾相稱の活現成ぞ。子孫得力の上の活現成からいへば玉線がツイと針の鼻に透ると、其の錦絲が相續不斷に頭尾相應じ、錦心玉腸を織り出して文彩縱横ぢや、室内不知の上の活機用から云へば石女は機を停めて正の夜色から偏の午に向ひ、木人は路を轉じて偏の月影が夜半の正位に推し遷り正とも偏ともいふことの出來ぬところに到つた、畢竟頭尾相稱で、正位にも偏位にも墮ちぬ兼中到の位をいつたのである。

【著語】　□椀兒は團欒、盤兒は四角。兒は助字でお椀は圓くお膳は角だ、用處に應じて形を爲してゐる。□升兒裏に廻し、斗兒裏に轉ず。少量なれは一升枡で量る、多量なれば一斗枡で量る、臨機應變の活機用だ。□豈に高く飛び遠く揚がることを解せんや。天外に雄飛するの氣力を闕く。□大方に獨歩すること能はず。方所を絕した虛空裡には優游が出來まい。□快に須らく吐却すべし。快に他人の飯などを吐いてしまへ、消化が出來ぬと胃腸の障りとなる。□切に根を生ずることを忌む。坐臥して大地に根を生すまいぞ、走殺坐殺を知つてゐるかナ。□春生じ、夏長ず。□秋收め冬藏す。萬松も天童の眞似をして千字文のお復習してゐる。然し能く其の意味が解る。□翻覆通同。□聯綿無間。針の鼻に絲を透しさへすれば相續聯綿、宜しく保護すべしぢや。立派なものぢや、表裏を翻覆して何れを見ても柳綠花紅、文彩縱横だ。□文彩縱横意自から殊なり。

人々の出息入息が文彩縱橫で世間の風流とは又格別よ。口行くことを解して今時の路に墮せず。往來はすれども不知の故に蹤跡が沒い、今時に處して今時の路に觸れぬのが如去如來の消息ぞ、人人這の自由ありや、脚を放ち下さず、脚を擡げ起さずの坐臥經行が會得できたかノ。

第六十七則　嚴經智慧

示衆云。一塵含萬象。一念具三千。何況頂天立地丈夫兒。道頭知尾靈利漢。莫自辜負己靈埋沒家寶麼。

【讀方】衆に示して云く、一塵萬象を含み、一念三千を具す。何に況んや天を頂き地に立つ丈夫兒、頭を道へば尾を知る靈利の漢、自ら己靈に辜負し家寶を埋沒すること莫しや。

【字義】◎一塵含萬象とは一塵は小又は少なるもの、萬象は大又は多なるもの、一塵萬象を含むとは一多相卽大小融合の理を示す語。舊華嚴經卷三十六に「彼の三千大千世界と等しき經卷一微塵裡にあり一切の微塵又復是の如し」とあるに據る。◎一念具三千とは小大融卽の理を示す語。もと摩訶止觀卷五に「夫れ一心十法界を具し、一法界又十法界を具するには百法界なり、一界三千種の世間を具すれば百法界に三千種の世間を具するなり、此三千は一念の心なり」とあるより出づ。◎頂天立地とは頂は靑天に對し脚下は地といふ意。人々個々獨立無伴なることを示す例語。◎己靈は自己の靈性をいふ、本來の面目のこと。宗鏡錄第十二卷に「何ぞ眞に迷ひ幻を抱き實を捨て虛に憑る、己靈に辜負し家寶を沈埋し、高く上聖を推し自ら鄙め下凡とせんや」とある。◎道頭知尾とは煙あれば火あることを知り、角あれば牛なることを識ると同意。靈利の漢の活機を示す語。◎靈利漢とは靈利は怜悧に同じ、漢は男といふ意。機轉の利く男のことにして、今は俊發の衲僧をいふ。◎家寶とは人人自家屋裏に所有して居る寶といふ意にして、本來面目の換語。

【要解】一塵を離れて萬象は無い、一を擧すれば百も千も其の中は含藏して餘さぬ、萬象は一塵にして三千世界は一念から生じたものである、一多大少の分別を離れて見るがよい。況してや天を頂きとして地に立つ吾人丈夫兒は頭と云へば尾を知り久遠と云へば今時を知る箇々英靈の漢である。決して人の舌頭に轉ぜられるやうなことは無い筈だが自から自己の靈性に辜負き、自家の寶藏を埋沒して徒らに他の財寶を數へては居らぬか、能く返照して見るがよい。

擧。華嚴經云。我今普見一切衆生具有如來智慧德相。（熊翻斤斗　驢舞柘枝）**但以妄想執著而不證得。**（妄想執著　亦不惡）

【讀方】擧す。華嚴經に云く、我今普く一切衆生を見るに如來の知慧德相を具有す、但妄想執著を以つて證得せず。

【字義】◎華嚴經とは具には大方廣佛華嚴經（Maha-vaipulya-buddhāratamsaka-sūtra）といふ、釋尊

成道第二七日に文殊普賢等の聖者に對して自內證の法門のありの儘を說かれたる經文である。◎一切衆生とは世の中に生存するもの丶總稱。◎如來とは佛十號の一、梵語タターガタ（Tathāgata）の譯、眞如より來生せる覺者の意で、卽ち佛のことである。◎德相とは優れたる相好のこと。◎妄想とは虛妄の思想、顚倒虛僞の念をいふ。◎執著とは物事に戀著する妄念のこと。

【要解】　八十華嚴の卷五十一出現品其のまゝの文で讀んで字の如くだが、智慧德相と妄想執著とが諸佛と衆生との差を爲してゐる、其の妄想執著とは是れ何物ぞと究むるのが本則の要處である。普く見るに上は王侯宰相より、下は士農工商乃至走獸飛禽、鬼畜鱗甲、蠢動含靈普ねく如來の智慧德相、卽ち萬德圓滿なる四八の端嚴妙相を具有してゐるにも拘はらず、分別を以て智を昏ふし、執著を以て慧を昧まし、自から成り下つて如來を證得しないのである、如來は卽ち無所從來亦無所去故名如來で昏沈の從つて來る所無く、散亂も亦去る所無き智と慧とを如來と名けたのぢや、故に如來とは何物ぞと究むれば是れ卽ち什麼物か恁麼來である、妄想執著是れ什麼物ぞと究むれば是れ亦た什麼物か恁麼來である、如來に如來の相無く、妄想に妄想の性は無い、是れを證得といふので眞箇己靈に辜負せざる時如來の智慧德相が光明を放つ、三千も萬象も一念に呼吸し一塵に受用する時頂天立地の丈夫見たることを得るのである。

【著語】　口熊、斤斗を翻へし、驢、拓枝を舞ふ。　熊には翻斗斤をする智慧がある、驢には拓枝の舞ひを眞似る德相がある、智慧德相の缺けた者は一人も無い。拓拔の舞といふのが韶府に出て居る其れが訛つて拓枝となつた。口妄想執著も亦惡しからず。　妄想執著是れ何物ぞと根を押へて見れば本空のものだ、妄想を除かず眞を求めず、無明の實性卽佛性で如來智慧德相の一分ぢや。嫌ふから惡しくなるのだ。

頌云。天蓋地載（通上徹下）成團作塊（刀斧斫不開）周法界而無邊（十方無壁落）析鄰虛而無內（佛眼覰不見）及盡玄微（好事不如無）誰分向背（無迴避處）佛祖來償口業債（言多傷行）問取南泉王老師（忌却杉山）人人只喫一莖菜（更無餘事可譬爲）

【讀方】　天の如くに蓋ひ、地の如くに載す。團をなし、塊を作す。法界に周うして邊なく、鄰虛を析いて內無し。玄微を及盡す、誰れか向背を分たん。佛祖來つて口業の債を償ふ。南泉の王老師に問取せよ、人々只一莖菜を喫す。

【字義】　◎鄰虛とは楞嚴經に「佛、阿難に告ぐ汝地性を觀せは麤なるを大地とし細なるを微塵とす、鄰虛塵に至りては彼の極微の色邊際の相を析き七に分つて成する所なり、更に鄰虛を析けば實に空想なり」とある。世界に於ける最小の存在物で、虛無に鄰するといふ意である。◎玄微とは華嚴經の疏に「玄微を剖裂す」とあるから來た語で、幽玄微妙の旨をいふ。◎喫一莖菜とは會元の三に「杉山の堅禪師因に普請して蕨菜を擇ぶ次で、南泉一莖を拈起して曰く、這箇大に供養するに好し、杉

曰く但這箇のみに非ず、百味の珍羞も他又顧みず、泉曰く然も是の如くなりと雖も箇々須く嘗過して始めて得べし」とあるを引いたもの。◎口業とは三業の一、口にて作りたる業。◎王老師とは南泉の別稱、南泉普願禪師は王氏の出であつたから此の稱がある。傳、斬猫の話の章に出づ。

【要解】　初めの二句は普見一切衆生、次の二句は具有如來智慧を頌じ、次の二句に精細の工夫、最末三句に人々自から喫して味を知れと天童の爲人である。天の蓋ひ地の載するは佛に在つても衆生に在つても同一である、生佛を打して一團と成し迷悟を練つて一塊とすれば人我の隔別も立ちやうがあるまいぞ。如來の智慧德相は法界に周遍して大に方所を絕し、鄰虛塵を分析した其の內にも含藏して細に無間に入る。玄々微妙の底の底まで究め盡して見れば進前退後の二つが無いから向はうにも背かうにも分けてみやうが無い、畢竟は如來智慧德相の世界で衆生の面出しする餘地が無い、佛土も佛身も一枚で身土不二の周遍法界である。然るに佛祖が横說竪說、種々の言說を弄するのはアレハ口業債を償還に出て來たのだ、其れよりも王氏の南泉老師に能く問取して見るがよい、南泉は蕨菜を拈じて箇々須らく嘗め過して始めて得べしと杉山に示されたことがあるから宜しく王老師に就いて如來智慧德相の一莖菜を人々に喫得し玩味すべきである。箇々是れ大丈夫兒の不足ないところを證得するのが肝要である。

【著語】　口上に通じ下に徹す。　盡天盡地隙間の無いのが如來の智慧ぢや。口刀斧斫れども開けず。　生佛迷悟の續ぎ合したものなら刀斧の入れ場もあれど、打成一片の正當には刄が立たぬ。口十方に壁落無し。　東西南北四維上下盡く壁落ちて方角も立てられぬ。口佛眼覷れども見えず。　有れば凡眼にも見えるが無いものは佛眼にも覷えぬ。口好事も無きには如かず。　玄微といふと大層結構なところの樣だが寧ろ無い方が一層結構だ。口廻避するに處無し。　向も背も身の避け場が無い、本より向背も無いのぢや。口言多ければ行を傷る。　言葉多きは品少し、陰德も是れが陰德だと云つて仕舞へば陰德にならぬ。口杉山に忌却す。　南泉計りで無い杉山も相棒だ、杉山に問取して看よ。口更に餘事の營爲すべき無し。　大根でも人參でも嚙み占めると好い味がある。モー他に問取せずとも冷暖自知が出來たらう。

第六十八則　夾山揮劍

示衆云。寰中天子勅。閫外將軍令。有時門頭得力。有時室內稱尊。且道是甚麼人。

【讀方】　衆に示して云く、寰中は天子の勅、閫外は將軍の令。有時は門頭に力を得、有時は室內に尊と稱す。且らく道へ是れ甚麼人ぞ。

【字義】　◎寰中閫外の句の解は第四十四則に詳述してある。◎門頭得力とは門庭の施設をなす力を得ること、門頭は閫外に對應す。◎室內稱尊は向上第一義諦のこと。

【要解】寰内は天子の直轄で詔勅の治である、塞外は將軍の統制で號令を布いて生殺與奪の權を振ふ。故に有る時は門頭に馬を進め武力を以て天下を制せんとする將軍も必要だ、有る時は室内に端坐して大尊貴、無爲にして治むる天子も亦大切である。人間有る時は内に尊貴に、有る時は外に得力の自由が無くてはならぬ、果して左樣な人が有るかどうだ、有るとしたら甚麼人であらう。

舉。僧問夾山。撥塵見佛時如何。（何必）山云。直須揮劍。（果然）若不揮劍。漁父棲巢。（坐則非佛）僧舉問石霜。撥塵見佛時如何。（見即不撥、撥即不見）霜云。渠無國土。何處逢渠。（不坐即佛）僧迴舉似夾山。（往來不易）山上堂云。門庭施設不如老僧。入理深談猶較石霜百步。（各得一概）

【讀方】舉す。僧夾山に問ふ、塵を撥つて佛を見る時如何。山云く直に須らく劍を揮ふべし、若し劍を揮はずんば漁父巢に棲まん。僧舉して石霜に問ふ、塵を撥つて佛を見る時如何。霜云く、渠に國土無し、何れの處にか渠に逢はん。僧廻つて夾山に舉似す。山上堂して云く、門庭の施設は老僧に如かず、入理の深談は猶石霜の百步に較れり。

【字義】◎塵とは一切の妄念妄情のこと。◎石霜は潭州石霜山慶諸禪師で道吾圓智禪師の法嗣である、廬陵新淦の人、初め潙山に參じ、後道吾に從つて證契した人である。◎漁父棲巢に就いては古來の諸家も明瞭な解釋を下して居らぬ。蓋し佛の一字も心田の汚であるから向上向下超越の銘劍を揮つて之を切り去らずんば漁父が其の巢窟に籠居する如く、自由の機用を闕くに至らんといふ意であらう。◎門庭施設は「門庭は門と相當の地」とあつて、第二義門に下つて種々に方便假設すること。◎入理深談とは向上第一義門にして何等方便を設くることなく直下に宗要を呈示すること。◎百步は說多くして一定せず。或は六尺と云ひ、或は八尺と云ひ、或は六尺四寸と云ふ。

【要解】塵は六塵とか塵勞とかと云つて煩惱であり妄想である、佛は覺であり證であり眞であり如來である。今僧の塵を撥つて佛を見ると云ふは、煩惱の雲を撥ひ除けて眞如の月を見る時如何んとの問である。佛法には由來塵と佛、雲と月との二つを認めぬ、有の時は塵も佛も有り、毫も取捨しない、無の時は佛も塵も無し、更に向背しない、此を會得しないと眞箇の佛法は得られ無い、是れが本則の的處である。夾山は佛が見えたら須らく智劍を揮つて截つて仕舞へ、若し其の儘にして置くと漁父巢に棲まんで廂を借して母家を奪られやうぞ。此の僧夾山の一劍に膽を冷して石霜に繰返して問ふた、スルト渠には棲むべき土地が無い筈ぢやから逢うところが有るまい、何處で逢つたものだらう、其の實は何處ででも逢へるのぢや。僧には未だ會せられ無かつたと見えて夾山に廻つて來て此の話をした。夾山上堂に垂語して門外の施設は老僧に及ぶ者無しぢやが、入理の深談は石霜和尚に數百步讓らねばならぬワイと。覓り夾山は劍を揮つて撥塵も見佛も共に斬り捨て御免の將軍で門庭の施設、石霜は塵も佛も救つて何れの處にか逢はんと云つたは天子の尊貴で入理の深談だ

とは云ふもの丶此の語に著いて廻つたならば此の僧と同じく徒らに草鞋錢を費して東奔西走するのみぞ。

【著語】　口何ぞ必とせん。　是非塵を撥はねば佛が見えませんかノ、必ずしも然うでは有るまい。口果然。　やるだらうと思つたら果して行つた。口坐する則んば佛に非ず。　蓮華臺上にでも坐り込んだらばモー佛で無い、然し坐則非佛も結構だ。口見るときは卽ち撥はず、撥ふときは卽ち見ず。撥と見と二つで無い、波を除いて水は見られぬ道理よ。口坐せざるときは卽ち佛。　國土に坐せざるが卽ち佛だ、イヤ佛と認めたら是れ魔ぞ。口往來易からず。　往つたり來たり容易なことで無い、骨折り損の疲勞儲けだ。口各一橛を得たり。　夾山石霜各の一橛がよくきいた、人々も一つ此の橛を打ち込むがよい。

頌云。拂牛劍氣洗兵威、（太平本是將軍致）　定亂歸功更是誰（不許將軍見太平）　一旦氛埃清四海（但盡凡情）　垂衣皇化自無爲（別無聖解）

【譜方】　牛を拂ふ劍氣兵を洗ふ威。亂を定むる歸功更に是れ誰ぞ。一旦の氛埃四海に淸うし、衣を垂れて皇化自ら無爲。

【字義】　◎拂牛劍氣とは晉書に「雷煥天文を善くす、張華斗牛の間を望む常に異氣有り、因て雷煥を邀へ夜る樓に登り仰いで視せしむ、煥が曰く僕も之を察すること久し、寶劍の精天に上る、豫章豐城の界に在り、華乃ち雷を薦めて豐城の令となす、獄を修め基を掘て石匣を得たり。雙劍ありて光甚だ蓋發す、一を送つて華に與へ一を留めて自ら佩ぶ云々」といふ故事より來る。牛は斗牛の牛にして牽牛星といふ星の名。◎洗兵威とは說文權謀の篇に「武王紂を伐つ、風霽れて乘ずるに大雨を以てす、水地に平にして當まる、散宜生、又諫て云く此れ其の妖か、武王曰く非なり天兵を洗ふなり」とあるを引用す。◎氛埃とは氛は霧の如きもの、廣韻に「妖氣なり」とある、埃は細き塵をいふ。◎四海とは東九夷、北八狄、西七戎、南六蠻のこと、天下といふに同じ。◎垂衣とは古語に「黃帝堯舜は衣裳を垂れて天下治る」とある。◎皇化とは天子の德化なり。◎無爲とは殊更に彼れ是れと手を勞はさぬこと、自然のまゝといふ意。

【要解】　前二句は夾山揮劍を將軍に比し、後二句は石霜無國土を天子に例して共に太平の治を致したる所以を頌出す、夾山の一刀は地中に在つて天の斗牛を拂ひ落すほどの異氣ある寶劍で、其の腕前は武王が紂を伐つに天雨ふらして兵を洗つたといふほどの將軍の威力ぢや、塞外の號令能く行はれて世界の戰亂が全く鎭定し、本の平和なる國となつたが其の功は是れ誰に歸したもので有らう、太平の姦賊亂世の英雄悉く平げて佛の化城までも奪つて仕舞つた大功は夾山一人に歸せずばなるまい、一旦は兵馬の塵烟も擧り妄分別の氛埃も立つたかなれど今は天下四海全く淸平無爲にして治り天子は衣冠束帶して九重の雲上に在します、是れ石霜爲人の然らしむる處である。此の淸平を得たのも將軍の號令が能く行き屆いたからで有つて天子と將軍と相一致して此の太平の治を得たのぢや、

絕學無爲の閑道人たる非思量の境界に達した兩老が盡天地である。

【著語】 □太平は本是れ將軍の致。 太平の本は將軍の權柄に在る、夾山は立派な將軍だ。□將軍太平を見ることを許さず。 太平に落ちつくと其れはハヤ亂世の原ぞ。□但凡情を盡せ。 人見我見さへ盡して仕舞へば。□別に聖解無し。 別に佛の解脫のといふことは要らぬ、塵を撥へば佛は見るに及ばぬ。

第六十九則　南泉白牯

示衆云。成佛作祖嫌帶汚名。戴角披毛推居上位。所以眞光不耀。大智若愚。更有箇便宜聾伴不采底。知是阿誰。

【讀方】 衆に示して云く、佛と成り祖と作るをば汚名を帶ぶと嫌ひ。角を戴き毛を披るをば推して上位に居く。所以に眞光は耀かず、大智は愚の若し。更に箇の聾に便宜とし、不采を伴はる底あり。知んぬ是れ阿誰ぞ。

【字義】 ◎戴角披毛とは角があつたり毛皮を披つたりして居るもの丶意で、獸類のこと。◎便宜聾とは聾の爲に便宜をはかること。◎伴不采とは采は飾である、文采等と熟字して智慧才能あるをいふ、才能を有しながら愚を伴はり裝うのである。

【要解】 成佛作祖は汚名なりとて嫌ひ、披毛戴角は此の上も無い位だと推重する。既に尊卑の二見を超えてをる。所以に眞實の光明は耀かず、廣大の智慧は愚癡の如くである、其許に眞の光明大智慧の德が現成するのぢや、更に箇の樣な耳聾の不具者に便宜に愚魯の不采者を伴り知らぬ振りして過す底の漢が有るとしたならば、是阿誰とか知る。作佛を圖ること無くして驢胎馬腹に出入する底の那人を求むる萬松の爲人である。

擧。南泉示衆云。三世諸佛不知有（只爲知有）。狸奴白牯却知有（只爲不知有）。

【讀方】 擧す。南泉衆に示して云く、三世の諸佛有ることを知らず、狸奴白牯却て有ることを知る。

【字義】 ◎南泉の傳は第九則に出づ。◎三世諸佛とは過現未に涉る三世の佛といふ意、諸佛の總稱。◎狸奴白牯とは書林廣記に「白牯は牛なり、狸奴は猫なり」とある。 三世諸佛の對語であつて佛の尊きものといふに對して下等な動物を代表的に出した語。

【要解】 百丈示衆の端的は三世諸佛と狸奴白牯といふ尊卑貴賤の二見を破し、知有と不知有との對待を泯絕して眞箇に什麼物か恁麼來なる道理を會せしめんとするにある。 尊い三世諸佛の有ることは知らぬ、卑しい狸奴白牯の却つて有ることを知つた、語は是れだけだが紫磨黃金の佛と披毛戴角の狸奴と兩者並べて見るに及ばぬ、三世諸佛是れ狸奴白牯よ、狸奴白牯是れ三世諸佛である。一時一時の法の現成で且らく諸佛と成り狸奴となつた、紫磨黃金と披毛戴角とは冬は綿入れ夏は單衣で

毫も尊卑貴賤は無い。知有不知有を穿鑿すれば其許に自己の光明はコロリ現成する。

【著語】口只有るを知るが爲めなり。元來向上の事あるを知るが故に三世佛は打ち忘れたぞ。口只有ることを知らざるが爲めなり。有ることを知らぬが知るといふのぢや、知不知の沙汰を離れてをる。

頌云。跛跛挈挈（不近、休忙）　𣰽𣰽毿毿（人不喜覷）　百不可取一無所堪（開門又軟、種火又濕）

默默自知田地穩（靴裏動指頭）　騰騰誰謂肚皮憨（呆裏撒奸）　普周法界渾

成飦（吐不出、咽不下）　鼻孔纍垂信飽參（拋半撒半）

【讀方】跛跛挈挈、𣰽𣰽毿毿、百取るべからず、一も堪ゆる所なし。默默自ら知る田地の穩かなることを。騰騰誰か肚皮憨なりと謂はん。普周法界渾て飦と成す。鼻孔纍垂として飽參に信す。

【字義】◎跛跛挈挈とは栢岩明哲禪師の問に對する藥山の答話の中にある語で、跛は足なへ、挈は手なへのことである。◎𣰽𣰽毿毿とは鬚髮の長き貌。◎騰騰とは悠悠自適の貌。嵩山安國師の法嗣なる騰々和尚の歌に「今日は任運騰騰、明日は騰騰任運」とある。◎肚皮憨とは肚皮は腹の皮、憨は愚癡なり。たわけものといふ位の意である。◎飦に飯と同じ。◎纍垂とはのんびりと垂れ下つて居る形容。毛伯溫が橘の詩に「磊落として潤ひ涵す雲夢の雨、纍垂として香は染む洞庭の霜」とある。

【要解】此の頌は初めから默々騰々の句まで不知有と却知有とを融通して頌し、後の二句で通身是れ飦周遍法界一粒を費さずして飽いて齁々の樣子を述べて天童の爲人とした。跛々と足はちんば、挈々と手はてんぼで手足ともに全からず。𣰽々毿々これも亦おんぼろさんぼろ、滿足な毛色の奴で無い、三世諸佛に三世諸佛の相が無く、狸奴白牯に狸奴白牯の相が無い、百の中から一なりと取らうとすれど取るに堪ふるものが一も無い、有ることを知らず却つて有ることを知らぬの本則通りで知も不知も超越した有樣よ。其の那人の境界はと云へば默々として一言半句も吐かぬが心田地は平穩だから毫も不安の色が無い、騰々と自適する面持はマルデ一文不知の憨愚の如くで有るが誰も莫迦だといふ者は無い、是れ誰の境界かと云へば卽ち南泉其の人である。雲門は通身是れ飯と云つたが其れ處で無い普く法界に周徧したる法喜禪悅の上方の飯となして一口に喫得し了つて鼻を長くして大息をスイ〳〵やつてゐるところは奈何見ても飽參滿腹の人であるワイ。南泉知有不知有の呼吸は何と諸君看て取つたか怎うぢや、誰か知音が有らば此を一つ點檢してみるが眞實飽參底の漢ぞ。

【著語】口近からず忙を休む。四肢不具の身ぢやから呑氣なものだ。口人覷ることを喜ばず。其んなものと交際を求むる者は有るまい。口門を開いて又軟、火を種えて又濕。梅雨中の菓子の樣に日に洒せば軟らかになるし、焙爐にかければ濕りが來る。何とも始末に終へぬ奴ぢや。口靴裏に指頭を動かす。表は默々でも內側で食指が動いてゐるかも知れぬ、餘り安心は出來まいよ。口吐不出咽不下。十方法界が呆裏に奸を撒す。馬鹿面してゐるが腹は黑いぞ、油斷はできぬ。

御飯なら呑吐は出來ぬ筈よ。口半を拋ち半を撒す。拋つも撒も半々でどちらへも傾かない、矢つ張り本の通りだ。

第七十則　進山問聖

示衆云。聞香象渡河底已隨流去。知生不生性底爲生之所留。更論定前定後作笋作篾。劍去久矣爾方刻舟。踢轉機輪作麼生別行一路。試請擧看。

【讀方】衆に示して云く、香象の河を渡るを聞く底も已に流に隨つて去る。生は不生の性なるを知る底も生の爲に留めらる。更に定前定後笋と作り篾と作ることを論ぜば、劍去て久し爾方に舟を刻むなり。機輪を踢轉して作麼生か別に一路を行ぜん。試に請ふ擧す看よ。

【字義】◎香象渡河とは會元十三曹山の章に、「師德上座に問ふ、菩薩定に在て香象河を渡るを聞くと甚麼の經より出づるや、曰く涅槃經より出づ、師曰く、定前に聞くか定後に聞くか、曰く、和尚流せり、師曰く道ふことは也太煞道ふ祇一半を道ひ得たり。曰く和尚如何。師曰く灘下に接得せよ」とあるに據る。◎生不生性とは生そのまゝそつくり本性なきものゝ意にして、語は庵提遮女經に「爾時に文殊師利又問うて云く、明に生は不生の相なりと知て而かも生の爲に留めらるゝものありや否や云々」とあるより出づ。◎笋は筍に同じ。竹の子のこと。◎篾とは竹皮で作つた物を束ねるもの卽ち竹索のこと　◎劍去久とは最早濟んだ後だといふ意を示す故事、呂子察今篇に「楚人江を渉るものあり、其の劍水中に墮つ、遽かに其の舟を削つて曰く是吾劍の墜る所なりと、舟止つて其の削る所に從つて水に入つて之を求む。舟は已に往き劍は行かず、劍を得ず」とある。◎踢轉とは擲翻と同意、蹴飛して了ふこと。

【要解】定力の高い香象が河を渡るには能く水底を究めて渡るが故に更に動念が無いやうだがまだ流に隨ふ、一點流注の煩惱を免かれぬ、無心尙ほ隔つ一重の關よ。又見地明白にして生卽不生と知る程の人でもどうも生といふ一物に滯留せらるゝぞ、定前は笋で定後は篾だなどと議論をし始めたらば劍を落したところを昔しに過ぎ去つてゐるのに船舷を刻むと同じで遲いといふも愚なはなしさ、然らば人々の足場を一つ踢轉して出身の一路を開き大機輪を轉ずるには作麼生したものか試みに本則を擧するから、眼を著けて看よ。

擧。進山主問脩山主云。明知生不生性。爲甚麼爲生之所留。（照顧）脩云。笋畢竟成竹去。如今作篾使還得麼。（鼻孔在他人手裏）進云。汝（揑鼻木）向後自悟去在。（大小曆、貴爲賤）脩云。某甲只如此。上座意旨如何。（剃頭向人懷裏）進

云。這箇是監院房。那箇是典座房（打得穩子別處去）脩便禮拜（且作好心相待）

【讀方】擧す。進山主、脩山主に問うて云く、明かに生は不生の性なることを知らば甚麼と爲てか生の爲に留めらるゝや。脩云く、筍畢竟竹となり去る、如今箄と作して使ふこと還て得てんや進云く、汝向後自ら悟り去ること在らん。脩云く、某甲只此の如し上座の意旨如何。進云く、這箇は是れ監院房那箇は是れ典座房。脩、便ち禮拜す。

【字義】◎進山主は襄州清溪山主洪進禪師のこと、地藏院羅漢桂琛禪師に嗣ぐ、◎脩山主は進山主と法眷の間柄の人で前に屢出た。◎如今作箄の句は 筍 は末には竹となるものであるが今直ちに之を竹索とすることが出來るかといふ意である。◎向後とは今後といふ意。◎監院房とは監院は住持人に代つて山門一切の事務を總理する役の名で、其の居室を、監院房といふ。監院寮といふも同じである。◎典座房とは典座は六知事の一、叢林にて衆僧の辨食を司る役の名で、其の人の居室を典座房といふ、典座寮といふも同じこと。◎這箇とは身に近きものを指示する代名詞で、此のもの、これといふ意。◎那箇とは彼方に在るものを指示する代名詞で、彼のもの、あれといふ意。

【要解】進山主と修山主とは兄弟で互に生不生の道理には通達してゐるが目前の事實に生を愛し死を憎む凡夫の情が失せぬ、其れを進山主が爲甚麼の三字に空處を作つて脩山主に肉迫した。筍は竹となり竹は箄と成る、物には次第順序がある、筍を以て直ちに箄とすることはできぬでは無いか修行未熟では其の自由はきかぬ。修證を二つに見るから依文解義の理窟に墮ちた、汝は向後大いに悟る時期が有るだらうから口を開いて待つて居るサと撞つ放した。某甲は此の通りだが上座の意見は如何でせうか、これは脩山主の眞劒である。這箇は監院房、那箇は典座房、見えたかナ、筍と箄の區別がどこにある。事務所は這箇だ、お勝手は那箇だ、本堂は此方、東司は其方、修證の跡方も生不生の跟迹も殘つてゐない。脩便ち禮拜、寮割がすんで先づお目出度う、能禮所禮性空寂、能所を離れた親切が骨身にこたへたと見える。

【著語】□捩鼻木を照顧せよ。捩鼻木は牛の鼻づらを通つてゐる木、鼻の孔の中に邪魔なものがある、其の生といふ見を照顧してみよ、是れ什麼ぞ。□鼻孔他人の手裏に在り。自分の鼻で呼吸をしてゐぬと見える。隨分厄介な男だ。□大小良を壓して賤を爲す。大小はしたゝか、ウンと馬鹿にされた。□頭を刺して人の懷裏に向ふ。人の懷中へビリケンのやうな頭を刺し込んだ。其の熱心ト度胸は買つてやるべきぢや。□毬子を打得して別處に去る。どちらへ轉がしても異りは無い、這頭那頭是れ別處では無い、皆是れ法の轉處ぞ。□且らく好心相待つことを作す。まだ十分とは云へないがマー禮拜したので一と安心ぢや。

頌云。豁落亡依（扳翻繫驢橛）高閑不羈（掣斷黃金鎖）家邦平帖到人稀（穩處下脚）些
些力量分階級（強生節目）蕩蕩身心絕是非（見怪不怪）是非絕（其怪自壞）介立

大方無軌轍 太平無忌諱、何處不風流

【讀方】豁落として依を亡じ、高閑にして羈されず。家邦平帖到る人稀なり。些些の力量階級を分つ。蕩蕩たる身心是非を絶す、是非絶す、介り大方に立つて軌轍なし。

【字義】◎豁落亡依はほがらかに滯ふりなく、依倚する所のないこと。◎高閑とは高く物外に超越すること。◎家邦平帖とは家邦は本家鄕の意、帖は「安なり靜なり」とある、平穩無事のこと。本家鄕に到つて見れば到つて平穩無事といふことである。◎不羈は束縛されぬこと。◎蕩蕩とは蕩は廣く平かな貌。◎大方とは一切處、一切法の上といふ意に採る。◎軌轍とは車の通過せし跡のこと一定の規則といふ意。

【要解】先づ三句に本則の要所を明して次の一句に脩山主、次の一句に進山主の境界を敍べ、後の三句に是非不到の處を讚歎した、乾坤豁落して依處も繫縛も無い大虛空、高に際限無く閑に羈絆なし生不生の沙汰も絕えた境界、此の平安太平の邦家へ來る人は至つて稀れだ、誰か此の一句を跳ね超えて我れこそはと一路を開く底の人を求めたのぢや。今兩老が今日の問答を見ると脩山主は些些たる學得底の力量で箏竹篾と分別の階級を立てた、進山主は蕩蕩たる全身心は迷悟の是非を超絕してゐるから這箇は監院房那箇は典座房と卓犖の身心を擧した。其の是非絕のところ、豁落たる大方に介在して軌轍も準繩も無い、生は生の介立、不生は不生の介立で、生と不生と對立してはゐない、佛法禪道の軌轍を外れて仕舞つた大人の運動、諸人其れ看たか。

【著語】□繫驢橛を扳飜す。　生不生の橛をひき倒した。□黃金鎖を掣斷す。　煩惱菩提の金鎖銀鎖もねぢ斷つたぞ。□穩處に脚を下す。　平穩の處に一寸でも好いから脚を下してみるがよい。□强ひて節目を生ず。　節目の無いところに節目をつけてみるも亦面白いものぢや。□怪を見て怪とせざれば。□其の怪自から壞す。　大潙の語、其の儘借用二句一連である。珍らしい物でも珍らしい物ぞと見る人が無ければ如何なる珍らしい物も珍らしくなくなる。□太平に忌諱無し、何れの處か風流ならざる。　忌諱が無ければ何時でも太平よ。憎愛が無ければ到るところ風流ならざるは無い。

第七十一則　翠巖眉毛

示衆云。含血噴人自汚其口。貪杯一世償人債。賣紙三年欠鬼錢。萬松爲諸人請益。還有擔干計處也無。

【讀方】衆に示して云く、血を含んで人に噴く自ら其の口を汚す。杯を貪つて一世人の債を償ふ。紙を賣ること三年鬼錢を欠く。萬松諸人の爲に請益す、還て擔干計の處ありや也た無しや。

【字義】◎含血噴人は崇覺空禪師野狐の話の頌に云く「血を含んで人に噴く先づ其の口を汚す、百

丈の野狐頭を失して狂走す、驀地に喚囘して此の筋斗を打す」とあるに出づ。◎貪杯一世の句は酒呑は好んで他人にも酒を强ひ、一生人の尻拭をして暮すと解するのが最も適當らしい、古來强ひて故事を引いて解したのもあるがいづれも適切ではない。◎賣紙三年云々とは支那に紙錢を以て鬼神を祀る風習があるが紙賣は三年も四年も經つても其の紙錢すら思うまゝにならぬ。◎鬼錢とは鬼神を祀るに用ゆる其の紙錢のこと。◎擔干計とは抱朴子内篇對話の卷に「擔負計すべからず」とある、其の他多くの公案等には擔負計とある皆同じで、計算が合ふこと。

【要解】　宗門の師家が學人を接する心切さは、赤心一片の血を含んで之に噴いて自らの口の汚れを忘れ他の醉ひを買ふ爲には生涯酒代の負債を償ふてやる位のことは毫も苦とせぬ。紙商人が他に賣る紙はあるが自己の爲には三年鬼錢を燒く紙すら無いといふ有樣で、全身自未得度先度他の願心である。萬松自身が諸人を請益するのも其の通りよ。其れで一體收支相償ふて會計が持てるもので有らうか、利德の無い仕事は出來まい。翠巖の總結算を拜見せよ。

擧。翠巖夏末示衆云（猶嫌少在）**一夏以來爲兄弟說話**（自揚家醜）**看翠巖眉毛在麼**（不害口磣）**保福云。作賊人心虛**（也是火裏人）**長慶云。生也**（雪上加霜）**雲門云。關**（獨街截巻）

【讀方】　擧す。翠巖夏末に衆に示して云く、一夏以來兄弟の爲に說話す、看よ翠巖が眉毛ありや。保福云く、賊と作る人心虛なり。長慶云く、生ぜり。雲門云く、關。

【字義】　◎翠巖は明州翠巖の永明大師のこと、雪峰義存禪師の法嗣、もと湖州の人で雪峰の記を受けて後翠巖に止り、大いに法席を張る、錢王師の道風を慕ひ、請うて龍冊寺に居らしめた、因に保福從展禪師も又雪峰の門下である。◎一夏とは結制安居の九十日間のこと。◎兄弟とは雲兄水弟で、會下の大衆を指す。◎眉毛在麼とは餘りに他の爲に說き過ぎると其の罰で眉毛が墮落ると云ふが、翠巖の眉毛はまだ在るかといふ意にして、これが翠巖の撈著である。◎賊とは油斷のならぬ奴といふ意。力量ある衲子を表面に抑下し乍ら意で讚める語。◎虛は妄言なり、賊字より來る文字、口で言ふて居ることは當てにならぬ心と違ふぞといふ意あり。◎生也とは現れたといふ意。◎關とは難關にして、これ斗りは透れまいといふ意。雲門一字關といふ。

【要解】　釋尊は涅槃に入るに當つて四十九年一字不說と言はれたが、翠巖は一夏以來雲兄水弟の爲に横說竪說したといふ、隨分永談義をして衆を惑亂したことで有らう。其の天罰で癩病患者のやうに眉毛が墮落したかも知れぬ、有るかどうか看てくれよと麤末な面をニューと出した。是れ翠巖が白晝に活馬の眼を拔く手段である。保福は盜賊するほどの者は心に實無しといつた。長慶は墮落どころでは無い、眉毛で全面目を掩うてをるといつた。雲門は此の處甚だ難關ぢや、透つて看よといつた。此の三人の言皆賊兒賊智、蛇の道は蛇の黨類だから翠巖の眉毛を看破し了つた。人々日用の

說話は何と說く、飯來れば口を張り困じ來れば眼を合す。手では執捉足では運奔、眼見耳聞、風吹き日炙る、悉く是れ橫說竪說、說いて自由ぢや、其の外何の眉毛が有らう、全身心を抛げ出しての說法だから全身心の墮落である。此を世尊は一字不說と言はれたのである。

【著語】□猶少きを嫌ふこと在り。　一夏の間曉天には打坐し日天には作務す、其れでまだ不足が有るのか。□自から家醜を揚ぐ。　自分の赤恥を發露したネ。□□礙ることを害せず。　言ばの中に針を裹んでゐるやうで誰も其んな詞に引つ懸るものは無い。礙は食物に砂のあること、不害は平呑にすれば喉に障らぬといふ意。□也た是れ火裏の人。　一つ釜の飯を食つた泥棒仲間だ。□雪上に霜を加ふ。　分別の上は塗りは止めたらよからう。□街を攔り巷を截る。　關所などは無い。大通りも裏通りも自由に透れるでは無いか。

頌云。作賊心（贓物已露）過人膽（傍若無人）歷歷縱橫對機感（白拈巧偸）保福雲門也垂鼻欺脣（探頭大過）翠巖長慶也脩眉映眼（伴打不知）杜禪和有何限（天童杜撰何似萬松）剛道意句一齊剗（欲隱彌露）埋沒自己也飲氣吞聲（養子不及父）帶累先宗也面牆擔板（家門一世衰）

【講方】賊と作る心、人に過ぎたる膽。歷歷縱橫機感に對す。保福雲門垂鼻脣を欺き。翠巖長慶脩眉眼に映す。杜禪和何の限かあらん、剛て道ふ意句一齊に剗ると。自己を埋沒して氣を飲み聲を吞む、先宗を帶累して牆に面ひ板を擔ふ。

【字義】◎歷歷は分明なる貌。◎縱橫とは自在なること。◎對機感とは學人に對して接化の實を擧げること。◎垂鼻欺脣とは鼻が長く垂れて居て脣と見間違ふ程であるとの意。大人物の相であると同時に越格の風貌を示す。◎脩眉映眼とは眉が長く延びて居て眼の睛に映るといふ意。大人物の相である。同時に脫落底の人なることを示す。◎杜禪和とは杜撰の禪和子で、見處の定らぬ學人を指す。◎意句一齊剗とは文字言句思量分別の葛藤を一齊に剗却るをいふ。◎飲氣吞聲とは息を殺し聲を立てぬこと。すゝり泣きをいふ。◎帶累先宗とは翠巖等の先德に累を及ぼすをいふ。◎面牆とは尙書周官の篇に「學はざれば面に牆す」とあるから來た語で、何物も見えぬをいふ。◎擔板は板を擔つて步けば、一方のみ見えて他方は見えぬ、見識の一方に偏するを示す例語。

【要解】初めの二句十三字に本則の體面、次の二句十八字の本則に四老を二分して批評し、次の四句に天下の杜禪和を斥破したのである。翠巖が眉毛在りやと面目をさらけ出したは好箇の白拈賊で人の眼睛を奪ふ心底、其の豪膽なること諸佛列祖をも超過するほどぢや、歷歷たる縱橫の手段を以て機に應じ緣に對して眉毛を惜まぬところ翠巖今日說法の的處ぞ。保福と雲門とは鼻長うして脣を欺き掩ひ、翠巖と長慶とは是れ亦長い眉で眼を覆ひ藏す、有言の脣を無言の鼻で掩ひ、不見の眉を以て見る底の眼を覆うた。有言無言見不見を超絕した越格の四人である。此の四老の在りや、生せ

り、賊心、鬪等の詮議立てをする世の杜禪和だちが際限も無く出來て意と句と一齊だとかイヤ別ぢやとか樣々な計較卜度をやらかすは如何にも氣の毒なものよ、是れは啻に自己の面目を埋沒して氣聲を止める計りで無く、從上の諸聖先德までをも帶累にして右にも左にも面むけの出來ぬ一方向きの擔板漢と成り了るのぢや、能く自己の面目を捫でて看て先佛も眼橫鼻直、我も亦眼橫鼻直なることを認得して古今二面無き道理に合當するがよい。

【著語】□贜物已に露はる。　眼前にチヤント贜品が露はれてゐる。座下の諸人見えたかナ。□傍若無人。　大膽さ加減實に驚くに堪えたりぢや。□白拈巧偸。　盜む手つきが餘り上手だから其の手許を押へることが出來ぬ。□探頭太だ過ぐ。　天童は保福雲門の胸中へ頭を撞つ込んで探つて看たらしい。□僞つて知らざる打す。　知を不知とし、見を不見とする翠巖長慶の二人、一も實の無い空手の爲人ぢや。□天童の杜撰は萬松に何似れ。　杜撰の親分は天童だらう、此の萬松も五十步百步かナ。□隱さんと欲して彌露はる。　隱さうと思つて言ひ訣すると其の言ひ訣で却つて露はるものぞ。□子を養うて父に及ばざれば。□家門一世に衰ふ。　第五十五則の示衆に出た語で、二句一連にして著語に用ゐた。萬松は天下に奪父の機を求めたのである、果して誰であらう、人々に回光返照してみよ。

第七十二則　中邑獼猴

示衆云。隔江鬬智。遯甲埋兵。覿面相持。眞鎗實劍。衲僧所以貴全機大用也。從慢入緊。試吐露看。

【讀方】　衆に示して云く、江を隔てて智を鬬はしめ、甲を遯け兵を埋む。覿面すれば眞鎗實劍を相持す、衲僧の全機大用を貴ぶ所以なり。慢より緊に入る。試に吐露す看よ。

【字義】　◎隔江鬬智とは史記項羽記に「項王漢王に謂て云く、天下匈匈たること數歲なるは徒に吾兩人を以てのみ、願はくは漢王と戰つて雌雄を決せん、徒に天下の民の父子を苦むること毋けん、漢王笑つて謝して云く、寧ろ智を鬬はしめて力を鬬はしむること能はず」とあるより出づ。◎遯甲埋兵とは孫臏が甲を捨て伏兵を置き、龐涓を大樹の下に殺した故事に據る。◎覿面とは名人と名人と相對すること。◎從慢入緊とは初めは緩慢に戰つて漸次緊嚴になるといふこと。◎全機大用とは全機は全分の作略、大用は大なる活用。◎吐露とは心に思ふさまを述べること。

【要解】　先づ祖門下に於ける法戰の落索を論じやうぞならば周瑜が江を隔てゝ智謀を鬬はし、曹操が軍を赤壁に破つたるが如く、又孫臏が甲を遯げ、伏せ勢をして龐涓を大樹の下に殺したるが如く、始めのほどは甚だ手緩いやうたが、段々攻め寄せて大將と大將と覿面に見參する場合には眞鎗實劍

を持つて火花を散らし鎬を削り合ふ。此の時には互に喪身失命を顧みぬ、祖門下の衲僧は小敵を慢らず大敵を怕れざる大機大用を貴ぶ所以は此に在るのだ。サテ其の緩慢の陣法から緊張の接戰に至る縱橫無盡の武者振りは如何なる武裝の大將元帥に見ることができるか、宗門の老將を拜見し度くは全身を吐露して見せやう。本則の中邑仰山の會戰夫れみよ。

擧。仰山問中邑、如何是佛性義（這箇座主却堪持論）**邑云。我與你說箇譬喩、如室有六牕、中安一獼猴**（還肯寧息麼）**外有人喚云、狌狌、獼猴卽應**（宜假不宜眞）（再來不直半文）**如是六牕俱喚俱應**（只要檀郎認得聲）**仰云。只如獼猴睡時又作麼生**（莫寱語）**邑乃下禪牀把住云**（覺來也未）**狌狌我與你相見**（何不早恁麼道）

【讀方】 擧す。仰山中邑に問ふ。如何なるか是れ佛性の義。邑云く、我你が爲に箇の譬喩を說かん。室に六牕あり中に一獼猴を安く、外に人ありて喚んで狌狌といへば、獼猴卽ち應ず、是の如く六牕俱に喚べば俱に應ずるが如し。仰云く、只獼猴睡る時の如きは又作麼生。邑乃ち禪牀を下つて把住して云く、狌狌我你と相見せり。

【字義】 ◎中邑とは朗州中邑の洪恩禪師で馬祖道一禪師の法嗣である。◎獼猴は大猿のこと。◎狌狌とは猩々の如き猿のこと。◎佛性とは人人具有底の佛に有つても增さず衆生に有つても滅せざる理性の本體。◎義とは義理又は意義。◎譬喩とは中下根の人をして理義を了解せしむる爲に設くるたとへ話。此の譬喩を六牕一猿の喩といふ。◎六牕とは六箇の窓、六根に喩ふ。◎獼猴とは猿のこと。◎禪牀とは坐禪する牀のこと。◎把住とは擒住に同じ、ひつとらへること。

【要解】 佛性の義と云つて別に問ふべきことは無いのぢやが其の無いところを問うて來た。中邑は馬祖の法嗣、仰山は其の法姪に當る、兒を憐んで魂を忘じ、心性の佛性のと云つても解るまいと思つて老婆心切にも一牕六猿の譬喩を持ち出しての御伽噺ぢや、室は赤肉團、六牕は六根、一獼猴は心王、喚狌狌は六境で色聲香味觸法、卽應は根境識相應のところである。人が外から喚べは何れの窓からでも之に應ずる。六牕俱に喚べは俱に應ずる、一獼猴の機用此の通りぢや、飯を持ち來れば口を張る、鳥啼けば耳を欹つ、花咲けば眼を睜る、此の外に佛性の義は求められぬ。若し獼猴睡つて根境識相應せざる時は是れ佛性義に非るか、眼見耳聞に干からざるも亦佛性であらう、仰山が其の伏兵を埋むるに當つて中邑覿面に眞鎗實劍を持して禪牀を下り、胸倉を把つて狌々我れ你と相見と切り結んだ、我れと你と覿面の相見で二面裂破、狌の狌に會ふが如くで有る。是れが慢より緊に入る宗門老將の活機略、其の外に佛性義は求められぬぞ。

【著語】 □這箇の座主却つて持論するに堪へたり。大分議論に長じた座主だと見える、佛性論を擔ぎ込んだ、御苦勞なことよ。□假に宜うして眞に宜しからず。第二則の示衆にあつた語。言句のみで眞實が無い。□還つて肯つて寧息すや。开んな話が昔も有つたが今もやはり其んな御噺が

あるかネ。□再來半文に直らす。喚べば應ずるでは價値が無い、喚ばぬ前に應ずるでなくては鐚錢の値も六づかしい。□只檀郎が聲を認得せんことを要す。應ずる丈けでは聲ばかりぢや、眞箇に相見が肝腎ぞ。句は小豔の詩の結句で「頻りに小玉と呼ぶも元無事」といふ句に續いてゐる。□寐語すること莫れ。寐語はねごと、仰山ねごとを云ふまいぞ。□覺め來るや也た未しや。トントンと禪牀を下りて來たので眼が覺めたかナ、武士は轡の音で眼を覺すよ。□何ぞ早く恁麽に道はざる。諄々と譬喩話などしてゐずと何故早く相見すと道はぬのだ。イヤ道ふには及ばぬ、這竿の竹は恁麽に長く、那竿の竹は恁麽に短し、相見のしどをしョ。

頌云。凍眠雪屋歳摧頽（數戸不開）　窈窕蘿門夜不開（龍無龍句）　寒槁園林看變態（幾乎死殺）　春風吹起律筒灰（喜得重甦）

【讀方】雪屋に凍眠して歳摧頽、窈窕たる蘿門夜開かず。寒槁せる園林變態を看る、春風吹き起す律筒の灰。

【字義】◎凍眠雪屋の句は次の故事による、「大に雪ふりて地に積むこと丈餘、洛陽の令躬出でて按行して見る、雪を除いて出でて乞食するものあり、袁安が門に至つた行路あることなし、安已に死せりと謂へり、人をして雪を除かしめて、入て見れば臥せり、何を以て出でざるや、渠が云く大に雪ふりて人皆餓ゆ人に干むべからずと、令以て賢なりとして擧げて孝廉となす」と。◎摧頽とは摧はくだける、頽はつかるの意で歳の暮れるをいふ。◎窈窕は幽深閑靜の意。◎蘿門は葛蘿の蔓つて居る門。◎律筒灰は禮記に「蔡邕が月令に竹を截て管と爲す、之を律といふ、之を密室に置き葭莩を以て灰となして以て其端に實つ、其の月の氣、至る時は管空うす」とあるより採る。

【要解】本頌は全篇を通じて虚にして應ずるの無礙を明して佛性の大義を頌す、初二句は一六量滅の沒蹤跡、後二句は作家通變の相見を叙ぶ、大雪に戸を閉ぢて誰も出入せぬから山中暦日無しで歳の摧頽と暮れ行くも知らぬ、しな〳〵とした蘿葛が柴戸に搦みついて夜には門の戸も締め切つだといふ袁安が有樣も斯くやと偲ばれる。外から窺へば餓死し窮乏するが如くに見ゆるが内虚にして應ずる一牕六猿、沒蹤跡なる日常の應底よ。寒林の枯れ果てた梢に我れ儞と相見と急に態が變つて來て駘蕩たる春風がそよ〳〵と吹き初めて枯死の狀態に在つて萬木千草が悉く陰より陽に轉じた、作家の虚にして應じ應じて跡無き變通自在の相見である。佛性の大義は寤寐覺夢一如にして活中に死を得、死中に活る得るの妙態に存するのである。

【著語】□數戸開かざれば。□龍に龍句無し。潼泉の山禪師の語で二句一連である。睡つた時は蟄居で六根門は〆切だ、戸を閉ぢてゐたでは龍が中にゐても龍の活動は出來ぬ。句は句義ではたらき、□幾んど死殺せんとす。モー幾んど死にきるところだつたに。□喜び得たり重ねて甦ることを。死にきつたところから急に眼を開いて甦つた、生死の關を透得したはお目出度いことぢや。

第七十三則　曹山孝滿

示衆云。依草附木去作精靈。負屈啣寃來爲鬼祟。呼之則燒錢奏馬。遣之則咒水書符。如何得家門平安去。

【讀方】衆に示して云く、草に依り木に附き去つて精靈となり、屈を負び寃を啣んで來て鬼祟となる。之を呼ぶ時は、錢を燒き馬を奏む、之を遣る時は水を呪し符を書す。如何が家門平安なるをことを得去らん。

【字義】◎依草附木とは死して後浮ぶ瀨なき精靈は草や木に依附して居るといふ。◎鬼祟とは屈辱寃恨を持つた死靈が來て祟するといふこと。◎燒錢奏馬とは支那には鬼神精靈を呼ぶに紙錢を燒き馬の形を供へる風習がある、又自己の慾望を叶へさせる爲に水で咒をしたり護符を書いたりする、かゝる風習は洋の東西を問はず未開時代には行はれたらしい、所謂精靈崇拜である。◎家門平安とは家內安全といふに同じ。

【要解】凡聖の二見に屈著して法執忘せざるを依草附木の精靈といひ、迷悟の對待に固執して己見猶ほ存するを負屈啣寃の鬼祟といふ、錢を燒き馬を奏め、水を咒し符を書して之を呼び之を遣る、人人胸中起滅の念を撥轉して洒々落々たるを衲僧家の本分事とするのぢや、如何なる禁厭呪術でも幽靈や鬼祟を自由に對治し自在に使役して家門平穩の消息が得られざるで有らうか、不呼不遣の端的乞ふ本則に就てみよ。

擧。僧問曹山。靈衣不掛時如何、蜩蟟脫殼猶抱寒枝　山云。曹山今日孝滿不貲　僧云。孝滿後如何寬行大步　山云。曹山愛顚酒。有何不可　平生

【讀方】擧す。僧曹山に問ふ、靈衣掛けざる時如何。山云く、曹山今日孝滿。僧云く、孝滿の後如何。山云く、曹山顚酒を愛す。

【字義】◎曹山の傳は第五十二則に出づ。◎靈衣とは喪服のことで支那の禮として斬衰三年といつて父母沒して三年間は喪服を著るを例とす。◎孝滿は充分孝行を仕盡したといふこと。◎顚酒とは醉ひ潰れる程酒を飮むこと。

【要解】親の喪には三年齋服を著けて孝順の心を表するのが孝子の本分ぢや、今の僧は喪服を著けず孝順の心も無い、釋迦彌勒も是れ他の奴、達磨盧能も吾が怨家で、佛見も法見も見捨てた末後別作の肌膚を呈露して來た。曹山云く今日孝滿、全身一縷絲を掛けぬ、煩惱の靈衣どころでは無い、菩提の染衣も著けぬ、眞如も無明もサツパリ脫落盡した洒落の今日である。僧は更に一步進んで孝滿の後を斬り込んだ、スルト曹山は顚酒を愛す、熱燗で一杯キユツときこし召して醉ひ倒れる、孝滿じて後は誰に氣兼ねも遠慮もいらぬ、諸聖に解脫を願はず己靈の救ふべき無し、妄想を除かず

眞をも求めず、顚酒の今日には佛も孔子も手を束ねてぢや、閻魔も羅卒も唯苦笑して御座るのみぞ。これが大用現前規則を存せざる越格の本分事である。

【著語】口蟭蟟殼を脱して猶ほ寒枝を抱く。蟭蟟は秋の蟬、一皮剝いたやうだがまだ寒枝に縋りついて離れ得ず、哀しそうな聲を立てゐるワイ。口平生負かず。忌が明けても平生と少しも變らぬ、古今不變異の今日ぢや。口寬行大步。曹山の足跡を量るつもりか此の僧大股に步き出した、果して探れるかノ。口何の不可かあらん。ソリヤ結構ぢや、萬松もしたぢは好きなり御意はよし、獻した酬たで來る日も來る日も呑みつぶれの日暮しが大好きよ、サテも面白い境界では有るわいナ。

頌云。清白門庭四絶鄰（臘後見聰 莫與往來）長年闔掃不容塵（設有一點 無著處）光明轉處傾殘月（否極泰生）爻象分時却建寅（陰慘陽舒）新滿孝（泪痕猶未罷）便逢春（相喚打秋千）醉步狂歌任墮巾（熟不講禮）散髮夷猶誰管係（千自由百自在）太平無事酒顚人（七村裏這漢快活）

【讀方】清白の門庭四に隣を絶す、長年闔し掃つて塵を容れず。光明轉する處傾いて月を殘す、爻象分るる時却つて寅に建す。新に孝を滿す、便ち春に逢ふ、醉步狂歌墮巾に任す。散髮夷猶誰か管係せん、太平無事酒顚の人。

【字義】◎清白門庭のことは第二十八則に述ぶ。◎爻象とは周易下繫辭傳に「八卦列を成して象其の中にあり、因つて之を重ぬ、爻其の中にあり」と、卽ち爻は傚ふの意、象は象るの意である、陰爻が變じて陽爻となるが如きを爻象分るゝといふ。◎建迷寅とは周易乾の卦に「九二は見龍、田に在り、大人を見るに利あり」とあつて「九二は建寅建丑の間に據るべし、時に地の萌芽初めて出るものあり」と、卽ちこれ「陽氣發見の義なり」と註してある。後の「春に逢ふ」の句に對して居る。◎墮巾とは頭に冠つて居る頭巾を墮すといふ意で、酒に醉つた時のだらしなき狀態をいふ。杜甫の飮中仙歌に「巾を脱して頂を露はす王公の前云々」とあるに據る。◎夷猶とは步調の整はぬこと。酒醉の風態を表す形容。

【要解】初め二句は外諸緣を息め、內心喘えぐ無き孝滿の端的を頌し、次の二句は轉機、巳下の句は顚酒の境界を敍ぶ。清白の門庭は純清絶點、四方隣を絶するは乾坤獨立よ、長年の闔掃は外緣を杜絶した清白なる家門の風致で、木の葉一枚塵一本を留め無い、曹山孝滿の端的を拈じ上げて置いて自己の光明の轉處は回互を貴んで十成を忌むの家風であるから殘月は傾いて中位を守らぬ、陰陽の爻象纔に分るゝ時は却つて斗柄寅の方を建すといふ、窮すれば通ずる衲僧自在の一機轉である、偏位も守らず正位にも墮せざる奇なり妙なる轉機活用である。今日孝滿とあるから新たに孝滿つ、爻象分るゝ時寅を建すといふから便ち春に逢ふであつて、法身法性の尊貴邊を轉却し、新に孝を滿じた刧外の春の暢氣さを見よ、足は千鳥、口には端歌、帽子や襟卷が墮ちれば落ちたまゝ、

髮は散髮、夷猶も無く風態お構ひ無しで誰に惚れて貰うといふ色氣も無い、格外無事の日用の境界、是れ即ち酒顚人の太平無事の今日よ、此の人は修證迷悟の干戈を動せずして太平、凡聖尊卑の禮法を論せずして無事、醉ひ來つて臥す空山天地の衾といふ顚酒人である、孝滿するの衲僧にして初めて是の顚酒の快活不徹なることを味ひ得るのぢや。

【著語】□腦後に腮を見ば與に往來すること莫れ。比倫を絕した異人などは對手にせぬが好い、自分が對手にせねば他も寄り附かぬ。□設ひ有るも一點も著くる處無し。設ひ塵が有つたにしたところで著くるに處無しである、塵とすべき一物を認めぬのぢや。□否極れば泰生ず。否は天地否で易の卦の塞、年の暮、泰は地天泰で通じて泰といふ卦、春の陽氣である。冬極つて春生ず、表裏がサツト轉ずる樣子をいふ。□陰は慘ひ陽は舒ぶ。陰氣な泣き面が急に陽氣な笑ひ顏となる。□泪痕猶ほ未だ罷まず。忌が明いて喪服と黑衣と著かへた許りで頰に泪痕が長く垂れてゐる、未だ親のことを忘れ切つてゐないらしい。□相喚んで秋千を打す。春になると近所合壁が寄り合つて色々な遊びをする。秋千は鞦韆でぶらんこのこと。□熟禮を講せず。昔は禮儀の講釋もしたものだが今では此の狀態だ、ダガ面白さうだネ。□千自由、百自在。自由自在したい放題ぢや。□七村裏、這の漢快活。近鄕近在での物持ち長者、得意滿面、誰れ憚らぬ太平樂を極めて御座る。

第七十四則　法眼質名

示衆云。富有萬德蕩無纖塵。離一切相即一切法。百尺竿頭進歩。十方世界全身。且道甚麼處得來。

【讀方】衆に示して云く、富萬德を有つて蕩として纖塵無し。一切の相を離れて一切の法に即す。百尺竿頭に步を進めて、十方世界に身を全うす。且らく道へ甚麼の處より得來るや。

【字義】◎富有萬德云々の八字は、淸凉華嚴經の序文の中から引いた語で、金持であつて塵一本も有たぬといふ意。有意の二見に涉らざるをいふ。◎離一切相云々の句も華嚴經第二卷にある語で、一切を離れて一切に卽いて居るの意、不離不卽の旨を示す。◎百尺竿頭進步とは百尺竿頭は昇りつめたる向上の絕頂、進步は其の絕頂から更に一步を進めるといふ意で、卽ち手を打ち拂つて向下に却來すること。◎十方世界全身とは向下却來の上の作略を示す語で、所所身所所現の道理。◎得來とは學得し來る、體得し來るなどいふ意。

【要解】百萬の福德を有する富者といへども是れ何物有つて恁麼なるぞと摸索著すれば蕩として絲筋一本塵一つ我が物とては無い、纖塵の無いといふ一切の相を離れて見れば一切の法が其のまゝ實相である、心外に法無く法外に心の無い諸佛の轉大法輪である。此の百尺竿頭に上つて大死一番の

ところに進一歩するとき十方世界に身を全うして大活現成するぞ、是の時は唯我獨尊で天上天下の萬德は我一人に歸するのである。サー甚麼處から其の樣な活計が得られるぞ。

舉。僧問法眼、承教有言。從無住本立一切法。如何是無住本（合取狗口）眼云。形興未質（莫眼華）名起未名（畢竟喚作甚麼）

【讀方】舉す。僧法眼に問ふ、承る敎に言へることあり無住の本より一切の法を立すと、如何なるか是れ無住の本。眼云く、形は未質より興り、名は未名より起る。

【字義】◎法眼の傳、第十三則に出づ。◎敎とは十二分敎のことで、今は其の中の維摩經觀衆生品をいふ。此の文維摩經衆生品にあり。◎無住とは無所住の略、一定の定まれる根本のないこと。◎一切法は萬法に同じ。◎未質とは質は質礙、五根所對の境のこと、未だ五根所對の境とならざるものをいふ。◎未名とは權兵衛熊藏と名の命かぬ以前の本來の自己のこと。

【要解】僧は維摩經の文を以て問ひ、法眼は寶藏論の語を以て答へたが、僧は敎に執しての疑問で有つて、法眼は自己の寶藏から拈出した親言親口である。無住の本より一切の法を立するといふ其の無住の本如何んと訊ねたけれども、此の僧には一切の法が會得されてゐるのでは無い、無住の本と一切の法と二つ相並べて且らく其の一を問うたに過ぎぬ、イヤ卽今直下に無住の本に住して一切諸法建立の道理を知らぬ無眼子である、法眼は無住に形が有るか、形が無ければ名は無い、一切の法に定相があるか、定相が無ければ定名は無い、名相は皆緣起所生で無自性空だ、形は有つても未質だ、名は有つても未名だ、未質未名を姑らく無住の本とすれば形名は假に一切の諸法ぢやが、其れも體性ともに空なら二つに分けることも出來まいよ、法眼の楔を以て楔を拔く手段、空落索の機用に著眼看するがよい。

【著語】□狗口に合頭せよ。惡臭紛々たる其の口を無暗に開くまいぞ、悟臭を厭つた。□眼華すること莫れ。未質といふと何か物が有りそうな、見んと眼を開けばハヤ其れが眼華ぞ。□畢竟喚んで甚麼とか作さんや。畢竟名が無いと知れたら甚麼と喚んでもよからう、名づけ次第ぢや。

頌云。沒蹤跡（羚羊挂角）斷消息（久貧不逢）白雲無根（妙體本來無處所）清風何色（通身那更有蹤由）散乾蓋而非心（尙能出岫）持坤輿而有力（不費精神）洞千古之淵源（盡向這裏流出）造萬象之模則（一法之所印）剎塵道會也處處普賢（獨衒裁卷）樓閣門開也頭頭彌勒（築著磕著）

【讀方】沒蹤跡斷消息、白雲根無し淸風何の色ぞ。乾蓋を散じて心あるに非ず、坤輿を持して力あり。千古の淵源を洞にし、萬象の模則を造る。剎塵の道會するや處處普賢、樓閣開くるや頭頭彌勒。

【字義】◎沒蹤跡とは跡方がないといふこと。◎斷消息とは音信がないといふこと。◎乾蓋坤輿と

は乾は天、坤は地。◎散、持は放行と把位である。◎刹塵道會とは華嚴の合論に「昔時善財童子普賢菩薩の毛孔の刹中に於いて行く、不可說不可說の佛刹微塵數の世界を超過す、步々に爾許の世界を過ぎ、復爾許の刧を經て一毛孔中の刹海邊際を知ること能はず」とある意を用ゆ。刹は國土、塵は萬象をいふ、一切處一切法の上に普賢の現せぬ處はない、華嚴淸凉の疏に「普賢は體性周徧の故に普と云ひ、隨緣德を成ずる故に賢といふ」とある。◎樓閣門開とは又華嚴入法界品に「彌勒菩薩前んで樓閣に詣して彈指して聲を出せば其の門卽ち開く、善財に命じて入らしむ、乃ち至つて悉く三千大千世界百億の四天下と兜率陀天とに一一皆彌勒あるを見る」とあるより來る。◎彌勒とは梅怛麗耶といふ梵音マイトレーヤ(Maitrēya)慈氏と譯す。南天竺の波羅門にして兜率天に上生し、現に其の內殿に居て、釋尊滅後五十六億七千萬年の後に出世して賢刧千佛中の一佛と成るといふ。

【要解】沒蹤跡斷消息の二句は無住の本を頌して未質未名の空處を敘べ、自下四句直對の隔句である。先づ未質を云へば形が無いから跡は無い、白雲の任運に去來して變態凡聖の縱跡はあらはれぬ、未名を云へば名が無いから消息は無い、消息は有れども迷悟の色無き淸風の吹き渡るのみで斷消息よ。雲は無心なれども天を覆ひ、此の淸風で大地を持ち支へる大力を有する、前句は有にして有ならず、後句は無にして無ならざるを明した。竪に千年の遠い時間を洞らかに見究めて卽今と離れざるを知り、横に萬象の模樣規則の無住の本より造り出されたことを明かした、前句は不有、後句は不無を云つたのである。刹土塵界道會すれば在々處々普賢の道場と現成し、彈指して樓閣の門開けば頭々物々彌勒の所領ならざるは無し、其の二句に道會門開の時節は處々全眞頭々現成で是れ沒蹤跡斷消息の全眞なり現成なりであると結んだのである。

【著語】□羚羊角を挂く。進退去來せぬから蹤跡は無い。□久しく負いて逢はず。久しく御無沙汰して音信もしない。□妙體本來處所無し。法の本體は無法で有るから的位とする處所は無い。□通身那ぞ更に蹤由あらんや。色相を離れた通身だから出處進退毫も痕跡を止めぬ。□尙ほ能く岫を出づ。雲無心にして岫を出づ。出入自在ぢや。□精神を費さず。力は有つても骨は折らぬ。□盡く這裏に向つて流出す。久遠と今時と別時で無いと知つたら諸法は其許から流出す。□一法の所印。一切の法元一法、一法元無法、無法の印するところ萬象の模則である。□街を攔り巷を截る。東西南北四維上下普賢の全身。□築著磕著。拄杖の長きも拂子の短きも、柳の綠なるも花の紅なるも、眼で見たまゝ耳で聞いたまゝ、其れが悉皆彌勒の樓門で毫しも透間が無い。

第七十五則　瑞巖常理

云衆云。喚作如如早是變也。智不到處切忌道著。這裏還有參究分也無。

【讀方】衆に示して云く、喚で如如となす早く是れ變せり。知不到の處切に忌む道著することを。

這裏還つて參究の分ありや也無しや。

【字義】◎如如とは絕對の眞理といふ意で、この句は南泉が座主に對して答へた語である。又涅槃經に如如を以て極則とするも所謂如如は已に本體と相去ること千萬里であると示されてある。◎知不到は知見解會の及ばざるところ。◎道著とは著は助字、道は言なり、有とか空とか言說の上に現はすこと。◎參究とは實參實究の略、實地に究むるの意。

【要解】若し喚んで如と云ひ是と云ひ、如々と一物を指さば早く是れ變了、生滅代謝の假名法となり了つて衲僧家の本分で無い。這裏に到つては見聞覺知の及ばぬところぢやから如々と道著するすら切に忌むのである。此の場に臨んで何と參究したもので有らう、言舌意識の道斷處滅底を本則に就いて參究するがよい。

擧。瑞巖問巖頭、如何是本常理（有理不在高聲）**頭云。動也**（可知理也）**巖云。動時如何**（再犯不容）**頭云。不見本常理**（相物作價）**巖佇思**（却識慚愧）**頭云。肯卽未脫根塵**（箇中無肯路）**不肯卽永沈生死**（當堂不正坐　那赴兩頭機）

【讀方】擧す。瑞巖、巖頭に問ふ、如何なるか是れ本常の理。頭云く、動せり。巖云く、動の時如何。頭云く、本常の理を見ず。巖佇思す。頭云く、肯ふ時は卽ち未だ根塵を脫せず、肯はざる時は永く生死に沈む。

【字義】◎瑞巖とは臺州瑞巖の師彥禪師で巖頭の法嗣、毎日自ら主人公と喚び、自ら答へて醒醒著といはれたといふ有名な人である。◎本常理は本然常住の理、常住不變の理といふに同じ。◎動也とは動いたぞといふ意。本常の理を問うて來たに對して撥著した語。◎根塵とは六根と六境とのこと、境は根と交涉する染汚の法であるから塵といふのである。

【要解】此の公案は第七十二則の佛性義、又前の則の無住の本と同じやうに理とか體とか本とかいふと兎角學人は珍重して事とか用とか末とかいふものと別に見たがる、理事體用本末は元來一體不二で有つて理に執し事に觸る皆是れ病である。背觸倶に非、肯不肯ともに不可である。瑞巖の問ひ來るところも亦本常の理で現象差別を離れて何處かに高尙な本來常住の理體がコロリ轉つてゐるやうに思つて巖頭の答話を促した。動せり。求むる念がハヤ理に背いた。動の時如何ん。動ずれば本常の理は見えぬ。瑞巖二念に涉つたから佇思したのである。肯ふ時は分別計較ぢやから六根六塵の根境に涉る。肯はざれば卽ち永く生死の苦海に沈淪する、肯不肯を離れて一句作麼生、此に起死回生せねばならぬ、絕後に甦り來れば肯も不肯も本常の理で他に向つて求むるには及ばぬ。

【著語】□理有れば高聲にあらず。高聲に問ひ來るところを見るとモハヤ理に外れてゐるらしいぞ。□理を知るべし。動の理、不動の理といふところにお氣がつかぬのか。□再犯容さず。第二犯の重罪ウッカリ容赦はならぬ。罪の上は塗りだ。□物を相して價を作す。對手を見て賣りつける手段らしい。□箇の中肯路無し。肯路があれば初めから問は起さぬ。□堂に當つて正座せず

那ぞ兩頭の機に赴かん。第一頭にすら居らぬ者が肯の不肯のといふ二頭に渉る奴が有るか、之が萬松の見た本則の要處ぞ。

頌云。圓珠不穴（甚處下手）　大璞不琢（可惜功夫）　道人所貴無稜角（就理藏鋒）　拈却肯路根塵空（十二處忘閑影響）　脫體無依活卓卓（三千界放淨光明）

【讀方】圓珠穴あらず、大璞は琢せず、道人の貴ぶ所稜角無し。肯路を拈却すれば根塵空ず、脫體無依活卓卓。

【字義】◎圓珠不穴とは圓き寶珠の珪なきこと、卽ち圓滿の意を示す。出據は世記に「潘岳夏侯湛と友たり、二人並に姿容美なり、張謂贊すらく、和氏の璧瑩となし瑕なし、隨侯の珠圓にして穴あらず」といふにある。◎大璞不琢とは白玉の琢かずして自から立派なること、卽ち本然の意を示す。語は禮記に「大璞は琢せず、大羹は和せず」とあるより出づ。◎脫體とは全身露現の意まるだし。◎無依とは何物にも依らぬといふこと。◎拈却肯路とは肯不肯の二途を拂ひ去るをいふ。◎卓卓は無依の貌、獨立無伴の當體をいふ。

【要解】初二句に動也不見本常理の理を頌し、情謂の容れ難き所以を敍べ、次の一句で道人の屋裏肯不肯の稜角なきを明し、後の二句に肯不肯兩頭の往來を頌じて結んだのである。無欠無餘の大圓鑑、琢磨せざる璞玉であれば絲も通ずる能はず、分別も加ふることが出來ぬ、圓珠大璞それが本常の理の丸コロゲである。苟も道人たる者の尊重するところは圓珠の如く大璞の如くにして微塵計りも稜角無きところに無限の價値がある。勤著すれば、本來常住の理は不見と隱れて永劫にも拜見することが出來ぬのぢや、合點々々の肯路を拈却と取り拂へば根塵の名相共に空じて沒蹤跡よ、肯不肯の根塵を脫落すれば事理無依にして活卓々と大活用を現ずる、卽ち獨立獨歩して稜角無き本常の圓鑑がコロリ現成する、之を道人の大尊貴とするのである。

【著語】□甚の處に手を下さん。盡十方世界一顆の明珠だもの手のつけやうが無い、其の手も亦是れ圓珠で不足は無い。□功夫を惜むべし。虛空を大璞とす、琢磨の功夫は及ばぬことぢや。□就理藏鋒。全理の時は理といふ鋒は無い。稜角も圓珠の外の者で無い。□十二處忘ず閑影響。六根六塵の影響を雙滅すれば見聞覺知一一分別に渉らぬ閑影響である。□三千界に淨光明を放つ。十方世界が一光明で他物は無い。活卓々の全身をいふ。

第七十六則　首山三句

示衆云。一句明三句。三句明一句。三一不相渉。分明向上路。且道是那一句在先。

【讀方】衆に示して云く、一句に三句を明し、三句に一句を明す。三一相渉らず、分明なり向上の

路。且らく道へ那の一句か先に在る。

【字義】◎一句とは向上の那一句、直指の活句のこと。◎三句とは空假中だとか有空中だとかいや德山の三句なる函蓋乾坤の句、隨波逐浪の句、截斷衆流の句といふに依つたのだとか種々に取沙汰されるが、今は何れと定つた譯の話ではあるまい。一句に對して三句と立てたまでのことよ。

【要解】一句に三句を明し、三句に一句を明すは、三一相渉らずで、一句と了得すれば二も無く三も無し、二と云ひ三といふも一句の外には無い、して見ると三が三で無く、一が一で無い。三も一も離れた向上の一路だといふことが分明明白に合點せられねばならぬ。サー其の樣な一句はどんな一句で有らう。機先句後、具眼底は乞ふ檢得出して看よ。

擧。首山示衆云。第一句薦得與佛祖爲師（猶是萬松兒孫）第二句薦得與人天爲師（敎壞人家男女）第三句薦得自救不了（說這不唧𠺕漢）僧云。和尚是第幾句薦得（儞試度）山云。月落三更穿市過（三句可辨一鏃遼空）

【讀方】擧す。首山衆に示して云く、第一句に薦得すれば佛祖の與に師となる、第二句に薦得すれば人天の與に師となる、第三句に薦得すれば自救不了。僧云く、和尙は是れ第幾句に薦得するや。山云く、月落て三更、市を穿つて過ぐ。

【字義】◎首山の傳第六十五則に出づ。◎薦得とは全分かつさらう、丸取りなどいふ意。薦はむしろのこと、博奕して贏つたものが薦ぐるみ我物とするといふより出た語。今は法の全體を領得するをいふ。◎自救不了とは人の師となるはおろか、自分自らを救濟することさへ出來ぬといふ意。◎三更とは丙夜ともいふ。子の刻、今の午後十二時に當る。◎穿市過とは市を竊かに通りぬけるといふ意。

【要解】薦得とは悉皆引さらつて我が物にすることぢやが、第一句第二句第三句と次第に薦得して來て僧に第幾句に薦得するやと問はれて三句を離れた一句を首山が道得した、第一句とは何ぞ、第二句とは何ぞ、第三句とは何ぞ、と究め來つて第幾句に歸するのが、首山が今日の計略で有つたらしい。第一句に佛祖の師と爲り、第二句に人天の師と爲る底の人、第三句に到つて自救不了なるは如何ん、上は佛祖人天の師となるも、下は自分で自分の活機用が出來ぬとあれば階級が有るやうで階級が無い。三句あるやうで三句で無い。自他を見ず凡聖を認めぬ聖諦不爲の一線路である。僧の第幾句に答へて、月落ちて三更市を穿つて過ぐといふ、月落ちた眞夜中の黑闇を掛引算盤の本場たる市場を傍見もせずにサッサと過ぎ去ると、一二三の價を論ずる商賈の中を安い高いの賣聲もきかずに過ぎ去るところに何の數量が有らうぞ、これが超佛越祖の一句である。此の一句から三句も百千萬句も現はれて向上の一路が開ける。一三の數量を超越して一三の句を自由に薦得するのが本則の要處である。

【著語】口猶は是れ萬松が兒孫。其のやうなことでは萬松に遲れること數百歩ぢや、どうして其んなに遲いのか。口人家の男女を斂壞す。愚夫愚婦を賺すことは止めたらどうだい。口這の不喞𠺕を說く漢。鈍鐵極つたり、自分の足で自分が歩けぬのか。口儞試に卜度せよ。自分で第幾句か卜度してみよ、知覺を盡して其の第幾句が現成する。口三句辨ずべし、一鏃空に遼る。三句を辨得して見れば三句は一鏃に射透されて天空に上つて行つた、三即一の一も見出し難いぞ。

頌云。佛祖髑髏穿一串（一任跨跳）**宮漏沉沉密傳箭**（不許外人知）**人天機要發千鈞**（以輕勞重）**雲陣輝輝急飛電**（眨眼蹉過）**箇中人看轉變**（計在臨時）**遇賤則貴貴則賤**（心知本自同所以無欣怨）**得珠罔象兮至道綿綿**（一念不生全體現）**游刃亡牛兮赤心片片**（涙出痛腸）

【講方】佛祖の髑髏一串に穿つ、宮漏沈沈として密に箭を傳ふ。人天の機要千鈞を發す、雲陣輝々として急に電を飛す。箇の中の人轉變を看よ、賤に遇うては則ち貴、貴は則ち賤。珠を罔象に得て至道綿綿たり、刃を亡牛に游ばしめて赤心片々たり。

【字義】◎宮漏とは漏は器から漏らしてそれによつて時刻を計る舊式の時計である。宮漏は宮中奥深く設けてある漏刻の意で宮の字は沈沈の意を強めるために用ゐたまでのこと。◎沈沈は夜の更け行く形容。箭が動いて時間を示すから傳箭といふ。◎發千鈞とは魏志に「千鈞の弩は鼷鼠の爲に機を發せず」とあるより出づ。一鈞は三十斤、即ち千鈞の重味を有つてをる弩弓を發するをいふ。◎得珠罔象とは罔象は盲目のこと、盲目が珠を得たといふことで、語はもと莊子天地篇の「黃帝赤水の北に遊んで、其の玄珠を遺る、智をして索めしむるも得ず、離をして索めしむるも得ず、喫詬をして求めしむるも得ず罔象を使つて之を得たり。黃帝の曰く異なる哉罔象にして以て之を得べし」とあるによる。◎綿綿とは續いて斷えざる貌。◎游刃亡牛とは手際の鮮かなことの例語で莊子養生主篇の「庖丁文惠公の爲に牛を解く、曰く彼節は間ありと、刀刃は厚きことなし、厚きことなきを以て間あるに入る、恢々乎として刃を游るに於いて必ず餘地あり云々」とあるより出づ。◎赤心とは眞心のこと、◎片片とは條條に同じ、外に何物も無きこと、赤心片片とあれば赤心ばかりといふこと。

【要解】初二句に第一句薦得、次の二句に第二句薦得を頌し、次の二句に箇中の人の境界、末の二句に三更過市の消息を明す。第一句に諸佛列祖の骸骨髑髏を只一串に穿貫してグーの音も立てさせぬ。是れほどの人の行履は天地の宮城に獨棲して密に心印を傳へて居る計りだから、漏時計が沈々として更けゆく宮城に寂しく鳴り響くのみだ。第二句に人天の機要を取り挫ぐには千鈞の弩を發して龍虎風雲の陣を張つて旗指し物をキラ〳〵さして電光石火の急變を示すぞ、是れで第一句第二句の佛祖人天の師と爲る大機用を叙べた、別に第三句のことは頌じはせぬが、第一第二の二句と第三句と別物では無い。這裏一にあらず異にあらず、三句を一句に穿得する底の人の轉機神變を看よ、佛祖

の師たる獨尊佛かとすれば自救不了の賤人となり、自救不了の賤人かとすれば人天を化する師家となる。貴賤を一串した箇中の人の轉變である。赤水の北に罔象が珠を得てより至道は綿々として相續不斷だ、文惠が庖丁を以つて死牛の骨肉を割くに自在に用ゐ得た取り廻しは本より親疎の無い赤心片々である。此の二句は首山末後の句月落ちて三更市を穿つて過ぐる端的の、虛にして應じ應じて跡無き大機を巧みに頌じたのである。珠の例は無師智自然智の發現で全く一點の私を容れぬところ、及の句は天眞の妙用にして縱横無礙一點の造作を容れぬ沒擬量の當處をいふ。

【著語】□彼が踔跳するに一任す。　增長するだけさせるが好い。萬松　高觀の見物ぢや。□外人の知るを許さず。　見聞不到の地、許しても外人には見えまい。□輕を以て重を弄す。　人天ぐらゐの師と爲るに千鈞の弩を發するなどは大袈裟だ。一體度すべき人天が有るかナ。□眨眼すれば蹉過す。　眨眼する間に陣形をかへた、電光石火のはたらき眼にもとまらぬ。□計ることは時に臨むに在り。　此の方に一句の三句のといふ分別さへ無ければ對手次第で一句とでも三句とでも說法をする。□心に本より自から同じきことを知る、所以に欣怨無し。　人々其の根本を知れば自他欣怨の情は消滅する、況んや貴賤をや。□一念不生全體現ず。　見聞を離れた無念の全體其の儘そつくり珠の光明。□泪は痛腸より出づ。　赤心片々で痛腸から出た泪のかたまりよ。此の言句盡く是れ悲心の一滴ぢや。

第七十七則　仰山隨分

示衆云。如人畫空下筆卽錯。那堪起模作樣堪作甚麼〇萬松已是露栓索。有條攀條。無條攀例。

【讀方】　衆に示して云く、人の空に畫くが如き、筆を下さば卽ち錯る。那ぞ模を起して樣を作すに堪へん、甚麼を爲すに堪へんや〇萬松已に是栓索を露はす、條あれば條を攀ぢ、條無ければ例を攀づ。

【字義】　◎畫空とは虛空に字を書くといふこと。晉の殷浩黜けられ終日空に咄々怪事の四字を書いて居たといふ故事から出た語である。◎模樣とはも模も樣共にかたちの意、モデルのこと。◎栓索の解第二十三則に出づ。◎有條攀條は第二十七則に出づ。

【要解】　人ありて虛空に畫かんとして一筆を下すならばモハヤ空にはならぬ、空を畫かうとして若し文彩や模樣をつけるならば混沌に眉を描くと同じで虛空を破つて仕舞ふ、甚麼してもダメだ。萬松此に一圓相〇を畫いたが是れ亦餘計な栓索ぢや、平地に骨堆を生じたといふもの。然し先佛曩祖に條目があらば其の條目に攀づるがよい、條目が無ければ例式を用ゐやうでは無いか、順逆縱横無作の妙用といふ一例を左に擧してみせる。眼を開いてみよ。

擧。僧問仰山。和尚還識字否（是甚麼字）山云。隨分（當仁不讓）僧乃右旋一

匝云。是甚麼字。已見偏傍山於地上書箇十字。更書點畫僧左旋一匝云。是甚麼字。半滿俱分形聲轉注山改十字作卍字。機輪轉處智眼猶迷僧畫一圓相以兩手托如修羅掌日月勢云。是甚麼字細看切脚山乃畫圓相圍却卍字。天下衲僧跳不出僧乃作樓至勢門外金剛笑汝山云。如是如是汝善護持鬪空鏁夢牢收掌

【讀方】舉す。僧仰山に問ふ、和尚還つて字を知るや否や。山云く、分に隨ふ。僧乃ち右旋一匝して云く、是れ甚麼の字ぞ。山、地上に於いて箇の十の字を書す。僧左旋一匝して云く、是れ甚麼の字ぞ。山、十の字を改めて卍の字となす。僧一圓相を畫いて兩手を以て托げて修羅の日月を掌にする勢の如くにして云く、是れ甚麼の字ぞ。山乃ち圓相を畫いて卍の字を圍却す。僧乃ち樓至の勢をなす。山云く、如是如是、汝善く護持せよ。

【字義】◎隨分とは身分相應の意。◎修羅掌日月とは修羅は具には阿修羅、梵音アースラ（Asūra）非天、不端正等と譯す。衆相山中若くは大海にありて常に三十三天と戰ふ天趣である。又台疏に「羅侯阿修羅此に障持といふ、日月を障持するものなり」とある處から掌日月の語が出てをる。◎樓至勢の樓至は梵語、此に涕泣といふ、樓至佛は賢刧の千佛が千王子であつた時末後に籌を引いて最後に成佛することになつた時、涕泣して云く「我何ぞ薄祐なるや」と、又忽ち笑つて云く「我當に盡く九百九十九佛の方便莊嚴を取るべし」と、今樓至の勢とは卽ち樓至佛の樣子といふことである、卽ち樓至佛は杵を持つて居るから其の樣子眞似することである。◎如是如是とは然り然りといふ意で、他の意見を肯ふ語である。◎護持とは保護住持で、大切にまもること。

【要解】本則は宇宙の大文字の研究である、大文字は無文字に始まり時に應じ機に處して種々の文字となつて現はれる、之を活文字と稱する。仰山は東土の小釋迦と呼ばれた程あつて頗る文字に達者で有る、僧の文字を識るや否やに對して分に隨ふといふ、分に隨ふで無ければ字を識るとはいへぬ、觸處生涯分に隨つて足るである。右に旋ること一匝、此の文字を十字と讀んだ、逆に左に旋ること一匝、これを卍字と讀んだ、一圓相○を畫いて兩手で托げること修羅の日月を掌中に障ふるが如き勢をした、スルト仰山は圓相を畫いて卍字を圍んだ、卽ち㊣の形を作つた、今度は僧が樓至の末後に籌を得て啼哭し、忽ち復笑つて護法神と爲つた勢をした、仰山は如是如是、汝善く護持せよとう〳〵僧を護法神に祭り込んで仕舞つた。仰山は順逆隱顯の文字を悉く讀破して十字と爲し卍字と爲し㊣字と爲して分に隨ふ底の自由を發揮した。十字は點劃縱橫にして分明の義とか、卍字は十字の半を滿字にしたとか、㊣字は無相三昧滿月輪の圓相だとか、種々の說明を加へる輩もあるが、仰山の文字は其の樣な註釋を要する劃引字典の文字では無い、悉く是れ分に隨つて虛空に書したる大文字で、其の一一が虛空に同化されたる宇宙大の文字である。如是如是は證明で六祖の南嶽を印

可したと同一轍ぢや。

【著語】口是れ甚麼の字ぞ。　漢字か梵字か、其れとも横文字か、見聞一一是れ廣大の文字ぞ。口仁に當つて讓らず。　鶴は長く鴨は短し、松は直ぐ棘は曲れり、仁に當る他に讓ることが出來ぬ、各本分のまゝよ。口已に偏傍を見る。　仰山點書を添へてとう／＼文字にして仕舞つた。　グルリと旋つた拍子に偏が見えたぞ。口半滿倶に分る、形勢と轉注と。口更に書點を書す。　半字は半字、滿字は滿字と分明に分れた。形聲とは例へば江河の二字は水を以て形とし工可を以て聲とするの類、轉注とは老と考との如く字と義と共に近きをいふ。口機輪轉ずる處、智眼猶ほ迷ふ。　十字を卍字と轉ずる仰山の機輪は僧の分別の智眼ぢや、其の手許が解るまいテ。口細に切脚を看よ。　切は字の反切、脚は注脚である。子細に文字の根本を究めて見ぬと讀めにくそうだ。口天下の衲僧跳不出。仰山がグルリと圍んだ一圓相中を跳出することは天下の衲僧にも出來ぬだらう、十方の智者皆此の宗に入る、三世古今此の圓相中の活計ぢや。口門外の金剛汝を笑はん。　泣いたり笑つたり變挺な眞似をしたものだ、門前の二王樣が舌出して笑つてゐるよ。イヤ樓至の脚跟に隨つて眞似をしたならば重ねて天下の笑を招くぞよ。口空を闚し夢を鎖して牢く掌を收む。　汝善く護持すべし、密室風を通せしむること莫れ。右旋左轉の大妙法輪、是れ佛祖所護念の處ぞ。

頌云。道環之虛靡盈（擔雪塡河）　空印之字未形（切忌彫刻）　妙運天輪地軸（老氏復生）　密羅武緯文經（將相全才）　放開捏聚（睦州猶在）　獨立周行（老氏復生）　機發玄樞（權衡在手）兮青天激電（措手不及）　眼含紫光兮白日見星（照破四天下）

【讀方】　道環の虛盈る靡し、空印の字未だ形れず。妙に天輪地軸を運し、密に武緯文經を羅らぬ。放開捏聚、獨立周行。機玄樞を發して青天に電を激す。眼に紫光を含んで白日に星を見る。

【字義】　◎道環とは第六十三則に出づ。◎天輪地軸とは天動說から來た語で、天の廻るは天體の廻る軌道を輪といひ、地の動かざる中心を軸といふ。◎武緯文經とは文を經とし武を緯とすといふ意、文武兩道を具備すること。經緯は織物のたていと、よこいとといふ字。◎放開はおつぴらくといふ意にして自由を與ること、放行。◎捏聚とはよせあつめるといふ意で、自由を與へぬこと、把住。◎獨立周行とは獨立は絕對なること、周行は普偏の意、老子の「寂たり寥たり、獨立して改めず周行して殆うからず」とあるより出づ。◎機發玄樞とは樞はくるゝ、機はからくり、卽ち機が樞によつて動くの意。道環の虛中より種種に機用を現すをいふ。◎眼含紫光とは宋史に「老子廬山に絕粒して食はず目奕奕として紫光あり」とあるに據る、眼光の鋭きこと。

【要解】　第一句は圓相、第二句は十字卍字を頌して本則の大意を拈じ、第三句は左旋右旋、第四句は十字卍字を伸べ、次の二句は仰山と僧との機輪、結末二句に僧と仰山とを讚歎して結んだのである。道本圓通で欠くること無く餘ること無き道環の一圓相、中空虛にして一絲毫も盈るものは無い、十

字卍字は形はれたやうだが元來空印の字で未だ文彩に形はれて居らぬ、圓は妙有の上の眞空、十字卍字は妙有の上の眞空で有つて、情議分別を以て測度の出來ぬ大文字である。僧の左旋は天輪、右旋は地軸で順逆縱横の妙運である、「仰山の十字卍字は武緯の一と文經の｜とを密に羅べて宇宙の大文字を畵いた、其の器量は實に見上げたものよ。仰山の機輪は放開の如くにして捏聚し、僧は獨立のところにして周行する倶に是れ大丈夫の行履だ。」僧は智慧の要機を發轉して情量を離れて思ひ掛けも無き青天の激電光で、擬議の容れ難き機輪を讃歎した、仰山は紫金の眼光を含んで人の目にも止まらぬ白日に天の星を見る眼力で人の肺腑を見拔く、正眼の豁開を云つて其の人を歎美した。

【著語】口雪を擔つて河を塡む。雪で河を塡める如く本際解脱だから何を持つて行つても障りにならぬ。口切に彫刻を忌む。虚空に彫刻をしても無駄だから止めてくれ。口權衡手に在り。權衡を緊と握つてゐるから輕重自在ぢや。口將相の全才。内では宰相、外では將軍、文武兼ね備へた智慧才覺が有る、鬼に金棒ぢや。口睦州猶は在り。睦州は其の道の達者で有つたが今は故人になられたと思つてゐたら猶は御在世のかナ。口老氏復た生ず。釋迦老氏誕生の時周行七歩して唯我獨尊と獅子吼されたは三千年の昔と思つたが復た此に御誕生かいナ。口手を措くこと及ばず。捉えやうと手を出すか出さぬに電光はサット引いた、分別の手はつけられぬ。口四天下を照破す。眼光烱々として紙背に徹るぐらゐのことで無い、四天下もまだおろか、盡十方世界自己の光明ぢや、光明一枚の天地ぢやワイ。

第七十八則　雲門餬餅

示衆云。綄天索價。搏地相酬。百計經求一場懡㦬、還有知進退識休咎底麽。

【讀方】衆に示して云く、綄天に價を索むれば搏地に相酬ふ、百計經求一場の懡㦬、還つて進退を知り休咎を識る底ありや。

【字義】◎綄天とは滿天の意である、綄天を觀天、漫天、遼天、などに作る本もある。◎搏地は滿地の意。◎經求は經營推求で、種々手段を弄するをいふ。◎一場懡㦬の解は第二十八則に出づ。◎休咎とは是非、善惡、美醜、長短等二物對待の意を示す語。

【要解】天にひろがる莫大の價を索むれば地に滿つるほどの報酬を受けられる、是れも師學相見の上の互換の機略ぢやが、斯る百計千謀の經世の馳求は一場の慚愧で眞箇衲僧の活計では無い。デハ如何にしたらば出處進退を知り休咎好惡を識る底の老漢となり得ることが出來やうか。大利は大損、與ふるも奪ふも增減の無い佛法の消息は先づ本則に就いて親しく參ずるがよろしい。

擧。僧問雲門。如何是超佛越祖之談（此間太高生）門云。餬餅（一擧四十九）

【讀方】擧す。僧雲門に問ふ、如何なるか是れ超佛越祖の談。門云く、餬餅。

【字義】◎雲門の傳、第十一則に出づ。◎超佛越祖とは佛邊にも祖邊にも止まらぬの意。◎餬餅とは胡麻で製つた餅の名。胡餅とも書く。

【要解】佛祖を超越した至理の大道を一句承はらうと、此の僧は得々と雲門に來たのである、超佛越祖の談と大きく持ち掛ける位だから充分佛味や法味、祖味や禪味に飽參した揭げ句の果てで有らう、門云く餬餅。胡麻餅、堅いか柔いか、どうも此の僧には齒が立たぬらしい、勿論味も知れぬ。然し雲門は惜し氣も無く餬餅を點心した、之を喫し此れを味ふときんば超佛越祖の談が解るのか知らなどと分別に渉つたら餬餅は石餅に化けるかも知れぬ。犬にお預けしたやうに前に置いて涎を垂らしてゐるよりは人々も早く味はつて御覽じろ、喉に迫つき、手に粘著するから注意が肝要ぞ。

【著語】口此の問、太高生。立派な問ひだ、氣高い者だ、だが足下も氣をつけさつしやい。口一擧四十九。筮竹は五十本有つて其の中から一本取つて太極とする、其の一本の餘の四十九本はチヤンと收められてある。雲門の餬餅一つに是非善惡有無色空の論量も超越佛祖の談も皆含藏してある樣だ。

頌云。餬餅云超佛祖談（一大藏教詮注不及）　句中無味若爲參（甚處下口）　衲僧一日如知飽（始知餬餅醍醐毒藥）　方見雲門面不慚（雲門無眼見人）

【讀方】餬餅を超佛越祖の談といふ、句中に味無し若爲が參せん。衲僧一日如し飽くことを知らば、方に見ん雲門の面慚ぢざることを。

【字義】◎句中とは雲門の餬餅と答へたる言句の中。◎無味とは餅より來る緣字、味なしの意なれども、實は何とも言ひやう無き味の反語である。◎參とは參得、參究などと續く字で、究めつくすこと。◎衲僧とは佛祖道を參究する大丈夫。◎飽とは餬餅の無味を飽く程味ふの意で、佛法を參じつくしたこと。◎雲門面不慚とは若し參じ盡すものなくんば切角の機用も一場の慚愧呈露となるが今衲僧が飽くことを知つたならば雲門は定めし滿足するであらうといふ意。

【要解】前二句に本則の體面を頌し、後二句に飽參の衲僧を求めた。雲門は餬餅と云はれた此の一語は超佛越祖向上格外の玄談で八萬四千の法藏にも說き餘した宗旨であるが、甚だ困つたことには其の句中の味は無味淡白で何とも彼とも齒が立たない、無味の談、人口を塞斷する底の餬餅、人人能く仔細に咬嚼して看るがよからう。茲で一つ天童が云つて置くことは、此に一人あつて六年端坐九年面壁、咬嚼に咬嚼し飽いてモハヤ他の殘羹餿飯を貪らぬといふ飽參底の衲僧が出て來たならば、未だ食せざる以前に餬餅を咬破し了るで有らう、方に始めて其の時に折角の供養が無駄になつても愧を慚ともせぬ頑固親爺の面を見返してやるがよい。吾が天童門下に恁麼な飽參底の衲僧有りや、雲門の餬餅を天童が引き受けて天下に賣付け以て大いに利得を占める手段である。

【著語】口一大藏經も詮注し及ばず。佛一代四十九年の說法も雲門餬餅の注釋にはならぬ、千佛

萬祖も說かぬ法門ぢや。口甚の處に口を下さん。　鐵饅頭には齒が立たぬ、萬松も齒がよくないと見える。口始めて知る餬餅、醍醐の毒藥なることを。　食ふ人に依つて毒とも藥ともなる、此の餅人を殺活するの伎倆がある。口雲門、人を見るに眼無し。　雲門は對手を見ることを知らぬ、上戸にも下戸にも餬餅を出す、恥かしきは當然ぢや。

第七十九則　長沙進步

示衆云。金沙灘頭馬郎婦、別是精神。瑠璃瓶裏擣餈餻、誰敢轉動。不入驚人浪、難逢稱意魚。寬行大步、一句作麼生。

【讀方】衆に示して云く、金沙灘頭の馬郎婦、別に是れ精神、瑠璃瓶裏に餈餻を擣く、誰れか敢て轉動せん。人を驚かす浪に入らずんば意に稱ふ魚に逢ひ難し。寬行大步の一句作麼生。

【字義】◎金沙灘頭馬郎婦は風穴の僧に答へた語を其の儘用ゐたもの。「唐の憲宗皇帝の時陝右の地佛法未だ開けず、觀世音美女の身を現じて能く經を誦するものに嫁せんといふ、普門品金剛般若を誦するもの數多あるも法華經を誦するもの馬氏只一人なり、美女之に嫁して直ちに死す、時に一老僧現じて美女の由來を語る、爾後陝右の地佛法盛なり、金沙灘頭に觀音を安じ、名けて馬郎婦觀音といふ」と釋氏稽古略にある。卽ち觀音和光同塵の機用を示したもの。◎餈餻は又糍糕とも書く粟餅の類であるといふことである。◎寬行大步はゆるやかに大手を振つて大道を活步するをいふ、自由に往來すること。

【要解】風穴の答話に金沙灘頭の馬郎婦とあるが馬郎の婦と爲つた觀音の化儀は二乘等の偏執では及ばぬ化導ぢやから別の精神といふ。瑠璃瓶の中で餈餻を擣く如く思ひ切つて轉動することは出來ぬ、自の境界を守つて展轉自在を缺くは衲僧家の本分で無い。我を忘れて怒濤激浪中に入るに非れば眞の活潑潑地の魚は得られぬ。自行化他天下無敵の大道を濶步するには傍若無人の境界を得ねばならぬ。人人金沙灘頭の馬郎婦と爲つて化儀を現じてみよ。

擧。長沙令僧問會和尙、未見南泉時如何（早長有粥）　會良久（問者便屎臭氣）　僧云。見後如何（更與挑剔）　會云。不可別有也（只向屎堆裏躂倒）　僧廻擧似沙（走口送舌渓）　沙云。百尺竿頭坐底人（竿下底一場懡㦬）　雖然得入未爲眞（孤危不立道方高）　百尺竿頭須進步（甚底大如箇割捨）　十方世界是全身（始信蒲團不是天）　僧云。百尺竿頭如何進步（果有這箇在）　沙云。朗州山、澧州水（築著磕著）　僧云。不會（可憐聰明）　沙云。四海五湖王化裏（一任跨跳）

【請方】擧す。長沙僧をして會和尙に問はしむ、未だ南泉に見えざる時如何。會良久す。僧云く、見へて後如何。會云く、別に有るべからず。僧廻つて沙に擧似す。沙云く、百尺竿頭に坐する底の人、然も得入すと雖も未だ眞と爲さず、百尺竿頭須らく歩を進むべし、十方世界是れ全身。僧云く、百尺竿頭如何が歩を進めん。沙云く、朗州の山、澧州の水。僧云く、不會。沙云く、四海五湖王化の裏。

【字義】◎長沙は湖南長沙の景岑招賢禪師で南泉普願禪師の法嗣である、初め鹿苑に住し、後退いて一定の住所を定めず、機に臨んで說法せられたから人呼んで長沙和尙といつた、又其の機峰峻峭な所から岑大蟲の名を得て居る。◎會和尙とは何人であるか明瞭でない、恐らく南泉會下の逸足であつたらしい。◎良久とはやや暫時といふ意。◎坐底とは坐著する底の意、其の場所へ坐り込んで活用を缺くもの。◎得入とは悟の境界に入るの意。◎眞とは眞箇、ほんものといふこと。◎朗州山、澧州水とは朗州は支那の山邊の土地、澧州は江邊の土地、甲州の山、房州の水といつた調子である。◎四海五湖とは四海は狄、夷、戎、蠻のこと。五湖は太湖の周の五灣をいふともいひ、又太湖の周圍五百里であるから太湖を五湖といふともある。卽ち天下といふことの換語である。

【要解】長沙が僧を使つて會和尙に問はした、和尙が未だ南泉に相見しない以前は如何でしたか、會は良久すで、しばし何とも口を開かぬ、依前として眉毛眼上に横ふといふ風だ。相見して後は如何ですか、會始めて口を開き別に有るべからず、八字に打開して無事一雙の眉ぞといふ見識、僧は問ふべき事だけ濟して玄沙に復命すると、玄沙は會庵主を評するに一偈を以てした、百尺竿頭に坐り込んで居る、悟つては居るが未だどうも本物では無い、百尺竿頭一歩を進めるで無くてはいかん、進一歩すれば十方世界が是れ自己の全身と現成するのぢやが坐する底の人であるのは惜しいものよと云つた。僧は今の今迄會庵主の評判だと計り思つて居たが、どうやら他人事で無いと氣付いたらしい、百尺竿頭から如何して歩を進めたものでせう、其れは六づかしいことで無い山に逢うては山、水に逢うては水、朗州と澧州に用事は無い、駿州の山、江州の水でもよろしい、山は高い水は深いと見究むる是れ進一歩である、僧にはまだ會得が出來なかつた、重ねていふ四海五湖王化の裏、十方世界是れ全身ならは四海五湖法王の化土にあらざるは無い、何處に飛んでも王化の外、全身の外へ飛び出すことは出來ぬ、故に安心して自由に飛ぶがよいと心切の餘りから出た長沙の提撕である。

本則の要は百尺竿頭進一歩にある、如何んが進歩せんとならば十方世界是れ全身、朗州の山、澧州の水、四海五湖王化の裏と長沙は餘りに說明し過ぎてゐる位である。百尺竿頭に坐するは向上の死漢で瑠璃瓶の中で餅を搗くやうなもので不自由極つてゐる、進歩の時天下の往來、横行濶歩し、自行化他の獨尊佛たることを得るのである。

【著語】□早晨に粥あり。　早朝喫粥午時喫飯何れも同じサ。□問著すれば便ち屎臭氣。便所もソツとして置けは平氣だが掻き廻すと臭氣がひどくなる、會和尙は問はれて見ると孩兒の時の屎臭氣がまだねけてゐぬぞ。□更に與に挑剔す。　大いに肉迫されて苦戰の態ぢや、然し其所が肝腎の急處

だ。□只屎堆裏に向つて蹉倒す。屎堆裏の中にぶつ倒れてゐる、臭い筈よ。◎走口送舌の漢。告げ口して歩く厭な奴だ。□竿下底一場の懡㦬。女の輕業を下から見てゐるやうだ、醜態も甚だしいぞ。□孤危立せず道方に高し。權位ある人が卑に下つて謙讓なるは何と無く幽しいものぢや。□甚底大に箇の割捨するが如くなる。登りつめて居るのに更に歩を進めよとは大層苛酷だ、身が割かれて仕舞ふ。□始めて信ず蒲團是れ天にあらざることを。盡十方世界が一蒲團と成つた。□果して這箇の在る有り。果して走で有らうと思つた進歩法が知れなんだ。□築著磕著。山の水のと云つても背へて俯仰するには及ばぬ、面前背後、鼻づき合ひだ。□可瞭聰明。不會だから不會だ、大層お利口なことで。□踍跳するに一任す。どちらへスッ飛んでも負傷は無い、羽あるは飛び蹄あるは走る、大自由の運作顛倒ぞ。

頌云。玉人夢破一聲鷄（開眼不覺曉）、轉盻生涯色色齊（無盡藏中受用不了）。有信風雷催出蟄（節氣不相饒）、無言桃李自成蹊（水到渠成）。及時節力耕犁（避者不做）、誰怕春疇沒脛泥（做者不避）。

【譯方】玉人夢破る一聲の鷄、轉盻すれば生涯色色齊し。有信の風雷出蟄を催し、無言の桃李自から蹊を成す。時節に及んで耕犁を力む、誰か怕れん春疇脛を沒する泥。

【字義】◎玉人とは玉成した立派な人。◎轉盻とは前後左右を見まはすこと。◎有信風雷とは雷風が春信を傳へるをいふ。禮記月令の「孟春の月東風凍を解き、蟄蟲始めて振ふ、仲春の月雷乃ち聲を發し始めて電す、蟄蟲咸く動き戸を啓いて始めて出づ」とあるより出づ。◎無言桃李云々は前漢李廣傳の贊に「李將軍恂々として鄙人の如し、口辭を出す能はず、死するの日に及んで天下知ると知らざると無く皆爲に涕を流す、彼其の中心士大夫に誠信あればなり、諺に曰く桃李言はず下自ら蹊をなす」とあるに依る。◎春疇とは春の田のうねのこと。

【要解】初二句は會和尙が向上に坐睡するを長沙の警覺に會うて眼を開いて向下に轉脳つた樣子、次の二句は色々齊しき十方世界全身の景色、末の二句は向下に往來して拖泥滯水の本分を頌してある。會和尙は南泉下で悟つて玉成したつもりで向上に居睡りをしてゐたが、長沙の未だ眞と爲さずの一語は鷄鳴の曉を報ずる一聲の如く夢破られて、廣く眼を轉じて覺醒の生涯を見渡せば、朗州の山、澧州の水、頭々物々是れ全身で毫も添へ物が無いのぢやと氣づいた。宛も其の樣子をいへば蟄居せる蟲が春雷一聲の音信を聞いてヒヨイ〳〵ノコ〳〵出かけ來、桃李は言はずして紅白咲き競ふと人は自から花下に集りて蹊を成すが如くであつて、會和尙は長沙の啓發で、百尺竿頭進一步して十方世界に全身を現ずる威氣、偏界不藏の正當である。四海五湖王土の中と治まり切つた太平の時節に至れば春の田の深い泥中に脛を沒して耕したり犂いたり、田翁野老と爲る誰が怖れやう、毫も苦とせず灰頭土面のお百姓に成り下つての敎化ぢや、金沙灘頭の馬郎婦の消息も亦之にあること

を知るがよい。

【著語】口眼を開いて曉を覺えず。心眼が開いても事相の夜が曉けてゐぬと何にもならぬ、自己に光明が有つても天の窟戸に隱れてゐては盡界は照せぬ。口無盡藏中受用し了らず。長短方圓種種無盡の寶藏、いくら受用つても盡きたといふことは無い。口節氣相饒さず。饒はゆるめる、やりくりすること。時候氣節は毫も私は無い。口水到れば渠成る。水が溜れば溝渠ができる、花が咲けば人が來る、自然の消息ぢや。口避くる者は做さず。一時は避けて向下の作用を做さぬにしても。口做す者は避けず。做す時節が來れば避くること無く、いつしか無心に泥田に脛を沒するものぢや。

第八十則　龍牙過板

云衆云。大音希聲大器晩成。向盛忙百閙裏佯呆待七古千年後慢㤮。且道是如何底人。

【讀方】衆に示して云く、大音は聲希れに、大器は晩成す。盛忙百閙の裏に向つて呆を佯り、七古千年の後を待て慢㤮す、且らく道へ是如何なる底の人ぞ。

【字義】◎大音希聲とは老子に「大方は隅なく大器は晩成す、大音は聲希なり」とあるに據る。◎佯呆とは呆は癡、佯は眞似すること阿呆の風を裝うこと。◎七古とは七は古文の化字、七古は化古の轉化したもので世化り物古る意、年時の久しきをいふ。◎慢㤮は慢緩で欺騙ること。

【要解】宇宙に餘る大音は其の聲聞くこと稀れで、聞かうとしても聞えぬ。格外の大器量人は格外の事を成就するが晩成で普通人の眼にはとまらぬ。事務多端の忙しい其の閙裏にゐて阿呆のやうな面をし、世化り物古る千年の後を悠々と待つてゐる人は急性の人だか緩慢の人だか薩張り窺ひがつかぬ、是れが卽ち大音は聲希れに、大器は晩成すといふ格外の衲僧で有る。何處に其のやうな人が居るかネー、其の形態を拜見せんとせば乞ふ本則をみよ。

擧。龍牙問翠微。如何是祖師西來意（一廻拈出一廻新）微云。與我過禪板來（著本圖利）牙。取禪板與翠微（兀兀瞎瞎）微。接得便打（情知是）牙云。打卽任打。要且無祖師西來意（牛背牛不肯）又問臨濟如何是祖師西來意（頑皮癩肉）濟云。與我將蒲團來（好本多同）牙。取蒲團與臨濟（將錯就錯）濟。接得便打（順手骨椽）牙云。打卽任打。要且無祖師意（得恁軟頑）牙。後住院。僧問和尙當年問翠微臨濟祖意。二尊宿明也未（貪見思舊債）牙云。明卽明矣。

要且無祖師意

焦磚打著ス　連底凍

【諸方】擧す。龍牙翠微に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。微云く、我が與に禪板を過し來れ。牙禪板を取つて翠微に與ふ。微接得して便ち打つ。牙云く、打つことは卽ち打つに任す要且つ西來意無し。又臨濟に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。濟云く、我が與に蒲團を將ち來れ。牙蒲團を取つて臨濟に與ふ。濟、接得して便ち打つ。牙云く、打つことは卽ち打つに任す要且つ祖師意なし。牙後に住院す、僧問ふ、和尚當年翠微と臨濟とに祖意を問ふ、二尊宿明すや也未しや。牙云く、明すことは卽ち明す、要且つ祖師意無し。

【字義】◎龍牙は龍牙山居遁禪師で、法を洞山良价禪師に嗣ぐ。◎翠微は翠微無學禪師で、丹霞天然禪師の法嗣である。◎祖師西來意とは達磨大師が西天から傳來せられたところの宗意といふこと佛法の的意、禪の宗意といふに同じ。◎禪板とは坐禪をする時手を置き身を拄うる板のこと、倚板ともいふ。◎接得とは學人に接して道を得せしむること、師家が學人に對して禪的訓練を施すこと。◎蒲團は坐蒲ともいふ、坐禪する時に尻の下に敷くところの圓形の敷物である、蒲の穗を布に包んで圓形に作りたるものゆゑ、此の名稱がある、日本にて寢具の被を蒲團といふは其の轉訛である。◎祖師意とは祖師西來意の略。◎住院とは行脚を止めて寺院に足を住めること。◎尊宿とは叢林に於ける年高臘長の衲僧に對する敬稱。

【要解】本則は第四十二則の南陽淨瓶と類則で、問意は異つてゐるが、宗意は同じである。龍牙が翠微と臨濟と兩處で祖師西來意を問うて禪板蒲團のお使をし剩さへ接得に會ひ棒頭を喰つた、打つことは卽ち打つに任す、要且つ祖師意無し、祖師意が骨髓に徹へ無かつたやうである、蒲團禪板を將來する脚下手裏には祖師意が會得せられ無かつたやうである。然れども住山後の僧に答ふる當處に於いて翠微臨濟の痛棒、徹骨徹髓し、過來將來の別事にあらざることを了得した、故にいふ明すことは卽ち明す、要且つ祖師意無しと、眞個に祖師意を了得すれば祖師意の祖師意とすべき無し無祖師意が眞の祖師意である、日炙り風吹く、喫茶喫飯、是れ祖師意の全面目よ、此の時にはモー祖師意の名目も立たぬ。天童や萬松は前後を立てず一樣に龍牙を讃歎してゐるのは爲人の作略である、其の積りで看ねばならぬ。

【著語】口一廻拈出すれば一廻新なり。陳腐な問題ぢやが拈出する度に味が出る。口本を著け利を圖る。利得をとらうと思つて資本を下した。口兀兀瞪瞪。兀々は手も出さぬ物も言はぬ瞪瞪は眼を見詰めること。死んでゐるのか活てゐるのか。口情に是なることを知る。左樣ぢや左樣ぢや、さう行かねばならぬ。口半は肯ひ半は肯はず。全肯全不肯を避けたところは遉に龍牙は洞山門下ほどある。口頑皮爛肉。西來意に腐心して皮肉を爛らしてゐる。口好本多同。御手本に好く似た字を書いた。口將錯就錯。翠微に與へた通り又臨濟に持つて行つた、錯を持つて錯に就いたやうだ。口順手骨椋。有り合せの捧きれで臨濟思ひ切り打つたナ、臨濟常用の手段をいふ。

口愘のごとく軟頑なることを得。相も變らず活氣の無いトロイ道ひ分だ。口貧兒舊債を思ふ。貧乏人は兎角昔の負債を思ひ出しては苦にするものぢや。口焦塼打著す連底凍。焦塼を張り詰めた氷の中へ抛り込んだ、氷解氷消で何物も殘るものは無い。

頌云。蒲團禪版對龍牙（計稽甘居脊）何事當機不作家（咬人狗不露齒）未意成褫明目下（人無遠見）恐將流落在天涯（必有近憂）虛空那挂劍（不假鋒鋩事）星漢却浮槎（別有向上一路）不萠草解藏香象（佛眼覷不見）無底籃能著活蛇（一般拈弄與君殊）今日江湖何障礙（太平無忌諱）通方津渡有舡車（何處不風流）

【讀方】蒲團禪板龍牙に對す、何事ぞ機に當つて作家とならざる。未だ成褫して目下に明なることを意はず、流落して天涯に在らんとすることを恐る。虛空那ぞ劍を挂けん、星漢却つて槎を浮ぶ。不萠の草に香象を藏すことを解し、無底の籃に能く活蛇を著く。今日江湖何の障礙かあらん、通方の津渡に舡車あり。

【字義】◎當機とは其の場に於いてといふ意。◎作家とは作者ともいふ力量ある衲僧のこと。◎成褫とは成就結裹と熟字し、物事を仕上げるをいふ、本來面目に相見すること。◎明目下とは現に問題となつて居るといふ意。◎流落は流離落魄、おちぶれること。◎天涯とは旅の空の意。◎虛空那挂劍とは虛空には劍などは挂けぬといふ意、大虛の廓落なることを示す。口星漢却浮槎とは銀の河が海に續いて居て浮槎に乘つて星漢の世界に行く事が出來るといふ意、博物志に出て居る傳説に依る、前句と共に師家の境界を示す。◎不萠草云々は會元十三に「僧曹山に問ふ、不萠草甚麼としてか能く香象を藏す」とあるに出づ。◎無底籃の出所は夾山の路に死蛇に逢はゞ打殺することなかれ即ち無底の籃に盛りて持ち歸れとある語がある。◎江湖とはもとは江西、湖南より出た語で、今は天下と同意に用ゆ。◎通方とは到る處といふこと。◎渡津とは舟の渡し場或は停車場のこと。◎舡車とは、舡は船、渡には船あり驛には汽車ありといつた調子。

【要解】此の一頌は一貫して龍牙の作家なることを拈得して天童格外の爲人を爲す。第一句に本則を擧げ第二句に徵詰し、次の二句に龍牙の不用底の意を頌し、次の二句に要且無祖師意を述べ、次の二句に龍牙の不用の大用にして句下に死在するに非ざることを頌し、最後の二句に龍牙爲人の大方に通じて用不用に礙ゆること無し直下の道得を明す。臨濟の蒲團、翠微の禪板に龍牙は何等の活用を現せず、機に當つて毫も作家らしい作略の無かつたのは何故であるか、天童の不審に堪へぬところぢや。天童が試みに龍牙の底意を探つて見ると蒲團禪板の下で飜斤斗するか禪牀を掀倒するか禮拜をするか何か格外の大用を現ずれば作家互換とか、獅子奮迅とかといふ成敗の跡が目前にありと見えることとなれども龍牙は其の樣なことは毫も意はぬ、却つて他の一機一境の圈繢裏に落ちて天涯流落の客作の漢となりはせぬかといふことを恐れられたぐらゐである。龍牙が無機用のとこ

ろに洞山種草の大機用を現せられたのであると天童は卓上して來た。其の打任打 要且無祖師意と云はれたは虛空に劍を挂けることが出來ぬごとく、天の河に椂を浮べて居るやうなもので智見でも分別でも窺ふことの出來ぬ境界ぢや。不萠の草に香象を藏すことを解し、無底の籃に能く毒蛇を著くで無用のところに大用を藏してゐる、臨濟翠微の句下に死在してゐるので無くて香象の定力堅固、活蛇の毒手不下なる作家の漢であると讃賞して置いて、其許で思ひ出したは龍牙の垂語である、江湖人を礙ゆるの意なしと雖も時の人透不得なるが爲めなり、江湖人を礙へ去ること無しと雖も江湖人を礙へずといふことを得ずとあるが今日江南湖北何の障礙も無い、四方に通ずる渡し場には舡もあれば車も置いてあるから舡來なりと陸來なりと自由自在に化度するのが龍牙の大爲人底である、下坡走らずんば快便逢ひ難し、要且無祖師意の好い便船に乘遲れるなと天童諸人の爲に船待ちぢや。

【著語】 □計・穩かにして春を屠ふることを甘ふ。 大望のある人は堪忍強い、龍牙は西來意に身を忘れてゐるから春を屠られても甘受する底の人ぢや。□人を咬む犬は齒を現はさず。言句の塊を逐はず、人に嚙みつく犬は白い齒は見せぬ、仲々油斷はならぬ。□人遠見無し。 遠く將來のことまで氣がつかぬ。□必ず近憂あり。 思ひがけぬ心配ごとが起きるものよ。□鋒鋩の事を假らず。尖先を露さぬが却つて危險ぢや。□別に向上の一路あり。 他の語路に轉せられぬ、別に轉處があるを見よ。□佛見覰れども見えず。 これは佛祖の眼睛を以ても見出し難い。□一般に拈弄して君と別なり。 世間並のやうで別箇の變態あるは龍牙の神通サ。□太平に忌諱なし。 心に一物が無ければいつも太平無事よ。□何の處か風流ならざらん。 胸宇に滯ふり無ければ舡も風流車も結構、飛行機だつたら一層面白からうヨ。

第八十一則　玄沙到縣

示衆云。動卽影現。覺卽塵生。擧起分明。放下穩密。本色道人相見如何說話。

【讀方】 衆に示して云く、動ずれば卽影現じ、覺すれば卽塵生ず。擧起すれば分明、放下すれば隱密。本色道人の相見如何んか說話せん。

【字義】 ◎擧起は拈擧提起で指し擧げて呈露すること。◎放下とは放げ捨てる。◎本色道人とは修行事の出來上つた人。◎說話とは問答商量のこと。

【要解】 一念動ずれば萬緣の影現じ、本然を覺了すれば客塵頭角生ず、本來無動影と擧起すれば一一分明、覺塵是れ何物ぞと放下すれば卽處に穩密で有つて念覺盡く手を打ち拂つた安心の場處よ。本分の衲僧、眞箇道人の相見には如何な說話をするで有らう、本則に就いて其の轉身のところを見究めるがよい。

擧。玄沙到蒲田縣、百戲迎之。次日問小塘長老、昨日許多喧鬧、向甚麼處去也（又鬧也）小塘提起袈裟角（果然手忙脚亂）沙云。顛挑沒交涉（謝證據）

【讀方】擧す。玄沙蒲田縣に至る、百戲して之を迎ふ。次日小塘長老に問ふ、昨日許多の喧鬧甚麼の處に向て去るや。小塘袈裟角を提起す。沙云く、顛挑沒交涉。

【字義】◎玄沙の傳は第二十一則に出づ。◎蒲田縣とは支那興化府にある、福州府の南方三百三十里に位置すといふ。◎百戲迎之とは色色な餘興をやつて大に歡迎の意を表したといふこと。◎小塘長老とは傳記が明でない、恐らくは玄沙會下の作家であらう。◎喧鬧とはがやがやと喧しかつた事柄をいふ。◎提起とは摘み擧げること。◎袈裟角とは袈裟の隅の方。◎顛挑沒交涉とは何等關係無しといふ意、顛挑或は料掉とも書く、實は遼迢の字の轉訛で、至つて疎遠なることを示す意に用ゆ。

【要解】玄沙の師備禪師が蒲田縣に招請せられて赴かるゝと猿樂やら田樂やら能狂言やら二輪加やら様々なことをして歡迎した、賑かな騷々しいことで有つたらう、翌日のこと小塘長老に昨日は頗る喧鬧を極めてゐたがアノ騷動は今日甚麼處へ去つたナといふ質問をされた、小塘の脚跟を試みたのである、スルト小塘は何とも云はずに御袈裟の角をヒヨイと提げ出して見せた、甚麼處へも去りはせぬ。玄沙の沒蹤跡に對して小塘は莫藏身ぢや、動にも覺にも涉らぬ。兩老の相見である。顛挑と遙かに沒交涉と摺り違つてゐると法眼は云つたが、是れは小塘の見處を不是としたのでは無い、傍人が見て是とすると病となるから其許を恐れての留め針である。

【著語】口又鬧也。昨日よりも一層騷々しい、風なきに浪を起した。口果然として手忙脚亂。それ見たことか、玄沙に拍子を合しての舞ひ踊りよ。口證據を謝す。貶した語が證明となつた、萬松が保證する。

頌云。夜壑藏舟（衲子難設）澄源著棹（肯隨死水）龍魚未知水爲命（當局者迷）折筋不妨聊一攪（打草驚蛇）玄沙師。小塘老（一狀領過）函蓋箭鋒（易開終始口）探竿影草（難保歳寒心）潛縮也老龜巢蓮（藏身處沒蹤跡）游戲也華鱗弄藻（沒蹤跡處莫藏身）

【讀方】夜壑に舟を藏し、澄源に棹を著く。龍魚は未だ知らず水を命となすことを、折筋は妨げず聊か一攪することを。玄沙師、小塘老。函蓋箭鋒、探竿影草。潛縮や老龜蓮に巢ひ、游戲や華鱗藻を弄す。

【字義】◎夜壑藏舟とは莊子に「舟を壑に藏し、山を澤に藏す云々」とあるより出づ。◎澄源著棹とは玄中銘に「澄源湛水孤舟に棹す、古佛道場尙ほ車子に乘ず」とあるに據る。◎龍魚未知云々は

會元八卷に「一隻折筋を將て大海の水を攪し、彼の龍魚をして水の命たることを知らしむる」とあるより出づ。◎折筋は折れた箸。◎函蓋箭鋒とは、師學相見の同道唱和底の樣子を示す語。函と蓋とがキチンと相合し、名人の射た箭鋒と箭鋒とがガッチリ途中で逢ふが如しといふ意。參同契に「事存すれば函蓋合し、理應ずれば箭鋒相拄う」とあるより來る。◎探竿影草は盜賊の用ゆる探り棒と隱れ簑のこと。師家が學人を檢さんとする場合の挨著の語をいふ。◎老龜巢蓮とは史記龜策傳に「龜千歲にして蓮葉の上に遊ぶ(中略)江南嘉林中に龜芳の上に巢う」とあるに據る。◎華鱗は鯉のこと。

【要解】　本頌は中に一句だけ玄師小老を喚び出して居る外隔句に玄沙と小塘とを頌して機感相應じ互ひに沒蹤跡にして消息を通ずる活計を歎美してある。昨日は喧鬧なる大海の波浪に棹し、今日は夜壑の昏沈に舟を藏して居はせぬかと法眼は小塘を試みた、小塘は、波風の無い澄源に居て提起衣角と太い棹を投げ著けた。龍魚は水を命として居るとも知らず只沒蹤跡のところにのみ安住してゐはせぬかと玄沙は小塘を一攪する、小塘は折筋を以て遠慮無く又玄沙を一攪する、互ひに探り合つて少しも水を濁さぬ。玄沙師小塘老の兩人は、函蓋相合するが如く箭鋒相拄ふに似、一探竿を投ずれは一影草を下す。其の間寸分の隙間も無い。默然たる小塘は千年の老龜が蓮に巢くふが如く潛り縮んで靜に歸すれば、動に轉ずる玄沙は華鱗の藻を弄して浮沈するやうに無分別の遊戲三昧ぞ。二老の境界は全く動靜の二相了然として脫落せる王三昧を現成してゐる。

【著語】　口衲子は謾じ難し。　藏身かとすれば獨露どうして侮り難い活機用ぞ。口背つて死水に墮せんや。　水溜りに棲むやうな鮒や目高では無い。口局に當る者は迷ふ。　岡目八目の反對で局盤に面してゐる者には氣迷ひする。口草を打つて蛇を驚かす。　小塘にかこつけて諸人に宛てつけたやうだ。口一狀に領過す。　兩人同一に處分する氣だナ。口開き易きは終始の口。口保ち難きは歲寒の心。　二句一連である。終始一貫の口は開き難いが、終始一貫の心を保つことは猶ほ難いぞ、此の兩人は心口ともに一貫して歲寒の誠を盡すを賞めた。口藏身の處沒蹤跡。口沒蹤跡の處藏身することと莫れ。　靜も鬧も少しも跡を留めぬ。隱顯自在にして影も殘さぬ、如何にも自由の境界ぢや。

第八十二則　雲門聲色

示衆云。不斷聲色是隨處墮。聲求色見不見如來。莫有就路還家底麼。

【讀方】　衆に示して云く、聲色を斷せざれば是れ隨處墮、聲を以て求め色を以て見れば如來を見ず。路に就いて家に還る底あること莫しや。

【字義】　◎聲色とは聲と色とのこと、六境の代表に出したる文字、客觀の境をいふ。◎不斷聲色云々の語は稠布衲曹山和尙に問ふ、披毛戴角是れ甚麼の墮ぞ。曰く是れ類墮、問ふ不斷聲色是れ甚麼の墮ぞ。曰く是れ隨墮云々とあるに依る。◎墮は不動の義で、隨處に脫落なること。◎聲求色見と

は金剛經に「若し色を以て我を見、音聲を以て我を求めば是の人邪道を行ず」とあるより出づ。◎還家の家は本家鄕、卽ち本家鄕に還り落付くこと。

【要解】 聲を斷せず色を斷せずんば聲色は隨處墮で、聲色に轉せられて動きがとれぬ。色を以て如來を求め、音聲を以て如來を求めば是れ邪見で、如來を見奉ることは出來ぬ、一微塵も求むところの念が有れば其の念に礙へられて如來は現はれぬ。共に當陽の一路に就き豁達無礙自在底の衲子が有るならば其の人と道伴して本家鄕に歸るがよろしい。本則に擧する雲師は正に其の人ぢやから、親しく參じてお近づきになるがよい。

擧。雲門示衆云。聞聲悟道（雙丸塞耳）**見色明心**（兩葉遮睛）**觀世音菩薩將錢來買餬餅、放下手却是饅頭**（又被風吹別調中）

【讀方】 擧す。雲門衆に示して云く、聞聲悟道、見色明心、觀世音菩薩錢を將ち來つて餬餅を買ふ、手を放下すれば却て是れ饅頭。

【字義】 ◎雲門の傳は第十一則に出づ。◎聞聲悟道とは聲を聞いて悟つたといふこと、香嚴の擊竹の因緣は其れである。◎見色明心とは色を見て心事了畢したといふこと、靈雲桃花の話柄は其れである。◎觀世音は阿波盧吉低舍婆羅の舊譯、新譯は觀自在、「名義集に能行圓融し有無兼暢、正性を照窮し其の本末を察かにす、故に觀と稱す、世音は能觀の境なり」とある。◎饅頭とは麵粉を以つて牛や豚のつぶしたる肉を包み之れを蒸したるもの。昔諸葛孔明が南蠻を征する時、其の風習に隨つて人頭に擬へ、之れを神前に捧げたるに始まると傳ふ。

【要解】 雲門垂示の一則で、香嚴は聲を聞いて道を悟つた、靈雲は色を見て心を明めたといふ例がある。作麽か是れ聞聲悟道、見色明心、聲は聲に還へし色は色に還へして一物を止めぬを悟道といひ明心といふ、然し其の道とは何ぞ心とは何ぞ、道の道とすべき無く心の心とすべき無き之を明らむるとも悟るともいふのよ。觀世音菩薩は圓通薩埵で五蘊皆空と照見して一切の苦厄を度する圓通の如來よ、其の如來が錢を持ち來つて餬餅を買つた、買つた手をパット放つたらば饅頭で有つたげな。餬餅と饅頭とは餡が外につくと中にある位の差で喫べてみれば味に大差はあるまい、同か別かは喫して初めて知るべきぢやが、悟道と明心と二あるが如くにして其の實餬餅と饅頭であるかも知れぬ、若し色を以つて見、聲を以つて聞かば終に會し難からん、他の觀音に一任せずと此は人々に返照しても見ねばならぬところである。

【著語】 ロ雙丸耳を塞ぐ。隻耳へ豆粒入れても聞きにくいに兩耳に丸を塞いだのではマルデ聞えまい、聲を聲とせぬ。ロ兩葉睛を遮る。兩葉で眼睛を遮れば色を色とせぬ。見不見に渉らぬ。ロ又風に別調の中に吹かる。四方八面の風次第、餬餅かとすれば饅頭、饅頭かとすれば餬餅、大分調子が異つたやうだが幾等變つても元の風鈴ぞ。

頌云。出門躍馬掃攙搶（閫外將軍令）萬國煙塵自肅清（風行草偃）十二處亡閑影響（併作一家）三千界放淨光明（更無兩樣）

【讀方】門を出で馬を躍らして攙搶を掃ふ。萬國の煙塵自ら肅清。十二處亡ず閑影響。三千界に淨光明を放つ。

【字義】◎攙搶とは彗星のこと、古來彗星の現はるゝときは國に殃ありと傳ふ、今は禍亂の意に採る。◎肅清とは太平のこと。◎十二處は六根六塵。◎閑影響はありのまゝのあり潰れの意で、心空境寂の狀態をいふ。

【要解】此の一首は四句通じて根塵を脫落して虛明自照なる樣子を頌出してある。雲門は馬を躍らして城門を出たのは亂世を兆す攙槍惡星があれば奇麗に掃ひ鎭める爲めで有つた、門は六根門で見色聞聲、馬は心王の意馬、攙搶は見聞覺知の塵緣と見てもよからう、然るに四方八面の諸國は狼煙旣に上らず風塵全く收りて自から清淨且つ靜寂、太平無事遂に馬は能無くして悄々と歸家穩坐した。六根六塵の十二處は聲は聲で脫落し、色は色で解脫して仕舞つて見色聞聲はしても閑影響ぢや影も響も見えはせぬ。∴三千大千世界が見聞の餬餅となり饅頭となつて大光明を放つに至つた、イヤ見聞一一が自己の光明と成つて三千界を照すのである。

【著語】口閫外は將軍の令。雲門計りで無い、人人に一つ將軍の權柄を握つて塞外を治めてみよ。口風行けば草偃す。妄想を妄想と究め來れば其の風に靡かぬ民草は有るまい。口併せて一家と作す。六根と六塵と別家で無い、根塵もと一家のものである。口更に兩樣無し。見聞と聲色とは全く一如にして兩樣に渉るべきものでは無いのぢや。

第八十三則　道吾看病

示衆云。通身做病。摩詰難痊。是草堪醫。文殊善用。爭如參取向上人得箇安樂處。

【讀方】衆に示して云く、通身を病と做す摩詰痊へ難し。是れ草醫するに堪へたり、文殊善く用ゆ爭でか向上の之に參取し、箇の安樂の處を得るに如かん。

【字義】◎摩詰は維摩詰。◎文殊と共に第四十八則に出づ。◎草醫とは「文殊菩薩一日善財童子に藥を採らしむ。童子大地を見るに藥ならざるものなし、童子旨を奉ず、文殊云く、藥なるものを持ち來れと、童子一莖草を拈じて文殊に獻ず、珠提起して曰く、此の藥亦よく人を殺し人を活かす」とある公案に據る。◎向上人とは第一義を打する底の人。◎安樂とは身心脫落のこと。

【要解】維摩の病は無病を病とする通身の病だから痊すことの出來ぬ病だ、然るを文殊は善財をして採らしめた盡大地是れ藥ならざる無しといふ一莖草を善く用ゐて此の病を痊したぞ、是れはまだ

病不病の配劑で眞箇佛祖の靈丹とは云はれ無い。夫れよりも病不病藥毒の調合に干からぬ向上の人に逢うて病の醫の、迷の悟のといふことの無い大安樂の處に至る方が餘つ程好いのである。爾うい ふ安樂の地は甚處にあるぞ、例に依つて本則に參じてみよ。

擧。潙山問道吾。甚麼處來。（來處要分明）吾云。看病來。（福田第一、卽不無）山云。有幾人病。（更要兩等）吾云。有病者不病者。（却是你有第二月）山云。不病者莫是智頭陀麼。（陷虎之機）吾云。病與不病總不干他事。速道速道。（却被葫蘆倒纏藤）山云。道得也沒交涉（禍不入愼家之門）

【讀方】擧す。潙山、道吾に問ふ、甚麼の處より來る。吾云く、看病し來る。山云く、幾人あつて病む。吾云く、病者と不病者とあり。山云く、不病者は是れ智頭陀なること莫しや。吾云く、病と不病と總に他の事に干らず速に道へ速かに道へ。山云く、道ひ得るも也沒交涉。

【字義】◎潙山、道吾の傳共に前に出づ。◎智頭陀とは道吾の諱を圓智といふからかく呼んだのである頭陀は杜多とも書く、譯して抖擻といふ、こゝでは僧に對する敬語と見ればよし。

【要解】潙山靈祐、道吾圓智に問ふ、甚麼の處より來る、是れはお定まりの脚下の詮索である。看病し來る。場處を云はずに看て來た者の話を持ち出した、是れが亦唯の看病では無い。佛家一大事の病人である。看て來たといふからには幾人許り病んでゐたか、ハイ病者と不病者と二人は慥かに見うけた、其の不病者といふのは圓智頭陀お前だらう。是れ病と不病と二つ物を認めたのかとの點檢である。スルト圓智は病と不病とは總て他人の干涉を蒙りませぬ、サー其許を一つ速く道つて看よ、サー速く道へ、大膽なる道ひ分である。道ひ得るも亦た沒交涉、他の事に干からぬから道ひ得るも沒交涉、道ひ得ざるも沒交涉、病も脫落、不病も脫落、是れ卽ち脫落の宗旨である。病は身、不病は心、或は事と理、用と體と云つたやうに二つに分けて見るのでは無いが假りに分けて見ても身心、事理、體用は本來二つあるもので無い、身心一如、體用不二、事理冥合であるから、病も脫落、不病も脫落の故に身心脫落、體用解脫、事理超絕である、一となつた時には他に干かることも交涉を開くことも出來ぬ、其の時には一の名も立せぬ。無病健全の名も忘れ果てた日常快活の機用、是れを大安樂の地といひ、無事太平の境界といふのである。

【著語】□來處分明ならんことを要す。去來に涉るか涉らぬか。其の脚下の詮議を分明にして置くがよいぞ。□福田第一は卽ち無きにあらず。看病は八福田の第一ぢや、然し病不病の二見に涉るまいぞ。□更に兩等を要す。病者と不病者とに分ければ其れから其れへ八萬四千にも分れやうぞ。□却つて是れ儞第二月ありや。幾人といふから病と不病と二つに分けた、賊馬に騎つて賊を逐ふの機略よ。□陷虎の機。智頭陀では無いかといふ一語が危險な語ぢや、陷穽に落ち込むまいぞ。□却つて葫蘆に倒に藤に纏はる。逆にやられたナ、語は前に出た。□禍は愼家

の門に入らず。　禍福の二念に渉らぬ潙山ぢやから他に纏牽せられぬ。

頌云。妙藥何曾過口（呑不入吐不出）神醫莫能捉手（無處摸捺）若存也渠本非無（唯言徧天下）至虛也渠本非有（不見纖毫）不滅而生（虛若谷神常不死）不亡而壽（道先象帝自長生）全超威音之前（舒不到頭）獨步劫空之後（卷不到尾）成平也天蓋地擎（把定乾坤）運轉也烏飛兎走（斡旋造化）

【讀方】　妙藥何ぞ曾て口を過さん、神醫も能く手を捉うること莫し。存するが若にして渠本無に非ず。至虛にして渠本有に非ず。滅せずして生じ亡びずして壽し。全く威音の前に超え、獨劫空の後に步す。成平や天蓋ひ地擎ぐ、運轉や烏飛び兎走る。

【字義】　◎何曾過口とは口に入れ様がないといふ意。◎渠とは本來面目のこと。◎威音之前とは三世三千佛の最初の佛を威音王佛といふ、だから天地未開以前といふに同じ。◎劫空之後とは世界は成住壞空を經て一度無くなる、其の最終の空劫の後といふのであるから、未來の未來際のこと。◎成平の成は平の意で、靜平安住の狀態をいふ。◎天蓋地擎とは山高く水長し、柳暗く花明なりといふに同じ、法爾如然の當相を示す語。◎烏飛兎走とは烏は金烏で太陽の異名。兎は玉兎で太陰の異名。日月運行といふ意、天地活動の意を示す語。

【要解】　初二句に絕待の妙體を擧し、次の二句に有無に墮せざるを頌し、次の二句に壞滅に渉らざるを明し、次の二句に無頭無尾の常恒一貫を敍べ、最後の二句に體用一致の妙旨を以て結ぶ。奈何なる妙藥でも病と不病とに干からぬ大人には一服も口に過させることは出來ぬ、隨つて耆婆扁鵲の神醫でも此の無病の大病人の手を握つて診察することは出來まい。病不病を超絕した大人の妙體ぢやから、渠本無に非ずして存するが若く、渠本有に非ずして至虛である。有無に墮せざるが故に又生にして不滅、壽にして亡せずで生滅存沒に干からぬ。縱し生滅はしても過去には威音王佛以前に生じ、未來には空劫の後に滅するといふから全超獨步で天地に先ち宇宙に後るゝの漢である。是の如く非有非無、不生不滅の沒量の大人なるが故に其の體は成平無分別にして天の高く葢ひ地の低く擎ぐるが如く、其の用は運轉無爲にして鳥の空を飛び兎の野を走るが如くである。本則で云へば病と不病と總に他の事に干からざる妙趣である、卽ち體を全うして用と爲し、用を攝して體に歸するところの宗旨を天童巧みに頌じ了つたものである。

【著語】　口呑不入、吐不出。　呑吐に干からぬを眞の妙藥とする、實は呑も吐も藥のはたらきよ。
摸索するに處無し、大醫王たる佛樣も匙を投げた。口唯言ふ天下に徧ねしと。　目にも一杯、耳にも一杯。口一纖毫を見ず。　兎の毛ほど姿は見えぬ、と云つて居らざる處も無い。口虛なることは谷神の常に死せざるが如し。　生れぬ先から死なぬ、喚べば應ずる山彥の聲、生が生だが死が死だか薩張り分らない。口道は象帝に先つて自から長生。　天地開闢以前から少しも年が老らぬ、マー虛

空と同年ぢやらう。□舒べて頭に到らず。□卷いて尾に到らず。頭を尋ねてゐると尾で、尾を尋ねると頭ぢや、無始無終で頭尾が分れぬ。□乾坤を把定す。天地を胸中に疊み込んだ。□造化を斡旋す。萬象は手の翻覆よ、朝が晩になり晩が朝になる、少しも滯らぬ。

第八十四則　倶胝一指

示衆云。一聞千悟一解千從。上士一決一切了。中下多聞多不信。剋的簡當處試拈出看。

【讀方】衆に示して云く、一聞千悟一解千從。上士は一決して一切了す。中下は多聞なれども多く信せず。剋的簡當の處試に拈出す看よ。

【字義】◎一聞千悟とは一を聞いて千を悟るといふこと。◎一解千從は一事を解得すれば千行之に從ふといふこと。◎上士とは上根の人。◎中下とは中根下根などの人といふこと。◎剋的簡當とは剋的は分明の義、簡當は簡約の義、卽ち簡單明瞭といふこと。

【要解】一聞千悟で一句一偈を聞いて千生萬生の緣を悟り、一解千從で一華開いて世界香ばしく天地皆同一の春である。一を離れて十も百も千も無いから一聞が卽ち千悟、一解が卽ち千從の道理を知らねばならぬ。證道歌の上根の士は一切を一決し了り、中下根の者は千言萬語を聞けども一任せぬとあるは此である。剋的に分明、簡當と事少く、當機覿面の道を會するが祖門下の分上であるから今試みに拈出する一則、諸君親しく參じて一句下に契當せよ。

擧。倶胝和尚凡有所問只竪一指。（費許多氣力作麼）

【讀方】擧す。倶胝和尚凡そ所問あれば只一指を竪つ。

【字義】◎倶胝和尚とは婺州金華山倶胝禪師のことで、天龍和尚の法嗣である。和尚は曾て天龍一指頭の禪にて參徹し、爾後凡そ僧の所問あれば必ず一指を竪てた。依つて古來これを倶胝一指頭の禪といつて叢林に喧傳せられて居る。

【要解】倶胝和尚は何人が何と問ひ來るも只一指を竪てた、佛と問ひ來るも一指、祖と問ひ來るも一指、佛法と問うても、祖師西來意と問うても一指を竪つるのみである。此の一指は天を拄へ地を撐ふ。寒のとき普天普地寒、熱のときは盡天盡地熱、一指に外れた宇宙も無い乾坤も無い。空劫那畔も朕兆以前も此の一指の外へは出でぬ、受用不盡の一指、諸人仔細に指頭を點檢して看よ。

【著語】□許多の氣力を費して什麼かせん。從晝至夜一指の竪て通しはチト御苦勞ぢや、其のやうに心配しなくては所問に答ふることが出來ぬかナ。萬松は一指にあらざる一指を竪てゝ見せた。

頌云。倶胝老子指頭禪（縮却驢蹄）三十年來用不殘（至今蹺手亂下）信有道人

方外術（這裏使不著）**了無俗物眼前看**（猶撥少在）**所得甚箇**（逼塞乾坤）**施設彌寬**
（不消一捏）**大千刹海飲毛端**（不留滑滴）**鱗龍無限落誰手**（天童猶在）**珍重任公**
把釣竿（不妨驚人手段）**師復竪起一指云看**（慚惶殺人）

【譯方】倶胝老子指頭の禪、三十年來用不殘。信に道人方外の術あり。了に俗物の眼前に看る無し所得甚だ箇に、施設彌々寛し、大千刹海毛端に飲む。鱗龍限無し誰が手に落つるや。珍重す任公釣竿を把ることを。師復た一指を竪起して云ふ、看よ。

【字義】◎老子とは敬稱。◎用不殘とは指頭の禪を一生涯自由に用ゐたといふこと。◎方外とは世間通途の方法以外の意。◎俗物とは道人の反對、不具眼の徒を指す。◎大千刹海云々の語は楞嚴經に「一毛端に徧く能く十方の國土を含受す寶王刹を現じ微塵裏に坐して大法輪を轉ず」とあるより出づ。◎鱗龍は魚類の親玉、大魚のこと。大人物に譬ふ。◎任公把釣竿とは莊子外物篇に「任公子大鈎巨緇を爲り五十の犗を以て餌となし會稽に蹲つて竿を東海に投じて旦々に釣ること期年にして魚を得ず已にして大魚之を食ふ」とあるより出づ。倶胝が竪指を以て學人を接得したのを任公の大鈎を以て大魚を得るに比したのである。

【要解】第一句に本則の全體を擧し、第二句に受用不盡。次の二句に倶胝の道術と眼力とを示し、次の二句に一指の能く所問に應ずるを敍べて次の一句に其の大用を明し、最後の二句に化益の廣大なることを頌す。末後に至つて天童自から奪つて諸人に示す。倶胝老和尙の佛に逢うても祖に逢うても一指を竪つる禪風は三十年來受用不盡にして用ゐ殘すといふことは無い。信に一指を竪つるの禪は道人格外の方術で凡人の模倣し難きところ。又了に迷悟是非等の俗物毫も目前に礙ぎる無し、雨奇晴好の境界である。其の所得は一指を竪つるのみだから此の上も無い簡單で、其の施設は凡そ所問あれば竪つるから計り知れぬほど寛い。普賢菩薩は白象の一毛端に大千刹海を飲んだといふが倶胝は一指頭に大千刹海を吞却したぞ。其の刹海に住む鱗龍は無數無際限であるが誰が手に落つるで有らうか、云う迄も無く倶胝の手裏に落つる、して見れば東海に釣を垂れた任公子にも比すべき倶胝殿は釣りが妙手で法界の鱗龍を一人も殘らず釣り盡したは奇特珍重ことぢや。是れは此れ倶胝和尙の一指よ、天童卽今諸人面前に向つて一公案を呈露せん、一指を竪起して云く看よ、サー倶胝の一指と是れ同か是れ別か、眼を開いて看よ、法界虛空迷悟凡聖を盡してゐるぞ。

【著語】□驢蹄を縮却せよ。倶胝の一指とて別物では無い。驢馬の蹄鐵を小さくしたのも受用不盡である。□今に至るまで曉手亂下。曉はつゝまだてる。如何にも受用不盡だ。今に至つても手では執捉、足では運奔、少しも間違はぬ。□這裏使著けず。使へぬ物は使はぬが矢張り受用だ。著けずは得ずに同じ。□猶ほ少きを嫌ふこと在り。俗物が足り無いと仰しやるのか、幾等もあるよ□乾坤に逼塞す。指一本で天を拄へ地を撐へてゐる。□一捏を消せず。消は用、坐臥經行が皆施

設だから廣大なものだ。□涓滴を留めず。呑盡して一滴も殘さぬ。□天童猶は在り。誰が手といふが先づ天童の手に落つるかナ。人々分上虧くところは有るまい。□人を驚かす手段を妨げず。任公子の釣にもびつくりしたに今又倶胝の手段にも驚いた。□人を慚惶殺す。傍らに人無きが如く馬鹿にし慚かしめた、誰が馬鹿にされた能く胸に手を在いて見るがよい。殺は物をしとげること。

第八十五則　國師塔様

示衆云。有打破虛空底、鉆鎚擘開華嶽底手段。始到元無縫罅處。不見瑕痕處。且誰是恁麼人。

【讀方】衆に示して云く、虛空を打破する底の鉆鎚、華嶽を擘開する底の手段あつて始めて元縫罅なき處瑕痕を見ざる處に到る。且く誰か是れ恁麼の人ぞ。

【字義】◎打破虛空云々とは雲蓋本洞山奉和尚の果掉を掇却する話を拈じて云く、洞山虛空を打破する底の鉆鎚ありと雖も要且つ補綴底の針線なし」とあるから引く。◎鉆鎚とは鉗鎚に等し鎚はつち、鉗は鎚を下す臺、物を打ち調へる具、師家の接化振に喩ふ。◎擘開華嶽とは佛眼の遠、臨濟大悟を頌して云く「華嶽連天の色を擘開し黃河到海の聲を放出す」といふに出づ。◎華嶽は五嶽の一で河東の首陽山に對する山の名。◎縫罅は縫目、破れ目のこと。

【要解】衲僧家參學の用心は虛空を打破して空裏を守らざるの鉆鎚と、華嶽を劈開して色相に礙へられざる手段とが肝要である。爰の處さへ手に入れば始めて迷悟の縫罅も無く凡聖の瑕痕も見えざる誠に道ひ分の無いスッパリした這箇の田地に至るで有らう、一點の塵に汚れぬ八面玲瓏の處に學者を導いてくれるところの人が何處ぞに在るで有らうか、誰が其の人であらう。恁麼人は先づ本則に就いて參ずるが、最も捷徑である。

擧。肅宗帝問忠國師。百年後所須何物。（卽今也不少）國師云。與老僧作箇無縫塔。（向荊棘處下手）帝曰。請師塔樣。（描不成畫不就）國師良久云。會麼。（這裏不得會 尼セ不會 莫別求）帝曰。不會。（却較些子）國師云。吾有付法弟子耽源。却諳此事。（祖禰不了殃及兒孫）後帝詔耽源。問此意如何。（作家君主不忘遺囑）源云。相之南譚之北。（天高地厚日左月右）中有黃金充一國。（亙塞虛空）無影樹下合同舡。（密密金刀剪不開）瑠璃殿上無智識。（寂寂簾垂不露顏）

【讀方】擧す、肅宗帝忠國師に問ふ百年の後所須何物ぞ、國師云く、老僧が爲に箇の無縫塔を作れ帝曰く、請ふ師塔樣。國師良久して云く、會すや。帝曰く、不會。國師云く、吾に付法の弟子耽源

といふものあり却て此事を諳ず。後帝耽源に詔して此意如何と問ふ。源云く、相の南譚の北、中に黃金あり一國に充つ。無影樹下の合同舡、瑠璃殿上に知識なし。

【字義】◎肅宗帝は唐高祖より七代の後である、此話は忠國師が涅槃に臨んで造塔の事を依囑したのである。しかし肅宗は忠國師に先つこと十二年で薨じたから玆で肅宗とあるのは次の代宗の誤であらうと思ふ。◎忠國師は南陽は慧忠國師のことで、六祖大鑑慧能禪師の傍出法嗣である、傳燈に「南陽府白崖黨子谷にありて山を下らざる事四十年、肅宗其道譽を聞いて詔りして帝城に迎へ、待つに師の禮を以てす、初め千福寺西禪院に居らしむ、代宗立つに及んで長安の光宅寺に移り說法十六年、大曆十年十二月遷化、大證禪師と諡す」とある。◎無縫塔とは卵塔ともいつて稜のない卵形の墓石である。◎百年後とは死後のこと、◎所須とは御望みのものといふこと。◎塔樣とは塔の形といふ意。◎耽源は吉州耽源山の應眞禪師のこと、忠國師の法嗣であることはいふ迄も無い。◎相之南譚之北とは一本相を湘、譚を潭に作る、隨つてこれに古來異說がある。一說は相は形相、譚は談論で、色聲の二つをいふと解して居る。又一說には相は湘、譚は潭でいづれも水邊の地を指したものと見る、一般には多く後說を用ゆるやうであるが本文に相南譚北とあるから今は前說に依つて解することにする。◎無影樹とは涅槃經に「加葉菩薩佛に白して言さく世尊譬へば暗中に樹あつて影無きか如し云々」とあるに據る。◎合同舡とは大般若經に、「諸〻の菩薩は眞の善知識なり我が與に伴となり同じく一船に乘じて學時學處及所學の法異ることなし云々」とあるを引く。◎瑠璃殿とは魏の大武の時に大月氏國から來た商人が瑠璃を鑄て殿堂を建つ、爾し來は西國の瑠璃が餘り珍重せられなかつたと事文續集に見えて居るがこれは蓋し硝子のことであらう。今の瑠璃殿はそんなつまらぬものではない。

【要解】肅宗皇帝が南陽慧忠國師に滅後の希望を訊ねしめた、老僧が死んだら一つの無縫塔が建てて貰ひ度い、然らば奈何な形格の塔であるか、國師暫時知らん顏をしてゐて會りましたか、イヤ朕は不會、左樣ですか吾の付法弟子に耽源といふ者が有ります、此奴能く塔樣を心得て居りますで其の者に御諮詢を願ひ度い。忠國師は其れで遷化された、後に至つて皇帝が耽源に如何なる意旨であるぞと勅問になつた、時に耽源は詳細に塔の形狀眞相を奏對した、其の後に曰く、色相形容は南、言句音聲の北、南北で四方をきかして、色相も音聲も離れた、凡聖もはづれた不生不滅の端的の中に至つては見る底聞く底すべて黃金ならざるは無い、無相無影の樹下の合同舡、衆生も佛も猫も杓子も同身共命の舡だ、盡大地乘りはづしの無い宇宙大の船ぢや、瑠璃殿上には佛も知らず祖も識らず、其のくせ佛祖と面撞き合してゐながら達磨も不識、二祖も不可得よ。先づザット此の樣な圖案設計の無縫塔である。虛空一枚を量とした大塔婆で頂きは天を拔き底は地を穿つ、縫罅無き法界周偏の塔なるが故に無縫塔といふのぢや、死後に立つる多寶塔では無い、現に兀兀として坐定する底是れ偏界不藏の無縫塔である。行住坐臥、言語動靜法界塔婆の外に出ることが出來ぬ。人々眞に大供養を修せんとせば此の無縫塔を建立するがよい。

【著語】□卽今也た少からず。百年後は置いて問はず、現今何ぞ不足があるかナ。□甚麼に向つて手を下さんや。手を下したら縲縛かできる。□描不成、畫不就。下繪もかけぬ、繪圖も引けぬ。何故なれば定形が無いからサ。□這裏會することを得ず、會せざれども別に求むること莫れ。會不會の外に向つて求めまいぞ。□却つて些子に較れり。錯つて認むるよりは其の方が却つてよからう。□祖禰了せざれば殃兒孫に及ぶ。親爺が片附けて死ねばよいのに兒孫にまで丌んな迷惑がかけるのは好く無いよ。□作家の君主、遺囑を忘れず。佛の付屬を忘れずに天子は佛法を保護すべきだ、肅宗も能く忘れなかつた。□天は高く地は厚く、日は左り月は右。天は東南と高く地は西北と低し、三世古今不變易ぢや。□虛空に逼塞す。黃金の一枚で隙間が無い。□密密として金刀剪れども開けず。乘合の彼此各親密で水をさすことも仲を割くことも出來ぬ。□寂々として簾垂れて顏を露はさず。眞空の王は有無に涉らず、九重の奧深く聖君在しますらし。

頌云。孤迥迥（不與萬法爲侶）　圓陀陀（無欠無餘）　眼力盡處高巍巍（斫額望不及）　月落潭空夜色重（靈大方界如一縱疊）　雲收山瘦秋容多（體露金風）　八卦位正（天地合其德）　五行氣和（日月合其明）　身先在裏見來麼（到卽不點）　南陽父子却知有（且信一半）　西竺佛祖無如奈何（千聖從來立下風）

【讀方】孤迥迥、圓陀陀。眼力盡る處高して峨峨たり。月落ち潭空うして夜色重し。雲收り山瘦て秋容多し。八卦位正しく、五行氣和す。身先づ裏に在り見來るや。南陽父子却て有ることを知るに似たり。西竺の佛祖如奈何ともする無し。

【字義】◎孤迥迥とは孤は比倫なく飛び離れて居ること、迥は寥遠の貌。孤迥迥は脫落の樣子。◎陀陀はまん丸のこと、圓陀陀は無欠無餘の意。◎峨峨とは山の高峻なる貌。◎潭空とは潭が眞暗になつて黑白も分かぬをいふ。◎八卦は乾兌離震巽坎艮坤。◎五行は木火土金水。◎西竺とは天竺のこと。

【要解】初めの二句六字、無縫塔の緣絕にして圓滿なる貌を示し、能所二見を絕したる露現なることを次の一句に明す。次の二句は塔樣。次の二句は方位の正處を明して見麼の一句に全句を擧似し。最後の二句に南陽父子を讚歎した。孤迥迥と獨立して大小高低の衆緣を離れ、圓陀陀と圓滿美麗で無欠無餘の無縫塔ぞ、故に智慧の眼でも禪定の力でゝも、見究めることも量り盡すことも出來ぬほどの高大さである。月落ち夜深うして形影ともに藏れて佛眼も覻不見、雲收り山瘦せて皮膚脫落す。光境倶に忘ずる處夜色重く、唯眞實のみあるところ秋容多しである、不染汚の塔樣ぢや。乾兌離震巽坎艮坤の八卦にも木火土金水の五行にも位正しく氣和して八面玲瓏十方通暢の塔を建立した、啻に相南譚北のみならんや、中に黃金あつて一國に充つといふ敷地である。此の敷地に建てられた孤迥々圓陀々の塔の這裏に人々が行住坐臥して居るのだが諸人見來るや、さても〳〵南陽と耽源と

の父子は無縫塔の模樣も建立地も何も彼も合點した樣に言やるが却つて知つて御座るのかいナ、西天の佛祖と雖も說明も出來ねば手も著けられなかつでは無いか、瑠璃殿上知識無しと耽源和尚も言つたで無いか、若し能見所見に渉らば無縫塔に縫罅が生じ大崩壞を免がれぬと反對の側から無縫塔を云ひながら南陽父子を讃めちぎつた。

【著語】口萬法と侶たらず。諸法の外に卓然として獨拔す。口無欠無餘。佛に在つては餘ること無く衆生に在つて缺くること無いぞ。口斫額して望めども及ばず。大權樣のやうに額に手をあてゝ飛行機でも見る氣で天ばかり仰いで居ても見えぬ、脚下是れ黃金土ぢや。口盡大方界一鋌の墨の如し。盡界が磨墨を流したやうに眞暗だ、無差別平等の當處。口體露金風。脫體現成で藏すところが無い、差別の盡界よ。口天地と其の德を合す。天地と合同して一の德に歸した。口日月と其の明を合す。明暗雙々、時と與に轉じて少しも昧まさぬ。口到るときは即ち點せず。ソツクリ其の儘其許に來てをる、今更ら點をわけるもわけぬも無い。イヤ到不到の別も有るまい。口且らく一半を信ず。十分は許せぬがマー其の邊だらうテ。口千聖從來下風に立つ。佛祖從來無縫塔中の出息入息だ、人々若し仰いで見んと要せば即ち下風に立つ、無縫塔と別物に成つて仕舞ふからのことよ。

第八十六則　臨濟大悟

示衆云。銅頭鐵額天眼龍睛雕觜魚顋熊心豹膽。金剛劒下是計不納。一籌不獲爲甚麼如此。

【譯方】衆に示して云く、銅頭鐵額天眼龍睛、雕觜魚顋熊心豹膽なるも、金剛劒下是れ計ること納れず、一籌すること獲ず、甚麼と爲てか此の如くなる。

【字義】◎銅頭鐵額云々は瑯琊の覺禪師の語である會元に「僧問ふ如何なるか是れ佛、師云く銅頭鐵額、僧云く意旨如何、師云く鳥觜魚角」とある。雕は熊鷹のこと、熊心は熊の心臟をいふ。◎計不納とは計較卜度することを納さぬといふ意。◎一籌不獲は寸毫も籌量することが出來ぬをいふ意。

【要解】銅の頭で鐵の額、天人の眼が有つて毒龍の睛、雕の觜があり鮫魚の顋、熊の心に虎の膽、是れは世間並の人でない、人間にも畜類にも敵するものは有るまい、鬼に金棒よりもモット大丈夫のやうであるが其れでも吾が祖門下の金剛王寶劍に對つては何の謀も計略も納るゝに餘地がない、お胴かお面をスポリ獲うとしても一本も打ち込めぬ、臨濟の武者ぶりと黃檗の金剛王とに比したものらしい。どうして此の如き軒軽があるか、未審なことぢや。

擧。臨濟問黃檗如何是佛法的的大意（殺人可恕　情理難容）。檗便打（棒棒見血）。如

是三度乃辭檗見大愚（便重不便輕）　愚問甚麼處來（險照頓著）　濟云。黃檗來（杖瘡猶在）　愚云。黃檗有何言句（這裏好報讐）　濟云。某甲三問佛法的的大意。三度喫棒不知有過無過（更少六十棒）　愚云。黃檗恁麼老婆爲爾得徹困。更來問有過無過（再犯不容）　濟於言下大悟（始知痛痒）

【諭方】擧す、臨濟黃檗に問ふ、如何なるか是佛法的的の大意。檗便ち打つ。是の如きこと三度乃ち檗を辭して大愚に見ゆ。愚問ふ、甚麼の處より來る。濟云く、黃檗より來る。愚云く、黃檗何の言句がありし。濟云く某甲三び佛法的的の大意を問ひ三度棒を喫す、知らず過ありや過無しや。愚云く、黃檗恁麼に老婆爾が爲に徹困なるを得たり、更に來つて有過無過を問ふ。濟言下に大悟す。

【字義】◎臨濟の傳は第十三則に出づ。◎大愚は洪州高安大愚禪師で、盧山歸崇寺智常禪師の法嗣である、傳記詳かでない。◎的的は的切的確等と熟字して確乎と適合して居るといふ意。◎老婆とは老婆親切とて親愛懇切なること。◎喫棒とは棒を喫つたといふ意、なぐられたといふこと。◎徹困は徹悃とも書く、心の奥底からといふ意。

【要解】臨濟が首座に啓發せられて如何なるか是れ佛法的的の大意を黃檗に三度問うて三度ともに痛く棒頭を喫つた、そこで黃檗山を辭して大愚の會に走つた。甚麼處から來た、黃檗から來た。黃檗は何んな説法をした、某甲が三度佛法的的の大意を問うて三度打たれました、何ぞ過あつてのことか、それとも寃罪の棒か某甲には知りません。黃檗が其れほど爾の爲めにくどくどしい老婆心を盡して居るのに今大愚の處まで來て有過無過を問ふとは、貴樣も餘つ程恩知らずの阿呆奴ぢや。臨濟此の一言の下に大悟した。佛法的的の大意三たび問うて三たび棒を喫す。黃檗の其の一棒は血が滴つてゐる、徹骨徹髓の心切ぢや。佛法的々の血が滴つてゐると氣がつけば有過無過の論はいらぬ然れども時節未だ到らずして棒頭の血滴を知らなかつたが大愚の眞語實語に徹悃して始めて棒の痛みを知つたは流石に臨濟である。

【著語】□殺人は恕すべし、情理は容れ難し。世間では殺人の大罪でも猶ほ恕することがあるかも知れぬが、佛法では寸分人情理屈は容さぬぞ。□棒棒血を見る。六十棒の一一から血がたれてゐるに氣がつかぬか。□重に便して輕に便せず。迂遠なる大愚に出掛けて直示の黃檗を辭するとは怪しからぬ、佛法を遠くに求める漢ぢやナ。□險、照顧せよ著。危險な問だ、自分の脚下氣をつけろ。□杖瘡猶は在り。打たれた瘡をみたら知れてゐる、黃檗から來たなど云ふには及ばぬ。□這裏好し讐を報ずるに。三度打たれた讐復へしに大愚の其の問所に三頓を喫はしてやれば好かつたのに、惜しいところを遁がしたワイ。□更に六十棒を少く。三度の喫棒では不足だ。萬松なら息の根のとまるほど打つてやるのに。□再犯容さず。大愚は亦重荷に小附、有過無過の上へ又有過無過を載せた、容して置けぬ奴ぢや。□始めて痛痒を知る。今になつて傷所が痛み出した。

ソイツア遲い、でもマー痛痒が知れて結構で有つた。

頌云。九包之雛（羽翼既成）千里之駒（神駿亦備）眞風度籥（一竅虚通）靈機發樞（一撥便轉）劈面來時飛電急（不容擬議）迷雲破處大陽孤（舊時光彩）捋虎鬚（萬松門下誰敢）見也無（急著眼）箇是雄雄大丈夫（爭奈老婆心切）

【譯方】九包の雛、千里の駒。眞風籥を度し、靈機樞を發す。劈面に來る時飛傳急なり。迷雲破るゝ處大陽孤なり。虎鬚を捋づ、見るや無しや。箇は是雄々たる大丈夫。

【字義】◎九包之雛とは瑞應圖に「鳳九包あり、歸命、心合度、耳聽達、舌曲申、彩光色、冠矩州、鋭鈎音、激揚、腹戸これなり」とある、即ち九包を具へた鳳雛のこと、靈利の衲僧をいふ。◎千里之駒とは千里を走る馬、俊發の機に譬ふ。◎度籥とは槖籥は冶鑄の用ゆる風を送る器で、籥は其中の管であるともあり、又籥は三孔の竹管の樂器ともいふ、いづれにしても風の通ずる管である、老子道徳經にある語。◎劈面は唐突の意。◎大陽孤とは日輪が孤り輝くの意。般若の智光に譬ふ。◎捋虎鬚とは臨濟が大愚の下に大悟して、再び黄檗の下に歸り、師匠の黄檗に一掌を與へた、其の時に「這の風顚漢這裏に來つて虎鬚を捋づ」と黄檗がいふた、其の語を採つたのである。

【要解】初二句八字は雛駒に比して臨濟の神俊を贊し、以下四句は師資投合を頌す、次の二句六字は臨濟の一行狀を擧げて座下を奬勵し、最後の一句に重ねて讚歎す。鳥にすれば九德を包ぬる鳳凰の雛、馬にすれば一日千里を走る俊足の駒である。黄檗眞實の宗風に共鳴して三度的々の大意を絶唱し、性來有する臨濟の靈機は大愚の徹悃下に大悟の樞を發轉した。劈面に三頓の棒を打ち下す棒頭の迅速なること電光の飛ぶよりも急にして目にもとまらぬ、恁麼に老婆なる言下に豁然として迷雲破れ大智慧光明一天に朗らかなる、師資證契即通の當處は、餘人所不見唯獨自明了である。臨濟還つて虎鬚を捋で、黄檗重ねて虎尾を收む、其の迅機英靈諸人見たかどうぢや。是れ箇の雄々たる眞の大丈夫、宗門幾人か臨濟あらんや。佛法元來多子無し、人々も亦臨濟に劣らぬ男ぶり、丈夫の志氣何處へやつたナ。

【著語】口羽翼既に成る。雛どころで無い、冲天の志氣あり。口神俊亦備ふ。人々千里の俊馬發憤さへすれば誰でも道具は揃つてゐるのだ。口一竅虚通す。心空の一竅に眞風が吹き込むと立派な音が出る。口一撥便ち轉ず。其こが靈機の靈機たるところよ。口擬議を容れず。分別してゐる隙が無い、彼うの此うのといふに及ばぬのサ。口舊時の光彩。雲霽れて現るゝ大陽の光は雲破れぬ以前の光明と毫も異りは無い。口萬松門下誰か敢へてせん。萬松門下に限らぬ、天下の衲僧、不惜身命底の漢、虎鬚を捋でて看よ。口急に眼を著けよ。明日からの來月からのと云はずに卽今直下に眼を開いて看るがよい。口老婆心切を爭奈せん。黄檗も大愚も天童も皆心切ぢや、然ういふ萬松自身も亦老婆心切ぢや。諸人行住坐臥が皆心切で無くてはならぬぞよ。

第八十七則　疎山有無

示衆云。門欲闔一撥便開。舡欲沉一篙便轉。車箱入谷無歸路。箭筈通天有一門。且道向甚麼處去。

【讀方】　衆に示して云く、門闔さんと欲すれば一撥して便ち開く。舡沈まんと欲すれば一篙して便ち轉ず。車箱谷に入つて歸路なし、箭筈天に通じて一門あり。且く道へ甚麼の處に向て去るや。

【字義】　◎闔は閉ぢること。◎撥は推すこと。◎篙は竿で動かすことをいふ。◎車箱入谷云云とは杜甫望嶽の詩の文句で、註に「車箱は谷の名、深くして測るべからず、箭筈は峰の名、高して及ぶべからず、上に穴あり纔に天を見る云々」といへり。◎一門とは一穴といふに同じ。

【要解】　吾が祖門下に於ける參學の樣子を云へば、學人が門戸を闔ぢて開かざらんと欲するも師家の一言以て出入自在の路を通ずる、又學人が舡を沈めやうとするを師家は一篙突つ放つて自由の轉處を得させるのであるが、車箱の谷に入れば深くして歸る路が無くなり、箭筈の峰に上れば天に通ずる一門有るだけで人界に下る緣が絕えるといふ。其の時には何と轉身し出路を開いたもので有らう。サー甚麼の處に去るや、人々一線路を通じてみよ。

舉。疎山到溈山便問。承師有言。有句無句如藤倚樹（掛人唇齒）忽然樹倒藤枯。句歸何處（承言者喪滯句者迷）溈山呵呵大笑（爲力不到處河聲流向西）疎山云。某甲四千里賣布單來。和尚何得相弄（草鞋錢還來未）溈喚侍者取錢還這上座（不義之財於我如浮雲）遂囑云。向後有獨眼龍爲子點破去在（更有四千里）後到明昭舉前話（一客煩兩主）昭云。溈山可謂頭正尾正。只是不遇知音（自是蒲繩短非干古井深）疎復問樹倒藤枯句歸何處（又憑麼來也）昭云。更使溈山笑轉新（別人拳頭畫地）疎於言下有省（還了布單債）乃云。溈山元來笑裏有刀（始覺破皮見血）

【讀方】　舉す。疎山溈山に到つて便ち問ふ、承る師言へることあり、有句無句は藤の樹に倚るが如しと、忽然として樹倒るれば藤枯る、句何の處に歸するや。溈山呵呵大笑す。疎山云く、某甲四千里に布單を賣り來る、和尚何ぞ相弄することを得たる。溈、侍者を喚んで錢を取つて這の上座に還せと遂に囑して云く、向後獨眼龍あつて子が爲に點破し去ることあらん。後に明昭に到りて前話を舉す。

昭云く、潙山をば頭正しく尾正しと謂つべし、只是れ知音に遇はず。踈復問ふ、樹倒るれば藤枯る、句は何の處に歸するや。昭云く、更に潙山をして笑轉た新ならしむ。踈言下に於て省あり。乃ち云く、潙山元來笑裏に刀あり。

【字義】◎踈山は撫州踈山光仁禪師で洞山悟本大師の法嗣である傳に「身短陋にして精辯衆に冠たり、洞山門下詔鍛の機あり」と見ゆ。◎潙山とは潙山靈祐禪師ではない、潙山の懶安のことで長慶大安ともいはるゝ人である。◎藤倚樹は楞伽經に「樹藤句非樹藤句、種々句非種々句あり云々」とあるより出づ。◎某甲四千里云々は某甲は此の句を問はんが爲に布單を賣りつゝ四千里を遠しとせず來たのに和尚何ぞ愚弄するの甚しきやと詰めかけたのである。◎布單とは單物のこと。◎弄はもてあそぶ、おもちやにすると云ふこと。◎囑とは將來の事に關して告げること。◎獨眼龍とは傳燈に「婺州明昭の德謙禪師は羅山の印記を受く、一隅に滯らず玄旨を擧揚す。人皆其敏捷を畏れて敢へて鋒に當る鮮し、左目を失うを以て獨眼龍といふ」とある。◎點破とは點檢看破の意、印可すること。◎明昭は前の獨眼龍。◎頭正尾正とは始めから終まで正確といふ意。宗風の正しきこと。◎知音とは心底を知り合つた同志。◎笑裏有刀とは呵呵大笑して居る内に凜として犯すことの出來ぬ峻峭ところがあるといふこと。

【要解】踈山光仁が潙山の大安禪師に問うた、和尚は嘗て有句無句は藤の樹に倚るが如しと言はれたと承つて居るが、忽然して樹が倒れ藤が枯れた時には、其の句は何處に歸するで有りませうか、潙山時に壁を塗つて居たが泥盤を放げ出して呵呵大笑したといふことぢや。如藤倚樹といふことは藤が有れば樹があり、樹があれば藤がある如く、有があれば無があり、無があれば有があるので、有無は獨り立ちをせぬものである。故に有に倚るの無なれば無に無の自性が無い、無に倚るの有なれば有の自性も無い、有無の二つは有のまゝ無のまゝ本際脫落である、是れを古佛は葫蘆藤種纏葫蘆と云つてをる、此の宗旨を知るのが本則の要處である、踈山は未だ此の地に到らぬから句の歸處を尋ねて歩く、潙山は其の人だから呵呵大笑した。此に於いて某甲四千里も遠方から布單を賣つて路費に充て遙々來たものを、戯弄らるゝとは怪しからぬ、潙山は侍者を喚んで這の上座に草鞋錢を還へしてやつて吳れ、イヤサテ儞は向後獨眼龍の和尚が子を點破してくれやうぞと囑された。果して後に明昭德謙といふ一眼の老僧の許に到つて前話をして、明昭の云ふには潙山は頭尾正しく毫も二邊に渉つて居ないが、只知音に遇はぬのは惜しいことであつたと、踈山此の語に耳を假さず不審晴れやらぬ樹倒藤枯句歸何處を問うた、これは明昭も可笑て叶はぬが潙山が聞いたら又一層大笑することで有ちうよ、踈山此の言下に始めて省たり、潙山の大笑は只の戯弄で無かつた、アノ笑裏には一切の疑念、有無の分別、藤も樹も截斷するの玉及が藏められて有つたのぢやワイとスツパリ懺悔した。

【著語】口人の唇歯に挂く。有無の唇歯を齶上に挂けて看よ。口言を承る者は喪し、句に滯る者は迷ふ。洞山守初禪師の上堂の語、有無についてまわると元も利も喪つて身代限り、言句に滯ると

鼻つくぞ。□禹力到らざるの處、河聲流れて西に向ふ。第六十二則に出た。疎山分別の流れは潙山大笑の禹力でも決することが出來ぬ。□草鞋錢還し來るや未だしや。途中に草鞋を買つても代は拂はずに來たらう、ウンと債務を負うてゐるらしい。□不義の財は我に於て浮べる雲の如し。潙山も孔子の口調で云へば不義の富貴は貪らぬ、財寶でも禿頭でも欲しくば遣らう。□更に四千里あり。一歩ふみ出せばモー四千里ぢや。□一客兩主を煩はす。一客が二軒を食ひ倒す、一方でおさまりがつかぬは氣の毒なものよ。□自ら是れ蒲繩短し、古井の深に干るに非ず。蒲繩が短いのぢや、井が深淺を彼是いふことは無い。□又恁麽にし來る。又亓んなことを云つて來た、佛の顏も三度だよ。□別人の拳頭を以て地に畫く。明昭は潙山の笑を地に畫いて見せた、其の實は自分も可笑て堪らぬのだらう。□布單の債を還し了る。浪費した借金を皆還して仕舞つた。□始めて覺ふ皮を破つて血あることを。疎山は始めて皮下に血あることを知つた。

頌云。藤枯樹倒問潙山（行到水窮處 坐看雲起時）大笑呵呵豈等閑（險作相弄會）笑裏有刀窺得破（將謂別有）言思無路絕機關。（四千里地賺我來）

【識方】藤枯れ樹倒れて潙山に問ふ。大笑呵々豈等閑ならんや。笑裏刀あり窺得破す、言思道なうして機關を絕す。

【字義】◎等閑はなをざり、苟且なること。◎窺得破とは見破るといふこと。◎言思無路絕機關とは口で言ふことも、心で思ふことも合はねば又方便を以つても指し示すことは出來ぬといふ意。

【要解】前二句に本則の體面、第三句に笑裏有刀、第四句に頭正尾正の生涯を頌す。藤枯れ樹倒るの一句を究めん爲めに疎山は四千里の遠方から遙々來て潙山に問うた、潙山は呵々大笑した其の大笑は嘲笑でも戲弄でも無い、實に容易ならざる笑聲であつた。疎山最後に明昭下に笑裏に刀ありと大悟して有句無句如藤倚樹の根源をスッカリ截斷し看破し了つた、最早此の時には言句分別の路絕えて從來の機關は跡方も無く消え失せて仕舞つた。

【著語】□行いては到る水の窮る處、坐しては看る雲の起る時。三體詩の下にある王維の詩。言語思惟を窮るところは唯雲烟のあるのみ、餘物は無い。□險ど相闘する會を作さんと。戲弄にした笑だと計り思つて居たに、其んな大した笑かネ。□將に謂へり別に有りや。藤枯れ樹倒れて別に有りと思ふたら量見違ひぞ。□四千里の地、我を賺し來る。有無の空華に賺されて四千里の道程を追つかけ歩いた、但し今日から見れば無駄骨折りでも無かつた。

第八十八則　楞嚴不見

示衆云。有見有不見。日午點燈。無見無不見。夜半潑墨。若信見聞如幻翳。方知聲色若空華。且道教中還有衲僧之說話麽。

【讀方】衆に示して云く、見あり不有あり日午燈を點ず。見無く不見無し夜半墨を潑ぐ。若し見聞は幻瞖の如くなるを信ぜば、方に聲色空華の如くなることを知らん。且らく道へ敎中還つて衲僧の說話ありや。

【字義】◎日午點燈、夜半潑墨の語は類聚宰臣門に「東林の總云く、日午に金燈を點じ夜半に墨汁を潑ぐ」とあるに出づ。明の時は徹底明、暗の時は徹底暗の宗意を示す語。◎幻瞖とは瞖は眼病のこと、瞖眼のために見ゆる事象これを瞖といふ。今の幻瞖は幻翳を正しとす。眼病のために見ゆる、種々の花彩のやうなまぼろしのこと。非有似有、假有實無の譬。◎空華とは幻翳のこと。◎衲僧說話とは禪僧の採つて以て參究するに堪ゆる程の話といふ意。

【要解】眼あれば見、眼無ければ見ずといふは是れ偏見、日中の挑燈で何の用にも立たぬ。眼あるも見る無く眼無けれども見ざる無しといふは是れ正見、暗中に墨を潑すが如く何の分別もつかぬ。若し見聞は妄想分別の幻翳なることを信ずれば聲色の空華第二月なることを知るに至るで有らう。御經文の中に我が衲僧家の說話として耳を傾くるに足る說示が有るか怎うぢや、有るなら是非承り度いものである。請ふ本則に擧するところの楞嚴經を心讀せよ。

擧。楞嚴經云。吾不見時何不見吾不見之處（是何心倖）。若見不見（ト云ハ）自然非彼不見之相（自知スルコトハ即得タリ）。若不見吾不見之地。自然非物。云何非

汝。（心忙手急　推出攛入）

【讀方】擧す、楞嚴經に吾が不見の時何ぞ吾が不見の處を見ざる、若し不見を見るといふは自然に彼の不見の相に非ず。若し吾が不見の地を見ずんば自然に物に非ず。云何ぞ汝に非ざらん。

【字義】◎楞嚴經のことは第六十七則に出づ。

【要解】本則は見不見を超越した上の見不見を示したので有つて、見は見を超越し、不見は不見を超越して、而も見は見と現はれ、不見は不見と現はるゝ向上の一路を示したのである。「吾が不見の時」とは見不見を透脫した佛の不見であつて「何ぞ吾が不見の處を見ざる」だから不見の上の見である。若し不見を見るといふことになれば、其れは自然に吾が不見の相ではない、何故なれば不見を見といふならば見は無用だ。「若し吾が不見の地を見ず」といふことになれば、「不見を不見」するので有るから不見の透脫で能所は立たない。然うすれば自然に對手になるべき物とてもない筈である。「云何んぞ汝に非ざらん」で吾と汝と一枚に成つて仕舞つた、能所が絕えてみれば見も不見も脫落で吾の一枚と云つても好し、汝の一枚と云つても差し支へ無い。サー此の汝とは誰ぞ、吾とは誰ぞと參究するのが此の公案の實歸である。

【著語】口是れ何の心倖ぞ。不見の處を見ぬが當然だ。何ぞ見ざるなどと云ふには及ぶまい。口自知することは卽ち得たり。自知する底人々に味まさぬ端的である。口心忙しく手急にして推出

し擁入す。何だか世尊は推し出したり擁入れたり、手も急がしく心も忙しさうにして御座る、阿難の光明は阿難に放たしめて、そうゴテ〳〵世話を燒かぬがよからう。人々自己の光明を葢天葢地せよ。

頌云。滄海瀝乾（依然白浪滔天）大虛充滿（不見毫氂絲忽）衲僧鼻孔長（千里寒梅度暗香）古佛舌頭短（一字眞言道不滿）珠絲度九曲（枉勞心力）玉機纔一轉（文彩縱橫意自殊）直下相逢誰識渠（是甚麼面孔）始信斯人不合伴（貶入孤獨地獄）

【讀方】滄海を瀝乾し、大虛に充滿す。衲僧鼻孔長く、古佛舌頭短し。珠絲九曲を度し、玉機纔かに一轉す。直下相逢うて誰か渠を識らん、始めて信ず、斯人伴ふべからざることを。

【字義】◎瀝乾の瀝は滴、一滴も殘さず乾して終ふこと。◎珠絲九曲とは孔子が陳蔡の間に苦められ九曲の珠に絲を透せといふ難題を出された時に、絲の先に蜜を著け蟻に通させたといふ故事を用ゐたもの。◎玉機とは美しい織物を作る機をいふ。梭が一轉する毎に漸次美しい模樣が現れる樣子。◎斯人不合伴とは、「北院通禪師洞山に參ず、山上堂して云く主人公を坐斷して第二見に落ちずと。師衆を出でて云く知るべし一人ありて伴ふ合らざることを。山云く老兄作麼生。師云く某甲が舌頭の爛るを待て和尙に向ていはん」とあるより來る。

【要解】初め二句に見不見の透脫を明し、次の四句に回互して見不見の情謂を離れたる神通と妙用とを叙べ、結末二句に妙契不可思議を讃歎した。滄海に一滴の水を餘さず瀝乾いたと云へば不見が見となつた。大虛空に爪も立たぬほど充滿したと云へば見が不見となつた。此の二句互換して云へば見が見で無く不見が不見で無いといふことになる。上の如く見不見を透脫した衲僧は鼻孔長して他の鼻を借りて呼吸はせぬけれども、三世の諸佛も舌頭短して言舌を以て此の境界を言ひ果せぬ鼻孔の長く能く氣息を通ずる有樣は九曲の珠に絲を穿つが如く密々にして通じ全く餘人所不見である、舌頭短しの當處は玉機の自由に轉ずる如く見が不見と轉じ不見が見と轉じて少しも滯りが無い。此の衲僧古佛とは果して誰か、若し直下に相逢ふなれば誰か渠を識らん、渠何ぞ誰と知らんで二面ない。其の筈よ斯の人は頓と道連れの無い人で相對して無言獨足にして立つ底の那人である。本則の所謂不見を不見し、非物非汝の當體なることを始めて信じたぞ。

【著語】□依然として白浪滔天。縱し乾いても滄海は依然として白浪逆卷いてゐるぞ。□毫氂絲忽を見ず。糸一筋、兎の毛一本を認めぬのが虛空充滿よ。□千里の寒梅、暗香を度る。千里を隔てゝ香を聞くといふ鼻ぢや。□一字の眞言道滿たず。一字の羅陀尼は百年說けども說き盡せぬ□枉げて心力を勞す。無理に心配せんでもよい。任運にして密に通ずるぞ。□文彩縱橫、意自から殊なる。喫茶喫飯、橫臥倒眠、少しも不足の無い文彩ぢやから時々に顚倒して罣礙が無い。□是れ甚麼の面孔ぞ。誰といひ渠といふも面目も鼻孔も無いノッペラポーよ、是れ甚麼ぞ。□貶して、孤獨地獄に入れん。伴をも連れぬ一人ボッチの人間なら孤獨地獄に追ひやるがよい。お生憎

に出入の出來ぬ一人ぢや。

第八十九則　洞山無草

示衆云。動則埋身千丈。不動則當處生苗。直須兩頭撒開中間放下更買草鞋行脚始得。

【讀方】衆に示して云く、動ずる時は身を千丈に埋む、動せざる時は當處に苗を生ず。直に須らく兩頭撒開し中間放下するも、更に草鞋を買うて行脚して始めて得べし。

【字義】◎兩頭撒開云々とは動靜の兩頭を打ち拂ふといふこと。◎中間放下とは動靜一如で御座いといふ、其の御座いの所をも打ち捨てること。

【要解】一念纔に動ずるときは身を千丈の深きに埋めて浮む時期が無い、又一念も動せざる當處には苗を生じて荒草に落ち込む、然れば動不動の兩頭を推し開いて其の中間をも放下し、一位を守るべき無いといふ境界に至つても更に親しく草鞋を著け實頭に尋師訪道と行脚をするで無くては眞箇の大丈夫となることは出來ぬ。草鞋を踏み破る底の人は誰で有らうか、請ふ高く眼を著けよ。

擧。洞山示衆云。秋初夏末兄弟或東或西。直須向萬里無寸草處去（咬猫入枯井）又云。只如萬里無寸草處作麼生去（一言既發駟馬難追）石霜云。出門便是草（自看脚下）大陽云。直道不出門亦是草漫漫地（沒彌遐遮處）

【讀方】擧す。洞山衆に示して云く、秋初夏末兄弟或は東し或は西す。直に須らく萬里無寸草の處に向つて去るべし。又云く、只萬里無寸草の處作麼生か去らん。石霜云く、門を出れば便ち是れ草。大陽云く、直に道はん門を出でざるも亦是れ草漫々地。

【字義】◎洞山石霜の傳は前に出づ。◎秋初夏末とは雨安居が濟む日を自恣といひ、結衆これより思ひ思ひの方へ行脚に出るのである、此の時期が七月十五日故に斯くいふたのである。◎大陽は警玄禪師のこと、祥符中國の諱を避けて警延と改めた、梁山緣觀禪師の法嗣である。◎漫々とははびこる貌。

【要解】洞山悟本大師の衆に示して云はるゝには、七月十五日が一夏の解制となるから丁度秋の初めで夏の末だ、一會の結衆、雲兄水弟が送行して或は東するも有らう、或は西するも有らう、散りぢりばら〳〵になるはよいが何れも滿天下寸草無き一蒲團上を往來するがよいと。又云く、萬里無寸草の處とはどちらを向いて去ることぞと、斯ういふ垂示で有つた。寸草は妄想煩惱のやうだが其の根本を押へてみれば自性といふものが無い、畢竟無自性不可得のものだ、故に萬里無寸草といふのである。石霜は門を出づれば是れ草だといふ、六根門頭見聞覺知が漫地の草で其れが皆根も葉も無

い水上の浮草である、前念後念是れ無念の草であるから草の外に寸土が無い。大陽は直に道はん門を出でざるも亦是れ草漫々地といふ、門外に一歩脚を下さゞるに草漫々地であるから、出息も入息も草漫々地の上の呼吸である、擧手も投足も草漫々地の上の往來である、漫々地を萬里無寸草とは同一蒲團上の文彩であるが强ひて云へば無寸草は淨潔にして平等、草漫漫地は叢生にして差別である、けれ共是れ皆無寸草の上の門裏門外である。本則の要は白雲に坐著するも亦妙ならず、荒草裏の死漢となるも亦是にあらず、須らく中間を放下して天下無事の往來を爲すべしといふところにある。

【著語】□猫を晙んで枯井に入る。　猫のやうに人を欺して水の枯れた古井戸に引きずりこむ氣と見える。枯井は無寸草の處をいふ。□一言既に發すれば駟馬も追ひ難し。　一言齒の外へ出したことは自働車で追つかけても及ばぬことぢや。□自から脚下を看よ。　人々自己の脚下に油斷すな一物でも認めたならば其れが草と爲るぞ。□儞が廻避の處無し。　入も出るも盡大地も是れ一枚の草、儞も吾を避ける場處が無い、避けるにもあたらぬことよ。

頌云。草漫漫（直下無底　傍無邊）門裏門外、君自看（照顧　絆倒）荊棘林中下脚易

夜明簾外轉身難（淨地却迷人）看看（事不厭細）幾何般（枯木岩前差路多）且隨老

（荒田揀草）木同寒瘠（但存今日志）將逐春風入燒瘢（必有稱志時）

【讀方】草漫々、門裏門外君自ら看よ、荊棘林中脚を下すことは易く、夜明簾外身を轉ずること難し。看よ看よ。幾何般ぞ。且らく老木に隨て寒瘠を同うす。將に春風を逐ふて燒瘢に入らんとす。

【字義】◎幾何般とはどれだけ有るかといふ意。◎寒瘠は冬枯の木を形容す。◎燒瘢とは燒草の跡をいふ。◎荊棘林とは進退谷まるやうな、いばらの林、染汚に礙えらるる迷の境界に譬へたもの。◎夜明簾とは夜でも光るといふやうな水晶の簾、淸淨一邊なる悟の境界に譬へたもの。

【要解】初め二句十字は本則の首尾を頌す、次の二句は門裏門外の運足轉歩を示し、次に第二句の看字を活動せしめて看破の兩般なきを敍べ、結末二句に回互して不離不卽の宗を明す。本則に於いて洞山石霜大陽の三師が無寸草、門外是れ草、門裏漫々地といはれたが草にもいろ〳〵ある、香草もあれば異草もある、荒草もあれば芳草もある、此の看分けは人々自から認むべきである。今時荒草の荊棘林中に脚を下して往來することは易いが、那時異草の夜明簾外に超出轉身することは難い然し此の處は衲子の必ず透關を要すべき點である。ソレ諸人念を入れて看よ看よ、無寸草漫々地其れ幾何般ぞ、眞箇此の幾何般を看破した人は、且らく冬枯れの老木に身を隨せて吹く木嵐に寒瘠を同じうしてゐるが、扨て一陽來復の候に入れば東風が燒野を吹いて春暖の日暮しを爲すに至る。洞山の宗旨は一枯一榮窮して變じ變じて通ずる回互宛轉の妙趣を體得するにある。

【著語】□直下に底無し、傍に邊無し。　花は愛著に散り草は忌嫌に生ふ、妄想を嫌へば直下限りも無い妄想よ。□絆倒を照顧せよ。　門を出づるも入るも草といふ、若し心配すれば其の心配が身

に絆ふ草となる。□荒田に草を揀ぶ。荒田に草漫々、唯揀擇を嫌ふ。□淨地却つて人を迷はす。清白淨潔に坐すると其許が迷の本となる。□事は細を厭はず。丁寧微細に過ぎたといふことは無い。□枯木岩前差路多し。大地一片の雪となつたら草漫漫地も見えなくなる、此で路に蹈み迷はぬやうにするが大切ぞ。□但今日の志を存す。□必ず志に稱ふ時有らん。今日を等閑にせぬならば必ず心に稱ふ時節があるに相違無い、今日の行履を措いて佛法は無い、今時久遠を超越した今日である。

第九十則　仰山謹白

示衆云。屈原獨醒。正是爛醉。仰山説夢。恰似覺時。且道萬松恁麼説。諸人恁麼聽。且道是覺是夢。

【讀方】衆に示して云く、屈原獨醒む正に是れ爛醉。仰山夢を説く恰も覺時に似たり。且らく道へ萬松恁麼に説き諸人恁麼に聽く。且らく道へ是れ覺か是れ夢か。

【字義】◎屈原のことは第四十一則に出づ。◎仰山説夢とは「仰山七歳にして定に入り身敎主と及迦葉、二十七祖と精舍に同會す其の堂空に處して柱石なく地色瑠璃の如く己と諸祖と同じく是梵相金爛を被て洗足して第八位に居す、一の尊者年貌甚だ高し呼んで瞿曇といふ、某今法事に當ると、仰便ち下座、揵椎に就て白して云く、大乘淨心摩訶衍の法は四句を離れ百非を絶すと言ひ訖つて座に就く、衆僧に及ぶまで悉く商量することを見る」といふ故事から來た、本則を豫期しての語である。

【要解】屈原が吾れ獨り醒めたりと云つて居るが是れが醉ひつぶれの親玉である。此の本則では仰山が夢物語りをマルデ覺めてゐる時と同じやうにやつてゐる。醒めたと云ふ奴が醉つぱらひで、寢語を云つてゐる人が覺めて居るのだとすると覺夢一如とでも云ふのかナ。恁麼に説く萬松に恁麼に聽く諸人、夢に説いて覺めて聽いてゐるか、其れとも覺めて説いて夢で聽いてゐるか、眼を開いての寢寤が聽き度くば本則に就き耳を欹てて聽取せよ。

擧。仰山夢往彌勒所居第二座（且道、第一座是誰）尊者白云。今日當第二座説法（低聲來説）山乃起白椎云（諦觀法王法、法王法如是）摩訶衍法（此義文長）離四句絶百非（是非者）謹白（言清行濁）

【讀方】擧す。仰山夢に彌勒の所に往て第二座に居す。尊者白して云く、今日第二座の説法に當る山乃ち起て白椎して云く、摩訶衍の法は四句を離れ百非を絶す、謹んで白す。

【字義】◎彌勒とは梅怛麗耶（Maitreya）慈氏と譯す、菩薩の名である。南天竺波羅門の子で、現に

兜率天に居て、五十六億七千萬年の後に、此の土に出世して釋迦佛の化を補ひ、賢刧千佛中の第五佛となるといふ、依つて慈氏菩薩、補處菩薩ともいふのである。◎摩訶衍は梵語で詳しくは摩訶衍那(Mahasamghikah)、譯して大乘といふ。小乘に對して大人の所乘をいふので、大苦を滅ぼし大利益を與へる敎をいふ、卽ち菩薩の大機が佛果の大涅槃を得る法門である。◎四句百非の解は第六則に出づ。

【要解】仰山が夢に彌勒尊者の淨土に往つて第二座に座したといふが此の夢は常作見好夢といふ夢で第二座は第一座と並ばぬ座位ぢや、彌勒と仰山とは難兄難弟の間であつて娑婆と兜率天とは唯一の夢道場である。今日第二座の說法に當るといふが昨日は第一座の說法とは云は無い、仰山乃ち起つて白椎していふ、摩訶衍の法は四句を離れ百非を絕す、謹んで白す、これが仰山第二座の說法である。大乘の說法とは喫茶喫飯よ、運足轉步よ、出息入息よ、喫茶喫飯は一異有無の四句を離れてゐる。運足轉步は非一非異非有非無等の百非を絕してゐる、言舌思惟を超絕した出息入息ぢや、之を夢中の摩訶衍といふのである。

【著語】口且らく道ふ第一座は是れ誰そ。第一頭に人無きは如何ん、諸人第一座は誰であらう。口低聲、來つて是非を說く者。大きな聲をせまいぞ、物言へば唇寒し秋の風よ。口諦観法王法、法王法如是。文殊のいふ通り此で法王法を諦観せよ著。口此の義文長し。大乘の法は四十九年でも說き盡せぬ、廣大無邊の說法ぢや。口言清く行濁る。離絕してゐるなら離れたの絕したのと云ふに及ばぬことよ、言ばかりで無いかノ。

頌云。夢中擁衲參耆舊（熟境難忘）列聖森森坐其右（犬銜赦書、諸侯避路）當仁不讓犍椎鳴（心不負人）說法無畏師子吼（面無慚色）心安如海（香納百川）膽量如斗（傍若無人）鮫目泪流（點點是血）蚌腸珠剖（赤心片片）譫語誰知泄我機（手足俱露）龐眉應笑揚家醜（因誰致得）離四句絕百非（言猶在耳）馬師父子病休醫。（走疼走痛　神鬼難明）

【讀方】夢中衲を擁して耆舊に參ず。列座森森として其の右に坐す。仁に當つて讓らず犍椎鳴る。說法無畏師子吼す。心安きこと海の如く、膽量斗の如し。鮫目泪流る、蚌腸珠剖る。譫語誰か知ん我機を泄すことを。龐眉應に笑ふべし家醜を揚ぐることを。四句を離れ百非を絕す。馬師父子病に醫を休む。

【字義】◎擁衲とは衲は補で、破れた布を補つて作つた衣を衲衣といふ、擁は挾抱すること、破れ衣を引かけてといふ意。◎耆舊は舊參耆宿とて學修年を重ねた老大家をいふ。◎列聖森々は大勢の聖者達が綺羅星の如く列つて居るといふ意。◎當仁不讓とは卒といふ場あひには他に讓らぬといふ

こと。論語衞の靈公篇に「子曰はく仁に當つて師に讓らず」とあるより出づ。禪門では殆ど日常語に用ゐて居る。◎犍椎とは古來僧院に於ける鳴物の總稱。◎師子吼とは大說法の喩。◎心安如海は平穩にして動せぬに喩。◎膽量如斗とは斗升程の膽の意で、大量にして事に動せぬをいふ。◎鮫目泪流とは述異記下卷に「南海中に鮫人の室あり、水に居て魚の如し、機織を廢せず、其の目能く泣く時は珠を出す」とあるより出づ。◎蚌腸珠剖とは異聞續記に「漢の武帝瓠子河に幸す、人あり長尺餘洞穴珠一枚を獻ず、東方策が云く河底に穴あり深さ數百丈、赤蚌あり、腸より此珠を生ず徑り寸にして明耀世に絕す」を用ゆ、蚌ははまぐりである。◎譫語はたはごと、夢中の語。◎龐眉は黑白相雜つて居る太い眉をいふ、耆宿の風貌を形容した語。◎馬師父子云々は第六則の公案の意より來た、馬祖父子は四句百非又これ本際解脫底のものであるから打破する要なしと醫療を休めて終つたことをいふ。

【要解】　初め四句に仰山の兜率に於ける說法る頌し、次の二法に心量廣大、次の二句に表裏情亡次の二句は仰山夢中說法を明かして最後の二句に第六則馬祖白黑の話を持ち來つて神療妙藥の手裡を讚歎して結ぶ。仰山は夢中に衲衣を著て彌勒會上の耆年宿德に參じた。其の兜率同院には諸聖林の如く列坐して右に坐し仰山を其の第二座に居らしめた、今日第二座の說法と云はれて仁に當つて他に讓らずカチンと白椎して百獸腦裂する大獅子吼說法した、四句も百非も有りのまゝ本際解脫したぞ、說法時に於ける仰山の胸中は落付拂つたもので心平らかなること大海の如く膽の大なることと斗の如くで有つた、而して此夢物語りは摩訶衍の法で言々句々血滴の迸つた慈悲の涙と赤心の片片で鮫目蚌腸の泪であり珠である。爰は天童が思ふには仰山の此の譫語を誰か、吾が祖師門下の轉機を漏したもので有るといふことを誰が知つてゐるで有らうか、若し然うと知るならば、龐眉白髮の耆舊列聖は家醜を外に揚げたことを呵々大笑せらるゝで有らう、此の處人々大いに擇法眼を具して辨見せねばならぬ。是れで憶ひ起したが馬大師の下へ四句を離れ百非を絕して請ふ師直指せよと問ひ來つた一僧が有つたが弟子の智藏や百丈と父子共力で藥の病と作り病の醫となる方術を盡したことが有つたつけ、今仰山も其の通り四句百非遣り取りの無い本際解脫せる摩訶衍の法を示された。是れが夢覺一如の大轉法輪である。

【著語】　□熟境忘じ難し。　平常慕うてゐる處は夢にも見るものだ。□犬、赦書を銜めば諸侯路を避く。　犬でも天子の赦免狀を口に銜んでゐれば諸侯でも路を避けねばならぬ、仰山諸聖の中に在つて傍ら人無きが若しよ。□心人に負はずれば。□面に慚る色無し。　內外玲瓏で心に毫も私が無ければ諸佛面前に出ても恐るゝけしきは無いものぢや。□百川を呑納す。　百川を一人で呑み盡す、人々の心中の其の通りよ。□傍若無人。　唯我獨尊佛の仰山ぢやもの。□點點是れ血。　流落つる泪は滴々これ血ぢや。□赤心片々。　仰山の劈腹剜心で五臟六腑さらけ出したのよ。□手足俱に露はる。　機密を漏らしたくらゐで無い。四肢五體全現成よ。□誰に因つて致し得るや。　夢中の譫語は人の爲にするで無い。□言猶は耳に在り。　何だか聞いたやうな語ぢや、其の筈よ從晝至

夜雜言絕非の往來ぢや。口疼を走り痛を走る、鬼神明らめ難し。疼痛の無い病ぢやから鬼神でも診察が出來ぬ。

第九十一則　南泉牡丹

示衆云。仰山以夢中爲實。南泉指覺處爲虛。若知覺夢元無。始信虛實絕待。且道斯人具甚麼眼。

【讀方】衆に示して云く、仰山は夢中を以て實となし、南泉は覺處を指して虛となす。若し覺夢元無なるを知らば始めて虛實待を絕することを信せん。且らく道へ斯人甚麼の眼を具するや。

【字義】南泉指覺處云々とは本則を其儘引いたのである。◎待とは對待の略で、彼と此と二物對立の見をいふ。

【要解】前の第九十則では仰山夢中の說法を實なりとした、本則では南泉が醒覺の處を指して虛妄の夢だと云つてゐる。若し覺夢元來是れ無なることを知らば虛と實との對待を絕したることを信ずるに至るで有らう。此の對待を絕し覺夢一如と見る底の人は甚麼な眼を具するで有らうか。サー直に本則に參ずるがよろしい。

擧。南泉因陸亘大夫云。肇法師也甚奇特（也是達東白家）解道天地同根萬物一體（竪起兩指）泉指庭前牡丹云。大夫時人見此一株花如夢相似（隔壁過狀）

【讀方】擧す。南泉因に陸亘大夫曰く、肇法師也た甚だ奇特なり、道ふことを解す、天地同根萬物一體と。泉庭前の牡丹を指して云く、大夫時の人此一株の花を見ること夢の如くに相似たり。

【字義】◎陸亘大夫は唐代の人、字を景山と云つて、宣州の剌史となつた、南泉に參じて大事を了畢した居士である。◎肇法師とは羅什の門人なる釋の僧肇である。京兆の人、家貧うして傭書を以て業となし、遂に繕寫によりて經史を歷觀し、初め老莊を以て心要とせしが、未だ棲神冥累の方に於て到らざる處ありとし舊維摩經を見て初めて所歸を知り、深く三乘に通ず、晉義熙十年長安に卒した人である。◎天地同根萬物一體の語は肇法師著の涅槃無名論第七妙存篇に在る、天地萬物は皆な其の本體は同一であるといふ意である。

【要解】仰山の兜率說法は夢中を實の如く示した、本則は實在を夢の如く示すのであつて、何れも人の知見を奪ふ爲人の手段である。歸するところは覺夢一如、虛實待對を絕するところに有るのだが唯一圖に一如絕對と丸呑みにするも亦有害無益であるから、夢に覺を現じ、實に虛を示して、一も依るべき無き眞箇衲僧の活眼睛を開かせんが爲に特に此の二則を並べて出されたのである。僧肇

の天地同根萬物一體は結構な語であるが、同根と云ひ一體と云へばどうも實有の如く認め易いから南泉は陸亘大夫の手裡をして全く本來無一物たらしめんとての提撕である。庭前の牡丹花の一株に限らない、諸法は盡く夢の如くに相似たりである、一合相不可得である、天は蓋ひ地は擎ぐ、根らしいものが甚處にあるか、山は高く水は長し、何れの處に體らしいものが有るか、根無く體無きが故に天は東南と高く地は西北と低いのぢや、山の聳ゆる水の流るゝ皆是れ根本體相の認むる無し。諸法も萬物も夢の現成ぢや、宇宙も乾坤も夢の現成であるのぢや。

【著語】口也た是れ遼東の白豕。陸亘大夫一人で奇特ぢやといふけれども丹んなものは天下に有りふれてゐる。口兩指を竪起す。倶胝は一指を竪てたが大夫は二本竪てた、此奴少し怪しいぞ。口壁を隔てゝ狀を過す。大層遠まわしに大夫の耳を擦つた、氣がつけば好いが。

頌云。照徹離微造化根（行到水窮處）　紛紛出沒見其門（坐看雲起時）
游神刧外問何有（心外無法）　著眼身前知妙存（滿目青山）
虎嘯蕭蕭巖吹作（乞火和煙得）　龍吟冉冉洞雲昏（桃泉帶月歸）
南泉點破時人夢（纔好睡語）　要識堂堂補處尊（是處是慈氏）

【講方】離微造化の根に照徹し、紛々たる出沒其の門を見る。神を刧外に遊ばしめて問ふ何か有らん。眼を身前に著けて知妙に存す。虎嘯けば蕭々として巖吹作り。龍吟ずれば冉冉として洞雲昏し。南泉時人の夢を點破して、堂々たる補處の尊を識らんと要す。

【字義】◎離微造化云々とは事苑三に「離は體物と合せず又物と離れず、五色も汚す能はず五音も亂す能はず、微は體妙にして形無く色無く相無く萬端を應用して容を見ず、離微の二字は道の妙なり」とある。◎照徹とは根本まで見透すこと。◎游神刧外とは精神を刧外即ち時空を超越した境界に置くこと。◎身前は父母未生以前と見て宜い。◎蕭蕭は清風の吹く貌。◎巖吹は巖の間から吹き起る風をいふ。◎冉々は雲の起る形容。◎堂堂とは威風盛なる貌。◎補處尊は彌勒菩薩のこと。

【要解】初め二句は根元を識得する底を頌し。次の二句は不可思議の有無を明し、次の二句は如夢相似の現成を示し、最後に南泉深重の慈悲を讚歎す。南泉は先づ離に入り微に出づるの造化萬物の根元を照徹して、紛々として出沒する萬物諸法の門根を徹見した。天地同根とは心を空刧の外に游ばしめて何か有らんで空にして空ならず、眼を父母未生以前に著けて妙に存すで有にして有ならず、問ふも知るも寂滅の宗旨で有無は卽ち眞空妙有である。眞空妙有の故に虎嘯けば蕭々として巖に當つて妙音をおこし、龍吟ずれば冉々として雲天を覆うて昏しである、龍虎に意無く巖吹白雲無心にして生ずるので是れを夢の如く相似なる天地同根萬物一體といふのである。南泉は夢を説いて時人大夫の眼を開かしめた。其の的旨は人々堂々たる補處の尊貴を識らしめんとするに有るのだ、今日の世人も亦世の睡りを覺して眞箇如夢相似の大法輪を轉ずるがよい、箇々補處の彌勒尊なることを自

覺するがよい。

【著語】□行いては到る水の窮まる處。□坐しては看る雲の起る時。第八十七則頌の著語に出てゐた。南泉は根源を極めて途中に居るが、其の坐處で天地萬物の見徹しだから面白い。□心外無法。諸法皆一心、刼外と今時と二念無い。□滿目青山。一念の上から物々現成、山は山のまゝ、水は水のまゝ現成よ。□火を乞うて煙に和して得。虎に風、火に煙はつきものぢや、別物で無いぞ。□泉を挑げて月を帶びて歸る。水を掬すれば覺えず知らず月手に在り、二念は無いよ。□纔に好し睡語するに。人の夢を覺す南泉の語も亦寢語ぢや、世人も南泉も萬松に驚覺された。□是の處是れ慈氏。慈氏は彌勒で兜率天に在るといふが、人々是れ慈氏、處々是れ兜率ぢや、此の座を起つに及ばぬぞ。

第九十二則　雲門一寶

示ㇾ衆云。得二游戲神通ノ大三昧一。解二衆生語言ノ陀羅尼一。拽二轉シ睦州ノ秦時ノ轆轤鑽一。弄二出ス雪峰南山ノ鼈鼻蛇一。還テ識二得スヤ此ノ人一麽。

【讀方】衆に示して云く、遊戲神通の大三昧を得、衆生語言の陀羅尼を解し、睦州秦時の轆轤鑽を拽轉し、雪峰南山の鼈鼻蛇を弄出す。還つて此の人を識得すや。

【字義】◎遊戲神通三昧は法華妙音品十六三昧の中の一である。◎衆生語言云々の文は法華藥王品から引いたのである。◎衆生とは此の世に存在する生物の概稱。◎陀羅尼は譯して能持といふ卽ち種々の善法を集め、能く持して散失せざらしむる意、又總持とも譯す。◎睦州秦時轆轤鑽とは會元十五に「雲門山光奉院の文偃禪師往いて睦州に參ず、州纔かに來るを見て便ち門を閉却す。師乃ち門を叩く、州曰く誰ぞ、師曰く某甲、州曰く甚麼をか爲す、師曰く己事未だ明めず。乞ふ師指示せよ。州門を開く、一見して便ち閉却す、師斯の如く連日門を叩く、第三日に到つて州門を開く、師乃ち拶入す、州便ち擒住して曰く、道へ道へ、師擬議す。州便ち推し出して曰く、秦時の轆轤鑽と、遂に門を掩ふ、師一足を損ず、師是より悟入す」とあるによる。轆轤鑽は、秦の始皇帝が長城を築くときに用ゐた車仕掛の大きな鑽のこと、今は無用の長物の意に用ゆ。◎拽轉とはひきころがす。今は擧拈の意である。◎雪峰南山鼈鼻蛇のことは第二十四則に出づ。

【要解】日用光中行住坐臥無分別の遊戲三昧是れ卽ち大神通の活計で此の境界を得て能く衆生の語言音聲を解了し、鳥獸風水を利益することが出來るのである。睦州の云つた秦時の轆轤鑽を拽轉し、雪峰のいふ南山の鼈鼻蛇を弄出する、是れ無用の大機、大用現前規則を存せざる人のはたらきぢや、諸人還つて此の人を識るや、識る人甚だ稀有であらう、萬松其れみよと、諸人面前に本則を抛げ出した。

舉。雲門大師云。乾坤之內（包裹乾坤底聻）宇宙之間（立成宇宙底聻）中有一寶（不信搜懷）秘在形山（形山是寶）拈燈籠向佛殿裏（早是驢覷井）將三門來燈籠上（那堪井覷驢）

【讀方】舉す。雲門大師云く、乾坤の內、宇宙の間、中に一寶あり、形山に秘在す、燈籠を拈じて佛殿裡に向ふ、三門を持て燈籠上に來す。

【字義】◎乾坤―形山の語、寶藏論廣照空有品に見ゆ。◎乾坤とは天地のこと。◎宇宙とは往古來今を宙といひ、四方上下を宇と謂ふ、即ち、時間的にも空間的にも無限といふ意で無限の大世界をいふ。◎形山とは形は吾人の肉體、五蘊積聚する故に形山といふ。◎三門は三解脫門である、即ち空門、無相門、無作門で、寺院は持戒修道して涅槃に至るを求むる人が居る處であるから三門に由て入るのである。

【要解】乾坤の內、宇宙の間、中に一寶ありて形山に秘在すといふ。形山は人々の五蘊山中である。宇宙といひ乾坤といひ形山といふ皆是れ秘在一寶の現成である。故に箇々不足は無い、其の受用底は燈籠を拈じて佛殿裏に向ふ、一寶を形山に秘在するはたらきで毫も差支が無い、三門を以て燈籠上に來す、一寶中に宇宙乾坤を藏す、是亦些しも差支が無い、順逆縱橫の手段である。宇宙乾坤と一寶との量は元來等しいのであるから虛空を拈じて虛空裏に向ひ、虛空を以て虛空上に來す皆是れ一寶の轉機である。猶ほ約言すれば日用光中の出入進退をして珠の盤上に奔るが如く、天馬の空を行くが如き自由の遊戲三昧を得せしめんとする雲門の施設である。

【著語】□乾坤を包裹する底聻。包むものと裹まるゝものと二つ有りはせぬ、眼前底聻、其れ看よぢや。□宇宙を立成する底聻。宇宙と立つるのがモー物を二つに見るのぞ、其のまゝ其れ聻。□信せずんば懷を搜れ。合點がゆかねば自己の懷中を搜つて看よ、外には無いぞ。□形山是れ寶。形山と寶と二つあるでは無い、形山其れを一寶といふのぢや。□早く是れ驢井を覷る。見るまゝで分別に涉らねば驢の井を覷るが如しでより。□那ぞ井の驢を覷るに堪へん。井の驢を覷るが如くなれば神通游戲の大三昧ぢやが、動ともすると直に分別面をしたがる。

頌云。收卷餘懷厭事華（水深波浪靜學廣語聲低）歸來何處是生涯（老老大大住處也不知）爛柯樵子疑無路（日月不到處）桂樹壺公妙有家（別是一乾坤）夜水金波浮桂影（通上徹下）秋風雪陣擁蘆花（大小明白）寒魚著底不吞餌（徒勞下釣）興盡清歌却轉棹（又被風吹別調中）

【讀方】餘懷を收卷して事華を厭ふ、歸り來つて何の處か是れ生涯、爛柯樵子路なきかを疑ひ、桂樹の壺公妙に家あり。夜水金波桂影を浮べ、秋風雪陣蘆花を擁す、寒魚底に著いて餌を吞まず、興盡きて清歌却つて棹を轉す。

【字義】◎收卷餘懷とは肇論に述べられた肇法師の餘懷を雲門和尚が本則の四句に卷き收めたことをいふ。◎事華とは多事繁華と熟字して冗慢なこと。◎爛柯云々の故事は前に屢々出づ。◎桂樹壺公とは費長房が藥賣の壺公に連れられて桂樹に掛けてある壺の中に這入ると中に立派な宮殿があつたといふ故事に據る。◎金波とは前漢書に「月穆々として金波の如し」とある、卽ち月のこと。◎桂影とは月影のこと。月中に桂樹あり、地上の桂花咲く頃月中の其れも花開く、八月頃月光の明かなるは桂花の開くに依るといふ傳説がある。◎雪陣とは蘆花のこと。◎寒魚著底不呑餌とは寒い時には魚は水底に沈んで餌を食はぬ、船子の偈に「夜靜に水寒うして魚食まず、滿船空しく明月を載て歸る」とある。◎興盡清歌云々とは類聚に「王子猷雪夜夢より覺め、興甚だ湧く、舊友載安道を想起して雪を冒し輕舟に乘じて載が門に到つて歸る、人其所以を問へば我興に乘じて行き興盡きて返る、何ぞ必ずしも安道を見んや」といふ故事の意を採る。◎槎は小舟のこと。

【要解】雲門は寶藏論の繁文冗語を厭うて他の文意は卷いて懷ろに收め肝要の四句だけを示された兼て一寶は本來空にして多事繁華を厭ふ道理を第一句に擧げて、第二句に一寶の歸處是れ甚麼の處ぞと究め來れは宇宙も乾坤も吾が手裏に在つて佛殿三門燈籠を自由に拈弄する活生涯に達するぞ。次の二句に途中に有る底は王質の如く布碁を見て斧柯爛るゝも知らずして歸路無きを疑ひ、雲門は本來空を離れぬから壺公の如く到る處吾が家である。次の二句に一寶の皎潔明白を頌す、夜の水に桂影が浮べは金波動き、秋風蘆花を擁すれば雪陣かと疑ふほど八面玲瓏淸淨無垢の寶玉よ。最後の二句に雲門の慈悲を述べて此の大光明三藏の境界を得させん爲に釣を垂れても寒魚は底に沈んで餌を食はぬから、モー仕方が無いと興盡きて家に歸るに如かずと淸歌を謠うて槎の艪を轉じた。サー人々に一つ何と淸歌を謠つたか其の聲の絶えぬ間に能く耳を澄して聞いて置かねばなるまい。

【著語】口水深うして波浪靜かに、學廣うして語聲低し。雲門の心水は深淺量り難い、學海廣きが故に語も莊重である。口老老大大として住處も也た知らず。老大の人の住處は窺ひのつかぬ筈よ。口日月不到の處。日月の到らぬところに明暗の分別は無い。口別に是れ一乾坤。心に思量分別さへ無ければ到る處風流ならざるは無い。口通上徹下。俯仰只一寶で俯仰是れが亦一寶のはたらきぢや。口大小明白。大小高低少しも藏さず明白露現だ。口徒らに釣を下すに勞す。釣り盡す滄浪月一鈎でモー釣り上げる魚はあるまいよ。徒勞が雲門の心切である。口又風に別調の中に吹かる。往くかと思つたら歸ると風が變つた、何ほど變じても一寶の丸ころびよ。

第九十三則　魯祖不會

示衆云。荊珍抵鵲。老鼠啣金。不識其寶。不得其用。還有頓省衣珠底麼。

【讀方】衆に示して云く、荊珍鵲を抵ち、老鼠金を啣む。其の寶を識らず、其の用を得ず。還つて

頓に衣珠を省する底ありや。

【字義】◎荊珍抵鵲、老鼠嚙金とは處變れば品變るで、處によつて珍重するものが違ふといふ意を示す。荊山の玉璞は世に重寶とする處であるけれども、荊山の麓ではそれを鵲を抵つに用ゐて居る、又金は人間の貴ぶ處であるが、鼠は餅に付いた金を嚙んで而かも何等の感じもないといふこと。◎衣珠とは法華の譬喩で第三十二則に出づ。

【要解】荊山卞和の珍璧を以て鵲を抵つ礫となすは玉を玉と知らざる者である、恰も老鼠が黃金を嚙へて步くやうなものよ。寶を寶と識らざれば又寶の用を作さぬ、犬に錢、猫に小判の譬の通りぢや。世間の珍寶は先づ其れとして置いて諸人が衣裡の明珠は今日光明を放つてゐるかどうぢや、衣裡に珠ありや如何んを省察して見ることが最大急務である。

舉。魯祖問南泉。摩尼珠人不識。如來藏裏親收得（少賣弄）如何是藏（法堂前佛殿後）泉云。王老師與汝往來者是（有甚死急）祖云。不往來者（道頭知尾、告往）泉云。亦是藏（一遍生活兩遍作）祖云。如何是珠（得一望二）泉召云。師祖（老僧不是不拈）

（知來出）祖應諾（闍黎不是、不將來）泉云。去汝不會我語（平生肝膽向人傾）

【讀方】舉す。魯祖、南泉に問ふ、摩尼珠人識らず如來藏裏に親しく收得す、如何なるか是れ藏。泉云く、王老師汝と往來するもの是、祖云く、往來せざる者は。泉云く、亦是れ藏。祖云く如何なるか是れ珠。泉召て云く、師祖。祖、應諾す。泉云く、去れ汝我語を會せず。

【字義】◎魯祖とは魯祖の寶雲禪師であるが、實はこれは南泉の資なる終南山の雲際師祖禪師の誤りだといふことである、成る程明かに師祖と指名までしてあるのを見ると如何にもさうらしい、然し既に本則の題が魯祖不會と成つて居る位だから今更改める訣にもゆかぬから其の儘にして置く、尤も宗意には何れにしても毛頭異りの有る筈は無い。◎摩尼珠云々の文は永嘉大師の證道歌から引いたのである。摩尼は譯して如意といふ。◎如來藏とは楞伽經に「寂滅は名けて一心となす、一心を如來藏と名く」とある。

【要解】魯祖が永嘉大師證道歌の二句を以て南泉に問ひ來つた、初めに如來藏、次に摩尼珠と二段に質疑を起してゐるが藏と珠と別樣に見たからのことである、故に南泉は吾れ王老師と汝と常に往來してゐる、此の外に如來藏が有るかと答へた、往來の語に引つ掛つた、往來せざる者は何か、是れ亦藏よ、去來も不去來も如來藏裡を出ることは出來ぬ。摩尼珠は如何ん、オイ師祖、ハイと應諾した、是れ珠の宛轉である。其れでも南泉は汝は我のいふ語が不會らしい、彼方に去けと云つたが去るも不會も猶且珠の宛轉である。珠は會不會識不識に依つて貴賤尊卑を分つものでは無い、唯用と不用とに依つて親疎を生ずるのぢや、用ゐ得て自由、受用して不盡なるときは寶と識らず珠と會せざるも光明遍照である、故に摩尼珠人識らず如來藏裏に親しく收得すといふのである、自己の光明

蓋天蓋地ともいふのである。

【著語】□小賣弄。安物買つて自慢するのかナ。□法堂前、佛殿後。面前背後、藏ならぬ處は無い。□甚の死急か有る。往來底計りぞと思つたらば死物ぢや。次の不往來を見込んでの語。□頭を道へば尾を知り、往を告ぐれば來を知る。其れほど自由がきけば人に問ふに及ばぬことよ。□一遍生活すれば兩遍作る。一度生活して往來せば不往來は殘らない筈ぢや。□一を得て二を望む。一事を得れば又一事を求むるは人情の常か、隴を得て蜀を望むの類。□老僧是れ拈出せざるにあらず。自分も持ち出さぬ訣では無い。□闍黎是れ持ち來らざるにあらず。闍黎が持つて來ぬといふ訣でも無い。遣り取りも取捨も無い珠である。□平生の肝膽、人に向つて傾く。南泉は藏も珠も丸ころげに抛げつけた。

頌云。別是非明得喪（眼裏有筋）　應之心指諸掌（見處通透用和明白）　往來不往來（總不干他事）　只這俱是藏（恁麽不恁麽總得）　輪王賞之有功（廉者不取貪者不與）　黃帝得之罔象（已勞心力）　轉樞機能伎倆（百不如汝）　明眼衲僧無鹵莽（事不厭細）

【讀方】是非を分ち得喪を明し、之を心に應じ諸を掌に指す。往來不往來。只這れ俱に是れ藏。輪王之を有功に賞し。黃帝之を罔象に得たり。樞機を轉じ伎倆を能くす。明眼の衲僧鹵莽なること無れ。

【字義】◎得喪は得失に同じ。◎應之心云々とは列子湯問篇に「之を手に得て之を心に應ず」とあるより出で◎指諸掌とは論語八佾篇に「其れ諸斯を示るが如き、其の掌を指す」とあるによる。◎輪王云々は法華安樂行品に「佛、文殊師利に告げ玉はく、轉輪王の諸の兵衆の大功あるを見ば心甚だ歡喜して此の難信の珠の久しく髻中にありて妄に人に與へざるを以て今之を與うるが如し」とあるに據る。◎黃帝云々とは第七十六則に出づ。◎鹵莽は輕脫苟且の義なること。物事をよい加減にすること。◎明眼衲僧とは靈利の衲僧といふこと。

【要解】初め二句に南泉が珠の受用底、次の二句に如來藏の運用、次の二句に摩尼珠の光明を頌し、末後の二句に擬議に渉るの鹵莽を誡しむ。摩尼珠は識不識を超越してゐるが其れを是非と別ち得喪と明して自由に用ゐ得るのが南泉の正眼である、故に心に應諾し掌中に指示して是非得喪を見究めた、往來不往來是れ只這のまゝ如來藏で執捉運奔、藏裡に親しくしてゐるのぢや、摩尼珠は轉輪王が功勳あるの臣下に授けたやうに南泉も收放自在の功勳あるには惜しまず此の珠を賞與するが黃帝は聰明なる離婁に珠を與へやうとしたが却つて盲人の罔象が受り來つたやうに師祖も見聞に墮ち分別に渉れば此の珠は南泉が與へやうとしても承け得ることが出來ぬ。若し擬議分別に渉らねばソツクリ其のまゝ掌中に歸するのであるから心機要樞を一轉して無伎倆のところに伎倆を發揮して親しく收得するがよい、人々是れ明眼の衲僧で有るから鹵莽な見得して衣裡の珠を失却してはならぬ、能く善く念を入れて是非を別ち得喪を明らむるの正眼を豁開すべきである。

【著語】□眼裏に筋あり。能く見分ける格外な眼力ぢや。□見處道透し、用時明白なり。表裏內外見徹して毫も昧まさぬ。□總に他の事に干からず、藏といひ珠といふ別物で無い、故に他の干涉はうけぬ。□恁麽不恁麽總に得たり。盜賊を捕へて見れば吾が子なり、他物は無いからのことよ。□廉者は取らず、貪者は與へず。有らば與へん無くんば奪はんで與奪にも受授にも干からぬ。□巳に心力を弄す。見不見、得不得がモー其れが心を勞すといふもの、萬松などは珠の名も知らぬぞ。□汝に如かず。天童の伎倆には脚下にも寄りつけぬ、無伎倆のところ是れ大伎倆と知らぬのか。□事は細を厭はず。石橋も叩いて渡れぢやから念に念を入れて仔細に參究せよ。

第九十四則　洞山不安

示衆云。下不論上卑不動尊。雖能攝己從他未可以輕勞重四大不調時如何侍養。

【讀方】衆に示して云く、下、上を論せず、卑、尊を動せず。能く己を攝して他に從うと雖も未だ輕を以て重を勞すべからず。四大不調の時如何か侍養せん。

【字義】◎四大不調とは人身は地水火風の四大要素が適當に調和してをるから安泰である、今は四大が調和せざる意にて、病氣のこと。

【要解】向下の人には向上の人の境界は見えぬ、臣位の卑賤にある者は君位の尊貴を動かすことは出來ぬ筈である。然れば卑賤にある臣子は己を攝めて能く他の尊貴の君父に從うても未だ卑賤の輕輩が尊長の重を勞はすことは出來ない。順せざれば孝にあらず奉せざれば輔にあらず、父子の道を紊し君臣の禮を犯すは佛家の大罪人である。地水火風の四大が不調で孝養も盡されず、忠義も致されぬ時は如何と奉侍し供養したものか、爰を究めねばならぬ。

舉。洞山不安。僧問和尚病還有不病者（一任分疏）云　山云。有（強主張）　僧云。不病者還看和尚否（世諦流布）　山云。老僧看他有分（本分相見）　僧云。和尚看他時如何（有甚麼眼相見）　山云。則不見有病（只是不肯參假）

【讀方】舉す。洞山不安。僧問ふ、和尚病む還つて病まざるものありや。山云く、有り。僧云く、病まざるものは還て和尚を看るや否や。山云く、老僧他を看るに分あり。僧云く、和尚他を看る時如何。山云く、則ち病あることを見ず。

【字義】◎洞山の傳第二十二則に出づ。◎老僧看他有分とは老僧は病んで居つても却て他を看護する分があるといふ意。

【要解】病者と不病者との例話は第三十六則の馬師不安、第八十三則の道吾看病にあつた、殊に本

則は第八十三則と殆ど同じである、只其の接化の仕方に夫れ夫れ家風の相違があるから特に類則として擧げたので有らう。洞山悟本大師が四大不調で身心が安泰で無かつた、其許を付け込んで僧が此の事の參究に出掛けた、和尚は病人ぢやが不病者が有りますかと二つに分けて來た、有るとも有るとも、然らば其の不病者は和尚を看病でもするかどうです。イヤ老僧が他を看病してやるよ、へー和尚が他の看病なさり方は如何です、他、病あるを見ず、マー無病らしい。病む底の和尚が不病者を看るのだから和尚却つて不病だ、不病底の他が和尚に看病されるから他却つて病む、終に不病底の和尚が不病底の他を診察したら不病人で有つた、茲に於いて病と不病とは相對して居らぬことになる、病の名も存しない、之を無病といひ度が有病に對する無病で無いから無病の名も存しない。自から此れだけの問答往復中に正偏回互して而も不回互の諱を犯さざる洞山の宗風が偲ばれる。

【著語】口分疏するに一任す。病　不病と分けた、それもよからう。口强ひて主張す。病　不病の無いことを知つてゐながら有と强情を張つた、面白い。口世諦流布。其れは世間有りふれてゐる。口本分の相見。二念に渉らぬ向上の相見ぞ。口甚麼の眼あづて相見すや。病人が病人を看病出來るかノ。口只是れ肯つて假に參せず。不見が其の看病ぢや。

頌云。卸却臭皮袋（草枯鷹眼疾）　拈轉赤肉團（雪盡馬蹄輕）　當頭鼻孔正（也須撥轉始得）　直下髑髏乾（切忌見鬼）　老醫不見從來癖（手到病除）　少子相看向近難（渠無國土何處逢渠）　野水痩時秋潦退（龍行舊道）　白雲斷處舊山寒（是眞難滅）　須勤絶（君子一言）　莫顢頇（點燈喫飯）　轉盡無功伊就位（葉落歸根）　孤標不與汝同盤（來時無口）

【讀方】臭皮袋を卸却し、赤肉團を拈轉す。當頭鼻孔正しく、直下髑髏乾く。老醫從來の癖を見ず少子相看して向近すること難し。野水痩する時秋潦退き、白雲斷ゆる處舊山寒し。須らく勤絶すべし。顢頇すること莫れ。無功を轉盡して伊位に就く、孤標汝と盤を同うせず。

【字義】◎臭皮袋とは臭き皮袋といふ意で、吾等の身體のこと。◎赤肉團とは赤肉の團といふ意で、吾等の身體を指す。◎鼻孔正とは慈航和尚云く「參禪の人、第一に鼻孔端正、眼目精明なるべし、鼻孔正なる時一切皆正し」とある。◎髑髏乾の語は僧と曹山との問答に見ゆ。◎從來癖は從來の病氣の意。◎秋潦は秋の水だまりのこと。◎勤絶の勤も絶も、たち切る意。◎顢頇とは大面のこと、人を莫迦にした貌である。◎就位は本位に就くこと。◎孤標とは孤り特別に標出ること。◎不同盤とは同伴にならぬといふ意。北史の楊椿が傳に「吾兄弟盤を同うして食す」とあるより出づ。

【要解】初め二句に身心脱落、次の二句は不病の物體、次の二句は不病者の親密奉重、次の二句は奉重の操持、次の二句六字に向近奉重の難を誡め、最後の二句は病不病二人無き上の奉重を頌して之を結ぶ。此の臭皮袋をサッパリと卸し盡し、這の赤肉團を拈つてスッ轉して仕舞へば病不病の根

源は奇麗に脫落して洒々落々の境界よ。とはいふものの顏を撫でゝ見れば依然として眼橫鼻直よ、直下髑髏識盡きて皮下眞實のみありて不病底の物體去りもせねば來りもせぬ。病不病に拘はらぬ洞山老醫は從來の癖で人の頭痛を疝氣に病む性である、少年の僧が看病などしやうとしても近所近邊に寄りつけたもので無い、此の不病者に奉侍するには極めて親密の工夫を要するぞ。野水の澄み切つた河の景色、白雲も晴れ盡して拭ふが如き山の風情、病不病の熱氣も佛見法見の固執と奇麗に斷絕した。諸人須らく勦絕せよ、滅多に顚預て置くで無いよ。いよ〳〵不病者と看病するの無功の大功は其の無功をも轉じ盡して卽處に位に藏して、孤標卓然として病にも不病にも同盤せざる大境界を得るにある。

【著語】□草枯れて鷹眼疾し。秋草が枯れると鷹の眼が鋭くなるといふが如く病不病を脫すれば明眼の衲僧ぢや。□雪盡きて馬蹄輕し。雪が消えれば馬の蹄も輕快になる、心上に凝滯が無ければ自由の往來よ。□也た須らく撥轉して始めて得べし。正面計り見てゐる猪頭では不都合ぢや、少しは左右に顧眄してみよ。□切に忌む鬼を見ることを。髑髏が乾いて好いと髑髏に眼を著けると幽靈が前にニユツト現はれるよ。□手到れば病除く。洞山の老醫ならば脈を診ぬうちに療治がとどく。□渠に國土無し、何の處か渠に逢はん。病の外に病人といふのは無い、況して無病の外に他病人があるものか。□龍は舊道を行く。龍星角は時に隨つて轉ずるけれども秋になれば元の軌道に來る。□是れ眞、滅し難し。景色は如何に變らうとも山河の態は變らぬ。□君子の一言。

綸言汗の如し、武士に二言は無い。□燈を點じて飯を喫す。能く見屆けてから食ふがよい。□葉落ちて根に歸す。病と轉じても不病と轉じても元皆無の現成よ。□來時口無し。同盤し來たとて來るものが有るまい、只言語のみ有つて實義は無いぞ。

第九十五則　臨濟一畫

示衆云。佛來也打魔來也打。有理三十無理三十。爲復是錯認怨讎爲復是不分良善。試道看。

【譜方】衆に示して云く、佛來るも打し魔來るも打し、理あるも三十、理なきも三十。爲復是れ錯つて怨讎を認むるか、爲復是れ良善を分たざるか、試に道へ看ん。

【字義】◎佛來打魔來打とは佛でも魔でも出頭し來たものは少しも容赦せぬといふ意、語は巖頭の「德山尋常唯目前一箇の拄杖子に據る、佛來るも打ち祖來るも也打つ」といへるに據る。◎三十とは三十棒の略。

【要解】佛來るも打つ、魔來るも打つ、佛魔の二見を打破するのぢや。理あるも理無きも總に許さず、驀向より三十棒を與ふ、是れ何の行令ぞ。是れ爲復佛魔を怨敵とし讐を復へす積りで打つのか其れとも是非善惡の道理も分らずに滅多無性に打つのか、何ぞ爰に子細が無うてはかなはぬ、サー

誰か試みに道つて看よ。

擧。臨濟問院主甚處來（掌云這裏來）主云。州中糶黃米來（卻實頭）濟云。糶得盡麼（入草求人）主云。糶得盡（兩搭不廻頭）濟以拄杖一畫云。還糶得這箇麼（有甚死急）主便喝（蝦蟇叫）濟便打（伏手骨椂）次典座至擧前話（小賣弄）座云。院主不會和尚意（口是禍門）濟云。儞又作麼生（上身上來也）座便禮拜（轉見不堪）濟亦打（趁手快）

【讀方】擧す。臨濟、院主に問ふ、甚麼の處よりか來たる。主云く、州中に黃米を糶り來る。濟云く、糶得し盡すや。主云く、糶得し盡す。濟拄杖を以て一畫して云く、還つて這箇を糶得せんや。主便ち喝す。濟便ち打つ。次に典座至る、前話を擧す。座云く、院主和尚の意を會せず。濟云く、儞又作麼生。座便ち禮拜す。濟亦打つ。

【字義】◎臨濟の傳第十三則に出づ。◎院主は叢林の役名、一山の事務課長で、監院ともいふ、住持とは別である。◎糶黃米來とは玄米を賣り歩いたといふ意。叢林の飯米の餘を賣たのであらう。◎典座とは六知事の一、叢林にて衆僧の辨食を掌る役。◎擧前話とは前の話を又持出したといふこと。

【要解】臨濟は院主を試みんが爲に例に依つて甚麼から來たと探竿を下した、州中黃米を糶り歩いて來た。皆賣り盡したから、明俵でも持つて還りはせぬか、スツカリ賣り盡しました、臨濟拄杖で一の字を劃いて這箇も賣つて來たか、賣つても買つても增減の無い安心の地に到つて居るかどうかを驗した、院主便ち一喝、臭い腸を吐き出したから臨濟はまだ其の樣なものを持つて居るかとピシヤリ打つた。次に典座に前話をすると、ソレハ院主が和尙の意旨が不會のだ、儞は作麼生だ、典座指し措かず禮拜した、イキナリ臨濟は典座の禿頭をピシヤリ打つた。此の臨濟の兩打是れ同か是れ別か、一平二平、子細に點檢して見ねばならぬ、此は會不會、糶得糶不得の兩頭に渉らば重ねて臨濟の一棒を免かれぬ。

【著語】□掌して云く這裏より來る。萬松ならば平掌で橫面を痛く擲り倒して這裏から來たと云つてやるのに。□卻つて實頭。正直懸値の無いところを打明けて。□草に入つて人を求む。落草に過ぎはせぬかナ。□兩搭すれども頭を廻さず。二度も鈎を引つかけたが懸つて來ない、大丈夫らしいぞ。□甚の死急か有る。其の樣に忙てさつしやるな。□蝦蟇叫。獅子吼で無かつたらしい、春の田の蝦蟇の叫號かナ。□伏手骨椂。仰むけの手を伏せたが打つたのか、骨椂は打つこと。□小賣弄。自慢の大安賣だらう。□口は是れ禍門。一言齒の外へ漏した計りにトンダ災難ぢや。□身上に上せ來る。ソレ見よ、自分の身の上に降りかゝつて來た。□轉た堪へざるを見る。頭を下げても心は天向いてゐるぞ。好心で無い拜である。□手の快を趁ふ。前にも氣持ち快く打

つたが再びビシャリと來たときには一層快い氣持ちだ。

頌云。臨濟全機格調高（也好與一頓）棒頭有眼辨秋毫（一點難謾）掃除狐兎家風峻（師子全威）變化魚龍電火燒（大小神通）活人劍（猶較些子）殺人刀（這漆桶）倚天照雪利吹毛（誰敢正覷）一等令行滋味別（這醋可嘹囒）十分痛處是誰遭（打云是儞是儞）

【讀方】臨濟の全機格調高し、棒頭に眼あり秋毫を辨ず。狐兎を掃除して家風峻なり、魚龍を變化して電火燒く。活人劍殺人刀。天に倚て雪を照し吹毛を利し。一等に令行して滋味別なり。十分の痛處是誰か遭はん。

【字義】◎格調とは風格曲調と續く、家風の唱へ方といふ意。◎變化魚龍云々は學人をして直下に轉迷開悟せしむること、禹門の故事より來た語。第二十二則を見よ。◎活人劍殺人刀とは劍と刀とは師家の禪機に喩へ、活殺は其の自由の樣子を示す。此の二句に付て師家の與奪自在なる接化振りを示す。◎吹毛とは名劍の鋭利なることを示す語で、刄の側で毛を吹き一寸でも其の毛が觸れると直ぐに切れる程だといふ意である。◎令行は正令を行ずるといふ意。宗風擧揚のこと。◎十分痛處とは言語でも思慮でも及ばぬ處、コ、だといふ處のこと。會得するの意。

【要義】最初の二句は臨濟の全機正眼、次の二句に機の通變を頌し、次の三句に行棒の神通を明し、最後の二句に量外の提撕、能く和する者なきを以て讚歎す。臨濟の人を接する全機は凡人の窺ひ及ぶべからざるほど格調が高い、其れも其の箸平常受用底の棒頭には正眼を具して兎の毛一本も容赦せぬ。狐兎の小機は根柢より掃除して人情を容れぬから家風峻烈だ、或は大機を接するには雷火を燒いて變通自在の龍と化せしめる。臨濟の行する棒は人を活し人を殺すの劍刄、吹毛の寶劍だから其の一刀は天に倚つて寒しの感がある。棒を以て打する時は一等にして別調無しと雖も或は殺人、或は活人と其の機に依つて味ふところは異つてゐる、サテ臨濟眞の棒頭を喫して痛み徹骨徹髓する底の者は誰であらうか、人々此の誰となつて十分其の味を嚙み占めるがよい。

【著語】□也た好し一頓を與ふるに。其の高い頭を一つコッンと打つてやれば好いに、天童の譽めた面を萬松は背後から一棒お見舞ひ申した。□一點も謾じ難し。お定りの文句、萬松も種ぎれだ。□師子の全威。師子の前には狐兎は降參ぢや。院主典座殿耳が痛いだらう。□大小の神通。大小は其れでもといふ意。其れ位のことが神通かノ、と云つて外に諸佛の神通は無い。□猶ほ些子に較れり。活す方は大に巧手がよい。□這の漆桶。漆桶は無鐵砲。這のわからずや、殺すとは那事ぞ。□誰れか敢へて正しく覷ん。誰も正面から覷得る者は有るまい。□這の醋、可嘹囒なり。此の醋は又馬鹿に醶い、徹底醶いが醋の本分よ。□打して云く是れ儞、是れ儞。萬松が天童を接化するのだ、天童其の方より外に十分の痛みを知る者は無い。儞だ儞だと云つて人々に響かせた。

第九十六則　九峰不肯

示衆云。雲居不憑戒珠舍利。九峰不愛坐脫立亡。牛頭不要百鳥啣花。黃檗不羨浮杯渡水。且道有何長處。

【讀方】　衆に示して云く、雲居は戒珠舍利を憑まず、九峰は坐脫立亡を愛せず。牛頭は百鳥花を啣むことを要せず、黃檗は杯を浮べて水を渡ることを羨まず。且く道へ何の長處かあるや。

【字義】　◎雲居不憑云々とは會元第三に「雲居禪師嘗て侍者をして袴を送つて一庵主の道者に與へしむ。道者曰く、自ら孃生の袴ありと竟に受けず。師再び孃未生の時箇の甚麼をか著んと問はしむ。道者無語。後遷化す、舍利あり持して師に似す、師曰く直饒八斛四斗を得るも當時一轉語を下し得て好きには如かず」と、あるに據る。◎戒珠舍利とは舍利は設利羅、室利羅等といひ梵音シャリー（Sarira）、靈骨、骨分等と譯す。死者の遺骨である。生前戒行正しき人より得るより戒珠舍利といふ。◎九峰不愛云云は本則を見よ。◎坐脫とは坐つたまゝで死ぬること。◎立亡とは立つて死ぬること。◎牛頭不要云々とは牛頭法融禪師、四祖道信禪師に嗣法前、牛頭山北麓の石室で修行して居られた時、百鳥が來て花を獻したが、四祖に嗣續の後は其事が無くなつたといふ故事、禪師は四祖の旁出法嗣で、牛頭宗の祖である。◎黃檗不羨云々とは四家語錄に「黃檗天台に遊び一僧に逢ひ、同じく行く、澗水暴に漲るに屬うと師杖に倚て止る、其の僧師を牽ひて過ぎんとす、師云く、請ふ兄先づ過ぎよ、其の僧笠を水上に浮べて便ち過ぐ、師云く我却て箇の稍子と共に隊をなす悔ゆらくは一棒に打殺せられざるを」とある故事に據る。◎長處とは特に他に優れた處といふ意。

【要解】　雲居道膺は直饒八斛四斗を得るも當時の一轉語には如かずと云つて戒珠舍利を憑みにしなかつた、九峰は本則にいふ通り坐脫立亡をも愛せず、牛頭法融は伊が步々佛階梯を踏むが爲なりと云つて百鳥の花を啣んで獻ずるを要めなかつた。黃檗の希運は我れ却つて箇の稍子と共に隊を作す悔らくは一棒に打殺せることをと云つて杯を浮べて水を渡るを羨まなかつた。此れ等の四尊宿何ぞ是れはといふ長處でも有つてのことか。本則に就いて參じて看よ。

擧。九峰在石霜作侍者。霜遷化後衆欲請堂中首座接續住持。（便好學能無伎倆、不應如秀拂塵埃）峰不肯。乃云。侍某甲問過若會先師意如先師侍奉。（路見不平）遂問。先師道休去歇去（費力作麼）一念萬年去（忘前失後漢）寒灰枯木去（有甚氣息）一條白練去（切忌點污）且道明甚麼邊事（只要無事）座云。明一色邊事（兩般了也）峰云。恁麼則未會先師意在（一朝權在手）座云。峰不肯我那裝香來（果然不會）座乃焚香云。我若不會先師意。香煙起處脫去。

不得言訖便坐脫（氣急殺人）（這裏甚麼所在）峰乃撫其背云。坐脫立亡則不無先師意未夢見在（出身猶可易）（脫體道應難）

【讀方】擧す。九峰石霜に在つて侍者となる、霜遷化の後、衆堂中の首座を請して住持を接續せしめんとす。峰肯はず乃ち云く、某甲が問過せんを待て若し先師の意を會せば先師の如くに侍奉せん。遂に問ふ、先師道く、休し去り、歇し去り、一念萬年にし去り、寒灰枯木にし去り、一條白練にし去ると、且らく道へ甚麼邊の事を明すや。座云く、一色邊の事を明す。峰云く、恁麼ならば未だ先師の意を會せざるあり。座云く、儞我を肯がはざるや、香を裝ひ去れ。座乃ち香を焚いて云く、我若し先師の意を會せずんば香煙起る處脫し去ることを得し、言ひ訖つて便ち坐脫す。峰乃ち其の背を撫して云く、坐脫立亡は則ち無きにあらず、先師の意は未だ夢にだも見ざるあり。

【字義】◎九峰石霜の傳前に出づ。◎休去歇去とは石霜七去の公案であるが玆には五去を出して居る丈である、七去とは、休し去れ、歇し去れ、冷湫々地にし去れ、一條白練にし去れ、古廟香爐にし去れ、一念萬年にし去れ、寒灰枯木にし去れである。◎一念萬年とは長短融卽の宗意を示す。◎寒灰枯木とは一點も煩惱の熱氣なきこと。◎一條白練とは萬里一條鐵に同じ、一絲の餘雜なきこと◎一色邊事とは向上純清絕點のところ、◎坐脫立亡とは垂示の條に解す。◎脫去とは解脫すること、又は死ぬ意にも取る。◎先師とは弟子が遷化せる嗣承師に對する敬稱。

【要解】九峰道虔、石霜に在つて慶諸禪師の侍者を勤めて居た、石霜遷化の後大衆は堂中の首座第一座を請して後住にしやうとしたが九峰が承知しない、某甲が問過ことが有るから其れまで待て、若しも先師石霜の意を能く會して居れば先師と同じやうに侍奉もしやう、先師の語に休し去り歇し去り、一念萬念にて去り、寒灰枯木にし去り、一條白練にして去るとあるが是れは甚麼邊の事を明したものだ、サー道つて看い。首座云く、是れは一色邊の事を明したものである。恁麼なことを道つて居るやうではまだ先師の意は會してゐない、九峰儞は我を肯はぬのだナ、香を裝んで來い、首座香を焚いて云く、我れ若しも先師の意を得せなんだとしたらば此の香の煙の起る處で脫け去ることは不得、と言ひ終るや坐つたまゝ脫し去る、九峰首座の死體の背を撫で云く石霜會下の堂中首座ぢやもの坐脫立亡ぐらゐのことは敢へて奇特事でも無いが、只惜しいことは先師の意は未だ夢にだも御存知ないことで有るわいと、問答の大體は上の如くである。休し去り歇し去り等の語は石霜七去の公案といふがある、其の中の五去だけを九峰は揭げてをる、去の一字が眼目で今日一切修行の功勳邊の事を奇麗さつぱりと休歇し去つて尻を落ち付けぬ、一念萬念にし去つて一をも守らぬ。寒灰枯木一條白練にし去つて一微塵の熱氣も染汚をもスッカリ振り拂ふところの向去の極端を示したので此から活路を開いて出る人を待つのである。首座は一色邊の事といつて只其の一邊を守つてゐたから九峰は肯はなかつた。本則の要は九峰が首座をして徹底不會ならしめやうとしたのである、首座は肯不肯、會不會の間に往來して眞箇無伎倆の處に至らなかつた、僅に順風に帆を張るの一色邊は得

て居るやうだが逆浪に櫂を轉ずる究竟意に至つて夢にだも會して居らぬ。爲めに石霜を續ぐべき衆望を有しながら可惜命を棒に振つて仕舞つた。

【著語】□便ち好し能が伎倆無きことを學ぶに、秀が塵埃を拂ふが如くなるべからず。六祖慧能が無伎倆のところに五祖の佛法は相續された、神秀が時時に勤めて拂拭せよ塵埃を惹かしむるなかれとは比べものにならぬ。石霜の後住には能か秀かを能く取調べて住持を繼がしむるがよい。□路に不平を見る。九峰は異議を申立てたナ。□力を費して作麼かせん。腕力を出しても役に立たぬ、サッパリと休歇がよい。□忘前失後の漢。前念後念はあれども前後際斷ぞ。□甚の氣息か有らん。機盡き情忘じて氣息あれども無きが如し。□切に點汚を忌む。□只無事を要す。明らめたの明らめぬのといふものが有るかナ。□兩般にし了れり。明らめたと云へば明らめぬと對待が出來る。□一朝權手に在り。石霜と九峰と二人無い、九峰の手に石霜の權は握られてゐる。□果然として不會。其の見が殘つて居ると思つたが果して然うだつた、ソレデは先師と會過は出來ぬ。□人を氣急殺せん。自分計りか人にまで迫つて來るよナ。□這裏甚麼の處在ぞ恁麼にし云る。甚麼物が恁麼に來り恁麼に去るのか。□出身は猶は易かるべし。出身だけはどうかこうか出來たが□脫體に道ふことは應に難かるべし。脫體の發轉を缺いたは惜しいものよ。

頌云。石霜一宗（蜂ノ如ク撒リ蟻ノ如ク聚ル）　親傳九峰（氷消瓦解）　香煙脫去（生死自在ハ即不繫ニハ）　正脈難通（先師ノ意ハ未ダ夢ニモ見ザルニ在リ）　月巢鶴作千年夢（樹倒レ不飛ハ）　雪屋人迷一色功（日出デ後一場ノ懡㦬）　坐斷十方猶點額（切ニ忌ムラクハ生格スルコト）　密移一步見飛龍（別般ノ造化）

【讀方】石霜の一宗、親く九峰に傳ふ。香煙に脫し去り、正脈通じ難し。月巢の鶴は千年の夢を作し、雪屋の人は一色の功に迷ふ。十方を坐斷するも猶點額す、密に一步を移さば飛龍を見ん。

【字義】◎一宗とは一門の宗風といふ意。◎正脈とは正傳の系脈といふこと、今は嗣續の根本義に名く。◎月巢鶴は皎々たる月光と鶴の白い羽とをとり合せて句を美化した語、一色那邊に坐著するものに譬ふ。◎千年夢とは何時までも其の位置を貪つて發轉することなきを意味す。◎雪屋人とは奇麗な雪屋の中に坐する人の意で、これも一色邊に住著する人のこと。◎一色功とは淸淨一色で御座いと云つて其の功を誇ること、悟臭きところ。◎點額は窮して途なきをいふ。◎移一步とは一足進むといふ意で、向上一色の處から更に一步踏み出すこと。◎見飛龍とは發轉の樣子を示す語だ、周易乾の卦九五に「飛龍天に在り大人を見るに利なり」とあるより出づ。

【要解】石霜の七去を以て接得する宗旨は親しく九峰に傳へられた、七去にして一宗、不傳にして傳ふ之を石霜の宗、九峰の傳といふのだ、首座は香煙の中に脫去したから石霜の正脈を通ずることが出來なかつた。脫去是れ會か不會か、放身捨命して何ぞ正脈を通ぜざりしか、此の處大に參究を要す。以上の四句は本則の體面を頌じたのである。月のよく冴えた好い景色に見とれて鶴は巢

ごもりして千年の夢を貪り、大虛空に飛鳴することを忘れ、雪屋に坐して盡界一色の境界を守つて廣濶なる三千界の活計を知らぬのが今日首座の不自由ぞ、石霜の七去が十方を坐斷して一色邊の事を明すとまでは云つたが先師の意に到つては頓と額を打つたは氣の毒よ、以上の三句に首座の境界を敍ぶ。最後の一句に首座に轉處が有つたならば九峰の肯不肯を對手とせず、親密に自己に返照して一歩を移せば飛龍上天の大活躍が出來たらうに惜しいかな香煙に坐脫して終に正脈を通じなかつたのは呉々も殘念で有つたと天童の慨嘆である。

【著語】□蜂のごとく攢り蟻のごとく聚る。石霜、枯木堂には首座を初め多數の大衆蟻の如くに聚つて居たが其の中に九峰の如く熊蜂が一匹居て先師の意を會せずと毒はりを刺した。□氷消瓦解悟りの熱氣もさめ煩惱の瓦も碎けて初めて親しく傳ふることが出來る。□生死自在は卽ち無きにあらず。生れたものが死ぬぐらゐのことは誰でもする。□先師の意は未だ夢にだも見ざることなり。隨處に滅盡するも當處に發生すといふ先師の意は會してゐぬぞ。□樹倒るれども飛ばず。十分自分は好いときめ込んでゐるのは可愛相なものぢや。□日出で丶後一場の懡㦬。雪を以て覆はれてゐるうちは奇麗ぢやが太陽が照したら題無しぞ、首座一分は好いが九峰の太陽に出會つたらば頓だはぢかきだ。□切に忌む根を生ずることを。坐斷しても猶ほ執著の根がとれぬと何にもならぬよ。□別般の造化。枯木花開くは造化の自在、別般の風趣ぞ。

第九十七則　光帝幞頭

示衆云。達磨朝梁武本爲傳心。鹽官識大中不妨具眼。天下太平國王長壽不犯天威。日月停景。四時和適。有光風化。人王法王相見合談何事。

【讀方】衆に示して云く、達磨梁武に朝す、本心を傳へんが爲なり。鹽官大中を識る眼を具するを妨げず、天下太平國王長壽と云つて天威を犯さず、日月景を停め四時和適すと云つて風光を光かにすることあり。人王と法王との相見には合に何事をか談ずべき。

【字義】◎傳心とは佛心印を傳ふといふ意。◎鹽官識大中云々とは傳にある「杭州鹽官縣の鎭國海昌院の齊安禪師もと唐皇の宗枝宣宗潛にある時僧となり將に師に謁せんとす、師豫め知て主事に告ぐ、大に雜言を禁じ横事を止約す、帝住すること久し忽ち辭す。師密に謂て曰く、時到れり泥蟠に滯ること勿れ、兼て囑するに佛法の後事を以てす。武宗敎を滅して六年にして宣宗復興す、師與つて力あり」とあるを用ゆ。◎大中は宣宗皇帝の年號。今は大中天子の意で、宣宗皇帝のこと。◎天下太平國土長壽云々は脇尊者が馬鳴と論議せし時に、天下泰平大王長壽、國土富樂諸の災患なし」と言

はれた。其れを襲用したもの、意は明かである。◎天威は天子の威光。◎日月停景四時和適とは梁の武帝が重雲殿に於いて講經せる際、傅大士が劉中といふ人の請に應じて述べたる語を其のまゝ用ゐたもの。◎風化とは德風感化、或は家風致化。◎人王とは人間界の王、世間の國王のこと。◎法王とは佛法中の王、出世間の法王のこと。

【要解】　達磨大士が梁の武帝との朝見も以心傳心の爲め、鹽官齊安が大中天子を接得したのも具眼の士と仕度いが爲めである。脇尊者が天下太平國王長壽と云つて皇風の德化を光かにせられた。或は傅大士は日月景を停め四時和適すと云つて天威を犯さぬ言下に外道を屈服した。是れ等は臨機應變の說示であるが、今人中の王と法中の王と相見した場合には何事を談じたもので有らう。化儀を離れて唯佛與佛の相見は本則に就いて親しく拜見するよろしい。

舉。同光帝謂興化曰。寡人收得中原一寶（少賣弄）只是無人酬價（傾國莫換）化云。借陛下寶看（因便橫勢）帝以兩手引幞頭脚（幸過其人）化云。君王之寶誰敢酬價（一併交足別無少欠）

【讀方】　舉す。同光帝興化に謂つて曰く、寡人中原の一寶を收め得たり、只是れ人の價を酬るなし。化云く、陛下の寶を借せ看ん。帝兩手を以て幞頭脚を引く。化云く、君主の寶誰か敢て價を酬ゐん。

【字義】　◎同光帝は後唐の莊宗皇帝のこと、同光は其の年號である。◎興化は魏府の興化存獎禪師のこと。臨濟の法嗣で、其の滅後三聖の首座となり。後に大覺に見ゆとある。◎寡人は天子の自稱。◎中原とは諸葛亮出師の表の註には中原を魏といひ、文選の詩の註には中原を洛陽といふ。茲では甚處でも差問はない。◎幞頭脚は甲頭巾で冠の一種、脚は其の垂れ紐である。

【要解】　同光莊宗帝が、興化の存奬に謂つて曰はるるには寡人、中原の一寶を得たり、天子の位を大寶といふから法に托して一寶といつて、而も中原で四夷八蠻にも四句百非にも、落ちぬ正中を響かした、只是れ人の價を酬ゆる無し、此の一寶頓とねだんのつけ手が無い。興化は直ぐに陛下の一寶、一寸お借し下さい。老僧が鑑定して價値をつけませう。是れ覿面の受用である。帝は兩手で幞頭巾の脚紐をスツト引いて龍顏をニユツと出して、興化云く君王の寶、誰か敢へて價をつけ得る者が有りませうぞと、帝は中原の一寶を脫體現成したから、興化は無價を以て眞價を判じた、機を見ての挨拶である。

【著語】　口少賣弄。自慢で持ち出したナ。口國を傾けても換ふること無し。國を傾けた一寶だから取り換も價もつかぬ。口便に因り勢に接す。調度好い處と寶の鑑定に掛つた。口幸に其の人に遇ふ。二六時中其の人に遇ひ通しだ。口一併に交足る、別に少缺無し。世間の交際も法中の親しみも缺目の無い人王と法王との相見で有つた。

頌云。君王底意語知音（一發善言）天下傾誠葵藿心（千里爾應）摋出中原

無價寶（兩手分付）不同趙璧與燕金（別是一家珍）中原之寶呈興化（分付著頭）一
段光明難定價（自買自賣）帝業堪為萬世師（裂破古今）金輪景耀四天下
（猶有化在）

【讀方】君主の底意知音に語る。天下誠を傾く葵藿の心。掇出す中原無價の寶。趙璧と燕金とに同じからず。中原の寶興化に呈す、一段の光明價を定め難し。帝業萬世の師となるに堪へたり、金輪の景は四天下を耀す。

【字義】◎底意は眞意。◎葵藿心とは民心の天子に歸向する意を示す譬。◎葵藿は日廻の花のこと日廻の花は常に太陽の方に向ふもの、民心の天子に歸向するも亦斯の如しといふ意である。◎掇出とは取り出すこと。◎趙璧のことは第十八則に出づ。◎燕金とは燕の照王千金を臺上に置いて天下の士を延いたといふ故事より來た語。◎帝業とは萬民の上に君臨して天下を治むる方法のこと。◎金輪景云々とは金輪王の化は四天下に及ぶといふ說から來た語。

【要解】本頌は七言四句の二首より成つてをる。同光帝の君王は興化は吾が知音なりと信じて自分の底意を語げた、天下の萬民皆誠を盡して葵藿の心を致さぬものは無い、殊て興化は王をして盧那の光明を放たしめんと誠忠の心を傾け盡した。帝は幞頭脚を引いて中原無價の寶を拈出した、如何にも趙氏の璧や郭隗の諫めた燕の金とは日を同うして語ることの出來ぬ世外の珍寶よと讃頌した

以上が一首である。同光帝が中原の一寶を收得すと云つて之を興化に呈した、其の一寶の光明は一段と尊貴であつて眞俗凡聖等の價値を定めることが出來ぬ、天子の治業は千萬世の師範と爲るに堪ゆるで無くてはならぬ、轉輪聖王の金輪寶は光り四天下を輝すが如く盡天盡地一光明幡世界に化した、是れが第二首である。

【著語】口一たび善言を發すれば。口千里禍應す。二句一連でもと周易の語を轉化したのである。善心の一念を發すれば一人の發心で、其れが下萬民の心に通じて十方世界が善心の福報を受くるぞ口兩手に分付す。かけがへの無い一寶を惜し氣も無く呈露した。口別に是れ一家の珍。全下に比類の無い箇の一箇の寶ぢや。口分付著頭。二つと無い頭をニュッと出した、立派なものだ。口自から買ひ自から賣る。賣るも買ふも自分ぢや、價を定めることもいらぬ。口古今を裂破す。古今一光明と裂破するのよ。口猶ほ化の有る在り。天子の化益が能く行き屆いてゐる、光明の所在是れ王土ならざるは無い。

第九十八則　洞山常切

示衆云。九峰截舌。追和石霜。曹山斫頭不辜洞嶺。古人三寸得恁麼密。且為人手叚在甚麼處。

【讀方】衆に示して云く、九峰舌を截て石霜を追和し。曹山頭を斫て洞嶺に辜かす。古人三寸、恁麽に密なることを得たり。且らく爲人の手段甚麽の處に在るや。

【字義】◎九峰截舌云々とは「僧、石霜に問ふ、如何なるか是祖師西來の意、霜乃ち齒を咬む。僧薦せず。霜遷化の後九峰に問ふ、先師齒を咬む意旨如何。峰云く、我れ寧ろ舌を截るべくとも國の諱を犯さず」といふ古則を引いたのである。◎曹山斫頭云々とは「僧、洞山に問ふ、三身の中那の一身が説法す。山云くわれ常に此に于て切なり。後僧曹山に問ふ、先師吾常に此に於て切なりと道ふ、意旨如何。曹山云く頭を要せば斫り取り去れ」とある古則に據る。◎三寸とは舌の換語。◎洞嶺は洞山のこと。

【要解】九峰は舌を截らるゝとも先師の道に違せずと云つて石霜の齒を咬むに孝順で有つた、曹山は頭を要せば頭を斫り去れと云つて洞山の「此に于いて切なり」に辜負しなかつた。古人は是の如く三寸の舌頭甚だ親密で有つて容易に言句を吐かなかつた。爲人の手段には言句を假るや亦無しや其の的處甚麽の處に有るぞ請ふ眼を開いて如何と看よ。

擧。僧問洞山。三身中那身不墮諸數（前三三 後三三）山云。吾常于此切。（氣急殺人）

【讀方】擧す。僧洞山に問ふ、三身の中那の身か諸數に墮せざる。山云く、吾れ常に此に于て切なり。

【字義】◎三身は法身と報身と應身とである。◎那身とは那箇の身の意にして、何の身だといふ疑の語であるが、裏に自ら諸數に墮せざる身を意味す。◎諸數とは三身四身等の數を云ひ、更に廣く有無色空迷悟等、諸の數量をも意味す。◎切とは親切、密切、適切、痛切、等熟字す、毫も隙間がないといふ意。

【要解】三身は法報應の三身で佛には清淨身とか圓滿身とか千百億化身とか三十二相とか八十種好とか種種の數目がある、今此の僧は三身といふ數にも墮せぬ無爲の眞法身を問うて來た、間來の僧は佛が數量に墮するものゝ樣に思つてゐる、佛の眞法身は猶ほ虛空の若し、物に應じて形を現す、水中の月の如しと知らぬらしい。故に洞山云く吾常に此に于いて切なり、切は親切密切で隙間の無いことよ、洞山は常法身で光明大千界を照破してゐるぞ。故に洞山は常に此に於いて那身と親切で三身だの諸數だのといふ之乎者也を容れる隙が無い。然し吾れとは洞山一人には限るまい、又誰が爲に切なるぞ、此を參究するが本則の要處ぞ。

【著語】口前三三後三三。三身とは面前か背後か、三三が八か、二四が七か、どんな數に渉つたな。口人を氣急殺す。呼吸する隙も無い迫りやうぢや。

頌云。不入世（物外横身）未循緣（刮篤成家）劫壺空處有家傳（猫兒屋頭尿）白蘋風細秋江暮（清虛冷淡）古岸舡歸一帶煙（目斷天涯）

【讀方】世に入らず未だ緣に循はず。刼壺空處に家傳あり。白蘋風は細なり秋江の暮、古岸舡は歸る一帶の煙。

【字義】◎不入世とは世間に混ぜずの意。◎未循緣とは諸緣に循はぬをいふ。◎刼壺空處とは時間空間、迷悟、得失を超越した處。◎白蘋は水邊の生へる秋草の名で、初秋の頃白い花が咲く、芹菜の大なるものだといふ、秋風は白蘋の葉末から起るなどいはれて、古來秋風を吟ずる時必らず詩句の材料に用ゆる草である。

【要解】初め三句に諸數に墮せざる格外の家風を頌し、後の二句に沒蹤跡にして親密なる宗旨を述ぶ、洞山大師は吾れ常に此に于いて切なりと云つて人世に處して世間に入らず、聞見の緣に遇うて聲色の緣に循はぬ、壺中別の乾坤あつて空刼と今時とに墮せざる佛祖單傳の家風を唱へた。迷悟の熱氣もサツパリ絕え果てた涼しい秋風の吹く白蘋の夕暮、水氣煙の如き古岸に棹さし、何れを的といふことも無く舡を進める、非思量底の思量で任運無作の妙用で謂はゆる妙體本來所處無し、通身何ぞ更に自由あらんといふ境界である。

【著語】口物外に身を橫ふ。世外に立つて縱橫に天下を往來する。口篤を刮つて家を成す。篤實を以つて一家を興すが如く傍目はふらぬ。口猫兒屋頭に尿りす。猫の小便、外からは知れぬグナ。口淸虛の冷淡。氣淸み爽かといふ景色、快い心持ちや。口目、天涯を斷ふ。眼に見盡せぬ好風景だ。ウツカリ見とれまいぞ。

第九十九則　雲門鉢桶

示衆云。棊有別智。酒有別腸。狡兎三穴。猾胥萬倖。更有箇諸頭底。且道是誰。

【讀方】衆に示して云く棊に別智あり、酒に別腸あり。狡兎三穴、猾胥萬倖。箇の諸頭底有り。且らく道へ是誰ぞ。

【字義】◎棊有別智とは鈍な人間でも棊だけは存外智慧のあるものだといふ意。◎酒有別腸とは身體の小さい男でも酒だけは大量に呑めるものだといふ意。韻府に「閩王曦が言く、周維嶽、身甚だ小なり何ぞ酒を飲むの多きや。左右曰く酒に別腸あり、長大を必とせず。曦割つて酒腸を見んとす。或人曰く、維嶽を殺さば劇飮に侍するに人なけん、卽ち之を捨つ」とある故事に據る。◎狡兎三穴の語は戰國策の「馮驩曰く狡兎三窟あり、僅かに死を免がるゝのみ云々」といふ語に據る。◎猾胥萬倖の語源は明かでない。胥は猾で大猿の類、倖は行で畢竟猾の遁ぐるに巧なことをいふ。◎諸頭底とは𨲡頭底が正しい、餘計なことの意。

【要解】外の事には愚鈍な者でも圍棊だけには特別の智慧が有ると見えて名人にもなれる。矮子でも酒だけは別種の腸胃が有るのか隨分大量を過す上戸もある。狡兎は三穴を作つて身を守るに便し、

猾胥は仕損じを勿怪の倖とするぞ。自己にある三昧吾れ亦知らずで人々一分の光明は有るものぢやが、箇のやうに更諸頭底たところも有る、と云つて何にも別に頭を捻るにも及ばぬことよ。是れ誰ぞと返照して見るが最も捷徑ぢや。

擧。僧問雲門、如何是塵塵三昧（有顆不撒沙）**門云。鉢裏飯桶裏水**（撞頭磕額攔腮摑面）

【讀方】 擧す。僧雲門に問ふ、如何なるか是塵々三昧、門云く、鉢裏飯桶裏水。

【字義】 ◎雲門の傳は第十一則に出づ。◎塵々三昧とは華嚴事事無礙三昧のこと。同經第十五卷に「一毛端頭正定に入り、一微塵中に定より出づ、一微塵中に正定に入り、一切塵中定より出づ」とあり、永嘉集に「一塵に正定に入り、諸塵に三昧より起つ」といふ。是れである。◎鉢裏飯桶裏水とは御椀の中には飯、桶の中には水よといふ意、法爾如然を示す語。山上に柴あり溪に水ありと云つた調子。

【要解】 吾人の日用光中運作顚倒を塵々三昧といふので、もと華嚴の事々無礙から出た語である。眼が覺めれば洗面する、飯臺に著けば喫粥する、佛前に向へば合掌する、此の塵々が盡く王三昧である。問來の僧は理屈だけは知つてゐたが未だ眞箇に味を嚙み占めて居ない、故に如何なるか是れ塵々三昧と訊ねたのである。雲門は鉢裏には飯、桶裏には水と答へられた、親しい說法である、月は天に在り水は瓶に在りと云つてもよい。酒は德利に肴は皿小鉢にあると云つてもよい。語を換へて頭は上に足は下にといふもよし、眼は二つで鼻は一つと云ふも可からう。法法位に住して毫も昧さずに其の處を得て自由に光明を放つてゐる。是の外に塵々三昧は無い。

【著語】 口顆あり沙を撒せず。顆は高鼻深目の貌で不足のない處をいふ、塵々三昧など、塵埃を撒き散すのは御免だ。口撞頭磕額、攔腮摑面。頭額腮面に撞磕攔摑て廻避するに處無しである。

頌云。鉢裏飯桶裏水（椀盛杓斟）**開口見膽求知己**（只爲分明極、翻令所得遲）**擬思便落二三機**（天童、第四）**對面忽成千萬里**（是必早、廻程）**韶陽師較些子**（未敢相保）**斷金之義兮誰與相同**（心不負人）**匪石之心兮獨能如此**（面無慙色）

【讀方】 鉢裏飯桶裏水、口を開き膽を見はして知己を求む。思はんと擬すれば便ち二三機に落つ。對面忽ち千萬里となる、韶陽師些子に較れり。斷金の義、誰か與に相同じからん、匪石の心獨り能く此の如し。

【字義】 ◎韶陽子は雲門大師のこと、韶州雲門山に居られたから此の稱がある。◎較些子とは聊か其の意を得たりといふ意だが、實は大いに當つて居るといふ意を含む。◎斷金之義とは銳利の意、周易繫辭に「君子の道、或は出或は處、或は語、二人同心其利金を斷つ、同心の言其臭蘭の如し」

とあつて註に「金は堅剛の物、能く之を斷つは利の甚しきをいふなり」とある。雲門の義心の堅剛なることを形容したのである。◎匪名之心とは轉機自在の意を示す。毛詩鄘柏舟の篇に「我心石に匪ず轉すべからず」といふ處から來た。

【要解】　初めの二句に雲門答話の親切、次の二句に分別底の疑處、次の一句に更に雲門の說示を擧して最後の二句に雲門の手段を稱讃したのである。鉢裏の飯、桶裏の水の一句に雲門は口を開いて五臟六腑を脫體して天下に知己を求られたのぢや若し臍は腹になり鼻は顏にありと證據する底の知己ならば雲門の此の答處に呵々大笑したで有らう。然るに分別疑議に渉るならば第二第三に落ち、鼻つき合はしてゐても千萬里の隔りを成す。是れ皆他に求むる分別疑思が隔たりとのである。韶陽雲師の當意卽妙なる三昧些子吾が意を得て居る、雲門は天下に知己を求めてゐるが其の義は斷金の利あり、其の心は匪石の轉ずべからざるが如くで有るから誰と與に手を携へて幾千代かけて變らじと契ることが出來やう、唯常に此の如く天下に獨立無伴で日送りをすることで有らう、眞箇雲門の知己は天下に尠し但だ天童一人此に在るぞと威氣を添へた。

【著語】　□椀に盛り杓に戽む。　御飯は椀に盛り、御湯は杓で汲む、日用缺かざる塵々三昧ぢや。□只分明に極むるが爲めに飜つて得所をして遲からしむ。　肝膽を見せやうとするから知己が無いのだ擧手投足の處を示すがよい。□天童は第四。　二三機に落つといふ天童は第四に落ちた、斯くいふ萬松は第五、これをいふ如天は第六だらう、皆分別の親玉らしい。□是れ必ず早く廻程。　直下相見であるのに對面しやうなどゝ足を擡げ起すから廻程をするのだ。□未だ敢へて相保せず。　些子に較るかどうか萬松には保證が出來かねる。□心、人に負かず。　人々私心さへ無ければ知己の不知己のといふことは有るまい。他に求むるのが錯りよ。□面に慚づる色無し。　胸中に二念が無いから面に慚づる色も出まいよ。

第百則　瑯琊山河

示衆云。一言可以興邦。一言可以喪邦。此藥亦能殺人亦能活人。仁者見之謂之仁。智者見之謂之智。且道利害在甚麼處。

【讀方】　衆を示して云く、一言以て國を興すべく、一言以て國を喪ふ可し。此の藥又能く人を殺し亦能く人を活す。仁者は之を見て之を仁と謂ひ、智者を之を見て之を智といふ。且らく道へ利害甚麽の處にあるや。

【字義】　◎一言以可以興國云々の二句は論語子路篇から其儘引いたのである。◎仁者云々は周易上繫辭五卷の語を其のまゝ用ゐたのである。

【要解】　國家を興すも喪すも只一言にある、此の一言は妙藥にして人を殺し人を活すの功能がある仁者は仁と謂ひ智者は智といふ、謂ふ處異れども只是れ一言にして一藥である。サテ其の一言とは

何ぞ、妙藥とは何ぞ、此を究むるのが佛家の一大事因緣である。利害得失果して甚麼處にかある、請ふ子細に點檢して看よ。

擧。僧問瑯琊覺和尙。淸淨本然云何忽生山河大地（迷時三界有）覺云。淸淨本然云何忽生山河大地（悟後十方空）

【讀方】擧す。僧、瑯琊覺和尙に問ふ、淸淨本然云何ぞ忽ち山河大地を生ず。覺云く、淸淨本然云何ぞ忽ち山河大地を生ず。

【字義】◎瑯琊覺和尙とは瑯琊山開化廣照禪師のこと。諱は慧覺、西洛の人、父の喪に遇ひ其の送葬の歸途に藥山を過ぎ古刹に入つて俄に出家し、後に汾陽善昭禪師に法を得て、それより滁州瑯琊山に住して大いに宗風を擧揚した人である。僧と云ふのは秀州長水の子璿講師である。◎淸淨本然とは首楞嚴經卷四に「富樓那問ふ、若し復世間一切の根塵陰處界等は皆如來藏にして淸淨本然ならば如何ぞ忽ち山河大地諸の有爲の相を生じ、次第に遷流し終つて復始めんや」とあるより出づ。

【要解】瑯琊山開化寺廣照禪師慧覺和尙は汾陽下六知識の一人である、僧は長水の子璿といふ經者であつて、楞嚴經の意を拈じ來つて問を起した。五陰十二處十八界、身心も世界も淸淨本然の如來藏で內外玲瓏たる筈ぢや、然るに云何して有爲の諸相たる山河大地が忽生するぞ、何故に六趣四生に輪轉するぞ、經師らしい問である。瑯琊は賊馬に騎つて賊を逐ふで僧の持つて來た道具をソックリ受用ゐた、云何忽生山河大地それが淸淨本然ぞ、山河大地の本際解脫である、六塵惡まざれば正覺に同じ、妄想を除かず眞を求めず、钁頭爐炭も轉た風流である、山河大地が少しも邪魔にならぬ。好い境界ぢや。

【著語】◎迷時は三界有なり。迷へば變ず石頭山下の虎で繩を蛇と見るのも己れが迷ぞ。◎悟後は十方空なり。悟れば空ず弓影酒中の蛇さ、東西南北も四維上下も本來有りはせぬ、其の空の處に山河大地も六趣四生も生ずるのぢや、其許を悟るがよい。

頌云。見有不有（一般麵草）翻手覆手（由人做造）瑯琊山裏人（又手云慧覺）不落瞿曇後（一語傷人千刀攪腹）

【讀方】有を見て有とせず、翻手覆手。瑯琊山裏の人、瞿曇の後に落ちず。

【字義】◎翻手覆手とは手の平を翻覆すが如しといふ意。杜甫の貧交行に「手を翻へせば雲となり、手を覆へば雨云々」とあるより出づ。◎瞿曇とは梵音喬答摩ゴータマ(Gotama)地最勝と譯す。もと印度釋迦族の總稱であつたのが、轉じて釋尊の稱となつたのである。

【要解】前二句は本則の總標、後の二句は瑯琊を讃歎したのである。僧は有と見て云何と問ひ瑯琊は有とせずして云何と對へた、問と答とは隻手の翻覆である。唯此の處云何と返照すれば有の有とすべき無く無の無とすべきは無い。瑯琊の山裏に住する慧覺禪師、瞿曇釋迦の背後に立たぬ、超佛越

祖の活生涯である。人々も亦瑯琊に劣らず眼横鼻直であるから、時々主人を喚び出して佛祖の背後に立つか立たぬか二六時中照顧して見るがよい。

【著語】口一般の麵草。法に二法は無い、諸法は皆是れ一般である。口人の做造に由る。人々が勝手に有爲とか迷悟とかを做造つて居るのだ。口叉手して云く慧覺。萬松叉手して云ふ慧覺と。萬松と慧覺と一人か兩人か、喚べば應ずる底是れ什麼物ぞ。口一語人を傷り千刀人を攪く。從前の山河大地を一言下に切り離して敎家依文解義の羅籠を攪劃いて天涯に獨歩せしめた。其の巧手は瞿曇も及ぶまいよ。

從容錄通解 終

大正四年三月十日印刷
大正四年三月十五日發行

定價金二圓郵税十二錢

著作權所有

著作者　神保如天
東京巢鴨町二丁目三十五番地
發行者　原子廣宣
東京本所區番場町四番地
印刷者　守岡功
東京本所區番場町四番地
印刷所　出版印刷株式會社分工場

發行所　東京巢鴨町二ノ三五
振替東京三一二二番
無我山房

324
487

終